四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第十八冊

国分寺楠井遺跡

本　文　編

1995.10

香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団

四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第十八冊

国分寺楠井遺跡

本　文　編

1995.10

香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団

1 号窯跡全景

2 号窯跡全景

印花文（596）

羊歯文（601）

足釜（876）

序　　文

四国横断自動車道は，高松～善通寺間が平成４年５月に開通しました。これにより，瀬戸大橋と香川県の高速道路が結ばれることになり，本格的な高速交通時代を迎えることになりました。

香川県教育委員会では，四国横断自動車道（高松～善通寺間）の建設に伴い，昭和63年度から財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して，用地内の埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。３年６ヵ月の期間を要して28遺跡の発掘調査を実施し，平成３年９月に発掘調査を終了しました。また，平成３年度からは同センターにおきまして発掘調査出土品の整理を順次行っているところであります。

このたび「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第十八冊」として刊行いたしますのは，綾歌郡国分寺町福家字楠井に所在します国分寺楠井遺跡についてであります。国分寺楠井遺跡の調査では，中世の窯跡群とそれに関連すると考えられる建物跡や墳墓が検出され，この地域の中世土器生産の実態を検討する基礎的な資料を得ました。

本報告書が，本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに，埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間，日本道路公団及び関係機関並びに地元関係各位には多大の御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに，今後ともよろしく御支援賜りますようにお願い申し上げます。

平成７年10月

香川県教育委員会

教育長　　田中　壮一郎

例　　言

1. 本報告書は，四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第十八冊であり，香川県綾歌郡国分寺町大字福家字楠井で実施した国分寺楠井遺跡（こくぶんじくすいいせき）の発掘調査の報告を収録した。
2. 発掘調査は，香川県教育委員会が日本道路公団から委託され，香川県教育委員会が調査主体，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 発掘調査は，予備調査を平成元年10月に実施し，本調査を平成２年４月11日から10月２日まで実施した。発掘調査の担当は以下のとおりである。

   予備調査　　佐藤竜馬・山本　健

   本 調 査　　渡邊茂智・佐藤竜馬・萬木一郎
4. 調査にあたって，下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同，敬称略）

   香川県土木部横断道対策室，同坂出土木事務所横断道対策課，国分寺町教育委員会，地元対策協議会・自治会
5. 報告書の作成は，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。報告書の編集・執筆は，佐藤が担当した。
6. 報告書の作成にあたっては，下記の方々の御教示を得た。記して謝意を表したい。（順不同，敬称略）

   国立福井工業高等専門学校　荻野繁春，兵庫県埋蔵文化財調査事務所　森内秀造，京都府埋蔵文化財調査研究センター　伊野近富，堺市立埋蔵文化財センター　續伸一郎，伊丹市教育委員会　小長谷正治，三重県埋蔵文化財センター　上村安生・竹田憲治，岡山県古代吉備文化財センター　岡田　博，吹田市立博物館　藤原　学，国分寺町教育委員会　松尾忠幸

   山田清明，藤木　勇，田村久雄
7. 本遺跡の報告にあたっては，下記に分析を依頼し，玉稿をいただいた。

   熱残留磁気測定　　花園大学自然科学教室　　前中一晃氏

   胎土分析　　岡山理科大学自然科学研究所　白石　純氏
8. 本報告書で用いる方位の北は，国土座標系第Ⅳ系の北であり，標高はT.P.を基準とし

ている。

9. 挿図の一部に建設省国土地理院地形図「白峰」（1／25,000）を使用した。

10. 遺構は，窯跡・灰原・土器溜り・古墳については，そのまま表示することとし，その他の遺構については，下記の略号により表示している。

ＳＢ　掘立柱建物，ＳＤ　溝，ＳＫ　土坑，ＳＰ　柱穴，ＳＴ　埋葬関係遺構

11. 遺構番号は，調査時（概報段階）から以下のように変更した。

調査時	本報告
ＳＦ０１	１号窯跡
ＳＦ０２	２号窯跡
ＳＦ０２物原	土器溜り３
ＳＦ０３物原	土器溜り１
ＳＦ０４	３号窯跡
ＳＦ０５物原	土器溜り２

12. 本報告書の中世土器実測図のうち，断面が黒く塗り潰されたものは須恵質，断面が白抜きのものは土師質，断面網目のものは瓦質の焼成を表す。なお，古墳時代の土器は全て白抜きにした。

13. 中世土器の遺物番号を○で囲んでいるものは，外面に煤の付着したものである。

14. 観察表の各欄の表記は，下記のとおりに表示している。

法量　（口）口径　（高）器高　（底）底部径

手法　（口）口縁部　（頸）頸部　（鍔）鍔部　（体）体部　（底）底部　（底外縁）底部外縁

「→」手法の前後関係を示す　「・」相対的な手法の併存関係を示す（併記した同士の前後関係は明らかでない）

「調整不明」器表が剝落・摩滅したために調整が明らかにできないもの

粘土紐巻き上げの際の指オサエは省略し，図面でのみ表現した。

本文目次

第１章　調査の経緯……1

第１節　調査に至る経緯……1
第２節　調査の経過……3
１．予備調査……3
２．本調査……3
第３節　調査と整理の体制……8

第２章　立地と環境……11

第１節　地理的環境……11
第２節　歴史的環境……12

第３章　調査の成果……25

第１節　地形と層序……25
第２節　遺構……29
１．古墳時代後期の遺構……29
２．中世の遺構……34
第３節　遺物……59
１．古墳時代後期の遺物……59
２．中世の遺物……71

第４章　自然科学調査の成果……314

第１節　楠井遺跡より採取した焼土試料の残留磁気の測定について……314
第２節　楠井遺跡より採取した焼土試料の残留磁気の測定について（Ⅱ）……322

第３節　国分寺楠井遺跡出土土器の胎土分析…… 324

第５章　総括…… 335

第１節　楠井産土器の生産技術…… 335
１．製作技法…… 335
２．焼成技術…… 344
第２節　楠井産土器の編年…… 356
１．出土遺物の一括性…… 356
２．遺構・層位と型式の対応関係…… 357
３．楠井第Ⅰ～Ⅲ期の設定…… 360
第３節　楠井産土器の分布…… 374
第４節　国分寺楠井遺跡における土器生産…… 386
１．操業形態と生産組織…… 386
２．系譜…… 389

挿図目次

第１図　四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地（高松～善通寺）……2
第２図　予備調査トレンチ位置図……4
第３図　国分寺楠井遺跡区画割図……5
第４図　国分寺町内の遺跡分布図……13～14
第５図　福家周辺の地割と用水路……21
第６図　福家氏館跡（長然寺）とその周辺……23
第７図　東西方向（５ライン）土層図……26
第８図　南北方向（Ｅライン）土層図(1)……27
第９図　南北方向（Ｅライン）土層図(2)……28
第10図　楠井１号墳平面図……30
第11図　楠井１号墳・横穴式石室平・断面図……31
第12図　楠井１号墳・墳丘・石室土層……32
第13図　横穴式石室床面遺物出土状況……33
第14図　１号窯跡 灰原分布範囲と土層 ……35
第15図　１号窯跡 窯体平・断面図 ……37～38
第16図　１号窯跡 窯体内遺物出土状況 ……39
第17図　２・３号窯跡とＳＢ０１……40
第18図　２号窯跡 窯壁崩落状況と土層 ……41
第19図　２号窯跡 窯体平・断面図 ……42
第20図　２号窯跡 窯体掘り方平・断面図……43
第21図　２号窯跡・整地層土層図……44
第22図　２号窯跡 窯体内遺物出土状況 ……45
第23図　３号窯跡関連遺構配置図……45
第24図　３号窯跡灰原・ＳＤ０１土層図……46
第25図　３号窯跡 窯体平面図 ……46
第26図　３号窯跡 窯体掘り方平面図 ……47
第27図　３号窯跡・ＳＤ０１土層図（Ｃ－３区東壁）……48
第28図　土器溜り１土層図……49～50
第29図　土器溜り２土層図……52
第30図　土器溜り２ 遺物出土状況 ……53
第31図　ＳＢ０１平・断面図……54
第32図　ＳＢ０２・ＳＤ０２平・断面図……55
第33図　ＳＫ０１平・断面図……56
第34図　ＳＴ０１平・断面図……57
第35図　ＳＴ０２と灰層……57
第36図　ＳＴ０２平・断面図……58
第37図　楠井１号墳 玄室内出土遺物(1) ……60
第38図　楠井１号墳 玄室内出土遺物(2) ……62
第39図　楠井１号墳 周溝内土器群出土遺物(1)……64
第40図　楠井１号墳 周溝内土器群出土遺物(2)……66
第41図　包含層出土須恵器(1)……68
第42図　包含層出土須恵器(2)……70
第43図　各器種の部分名称……72
第44図　主要４器種の型式分類案……74
第45図　１号窯跡 窯体内埋土上位出土遺物……79
第46図　１号窯跡 窯体内埋土下位出土遺物(1)……80
第47図　１号窯跡 窯体内埋土下位出土遺物(2)……81
第48図　１号窯跡 窯体内床面直上出土遺物……83
第49図　２号窯跡出土遺物(1)……84
第50図　２号窯跡出土遺物(2)……85
第51図　３号窯跡 窯体内出土遺物 ……86
第52図　３号窯跡 灰原灰層出土遺物 ……87
第53図　ＳＤ０１埋土出土遺物……88
第54図　土器溜り１表土層出土遺物(1)……90
第55図　土器溜り１表土層出土遺物(2)……91
第56図　土器溜り１表土層出土遺物(3)……92
第57図　土器溜り１表土層出土遺物(4)……93
第58図　土器溜り１表土層出土遺物(5)……94
第59図　土器溜り１表土層出土遺物(6)……95
第60図　土器溜り１表土層出土遺物(7)……96
第61図　土器溜り１表土層出土遺物(8)……97
第62図　土器溜り１表土層出土遺物(9)……98
第63図　土器溜り１表土層出土遺物(10)……99
第64図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(1)…… 102
第65図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(2)…… 103
第66図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(3)…… 106
第67図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(4)…… 107
第68図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(5)…… 108
第69図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(6)…… 109
第70図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(7)…… 110
第71図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(8)…… 111

第72図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(9)…… 112
第73図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(10)…… 113
第74図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(11)…… 114
第75図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(12)…… 115
第76図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(13)…… 116
第77図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(14)…… 117
第78図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(15)…… 118
第79図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(16)…… 120
第80図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(17)…… 121
第81図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(18)…… 122
第82図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(19)…… 123
第83図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(20)…… 124
第84図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(21)…… 125
第85図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(22)…… 126
第86図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(23)…… 127
第87図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(24)…… 128
第88図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(25)…… 129
第89図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(26)…… 130
第90図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(27)…… 131
第91図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(28)…… 132
第92図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(29)…… 133
第93図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(30)…… 136
第94図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(31)…… 137
第95図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(32)…… 138
第96図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(33)…… 139
第97図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(34)…… 140
第98図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(35)…… 141
第99図　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(36)…… 142
第100図 土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(37)…… 143
第101図 土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(38)…… 144
第102図 土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(39)…… 146
第103図 土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(40)…… 147
第104図 土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(41)…… 148
第105図 土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(42)…… 149
第106図 土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(43)…… 150
第107図 土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(44)…… 151
第108図 土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(45)…… 154
第109図 土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(46)…… 155
第110図 土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(47)…… 156
第111図 土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(48)…… 157
第112図 土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(49)…… 158
第113図 土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(50)…… 159
第114図 土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(51)…… 160
第115図 土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(52)…… 161
第116図 土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(53)…… 162
第117図 土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(54)…… 164
第118図 土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(55)…… 166
第119図 土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(56)…… 168
第120図 土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(57)…… 169
第121図 土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(58)…… 170
第122図 土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(59)…… 171
第123図 土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(60)…… 172
第124図 土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物(61)…… 173
第125図 土器溜り１第Ⅰｂ層出土遺物(1)…… 174
第126図 土器溜り１第Ⅰｂ層出土遺物(2)…… 175
第127図 土器溜り１第Ⅰｂ層出土遺物(3)…… 176
第128図 土器溜り１第Ⅰｂ層出土遺物(4)…… 177
第129図 土器溜り１第Ⅰｂ層出土遺物(5)…… 178
第130図 土器溜り１第Ⅰｂ層出土遺物(6)…… 179
第131図 土器溜り１第Ⅰａ・ｂ層
出土遺物(1)…… 180
第132図 土器溜り１第Ⅰａ・ｂ層
出土遺物(2)…… 181
第133図 土器溜り１第Ⅰａ・ｂ層
出土遺物(3)…… 182
第134図 土器溜り１第Ⅱ層出土遺物(1)…… 186
第135図 土器溜り１第Ⅱ層出土遺物(2)…… 187
第136図 土器溜り１第Ⅱ層出土遺物(3)…… 188
第137図 土器溜り１第Ⅱ層出土遺物(4)…… 189
第138図 土器溜り１第Ⅱ層出土遺物(5)…… 190
第139図 土器溜り１第Ⅲ層出土遺物(1)…… 192
第140図 土器溜り１第Ⅲ層出土遺物(2)…… 193
第141図 土器溜り１第Ⅲ層出土遺物(3)…… 194
第142図 土器溜り１第Ⅲ層出土遺物(4)…… 195
第143図 土器溜り１第Ⅲ層出土遺物(5)…… 196
第144図 土器溜り１第Ⅲ層出土遺物(6)…… 197
第145図 土器溜り１第Ⅰ～Ⅲ層
出土遺物(1)…… 200
第146図 土器溜り１第Ⅰ～Ⅲ層
出土遺物(2)…… 201
第147図 土器溜り１第Ⅰ～Ⅲ層
出土遺物(3)…… 202
第148図 土器溜り２出土遺物(1)…… 204
第149図 土器溜り２出土遺物(2)…… 205
第150図 土器溜り２出土遺物(3)…… 206
第151図 土器溜り２出土遺物(4)…… 207
第152図 土器溜り２出土遺物(5)…… 208
第153図 土器溜り２出土遺物(6)…… 209
第154図 土器溜り２出土遺物(7)…… 210
第155図 土器溜り２出土遺物(8)…… 211

第156図 土器溜り２出土遺物(9)…… 212
第157図 土器溜り２出土遺物(10)…… 213
第158図 土器溜り２出土遺物(11)…… 214
第159図 土器溜り２出土遺物(12)…… 215
第160図 土器溜り２出土遺物(13)…… 216
第161図 土器溜り２出土遺物(14)…… 217
第162図 土器溜り２出土遺物(15)…… 218
第163図 土器溜り２出土遺物(16)…… 219
第164図 土器溜り２出土遺物(17)…… 220
第165図 土器溜り２出土遺物(18)…… 221
第166図 土器溜り２出土遺物(19)…… 222
第167図 土器溜り２出土遺物(20)…… 223
第168図 土器溜り２出土遺物(21)…… 224
第169図 土器溜り２出土遺物(22)…… 225
第170図 土器溜り２出土遺物(23)…… 226
第171図 土器溜り２出土遺物(24)…… 227
第172図 土器溜り２出土遺物(25)…… 228
第173図 土器溜り２出土遺物(26)…… 229
第174図 土器溜り２出土遺物(27)…… 230
第175図 土器溜り２出土遺物(28)…… 231
第176図 土器溜り２出土遺物(29)…… 232
第177図 土器溜り２出土遺物(30)…… 233
第178図 土器溜り２出土遺物(31)…… 234
第179図 土器溜り３出土遺物(1)…… 238
第180図 土器溜り３出土遺物(2)…… 239
第181図 土器溜り３出土遺物(3)…… 240
第182図 土器溜り３出土遺物(4)…… 241
第183図 土器溜り３出土遺物(5)…… 242
第184図 土器溜り３出土遺物(6)…… 243
第185図 土器溜り３出土遺物(7)…… 244
第186図 土器溜り３出土遺物(8)…… 245
第187図 土器溜り３出土遺物(9)…… 246
第188図 土器溜り３出土遺物(10)…… 248
第189図 土器溜り３出土遺物(11)…… 249
第190図 土器溜り３出土遺物(12)…… 250
第191図 土器溜り３出土遺物(13)…… 251
第192図 土器溜り３出土遺物(14)…… 252
第193図 土器溜り３出土遺物(15)…… 253
第194図 土器溜り３出土遺物(16)…… 254
第195図 土器溜り３出土遺物(17)…… 256
第196図 土器溜り３出土遺物(18)…… 257
第197図 土器溜り３出土遺物(19)…… 258
第198図 土器溜り３出土遺物(20)…… 259
第199図 土器溜り３出土遺物(21)…… 260
第200図 土器溜り３出土遺物(22)…… 261
第201図 土器溜り３出土遺物(23)…… 262
第202図 土器溜り３出土遺物(24)…… 263
第203図 土器溜り３出土遺物(25)…… 264
第204図 土器溜り３出土遺物(26)…… 265
第205図 土器溜り３出土遺物(27)…… 266
第206図 土器溜り３出土遺物(28)…… 267
第207図 土器溜り３出土遺物(29)…… 268
第208図 ２号窯跡整地層上層出土遺物(1)…… 270
第209図 ２号窯跡整地層上層出土遺物(2)…… 271
第210図 ２号窯跡整地層上層出土遺物(3)…… 272
第211図 ２号窯跡整地層上層出土遺物(4)…… 273
第212図 ２号窯跡整地層下層出土遺物(1)…… 274
第213図 ２号窯跡整地層下層出土遺物(2)…… 275
第214図 ２号窯跡整地層下層出土遺物(3)…… 276
第215図 ２号窯跡整地層上層・下層
出土遺物(1)…… 278
第216図 ２号窯跡整地層上層・下層
出土遺物(2)…… 279
第217図 ２号窯跡整地層上層・下層
出土遺物(3)…… 280
第218図 包含層出土遺物(1)…… 281
第219図 包含層出土遺物(2)…… 284
第220図 包含層出土遺物(3)…… 285
第221図 包含層出土遺物(4)…… 286
第222図 包含層出土遺物(5)…… 287
第223図 包含層出土遺物(6)…… 288
第224図 包含層出土遺物(7)…… 289
第225図 包含層出土遺物(8)…… 290
第226図 包含層出土遺物(9)…… 291
第227図 包含層出土遺物(10)…… 292
第228図 包含層出土遺物(11)…… 293
第229図 包含層出土遺物(12)…… 294
第230図 包含層出土遺物(13)…… 295
第231図 包含層出土遺物(14)…… 296
第232図 包含層出土遺物(15)…… 297
第233図 包含層出土遺物(16)…… 298
第234図 包含層出土遺物(17)…… 299
第235図 包含層出土遺物(18)…… 300
第236図 包含層出土遺物(19)…… 301
第237図 包含層出土遺物(20)…… 302
第238図 包含層出土遺物(21)…… 303
第239図 包含層出土遺物(22)…… 304
第240図 包含層出土遺物(23)…… 305
第241図 包含層出土遺物(24)…… 306
第242図 包含層出土遺物(25)…… 307

第243図 包含層出土遺物㉖…… 308
第244図 包含層出土遺物㉗…… 309
第245図 その他の遺構・トレンチ
出土遺物(1)…… 310
第246図 その他の遺構・トレンチ
出土遺物(2)…… 311
第247図 包含層出土の印花文土器…… 312
第248図 ＳＦ０１窯焼土試料の直交座標
交流消磁図…… 317
第249図 考古地磁気測定から得られた西南日本の
過去二千年の永年変化曲線…… 319
第250図 K_2O-CaO散布図 国分寺楠井遺跡窯跡出土
土器の器種別による分析値の比較…… 327
第251図 Fe_2O_3-TiO_2散布図 国分寺楠井遺跡窯跡出
土土器の器種別による分析値の比較…… 327
第252図 Fe_2O_3-TiO_2散布図 国分寺楠井遺跡窯跡出
土土器の各器種の中での型式別の分析値
の比較…… 328
第253図 K_2O-CaO散布図 国分寺楠井遺跡窯跡出
土土器と周辺遺跡出土土器との分析値
の比較…… 328
第254図 Fe_2O_3-TiO_2散布図 国分寺楠井遺跡窯跡
出土土器と周辺遺跡出土土器との
分析値の比較…… 329
第255図 K_2O-CaO散布図 国分寺楠井遺跡窯跡出
土土器と岡山県亀山・備前焼窯跡出土
土器との比較…… 329
第256図 Fe_2O_3-TiO_2散布図 国分寺楠井遺跡窯跡
出土土器と岡山県亀山・備前焼窯跡出土
土器との比較…… 330
第257図 Sr-Rb散布図 国分寺楠井遺跡窯跡出土
土器と岡山県亀山・備前焼窯跡出土土器
との比較…… 330
第258図 胎土分析試料実測図…… 331
第259図 薬王寺遺跡ＳＥ０３出土の
土師質甕…… 336
第260図 「叩き締めの円弧」と
叩き板の傾き…… 337
第261図 足釜底部叩き目の範囲と重複関係…… 338
第262図 想定される叩き板の移動方向…… 339
第263図 格子叩き目の方向…… 339
第264図 伊予における足釜…… 340
第265図 端部ハケ目調整と原体の動き…… 341
第266図 鍔部屈折法（口縁２技法）…… 342
第267図 木野愛宕神社の現存窯…… 347
第268図 魚住38号窯跡…… 348
第269図 神宮寺遺跡ＳＫ－１０４０…… 349
第270図 二ノ宮１号窯跡…… 351
第271図 三蔵畑遺跡土師器窯…… 351
第272図 国分寺楠井遺跡土器
編年試案……365～366
第273図 西村遺跡西村北地区Ｓ５－ＳＫ０１
出土遺物(1)…… 368
第274図 西村遺跡西村北地区Ｓ５－ＳＫ０１
出土遺物(2)…… 369
第275図 西村遺跡西村北地区Ｓ５－ＳＫ０１
出土遺物(3)…… 370
第276図 西村遺跡西村北地区Ｓ５－ＳＫ０１
出土遺物(4)…… 371
第277図 讃岐国府跡ＳＤ７８０５出土遺物…… 373
第278図 下川津遺跡出土の
非楠井産擂鉢・甕…… 375
第279図 黒谷川宮ノ前遺跡出土の甕ＡⅡ類…… 376
第280図 擂鉢Ａ類・甕Ａ類出土遺跡分布図…… 376
第281図 県内出土の擂鉢Ａ類(1)…… 377
第282図 県内出土の擂鉢Ａ類(2)…… 378
第283図 県内出土の擂鉢Ａ類(3)…… 379
第284図 県内出土の擂鉢Ａ類(4)…… 380
第285図 県内出土の甕Ａ類(1)…… 381
第286図 県内出土の甕Ａ類(2)…… 382
第287図 県内出土の甕Ａ類(3)…… 383
第288図 国分寺楠井遺跡遺構変遷図…… 387
第289図 11世紀後半～12世紀前半頃の
煮沸器種…… 390
第290図 西村遺跡における12世紀頃の鍋…… 391

表目次

第１表　発掘調査工程表……6
第２表　整理作業工程表……10
第３表　国分寺町内の遺跡一覧表(1)……15
第４表　国分寺町内の遺跡一覧表(2)……16
第５表　国分寺町内の遺跡一覧表(3)……17
第６表　国分寺町内の遺跡一覧表(4)……18
第７表　楠井１号墳玄室内出土遺物観察表(1)……61
第８表　楠井１号墳玄室内出土遺物観察表(2)……62
第９表　楠井１号墳周溝内土器群出土遺物観察表(1)……65
第10表　楠井１号墳周溝内土器群出土遺物観察表(2)……67
第11表　包含層出土須恵器観察表(1)……69
第12表　包含層出土須恵器観察表(2)……70
第13表　足釜Ｂ類の型式細分と技法……75
第14表　１号窯跡窯体内埋土上位出土遺物観察表……79
第15表　１号窯跡窯体内埋土下位出土遺物観察表……81
第16表　１号窯跡窯体内床面直上出土遺物観察表……83
第17表　２号窯跡出土遺物観察表……85
第18表　３号窯跡窯体内・灰原灰層出土遺物観察表……87
第19表　３号窯跡・ＳＤ０１出土遺物観察表……89
第20表　土器溜り１表土層出土遺物観察表(1)……91
第21表　土器溜り１表土層出土遺物観察表(2)……93
第22表　土器溜り１表土層出土遺物観察表(3)……95
第23表　土器溜り１表土層出土遺物観察表(4)……97
第24表　土器溜り１表土層出土遺物観察表(5)……99
第25表　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物観察表(1)…… 103
第26表　土器溜り１第Ⅰａ層出土擂鉢の卸し目原体と型式の対応関係(1)…… 104
第27表　土器溜り１第Ⅰａ層出土擂鉢の卸し目原体と型式の対応関係(2)…… 105
第28表　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物観察表(2)…… 107
第29表　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物観察表(3)…… 109
第30表　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物観察表(4)…… 111
第31表　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物観察表(5)…… 113
第32表　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物観察表(6)…… 115
第33表　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物観察表(7)…… 117
第34表　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物観察表(8)…… 118
第35表　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物観察表(9)…… 121
第36表　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物観察表(10)…… 123
第37表　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物観察表(11)…… 125
第38表　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物観察表(12)…… 127
第39表　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物観察表(13)…… 129
第40表　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物観察表(14)…… 131
第41表　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物観察表(15)…… 133
第42表　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物観察表(16)…… 137
第43表　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物観察表(17)…… 139
第44表　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物観察表(18)…… 141
第45表　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物観察表(19)…… 143
第46表　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物観察表(20)…… 144
第47表　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物観察表(21)…… 147
第48表　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物観察表(22)…… 149
第49表　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物観察表(23)…… 151
第50表　土器溜り１第Ⅰａ層出土遺物観察表(24)…… 155

第51表　土器溜り1第Ⅰa層出土遺物
観察表㉕…… 157
第52表　土器溜り1第Ⅰa層出土遺物
観察表㉖…… 159
第53表　土器溜り1第Ⅰa層出土遺物
観察表㉗…… 161
第54表　土器溜り1第Ⅰa層出土遺物
観察表㉘…… 163
第55表　土器溜り1第Ⅰa層出土遺物
観察表㉙…… 165
第56表　土器溜り1第Ⅰa層出土遺物
観察表㉚…… 166
第57表　土器溜り1第Ⅰa層出土遺物
観察表㉛…… 169
第58表　土器溜り1第Ⅰa層出土遺物
観察表㉜…… 171
第59表　土器溜り1第Ⅰa層出土遺物
観察表㉝…… 173
第60表　土器溜り1第Ⅰb層出土遺物
観察表(1)…… 175
第61表　土器溜り1第Ⅰb層出土遺物
観察表(2)…… 177
第62表　土器溜り1第Ⅰb層出土遺物
観察表(3)…… 179
第63表　土器溜り1第Ⅰa・b層出土遺物
観察表(1)…… 181
第64表　土器溜り1第Ⅰa・b層出土遺物
観察表(2)…… 182
第65表　土器溜り1第Ⅱ層出土遺物
観察表(1)…… 187
第66表　土器溜り1第Ⅱ層出土遺物
観察表(2)…… 189
第67表　土器溜り1第Ⅱ層出土遺物
観察表(3)…… 190
第68表　土器溜り1第Ⅲ層出土遺物
観察表(1)…… 193
第69表　土器溜り1第Ⅲ層出土遺物
観察表(2)…… 195
第70表　土器溜り1第Ⅲ層出土遺物
観察表(3)…… 197
第71表　土器溜り1第Ⅲ層出土遺物
観察表(4)…… 201
第72表　土器溜り1第Ⅲ層出土遺物
観察表(5)…… 202
第73表　土器溜り2出土遺物観察表(1)…… 205
第74表　土器溜り2出土遺物観察表(2)…… 207
第75表　土器溜り2出土遺物観察表(3)…… 209
第76表　土器溜り2出土遺物観察表(4)…… 211
第77表　土器溜り2出土遺物観察表(5)…… 213
第78表　土器溜り2出土遺物観察表(6)…… 215
第79表　土器溜り2出土遺物観察表(7)…… 217
第80表　土器溜り2出土遺物観察表(8)…… 219
第81表　土器溜り2出土遺物観察表(9)…… 221
第82表　土器溜り2出土遺物観察表⑩…… 223
第83表　土器溜り2出土遺物観察表⑪…… 225
第84表　土器溜り2出土遺物観察表⑫…… 227
第85表　土器溜り2出土遺物観察表⑬…… 229
第86表　土器溜り2出土遺物観察表⑭…… 231
第87表　土器溜り2出土遺物観察表⑮…… 233
第88表　土器溜り2出土遺物観察表⑯…… 234
第89表　土器溜り3出土擂鉢の卸し目原体と
型式の対応関係…… 237
第90表　土器溜り3出土遺物観察表(1)…… 239
第91表　土器溜り3出土遺物観察表(2)…… 241
第92表　土器溜り3出土遺物観察表(3)…… 243
第93表　土器溜り3出土遺物観察表(4)…… 245
第94表　土器溜り3出土遺物観察表(5)…… 246
第95表　土器溜り3出土遺物観察表(6)…… 249
第96表　土器溜り3出土遺物観察表(7)…… 251
第97表　土器溜り3出土遺物観察表(8)…… 253
第98表　土器溜り3出土遺物観察表(9)…… 254
第99表　土器溜り3出土遺物観察表⑩…… 257
第100表　土器溜り3出土遺物観察表⑪…… 259
第101表　土器溜り3出土遺物観察表⑫…… 261
第102表　土器溜り3出土遺物観察表⑬…… 263
第103表　土器溜り3出土遺物観察表⑭…… 265
第104表　土器溜り3出土遺物観察表⑮…… 267
第105表　土器溜り3出土遺物観察表⑯…… 268
第106表　2号窯跡整地層上層出土遺物
観察表(1)…… 271
第107表　2号窯跡整地層上層出土遺物
観察表(2)…… 272
第108表　2号窯跡整地層下層出土遺物
観察表(1)…… 275
第109表　2号窯跡整地層下層出土遺物
観察表(2)…… 276
第110表　2号窯跡整地層上層・下層出土遺物
観察表(1)…… 279
第111表　2号窯跡整地層上層・下層出土遺物
観察表(2)…… 280

第112表 包含層出土遺物観察表(1)…… 281
第113表 包含層出土遺物観察表(2)…… 285
第114表 包含層出土遺物観察表(3)…… 287
第115表 包含層出土遺物観察表(4)…… 289
第116表 包含層出土遺物観察表(5)…… 291
第117表 包含層出土遺物観察表(6)…… 293
第118表 包含層出土遺物観察表(7)…… 295
第119表 包含層出土遺物観察表(8)…… 297
第120表 包含層出土遺物観察表(9)…… 299
第121表 包含層出土遺物観察表(10)…… 301
第122表 包含層出土遺物観察表(11)…… 303
第123表 包含層出土遺物観察表(12)…… 305
第124表 包含層出土遺物観察表(13)…… 307
第125表 包含層出土遺物観察表(14)…… 309
第126表 その他の遺構・トレンチ出土遺物
観察表…… 311
第127表 包含層出土の印花文土器…… 312
第128表 ＳＦ０１窯焼土試料の
残留磁気測定結果…… 315
第129表 西南日本における過去二千年の
考古地磁気資料…… 320
第130表 国分寺楠井遺跡および周辺遺跡の
胎土分析試料・分析一覧表(1)…… 332
第131表 国分寺楠井遺跡および周辺遺跡の
胎土分析試料・分析一覧表(2)…… 333
第132表 国分寺楠井遺跡および周辺遺跡の
胎土分析試料・分析一覧表(3)…… 334
第133表 「煙管状窯」地名表…… 350
第134表 楠井産土器主要器種の遺構・層位別
型式対応表…… 358
第135表 楠井第Ⅰ～Ⅲ段階の設定と
器種の消長…… 360
第136表 擂鉢Ａ類・甕Ａ類出土地名表…… 384

第1章　調査の経緯

第1節　調査に至る経緯

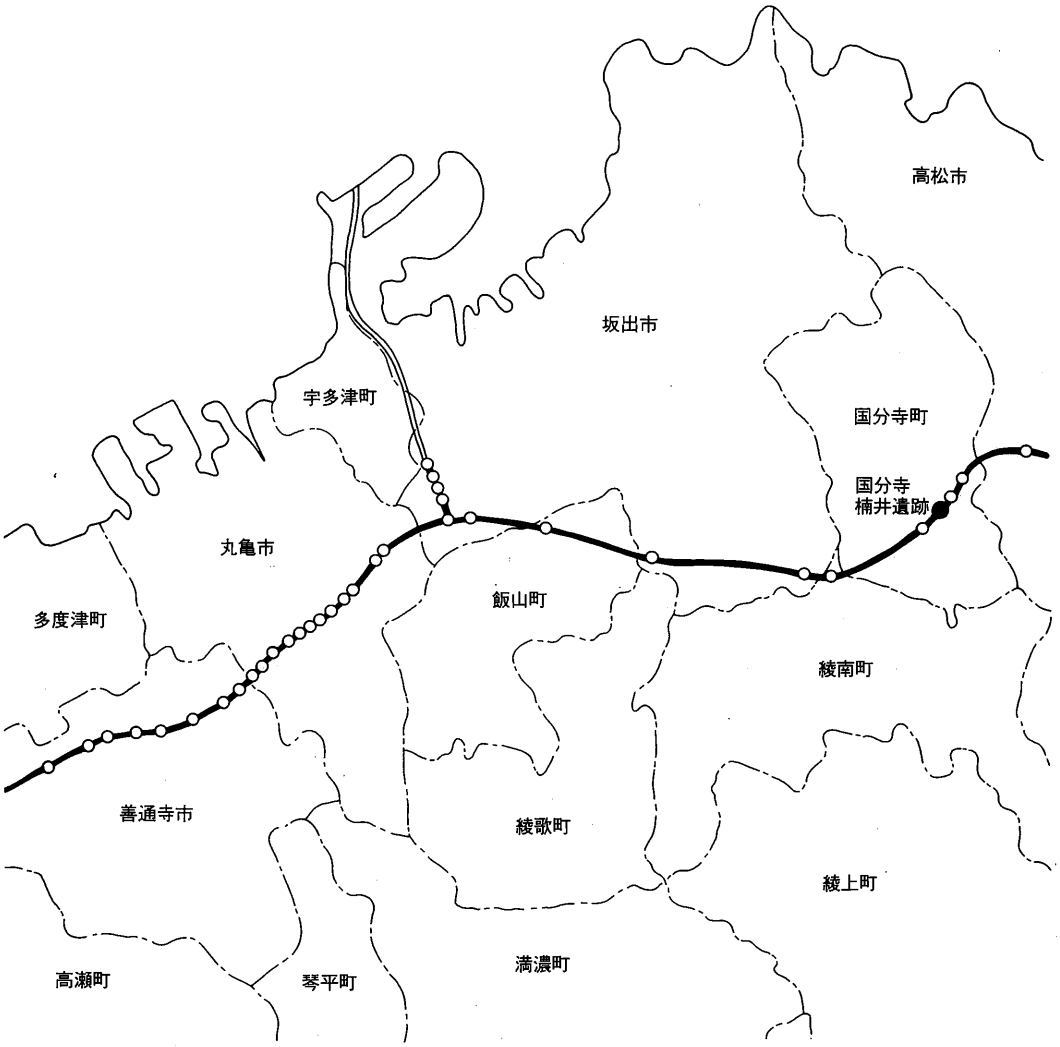
四国横断自動車道高松～善通寺間の建設は，同善通寺～豊浜間に引き続き，昭和57年1月8日に整備計画が決定され，昭和59年11月30日に建設大臣から日本道路公団総裁に対して施工命令が下された。

香川県教育委員会は，これを受けて路線内の埋蔵文化財包蔵地の状況を確認する目的で，国庫補助事業として分布調査を実施した。これらの成果をもとに，路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて，日本道路公団と文化庁の協議が行われ，基本的には記録保存で対応することが決定した。

また香川県教育委員会は，同事業に対応するため香川県土木部横断道対策室及び日本道路公団高松建設局高松工事事務所と昭和62年度から調査体制等について協議を開始した。協議の結果，昭和63年から2カ年の予定で本調査を実施し，発掘調査終了後に整理報告を実施することが決定した。香川県教育委員会では，昭和62年11月に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを設置し，専門職員の増員等の措置を行うことで調査体制の充実を図った。

平成元年度には，国分寺町における路線内の埋蔵文化財包蔵地について，具体的に内容について確認するため，日本道路公団と協議の上，予備調査を実施した。その結果，4箇所で遺構や遺物包含層を確認し，本調査が行われることになった。平成元年度には，このうち国分寺下日名代遺跡・国分寺六ツ目古墳・国分寺六ツ目遺跡で本調査が実施されたが，国分寺楠井遺跡の調査対象地には伐採木が大量にあること，また調査地までの進入路が確保できないことから，地元自治会との協議が必要となった。これらの問題が解決した平成2年4月に本調査に着手することとなった。

調査は，香川県教育委員会が日本道路公団高松建設局から委託を受け，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを調査担当者として実施した。



第１図　四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地（高松～善通寺）

第2節　調査の経過

1. 発掘調査の経過

(1) 予備調査

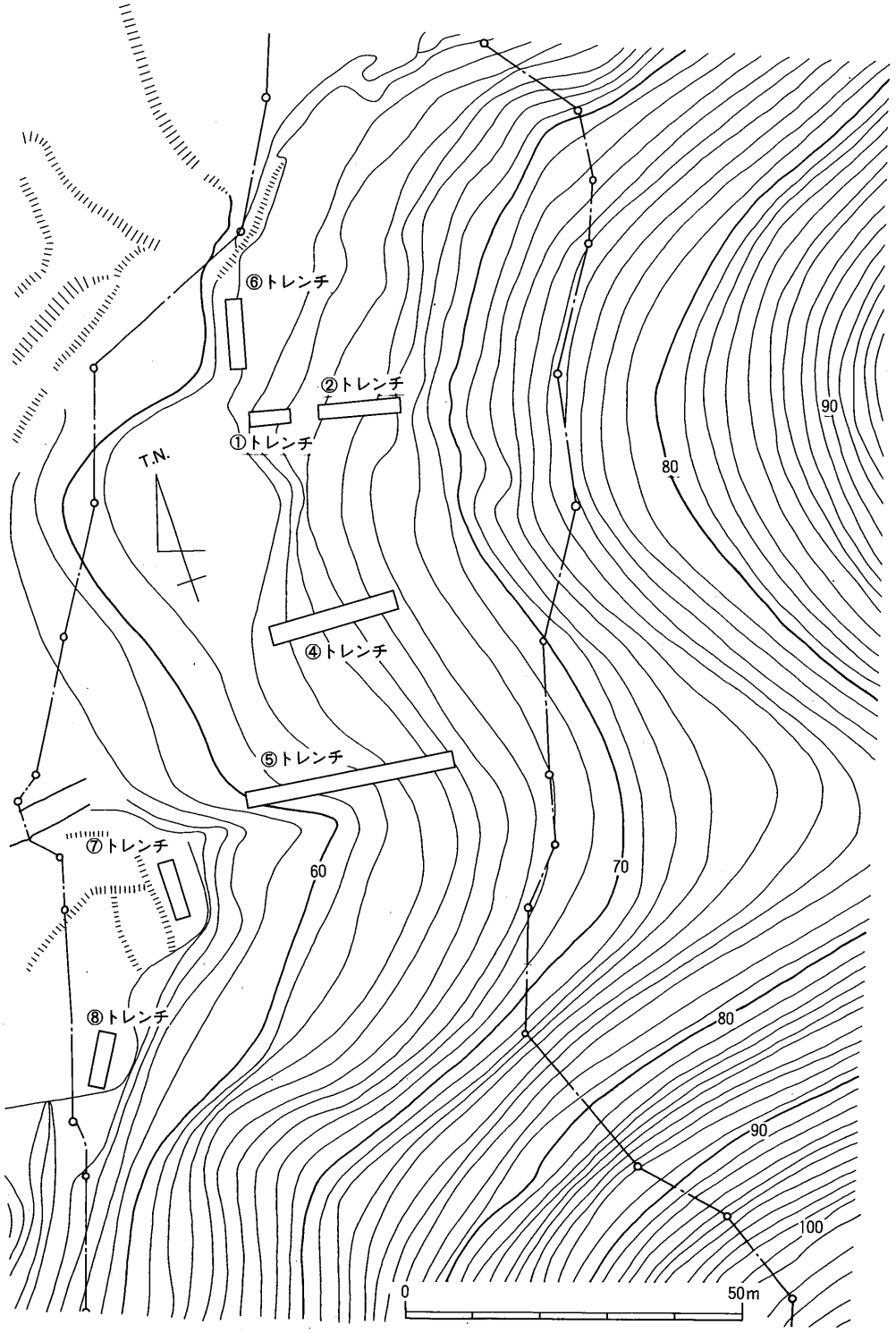
平成元年10月に行った。付近は北側の尾根を中心に明治期以降の宅地によって地形が段状に改変されていた。宅地に伴う段は高い部分では約3mにも達していたため，これらの顕著な地形改変部は対象外とし，自然地形が比較的良好に遺存していると考えられた尾根・谷筋や土師質足釜の散布が認められる畑にトレンチを設定した。

北側の尾根に設定した①・②・④・⑥トレンチでは，畑の造成による基盤層の攪乱が著しく，遺物もほとんど出土しなかった。また，足釜が散布していた地点に設定した⑦・⑧トレンチでも地形の改変が著しく，畑の造成土からわずかな足釜・土鍋片が出土したに過ぎなかった。しかし⑦トレンチでは焼土が少量出土したため，上方の斜面に遺構が存在することが想定できた。一方，谷底に近い斜面に設定した⑤トレンチでは，大量の足釜・土鍋・擂鉢・東播系須恵器捏鉢などの中世土器が出土し，トレンチの東端部で直径1m程度に焼土がまわる焼土坑（本調査の1号窯跡にあたる）を検出した。このことから付近が土器生産に関わる遺跡である可能性が高くなった。また，⑤トレンチでは古墳時代後期の須恵器蓋杯・高杯・壺・甕片などもかなり出土したことから，付近の尾根に後期古墳の存在も予測されるようになった。

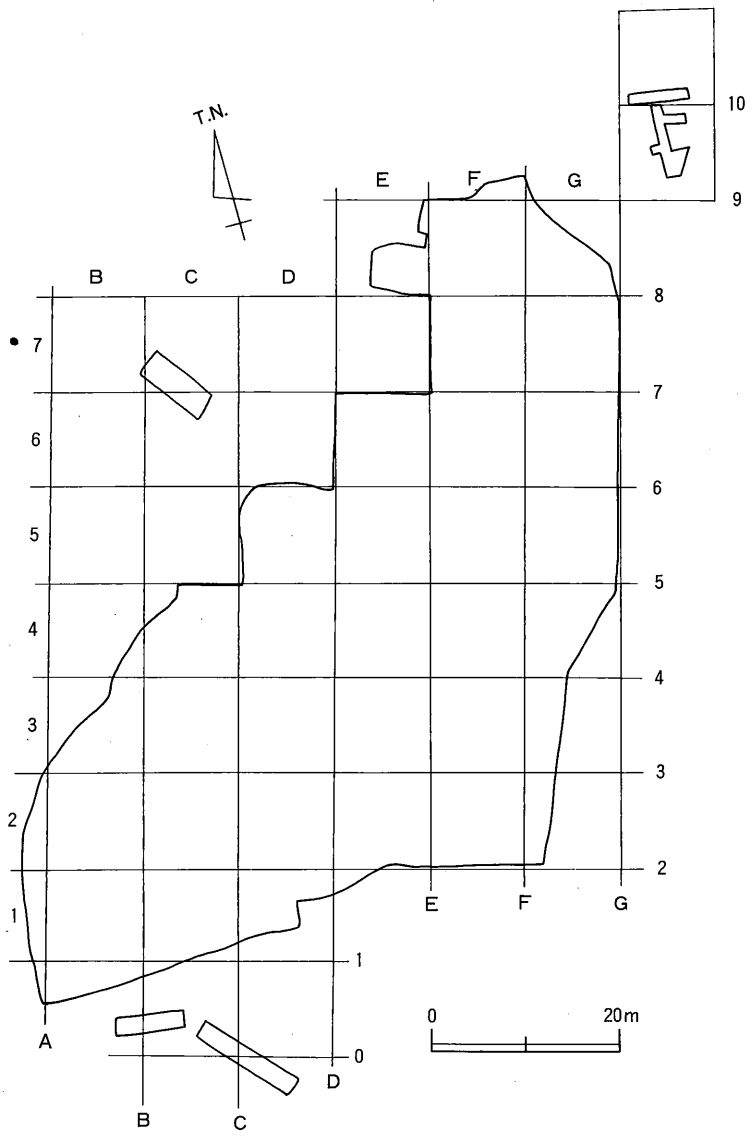
(2) 本調査

予備調査の所見を踏まえて，尾根に挟まれた谷を中心に本調査が行われることになった。調査期間は平成2年4月11日～10月2日である。ただし調査の最終段階では府中地区の予備調査も併行して行っている。調査対象面積は4,400㎡である。

調査方法は，遺跡が土器生産地である可能性が高いことから，対象地全体を10mメッシュで区画し，区画毎に遺物を取り上げることとした。またメッシュラインに沿って土層観察用の畦を残し，窯体・灰原と遺跡全体の土層との関係の把握に務めた。掘削方法は，遺物の散布が顕著な部分や窯体が露出していた部分（2号窯跡）については表土から人力で行い，他の部分は遺構面まで重機で掘削した。また，掘削に先立って調査区全体に伐採木材があったため，重機で搬出した。

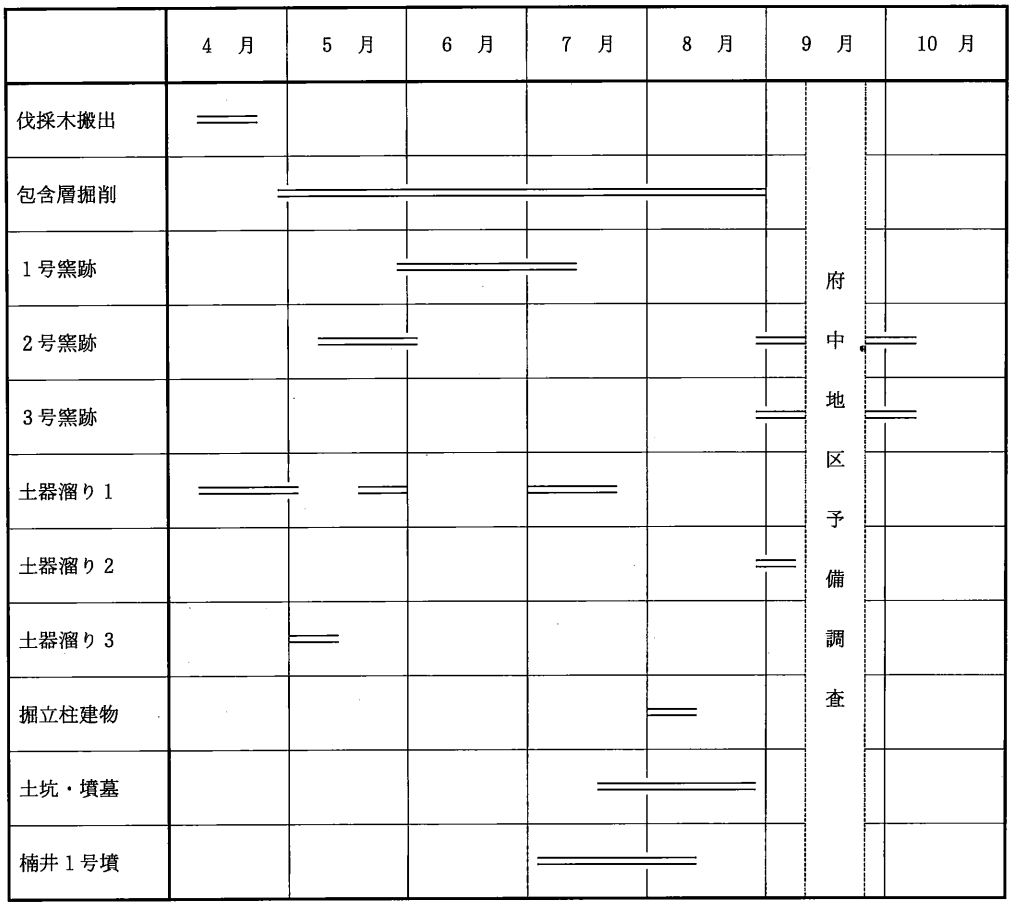


第２図　国分寺楠井遺跡予備調査トレンチ配置図



第３図　国分寺楠井遺跡区画割図

調査の進行にしたがい，２基の窯跡と大量に土器が投棄された土器溜りの状況が次第に判明し，中世土器生産の実態を示す遺跡内容が明らかになってきた。このため６月24日には，この３基の窯跡を中心に地元住民を対象とした現地説明会を実施した。国分寺町や高松市をはじめとした県内各地や，兵庫県や大阪府などの県外からの見学者もあり，約140名の参加を得た。また，自然科学的な手法で窯操業年代の推定を行うため，熱残留磁気測定を花園大学自然科学研究室前中一晃氏に依頼した。測定用のサンプルは２回採取した。



第1表　発掘調査工程表

1回目は前中氏が現場で行い，2回目は調査員が採取してサンプルを送付した。

検出した遺構については,第3章第3節に詳述したので繰り返さないが,遺構検出にあたっての問題点をいくつか記しておきたい。予備調査段階で古墳の存在が想定されており，また本調査の早い段階で周溝土器群を検出していたが，わずかに遺存していた古墳墳丘の検出が十分に行えなかったことが,まず挙げられる。地表観察で墳丘らしい盛り上がりが認められなかったことや，遺物散布の希薄な部分にあたったために重機で掘削したことが,その原因である。また,土器溜り1に伴う窯体は調査区東側の路線外にあると思われるが,膨大な遺物量が何基の窯体によるものなのか,明らかにできなかった。様々な問題はあろうが，予備調査段階で地形観察や遺物の散布範囲を的確に捉えた上で，遺跡探査(地磁気探査法)を行っておく必要を痛感した。

以下，調査日誌抄を掲げておく。

調査日誌抄

4月11日　本日から作業員就労開始。調査区の大半に伐採材が残っているため，重機2台で搬出作業を行い，作業員は障害物のないG－4区で掘削を開始する。炭化物と焼石の集中する部分を検出（後で土器溜り1の一部と判明）。

4月16日　G－5区掘削。足釜・土鍋・鉢が多量に出土。残りのよいものは写真撮影する。木材除去中の重機のキャタピラ跡に，焼土坑（2号窯跡）かかる。

4月21日　調査区南側尾根の西端を工事用道路が造成されるため，調査員立会する。掘削部分で遺存状況のよい土器片が多量に出土した（後で土器溜り2と判明）ため，その部分を避けて造成を行うように協議する。

4月24日　G－5区で東播系須恵器鉢が出土。足釜などは大型の破片も多いため，二次的に動いていない灰原の可能性がある。図面・写真作業など行い，しばらく掘削作業中止。

4月26日　D－4区掘削開始。遺物はほとんどないが，焼土や灰のたまりを検出。

5月1日　C－4区掘削開始。土器が大量に検出された（土器溜り3）。

5月9日　手つかずになっていた2号窯跡周辺の表土を除去する。幅0.7～0.8m，長さ1.5mほどの登り窯か？。窯壁はよく焼け，表面が還元状態になっている。

5月11日　2号窯跡の掘削を始める。

5月15日　2号窯跡体内で崩落天井や側壁を検出。写真撮影する。

5月17日　県教育次長来所。2号窯跡の乾燥を防ぐために，窯体上にテントを張る。崩落窯壁を除去。窯の全体像がいま一つわからない。

5月23日　F－6区の地山直上で古墳時代の須恵器甕や蓋杯が集中して出土（楠井1号墳周溝土器群Ⅰ）。

5月25日　土器溜り1の掘削再開。あい変わらず遺物大量に出土する。堺近郊産の瓦質甕が出土。2号窯跡周辺を下層確認したところ，窯体のベースよりも下の層で土器出土。2号窯跡は包含層を切り込んで作られている可能性がある。

5月31日　1号窯跡の掘削開始。思った以上に窯壁が良好に遺存している。農繁期のため，作業員の人数激減する。昨日は7名だった。

6月4日　1号窯跡床面の一部検出。足釜片が散布。

6月11日　現地説明会の内容や周知方法について，調査員と担当係長話し合う。

6月12日　F－7区で須恵器（高杯4以上・甑・甕・台付壺）集中して出土する落ち込み検出（周溝土器群Ⅱ）。

6月14日　国分寺町役場に現説の実施にあたっての協力を依頼する（担当係長・調査員W）。

6月18日　1号窯跡窯体内の遺物取り上げ。

6月20日　四国新聞社・読売新聞社，現場の取材に来る。

6月22日　現説資料完成。会場設営し，作業員相手に調査員リハーサル。調査員一同緊張する。

6月24日　現地説明会実施。OHK・RNC・RSK・朝日新聞取材。なかなか盛況だった。

6月25日　花園大学前中一晃氏来所。熱残留磁気測定用の試料を採取する（1号窯跡）。

7月5日　連日の雨で谷底の調査区のD－5区壁面が崩壊。崩落した土を除去する。

7月9日　F－8区で小礫や須恵器の散布部分検出。石材の抜き取り跡らしいものも。古墳か！？

7月10日　石室らしい部分に十字に断ち割りを入れる。断ち割りの交差部で銀環出土する。調査員S真っ青になる。

7月17日　古墳石室内の遺物出土状況実測。

7月23日　北側尾根トレンチの土坑で骨・鉄器検出。墳墓の可能性大。

7月27日　C－3区で窯体1基検出される（3号窯跡）。

7月31日　南側尾根で焼土坑検出。床面にワラ灰や骨片がある。火葬墓もしくは火葬施設の可能性がある。調査員W，掘削終了後，塩で清める。

8月29日　A－1・2区で灰原らしい土器の集積を検出。工事用道路法面で検出した土器群と一連のもの。5号窯跡灰原（報告遺構名：土器溜り2）。

9月7日　2号窯跡の熱残留磁気測定試料を調査員で採取。

9月10日　2号窯跡断ち割り。窯体掘り方のラインを断面で確認する。

9月11日　2号窯跡の窯壁が3枚存在することを確認。

10月1日　2号窯跡の窯壁を除去し，掘り方内の石組検出。

10月2日　2号窯跡ベース土を除去し，下層遺構掘削。3号窯跡の遺物取り上げ。本日をもって現場作業終了。

第３節　調査と整理の体制

発掘調査及び整理作業の体制は，以下のとおりである。

発掘調査（平成２年度）

香川県教育委員会事務局　文化行政課

課　　長	太田　彰一
課長補佐	菅原　良弘
副 主 幹	野網朝二郎
総務係長	宮内　憲生
主任主事	横田　秀幸
主事	水本久美子(～5.31)
〃	石川恵三子(6.1～)
埋蔵文化財係長	大山　真充
主任技師	岩橋　　孝
技師	北山健一郎

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

所　　長	十川　　泉
次　　長	安藤　道雄
総務係長	加藤　正司
主査	山地　　修
主事	三宅　浩司(～5.31)
〃	斎藤　政好(6.1～)
調査参事	見勢　　護
係長	渡部　明夫
〃	藤好　史郎
〃	真鍋　昌宏
文化財専門員	牧野　啓造
主任技師	渡邊　茂智
技師	佐藤　竜馬
調査技術員	萬木　一郎
調査補助員	田村　久雄

発掘作業に携わった方々

乙武孝男・柏原　巧・柏原義明・鈴木悦夫・濱岡岩夫・引田逸雄・細谷祐義
本田昌夫・山下和博
植松美知子・太巻房子・乙武文枝・楠原ひとみ・鍬島美智子・高橋光子
田中キヨ・田村都孟子・西谷政江・平田圭子・福家タミ・本田貞子・松上初子
松元ハルミ・脇千代枝

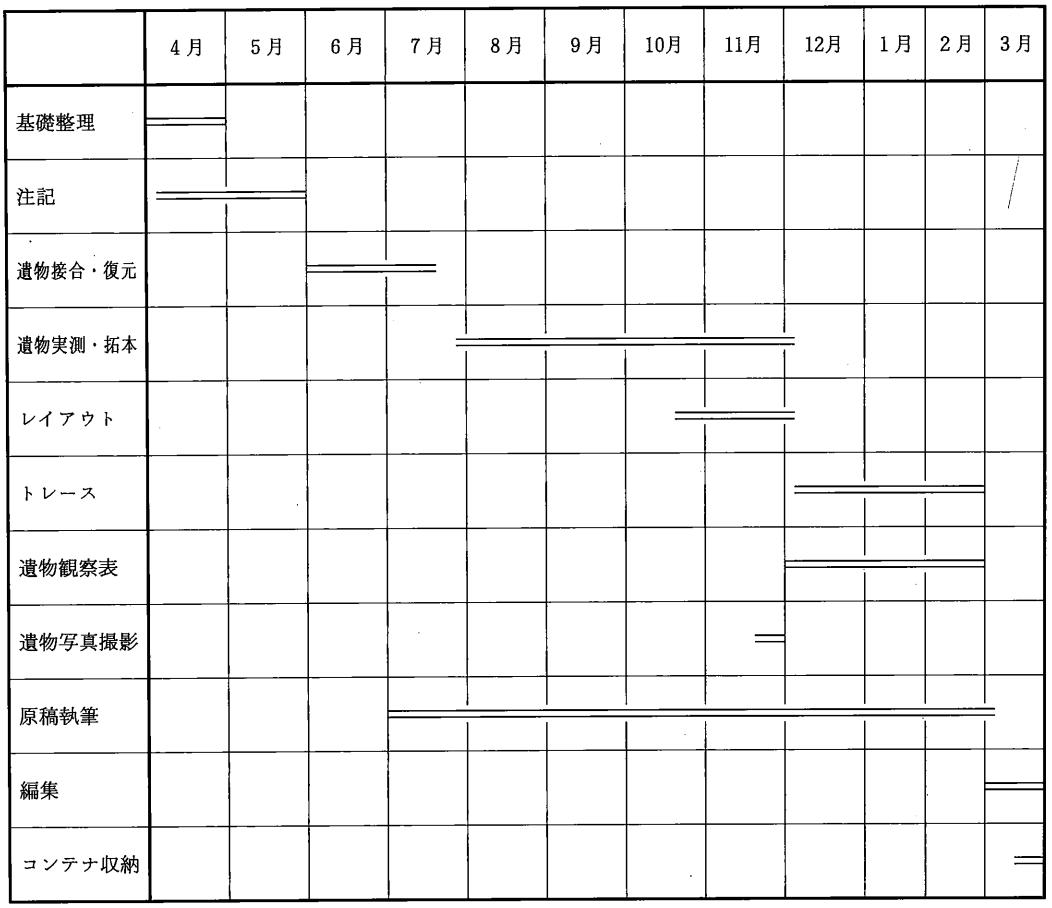
整理作業（平成６年度）

香川県教育委員会事務局　文化行政課

課　　長	高木　　尚
主　　幹	小原　克己
課長補佐	高木　一義
副 主 幹	三好　利仁
総務係長	源田　和幸
主査	星加　宏明
主事	高倉　秀子
埋蔵文化財係長	藤好　史郎
主任技師	國木　健司
主任技師	森下　英治

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

所　　長	松本　豊胤
次　　長	真鍋　隆幸
総務係長	土井　茂樹(～5.31)
〃	前田　和也（6.1～）
主査	西村　厚二
調査係長	廣瀬　常雄
主任技師	佐藤　竜馬
整 理 員	戸川　昌代
整理補助員	若山　淳子
整理補助員	長谷川郁子
整理補助員	岩井　弘恵
整理作業員	冨家　孝子
整理作業員	大林　由佳
整理作業員	三嶋　真紀


4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
12月
1月
2月
3月
基礎整理
注記
遺物接合・復元
遺物実測・拓本
レイアウト
トレース
遺物観察表
遺物写真撮影
原稿執筆
編集
コンテナ収納

第2表　整理作業工程表

第2章　立地と環境

第1節　地理的環境

国分寺町は，町域を画する諸山塊と，中央部に広がる平野部からなる。

町域の北半部には，国分台（標高407.4m）・蓮光寺山（標高370.7m）・大平山（標高478.9m）などの五色台の連峰が連なっており，南半部には鷲ノ山（標高322.4m）・火ノ山（標高246.9m）・堂山（標高302m）・六ツ目山（標高317m）・伽藍山（標高216m）などが連なっている。国分台は頂部が平坦な台地状を呈しており，メサ状地形と呼ばれている。これらの山塊は下半部で花崗岩を基盤とし，上半部は安山岩や凝灰岩よりなる。サヌカイト原石や石棺材が比較的標高の高い地点で採取できるのは，この地質上の特質による。隣接する高松平野と坂出平野とは，北半部と南半部の山塊にわずかに開いた狭隘な平地でつながっている。したがって，平野部は盆地状の閉鎖的な一地域を形成している。

平野部では本津川が南北に貫流しており，支流の野間川が東西に流れ伽藍山北西麓で本津川に合流している。また，ほぼ南北方向の方位をもつ条里型地割が認められる。この地割の方位は，高松平野や坂出平野の条里型地割とは異なっており，独自の地割設定原理の存在したことが窺える。地割の上限は明らかではないが，国分寺下日名代遺跡の調査では平安時代後半頃に埋没した地割の方向と合致した溝が検出されている(1)。

国分寺楠井遺跡は，堂山から西に延びる2本の尾根に挟まれた緩斜面に位置している。付近には「お前泉」と呼ばれる湧水がある。またやや下った平野部では，国分寺下日名代遺跡の基盤層の在り方からみて，花崗岩が風化し二次堆積した黄色粘土層があると考えられる。さらに後背部の堂山は，重要な燃料供給源となったであろう。このように，楠井付近は土器生産には非常に有利な条件にあった地域ということができるのである。

註(1)　「国分寺下日名代遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』平成元年度　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団高松建設局　1990

第2節　歴史的環境

1. 旧石器～古墳時代

地理的にまとまった一地域をなす国分寺町域の歴史的叙述の前半は，考古資料によってのみ記述することが可能である。しかしながら，町内の遺跡には実態不明のものが多く，多くは資料の羅列にとどまらざるを得ないのが現状である。

この地域の考古資料は，後期旧石器時代にまで遡る。国分台遺跡や蓮光寺山遺跡など，サヌカイト原石の産地にあたり多量のナイフ形石器・尖頭器や剝片が散布する遺跡の他，兎子山遺跡のように山頂の限られた範囲に少量の石器・剝片が散布する遺跡もある。いずれも丘陵部立地の遺跡であり，山麓や平野部の遺跡については不明であるが，隣接する高松市中間西井坪遺跡では舟底形石器や小型のナイフ形石器を主体とするブロックが検出されており(1)，このような丘陵端部に立地する遺跡の検出される可能性はある。

次いで縄文時代の集落遺跡の存在は明確ではないが，堂山北麓の国分寺六ツ目遺跡では，板状のサヌカイト剝片を集積させた遺構が検出されている(2)。周辺からは縄文時代のものと考えられる石鏃や石匙が出土しており，石器製作に関わる遺構とみられる。

弥生時代でも前期の遺跡は現在まで確認されておらず，全般的にみても依然遺跡数はわずかである。ただし，四国横断自動車道建設に伴う発掘調査では，国分寺工区4遺跡のうち3遺跡までが何らかのかたちで弥生遺跡の痕跡を残している。このことから，将来的にこの時代の遺跡が増加する傾向にあることは間違いないであろう。国分寺楠井遺跡においても，遺構には伴わないがサヌカイト剝片や打製石包丁などが出土している。また，丘陵端部と本津川に挟まれた国分寺下日名代遺跡では弥生時代中期後半の溝が検出されている。溝の機能については明らかではないが，遺跡の立地からみて集落もしくは耕地への導・排水路であった可能性がある(3)。さらに蓮光寺山東斜面の檀原遺跡では開墾に伴って弥生土器が出土しており，丘陵部立地の集落の存在を示唆する。

古墳時代の集落は，まだその実態が明らかではないものの，丘陵部に若干の古墳が知られている。国分寺六ツ目古墳は，堂山から北西に延びた丘陵頂部に位置する前期の前方後円墳（全長20.7m）である(4)。前方後円墳としての規模は小さく，また副葬品も貧弱であるが，国分寺の平野部全体を見渡せる地点に築造されており，小地域に基盤を置いた首長の存在を窺わせる。ただし，これに次ぐ前方後円墳が確認されておらず，中期の動向につ

第４図　国分寺町内の遺跡分布図（S＝1/25,000）

番号	遺跡名	所在地	時代	主な遺構	主な遺物
1	兎子山遺跡	国分寺町新名	旧石器		
2	国分台遺跡	国分寺町国分	旧石器		サヌカイト
3	讃岐国分尼寺跡	国分寺町新居東川西	奈良	礎石跡	
4	讃岐国分寺跡	国分寺町国分馬場	奈良	寺跡	
5		国分寺町国分馬場宝林寺	鎌倉	塚	
6		国分寺町国分中西	江戸	五輪塔	
7	国分八幡神社盤座	国分寺町国分	奈良	巨石群	
8	寺家1号塚	国分寺町国分寺家		土盛	
9	寺家2号塚	国分寺町国分寺家		石積み	
10	寺家3号塚	国分寺町国分寺家		祠	
11	内田の塚	国分寺町国分西奥		五輪塔	
12	蓮光寺山	国分寺町国分	旧石器		サヌカイト，円礫
13	橋岡山遺跡	国分寺町橋岡山	旧石器		サヌカイト
14		国分寺町橋岡山	古墳後期	巨石群（横穴式円墳？）	ヒスイ勾玉
15	石ヶ鼻富家の塚	国分寺町福家石鼻		塚	
16	石ヶ鼻植松の塚	国分寺町福家石鼻		塚	
17	六中塚	国分寺町福家六中		円墳	
18	六中松本の塚	国分寺町福家六中			
19	石ヶ鼻古墳	国分寺町福家石鼻	古墳後期	円墳（横穴石室）	
20	本村菊川の塚	国分寺福家本村		石組	
21	堂山城跡	国分寺町福家堂山山頂	室町	空濠，曲輪	
22	福家氏館跡	国分寺町福家本村	室町	石垣，土手，井戸	
23	北谷塚	国分寺町福家北谷		土盛り	
24	川西1号塚	国分寺町福家川西		祠	
25	川西2号塚	国分寺町福家川西			土釜の足
26	荒神塚	国分寺町福家下日名代		祠	
27	おま泉	国分寺町福家楠井		井戸	
28	多聞寺院跡	国分寺町福家本村	戦国	寺跡	
29	香西池堤防遺跡	国分寺町福家羽間	室町	堤防	
30	三昧の塚	国分寺町福家三昧		塚	
31	摩尼輪塔	国分寺町新居西大谷	室町	石塔	
32	西大谷古墳	国分寺町新居西大谷	古墳	横穴式古墳	
33	大谷1号塚	国分寺町新居西大谷			
34	大谷2号塚	国分寺町新居西大谷		石積み	

第3表　国分寺町内の遺跡一覧表(1)

番号	遺跡名	所在地	時代	主な遺構	主な遺物
35	東川西古墳	国分寺町新居東川西	古墳	石室？，祠	
36	西川西1号塚	国分寺町新居西川西		石積み	
37	西川西2号塚	国分寺町新居西川西		五輪塔	
38	西川西3号塚	国分寺町新居西川西		五輪塔	
39	向田塚	国分寺町新居下向田			
40	笠塔婆	国分寺町新居西川西	桃山	経幢	
41	楠尾神社経塚	国分寺町新居西大谷	平安～鎌倉	経塚	青銅製経筒，古鏡，古刀
42	狭箱塚	国分寺町新居万灯	古墳	石積み	
43	末沢氏祖先堂域碑	国分寺町新居万灯	室町	石碑	土鍋の足
44	赤池古墳	国分寺町新名赤池			
45	石舟石棺	国分寺町石舟神社	古墳		石棺
46	鷲の山城跡	国分寺町新名	室町		
47	小山古墳	国分寺町新名			
48	新名氏屋敷跡	国分寺町新名中新名	室町	石垣	
49	塔原経塚	国分寺町柏原塔原	室町	法華塔	
50	南新名1号塚	国分寺町新名南新名		塚	
51	南新名2号塚	国分寺町新名南新名		小祠	
52	立石塚	国分寺町新名石舟		塚（自然石）	
53	野搖塚	国分寺町新名野搖			
54	空路1号塚	国分寺町新名空路		塚	
55	空路2号塚	国分寺町新名空路		小石	
56	空路3号塚	国分寺町新名空路		古墳	
57	空路4号塚	国分寺町空路		小祠	
58	羽間塚	国分寺町福家羽間		古墳	
59	菊川の塚	国分寺町福家本村		塚	
60	穴薬師	国分寺町新居西川西	室町	穴	魔崖仏
61	地神様	国分寺町新居西川西		盤座	
62	西川西古墳	国分寺町新居西川西	古墳	横穴式石室	
63	新居氏砦跡	国分寺町新居東川西	室町		
64	新居氏館跡（土居の宮）	国分寺町中筋	室町	小祠	
65	新居資虎，資友の墓	国分寺町新居中筋天童子	室町	石碑，石灯	備前焼擂鉢
66	川西塚	国分寺町新居東川西		塚	
67	落神様	国分寺町新居西川西		五輪石塔	
68	福乗寺跡	国分寺町新居西川西	奈良		
69	萬福寺跡	国分寺町新居西川西			
70	橋岡1号塚	国分寺町新居橋岡		小祠	
71	橋岡2号塚	国分寺町新居橋岡		小祠	石，貝

第4表　国分寺町内の遺跡一覧表(2)

番号	遺跡名	所在地	時代	主な遺構	主な遺物
72	橋岡3号塚	国分寺町新居橋岡	中世	五輪塔	
73	小万灯塚	国分寺町新居小万灯		石小祠	
74	如意輪寺	国分寺町国分		小堂	阿弥陀，観音像
75	東奥1号塚	国分寺町国分東奥		石積み	
76	東奥2号塚	国分寺町国分東奥		塚	
77	東奥3号塚	国分寺町国分東奥		石積み	馬の骨，ほら貝
78	東奥4号塚	国分寺町国分東奥			
79	東奥5号塚	国分寺町国分東奥		石積み	
80	東奥6号塚	国分寺町国分東奥		塚	
81	東奥7号塚	国分寺町国分東奥		石積み	
82	東奥8号塚	国分寺町国分東奥		五輪塔	
83	東奥9号塚	国分寺町国分東奥		石積み	
84	東奥10号塚	国分寺町国分東奥		石積み	
85	東奥11号塚	国分寺町国分東奥		石積，小祠	
86	東奥12号塚	国分寺町国分東奥		祠	
87	東奥13号塚	国分寺町国分東奥		五輪塔	
88	東奥(かずら荒神)14号塚	国分寺町国分東奥		五輪塔，石祠	
89	東奥（竹荒神）15号塚	国分寺町国分東奥		祠	
90	東奥16号塚	国分寺町国分東奥		石組み	
91	東奥17号塚	国分寺町国分東奥		五輪塔	
92	東奥18号塚	国分寺町国分東奥		積み石	
93	東奥19号塚	国分寺町国分東奥		塚（積み石）	
94	東奥20号塚	国分寺町国分東奥		土盛り	
95	東奥21号塚	国分寺町国分東奥		石積み，土盛り	
96	東奥22塚	国分寺町国分東奥		円墳	
97	壇原遺跡	国分寺町国分西山	弥生		弥生土器，壺，高杯
98	永寿寺跡	国分寺町国分寺家	（奈良）	小祠	
99	原の塚	国分寺町国分原		石積み	
100	里の学講坊	国分寺町国分里	（奈良）	石祠	
101	末沢城跡	国分寺町新居万灯	室町	石垣，井戸	
102	万灯1号塚	国分寺町新居万灯		五輪の残石	
103	万灯2号塚	国分寺町新居万灯		土盛り	
104	万灯3号塚	国分寺町新居万灯		石積み	
105	万灯4号塚	国分寺町新居万灯		土盛り	
106	万灯5号塚	国分寺町新居万灯		土盛り	
107	万灯6号塚	国分寺町新居万灯		石積み	
108	南側の1号塚	国分寺町柏原南側		塚（土盛り）	
109	南側の2号塚	国分寺町柏原南側	室町	小祠，五輪塔	
110	南側の3号塚	国分寺町柏原南側	室町	小祠，五輪塔	

第5表　国分寺町内の遺跡一覧表(3)

番号	遺跡名	所在地	時代	主な遺構	主な遺物
111	南側の4号塚	国分寺町柏原南側	室町～江戸	小祠，五輪塔	
112	南側の5号塚	国分寺町柏原南側		小社	
113	南側の6号塚	国分寺町柏原南側		小祠，五輪塔	
114	南側の7号塚	国分寺町柏原南側		塚（土盛り）	
115	南側の8号塚	国分寺町柏原南側		祠，五輪塔	
116	福家山城跡	国分寺町福家本村		土塁，縦掘り	
117	本村古墳	国分寺町福家本村	（古墳前期）	竪穴式石室，箱式石棺	
118	奥谷1号塚	国分寺町新居奥谷		積み石，五輪塔	
119	奥谷2号塚	国分寺町新居奥谷	中世	五輪塔	
120	国分寺下日名代遺跡	国分寺町福家	弥生	溝，水田跡，動物足跡	弥生土器，須恵器，土師器
121	国分寺六ツ目古墳	国分寺町福家	古墳	前方後円墳	鉄器，古式土師器
122	国分寺六ツ目遺跡	国分寺町福家	中近世	中近世建物跡	石器，弥生土器，近世陶磁器
123	国分寺楠井遺跡	国分寺町福家楠井	近世	窯跡，土器溜まり	擂鉢，足釜，鍋，甕

第6表　国分寺町内の遺跡一覧表(4)

いては不明とせざるを得ない。こうしたなかで，鷲ノ山産の凝灰岩を加工した刳り抜き式石棺の生産が注意される。前期後半から中期前半にかけて，讃岐国内はもとより畿内にも搬出されており，形態的な連続性から固定的な石工集団が存在したとの見解も提示されている。鷲ノ山東麓で出土した石舟天神社石棺は，表面の凹凸が著しく完成品とはいい難い作巧であるとの指摘があり，付近に石棺製作の工房が想定されている(5)。

後期には，横穴式石室を主体部とする古墳が丘陵端部付近に築造される。いずれも群集形態はとらず，散在する傾向にある。石ケ鼻古墳は，玄室長4.1m，同幅1.8～2mの横穴式石室をもつ。石室規模は，香川県内の大型石室墳よりも若干小さいが，御厩大塚古墳や矢野面古墳など高松平野南部に単基で散在する中型石室墳に近い。近接する高松市鬼無町や坂出南部のような，累代的な大型石室墳を築造した地域の狭間にある中型石室墳として，その存在が注目される。同様な点は，前期の六ツ目古墳についてもいえよう。

2. 古代・中世

奈良時代中期に始まる讃岐国分寺・国分尼寺の造営を契機に，この地域は讃岐のなかでも主導的な役割を果たすことになる。若干の文献史料とわずかな考古資料から，古代・中世の動向を追っておこう。

7世紀後葉～8世紀前半の郡－郷（里）制の整備によって，国分寺町域は阿野郡新居郷となり，天平13年（741）～天平勝宝8年（756）頃には讃岐国分寺が建立された。国分寺・国分尼寺は，五色台南麓の3方を丘陵に囲まれた緩斜面に位置している。創建時の瓦は，鷲ノ山北麓の府中山内瓦窯跡で生産されたが，その後平安時代・鎌倉時代にも瓦が葺かれており，その生産地が山内瓦窯跡であるかどうかは不明である。ことに平安時代後期の軒瓦の意匠は，南方約5㎞に展開する十瓶山窯跡群との関連が濃厚である。

国分寺下日名代遺跡では，奈良～平安時代の土器とともに石帯や円面硯が出土しており，付近に識字層や官人の存在したことが窺える。比較的近接した石ヶ鼻古墳の存在とあわせ，在地の有力階層の動向を示唆する資料である。

平安時代後期になると，国司制度の遥任に伴い在庁（官人）が国衙で実際の政務を執るようになる。この頃の史料に在庁官人として綾氏がみえる。綾氏は阿野郡を本拠とする伝統的な郡司層であるが，国司藤原家成と血縁関係をもち12世紀以降，讃岐藤氏を称するようになる。『吾妻鏡』元暦元年（1184）条には，源頼朝の御家人となることを望んだ讃岐武士として，「藤大夫資光　同子息新大夫資重　同子息新大夫能資」などの人名が挙げられている。「綾氏系図」によれば，藤大夫資光は「新居大夫」と称したといい，新居郷を本拠地としていたことが考えられる。「綾氏系図」では，資光の兄弟は大野（香川郡）・羽床（阿野郡）・香西（香川郡）の地名を冠していることから，12世紀末葉には郷単位程度の範囲を本拠とした領主層が形成されつつあったことを窺わせる。

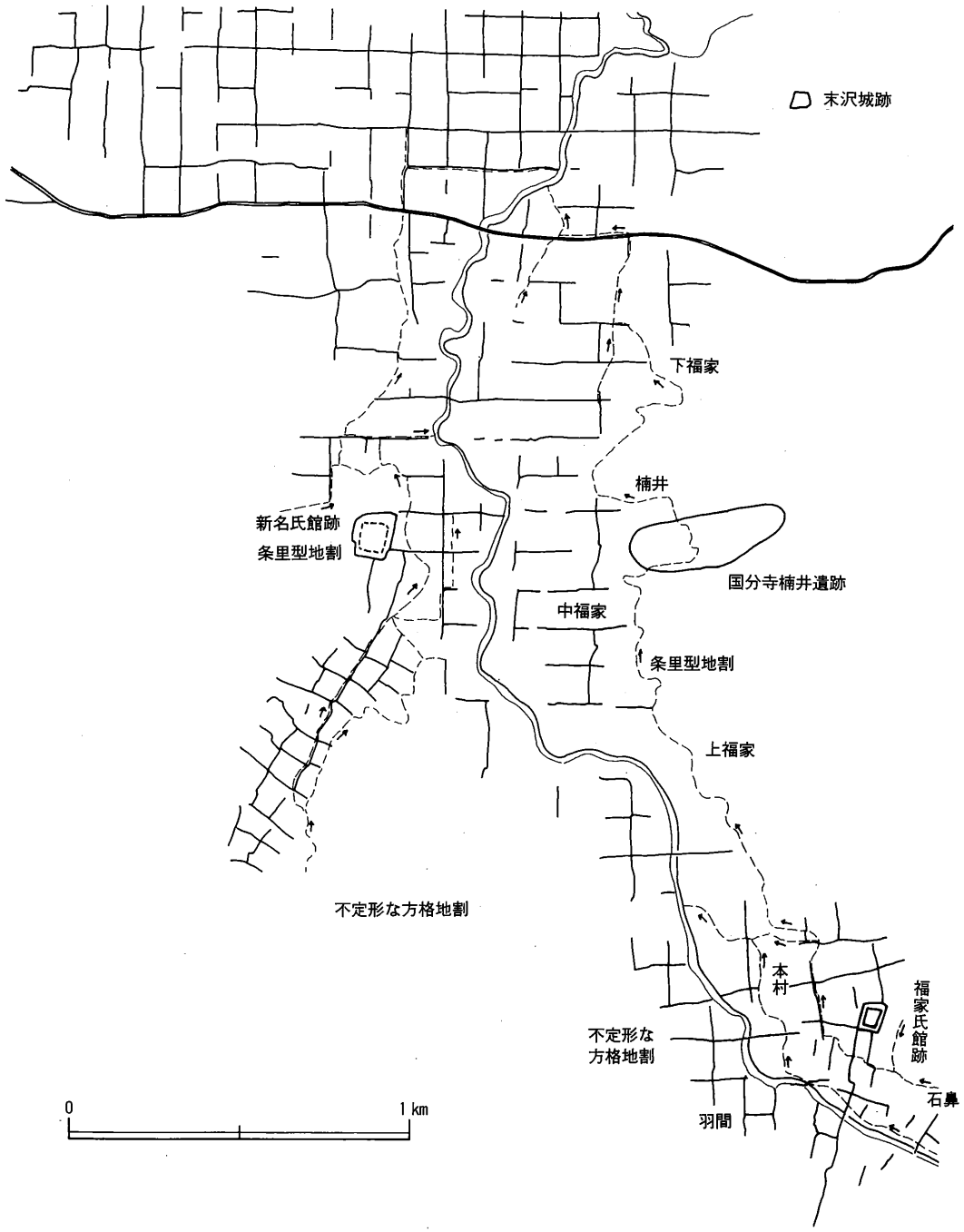
その後の新居郷における讃岐藤氏の動向は明らかではないが，羽床氏が讃岐藤氏の惣領家だったとされる。ところが承久の乱において，羽床重基が後鳥羽上皇側に参じたために所領は没収，惣領の地位は香西氏に移ったという（「綾氏系図」）。以後香西氏は，佐料（高松市鬼無町）に居館を置き在地支配を推し進め，15世紀末葉頃には「大分限者」といわれる国人領主に成長していく(6)。

羽床氏や香西氏の間にあって，新居郷の在地勢力は複雑に錯綜していたとみられる。鎌倉～室町時代における新居郷の小領主については，江戸時代に成立し史料的な信憑性に不

確かな要素の多い『南海通記』や『香西記』・『玉藻集』などの文献から憶測するしかない。『南海通記』の「阿波讃岐兵將居城記」によると，天文年間（1532～1555年）の香西氏配下として福家城に福家氏，新居城に新居氏，また鷲ノ峯城に新名氏がいたと記されている。また同書には，金倉合戦（天正３年：1575）の香西佳清の軍勢に福家氏の名がみえる。さらに香西氏に対抗する羽床氏が「香西幕下」の新名内膳・福家七郎などと「國中ニ事アル時互ニ見放スベカラズト」約したという。『南海通記』のこれらの記述から，戦国期には福家・新居・新名などの小領主が香西氏の支配下にあったことはほぼ間違いのないことと思われる。福家七郎は天正７年（1579）に香西氏によって謀殺されるが，『玉藻集』によればこの時に福家城も攻め落とされたという。また新名氏は同年の長宗我部軍による進攻を受けて，羽床氏などとともに降伏した。

これに先行する明確な史料はないが，『香西記』所収の系図によると讃岐藤原氏として『吾妻鏡』にみえる「藤大夫資光」の子資幸が福家氏の祖とされている。また『玉藻集』所収の系図には，資幸の子資基が福家氏の祖であるとされている。資幸・資基は父子であるため，どちらが福家氏の祖であるかはここでは大きな問題ではなく，系譜上鎌倉時代初期の讃岐藤原氏に福家氏の出自が求められる点が重要である。このことは後に福家七郎が羽床・香西両氏の間にあって「羽床、福家、香西同姓ナレバ何ヲ敵トスベキヤウナケレバ」といったことと合致する。また『玉藻集』・『香西記』の系図によると，福家氏は鎌倉時代初期に羽床氏と，室町時代（15世紀前半）には香西氏と姻戚関係にあったとされる。これらの系譜が事実であるかどうかは，なお慎重な検討が要求されるが，少なくとも鎌倉・室町時代のいずれかの時期に，香西・羽床氏という２大勢力の間で小領主が興り，これらの領主との間に姻戚関係を通じて同族意識が形成されていたことを示していよう。

なお福家氏の支配領域に関しては，資幸が福家・陶・畑田の地を分封され，福家に居館を構えたとも理解されている(7)。しかし既にみたように，陶の地に設定された陶保は室町時代を通じて徐々に代官職香西氏の強い支配下に置かれるようになり，15世紀中葉には報恩院から香西元資による横領を訴えられている。また，香西氏による陶保代官職は14世紀末葉～15世紀初頭にまで遡るとされている。陶保代官職は，南条山西分・仁尾浦・坂田郷の各代官職とともに，15世紀代に香西氏が幕府・守護権力に依存しながら領主的な支配を進める重要な拠り所とみられる。したがって，福家氏が陶にどの程度影響力を保持し得たか疑問である。また『南海通記』には，畑田に城はもたないものの土豪的な有力階層が存在したことを示唆する記述がある。このことから考えると，福家氏の支配領域を陶・畑



第５図　福家周辺の地割と用水路

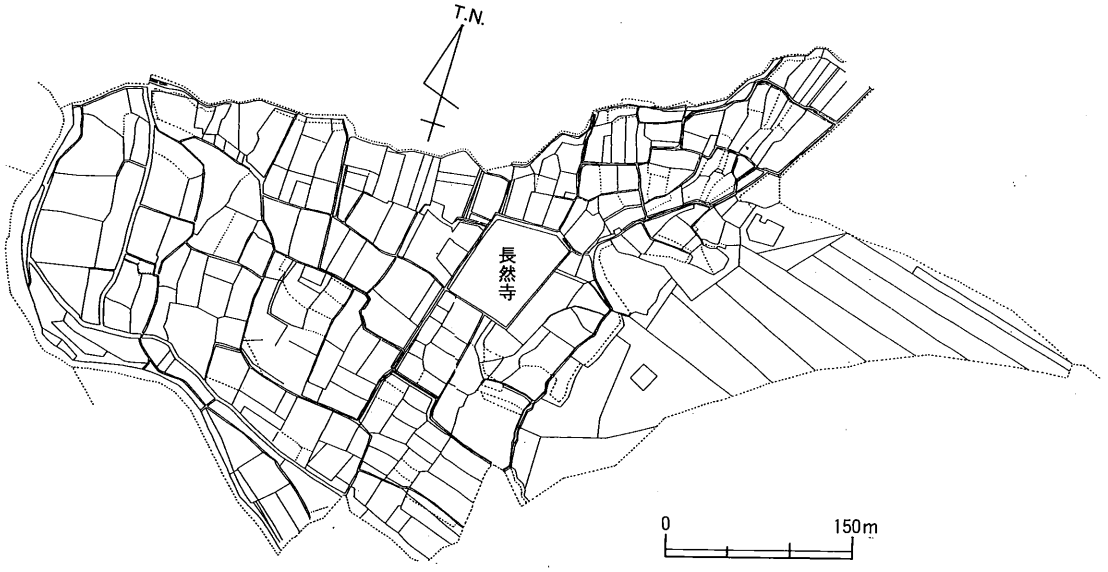
田まで及ぼして想定することは困難であるといえる。

現在残る「福家」地名の範囲や用水網の在り方から，福家氏の支配領域について考えてみよう。大字「福家」とそれを細分する字「上福家」「中福家」「下福家」「本村」「石鼻」

「羽間」「楠井」の範囲と，現在の用水網を第5図に示した。これをみると，本津川右岸の耕地の大半は，同じ用水路を基幹として配水されていることがわかる。そしてその用水網の範囲は，本津川右岸部の「福家」の範囲と一致する。本津川左岸の「羽間」は，火ノ山北東麓の丘陵が迫るために一貫した水路網は形成されず，また耕地開発もかなり遅れると判断される。このように福家氏は，堂山西麓の本津川右岸北半の条里型地割の及ぶ平野部と，南半の山間部を中心とした狭小な地域を生産基盤にしていたとみるのが妥当であろう。

さて，在地における有力階層の存在を具体的に示す中世居館をみると，福家の「福家氏館跡」，新居の「新居氏屋敷跡」（土居の宮）や末沢城跡，新名の「新名氏館跡」があるとされるが，考古学的に実態は十分明らかにされているわけではない。新名氏館跡は，「しろいずみ（城泉？）」「蔵前」「濠下」「石橋」などの地元での呼称を伴う，鷲ノ山北東麓の低丘陵上が想定されている。ただし想定地域での具体的な遺構については明瞭ではない。上記地名の位置や空中写真での観察から，丘陵先端部に近いところの堀り割り状の地形改変部にかろうじてその可能性が指摘できる程度である。また福家氏館跡は，本津川右岸の現・長然寺付近に想定されている。現地踏査や明治期の地籍図（更正図），また空中写真での所見から，寺域内の南北約45m，東西約40mの範囲を取り囲む幅約10～20mの空堀の存在が指摘できる。また，長然寺の西側には「しろやしき（城屋敷？）」，南東約240mの付近には「しろ（城？）」の呼び名が伝えられており，ことに前者の地点にはかつて堀状の水溜めが存在したという[8]。付近は条里型地割が及ばず，地形に制約されつつも1町四方を指向したような不定形な方格地割が認められるが，館跡を北東隅とする東西約230m，南北約210mの範囲には，この方格地割とも異なる方位（N－12°－E前後）をもつ地割が読み取れる。地割内を貫く東西方向と南北方向の道路は，館跡空堀の南西隅を起点としており，また鍵の手状に屈折することから，館跡を基準に設定された可能性が提示できる。付近に「本村北」「本村南」という地名が存在することや，居館西の「城屋敷」という呼称を併せ考えると，この地割は館跡に伴う諸階層の居住した集落を一定度反映する可能性がある。

なお，福家氏館跡の東約200mの丘陵頂部には，福家山城跡が存在する。縦堀や土塁と考えられる遺構が存在するというが，詳細は不明である。福家氏館跡とは小規模な谷筋を隔てているが，館跡北東部とは山道で繋がっており，有事の際にはここに籠もったとみられる。また，これら居館や山城の背後の堂山山頂に，もう一つ山城（堂山城跡）がある。堂山城跡は山頂部に30×20mの平坦地をもち，その周囲に空堀や小規模な曲輪をもつことが



第6図　福家氏館跡（長然寺）とその周辺（更正図に加筆）

確認されている。両城跡ともに館跡同様，同時期の山城としては山頂部のみを占地した極めて小型の城郭であり，相互の関係は明らかではない。また，新名氏館跡も背後の鷲ノ山に山城（鷲ノ山城跡）をもつといい，『南海治乱記』の「鷲ノ峯城」にあたるとみられるが，山頂の平坦部に遺構は確認されていない。居館・城郭遺構については，綿密な現地調査による構造（縄張り）の復元や，時期的な変遷過程の検討が不可欠であり，現状では考古・歴史資料として適正に扱える資料に乏しいといえる。しかしながらこの点が明らかになれば，福家氏館跡や堂山城跡・福家山城跡の形態・規模は，小地域を基盤とする在地領主としての福家氏の姿をよく示す好資料となろう。

中世の有力寺院としては，国分寺・鷲峰寺・白峯寺などが存在する。国分寺は出土した瓦から，建立後も継続的な維持が行われていたことがわかり，鎌倉時代末期には講堂の跡地に新和様の本堂が建てられる。また，鷲ノ山東麓に柏原堂（鷲峯寺）が建立される。これらの造寺事業は，鎌倉時代における律宗の改革・復興運動の一環として行われたもので，両寺院とも奈良西大寺と本末関係を結んでいる。また，白峯寺は崇徳院の墓寺として中世に興隆した。建長5年（1253）阿野郡松山郷の一部が寄進され，応永21年（1414）には後小松院から頓証寺の勅額が下賜されている(9)。以上の真言系寺院の隆盛は，近世にまで続いたようであるが，寺領拡大などの手段によって在地の支配関係に強い影響力をもち得たかどうかは明らかでない。この他，多聞寺跡は福家氏の建立と伝えられ，現在は溜

池となっている。

以上を踏まえて国分寺楠井遺跡をみると，位置する地名「楠井」が「中福家」と「下福家」との間にあたることから，その成立にあたっては用水網で繋がる大字「福家」地域を積極的に開発した在地勢力福家氏との関わりの有無や程度が問題となってくる。このことは，限定された今回の調査成果のみでは明らかにし得ず，文献史学からのアプローチも必要である。今後の重要な課題といえよう。

註(1) 「中間西井坪遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』平成２年度　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団高松建設局　1991

(2) 「国分寺六ツ目遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』平成元年度　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団高松建設局　1990

(3) 「国分寺下日名代遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』平成元年度　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団高松建設局　1990

(4) 「国分寺六ツ目古墳」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』平成元年度　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団高松建設局　1990

(5) 渡部明夫「四国の刳抜式石棺」『古代文化』第46巻第６号　1994

(6) 香川県『香川県史』第２巻　通史編　中世　四国新聞社　1989

(7) 秋山忠・沢井静芳「福家城」『日本城郭大系』15　香川　新人物往来社　19

(8) 地元での聞き取りによる（1994年10月）。

(9) 唐木祐志「中世の宗教と文化」『香川県史』第２巻　通史編　中世　四国新聞社　1989

第３章　調査の成果

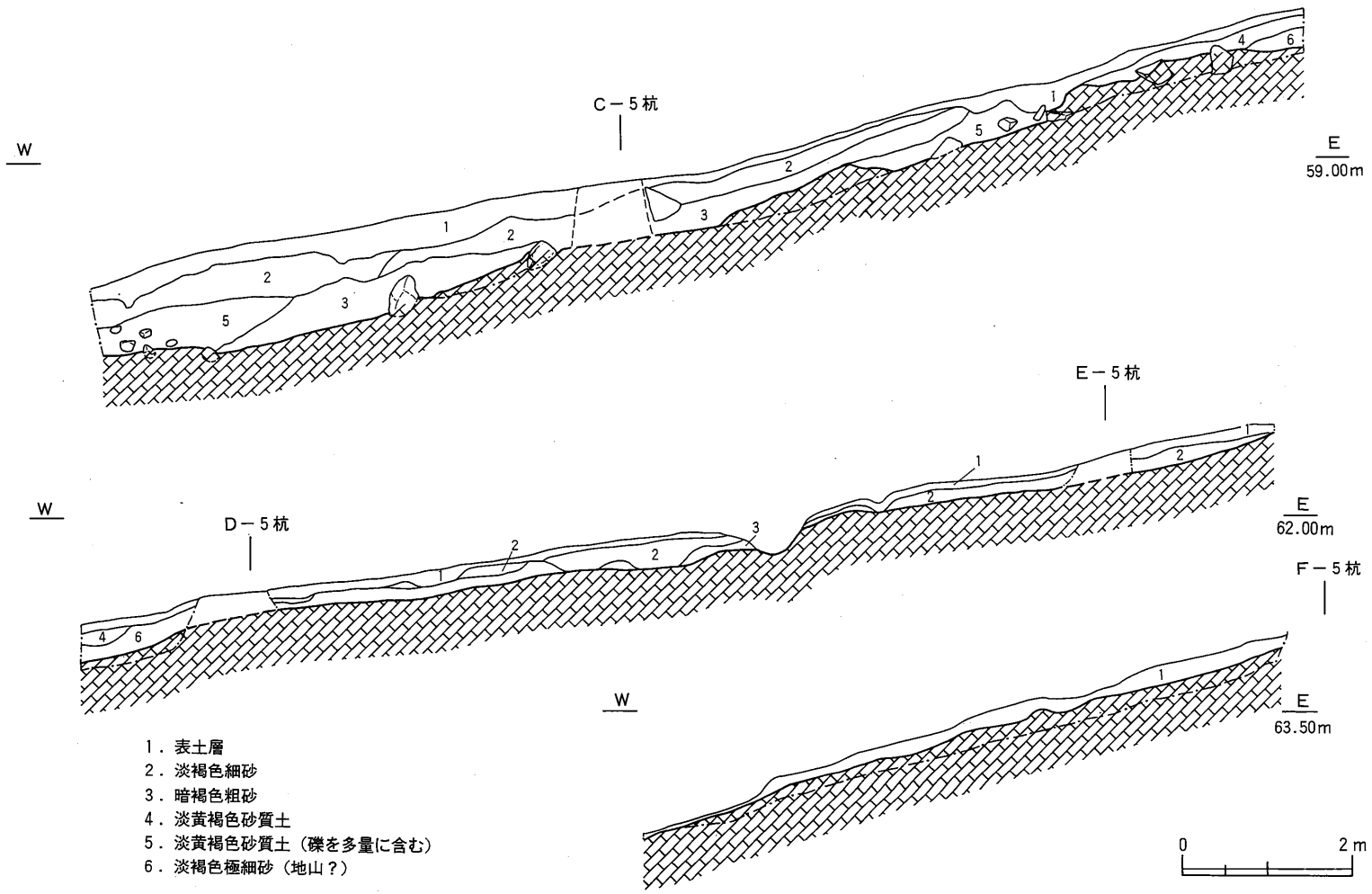
第１節　地形と層序

遺跡周辺の地形をやや詳細にみておこう。既に述べたように，遺跡は堂山西麓に延びる尾根斜面に位置している。この尾根筋は南北に２つ派生しており，間の谷筋に面した斜面に遺構が分布する。尾根筋に対する地元の呼称がないため，報文中では遺構の分布する谷部を中心に北側尾根・南側尾根と称することにする。北側尾根は谷底との高低差が低く，宅地による削平や農地の開墾が著しい。調査区外の西側でも幅広く低い隆起を呈したまま下降する。これに対して南側尾根は，比高差も大きくかなり急峻であり，調査区の東側の尾根上方では，幕末頃に志士のたてこもった堂宇が存在したとの伝承もある。また，南側尾根には花崗岩の岩盤が露出している箇所があり，谷底の転石の多くは南側尾根から崩落したものとみられる。

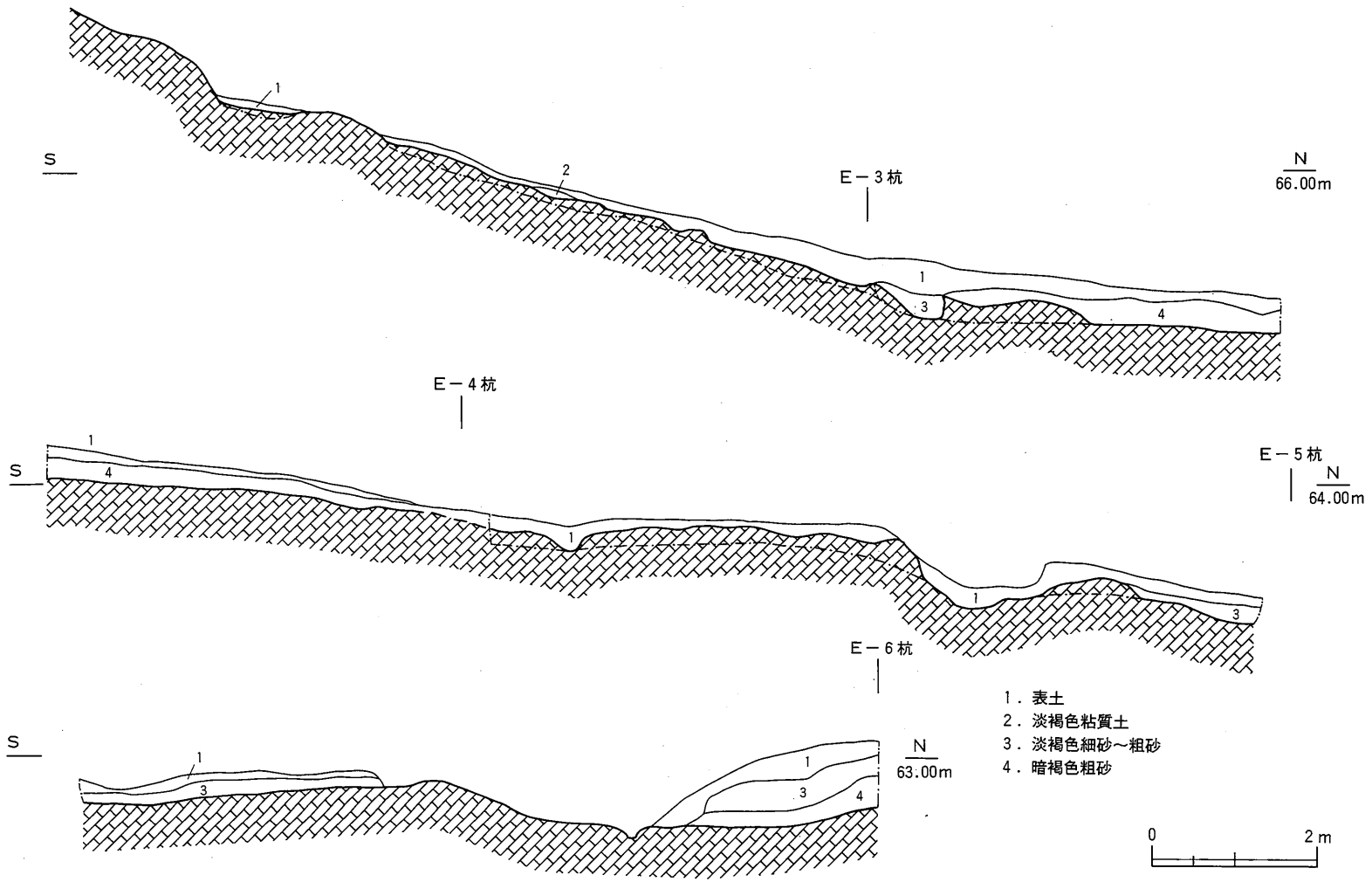
この２本の尾根に挟まれた谷部は，調査区内では南北幅約40ｍの緩斜面となっている。調査区外の東側ではこの緩斜面はさらに緩くなっており，南北約30ｍ，東西約50ｍの平坦地状を呈する。そこから上方（東）は，堂山中腹の急斜面となる。谷底中央には水がないが，雨天後には渓流となり，調査中には１日の降雨で１週間以上流れることもあった。

遺構の大半は，このような谷部に接した緩斜面や北側尾根斜面に位置しており，南側尾根稜線上には遺構が認められない。いずれにしても，複数の建物群から構成されるような一般集落の立地とはかなり異質な状況であるといえよう。

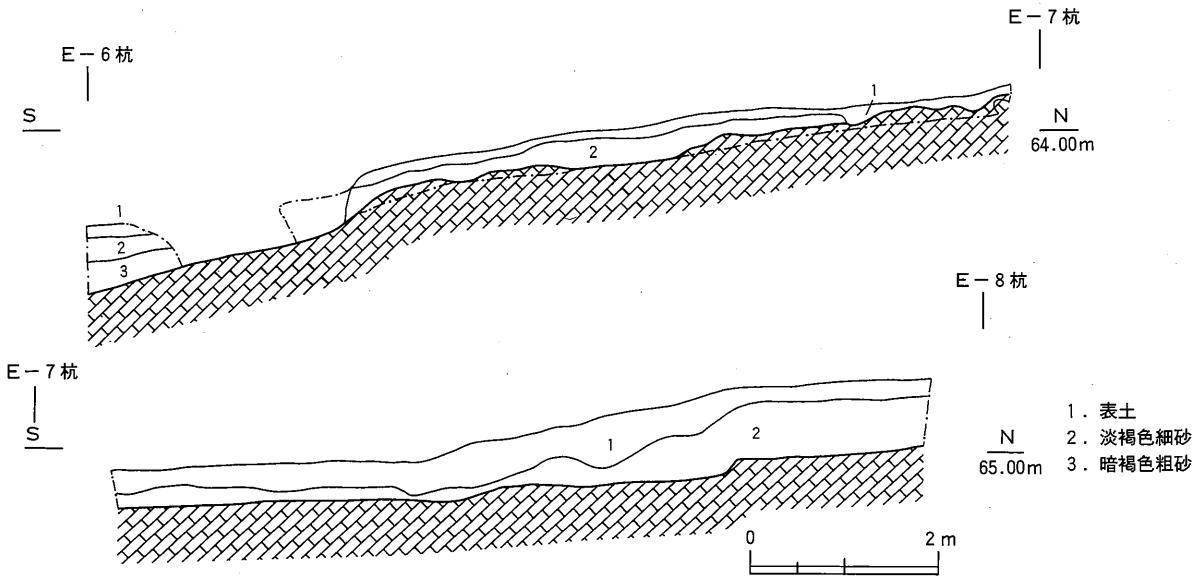
付近は花崗岩の風化土を基盤層としており，その上を淡褐色細砂と暗褐色粗砂が覆っている。これらは風化土が再堆積したものであるため，遺構の検出や遺構面の認定が困難な場所もあった。暗褐色粗砂層にはマンガンが含まれており，地下水位が比較的高いことを窺わせる。谷部ほどこの土層は厚く堆積しており，Ｅ－５区付近では約２ｍの層厚があった。また土器溜り１では，転石を伴う暗褐色砂層（第Ⅱ層）が堆積しており，遺物の前後関係を判断する重要な知見をもたらした。北側尾根上では畑の造成による土層の攪乱が著しく，また基盤層までの深さも極めて浅い。



第7図　東西方向（5ライン）土層図



第８図　南北方向（Ｅライン）土層図(1)



第９図　南北方向（Ｅライン）土層図(2)

第2節　遺構

1. 古墳時代後期の遺構

(1) 遺構の分布

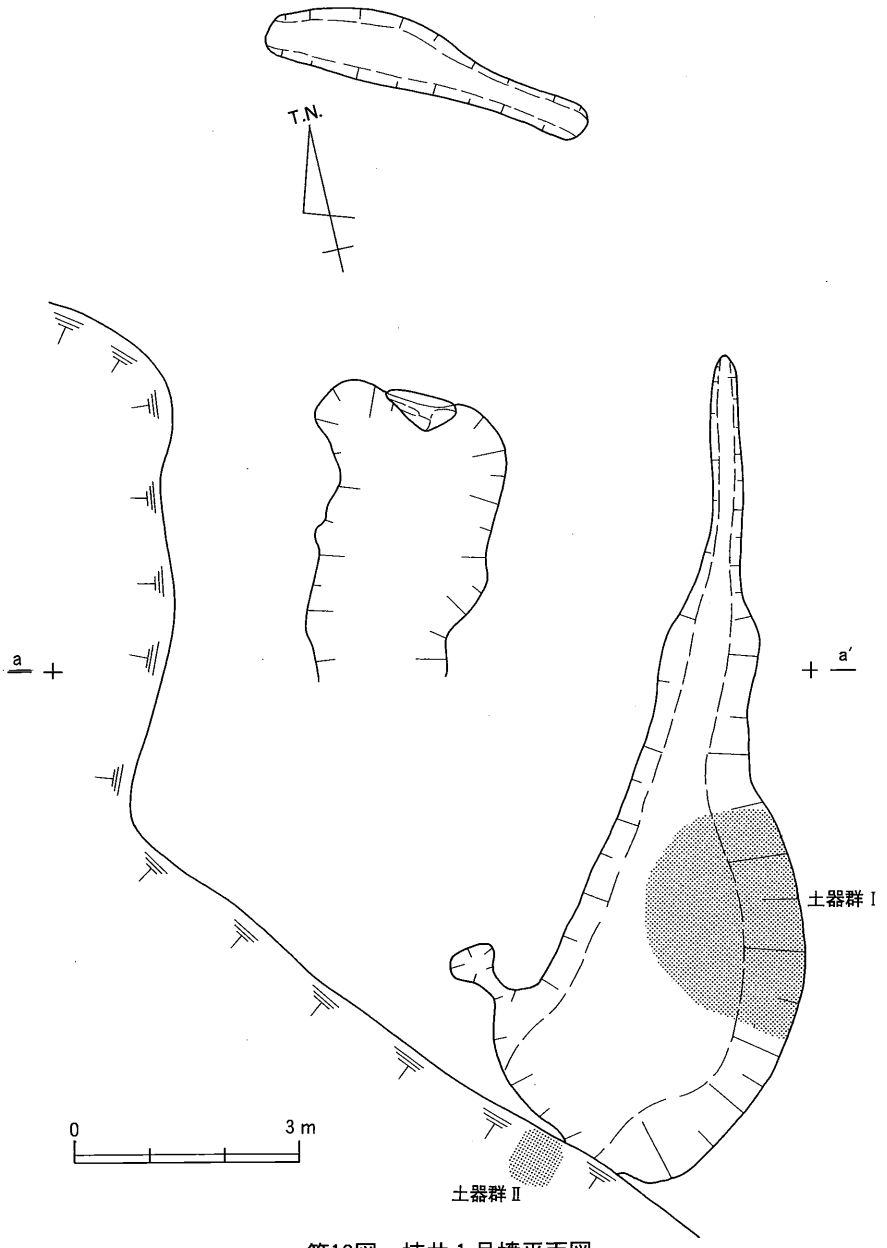
既に予備調査の段階で，⑤トレンチから古墳時代後期の須恵器蓋杯・甕などの破片が数点出土していたことから，付近に古墳の存在が予測された。このため当初は，谷底に近い緩斜面に散在する花崗岩の集中部（G－5区付近）に留意して調査を進めたが，この花崗岩は自然の転石であることが判明した。結果的には谷の北側尾根上（F－7・8区）において破壊された横穴式石室の痕跡と，周溝部を検出した。この古墳検出に至るまで，いくつかの失敗があったことは，第1章で述べたとおりである。

なお，C－2区付近や，G－5区付近においても須恵器片が数点出土していることは，付近に別の後期古墳の存在することを示唆するものである。したがって，今後周辺で新規に古墳が検出されることも考慮して，F－7・8区の古墳を楠井1号墳と呼称する。

楠井1号墳付近は，かつて開墾されて農地となっていたこともあり，調査着手前の現地形からでは，その存在を全く窺い知ることができなかった。石室や墳丘は削平され，ほとんど原形を留めていなかったが，これは中世の掘立柱建物などの造成によって破壊されたためだと考えられる。立地をみると，堂山から延びてきた北側尾根の傾斜が緩くなる変換点にあたり，尾根筋頂部からはやや谷側（南側）に下ったところに築造されている。

(2) 墳丘と周溝

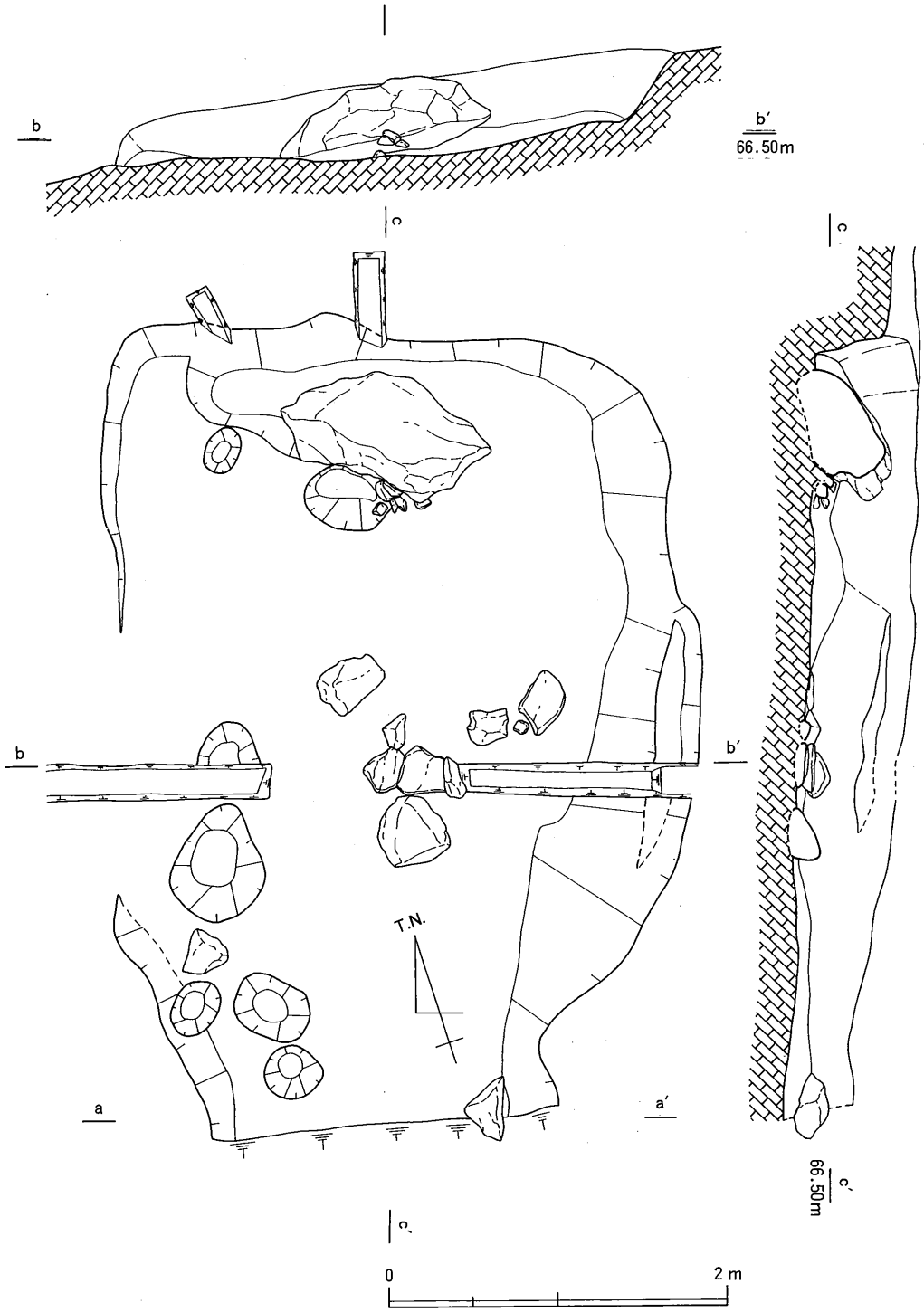
墳丘東側と北側で周溝を検出した。東側周溝は北側ほど幅が狭く，深さも浅くなる。これは墳丘の北東側に尾根筋が迫る立地に規制されたためであろう。周溝の底面ラインをみると，東側・北側ともに直線的である。特に東側周溝は石室の主軸とほぼ平行して延びており，南端部で西へ屈曲する。このことから，墳丘の形状は方墳であった可能性がある。またその規模は，北側周溝と東側周溝南端屈曲部との間で計測すると，南北長約12～13mとなる。一方東西長であるが，東側周溝と石室中軸との距離は約4mしかなく，かなり短くなることも考えられる。しかし，通常の斜面立地古墳の墳丘をみると，斜面下方側の墳丘は盛土によるために，斜面上方側よりも石室との間隔が大きくなることが多い。このことから，斜面下方側にあたる西側墳丘端と石室中軸との距離は，4m以上になる可能性が



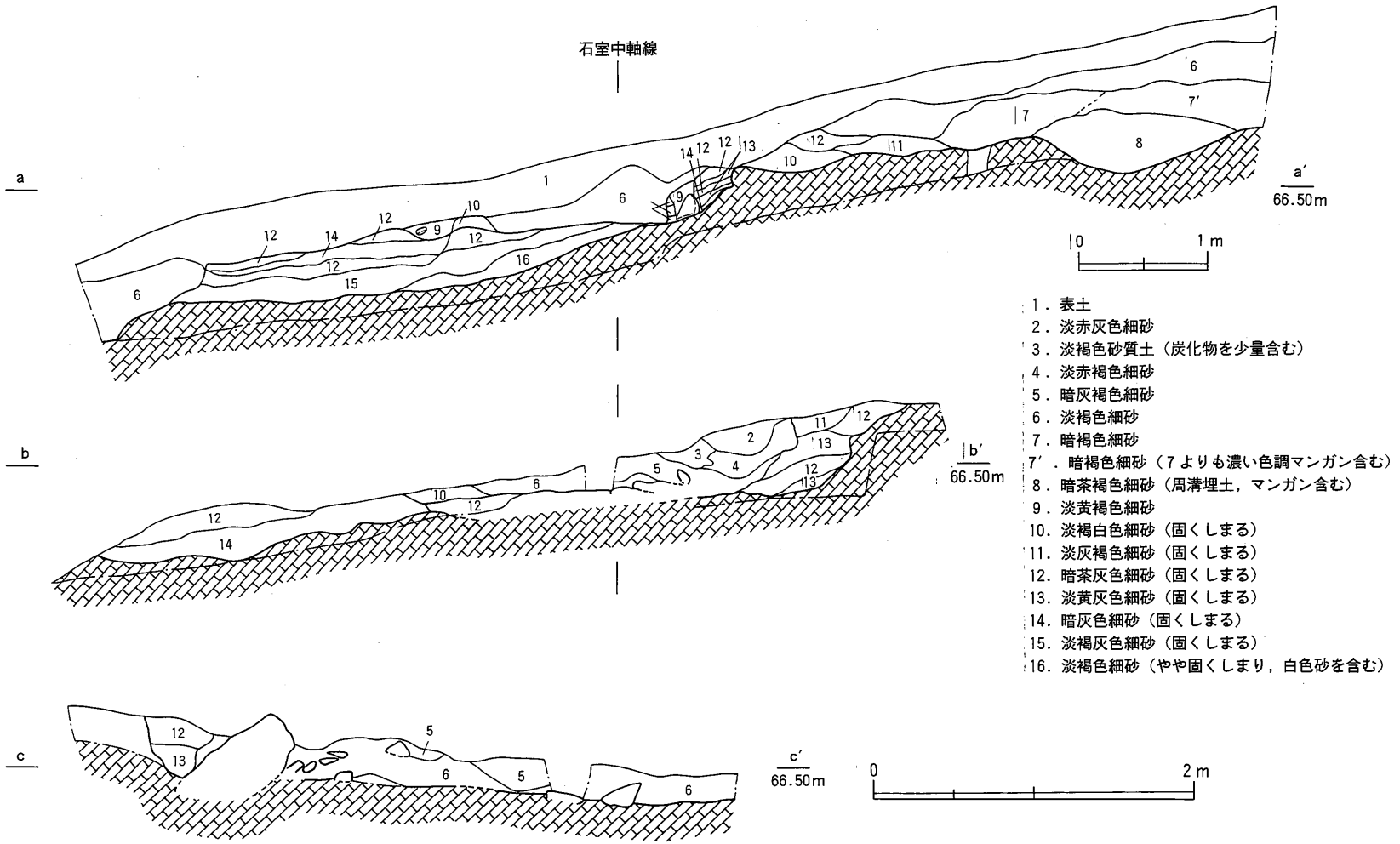
第10図　楠井１号墳平面図

強く，墳丘の東西長は10m前後になることが考えられる。

墳丘は，遺存した基底部の状況から，石室の東側と北側部分は地山削り出しによって基底部（周溝）を形成し，その上に盛土を行っていることがわかる。また，西側・南側は傾斜する地山上に固くしまった細砂を盛って石室構築面を作り，その上にさらにきめ細かくしまった砂を版築状の互層に盛っている。



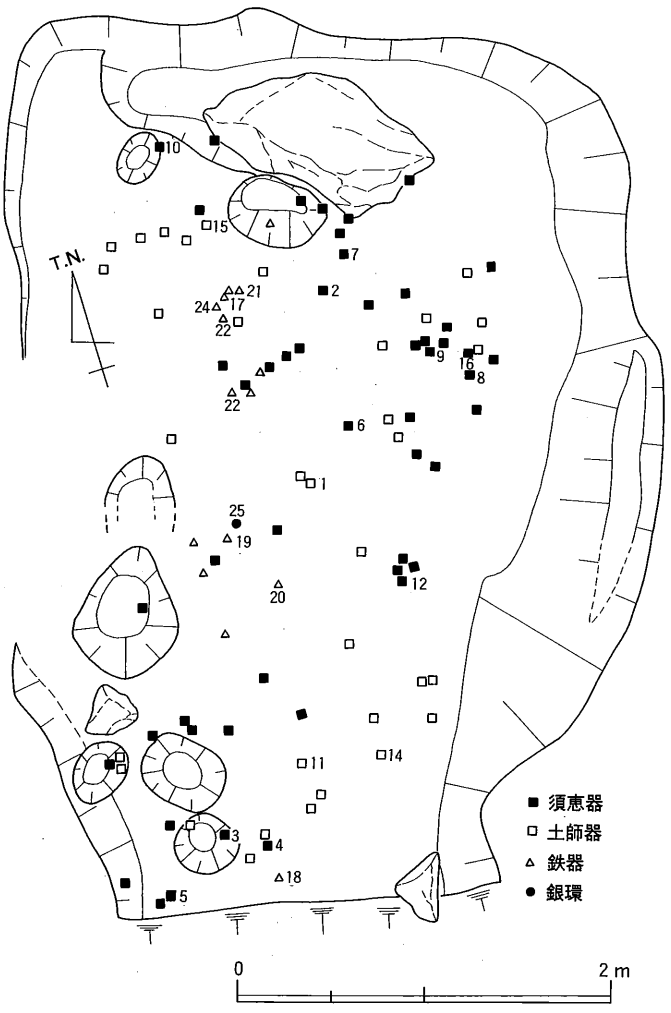
第11図　楠井１号墳横穴式石室平・断面図



第12図　楠井1号墳・墳丘・石室土層図

(3) 周溝内土器群

東側周溝南半部の２ヶ所で，土器の集中する部分が検出された。まず南東部コーナーで須恵器大甕片の集中する部分（土器群Ⅰ）があった。大甕片は完形に復元できなかったが，いずれも同一個体と思われ，また限定された範囲で出土したことから，本来周溝内に据え置かれていた可能性がある。この大甕から北東に約3.5mの周溝内では，須恵器杯蓋・杯身・無蓋長脚高杯・無蓋短脚高杯・台付椀・長頸壺・平瓶などの破片が出土した（土器群Ⅱ）。後述するように，蓋杯・高杯とも最低２時期の須恵器がセットとなっており，さらに奈良時代の須恵器も少量認められることから，土器群Ⅱは一時期ではなく，時期差をもって置かれたと考えられる。



第13図　横穴式石室床面遺物出土状況

(4) 横穴式石室

石室の石積みは，ほとんどが削平によって除去されていた。わずかに玄室奥壁部の鏡石と右側壁基底石の一部，羨道左側壁基底石の一部などが遺存するのみである。残された石材と石材の抜き取り痕から，石室の形態を推測すると，平面形は右片袖の可能性がある。規模は全長４m以上，玄室長3.2m・同幅1.8m程度に復元できる。

玄室床面には，拳大以下の大きさの礫（花崗岩）が散在していたことから，本来礫床をもっていたことがわかる。礫群に混ざって鉄

器片や土師器片・須恵器片，あるいは銀環が出土した。ただし，遺物の出土レベルには若干の上下の開きがあり，中世土器も混在する。このことから，石室の破壊時に攪乱を受けた可能性が高い。

奥壁前面の床面では，灰や焼土が充満したピットが検出された。また石材の抜き取り痕とは思えないピットがあり，墳丘検出面のピットと等間隔で並ぶ。したがってこれらのピットは，古墳の破壊後に掘り込まれたものと判断できる。後述するようにこれらは中世土器生産に伴うものとみられ，操業にあたって古墳を壊して建物に伴う平坦面を確保したと考えられる。

2. 中世の遺構

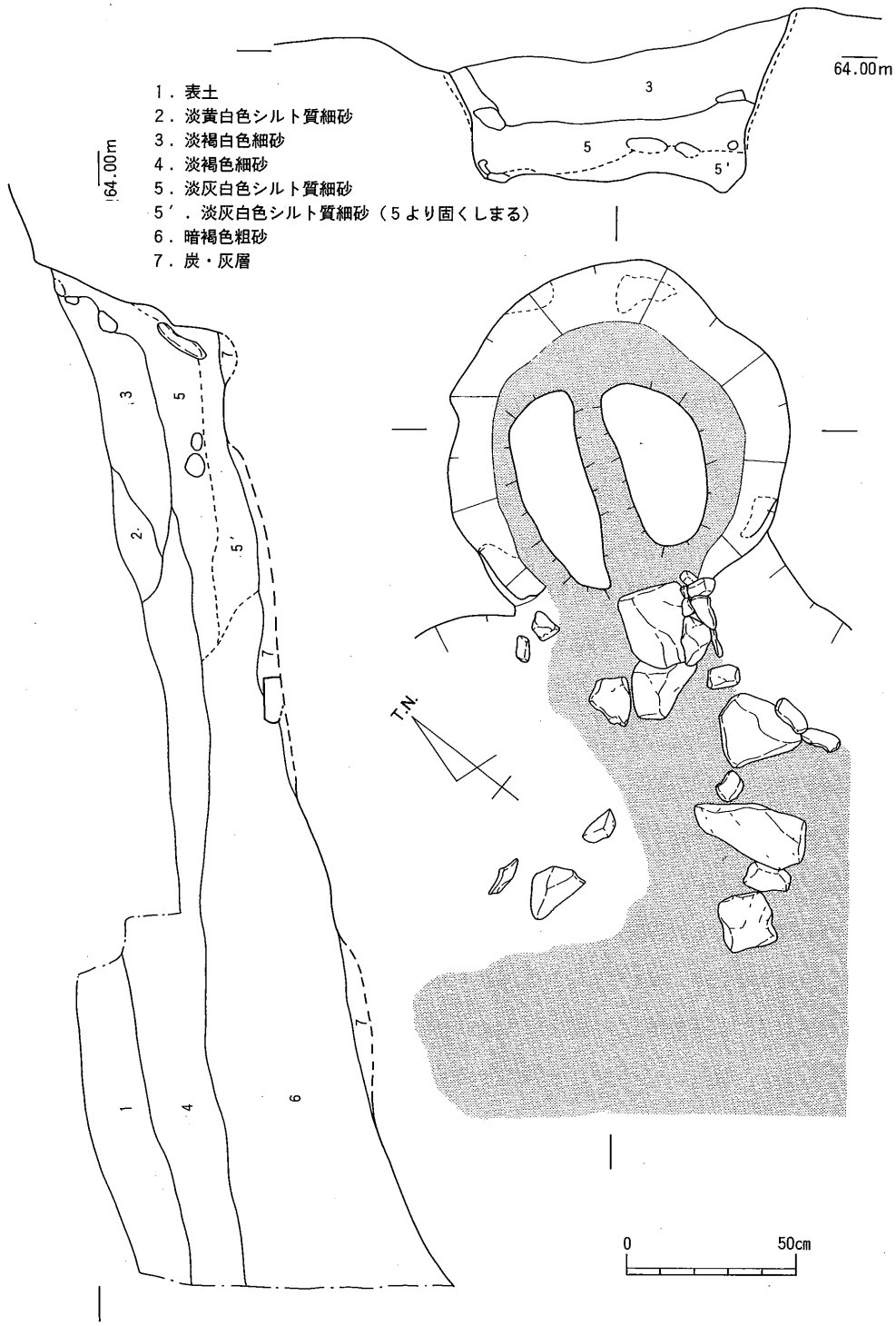
(1) 遺構の分布

中世の遺構は，窯跡3基・土器溜り3箇所・溝2条・掘立柱建物2棟・ピット27個・土坑2基・火葬施設と考えられる焼土坑1基・土壙墓1基である。これらは調査区の南西部と北東部に偏在する傾向が認められ，比較的平坦で傾斜も緩やかな中央部では，部分的な焼土や灰の溜り以外，ほとんど検出できなかった。これらの遺構が全て窯業関連遺構とは断定できないが，南西部（A－1～2区・B－1～3区・C－2～4区）では，2基の窯跡と2箇所の土器溜りに囲まれた平坦地に掘立柱建物やピットが集中しており，窯と建物（工房？）のセットである可能性が高い。北東部（F－5～8区・G－4～8区）ではやや遺構の集中度が散漫であるが，比較的急な谷底に接した斜面に窯跡と土器溜りがあり，その後背部の緩斜面に掘立柱建物が存在している。窯跡の前面が谷底で建物の立地には不適なことを考えると，やはり北東部でも窯と建物がセットをなしている可能性がある。

(2) 窯跡

［1号窯跡（第14～16図）］

F－6区に位置する窯跡である。既に述べたように，谷底は5ラインを中心に東西に延びているが，1号窯跡はこの谷底から北側尾根に若干上がった斜面に築かれている。主軸は斜面の等高線に直交する方向で設定されており，N－37°－Eを測る。隣接する谷底との比高差は約1.3mである。谷底に近い地点に立地するため，窯体掘削中に湧水が若干認められた。



第14図　1号窯跡灰層分布範囲と土層

上面を検出した段階では，窯体から約１ｍ下方で2.5ｍ×1.0ｍの範囲に広がる灰層が検出されたが，窯体を完掘すると灰層の広がりは前庭部と焚口にまで及んでいることが判明した。このことから灰原は本来，焚口から斜面下方に向かって扇形に広がっていたと考えられる。なお灰原から遺物はほとんど出土しなかった。

窯体内の埋土は，淡褐白色細砂層（上層）と淡灰白色シルト質細砂（下層）とに大別できる。上層には窯壁片はほとんど含まれておらず，下層より若干出土したのにとどまる。また窯体前面の包含層との関係をみると，包含層（下層）・窯体内埋土（下層）・包含層（上層）・窯体内埋土（上層）の順に堆積したことがわかる。したがって廃窯後一定期間窯体がオープンな状態にあり，その間に包含層（下層）が窯前面に厚く堆積したことが考えられる。

窯体は，平面円形で擂鉢状を呈する焼成部の下方に焚口をもち，一見するといわゆる「煙管状窯」と呼ばれるものに近い形態の窯である。窯体は地山を掘り込んで構築されており，部分的な補修以外は貼り壁ではない。

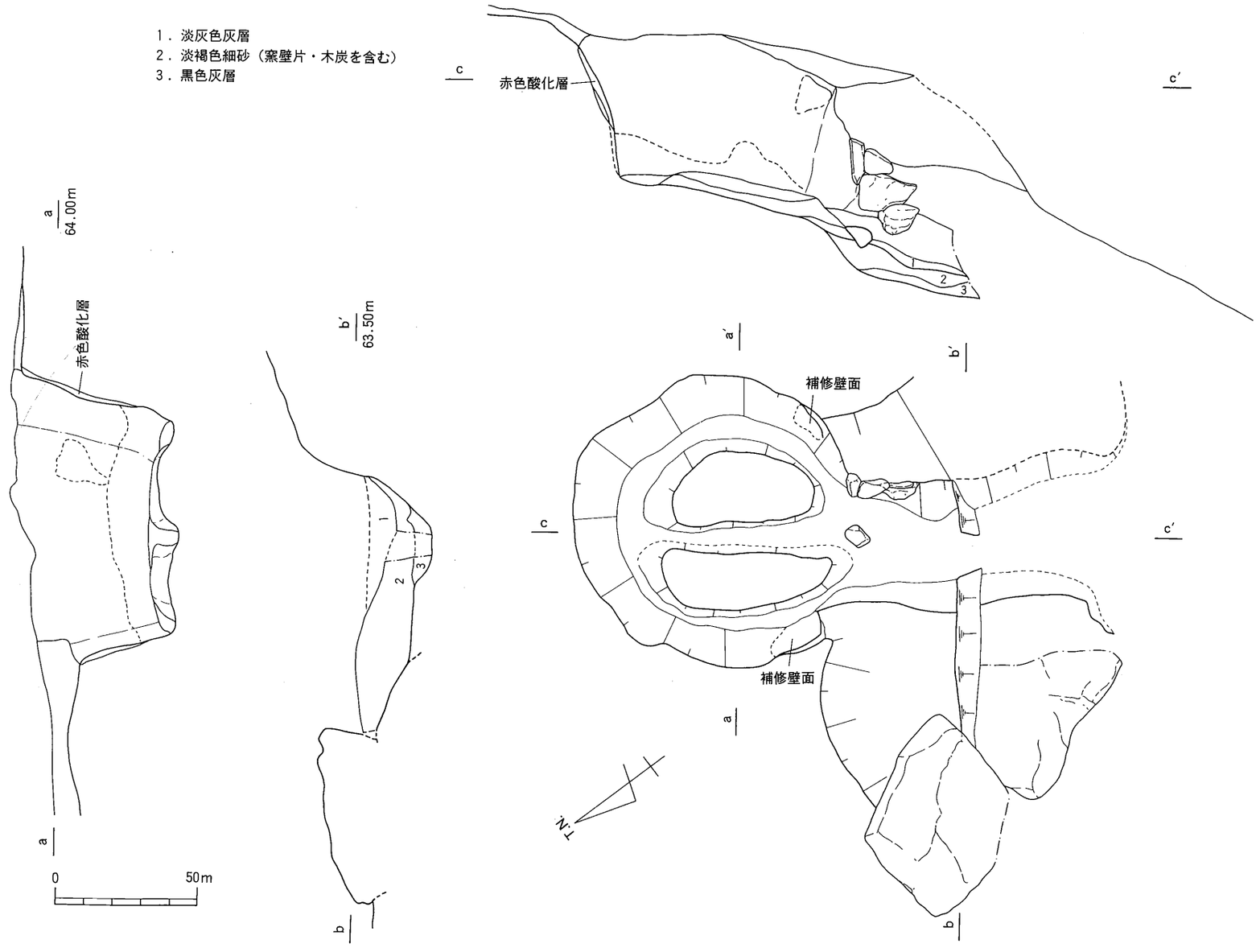
規模は全長1.92ｍ，焼成部上面直径0.90～1.02ｍ・同床面直径0.74～0.85ｍ・同高0.50～0.57ｍ，焚口（燃焼部）長0.27ｍ・同幅0.42ｍ，前庭部長0.75ｍ・同幅0.45ｍを測る。また焼成部床面の傾斜は14°である。

焼成部壁面は下半部がほぼ垂直に立ち上がり，上半部は外開きになっている。壁面は約２㎝の厚さで黄褐色～赤色酸化層を形成しているが，さほど強くは焼け締まっていない。特に下半部は極めて弱い被熱状況であり，床面に接した部分では酸化層は認められない。部分的に窯壁が剝離した箇所があるが，これは廃窯後の埋没過程で生じたようである。また焚口に近い壁面では，酸化層が２枚認められる。スサの混入は観察できないものの，粘土の貼り足しによる補修箇所とみなしてよかろう。

焼成部床面は，壁沿いの部分と中軸線上の部分とに幅５～20㎝，深さ５～20㎝の溝を巡らせており，相対的に床面を高くしたような構造となっている。溝には灰層が堆積していた。

焚口（燃焼部）壁面は，地山を垂直に掘り込んで花崗岩の自然礫を貼り付けて造られている。南側壁面は遺存状態が良好であるが，北側壁面はほとんどが崩壊している。また焚口から前庭部にかけて同様の自然礫が遊離した状態で相当量出土していることから，焚口上半部も礫を組みその間に粘土を塗り込んで構築されていたと考えられる。

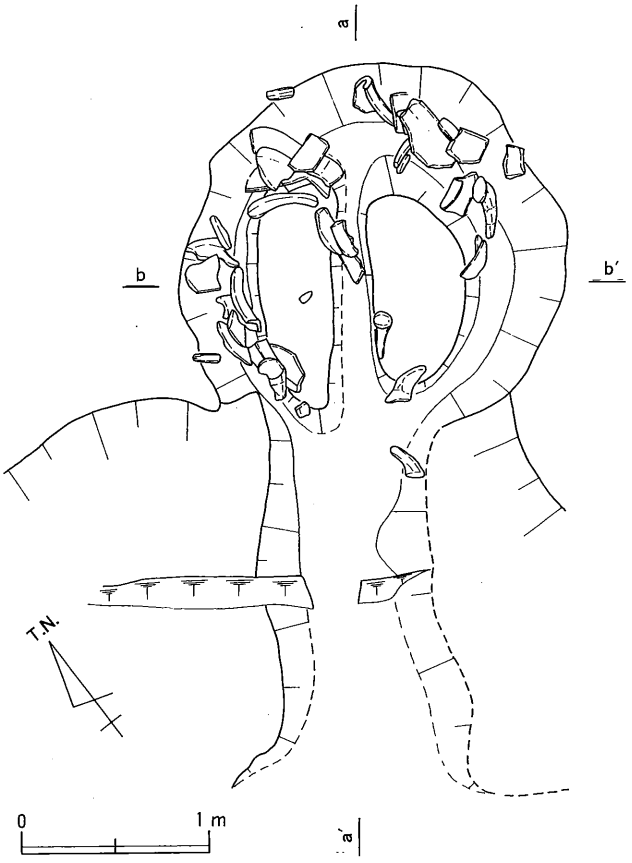
焚口床面は２面認められ，第１次床面と第２次床面との間には，灰層とその上に踏み固



第15図　1号窯跡窯体平・断面図

められた淡褐色細砂層が介在する。第１次床面は焼成部床面から明瞭な段差をもって下がっている。床面平均傾斜は約13°，段差部分での傾斜は48°である。

窯体内の遺物は，埋土上層からはほとんど出土せず，大半が下層の下位で床面からやや遊離した状態で遺存していた。遺物はいずれも破片であり，窯詰めなどの状況がわかる良好な資料は存在しない。しかし遺物には，体部の直径が50～60cmに達するとみられる甕があり，窯の規模を考慮するならば，この窯で焼成されたのか疑問であり，転用された窯道具の可能性もある。

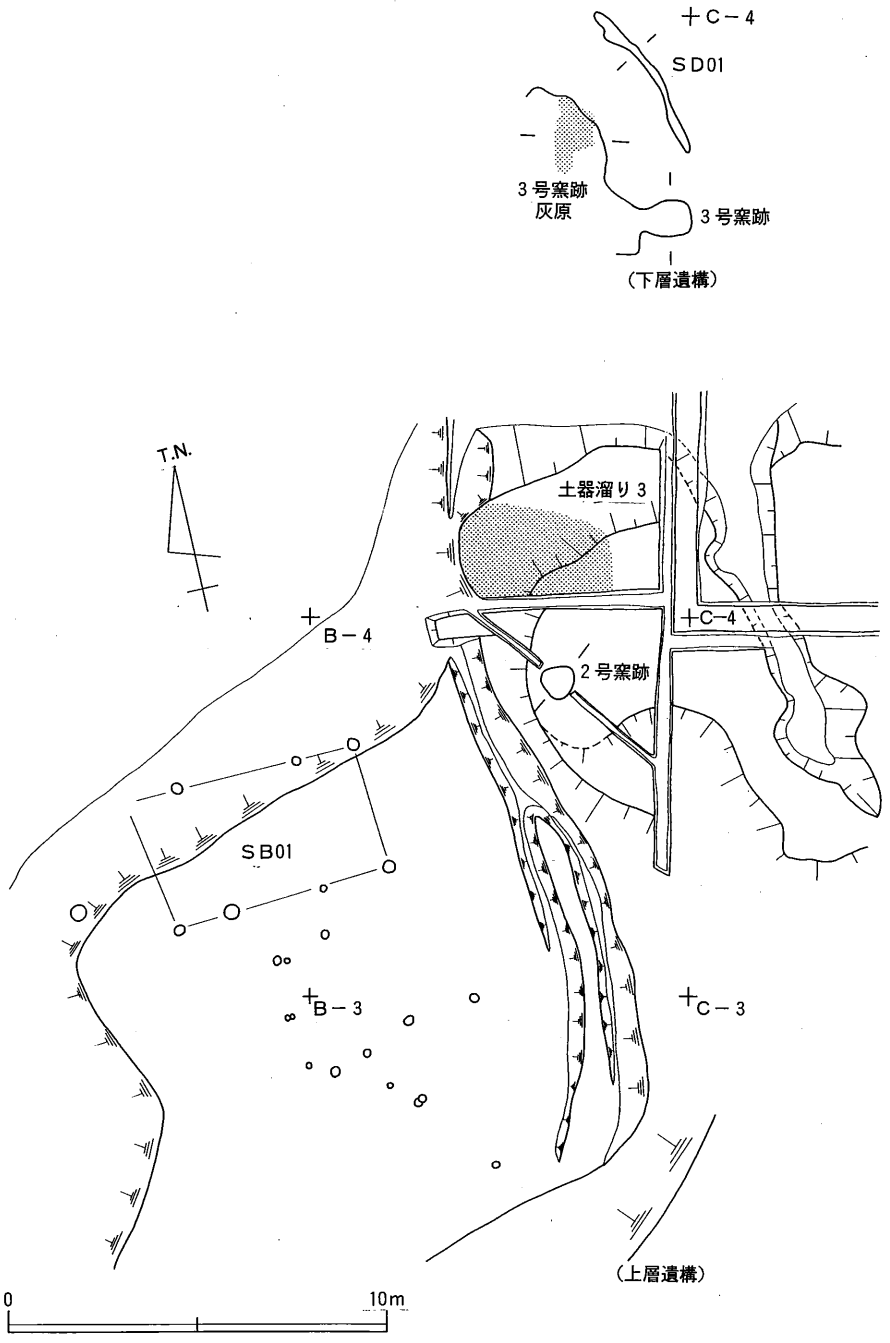


第16図　１号窯跡窯体内遺物出土状況

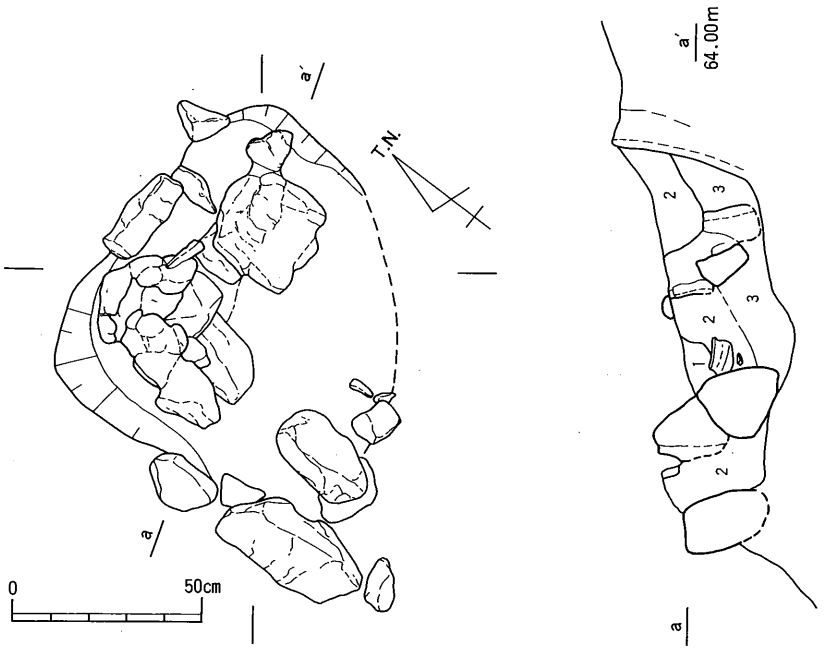
［２号窯跡（第18～23図）］

Ｃ－３区に位置する窯跡である。谷底に接した南側は緩斜面になっているが，ここからやや張り出したような地形の部分に構築されている。この張り出し部の窯体構築面には，多量の足釜・鍋・擂鉢あるいは窯壁片などが包含されており，その下層から別の窯体（３号窯跡）と灰原が検出された。このことから，先行する３号窯跡の廃絶後に付近をマウンド状に盛り上げて整地し，そこに２号窯跡を築いていることが考えられる。整地層の厚さは，0.2～0.4mに達する。したがって２号窯跡は，この整地によって谷底から相対的にかなり高い位置（比高差約２m）にあることになる。

なお窯体の東側では，溝状の落ち込みが谷底へとつながっている。落ち込みが斜面上方に位置することから，窯に伴う排水溝の可能性も考えられたが，落ち込みの底面が凹凸の著しい不定形なものであること，また平面も蛇行気味に延びることから，花崗岩を基盤と



第17図　2・3号窯跡とSD01



1．表土
2．淡褐色砂質土（焼土を含む）
3．淡褐色砂質土（焼土を含まない）

第18図　2号窯跡窯壁崩落状況と土層

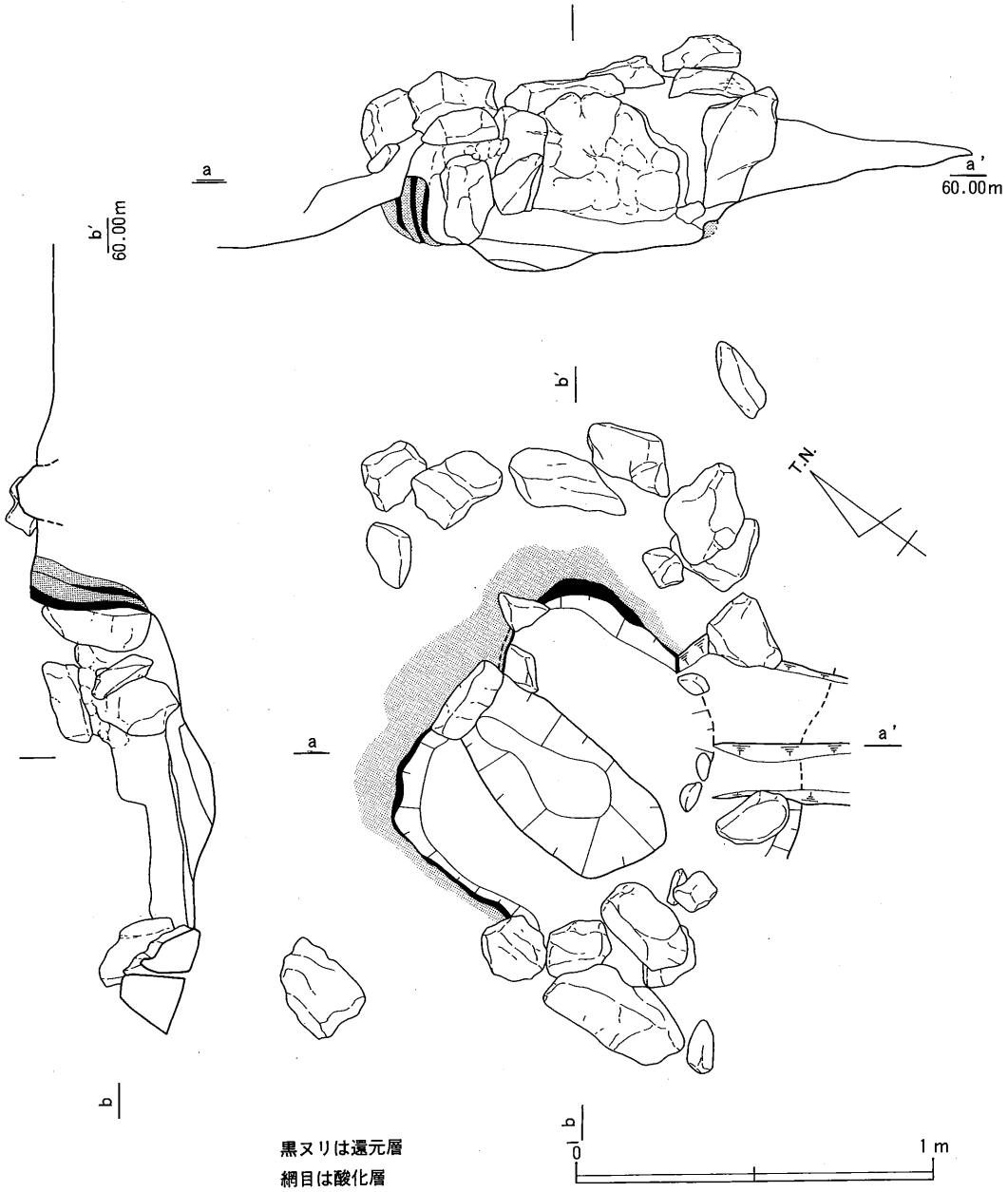
する地域にみられる浸食地形と判断される。

窯体内には窯壁片を多量に含んだ淡褐色砂質土が充満しており，廃窯後窯体の崩壊によって一気に埋没したことが考えられる。窯体北側壁と西側壁に沿ってかなり大きくまとまった窯壁塊が遺存しており，いずれも直線的な表面（還元面）を外（上）側に向けていた。このことからこれらの窯壁塊は，直線的に立ち上がる側壁の上半部にあたると考えられ，廃窯後に窯体内に倒れ込んだようである。

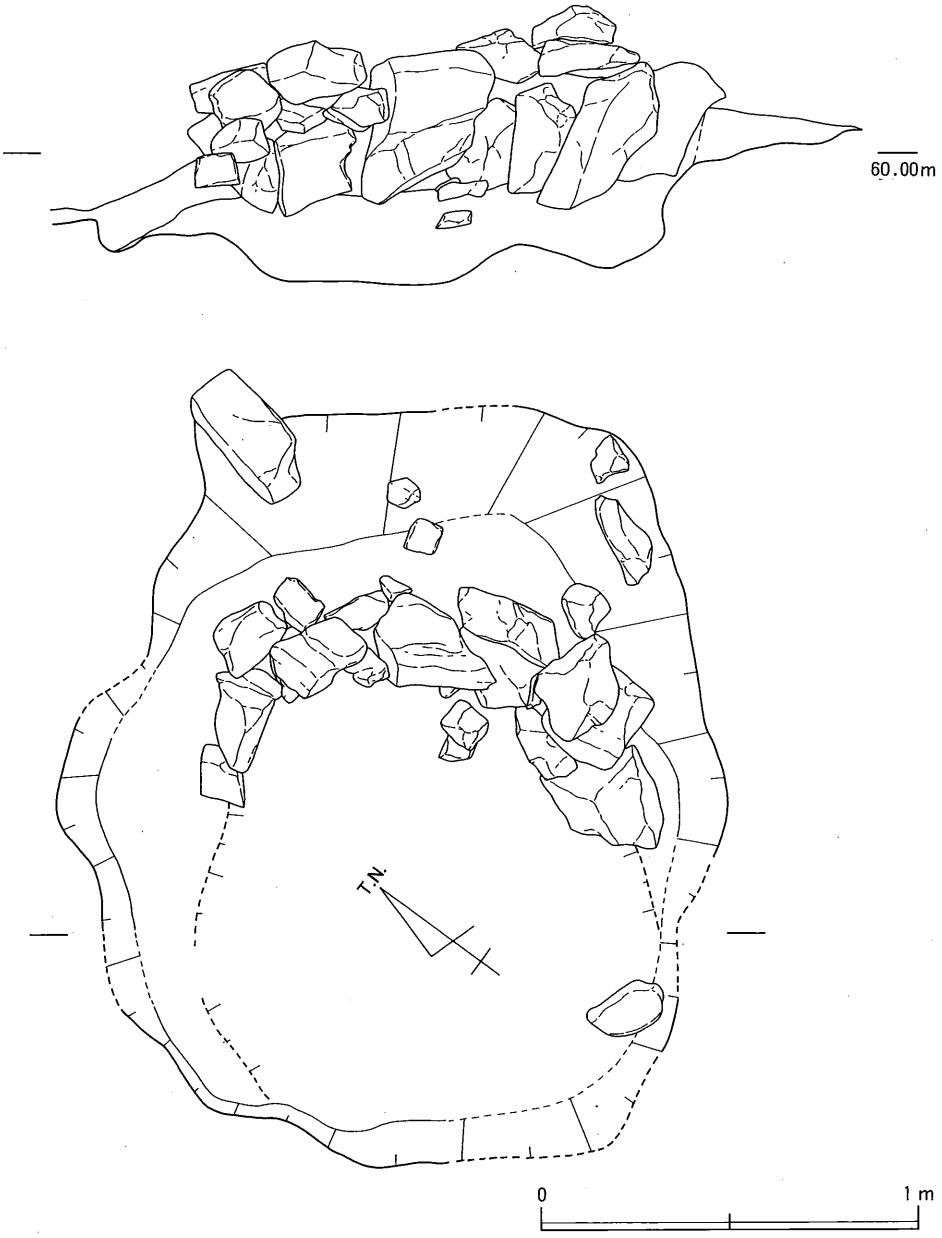
なお，崩落窯壁には径10cm程度の芯棒に粘土を塗り込んだような形跡が認められた。窯体上半部の補強材の痕跡か。

窯体は，先述した整地層の頂部に長さ1.99m・幅1.77mの，平面がいびつな長方形の掘り方を設定し，その東半部に花崗岩角礫を半円形にまわし，さらにその内側に礫を混ぜながら粘土を貼り付けて構築している。掘り方内の埋土には，強く叩き締められたような痕跡はない。また掘り方と窯体の主軸方位はほぼ一致している。

形態は平面が菱形に近い楕円形を呈しており，検出した状況では1号窯跡のように燃焼



第19図　2号窯跡窯体平・断面図



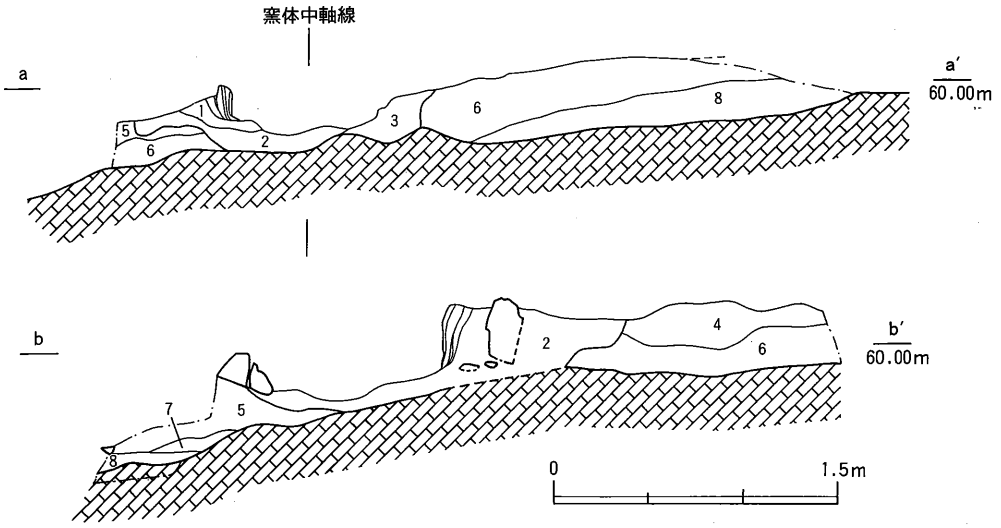
第20図　2号窯跡窯体掘り方平・断面図

部と焼成部を明瞭に区分することは困難である。規模は長さ0.96m，幅約0.9m，残存部最大高0.36mを測る。

窯壁は，東側の最も良好に遺存している部分では，床面から0.25m程度までほぼ垂直に立ち上がり，それより上はやや外開きに延びる。ただし，角礫を混ぜてつくられた北側の窯壁では，やや内傾気味に立ち上がる。このような微妙な窯壁立ち上がりの差異は，上部構造の特徴を反映する可能性もあるが，現状では明らかにできない。壁面は東半部がよく焼けており，表面が厚さ2～3㎝にわたって青灰色還元層を形成する。反面床面にはほとんど被熱の痕跡がない。東側窯壁の基底部表面に赤色酸化層が帯状にみられること，また床面中央部に不自然な窪みがあることから，製品や灰の掻き出しによって床面が荒れていることは確かであるが，西半部の窯壁基底部でも被熱状況は極めて弱い。

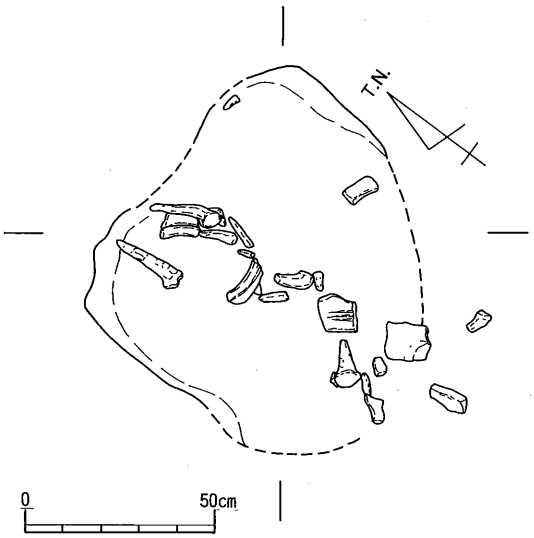
なお，窯壁の重複は3枚確認できた。

窯体西側には花崗岩の角礫が窯壁に接して並べられている。この角礫は西側の窯壁が途切れた部分にあり，窯体構築にあたって塗り込められたとはみなし難い。おそらくこの部分が焚口にあたり，閉塞材として用いられたのであろう。



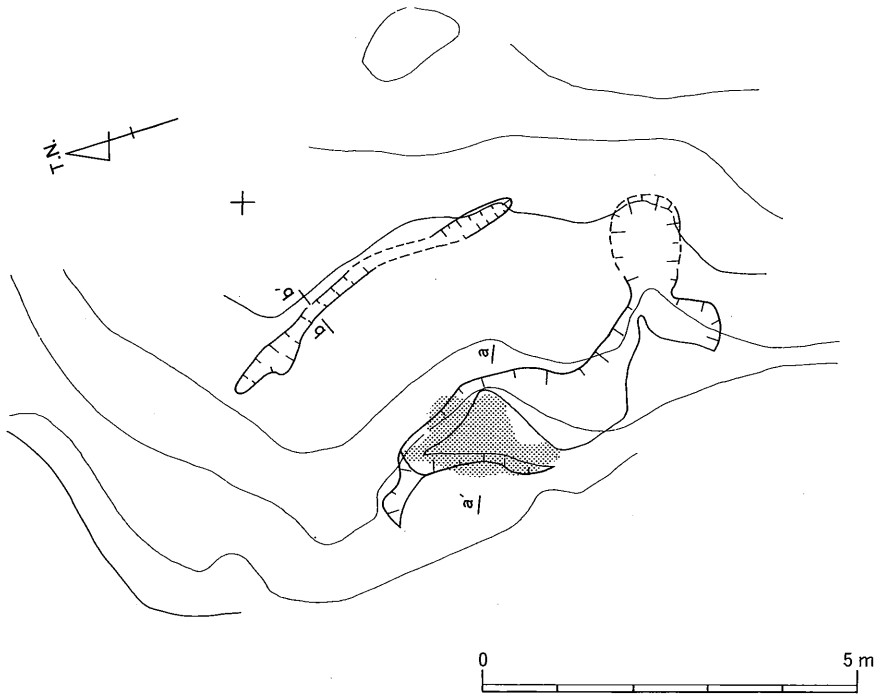
1．淡褐色シルト質細砂（窯壁片・土器・マンガン含む）
2．暗褐白色細砂（黒壁片・土器・灰を含む）
3．淡褐色細砂（ややしまり悪くパサパサする。土器片・窯壁片を少量含む）
4．淡黄褐色細砂（土器片・少しレキを多量に含む）
5．暗灰色シルト質細砂（灰を多量に含む）
6．淡褐色細砂（3より固くしまる。土器片・窯壁片含む）
7．淡褐色砂質土（砂を少量含む）
8．黒色灰層（土器片・黒壁片を含む。下方（西方）ほど灰が濃い）

第21図　2号窯跡・整地層土層図



第22図　2号窯跡窯体内遺物出土状況

窯体内では，崩落した窯壁に混ざって土師質足釜や須恵質擂鉢が検出された。ただし量が少ないことと，いずれも小片であることから，窯詰めを直接的に示すものではない。廃窯後に投棄されたようである。また，構築時の掘り方内の埋土から備前焼四耳壺と瀬戸焼天目茶碗が出土している。

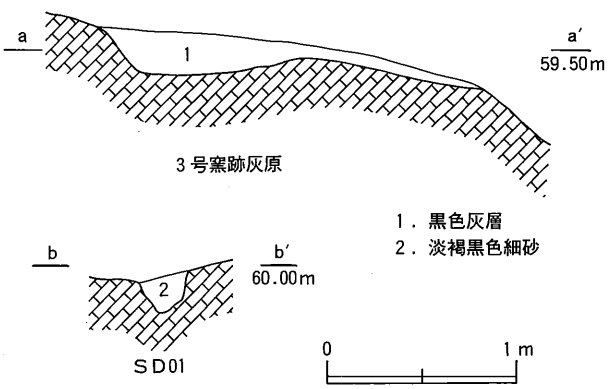


第23図　3号窯跡関連遺構配置図

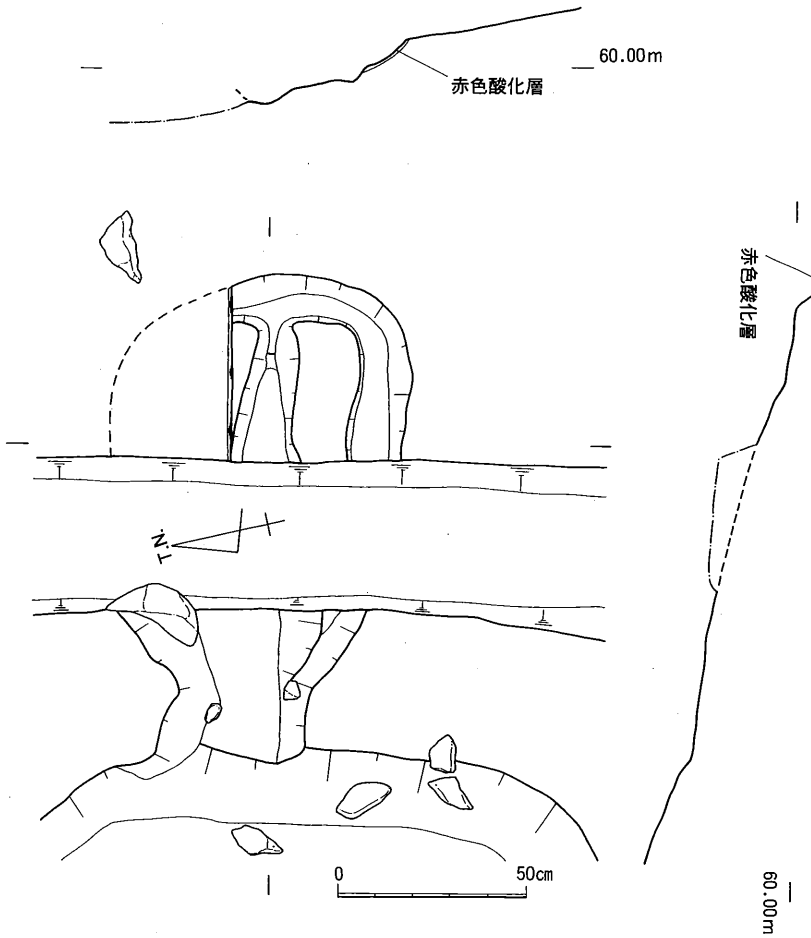
［3号窯跡（第24～27図）］

2号窯跡から南東約4.5mのC－3区・D－3区に位置する。前庭部と灰原を2号窯跡の整地層下で検出したことから，2号窯跡よりも先行した操業と判断できた。

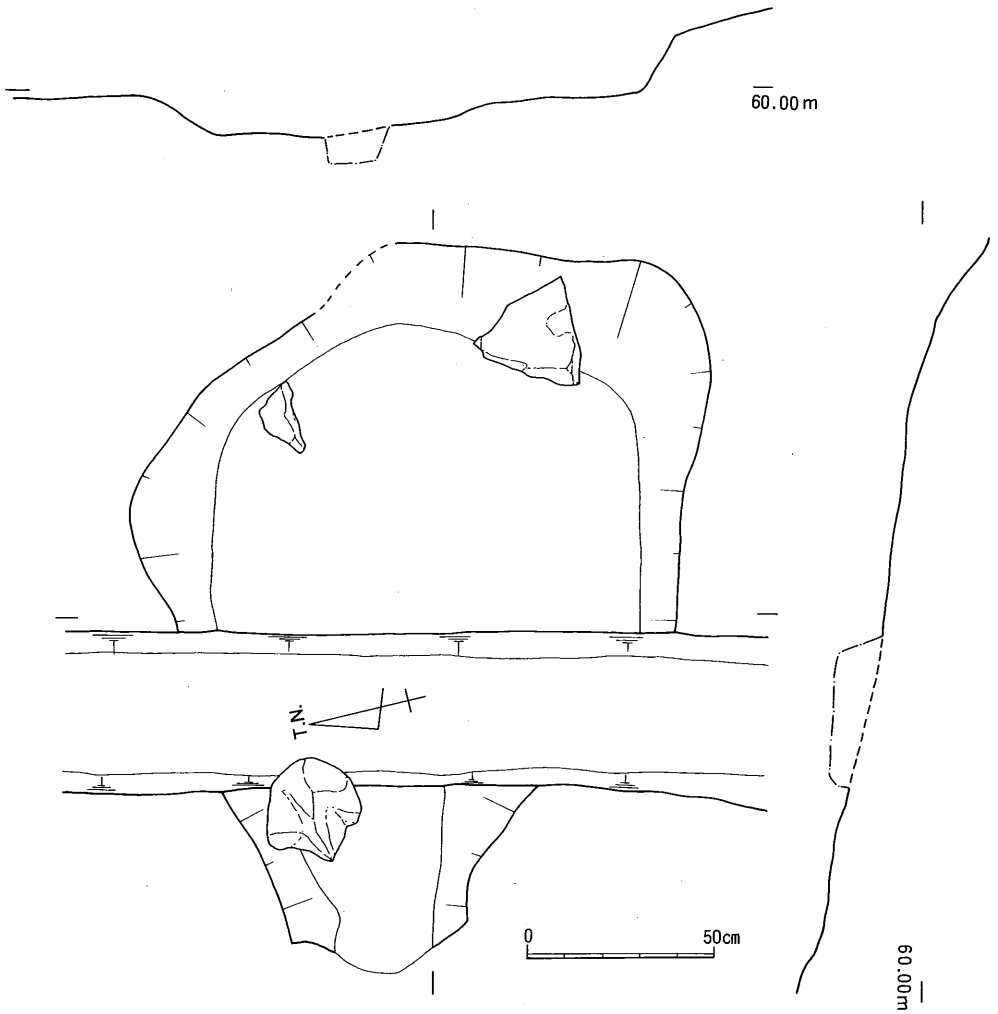
窯体前面の南北約5m，東西約1.5mの範囲に灰と少量の土器・窯壁を含んだ土が堆積しており，特に北側の1.5m四方の範囲は最大厚



第24図　3号窯跡灰原・SD01土層図



第25図　3号窯跡窯体平面図

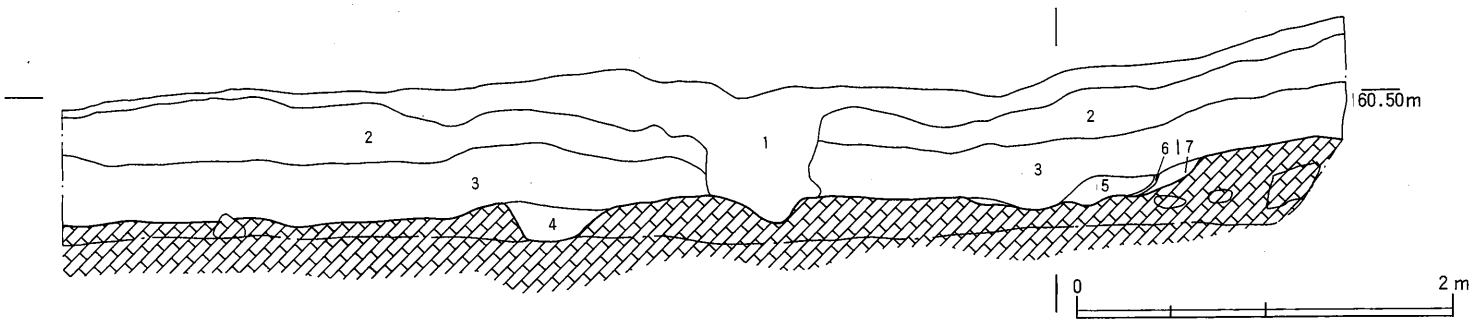


第26図　3号窯跡窯体掘り方平面図

0.25mの灰（炭）層がみられた。窯体内では，焚口付近に灰が堆積していた。

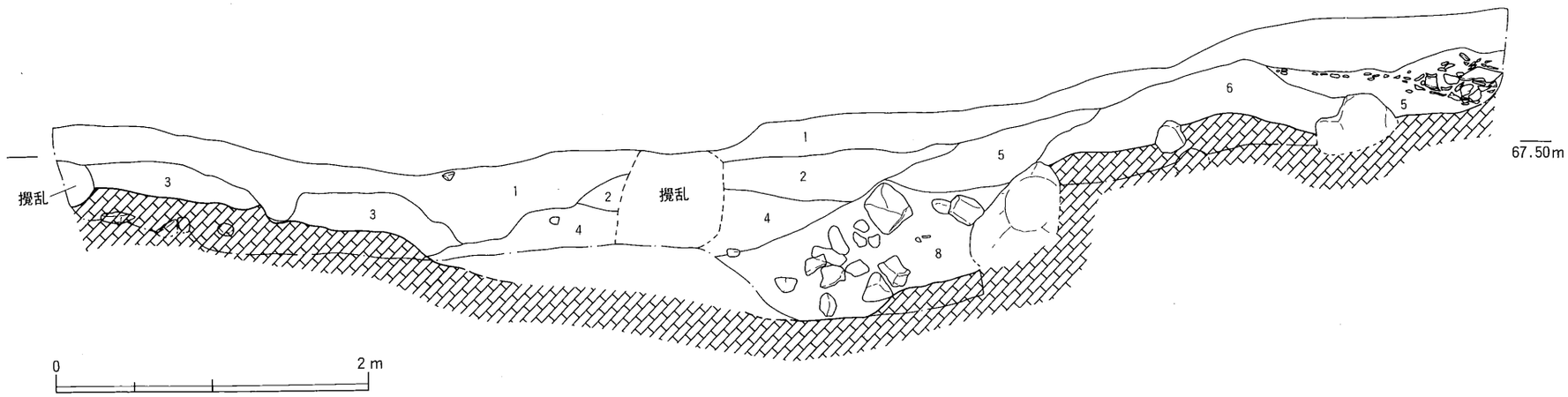
窯体は一見したところ，形態・規模ともに1号窯跡に近似している。すなわち，焼成部床面で中軸線上と壁面沿いに溝がみられ，床面も傾斜する。窯体全長は1.38m，焼成部長1.10m，幅0.74m，残存高0.16mを測る。ただし，1号窯跡ほど焼成部と燃焼部との境に明瞭な段を形成せず，また窯壁背後に掘り方と石組を構成したと考えられる礫が存在する点が異なっている。むしろこれは2号窯跡に近い特徴といえる。窯壁は基底部が遺存しているのみであり，被熱状況も弱い赤色酸化層を形成している程度である。したがって密閉された痕跡はない。これらから，3号窯跡は焼成方法に関わる基本的な構造を1号窯跡と同じくしているが，窯体構築法において2号窯跡に近い要素が指摘できる。

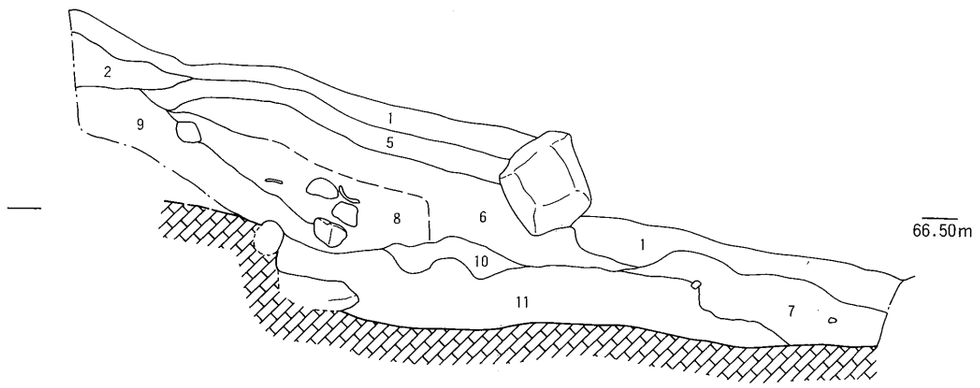
3号窯跡より約1.5m北側の整地層下で，N－18°－Wの方向をもった溝（ＳＤ０１）が



1．表土
2．淡褐色細砂（礫含む）
3．淡褐白色細砂
4．淡茶褐色細砂（ＳＤ01埋土）
5．黄白色粗砂
6．赤色酸化層
7．淡茶色粗砂

第27図　３号窯跡・ＳＤ01土層図（Ｃ－３区東壁）





1．表土 ——— 表土層
2．淡黄褐色細層（ラミナ状に堆積）
3．淡褐色細砂
4．淡褐白色細砂
5．淡褐色砂質土（土器を多量に含む） ——— 第Ⅰａ層
6．淡褐色細砂（土器を多量に含む） ——— 第Ⅰａ層
7．淡灰褐色細砂 ——— 第Ⅰｂ層
8．暗褐色粗砂 ——— 第Ⅱ層
9．暗黒褐色砂礫 ——— 第Ⅱ層
10．淡灰色粗砂 ——— 第Ⅲ層
11．暗灰褐色粗砂（マンガンを多量に含む） ——— 第Ⅲ層

第28図　土器溜り１　土層図

検出された。幅は0.25m，深さ0.22mを測り，断面逆台形状を呈する。層位的に掘り込み面が3号窯跡と同一であることから，4号窯跡に関連する遺構と判断される。おそらく，窯体や前庭部に水が流れ込まないようにする機能を有していたものと思われる。

(3) 土器溜り

ここで報告する「土器溜り」は，概報において「物原」としていたものである。後述するように，焼土（窯壁片）や部分的な灰の集中といった遺構の状況や，焼け歪みや二次的な被熱といった遺物の所見は，物原・灰原的な要素を強く示している。調査時にはこの点を重視して物原と判断した。しかし個々の遺物の観察を詳細に行った結果，擂鉢と足釜・鍋に使用痕の認められる個体が無視できない比率で一定量存在することが判明した。したがって一部には実際に使用されたものが混在していることになる。このことは遺構の評価そのものにかかわる問題であるため，とりあえず「土器溜り」の遺構名で報告し，その後性格について検討することとしたい。

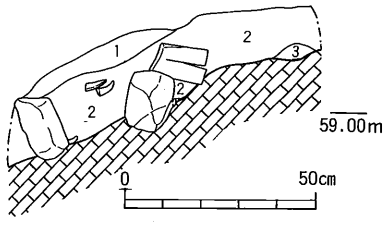
［土器溜り1（第28図）］

G－4・5区を中心に南北約10m，東西約6mの範囲に広がる。地形的には谷底に接した南側尾根の緩斜面末端（西端）にあたる。この緩斜面は調査区外の東方約60mまで続いており，それより上方（東）は急斜面となる。検出部分の東南隅において，東方から一括投棄されたようなかたちで土器層が検出されていることを併せ考えると，土器溜り1はこの緩斜面で生産・使用された土器が廃棄されたものと推定できる。

谷底に接した北端部では，表土層下に砂層が0.6m堆積して土器溜りを覆っており，斜面浸食による土層の流出と再堆積が著しいことを示す。一方，中央部では表土直下で土器を多量に包含した層が堆積している状況であった。

土器溜りに伴う土層は，3層に大別できる。第Ⅰa層は淡褐色系の細砂層であり，面的に最も広範にみられ，また多量の遺物を包含している。上記した南東隅の土器片層は，この層位にあたる。またG－5区南西部では，同層と第Ⅱ層との境に少量の焼土・灰・炭の集中する箇所が2箇所みられた。第Ⅱ層は，礫を多く含む暗褐色系の砂層である。土器の包含量は少なく，また拳大の礫に混ざって1m前後の大型の花崗岩もあることから，多量の転石を伴う自然崩落土である可能性が高い。このため，第Ⅰ層と第Ⅲ層との間に介在する間層として捉えられる。第Ⅲ層は谷底の基盤層上に堆積しており，地下水の影響でマンガンを多量に含む。遺物量はさほど多くはないが，接合できる個体数はかなりあり，また

破片も大きい。第Ⅲ層は，上記したように第Ⅱ層によって第Ⅰ層とは分離できるが，西端部では第Ⅰ層直下に堆積しており，第Ⅰ層の遺物が若干混入している可能性もある。



1．表土
2．黄白色粗砂（2～3㎜大の砂粒多し，礫含む）
3．木の根腐敗土

第29図　土器溜り2　土層図

［土器溜り2（第29・30図）］

A－1・2区で検出した南北約2.5m東西約3.5mの範囲に広がる土器溜りである。地形的には，SB01を中心としたピット群が存在する平坦面から上がりかけた，南側尾根のかなり急な斜面のテラス状部分に位置している。

土層をみると，表土直下に土器片を多量に含んだ黄白色粗砂層が堆積していた。ただし，この土は周囲にみられる基盤層の二次堆積土と同じであり，固有の層位ではない。このことから，土器溜り2は土器廃棄後も一定期間地表に露出しており，その後埋没したことが考えられる。

遺物には，接合によってかなり完形に近く復元できる個体が集中しており，廃棄後それほど大きくは移動していないと思われる。注目すべきは，外面に煤の付着した鍋釜類がかなり認められることである。実際に使用されたものが大量に投棄されていることになる。その一方で，西半部に灰や焼土・焼石の集中する箇所があり，窯業生産の兆候を示すものである。土器溜り上方斜面が後世の削平によって段状に改変されているため，窯体が存在したかどうかは明らかにできなかったが，生産に伴う失敗品と工人の使用した生活具が混在し，しかも後者の廃棄量が多いとみられる。

［土器溜り3］

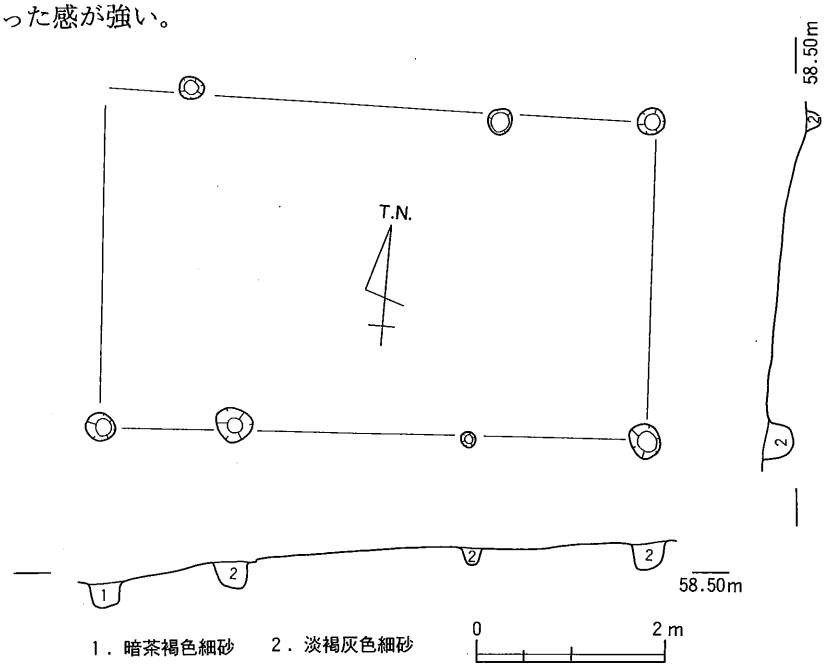
2号窯跡の北側の4.0m×2.5mの範囲には遺物が散布して，土器溜りを形成していた。層位的には表土直下の2号窯跡窯体構築面であることから，2号窯跡構築後に堆積していることは間違いない。ただし出土遺物は土器溜り1・2に比して，完形に復元できる個体がなく小さな破片が多い。また2号窯跡で還元焔焼成が行われているにもかかわらず，瓦質・須恵質製品は少ない。付近は3号窯跡とそれを破壊・整地した2号窯跡が重複しており，二次的な移動や整地時の削平・攪拌によるものがかなり混入している可能性を想定する必要がある。

第30図　土器溜り２　遺物出土状況

(4) 掘立柱建物

［ＳＢ０１（第31図）］

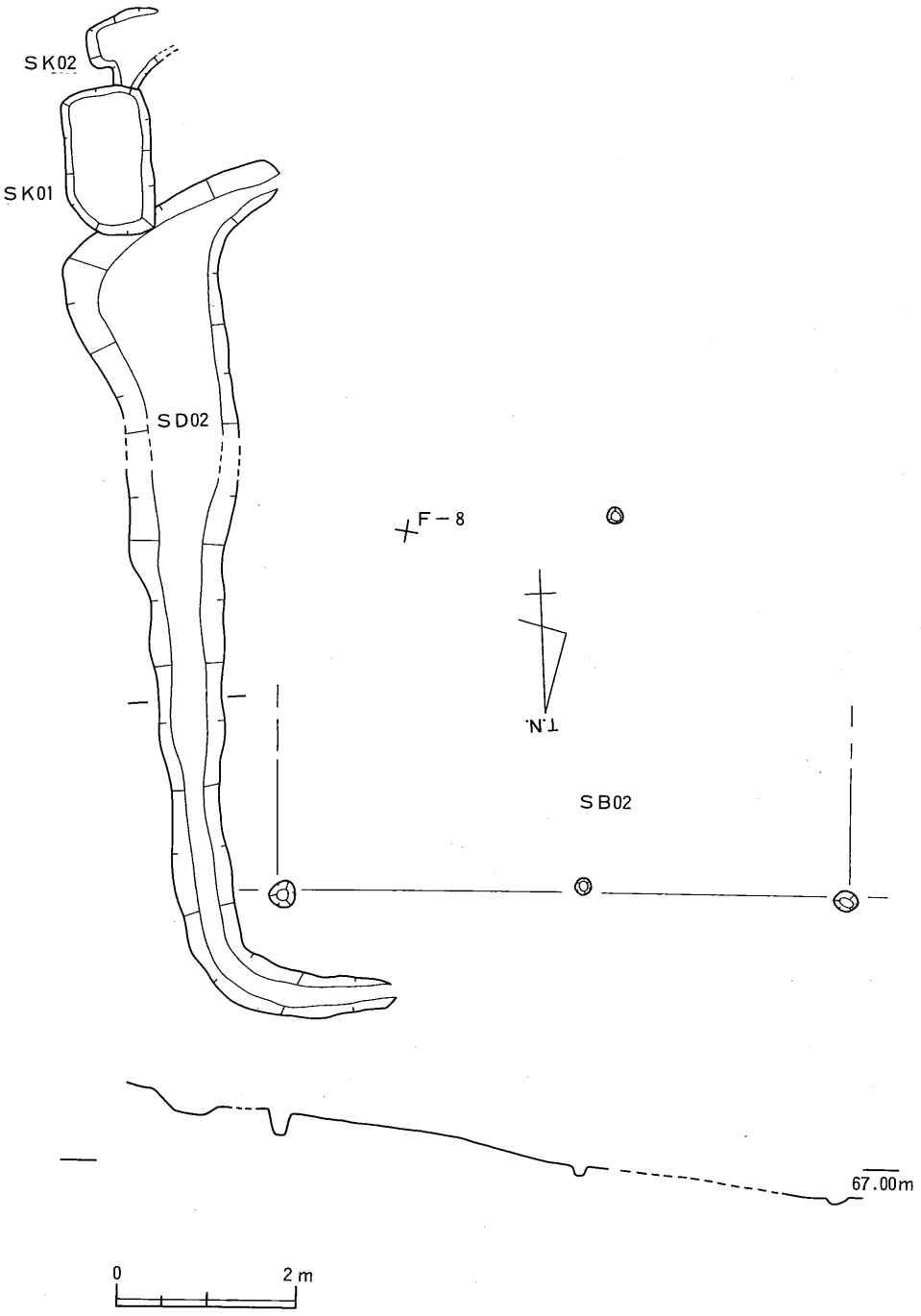
Ｂ－３・Ｃ－３区で検出された掘立柱建物である。付近の平坦面では24個のピットが検出されたが，かろうじて建物を構成していたと推測されるのは１箇所にとどまっている。ＳＢ０１はＮ－86°－Ｅの主軸をもち，柱間は１間×３間と考えられるが，北辺の柱穴列のうち西半の２個の柱穴については検出できなかった。このため正確な面積は算出できないが，約19㎡程度になるとみられる。遺存していた柱穴は間隔が不均等であり，また底面のレベルも一定していない。長期間にわたる恒常的な構造は想定できず，短期間の仮設的な建物であった感が強い。



第31図　ＳＢ01平・断面図

［ＳＢ０２（第32図）］

Ｆ－８・Ｇ－８区で検出された。北側尾根の稜線よりやや下った緩斜面に位置しており，古墳の削平面に作られている。柱穴列が２間分遺存しているのみであり，建物本来の規模は明らかでないが，上方斜面に平面「コ」の字形の溝（ＳＤ０２）がある。この溝は，柱穴列と主軸がほぼ同一であることや位置関係から，ＳＢ０２に伴う雨落ち溝的な性格をもっていた可能性があり，このことから憶測するならば，床面積37㎡程度の中型建物であったことも考えられる。

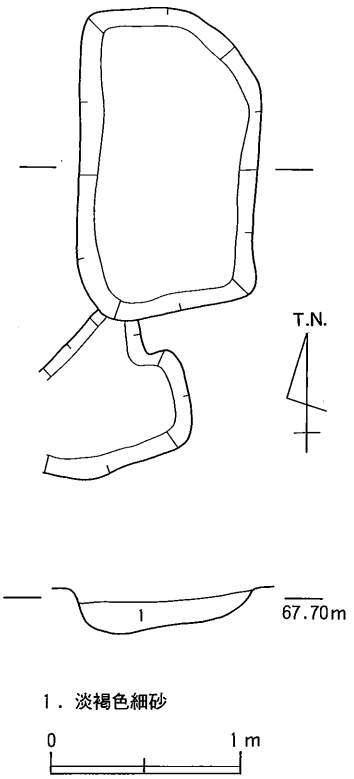


第32図　ＳＢ02・ＳＤ02平・断面図

(5) 土坑

［ＳＫ０１（第33図）］

Ｇ－７区で検出された，平面形態がややいびつな長方形を呈する土坑である。長径1.68m，短径0.92mを測る。南側に隣接する不定形なＳＫ０２を切り込んでおり，また北側のＳＤ０２よりも後出する。断面は浅い逆台形を呈しており，淡褐色細砂が堆積していた。遺物は土師質土器細片が出土しているのみであり，詳細な時期は不明である。



第33図　ＳＫ01平・断面図

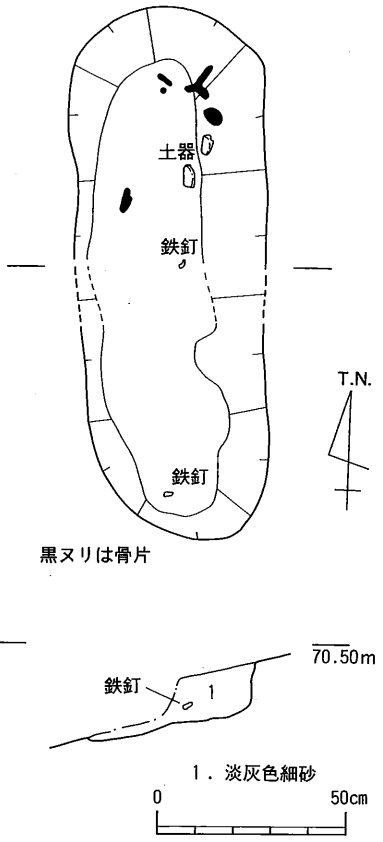
(6) 土壙墓

［ＳＴ０１（第34図）］

北側尾根トレンチ表土直下で検出された。地形的には，北側尾根のほぼ頂部稜線上に位置している。墓壙は短辺（小口）が丸く長辺（主軸方向）が直線的な，細長い楕円形を呈している。規模は，長さ1.4m，幅0.5mを測る。墓壙の主軸は尾根の等高線に平行しており，ほぼ南北方向（Ｎ－５°－Ｗ）を示す。長辺の東側では，ほぼ垂直な墓壙壁面が確認できたが，西側は斜面下方のため流失が著しく，わずかな立ち上がりが認められた程度である。底面も平坦ではなく，西側に傾斜しながら凹凸が認められる。このことから，墓壙はかなり粗雑に掘り込まれていることがわかる。

墓壙内には骨片・鉄釘・土師質土器細片などが遺存していた。骨片は北半部に散在して検出された。いずれも非常に細かく，また脆くなっていたため，どの部分の骨かは特定できない。また鉄釘は中央部と南側小口部に１片ずつ遺存していた。土師質土器片は足釜の小片であり，西半部で検出された。

付近の尾根筋には，近世以降の墓石数基があったため，当初は窯業生産とは関係のない遺構である可能性も考えた。しかし墓壙の流出が顕著であり新しい時期の掘り込みとするには難点があること，また上方に窯跡の存在が考えられない尾根頂部にもかかわらず，細片とはいえ土師質土器片を含むことなどから，窯業関連遺構の可能性を想定しておきたい。



第34図　ＳＴ01平・断面図

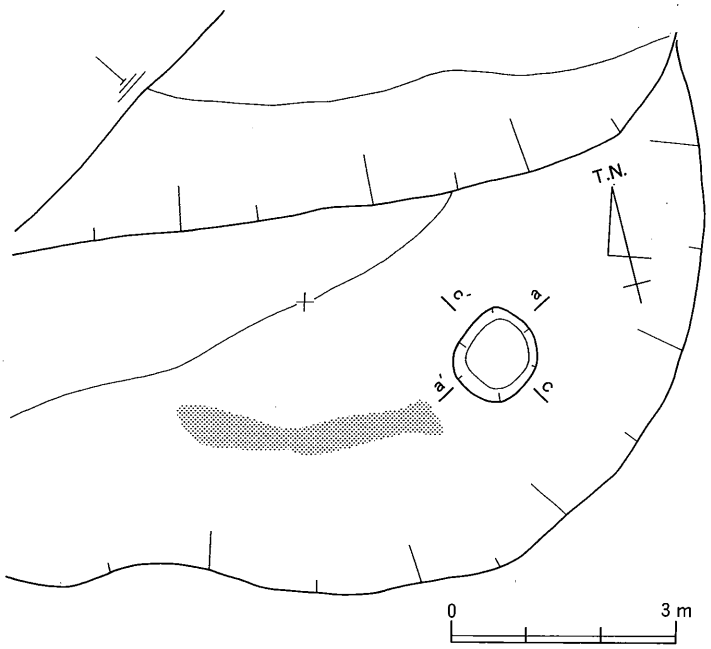
(7)　焼土坑

［ＳＴ０２（第35・36図）］

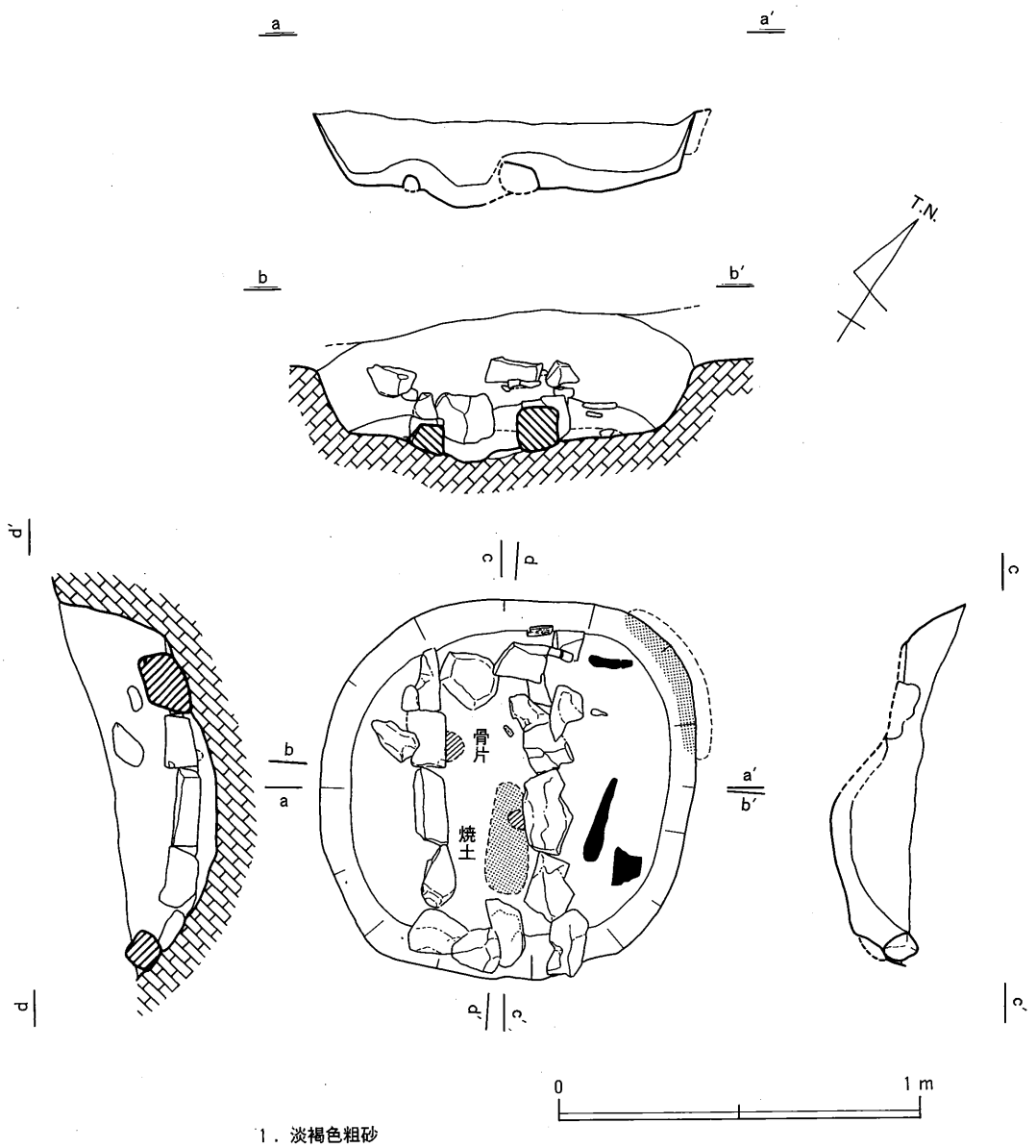
Ｄ－１区で検出された底面に石組みをもつ焼土坑である。南側尾根の稜線からやや下った斜面の小規模な平坦部に位置する。西側には3.6m×0.4mの範囲で灰層があり，ＳＴ０２に伴うものとみられる。

土坑平面は円形に近い隅丸方形を呈しており，1.05m×1.03mを測る。北東コーナー付近は，被熱のため赤色酸化層を形成している。土坑底面には，花崗岩と安山岩の角礫による約0.3m×0.8mの大きさの長方形の石組みが遺存していた。石組みは被熱しており，厚さ６㎝程度の黒色灰層で覆われていた。

遺物は底面から瓦質擂鉢片が出土している。また石組み内の底面には骨片が認められた。このことから，ＳＴ０２は火葬施設と考えられる。



第35図　ＳＴ02と灰層



第36図　ＳＴ02平・断面図

第3節　遺物

調査によって出土した遺物の大半は，中世土器生産に関わるものであるが，それ以外に楠井1号墳ならびにその周辺の包含層から少量出土した古墳時代後期の遺物がある。包含層出土のものは明らかに混入品ではあるが，楠井1号墳の破壊・整地に関わる可能性があるものや，地形的に別の古墳の存在が想定できる可能性を示すものがある。そこでまず，古墳時代後期の遺物について記述した後，中世の遺物について報告することにしたい。なお，この他にも包含層や灰原から弥生時代の石器や近世土器がごく僅かながら出土しているが，これらについては古墳時代後期の遺物のように検出遺構との関わりを示唆するものではないことから，出土地点・層位毎に中世遺物の項で報告することにしたい。

1.　古墳時代後期の遺物

(1)　楠井1号墳出土遺物（第37～40図，第7～10表）

楠井1号墳に伴う遺物は，その出土位置によって玄室内，周溝土器群Ⅰ・Ⅱに分けられる。

［玄室内出土遺物（1～25）］

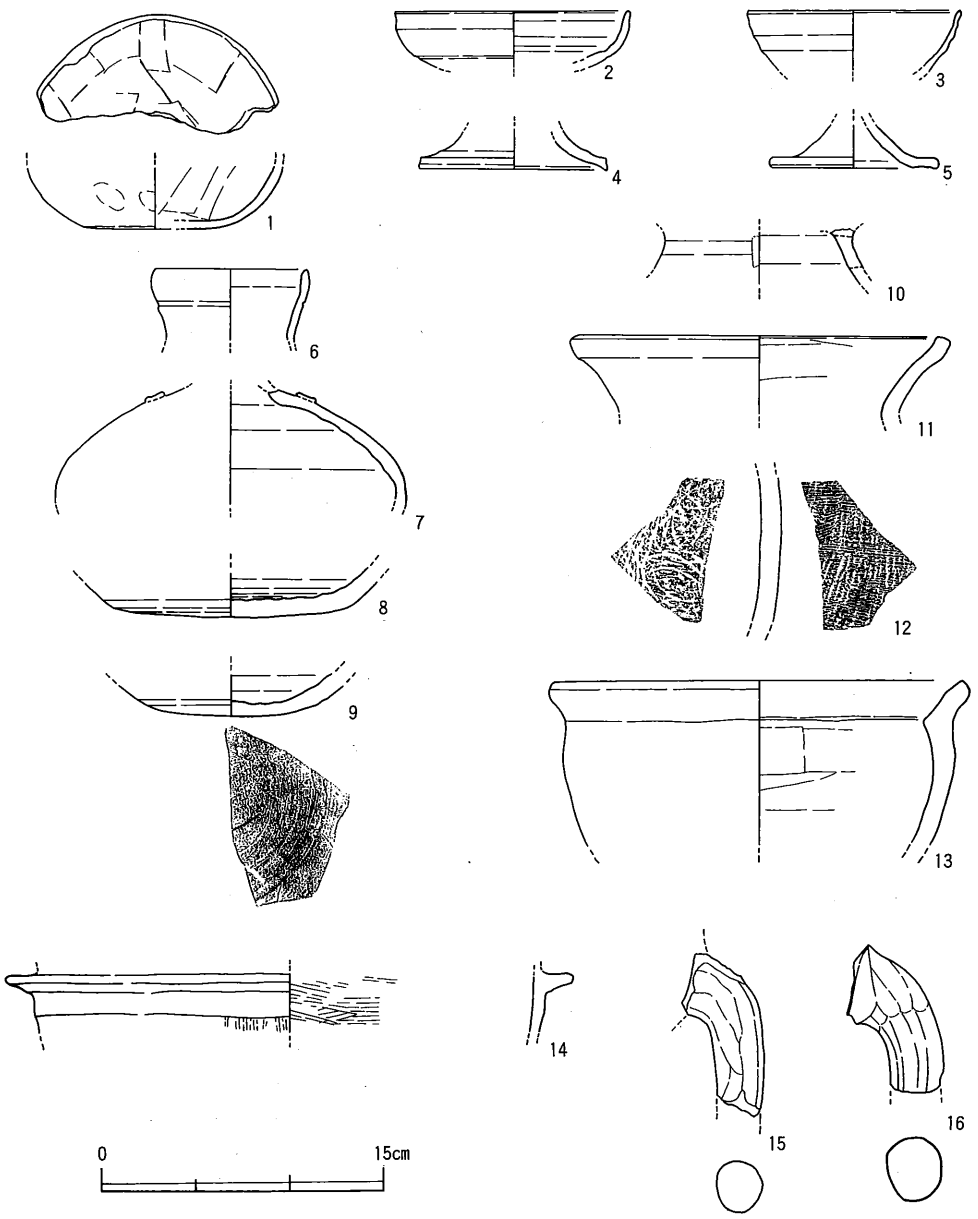
土師器椀・甕，須恵器高杯・提瓶・壺・脚台付壺・甕，鉄刀・鉄鏃・鉄鋌・鉄片，銀環がある。また直接古墳に伴うものではないが，土師質釜が出土している。これについては，古墳の破壊時期を示す資料といえる。

土師器椀（1）は，内面全体にわたって横方向の板ナデ調整を施す。この時期の土師器椀にしばしば認められる，暗文やヘラ磨きは施されていない。底部は平底気味になっている。

須恵器高杯（2～5）は，丸く内弯して立ち上がる椀形の杯部（2・3）と，「ハ」の字形に強く開く脚部（4・5）をもつ。全形を窺う資料に欠けるものの，7世紀前半～中葉に普遍的な短脚無蓋高杯である。

須恵器提瓶（6）は，内弯気味に短く立ち上がる口頸部の破片である。口縁部外面には沈線が1条巡る。あるいは平瓶の口縁か。

須恵器壺（7～9）は，いずれも別個体とみられる体部・底部片である。7はあるいは瓶類の肩部とも考えられるが，内面の粘土紐の凹凸や回転ナデの状況をみると，口縁部は



第37図　楠井１号墳玄室内出土遺物(1)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1	土師器 椀	(底)6.5	3mm以下の砂粒	不良	橙	(体)横ナデ	(体・底)板ナデ	底1/2
2	須恵器高杯	(口)12.4	1.5mm以下の砂粒	良好	灰	(口・体・底)回転ナデ	(口・体・底)回転ナデ	口1/4
3	須恵器高杯	(口)11.0	5mm以下の砂粒	良好	灰	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/8
4	須恵器高杯	(底)10.0	1mm以下の砂粒	良好	灰	(脚)回転ナデ	(脚)回転ナデ	口1/6
5	須恵器高杯	—	1mm以下の砂粒	良好	灰	(脚)回転ナデ	(脚)回転ナデ	口1/8
6	須恵器提瓶	(口)8.0	精良	良好	(素地)灰褐 (釉)オリーブ黒	(口)回転ナデ	(口)回転ナデ	口1/4
7	須恵器 壺	—	精良	良好	灰白	(体)回転ナデ	(体)回転ナデ	細片
8	須恵器 壺	(底)13.6	1mm以下の砂粒	良好	灰白	(体)回転ナデ →(底)回転ヘラ削り	(体・底)回転ナデ	口1/8
9	須恵器 壺	(底)10.0	4mm以下の砂粒	良好	灰白	(体)回転ナデ→(底)回転ヘラ削り→ヘラ記号	(体・底)回転ナデ	口1/4
10	須恵器 壺	—	精良	良好	灰白	(胴)回転ナデ→長方形スカシ	(胴)回転ナデ	細片
11	須恵器 甕	(口)18.8	3mm以下の砂粒	不良	浅黄	(口・頸)回転ナデ	(口・頸)回転ナデ	口1/12
12	須恵器 甕	—	2mm以下の砂粒	良好	灰	(体)平行叩き目→カキ目	(体)当て具痕	細片
13	土師器 甕	(口)21.4	2mm以下の砂粒	不良	浅黄橙	調整不明	(底)板ナデ	口1/6
14	土師質 釜	—	1.5mm以下の砂粒	不良	にぶい褐	(体)縦ハケ→(鍔)横ナデ	(体)横ハケ	鍔1/12
15	土師質足釜	—	3mm以下の砂粒	不良	明黄褐	(鍔)ナデ		
16	土師質足釜	—	5mm以下の砂粒	不良	橙	(鍔)ナデ		

第7表　楠井1号墳玄室内出土遺物観察表(1)

器体の中軸上に位置することが考えられ，口縁部の偏る平瓶などとは異なる。9は底部を回転ヘラ削りした後，「—」形のヘラ記号を弱く施す。

須恵器壺脚台（10）は，壺本体との接合面に圏線状の突線が巡る。脚台部との接合時に壺底部に回転を利用した刻みが施されることがしばしばあるが，これはその刻みが脚台側に転写されたものであろう。

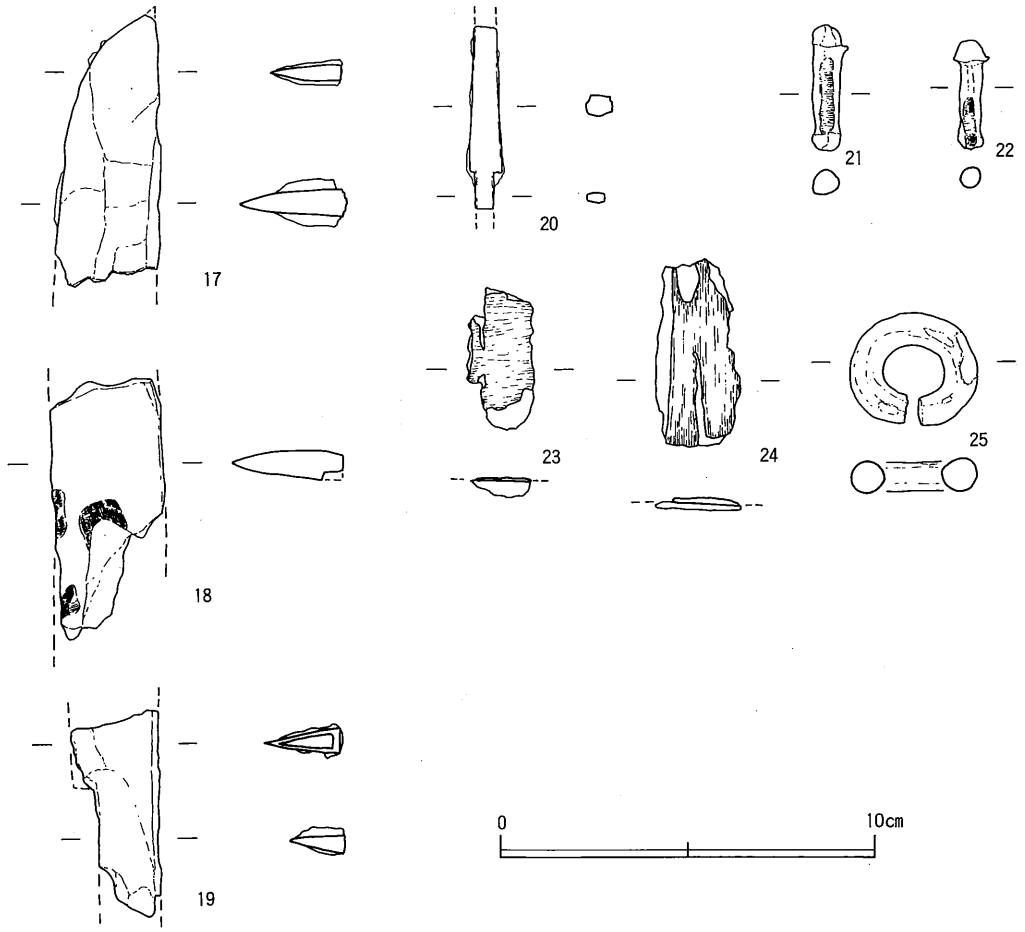
須恵器甕口縁（11）は，断面が矩形に肥厚するものである。また甕体部（12）は叩き成形の後，外面にカキ目を施す。

土師器甕（13）は，内弯して伸びる体部とそこから明瞭に外反する口縁部をもつ。器壁がかなり厚く，やや特異な形態であるが，古墳に伴う時期の所産であると考えられる。

土師質釜（14〜16）には，鍔部の破片と脚部の破片がある。14に脚部が伴うかどうか判然としないが，水平に長く伸びる鍔部は楠井産の足釜とはやや異質な感がある。15・16は楠井産とみられる胎土・焼成をもつ。

17〜24は鉄器である。鉄刀片（17〜19）には，布状の繊維が付着したもの（18）がある。鉄鏃（20）は長頸式である。鉄鋌（21・22）は両側が丸くなっており，その片側には突起が認められる。また表面には木部の痕跡が認められる。木弓の鋌か。鉄片（23・24）はほとんど原形をとどめておらず，わずかに木部の付着した部分で本来の面が遺存しているのみである。

銀環（25）は直径3.4cmを計る。表面の銀が一部剝がれており，錆化の進んだ銅地がみえる。



第38図　楠井１号墳玄室内出土遺物(2)

番号	器　種	材　質	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	備　考
17	直刀	鉄	(7.2)	2.8	0.6	(31.41)	先端（切先）部付近の破片
18	直刀	鉄	(6.9)	3.0	0.8	(24.43)	表面に布状の繊維痕跡あり
19	直刀	鉄	(5.5)	2.3	0.7	(15.83)	柄部付近の破片
20	鏃	鉄	(4.8)	0.9	0.5	(3.96)	長茎式
21	鋲？	鉄	3.4	0.7	0.7	3.63	両端が円形に膨らむ。中央部に木質の痕跡あり
22	鋲？	鉄	2.9	0.6	0.7	2.30	両端が円形に膨らむ。中央部に木質の痕跡あり
23	不明	鉄	(3.4)	(1.7)	(0.5)	(7.16)	表面に木質付着
24	不明	鉄	(4.9)	(2.3)	(0.3)	(5.11)	表面に木質付着
25	銀環	銅地銀張り	直径 3.3	—	0.9	28.10	

第８表　楠井１号墳玄室内出土遺物観察表(2)

［周溝土器群Ⅰ出土遺物（26）］

図示した須恵器甕口縁部の他にも甕体部が出土しているが，全体を復元するまでには至らなかった。甕は端部を折り返して肥厚させた口縁部をもつ。１号墳出土の須恵器の中では古い様相をもつものである。

［周溝土器群Ⅱ出土遺物（27～55）］

須恵器蓋杯・高杯・蓋・椀・台付椀・𤭯・長頸壺・短頸壺・平瓶・提瓶・甕など，多様な器種が出土した。

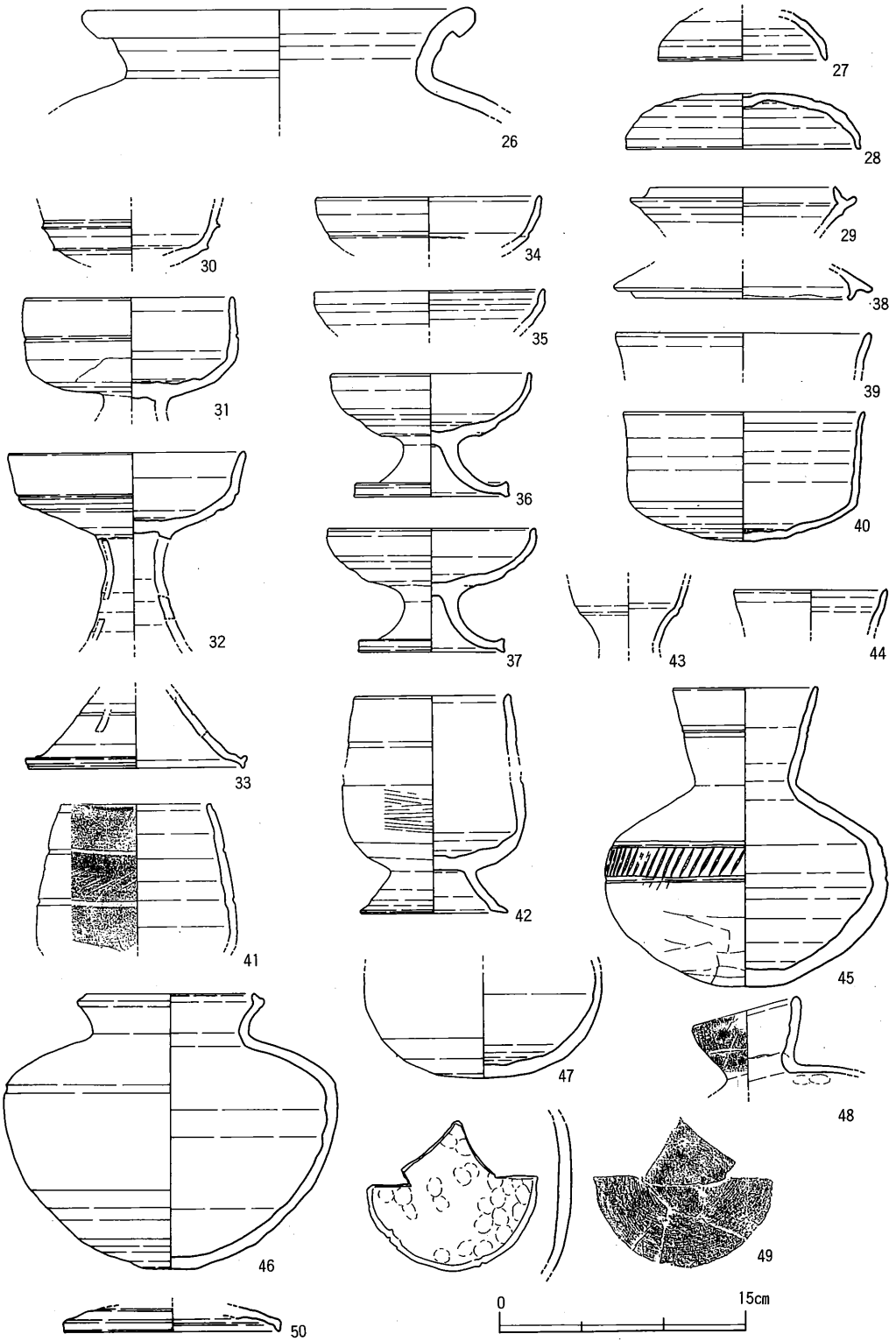
杯蓋（27・28）は，丸味を帯びた天井部と，そこから内弯して伸びる口縁部をもつ。27は口径に対して高い器高をもち，口径10.0cmと縮小化が著しい。天井部は完存しないが回転ヘラ削りの痕跡はみられない。これに対して28は全体にやや扁平であり，口径13.7cmを計る。天井部には回転ヘラ削りが施される。杯身（29）は，低く内傾する立ち上がりと，上外方へ伸びる受け部をもつ。口径10.8cmを計り，28同様に縮小化傾向が明瞭である。

高杯（30～37）はいずれも無蓋形態であり，長脚高杯（30～33）と短脚高杯（34～37）に分けられる。長脚高杯はさらに杯部の形態によって，２条のシャープな突帯を付すもの（30）と，１条の沈線を施した椀形の形態をもつもの（31・32）の２者に細分される。前者は陶邑的な形態の典型であるが，後者は陶邑にはない地域色を色濃く表出している。また，前者は胎土が精良で灰白色に発色し，表面に薄く透明な自然釉を被っており，胎土・焼成ともに他の器種との差異が顕著である。脚柱部は長く筒形に伸び，脚端部で「ハ」の字形に開く。脚部の透かし孔は，細長い長方形のものが２段３方向にみられる。32は２方透かしの可能性もある。短脚高杯は，玄室内出土資料と同様の形態をもつ。36・37の杯部は回転ヘラ切り後，脚部を貼り付けている。

蓋（38）は，口縁部内面に短く内弯するカエリを伴う。恐らく杯蓋ではなく，壺もしくは椀の蓋であろう。

椀（39・40）は，直線的で直立する体部とやや突出気味の平底をもち，口縁端部はわずかに外反する。全体に回転ナデが及び器壁の薄い丁寧な作巧であり，底部の回転ヘラ切りも１周分の幅が狭い。

台付椀（41・42）は，内傾しながら直線的に伸びる体部と，丁寧な回転ヘラ削りによる丸底，また「ハ」の字形に短く開く脚台部をもつ。口縁端部はわずかに外反気味に丸く収まる。体部中位には２条の沈線を巡らせて文様帯とし，その中にヘラ描きの斜線を施す。42の体部下半にはカキ目が施される。



第39図　楠井１号墳周溝内土器群出土遺物(1)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
26	須恵器 甕	(口)22.3	精良	良好	黄灰	(口・頸・体)回転ナデ	(口・頸・体)回転ナデ	口径3/4
27	須恵器杯蓋	(口)10.0	2.5mm以下の砂粒	良好	灰	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/8
28	須恵器杯蓋	(口)14.0 (高)3.3 (底)4.8	2mm以下の砂粒	良好	(外)灰黄褐 (内)褐灰	(口・体)回転ナデ →(天井)回転ヘラ削り	(口・体・天井)回転ナデ	口径1/4 底径3/4
29	須恵器杯身	(口)11.1	3mm以下の砂粒	良好	(内外)灰 (断)にぶい黄橙・灰白	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/3
30	須恵器高杯	—	1mm以下の砂粒	良好	灰黄	(体・底)回転ナデ	(体・底)回転ナデ	杯部1/7
31	須恵器高杯	(口)12.3	3mm以下の砂粒	良好	灰	(口・体)回転ナデ→(底)回転ヘラ削り→(脚)回転ナデ	(口・体・底)回転ナデ	口径1/5
32	須恵器高杯	(口)14.0	1mm以下の砂粒を少量	良好	灰	(口・体)回転ナデ→(底)回転ヘラ削り→(脚)回転ナデ →長方形スカシ	(口・体・底)回転ナデ →(脚)回転ナデ	口径1/4
33	須恵器高杯	(底)13.0	2mm以下の砂粒を少量	良好	灰	(脚)回転ナデ→長方形スカシ	(脚)回転ナデ	細片
34	須恵器高杯	(口)13.4	1mm以下の砂粒	良好	灰	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
35	須恵器高杯	(口)13.8	1.5mm以下の砂粒	良好	灰	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/9
36	須恵器高杯	(口)11.8 (高)7.4 (底)9.4	微細砂粒	良好	灰白	(口・体)回転ナデ→(底)回転ヘラ削り→(脚)回転ナデ	(口・体)回転ナデ →(脚)回転ナデ	口径1/2 底径ほぼ完存
37	須恵器高杯	(口)12.4 (高)7.4 (底)8.9	微細砂粒	良好	灰	(口・体)回転ナデ→(底)回転ヘラ削り→(脚)回転ナデ	(口・体)回転ナデ →(脚)回転ナデ	底径完存
38	須恵器 蓋	(口)13.0	2mm以下の砂粒	良好	灰	(口)回転ナデ	(口)回転ナデ	口径1/12
39	須恵器 椀	(口)15.2	1mm以下の砂粒	良好	灰	(口)回転ナデ	(口)回転ナデ	口径1/4
40	須恵器 椀	(口)14.4 (高)7.3 (底)7.2	2mm以下の砂粒	良好	(外)黒褐 (内)褐灰	(口・体)回転ナデ →(底)回転ヘラ削り	(口・体・底)回転ナデ	底径1/2
41	須恵器台付椀	(口)9.0	2mm以下の砂粒	良好	赤灰	(口・体)回転ナデ→(体)沈線・ヘラ描き斜線 (底)カキ目	(口・体・底)回転ナデ	口径1/4
42	須恵器台付椀	(口)9.2 (高)13.1 (底)8.9	3mm以下の砂粒	良好	灰	(口・体)回転ナデ→(体)沈線 (底)回転ヘラ削り・カキ目→(脚・底)回転ナデ	(口・体・脚)回転ナデ	底径1/7
43	須恵器 甕	—	1mm以下の砂粒	良好	灰	(頸)回転ナデ	(頸)回転ナデ	頸部1/4
44	須恵器長頸壺	(口)9.2	精良	良好	灰	(口)回転ナデ	(口)回転ナデ	口径1/4
45	須恵器長頸壺	(口)8.6 (高)18.0 (底)3.8	1mm以下の砂粒	良好	灰白	(口・頸・体)回転ナデ→(頸)沈線 (体)沈線・刺突文 (底)静止ヘラ削り	(口・頸・体・底)回転ナデ	口径1/2 底径1/2
46	須恵器短頸壺	(口)10.0(高)16.6 (底)3.4	1mm以下の砂粒	良好	(内外)褐灰 (断)灰	(口・頸・体)回転ナデ →(底)回転ヘラ削り	(口・頸・体・底)回転ナデ	口径完存
47	須恵器 壺	(底)5.8	1mm以下の砂粒	良好	灰	(体)回転ナデ →(底)回転ヘラ削り	(体・底)回転ナデ	底部完存
48	須恵器平瓶	(口)6.4	精良	良好	灰白 灰オリーブ	(口・体)回転ナデ →(頸)ヘラ記号	(口)回転ナデ	口径2/3
49	須恵器提瓶	—	6mm以下の砂粒	良好	灰	(体)カキ目	(体)押圧→ナデ	細片
50	須恵器杯蓋	(口)13.0	1mm以下の砂粒を少量	良好	灰	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/12

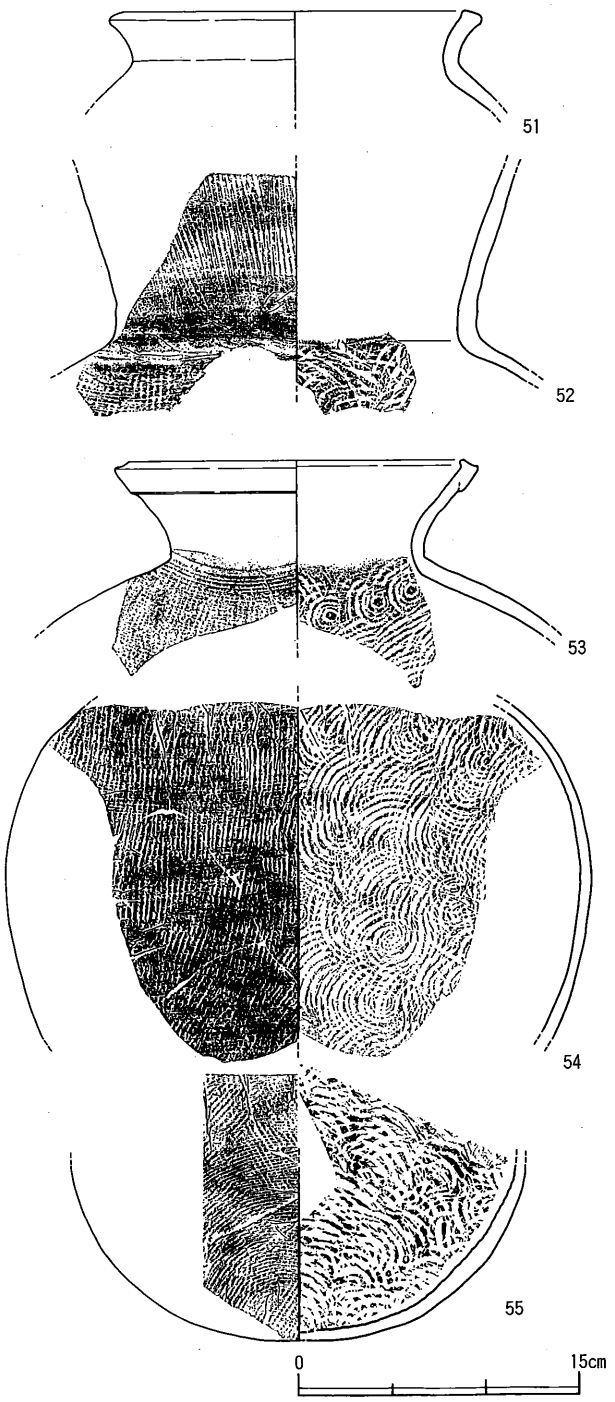
第9表　楠井1号墳周溝内土器群出土遺物観察表(1)

瑞（43）は，比較的短く外反する頸部をもつ。口縁部と頸部との境には鈍い沈線を巡らすことで，相対的で弱い突帯を作出する。

長頸壺（44・45）は，やや短い直線的な口頸部をもつ。45の口頸部中位には2条の沈線を施してその間に弱い突帯を作る。また肩部には2条の沈線を巡らせ，間に櫛状工具による刺突文を施す。底部には静止ヘラ削りがみられる。

短頸壺（46）は短く外反する口頸部をもち，端部は上方に折り込まれる。肩部には1条の沈線が施され，その後全体を丁寧に回転ナデ調整し，最後に底部に回転ヘラ削りを加える。47も同様な壺の底部である可能性がある。

平瓶（48）は内弯した器壁の厚い口縁部をもち，この器種としては古相をもつ。口縁部外面には「＋」形のヘラ記号がある。また，器表に濃緑色の自然釉を被る。



第40図　楠井１号墳周溝内土器群出土遺物(2)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
51	須恵器 甕	(口)17.8	1mm以下の砂粒	不良	にぶい黄褐	調整不明	調整不明	口1/8
52	須恵器 甕	—	2mm以下の砂粒	良好	(内外)暗灰 (断)にぶい黄橙	(頸)回転ナデ →ヘラ描き斜線 (体)平行叩き目→カキ目	(頸)回転ナデ (体)当て具痕	頸1/4
53	須恵器 甕	(口)17.4	3mm以下の砂粒	良好	灰	(口・頸)回転ナデ (体)平行叩き目→カキ目	(口・頸)回転ナデ (体)当て具痕	口1/3
54	須恵器 甕	—	2mm以下の砂粒	良好	(外)青灰 (内)灰	(体)平行叩き目→カキ目	(体)当て具痕	体1/4
55	須恵器 甕	—	2mm以下の砂粒	良好	灰	(体)平行叩き目→(底)平行叩き目→(体・底)カキ目	(体・底)当て具痕	細片

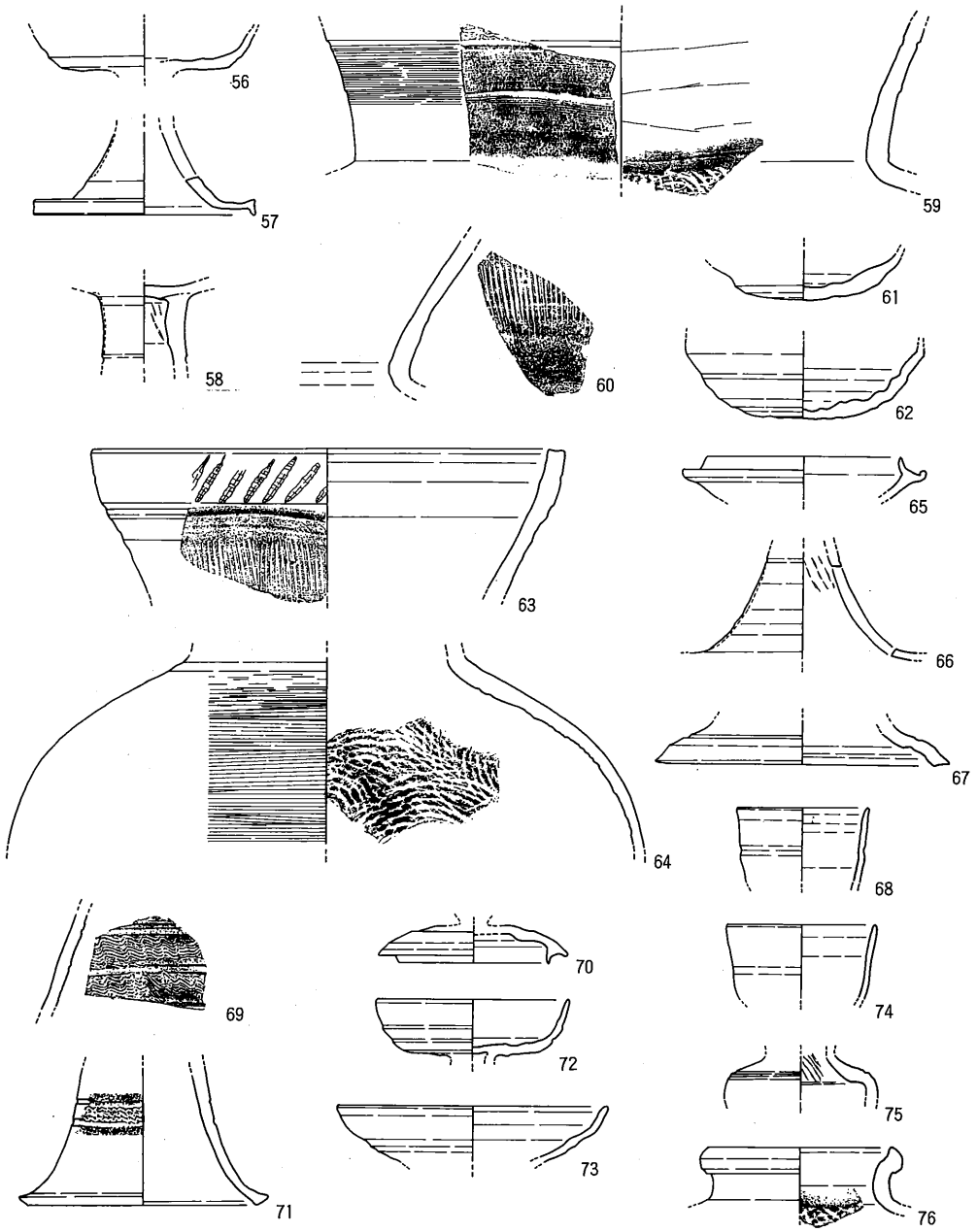
第10表　楠井1号墳周溝内土器群出土遺物観察表(2)

提瓶（49）は体部の破片である。外面にはカキ目が施され，体部の正面であることがわかる。分割成形された接合部で側面と剝離する。

杯蓋（50）は，7世紀末葉以降に一般化する器種であり，口縁部形態などから7世紀末葉～8世紀初頭頃の所産と思われる。

甕（51～55）には，短く外反する口頸部をもつ小型甕（51），長く伸びる頸部をもつ中型甕（52・53）がある。52は頸部にヘラ描きの斜線を施文し，体部叩きの後にカキ目を施す。53～55は同一個体と考えられるものである。口縁部は断面矩形に肥厚し，端部を突帯状にツマミ上げる。体部の平行叩き目は，上半が垂直方向に，下半が左下がりに施されており，いわゆる「叩き締めの円弧」(1)を描く。底部付近ではこの叩き目の後に，不定方向の叩きが行われる。丸底化に伴う叩きであろう。さらにこれに後出して，全体にカキ目調整が行われる。

古墳出土の須恵器についてまとめておこう。周溝土器群Ⅱの須恵器は，時期的に大きく2時期に分けることができる。県内各地の須恵器窯の資料(2)から，無蓋長脚高杯（30～33）・台付椀（41・42）・短頸壺（46）・提瓶（49）・甕（52）が，口径の大きい杯蓋（28）に伴うものとみられ，古相の一群に判断できる。また，無蓋短脚高杯（34～37）・椀（39・40）・鉢（43）・甕（53～55）が，口径の小さく立ち上がりの退化した蓋杯（27・29）に伴うとみられ，新相の一群に位置付けられる。蓋（38）や長頸壺（44・45），また平瓶（48）などは判断が難しい。陶邑編年との対応関係は，古相が田辺編年(3)のＴＫ209型式・中村編年(4)Ⅱ型式5段階にあたるとみられ，新相は田辺編年TK217型式・中村編年Ⅱ型式6段階に相当するものと思われる。玄室内出土須恵器は，脚台付壺（10）を除いて新相にあたる。



56　土器溜り2
57　C－2区
58～60　D－5区
61～64　E－5区
65～69　E－6区
70　F－5区
71～76　F－7区

第41図　包含層出土須恵器(1)

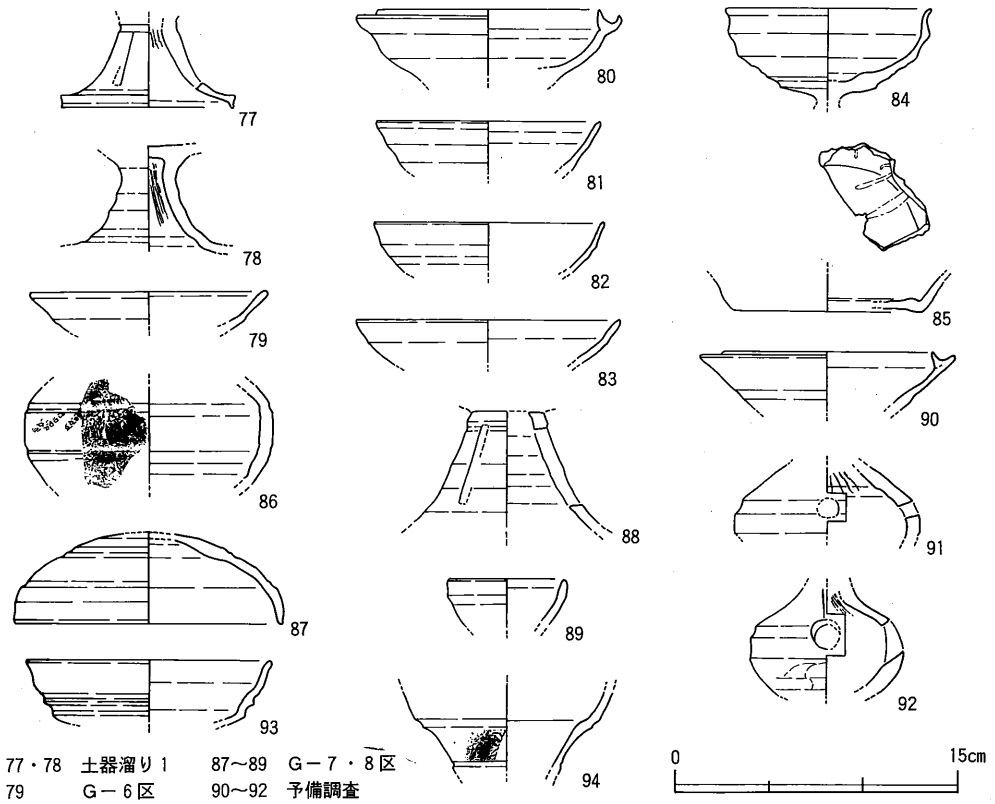
番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
56	須恵器高杯	—	1mm以下の砂粒	良好	灰白	(体)回転ナデ →(底)回転ヘラ削り	(体・底)回転ナデ	杯部1/4
57	須恵器高杯	(底)11.8	1mm以下の砂粒	良好	灰白	(脚)回転ナデ→長方形スカシ	(脚)回転ナデ	底径1/8
58	須恵器高杯	—	1mm以下の砂粒	良好	(外)灰 (内)灰白	(脚)回転ナデ →長方形スカシ	(底・脚)回転ナデ	3/8
59	須恵器 甕	—	2mm以下の砂粒	良好	(内外)灰 (断)灰赤	(頸)回転ナデ→沈線・波状文・カキ目	(頸)回転ナデ (体)当て具痕	細片
60	須恵器 甕	—	3mm以下の砂粒	良好	灰	(頸)回転ナデ →ヘラ描き斜線	(頸)回転ナデ	細片
61	須恵器杯身	(底)3.6	1mm以下の砂粒	良好	灰白	(体)回転ナデ →(底)回転ヘラ削り	(体・底)回転ナデ	底径完存
62	須恵器 壺	(底)4.3	1mm以下の砂粒	良好	(外)黄灰 (内)にぶい赤褐	(体)回転ナデ →(底)回転ヘラ削り	(体・底)回転ナデ (底)当て具痕	底径3/4
63	須恵器 甕	(口)24.0	2mm以下の砂粒	良好	黒	(口・頸)回転ナデ→ヘラ描き斜線・刺突文	(口・頸)回転ナデ	口径1/10
64	須恵器 甕	—	1.5mm以下の砂粒	良好	灰白	(体)カキ目	(体)当て具痕	細片
65	須恵器杯身	(口)10.5	1mm以下の砂粒	良好	(外)黄灰 (内)灰オリーブ	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/6
66	須恵器高杯	—	2mm以下の砂粒	良好	灰	(脚)回転ナデ→長方形スカシ	(脚)回転ナデ	脚部1/2
67	須恵器高杯	(底)16.0	1mm以下の砂粒	良好	灰	(脚)回転ナデ	(脚)回転ナデ	底径1/8
68	須恵器 壺	(口)7.1	1mm以下の砂粒	良好	灰	(口)回転ナデ	(口)回転ナデ	口径1/5
69	須恵器 甕	—	1mm以下の砂粒	良好	灰	(頸)沈線→波状文	(頸)回転ナデ	細片
70	須恵器 蓋	(口)8.2	2mm以下の砂粒	良好	(外)黄灰 (内)灰	(口・体)回転ナデ →(天井)回転ヘラ削り	(口・体・天井)回転ナデ	口径1/2
71	須恵器高杯	(底)12.4	1mm以下の砂粒	良好	灰	(脚)回転ナデ →沈線→波状文	(脚)回転ナデ	底径1/12
72	須恵器高杯	(口)10.4	1mm以下の砂粒	良好	(内外)黄灰 (断)にぶい褐	(口・体)回転ナデ →(底)回転ヘラ削り	(口・体・底)回転ナデ	口径1/10
73	須恵器高杯	(口)14.8	2mm以下の砂粒	良好	灰	(口・体)回転ナデ →(底)回転ヘラ削り	(口・体・底)回転ナデ	口径1/5
74	須恵器 壺	(口)8.1	2mm以下の砂粒	良好	灰	(口)回転ナデ	(口)回転ナデ	口径1/8
75	須恵器 甑	—	1mm以下の砂粒	良好	灰	(体)回転ナデ→沈線	(体)回転ナデ	頸部1/5
76	須恵器 甕	(口)10.0	1mm以下の砂粒	良好	灰	(口・頸)回転ナデ	(口)回転ナデ(体)当て具痕	口径1/6

第11表　包含層出土須恵器観察表(1)

(2)　包含層出土遺物

56～94は包含層や中世土器溜りに混在していた資料であり，出土地点別に図示した。器種としては，須恵器杯蓋（87），杯身（61・65・80・90），高杯（56～58・66・67・71～73・77～79・81～84・88・93），甑（75・86・91・92・94），瓶類（平瓶・提瓶）口縁（68・74・89），甕（59・60・63・64・69・76）がある。いずれも１号墳と併行する時期のものであり，大きく隔たることはない。出土地点でみると，56・57は２・３号窯跡周辺から出土しており，77・78は土器溜り１から出土している。これらは１号墳とは谷底を隔てて相対する斜面に位置していることから，自然状態で１号墳から移動してきたとは考えられない。付近に別の古墳が存在した可能性を示唆する。

これらの中で71の高杯脚部は，沈線で区画され，波状文で飾られる文様帯をもっており，あまり開かない脚端部とあいまって，やや特異な存在である。また，無蓋短脚高杯に体部の開いた皿形の杯部をもつもの（73・79・81～83）が目立つ。あるいは若干時期の下るものかもしれない。94の甑の頸部には，「＞」形のヘラ記号がある。



77・78　土器溜り1　　87～89　G－7・8区
79　　G－6区　　90～92　予備調査
80～86　G－7区　　93・94　不明

第42図　包含層出土須恵器(2)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
77	須恵器高杯	(底)9.0	精良	良好	灰	(脚)回転ナデ→長方形スカシ	(脚)回転ナデ	底径1/4
78	須恵器高杯	—	1mm以下の砂粒	良好	灰	(脚)回転ナデ	(脚)回転ナデ	脚部3/4
79	須恵器高杯	(口)12.4	精良	良好	灰	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/5
80	須恵器杯身	(口)11.8	1mm以下の砂粒	良好	(外)灰黄 (内)灰	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/4
81	須恵器高杯	(口)11.8	精良	良好	灰	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/12
82	須恵器高杯	(口)12.1	精良	良好	灰	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/6
83	須恵器高杯	(口)13.9	2mm以下の砂粒	良好	灰	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/12
84	須恵器高杯	(口)10.8	精良	良好	(外)灰オリーブ (内面)灰	(口・体)回転ナデ→ (底)回転ヘラ削り→ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/3
85	須恵器 杯	(底)10.0	精良	良好	オリーブ黒	(体)回転ナデ →(底)回転ヘラ切り	(体・底)回転ナデ	底径1/4
86	須恵器 甕	—	1mm以下の砂粒を少量	良好	灰	(体)回転ナデ →沈線・刺突文	(体)回転ナデ	体部1/8
87	須恵器杯蓋	(口)14.0	2mm以下の砂粒	良好	黄灰	(口・体)回転ナデ →(天井)回転ヘラ削り	(口・体・天井)回転ナデ	口径1/12
88	須恵器高杯	—	1mm以下の砂粒を少量	良好	灰	(脚)回転ナデ→長方形スカシ	(脚)回転ナデ	脚部1/4
89	須恵器 壺	(口)6.0	1mm以下の砂粒	良好	灰	(口)回転ナデ	(口)回転ナデ	口径1/5
90	須恵器杯身	(口)11.0	精良	良好	灰	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/3
91	須恵器 甕	—	精良	良好	灰白	(体)回転ナデ	(体)回転ナデ	細片
92	須恵器 甕	—	精良	良好	灰	(体)回転ナデ →(底)静止ヘラ削り	(体・底)回転ナデ	体部1/8
93	須恵器高杯	(口)12.8	精良	良好	(内外)灰 (脚)浅黄・暗灰	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/8
94	須恵器 甕	—	1mm以下の砂粒	良好	(外)黒 (内)灰黄	(脚)回転ナデ→ヘラ記号	(脚)回転ナデ	体部1/8

第12表　包含層出土須恵器観察表(2)

2. 中世の遺物

遺跡の性格上，遺物の大半が中世土器生産に関わるものであった。その総量は28㍑入りコンテナに換算して約350箱になる。その内容は土師質足釜・鍋を主体として，これに一定量の瓦質ないし須恵質の擂鉢と土師質の甕が加わる，というのが基本である。この主要4器種の他に，少量の捏鉢や壺・土錘・蓋なども生産される。これらは胎土や技法（成形・調整・焼成）の共通性から国分寺楠井遺跡における生産品目と判断できるものである。これら以外に土師質杯・皿，東播系須恵器捏鉢，備前焼甕・四耳壺，亀山焼甕，堺近郊産瓦質土器甕，瀬戸天目碗，中国産磁器（青磁・白磁）などの搬入品も認められる。特に国産陶器である東播系須恵器や備前焼・亀山焼がかなりの量搬入されている点に，中世前期末から後期前半にかけての特徴がよく表れている。

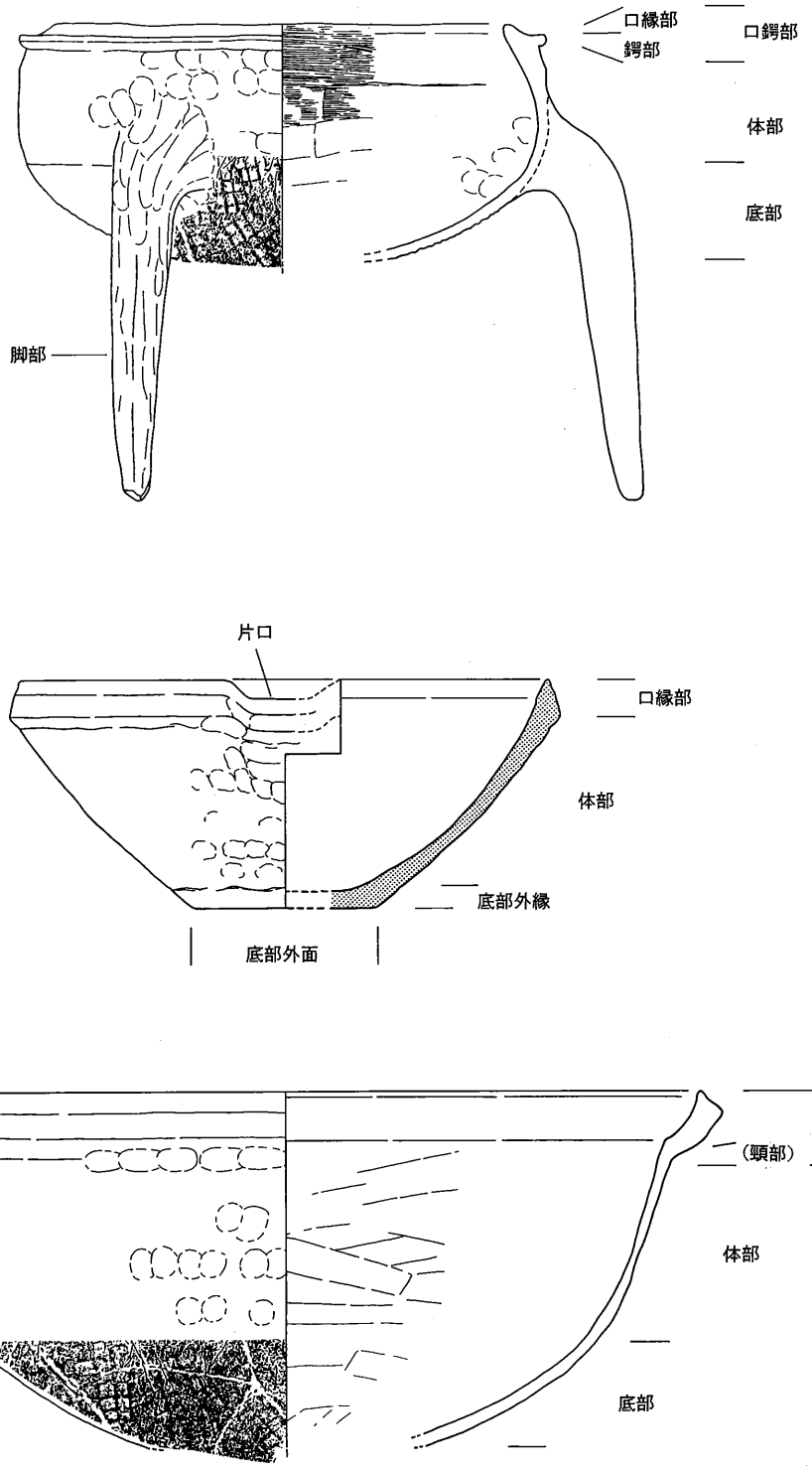
楠井産の主要4器種については，各器種内でかなりの形態的な差異があり，同時に出土遺構毎に多少その構成比を異にするようである。その詳細については個別に後述するが，ここではその前提として型式分類案を提示しておきたい。分類の基準として，形態的な要素と技法的な要素があるが，当然のことながら両者は全く別の構成要素ではなく，むしろ密接な関連をもつことが考えられる。これが最も端的に表れるのが口縁部形態と底体部形態（屈曲度）であり，粘土紐の接合方法や端部調整の方法（使用工具の種類やその強弱・頻度），また叩きの範囲や強弱によって，その形態は規定される。

なお各器種の部位呼称は，第43図を参照されたい。

［擂鉢］

内面に櫛状工具による卸し目（摺り目）を施した鉢を擂鉢とする。卸し目を施す工具については，櫛状の条線をもつものが考えられる。少量の事例では，体部内面の下半付近に横方向の擦痕を認めることができる。この擦痕は明らかに焼成後に付けられたものであり，使用痕として判断される。なお，卸し目の施されない小型の鉢も少量存在する。報告ではこれを捏鉢と呼称するが，消費地資料では同様の擦痕が内面に認められることが，しばしばある。したがって実際の使用形態では，両者を「おろす」「こねる」という機能で単純に分離することが困難であるといえよう。

技法的には底部外面に下駄印を確認できることから，ロクロ上に粘土円板を置き，その上に粘土紐を巻き上げ成形したと考えられる。しかしロクロ回転を利用したとみられるのは，口縁端面付近のナデ調整と底部外面のナデ（削り）調整のみである。これに対して，



第43図　各器種の部分名称

体部外面は無調整か縦ハケ調整，内面は一周を数回に分割して施した板ナデもしくはハケ目調整であり，ロクロ回転を利用していない。上記のようにロクロ上で製作されながら，回転運動を効率的に駆使しきれていない点が，技法上の最大の特徴である。

擂鉢Ａ類

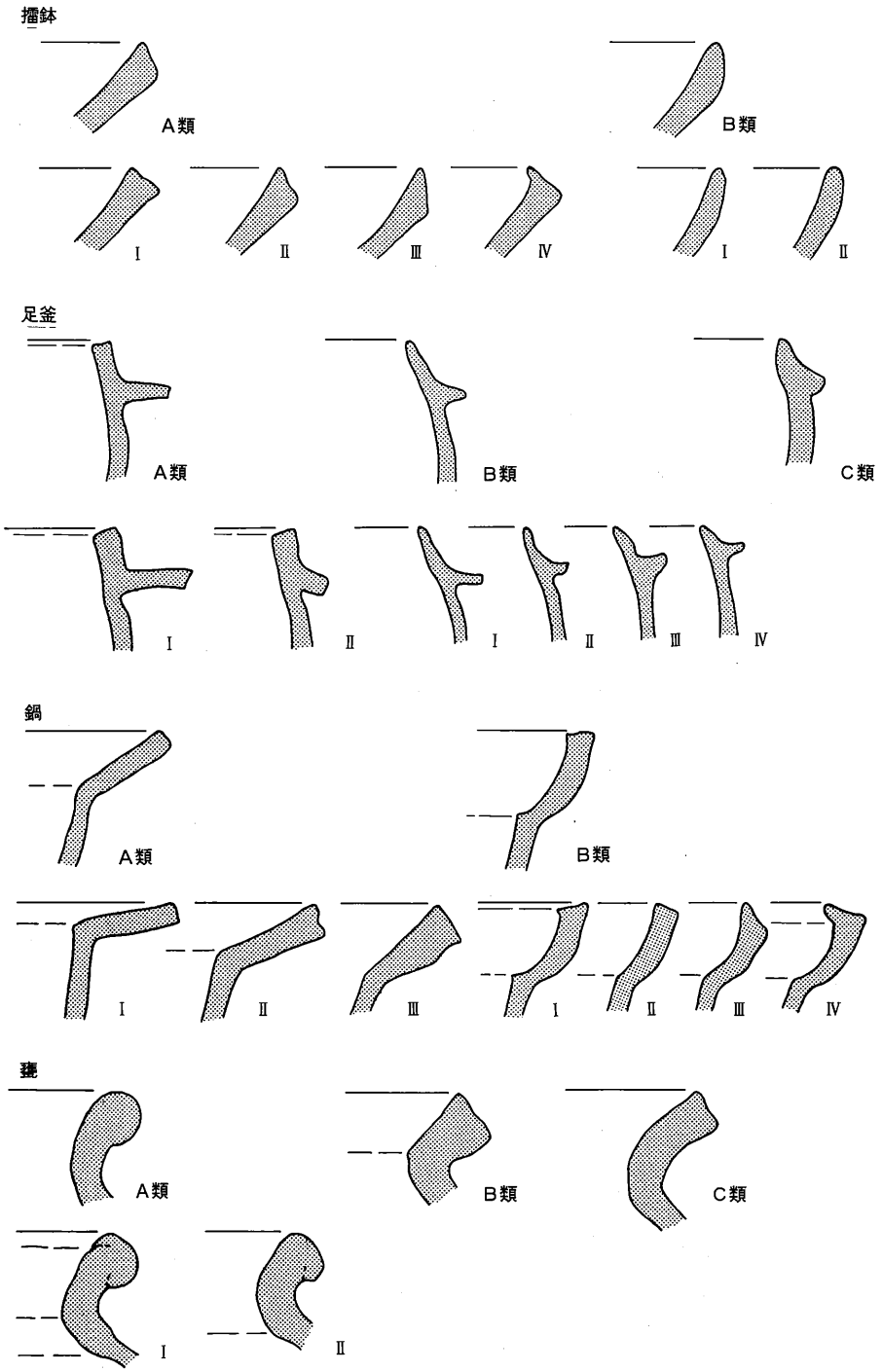
外傾する口縁部端面をもつもの。端面の外傾度と端部の形態によってＡⅠ類～ＡⅣ類に細分した。なお，各細分型式では端面をさほど強く回転ナデ調整しないものと，強く回転ナデ調整するものの２者がある。この点を重視すればさらなる細分も可能である。なおＡⅡ類では，少量であるが端面上半に沈線を施すものが認められる。多くは内面に横方向の板ナデ調整を施しており，その後口縁端面付近を回転ナデ調整する。ＡⅠ類の内面調整は粗い横ハケ調整である。焼成は土師質・瓦質・須恵質の３者がみられるが，非常に堅緻な須恵質焼成もしばしば認められることから，本来，還元焔焼成を意図した窯焚きが行われたことは明らかである。

擂鉢Ｂ類

口縁端部が丸いもの。端部下の外面に端面状の弱い屈曲をもつもの（ＢⅠ類）と，屈曲をもたないもの（ＢⅡ類）がある。これは，口縁部に回転ナデ調整を施すか否かの差異が表れたものと考えられる。焼成は瓦質ないし軟質な須恵質である。

［足釜］

口縁部直下に鍔部をもつ，いわゆる羽釜状の形態に３本の脚部を貼付するもの。底部にはほとんど例外なく格子叩き目が施される。叩き技法については第５章第１節で詳述するが，丸底化という底体部成形の重要な作業工程を反映するものである。また口縁部と鍔部の成形には，体部から口縁部までを成形した後に鍔部を接合する方法（口縁１技法：鍔部接合法）と，体部上端を外反させて鍔部を作り，その上に口縁部を接合する方法（口縁２技法：鍔部屈折法），さらに体部上端に１本の粘土紐を接合し，そこから口縁部と鍔部を同時に成形する方法（口縁３技法：一体接合法）の３者が認められる。その識別は容易ではないが，接合痕の観察と鍔部直下の押圧痕，断面形態の微細な差などから，ある程度類推可能である。ところで讃岐では13世紀代以降，土釜で脚部の付かないものはほとんど認められない。このため脚部の有無を主要な分類の一基準とすることはできない。口縁部・鍔部の形態分類とその接合方法，また叩き技法の範囲・度合いに規定される底体部形態がよく対応するため，これらの組合せを細別基準とした。



第44図　主要４器種の型式分類案

足釜A類

口縁部と鍔部の長さがほぼ同じか，やや鍔部の長いもので，口縁端部には内傾する面をもつ。足釜B類に比べて点数が少なく，また細片が多いことから細分は難しいが，一応AⅠ類・AⅡ類に細分してみた。AⅠ類は水平に長く伸びる鍔部をもち，鍔部端面に強い横ハケ調整を施して平坦面を作る。口縁端面も明瞭である。やや器壁の厚い一群と，薄い一群があるが，点数が少ないため個体差か型式差か判断できない。AⅡ類はやや鍔部が短く鍔部端面のハケ目調整もない。口縁部と鍔部の端面はやや丸味を帯びた平坦面となる。

足釜B類

口縁部が鍔部よりも長いもので，口縁端部には面をもたない。足釜の中で数量も形態差も最も豊富であり，時期設定にあたって重要な基準となる型式である。口縁部・鍔部長の相対的な長短によって，BⅠ類～BⅣ類の設定が可能である。技法的には鍔部調整と叩き成形の範囲によってBⅠ類とそれ以外の明瞭な分離ができる。また，体部外面のハケ目調整の有無や頻度によってもBⅠ類とBⅡ・Ⅲ類，BⅣ類の3者に分けられる。さらに口縁部・鍔部の接合方法によっても，BⅠ～Ⅲ類とBⅣ類にほぼ分離できる（第13表参照）。

なお，B類にかなり普遍的にみられる成形痕として，鍔部直下の1段ないし2段の爪形圧痕がある。これは鍔部接合ないし成形の際に，指もしくは工具で鍔部の下側を押圧して付けられたものと考えられる。この成形痕については，土器溜り1第Ⅰa層出土遺物の報文中において詳述したい。

	口縁部・鍔部の接合方法	鍔端部調整	体部外面調整	叩きの範囲	底体部形態
BⅠ	口縁1技法（鍔部接合法）主体	強いハケ目	縦ハケ	体部下半に及ぶものあり	半球形
BⅡ	同上	横ナデ	稀に縦ハケ	底部に限定される	境で屈曲
BⅢ	口縁2技法（鍔部屈折法）と口縁1技法	同上	同上	同上	同上
BⅣ	口縁3技法（一体接合法）と口縁2技法	同上	ほとんど無調整	同上	同上

第13表　足釜B類の型式細分と技法

足釜C類

口縁部と鍔部の分化が不明瞭で，特に鍔部は体部と一体化したような，瘤状の縁帯となっているものである。細片が多いために全体の形状は明らかではないが，高松市東山崎・水田遺跡C地区第1面SK22出土資料などから，底部に叩き目を施し，脚部を伴った讃岐通有の形態であることがわかる。

［鍋］

直線的な体部から屈曲して伸びる口縁部をもつ。器高が口径の1／2に満たない浅い形態である点で，古代の甕とは明確に区別できる器種である。足釜同様，底部には格子叩き目が施される。また，脚部の付いた鍋（足鍋）の確実な事例は指摘できない。焼成は，BⅠ類に瓦質ないし軟質な須恵質のものがしばしばみられる他は，全て土師質焼成である。口縁部の形態により鍋Aと鍋Bに分けられる。

鍋A

直線的に伸びる口縁部をもつものである。AⅠ類は，口縁端面にハケ目を施して平坦面としており，口縁部内外面や体部外面にもハケ目が多用される。AⅡ類は，口縁端面に凹面が形成されるものである。この凹面は，横ナデ調整によって生じる場合と，口縁部内外面の強いナデによって粘土が端面にはみ出すことで生じる場合とがあり，凹面形成の要因が全く異なる。端面は外傾するものと，直立気味のものがあり，また拡張の度合いにも個体差がある。ハケ目（板ナデ）調整はほぼ口縁部内面に限定され，稀に体部にみられる程度である。AⅢ類は，幅の広い外傾する口縁端面をもつものである。

鍋B

内弯して立ち上がる口縁部をもつものである。BⅠ類は，内傾する口縁端面をもつ。口縁端面や頸部の屈曲，あるいは口縁部の内弯が非常にシャープであり，鉄鍋の直接的な模倣形態であることが想定される。BⅡ類は，口縁部に対して直交した外傾する端面をもつ。BⅢ類は，直立気味の口縁端面をもつものであり，鍋AⅡ類の口縁部内面を強くナデて内弯させたような形態である。BⅣ類は，口縁端部をつまみ出して内側に折り込んだものである。

［甕］

ここでいう甕は煮沸器種ではなく，貯蔵器種としての機能をもったものである。いずれも体部外面には格子叩き目を施すものが多く，板状工具で叩き痕を消すもの，あるいは叩きを全く施さずに指オサエ痕を残すものも少量認められる。また底部は平底であり，外面

に下駄印を残すことからロクロ上で製作されたことがわかる。ただし，ロクロ回転を利用したと考えられるのは,頸部から口縁部にかけてのナデ調整のみであり,そのナデ調整もさほど強いものではない。したがって擂鉢同様，ロクロの効率的な使用は想定し難い。基本的に体部・底部の形態や技法が同じため，分類の基準となるのは口縁部形態である。

甕A

口縁部が丸く肥厚するもの。接合痕の観察から，頸部上端（擬口縁）の内外面に粘土紐を被せるもの（ＡⅠ類）と，外面にのみ被せるもの（ＢⅡ類）とに細別できる。後者は粘土紐の接合のみでは口縁の肥厚が十分でないため，頸部外面を強くナデ調整することで相対的な肥厚を強調する。

甕B

口縁部が断面方形に短く肥厚するもの。

甕C

外反する口頸部をもち，口縁端面に外傾する面をもつもの。頸部には縦ハケ調整が行われ，端面は強いナデのため凹面を形成するものが多い。形態差が著しいが，点数が少ないために現段階では細分は困難である。

以上が主要４器種の型式分類案である。中にはこれらの特徴を典型的に示すものや，逆にやや細別基準にそぐわないものもあるが，それらについては個々の遺物の報告において，具体的に触れたい。

なお，楠井産の土器は器種によって焼成が異なる傾向にある。このため通常の理解では同一の窯や灰原の遺物を土師器・瓦質土器・須恵器などと呼び分けることになる。足釜・鍋・甕はほぼ土師質で占められており，土師器あるいは土師質土器と呼称しても支障ないが，擂鉢は同一型式においても土師質・瓦質・須恵質とばらつきがあり，消費地資料でも３者が存在する。また甕は，古代以来土師器に欠落していた貯蔵器種であり，叩き技法からみても須恵器系の技術によることは明らかである。擂鉢にみられる焼成の多様性や，複雑な系譜をもつ各器種が同一生産地で生産されているという点を重視して，報文中や観察表では各器種に土師器・瓦質土器（瓦器）・須恵器などの名称を使用することはしばらく措くことにし，焼成による呼称（土師質・瓦質・須恵質）を採りたい。

(1)　1号窯跡出土遺物（第45～48図，第14～16表）

窯体内の埋土や床面から小皿・擂鉢・足釜・鍋・甕・蓋が出土している。遺物量がわずかであるため，図化可能な資料はほぼ全て示した。甕以外は細片が多く，どの遺物が1号窯跡で焼成されたものか，判断が難しい。ただし窯壁の被熱状況からみると，還元焔焼成が主体的な擂鉢A類は除外できると考える。また，体部最大径が50cm前後にも達する甕も，除外してよいであろう。

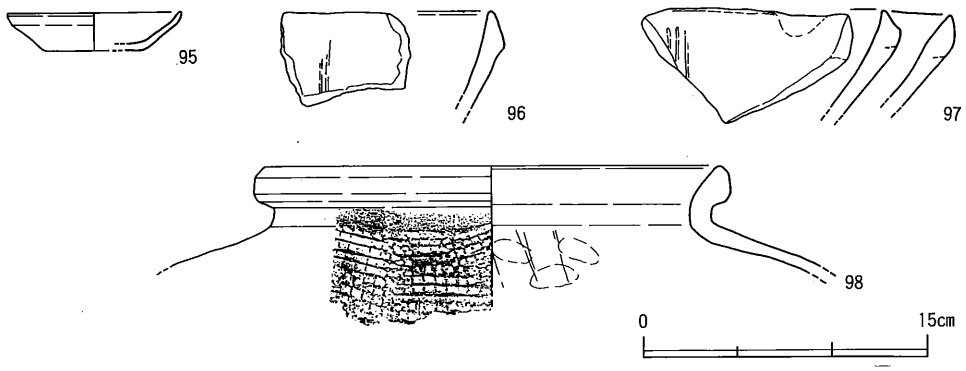
擂鉢は全てAⅢ類であるが，口縁端面を明瞭に作るもの（96・97・99）とやや不明瞭なもの（100）がある。いずれも細片であり，廃窯後に流れ込んだ可能性がある。

足釜も細片が多い。窯体内埋土下位と床面直上の出土資料をみる限りBⅣ類（103・104・114・115）が多く，これに少数のBⅡ類（101・113）・BⅢ類（102）が加わる，という構成になっている。本来窯に伴うものと混入品との識別は難しい。101は摩滅が著しいが，鍔部直下に押圧に伴う爪形圧痕がある。102は体部の縦ハケ上端が鍔部直下の横ナデによって消されている。このことから体部の調整が終了した後に鍔部が接合されたことがわかる。

鍋は，BⅢ類で口縁部内面を2段に横ナデ調整するものがあり，特に下段のナデを強く施すもの（106・107）が認められる。強いナデのために，体部から口縁部への屈曲は極めてシャープである。これは，細部のくせを共有するものであり，複数認められることから，本窯の製品の可能性がある。

甕にはAⅠ類（108）とAⅡ類（98・109～112）がある。大きさから本窯に伴わない可能性もあるが，形態的にほぼAⅡ類でまとまることから，本窯の操業時期を示す資料となろう。109～112は頸部の横ナデが強く行われており，相対的な口縁部の肥厚を強調する。体部外面には格子叩き目が施され，内面は横ハケによって当て具痕を消している。112の外面は摩滅しているものの縦ハケがかすかに看取できる。

この他，注意される特殊品に，外面に印花文を施した蓋（119）がある。口縁部内面には1条の沈線が施される。ツマミが付されていたかどうかは，明らかにできない。印花文は2個接して押捺されているが，3号窯跡灰原の事例などを参考にすると，本来は「∴」形に3個配されていたとみられる。この蓋とセットになる器種については明らかではないが，頸部内面に蓋受けをもつ壺（753・1440）のような事例と法量的に近似している。



第45図　1号窯跡　窯体内埋土上位出土遺物

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
95	杯	(口)9.0 (高)2.9 (底)4.6	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/5
96	擂鉢 AⅢ	—	2mm以下の砂粒を多量	土師質	明黄褐	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
97	擂鉢 AⅢ	—	3mm以下の砂粒	土師質	(内)黒褐 (断)明黄褐			細片
98	甕 AⅡ	(口)24.0	1mm以下の砂粒	土師質	明褐	(体)格子叩き→(口)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/2

第14表　1号窯跡　窯体内埋土上位出土遺物観察表

(2)　2号窯跡出土遺物（第49・50図，第17表）

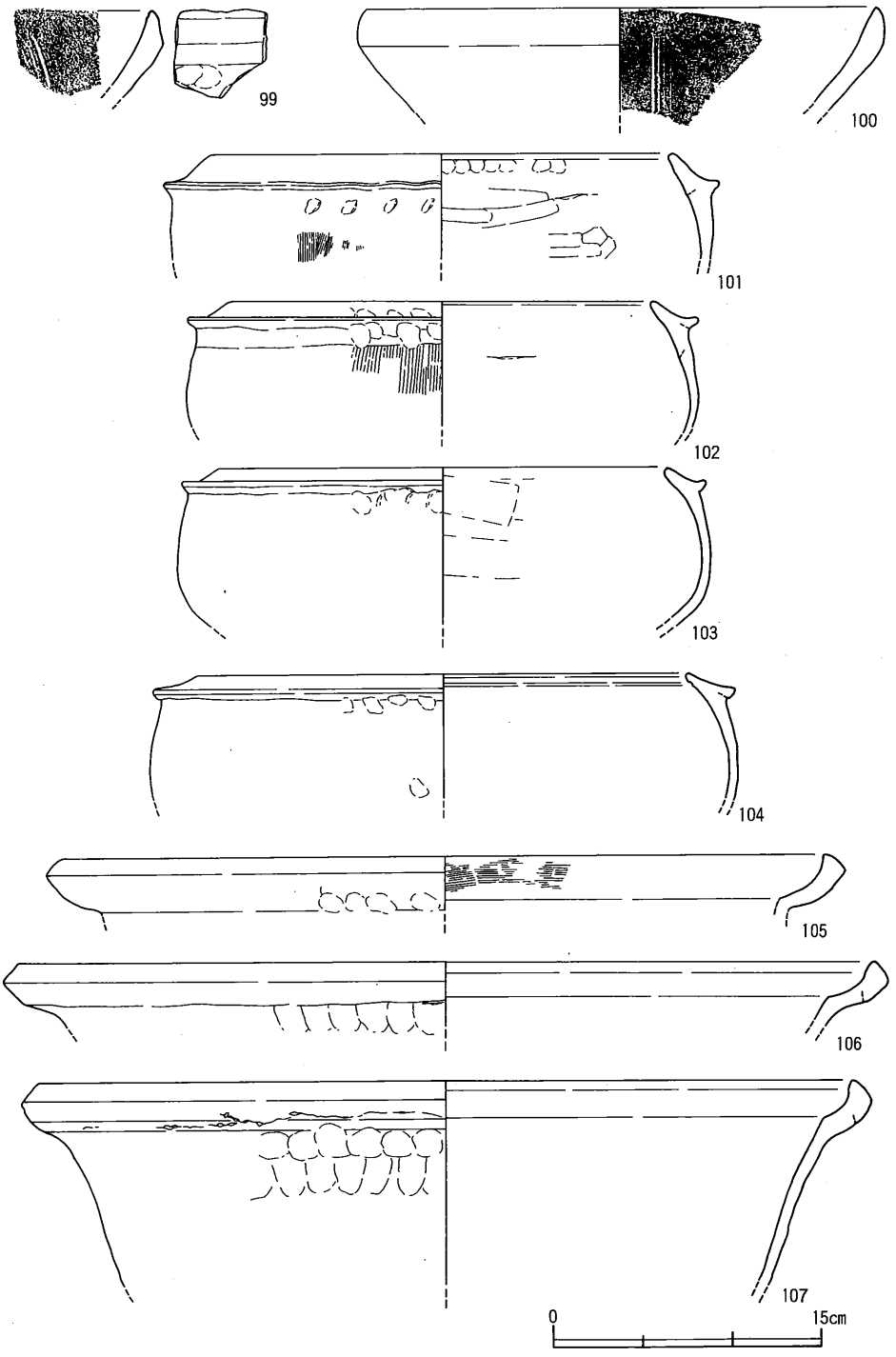
窯体内出土と窯体掘り方出土の遺物がある。窯体の遺存状況が比較的良好だったにもかかわらず，窯体内で出土した遺物量は極めて少なかった。

［窯体内出土遺物（120～134）］

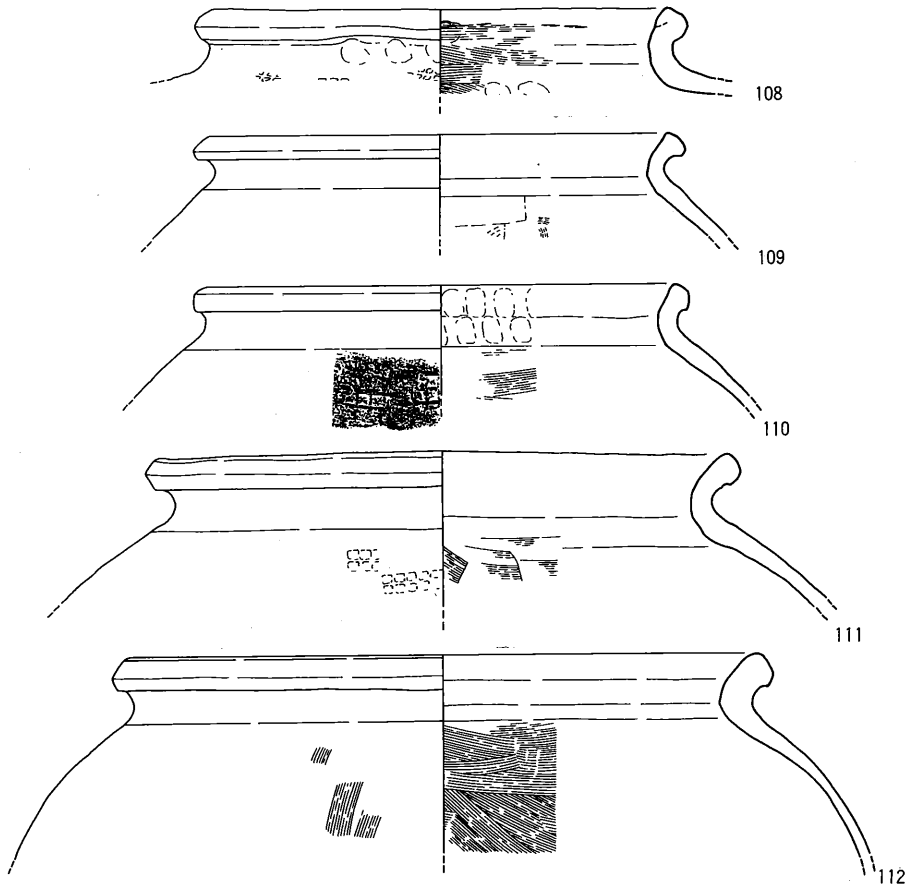
窯体内埋土と床面直上の土器には，杯・小皿・擂鉢・足釜・鍋がある。

杯（131）は，同系統と考えられる土器溜り1出土の232よりも口径・器高ともに縮小化の傾向を指摘できる。同様に小皿（132）も，土器溜り1出土資料（240～243）ならびに1号窯跡出土資料（95）に比して縮小化が著しい。

擂鉢はAⅡ類（121）とBⅡ類（122）がある。121の卸し目は，3本を1単位とした粗いものである。また120の卸し目原体（6本／1.9cm）は，土器溜り3の擂鉢1020・1023と同一である可能性がある。足釜にはBⅢ類（124）も1点みられるが，口縁部と鍔部の分化



第46図　1号窯跡　窯体内埋土下位出土遺物(1)



第47図　1号窯跡　窯体内埋土下位出土遺物(2)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
99	擂鉢 AⅢ	—	2mm以下の砂粒	土師質	(内外)黒 (断)褐	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
100	擂鉢 AⅢ	(口)28.0	2mm以下の砂粒	瓦質	(内外)黒褐 (断)灰白	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/8
101	足釜 BⅡ	(口)25.6	4mm以下の砂粒	土師質	(外)褐 (内)明褐	(体)縦ハケ→(肩)押圧 →(口・肩)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/8
102	足釜 BⅢ	(口)23.1	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(肩)押圧 →(口・肩)横ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/6
103	足釜 BⅣ	(口)24.6	4mm以下の砂粒を多量	土師質	浅黄橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/8
104	足釜 BⅣ	(口)27.0	2mm以下の砂粒を多量	土師質	橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)横ナデ	口径1/8
105	鍋 BⅢ	(口)42.0	4mm以下の砂粒を多量	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口)横ハケ→横ナデ	細片
106	鍋 BⅢ	(口)47.2	5mm以下の砂粒を多量	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)横ナデ	口径1/8
107	鍋 BⅢ	(口)44.8	3mm以下の砂粒を多量	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)横ナデ	口径1/4
108	甕 AⅠ	(口)23.8	2mm以下の砂粒を多量	土師質	にぶい黄橙	(体)格子叩き目 →(口・頸)回転ナデ	(口・頸)横ハケ →(口)回転ナデ	口径1/8
109	甕 AⅡ	(口)24.2	5mm以下の砂粒を多量	土師質	橙	(口・頸)回転ナデ	(体)当て具痕→板ナデ →(口・頸)回転ナデ	口径1/5
110	甕 AⅡ	(口)24.6	3mm以下の砂粒を多量	土師質	浅黄橙	(体)格子叩き目 →(口・頸)回転ナデ	(体)横ハケ →(口)回転ナデ？	口径1/6
111	甕 AⅡ	(口)29.6	6mm以下の砂粒を多量	土師質	浅黄橙	(体)格子叩き目 →(口・頸)回転ナデ	(体)横ハケ →(口・頸)回転ナデ	口径1/4
112	甕 AⅡ	(口)33.0	4mm以下の砂粒を多量	土師質	浅黄橙	(体)縦ハケ (口・頸)回転ナデ	(体)横ハケ →(口・頸)回転ナデ	口径1/4

第15表　1号窯跡　窯体内埋土下位出土遺物観察表

が不明瞭なC類（125・126・133）が3点ある。鉄鍋模倣の鍋BⅠ類（134）は口縁端部が丸く，明瞭な端面を形成しない。

以上のように，点数は少ないものの窯体内の遺物をみる限り，杯・小皿や擂鉢・足釜にみられる特徴は1号窯跡や土器溜り1などとかなり異なる内容をもつといえよう。

［窯体掘り方出土遺物（135・136）］

窯体掘り方内の埋土から，瀬戸焼天目茶碗（135）と備前焼四耳壺（136）が出土した。瀬戸焼天目茶碗は中央がやや窪んだ平高台状の底部をもち，体部下半は錆釉が施されて茶褐色を呈している。瀬戸大窯第3小期の所産であり，実年代にして16世紀第2四半期が相当する(5)。備前四耳壺は直立気味の頸部と小さく肥厚させた口縁部，またあまり強くは張らない肩部をもつ。外面と内面には接合痕が明瞭である。肩部にはヘラ書き状の刻線が認められる。間壁編年の第Ⅳ期B(6)にあたるとみられる。想定される年代は15世紀中葉～16世紀初頭頃である。

(3)　3号窯跡出土遺物（第51～53図，第18～19表）

窯体内と灰原灰層，また窯に伴うとみられるSD01からの出土遺物がある。いずれも出土量は極めて少なく，また細片が多い。

［窯体内出土遺物（137～145）］

床面直上の埋土中から，擂鉢・足釜・鍋・焙烙・壺などがある。

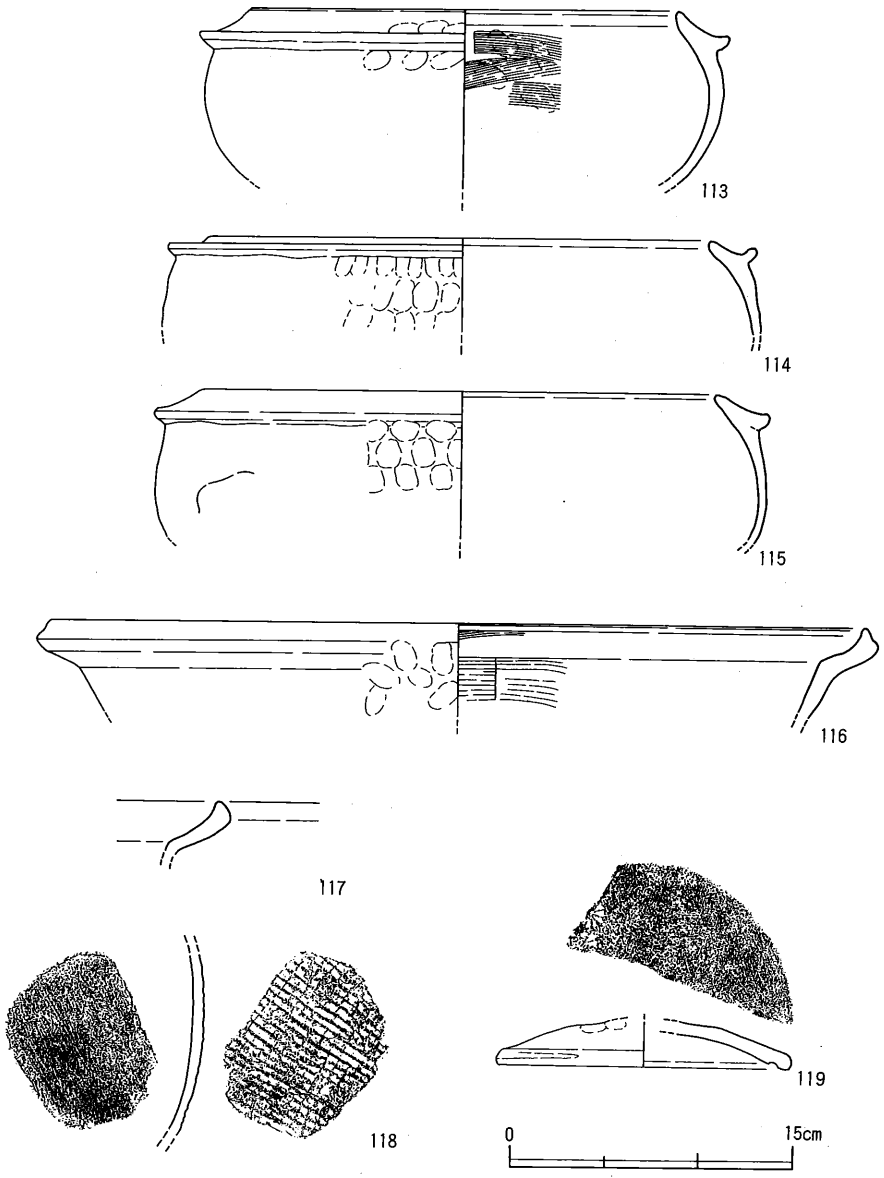
擂鉢（137・138）はAⅡ類である。端面を回転ナデ調整するために，体部に比して口縁部が肥厚気味になり，また端部を上方にツマミ上げたようになっている。細分型式ではAⅡ－2類にあたり，土器溜り2・3で主体を占める型式である。137の卸し目原体は，土器溜り2の803・804，土器溜り3の原体3と同一の可能性がある。また138の卸し目原体は，土器溜り3の原体5と同一である。

足釜（139・140）はBⅢ類である。また鍋（141）は口縁部端面が器壁に対して直交した角度をもつことから，BⅡ類に分類できる。

やや特殊な製品として，焙烙（143）がある。内弯して伸びる体部と口縁部をもつ。土器溜り2出土資料（925）や土器溜り3出土資料（1146）と同様な形態であり，格子叩き目による丸い底部をもつとみられる。

［灰原灰層出土遺物（146～151）］

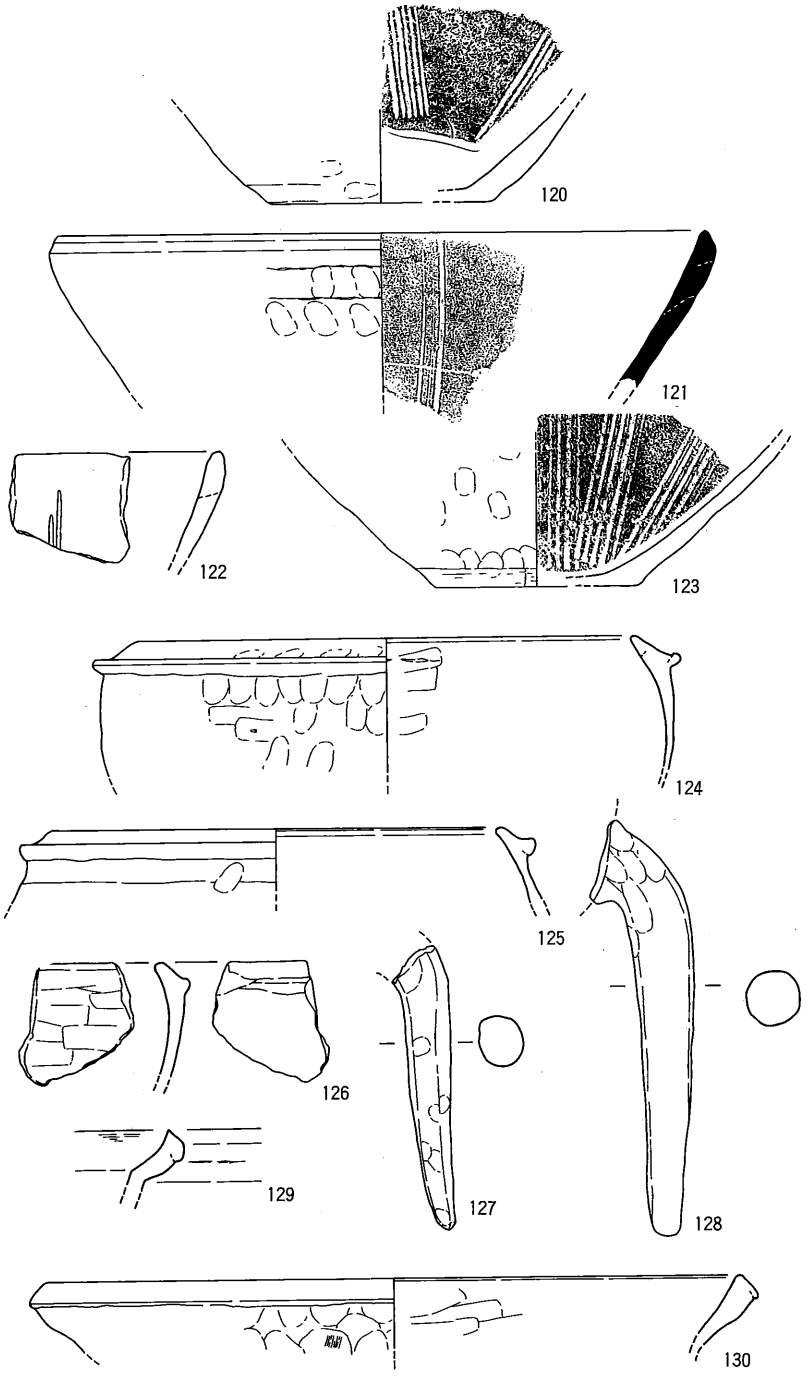
細片のみ出土しており，法量や全形を明確にできる資料に欠ける。また層厚が薄いため



第48図　1号窯跡　窯体内床面直上出土遺物

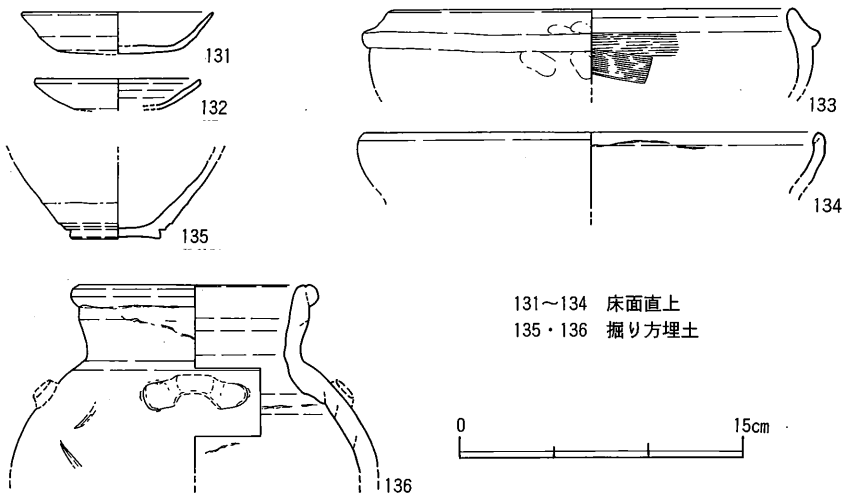
番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
113	足釜 BIII	(口)32.2	4mm以下の砂粒を少量	土師質	にぶい褐	(口-胴)横ナデ	(体)横ハケ→(口)横ナデ	口1/8
114	足釜 BIV	(口)26.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	調整不明	調整不明	口1/8
115	足釜 BIV	(口)27.0	3mm以下の砂粒を多量	土師質	橙	調整不明	調整不明	口1/8
116	鍋 BIII	(口)43.0	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口-体)横ハケ→(口)横ナデ	口1/10
117	鍋 BIII	—	4mm以下の砂粒	土師質	橙	調整不明	調整不明	細片
118	甕 体部	—	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	格子叩き目	縦ハケ	細片
119	蓋	(口)14.8	2mm以下の砂粒	土師質	(外)灰黄 (内)にぶい橙	(口-体)横ナデ →(体)印花文	(口)横ナデ	口1/4

第16表　1号窯跡　窯体内床面直上出土遺物観察表



120～130　窯体内埋土

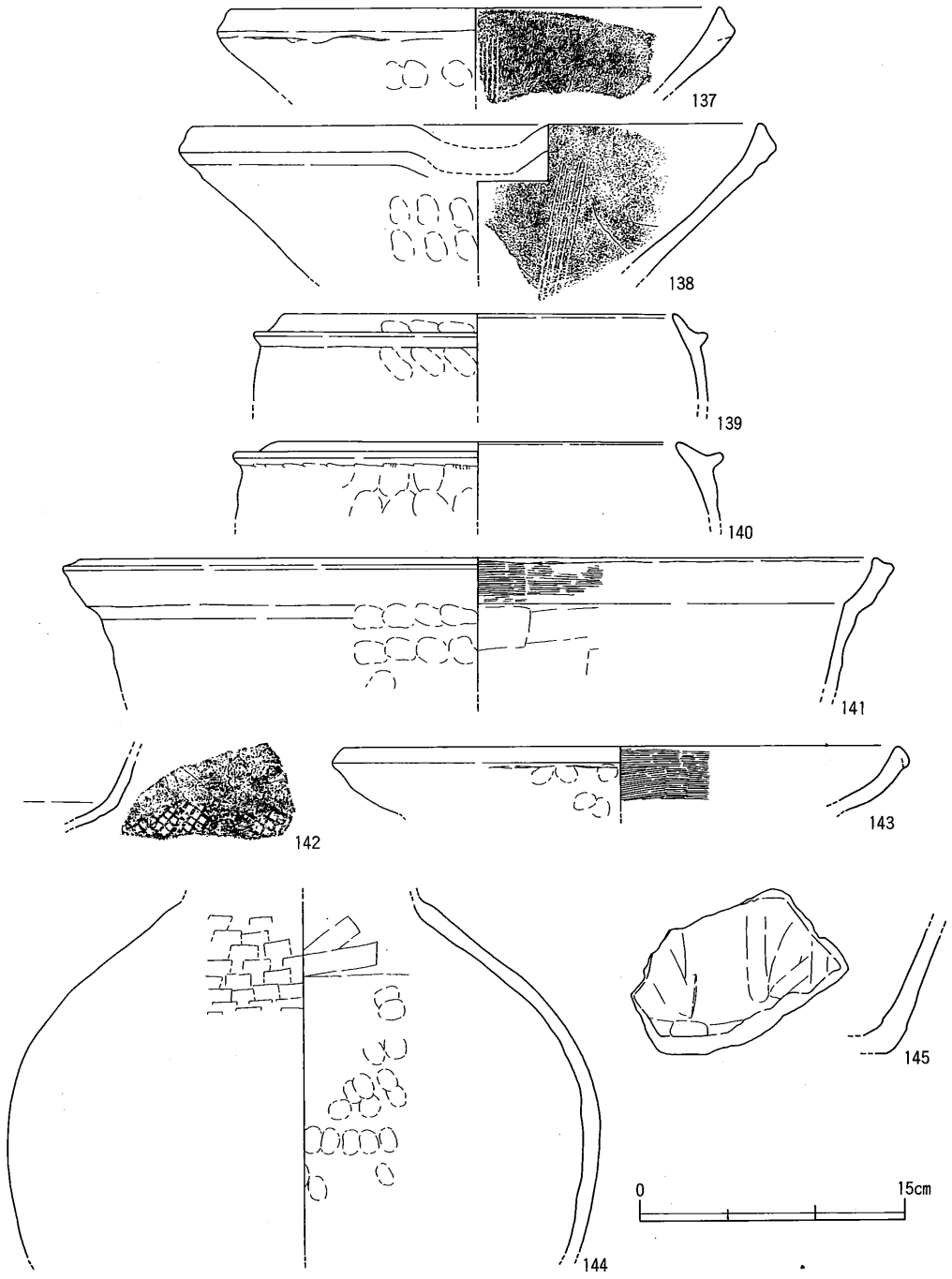
第49図　2号窯跡出土遺物(1)



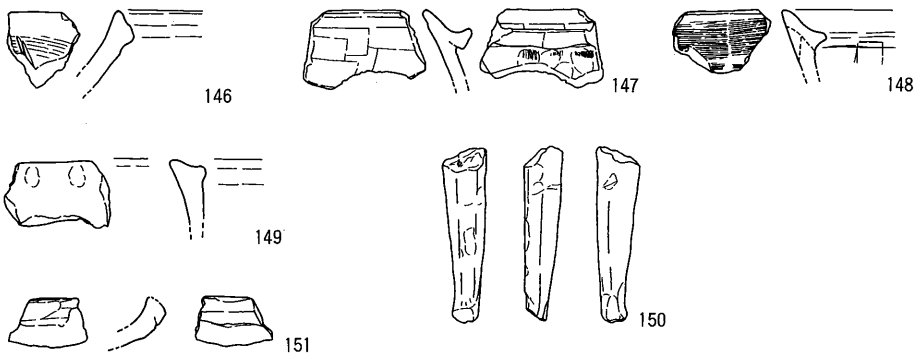
第50図　2号窯跡出土遺物(2)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
120	擂鉢 底部	(底)11.2	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(底外縁)削り状ナデ	(体)回転ナデ	底径1/2
121	擂鉢 AII	(口)34.0	1mm以下の砂粒	須恵質	(内外)灰白 (断)にぶい橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/12
122	擂鉢 BII	—	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
123	擂鉢 底部	(底)10.7	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(底外縁)削り状ナデ	(体・底)回転ナデ	底径1/4
124	足釜 BIII	(口)26.0	2mm以下の砂粒を少量	土師質	明黄褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ (体)板ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/8
125	足釜 C	(口)23.7	3mm以下の砂粒を少量	土師質	(内外)にぶい黄橙 (断)橙	(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/10
126	足釜 C	—	2mm以下の砂粒を少量	土師質	(外)明黄褐 (内)黄橙	(口・胴)横ナデ	(口)板ナデ→(口)横ナデ	細片
127	足釜 脚部	—	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	ナデ		脚部ほぼ完存
128	足釜 脚部	—	1mm以下の砂粒を少量	土師質	明赤褐	ナデ		脚部ほぼ完存
129	鍋 BII	—	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口)横ハケ→ナデ	細片
130	鍋 AIII	(口)36.5	2mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(口)横ナデ・縦ハケ	(口)板ナデ	口径1/8
131	杯	(口)10.0 (高)2.2 (底)6.4	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ (底)回転ヘラ切り	口径1/7
132	小皿	(口)8.6 (高)1.7	1mm以下の微細砂粒	土師質	にぶい橙	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/8
133	足釜 C	(口)21.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・胴)横ナデ	(体)横ハケ→(口)横ナデ	口径1/10
134	鍋 BI	(口)24.0	2mm以下の砂粒	土師質	(外)黒褐 (内)にぶい黄橙	(口)横ナデ	(口)横ナデ	口径1/12
135	瀬戸天目椀	(底)4.8	精良	陶質	(素地)暗赤褐 (釉)オリーブ黒	(底・体)回転ヘラ削り		底部完存
136	備前四耳壺	(口)12.4	2mm以下の砂粒を少量	陶質	明赤褐	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/4

第17表　2号窯跡出土遺物観察表



第51図　3号窯跡　窯体内出土遺物



第52図　3号窯跡　灰原灰層出土遺物

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
137	擂鉢 AⅡ	(口)27.2	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/8
138	擂鉢 AⅡ	(口)32.0	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄褐	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/5
139	足釜 BⅢ	(口)22.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・肩)横ナデ	(口・体)横ナデ	口1/8
140	足釜 BⅢ	(口)22.6	3mm以下の砂粒、5mm程の小石	土師質	黄橙	(口・肩)横ナデ	調整不明	口1/8
141	鍋 BⅡ	(口)44.2	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口)横ハケ (体)板ナデ	口1/10
142	鍋 底部	—	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(底)格子叩き目	(体・底)板ナデ	細片
143	焙烙	(口)30.8	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口・体)横ハケ	細片
144	壺 体部	—	4mm以下の砂粒を少量	土師質	明赤褐	(体)板ナデ	(体)板ナデ	体1/12
145	壺 底部	—	3mm以下の砂粒を少量	土師質	明赤褐	(体・底)板ナデ	(体・底)板ナデ	細片
146	擂鉢 AⅡ	—	2mm以下の砂粒を少量	土師質	浅黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)横ハケ	細片
147	足釜 BⅢ	—	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	細片
148	足釜 BⅢ	—	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・肩)横ナデ→(体)板ナデ	(口・体)横ハケ	細片
149	足釜 C	—	2.5mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・肩)横ナデ	(口・体)横ナデ	細片
150	足釜 脚部	—	1mm以下の砂粒を少量	土師質	明黄褐	ナデ		
151	鍋 BⅡ	—	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口)板ナデ	細片

第18表　3号窯跡　窯体内・灰原灰層出土遺物観察表

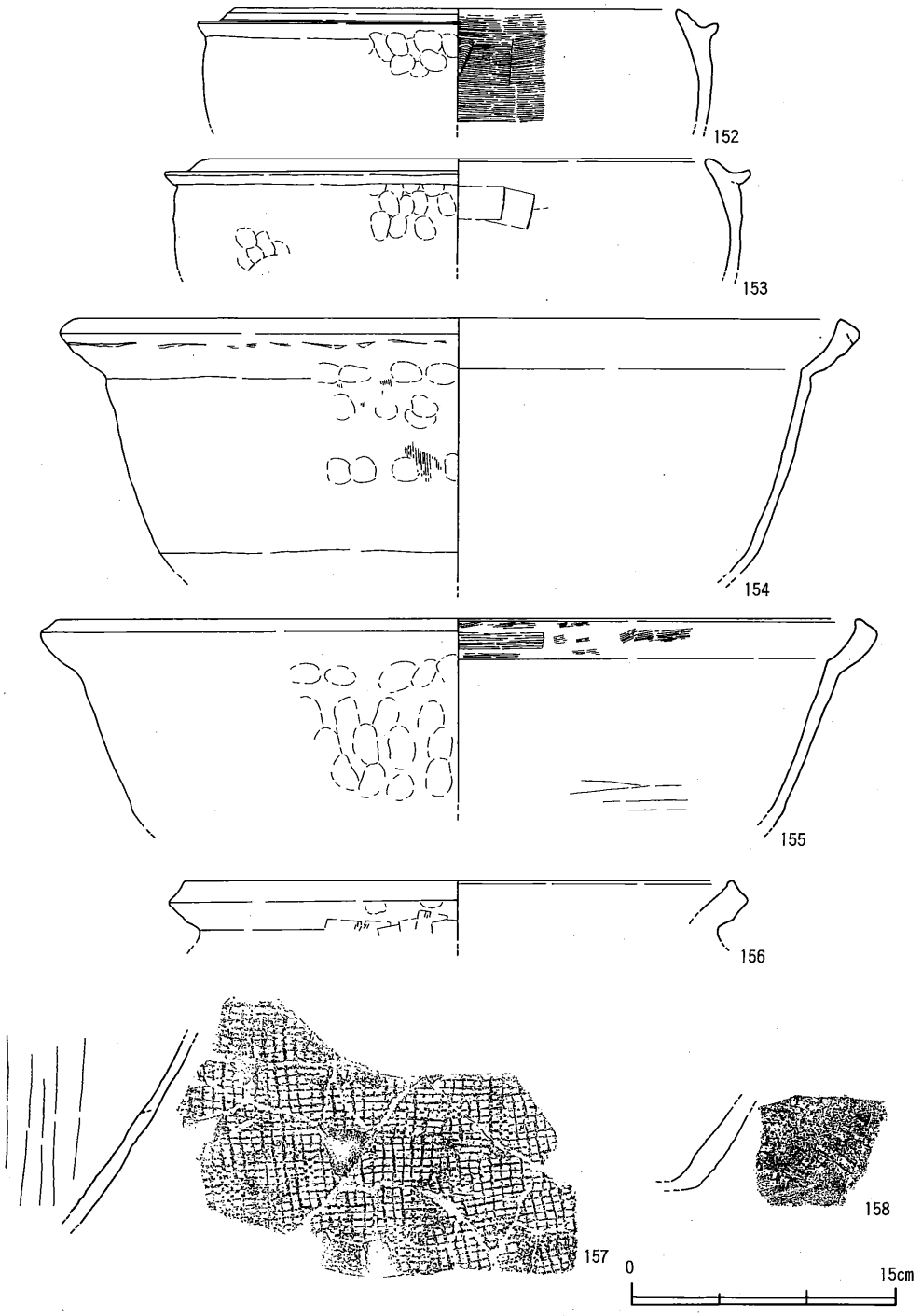
に，直上に堆積する2号窯跡整地層中の遺物が混入している可能性もある。

擂鉢（146）は端面を強く回転ナデ調整したもので，AⅡ－2類にあたる。足釜はBⅢ類（147・148）とC類（149）があるが，149は混入の可能性がある。

［SD01出土遺物（152～158）］

足釜BⅣ類（152・153），鍋BⅡ類（154・155），甕C類（156）がある。156は短く外反する断面方形の口頸部をもつ。頸部から下の外面には縦方向の板ナデが施される。

上記のように資料数が少なく，また良好な状態な遺物もわずかであるが，擂鉢や焙烙・甕の形態に土器溜り2・3との共通点が見出せ，さらに擂鉢原体が同一であることを考慮すると，本窯と土器溜り2・3との直接的な共時性が推測できる。



第53図　ＳＤ０１埋土出土遺物

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
152	足釜 BⅣ	(口)24.9	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ	口唯1/10
153	足釜 BⅣ	(口)27.8	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口唯1/8
154	鍋 BⅡ	(口)43.4	4mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ (体)縦ハケ	(口・体)板ナデ	口唯1/5
155	鍋 BⅡ	(口)45.1	2mm以下の砂礫を少量	土師質	明赤褐	(口)横ナデ(底)格子叩き目	(口)横ハケ(体・底)板ナデ	口唯1/8
156	甕 C	(口)31.0	3mm以下の砂礫を少量	土師質	にぶい褐	(口・頸)回転ナデ	(口・頸)回転ナデ	口唯1/5
157	甕 体部	—	3mm以下の砂粒	土師質	橙	格子叩き目	板ナデ	細片
158	甕 底体部	—	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目 →(底)板ナデ	調整不明	細片

第19表　3号窯跡・ＳＤ０１出土遺物観察表

(4) 土器溜り1出土遺物（第54～147図，第20～72表）

調査した各窯跡の中で最も多量の遺物が出土しており，28㍑入りコンテナに約110箱出土した。既に報告したように，転石を多く含む第Ⅱ層を間層として，第Ⅰａ層と第Ⅲ層はその堆積時期に若干の間隙が認められ，編年に際して重要な知見をもたらす資料といえる。このため第Ⅰａ層と第Ⅲ層を中心として，層位毎の遺物の特徴について詳述したい。

［表土層出土遺物（159～229）］

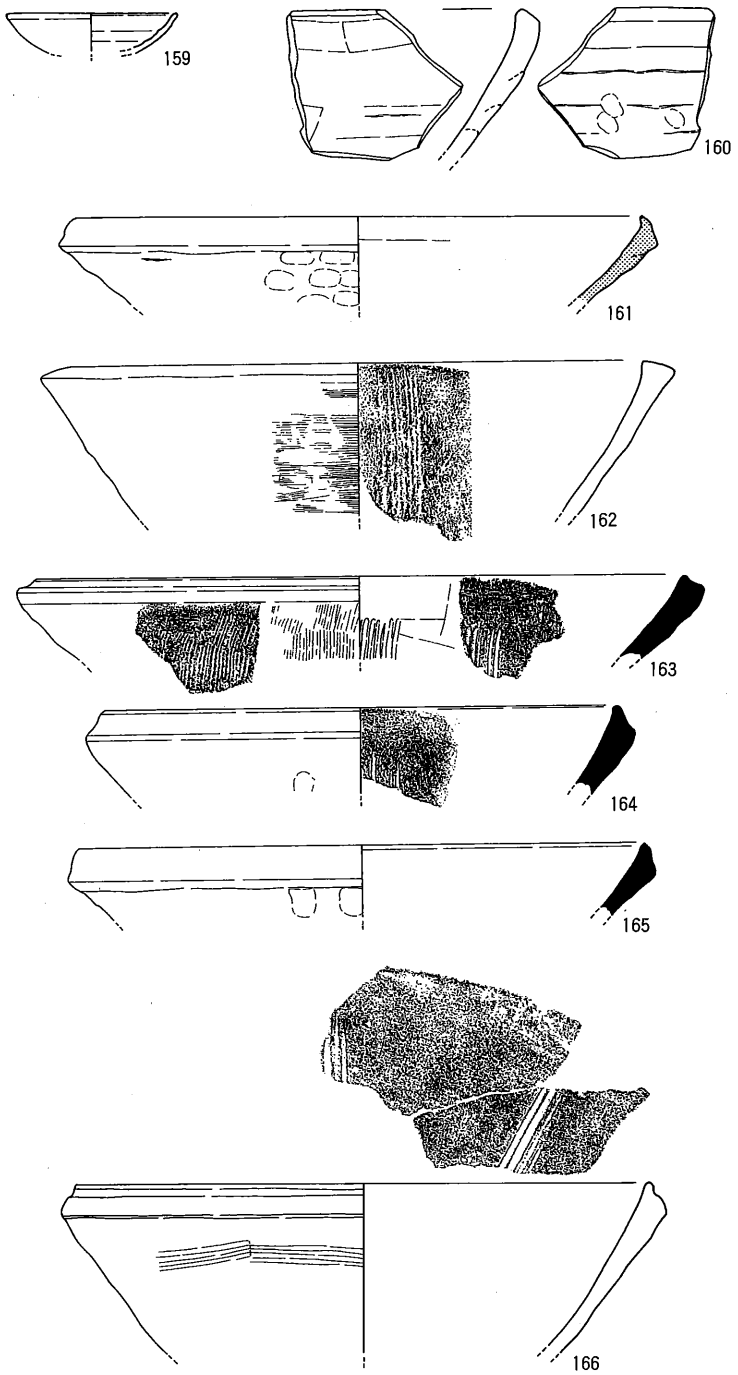
土師質皿・捏鉢・鉢・足釜・鍋・甕・壺・小壺，瓦質捏鉢・擂鉢が出土した。

161は捏鉢としては楠井で例外的な瓦質焼成である。口縁端部をやや内側上方へツマミ出したような形態は，東播系須恵器捏鉢に共通する特徴であるが，胎土は主要4器種と同一であることから，楠井産と判断できる。

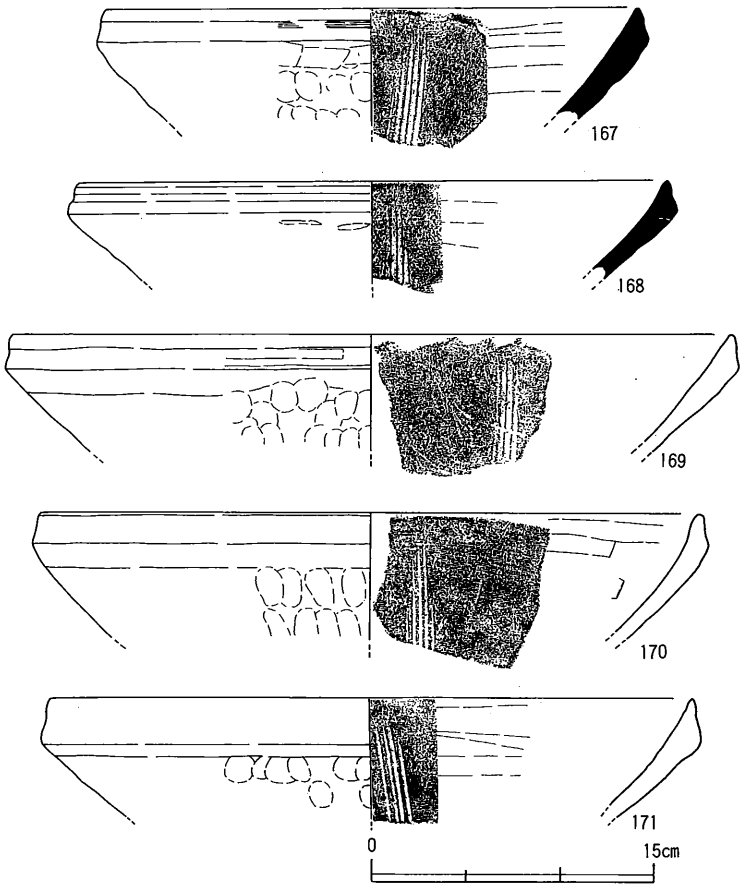
擂鉢（162～183）にはＡⅠ～Ⅲ類とＢⅠ類がある。各々の構成比や特徴は第Ⅰａ層と同様な傾向をもつ。166は，口縁部端面に沈線状の明瞭な凹面があり，体部外面上半には横ハケ調整が断続的に周回する。また177は口縁端部が丸みをもって太く収まっており，端面下端の屈曲も弱いため，ＡⅢ類とＢⅠ類（178）との中間的な形態をもつといえる。

土師質鉢（184）は，直立気味の体部とほぼ水平の口縁部端面をもつ。脚部を伴う火鉢もしくは把手付焙烙（十能形・甲羅）と考えられる。その存在は極めて稀であるが，胎土の特徴は楠井産土器に一般的なものであることから，楠井で生産されたとみられる。

土師質足釜（185～204）にはＢⅡ～Ⅳ類がある。鍔部直下には工具もしくは指によるオサエ（鍔部押圧成形）の痕跡を認めることができる。ことに鋭利な爪形状の圧痕を2段巡らせるもの（186・187・189・191・192・195・196・199）がかなり存在することが注目される。しかも下段の爪形状圧痕が上段の圧痕の右下に位置するという規則性が看取でき，鍔部成形にあたり共通した作業手順の存在したことが窺える。またこの圧痕は左上方から施されているもので占められる。足釜を正置した状態で製作が行われたとすると，製作者



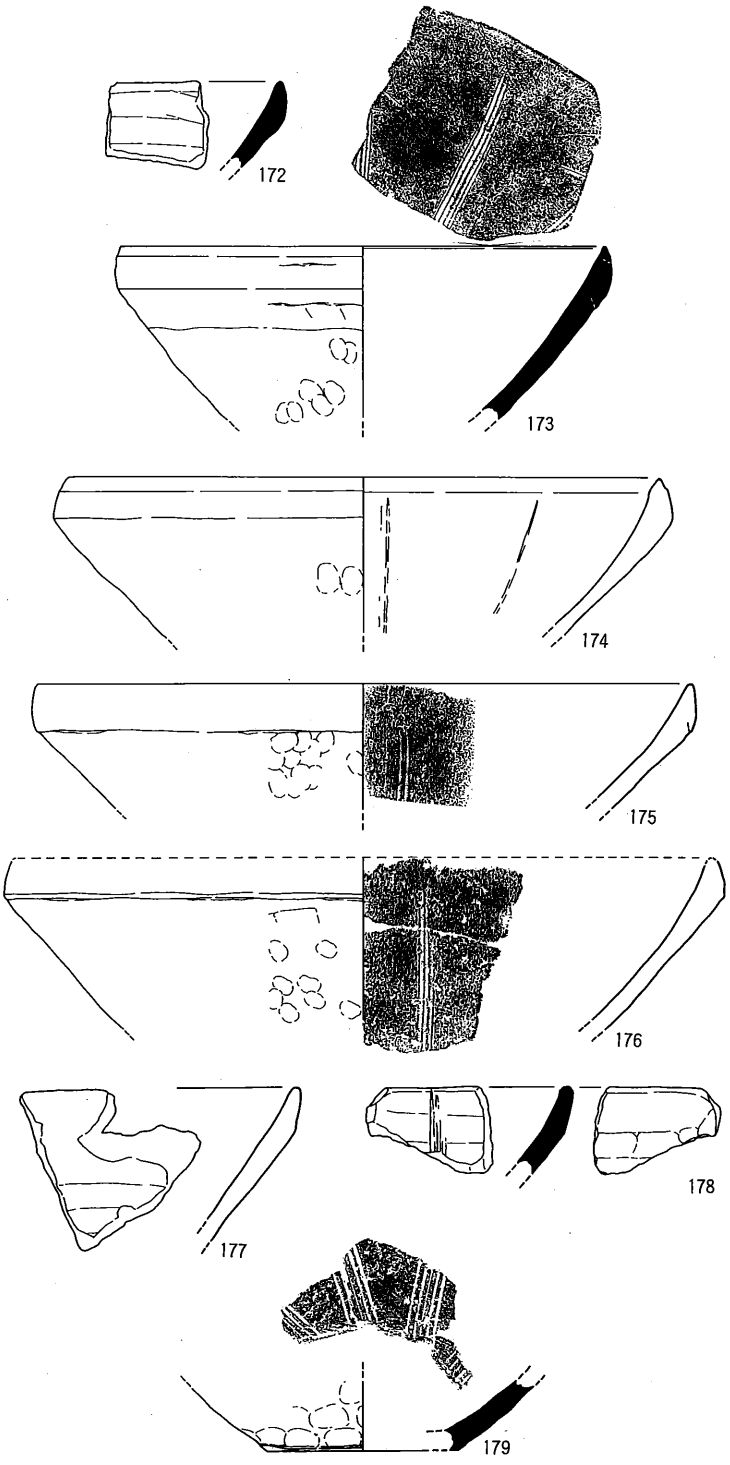
第54図　土器溜り１　表土層出土遺物(1)



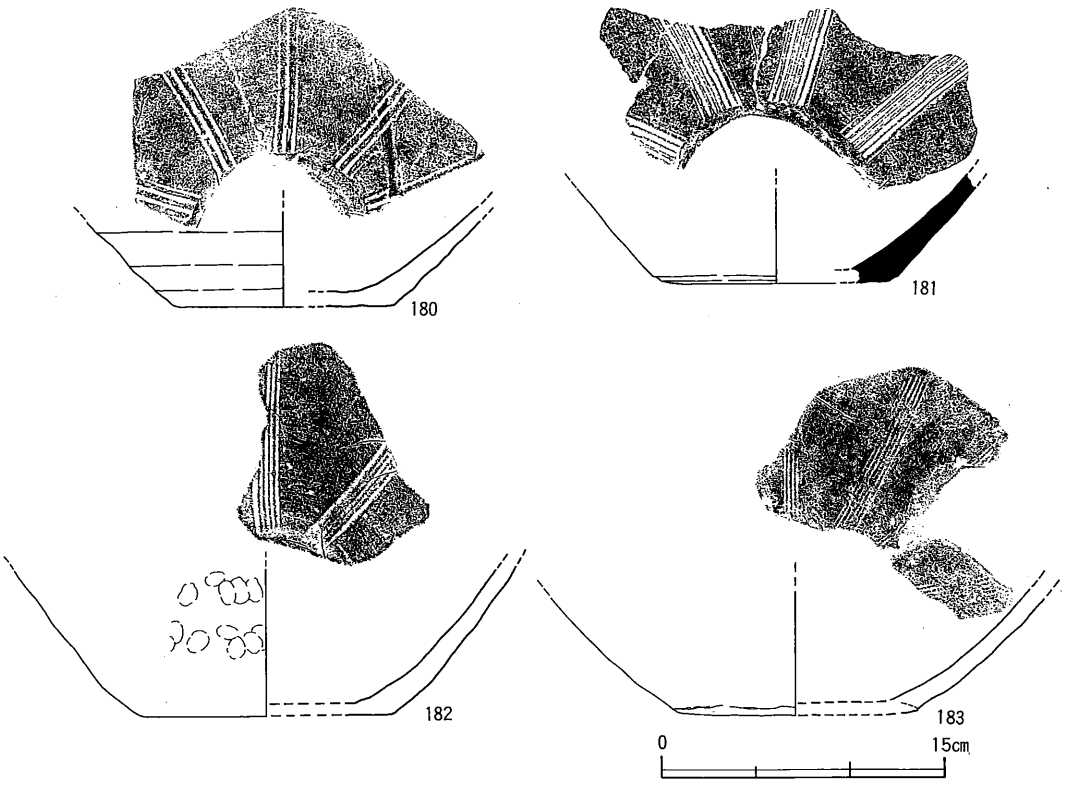
第55図　土器溜り１　表土層出土遺物(2)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
159	杯	(口)9.0	1mm以下の砂粒を少量	土師質	橙	回転ナデ	回転ナデ	口1/8
160	捏鉢	—	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ→(口)回転ナデ	細片
161	捏鉢	(口)30.0	1mm以下の砂粒	瓦質	灰白	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ→(口)回転ナデ	細片
162	擂鉢 ＡⅠ	(口)30.0	2mm以下の砂粒	土師質	(外)明黄褐 (内)灰褐	(口・体)横ハケ	調整不明	口1/8
163	擂鉢 ＡⅠ	(口)34.0	2mm以下の砂粒	須恵質	灰	(体)縦ハケ→(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
164	擂鉢 ＡⅡ	(口)26.8	2mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/8
165	擂鉢 ＡⅡ	(口)30.0	1mm以下の砂粒	須恵質	灰オリーブ	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/12
166	擂鉢 ＡⅡ	(口)30.4	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)沈線→回転ナデ (体)横ハケ	(口・体)板ナデ	口1/4
167	擂鉢 ＡⅢ	(口)27.8	1mm以下の砂粒	須恵質	黄灰	(口)板ナデ	(口・体)板ナデ	口1/8
168	擂鉢 ＡⅢ	(口)31.0	1mm以下の砂粒	須恵質	褐灰	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/10
169	擂鉢 ＡⅢ	(口)38.2	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)板ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/8
170	擂鉢 ＡⅢ	(口)34.8	2mm以下の砂粒	土師質	(外)にぶい橙 (内)にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/8
171	擂鉢 ＡⅢ	(口)34.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/8

第20表　土器溜り１　表土層出土遺物観察表(1)



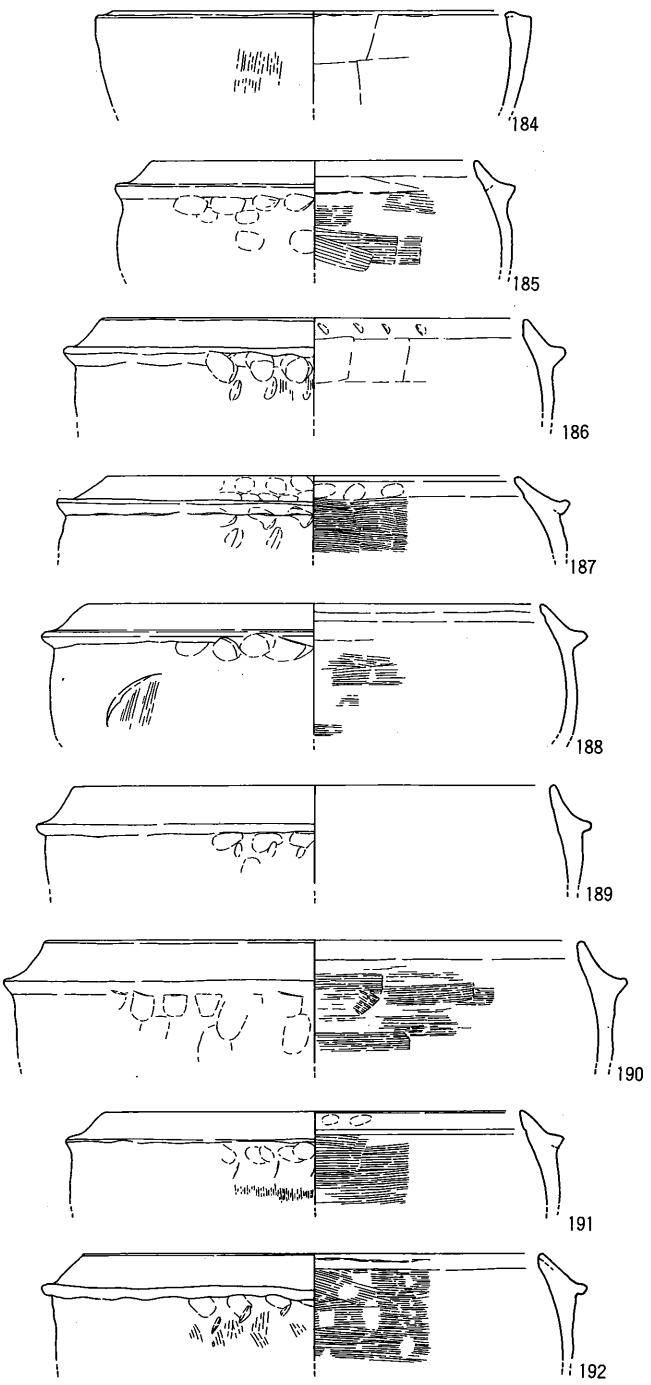
第56図　土器溜り１　表土層出土遺物(3)



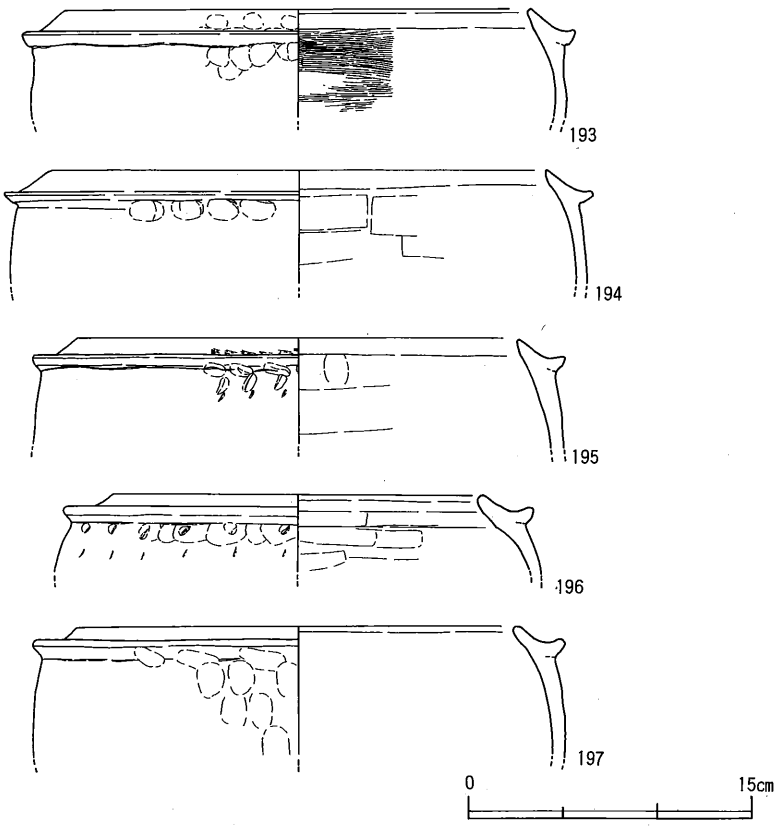
第57図　土器溜り1　表土層出土遺物(4)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
172	擂鉢 AⅢ	—	3mm以下の砂粒	須恵質	(内・外)灰 (断)褐	(体)板ナデ→(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
173	擂鉢 AⅢ	(口)25.4	2mm以下の砂粒	須恵質	(外)灰白 (内)灰	(口・体)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/8
174	擂鉢 AⅢ	(口)31.0	2mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(口)回転ナデ	調整不明	口径1/6
175	擂鉢 AⅢ	(口)34.4	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/8
176	擂鉢 AⅢ	(口)37.8	3mm以下の砂粒	土師質	灰黄褐	(口)回転ナデ (体)板ナデ	(口・体)板ナデ 使用痕？	口径1/12
177	擂鉢 BⅠ	—	5mm以下の砂粒	須恵質	(外)灰白 (内)にぶい橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
178	擂鉢 BⅠ	—	2mm以下の砂粒	須恵質	灰黄	(口・体)回転ナデ	(口・体)板ナデ→(口)回転ナデ	細片
179	擂鉢 底部	(底)10.1	1mm以下の砂粒	須恵質	(外)オリーブ灰 (内)灰	(底外縁)ナデ	(体・底)回転ナデ 使用痕	底径3/8
180	擂鉢 底部	(底)11.6	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(底)下駄印 (底外縁)ナデ	(体・底)回転ナデ	底径1/2
181	擂鉢 底部	(底)12.0	2mm以下の砂粒を多量	須恵質	青灰	(底)板ナデ (底外縁)回転ナデ	(体・底)板ナデ	底径3/8
182	擂鉢 底部	(底)13.4	2mm以下の砂粒	土師質	(外)灰 (内)にぶい橙	調整不明	(体・底)板ナデ 使用痕？	底径1/5
183	擂鉢 底部	(底)13.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	調整不明	(体・底)板ナデ	底径1/5

第21表　土器溜り1　表土層出土遺物観察表(2)



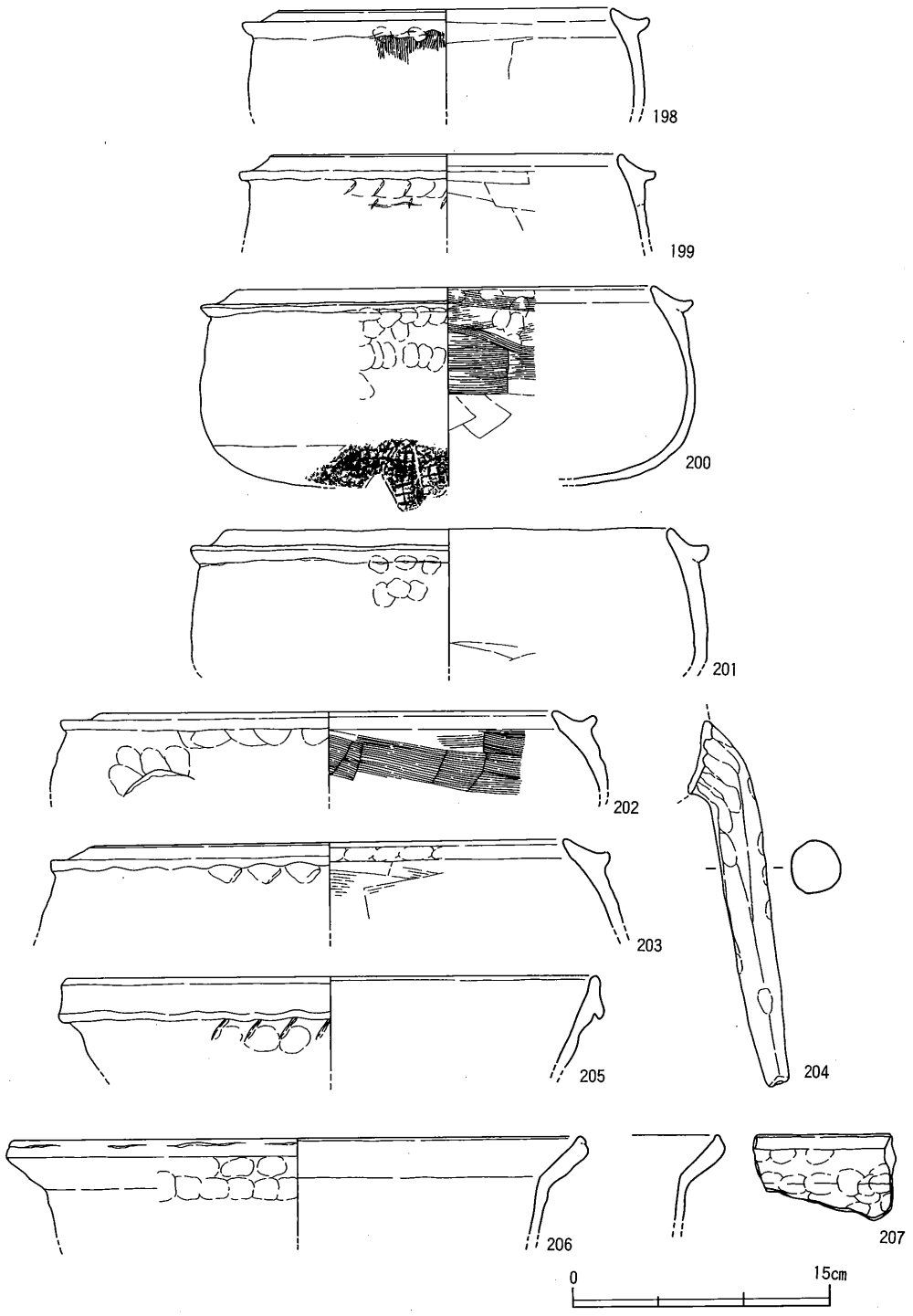
第58図　土器溜り１　表土層出土遺物(5)



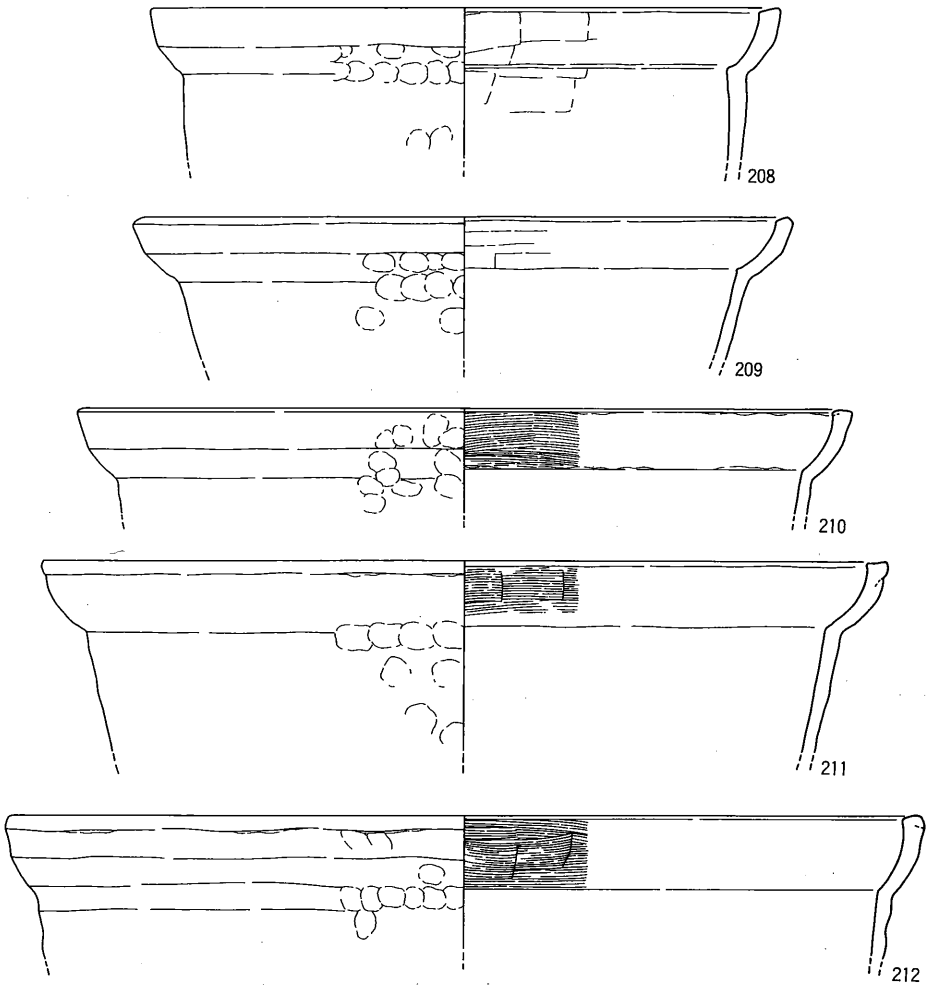
第59図　土器溜り1　表土層出土遺物(6)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
184	鉢(火鉢?)	(口)20.2	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・体)縦ハケ→(口)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	□1/6
185	足釜 BIII	(口)17.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	□1/6
186	足釜 BIII	(口)22.2	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(肩)2段押圧→(口・肩)横ナデ	(口)オサエ→(口・体)板ナデ	□1/4
187	足釜 BIII	(口)21.4	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(肩)2段押圧→(口・肩)横ナデ	(口)オサエ→(口・体)横ハケ	□1/6
188	足釜 BIII	(口)24.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(体)横ハケ→(口)横ナデ	□1/8
189	足釜 BIII	(口)25.4	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(肩)2段押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)横ナデ	□1/10
190	足釜 BIII	(口)28.3	3mm以下の砂粒を多量	土師質	にぶい褐	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ?	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	□1/8
191	足釜 BIII	(口)22.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(肩)2段押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	□1/8
192	足釜 BIII	(口)24.0	2mm以下の砂粒を多量	土師質	にぶい橙	(体)縦ハケ→(肩)2段押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	□1/5
193	足釜 BIII	(口)24.6	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい赤褐	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	□1/6
194	足釜 BIII	(口)26.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	□1/6
195	足釜 BIII	(口)23.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(肩)3段押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	□1/4
196	足釜 BIII	(口)19.4	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(肩)2段押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	□1/4
197	足釜 BIII	(口)23.6	2mm以下の砂粒、5mm程の小石	土師質	橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	調整不明	□1/8

第22表　土器溜り1　表土層出土遺物観察表(3)



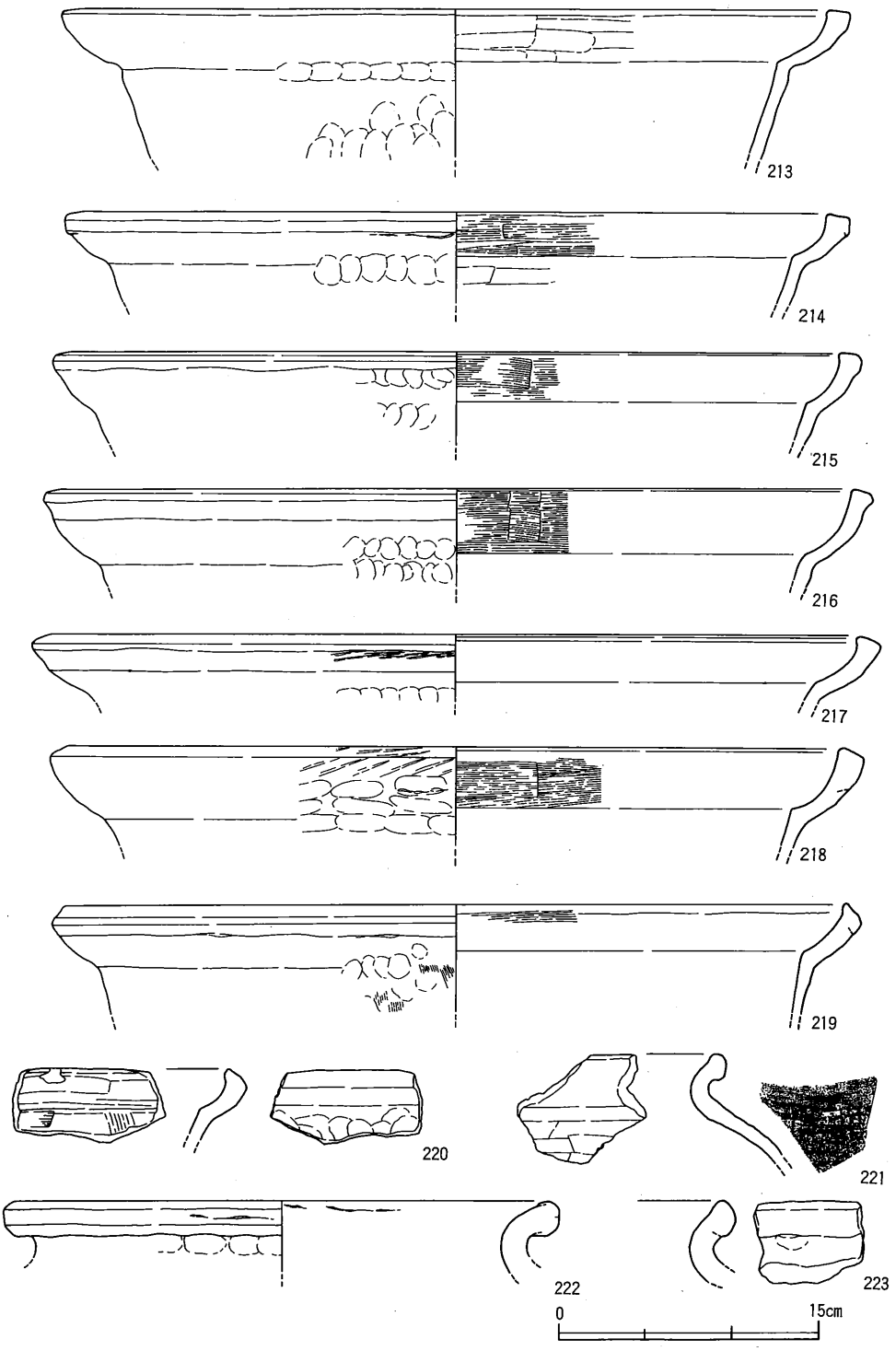
第60図　土器溜り１　表土層出土遺物(7)



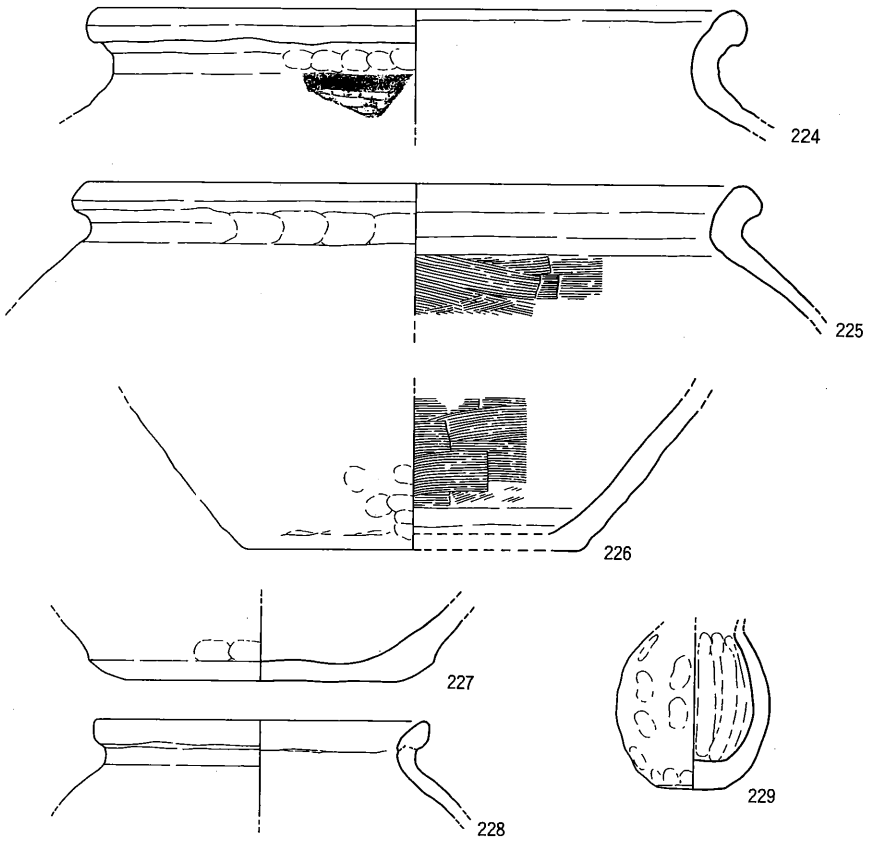
第61図　土器溜り1　表土層出土遺物(8)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
198	足釜 BIV	(口)19.2	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい赤褐	(体)縦ハケ→(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/5
199	足釜 BIV	(口)20.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(肩)2段押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/10
200	足釜 BIV	(口)23.8	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ (底)格子叩き目	(口・体)横ハケ→(底)板ナデ	口1/6
201	足釜 BIV	(口)27.6	2mm以下の砂粒	土師質	橙	調整不明	(口・体)調整不明(底)板ナデ	口1/8
202	足釜 BIV	(口)26.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ→(鍔部)ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	口1/8
203	足釜 BIV	(口)27.2	2.5mm以下の砂粒	土師質	橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	口3/20
204	足釜 脚部	—	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	ナデ		脚完存
205	羽釜	(口)30.6	3mm以下の砂粒	土師質	(外)灰褐 (内)橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)横ナデ	細片
206	鍋 AII	(口)32.9	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)横ナデ	(口・体)横ナデ	口1/4
207	鍋 AII	—	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)横ナデ	(口・体)横ナデ	細片
208	鍋 BI	(口)31.5	4mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/8
209	鍋 BI	(口)34.0	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	細片
210	鍋 BI	(口)38.8	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(口)横ナデ	(口)横ハケ (体)ナデ	口1/8
211	鍋 BI	(口)44.6	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口)横ハケ (体)ナデ	細片
212	鍋 BI	(口)46.6	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(口)横ナデ	(口)横ハケ (体)ナデ	口1/12

第23表　土器溜り1　表土層出土遺物観察表(4)



第62図　土器溜り１　表土層出土遺物(9)



第63図　土器溜り１　表土層出土遺物(10)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
213	鍋 BⅠ	(口)42.7	5mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(口)横ナデ	(口)板ナデ→(口)横ナデ (体)横ナデ	口唇1/8
214	鍋 BⅡ	(口)42.9	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口)横ハケ　(体)板ナデ	口唇1/8
215	鍋 BⅡ	(口)44.0	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい赤褐	(口)横ナデ	(口)横ハケ　(体)ナデ？	細片
216	鍋 BⅡ	(口)45.4	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(口)横ナデ	(口)横ハケ　(体)ナデ？	細片
217	鍋 BⅡ	(口)46.1	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)木目状圧痕→横ナデ	(口・体) 板ナデ	口唇1/8
218	鍋 BⅡ	(口)44.2	1.5mm以下の砂粒	土師質	(外)にぶい赤褐 (内)明赤褐	(口)木目状圧痕→横ナデ	(口)横ハケ　(体)ナデ	細片
219	鍋 BⅢ	(口)44.8	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(体)縦ハケ→(頸)オサエ (口)横ナデ	(口)板ナデ→(口)横ナデ (体)ナデ	細片
220	鍋 BⅢ	—	2mm以下の砂粒	土師質	赤褐	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
221	甕 AⅠ	—	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(体)格子叩き目 →(口・頸)横ナデ	(口・頸)横ナデ (体)板ナデ	細片
222	甕 AⅠ	(口)30.8	5mm以下の砂粒を多量	土師質	明褐	(口・頸)横ナデ	調整不明	口唇1/8
223	甕 AⅠ	—	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口・頸)横ナデ	調整不明	細片
224	甕 AⅠ	(口)33.4	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目 →(口・頸)横ナデ	(口・頸・体)板ナデ→(口)横ナデ	細片
225	甕 AⅡ	(口)34.8	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・頸)横ナデ (体)ナデ	(体)横ハケ→(口・頸)横ナデ	口唇1/10
226	甕 底部	(底)18.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	調整不明	(体)横ハケ→(底)横ナデ	底部1/4
227	甕 底部	(底)14.7	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(底)ナデ	(体・底)板ナデ	底部1/6
228	壺	(口)17.2	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	ナデ	ナデ	口唇1/5
229	小壺	(底)4.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	体部完存

第24表　土器溜り１　表土層出土遺物観察表(5)

は右手で作業を行ったことになる。

205は体部が大きく外傾する羽釜である。鍔部は口縁部から短く垂下するように伸びている。脚部が付かないとみられる僅少な事例であるが，肉眼観察による胎土の特徴は楠井産土器と共通する。

土師質鍋（206～220）にはＡⅡ類とＢⅠ・Ⅱ・Ⅳ類がある。217・218には，口縁部外面に木目状圧痕が認められる。

土師質甕（221～227）にはＡⅠ・Ⅱ類がある。ＡⅠ類（221～224）は直立した後に外反する比較的長い口頸部をもつ。ＡⅡ類（225）は短い口頸部をもち，頸部外面を強く横ナデ調整することで，口縁部の相対的な肥厚を作り出す。

壺（228）は短く外反する口頸部をもつ。頸部上端に幅約1.5cmの粘土紐を１段積んで口縁部としていることが，明瞭に残る接合痕から観察できる。また小壺（229）は楕円形の体部とやや突出した底部をもつ。体部内面には縦方向の指ナデ調整が施される。恐らく土器溜り３の小壺（1170）と同様な，短く直立する口縁部をもった形態をもつものであると推測される。

［第Ⅰａ層出土遺物（230～603）］

土師質杯・小皿・捏鉢・足釜・鍋・甕・壺・焙烙・把手・不明土製品，瓦質（土師質・須恵質含む）擂鉢・鍋・茶釜，須恵質杯，東播系須恵器捏鉢，亀山焼甕，堺産瓦質甕，備前焼甕などがある。これらの中で土師質捏鉢・足釜・鍋・甕・壺・焙烙・把手と瓦質擂鉢・鍋が，胎土・技法・形態の特徴から楠井産と判断できるものである。各器種の大まかな構成比は第134表に示した通りであり，擂鉢・足釜・鍋・甕の４器種を主体として，これに一定の捏鉢などが加わると説明できよう。その編年的な位置付けについては後述するが，調査区付近での操業が最も密に行われた時期の土器群とみることが可能であり，細部形態や技法にかなりの多様性が認められるようである。

土師質杯（230・232・233）は，内弯気味に立ち上がる体部をもつ。須恵質杯（231）もこれと同様な形態をもつが，底部は糸切りである可能性があり，讃岐国外からの搬入品であるかもしれない。また土師質皿（234～244）は，その形態から３群に細別可能である。234は直線的に伸びる体部をもつ。236・237は体部が大きく外反し，口縁端部が極めて薄いシャープな作りである。238～243は体部が大きく開いており，口縁部で若干内弯する。口径がやや小さいもの（238・239）と大きいもの（240～243）がある。杯・皿類にはいずれも体部に顕著な回転ナデ調整がみられ，製作にあたってロクロ回転が効率的に駆使され

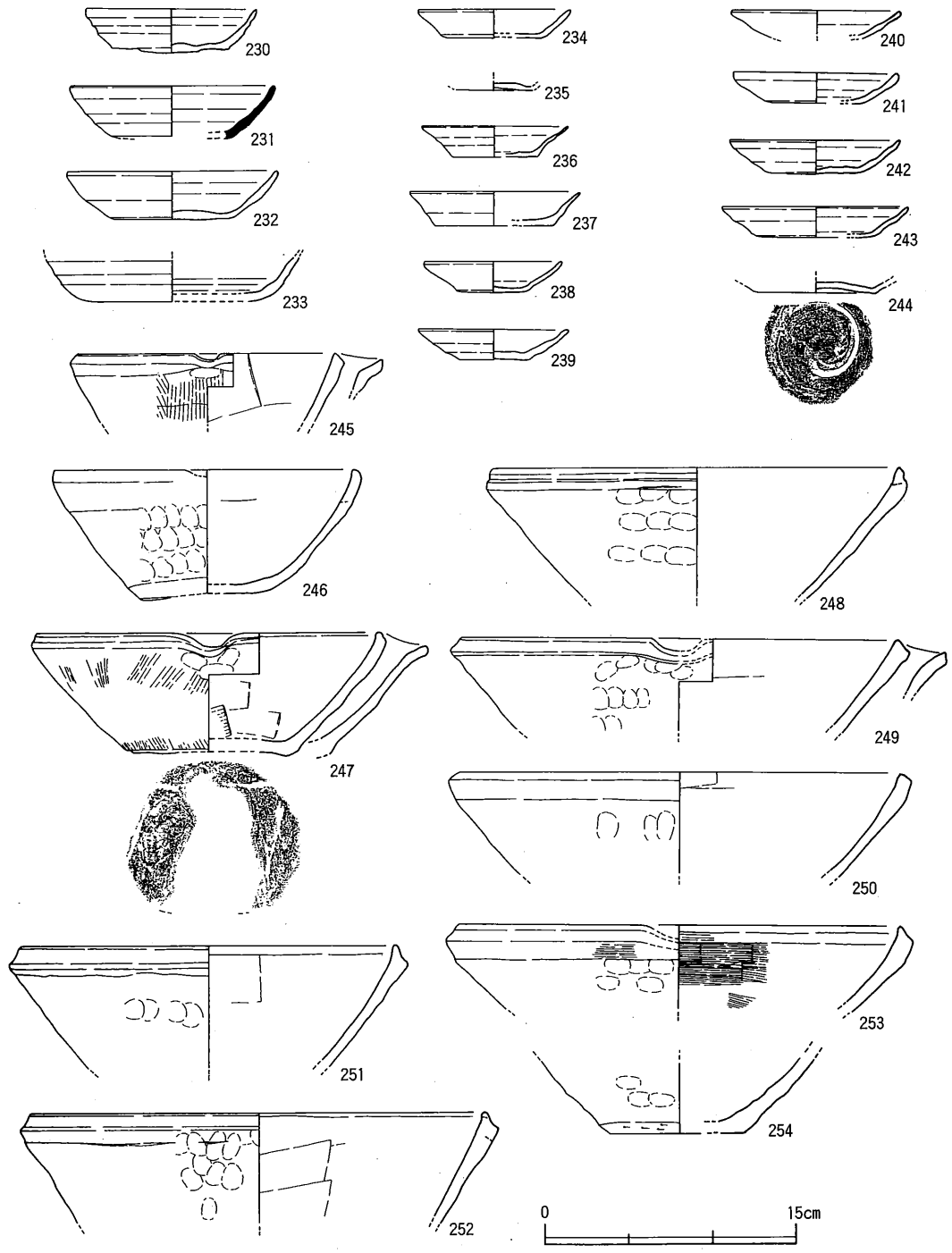
たことがわかる。また胎土も1㎜以上の砂粒をほとんど含まない，精良なものである。

土師質捏鉢（245～258）には，擂鉢に比べて器壁が薄く，また口径も小さいものが多い。焼成も擂鉢とは異なり土師質を基本とする。いずれも口縁部には外傾する面をもつが，この端面が平坦なもの（245～247・250・256・257）や沈線状に窪むもの（248），また横ナデ調整による凹面をもつもの（249～253・255・258）など，多様な在り方を示す。247は底部外面に下駄印に似た平行線を残す。いわゆる「亀板痕」(7)か。また258は底部外面に格子叩き目が施され，丸底に成形される。体部と口縁部の形態・技法的類似から，257も同様な底部をもつものと思われる。鉢類の底部丸底化は西部瀬戸内地域（伊予・備後）にしばしば認められる(8)ため，それとの系譜的な関係が問題となる。

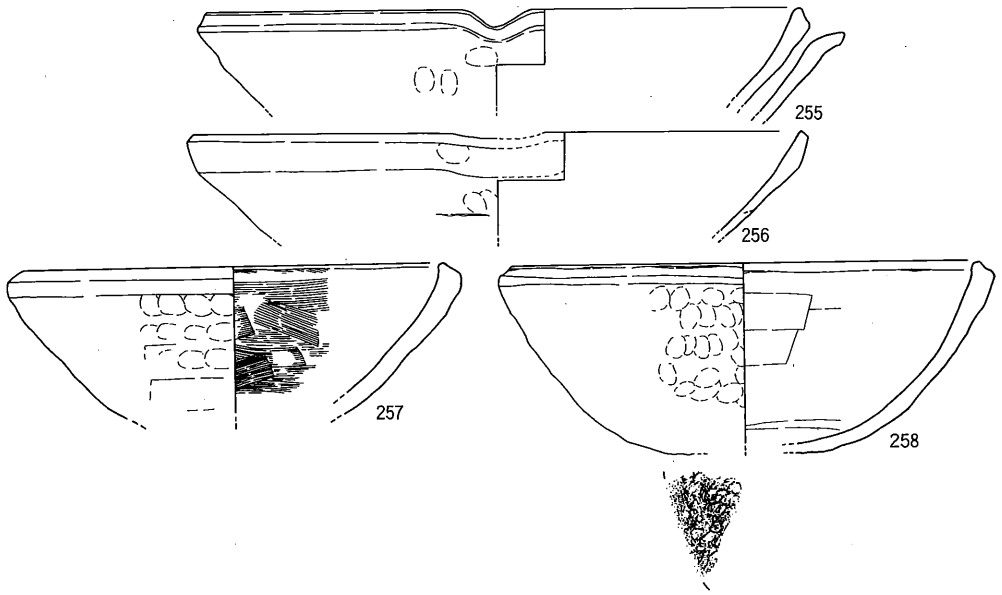
擂鉢（259～389）にはＡⅠ～Ⅳ類，ＢⅠ類とほぼ全ての器種が認められ，ＡⅢ類が最も多く，次いでこれにほぼ拮抗する量でＡⅡ類が存在する。それ以外はＡⅠ類，ＡⅣ類，ＢⅠ類の順になるが，いずれも破片数は少なく目立った存在ではない。ＡⅢ類が優位に立つ点は，明らかに土器溜り2・3と異なる要素であり，注目される。またＡⅠ～Ⅲ類には，口縁部の細部形態にかなりのバリエーションが認められる。これは端部の調整工具や調整箇所，またその強弱に起因するものとみられるが，型式を超えて共通する部分の多いことが注意される。

法量について，図示した資料からみてみよう。口径は便宜的に25㎝以下（Ⅰ），26～29㎝前後（Ⅱ），30～33㎝前後（Ⅲ），34～37㎝前後（Ⅳ），38～40㎝前後（Ⅴ）に分けることが可能である。しかし，ほとんどの残存度が口径の1／4以下であり，また中には製作段階での歪みや焼け歪みが存在するために，これがどの程度実態を反映したものであるかは検討を要する。口径残存度1／4以上のものでみると，Ⅱ・Ⅲ・Ⅳについては一応妥当な群別といえるようである。また全体でみてもこの3者が主体である。

卸し目の原体は24種類確認できる（第26・27表）。原体1単位の本数は3本が2種類（原体1・2），4本が5種類（原体3～7），5本が7種類（原体8～14），6本が4種類（原体14～18），7本が3種類（原体19～21），8本が2種類（原体22・23），12本が1種類（原体24）に各々分類できる。中でも原体11が最も多く，原体6・7・9もかなり存在する。原体と器種との関係をみると，ＡⅠ類は条数が多く6・7条が主体であり，また原体幅が広い傾向にある。これに対してＡⅡ・Ⅲ類は一部の少数事例を除いて3～5条が主体で，原体幅も比較的狭い傾向にある。また同一原体の共通使用例を整理すると，ＡⅡ類とＡⅢ類での共通使用が最も多く，両者とＡⅠ類との共有例は1例しかない。以上のように，卸し



第64図　土器溜り１　第Ｉａ層出土遺物(1)



第65図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(2)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法 外面	手法 内面	残存度
230	杯	(口)10.0(高)2.6 (底)6.8	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口・体)回転ナデ (底)回転ヘラ切り	回転ナデ	底部1/2完存
231	杯	(口)12.0	1mm以下の砂粒	須恵質	淡橙・灰白	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口縁1/8
232	杯	(口)12.2(高)2.9 (底)6.8	1mm以下の砂粒	土師質	浅黄橙	(口・体)回転ナデ (底)回転ヘラ切り	回転ナデ	底縁1/2
233	杯	(底)9.0	1mm以下の砂粒を少量	土師質	浅黄橙	(体)回転ナデ	(体)回転ナデ	底縁1/6
234	小皿	(口)9.0(高)1.7 (底)5.7	1mm以下の砂粒	土師質	浅黄橙	(口・体)回転ナデ (底)回転ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	口縁1/4
235	小皿	(底)4.6	微細砂粒	土師質	橙	回転ナデ	回転ヘラ切り→ナデ	底部完存
236	小皿	(口)8.6(高)1.8 (底)5.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・体)回転ナデ (底)回転ヘラ切り→板ナデ	回転ナデ	底縁1/6
237	小皿	(口)10.0(高)2.0 (底)7.5	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・体)回転ナデ	回転ナデ	口縁1/10
238	小皿	(口)8.0(高)1.8 (底)4.2	5mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・体)回転ナデ (底)回転ヘラ切り	回転ナデ	口縁1/4
239	小皿	(口)8.8(高)1.8 (底)4.1	0.5mm以下の砂粒を少量	土師質	(外)にぶい黄橙 (内)橙・にぶい黄橙	(口・体)回転ナデ (底)回転ヘラ切り	回転ナデ→(底)ナデ	口縁3/8
240	小皿	(口)9.8	精良	土師質	橙	回転ナデ	回転ナデ	口縁1/8
241	小皿	(口)9.7	2mm以下の砂粒	土師質	橙	回転ナデ	回転ナデ	口縁1/4
242	小皿	(口)10.0(高)2.0 (底)6.0	1mm以下の砂粒を少量	土師質	橙	(口・体)回転ナデ (底)回転ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	口縁1/8 底縁1/2
243	小皿	(口)11.0(高)1.8 (底)7.0	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口・体)回転ナデ (底)回転ヘラ切り	回転ナデ	口縁1/4
244	小皿	(底)7.2	1mm以下の砂粒	土師質	浅黄橙・橙	(体)回転ナデ (底)回転ヘラ切り	回転ナデ→(底)ナデ	底縁7/8
245	捏鉢	(口)15.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(体)縦ハケ→(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口縁1/4
246	捏鉢	(口)17.7	3mm以下の砂粒	土師質	浅黄橙	(口)回転ナデ (底)ナデ	(口・体)回転ナデ	口縁2/3
247	捏鉢	(口)20.1(高)7.1 (底)9.6	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(体)縦ハケ→(口)回転ナデ (底)下駄印→ナデ	(体・底)板ナデ →(口・体)回転ナデ	口縁3/4
248	捏鉢	(口)24.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口縁1/6
249	捏鉢	(口)25.4	1mm以下の細砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口縁1/8
250	捏鉢	(口)26.0	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
251	捏鉢	(口)22.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ→(口)回転ナデ	口縁1/6
252	捏鉢	(口)27.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ→(口)回転ナデ	口縁1/8
253	捏鉢	(口)26.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ・板ナデ	(口・体)横ハケ→(口)回転ナデ	口縁1/4
254	捏鉢	(底)8.0	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(底外縁)ヘラ削り	(体・底)回転ナデ	底部1/2完存
255	捏鉢	(口)30.0	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口縁1/8
256	捏鉢	(口)32.0	2mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口縁1/8
257	捏鉢	(口)22.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ (体)板ナデ	(口・体)横ハケ→(口)回転ナデ	口縁1/3
258	捏鉢	(口)24.6	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)回転ナデ(底)格子叩き目	(口・体・底)板ナデ→(口)回転ナデ	口縁1/2

第25表　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物観察表(1)

原体	本数/原体幅 (単位㎜)	点数	A類									B類	底部
			Ⅰ-2	Ⅰ-3	Ⅱ-1	Ⅱ-2	Ⅱ-3	Ⅲ-1	Ⅲ-2	Ⅲ-3	Ⅳ	Ⅰ	
1	3／6.5	4					1	3					
2	3／9	2					1	1					
3	4／4.7	3						1	2				
4	4／9	3			2			1					
5	4／9.5	1						1					
6	4／11	9			2	2		5					
7	4／14	9			1	1	2	1		1	2		1
8	5／9.5	4						1	2				1
9	5／12	9			2			4		2			1
10	5／12.5	3				1		2					
11	5／13.5	10			1	2		1		3	1		2
12	5／15	4			2	2							
13	5／17	1						1					
14	5／19	1	1										

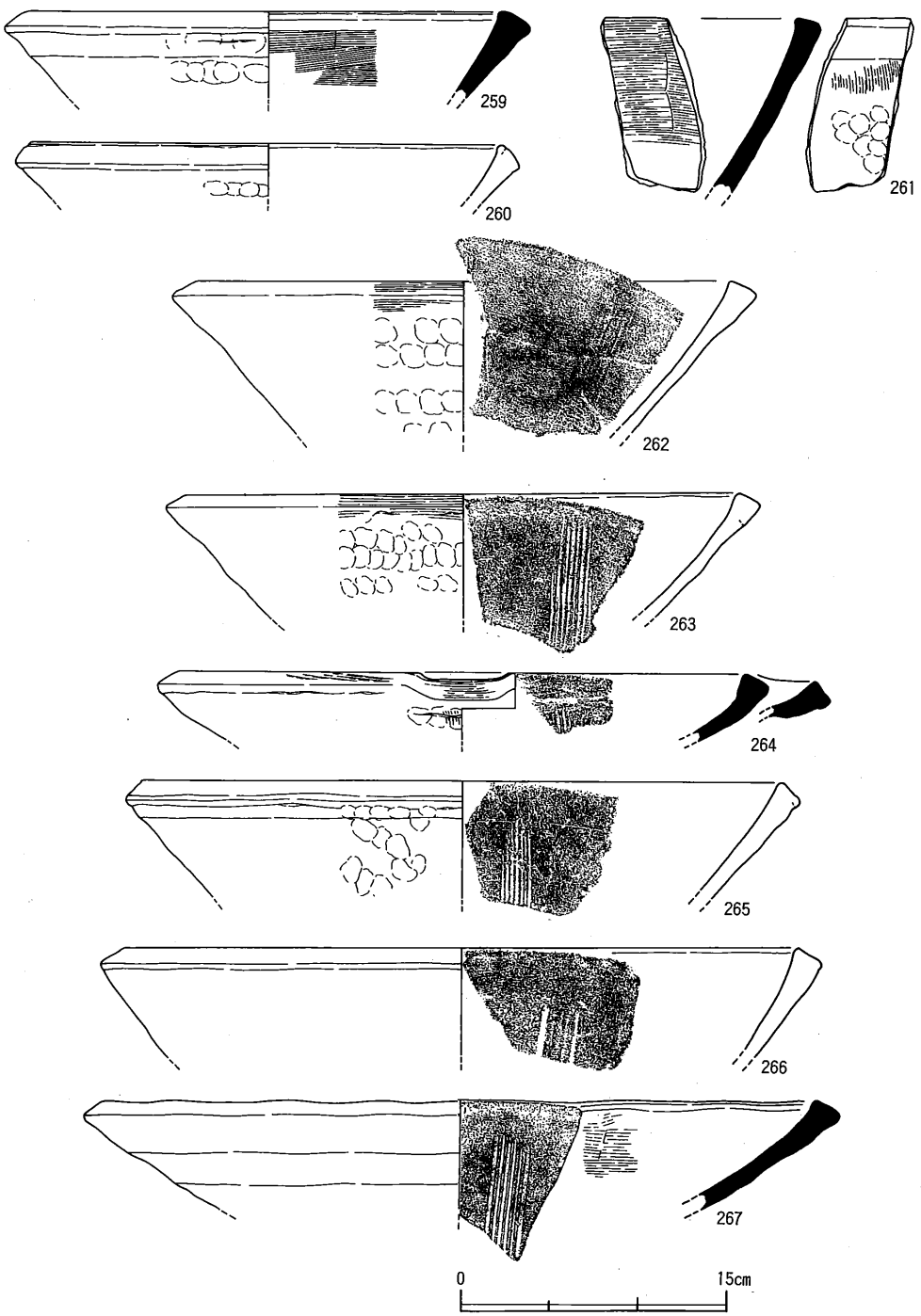
第26表　土器溜り1　第Ⅰa層出土擂鉢の卸し目原体と型式の対応関係(1)
集計は報告資料のみについて行った

原体	本数/原体幅 (単位mm)	点数	A類									B類	底部
			Ⅰ-2	Ⅰ-3	Ⅱ-1	Ⅱ-2	Ⅱ-3	Ⅲ-1	Ⅲ-2	Ⅲ-3	Ⅳ	Ⅰ	
15	6／11	1											1
16	6／15	7	1								2		4
17	6／16	1		1									
18	6／19	1	1										
19	7／15	1	1										
20	7／18	2						2					
21	7／19	2		2									
22	8／13	1						1					
23	8／21.5	2	1					1					
24	12／18.5	1				1							
合　計		81	5	3	10	9	4	26	4	6	5	0	10

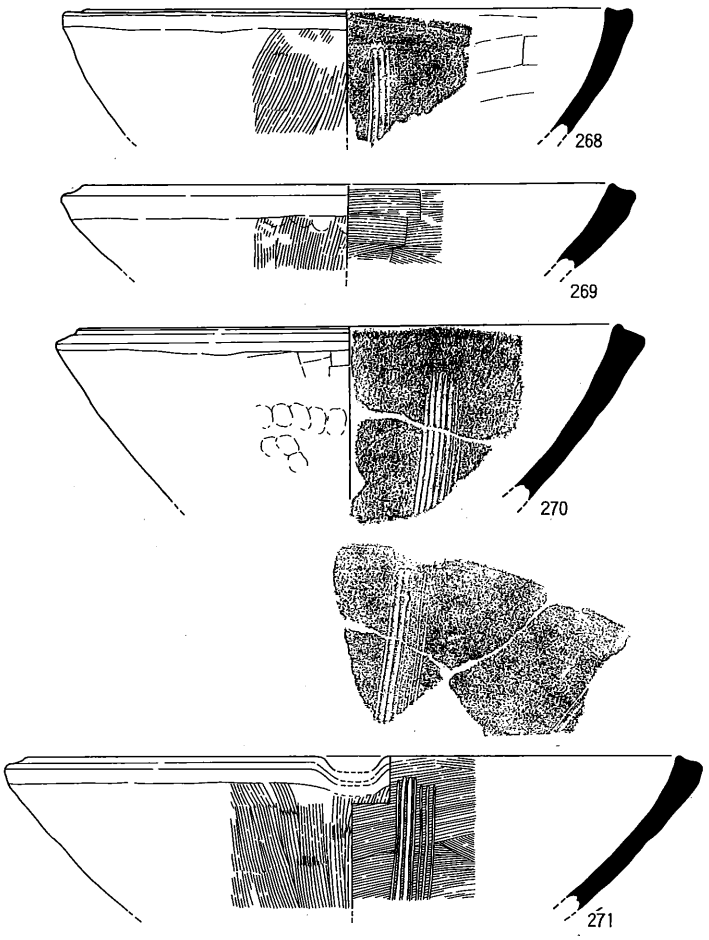
第27表　土器溜り1第Ⅰa層出土擂鉢の卸し目原体と型式の対応関係(2)

目原体からはAⅡ・Ⅲ類とは共通点が多く，逆にAⅠ類とAⅡ・Ⅲ類との間にはあらゆる点で違いが指摘でき，AⅠ類とAⅡ・Ⅲ類とが別の工人群の所産であることを推察させる。

擂鉢AⅠ類（259～271）は，体部に対して直角ないし鋭角（水平方向）の口縁部端面をもつものである。口縁端部を拡張気味に肥厚させるもの（AⅠ－1類：259～267）と，端面に強い回転ナデ調整を施して凹面を作るもの（AⅠ－2類：268～271）がある。AⅠ－1類は内面全体にわたって横ハケ調整を施しており，ハケ目が口縁部端面にまで及ぶもの（262～264）もある。横ハケは断続的に巡らされていることから，ロクロ回転を利用したいわゆる「カキ目」とは異なる。また，AⅠ－2類も同様に内面全体に横ハケないし横方



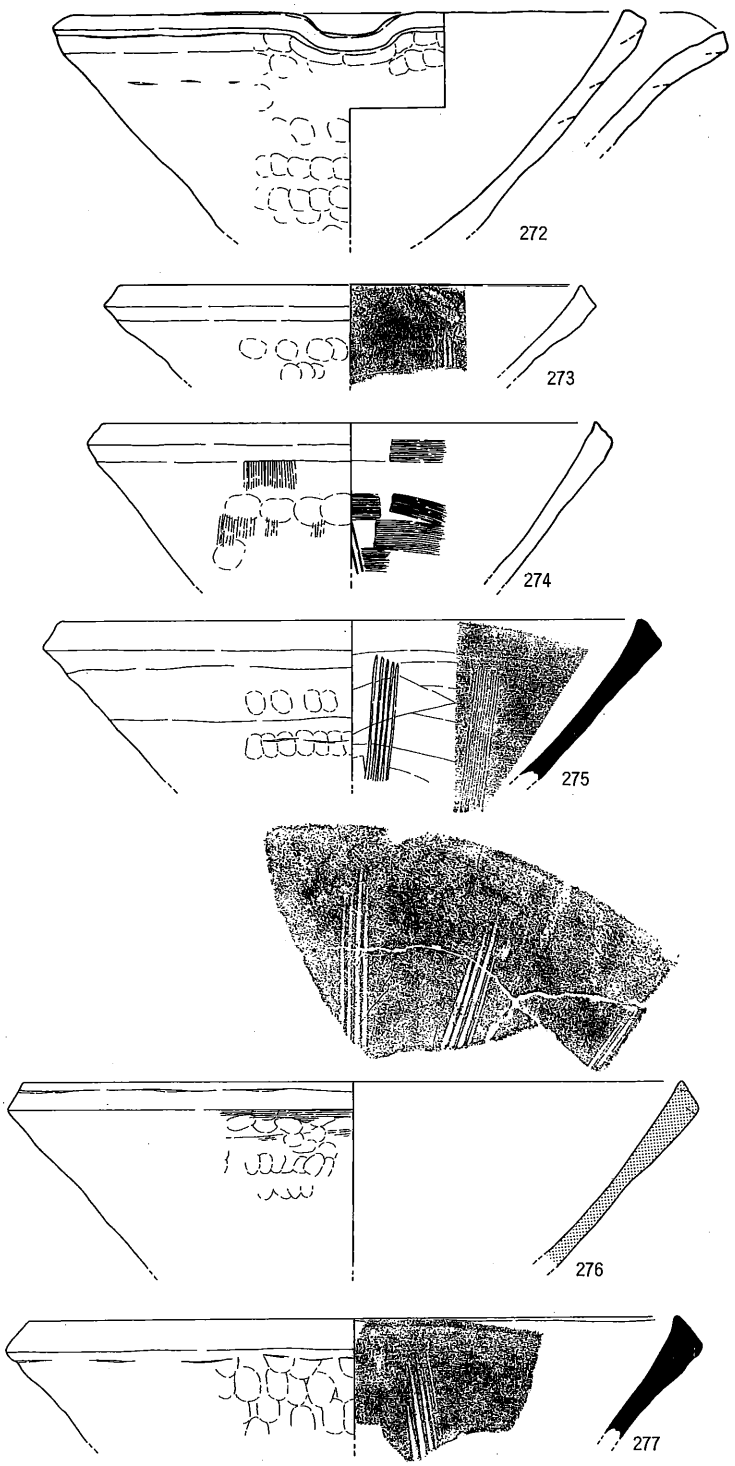
第66図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(3)



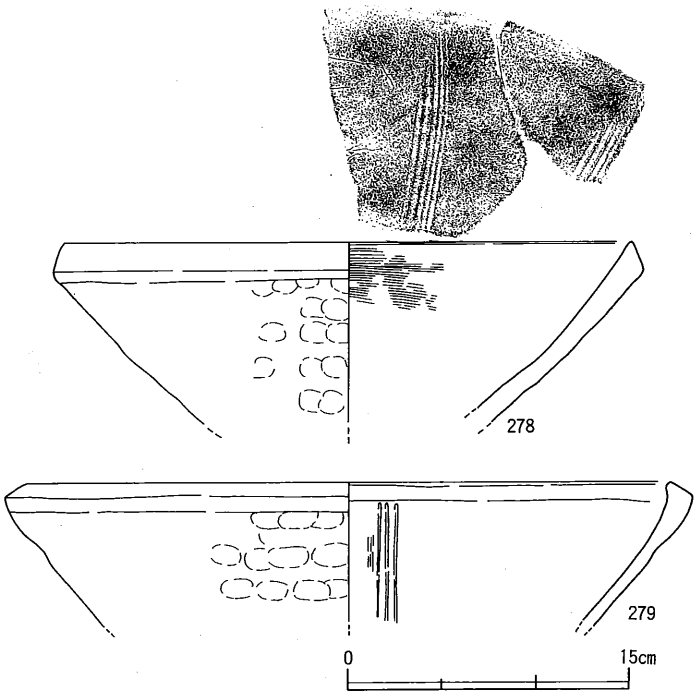
第67図　土器溜り１　第Ｉａ層出土遺物(4)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
259	擂鉢 ＡＩ	(口)26.0	5mm以下の砂粒	須恵質	灰黄	(口)回転ナデ	(体)横ハケ→(口)回転ナデ	□1/10
260	擂鉢 ＡＩ	(口)26.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	□1/12
261	擂鉢 ＡＩ	—	2mm以下の砂粒	須恵質	灰白	(体)縦ハケ→(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
262	擂鉢 ＡＩ	(口)30.0	3mm以下の砂粒	土師質	暗灰黄	(口)横ハケ	(口・体)板ナデ　(体)使用痕	□1/6
263	擂鉢 ＡＩ	(口)31.0	2mm以下の砂粒	土師質	黒褐	(口)横ハケ	(口・体)板ナデ　(体)使用痕	□1/10
264	擂鉢 ＡＩ	(口)31.8	2mm以下の砂粒	須恵質	灰白	(口)横ハケ	(口・体)板ナデ	□1/6
265	擂鉢 ＡＩ	(口)36.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
266	擂鉢 ＡＩ	(口)38.0	2mm以下の砂粒	土師質	明褐	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	□1/12
267	擂鉢 ＡＩ	(口)40.0	2mm以下の砂粒	須恵質	灰白	(口)板ナデ	(口・体)板ナデ	□1/10
268	擂鉢 ＡＩ	(口)27.4	2mm以下の砂粒	須恵質	灰白	(口・体)縦ハケ→(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	□1/12
269	擂鉢 ＡＩ	(口)28.0	1mm以下の雲母を少量	須恵質	灰白	(口・体)縦ハケ→(口)回転ナデ	(口・体)横ハケ	細片
270	擂鉢 ＡＩ	(口)28.4	2mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	□1/8
271	擂鉢 ＡＩ	(口)34.6	2mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口・体)縦ハケ→(口)回転ナデ	(口・体)横ハケ	□1/8

第28表　土器溜り１　第Ｉａ層出土遺物観察表(2)



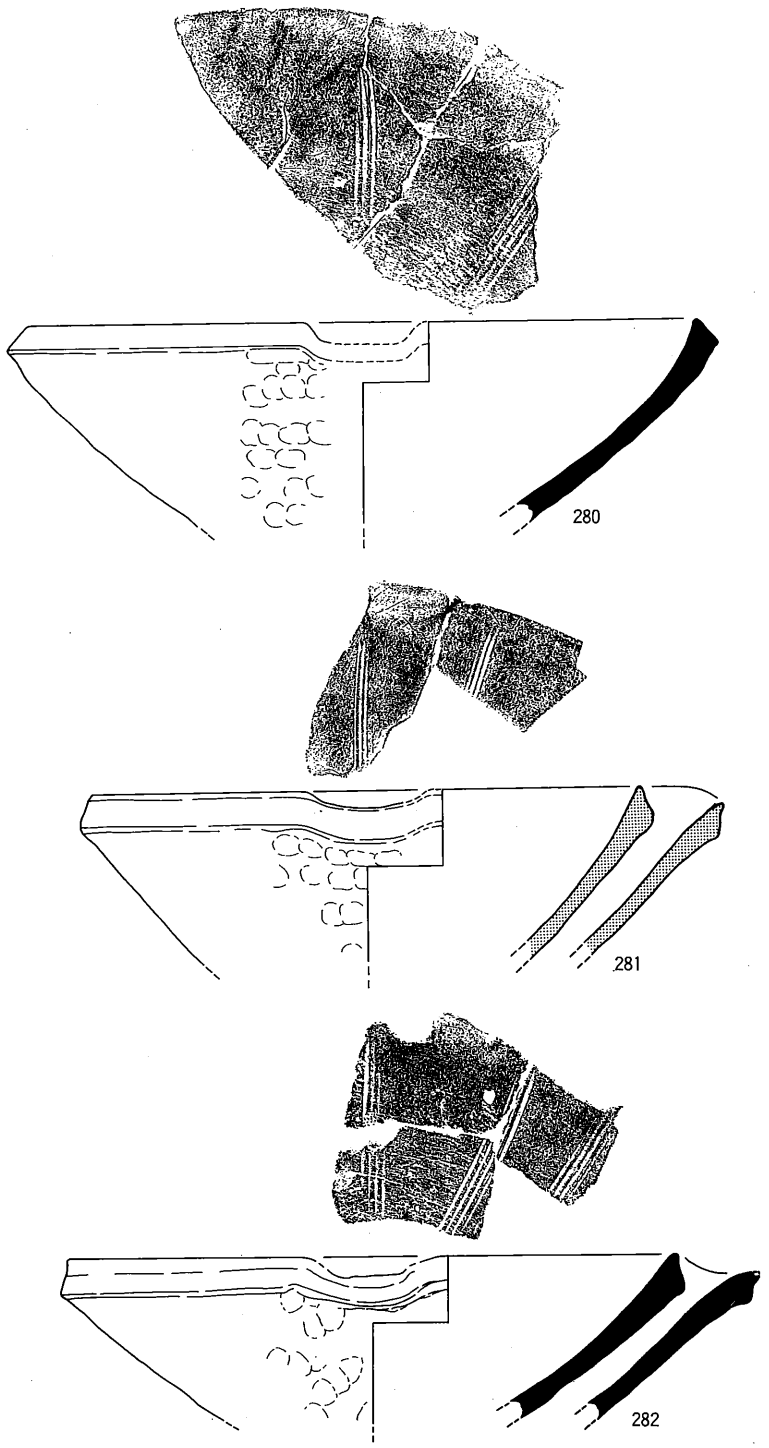
第68図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(5)



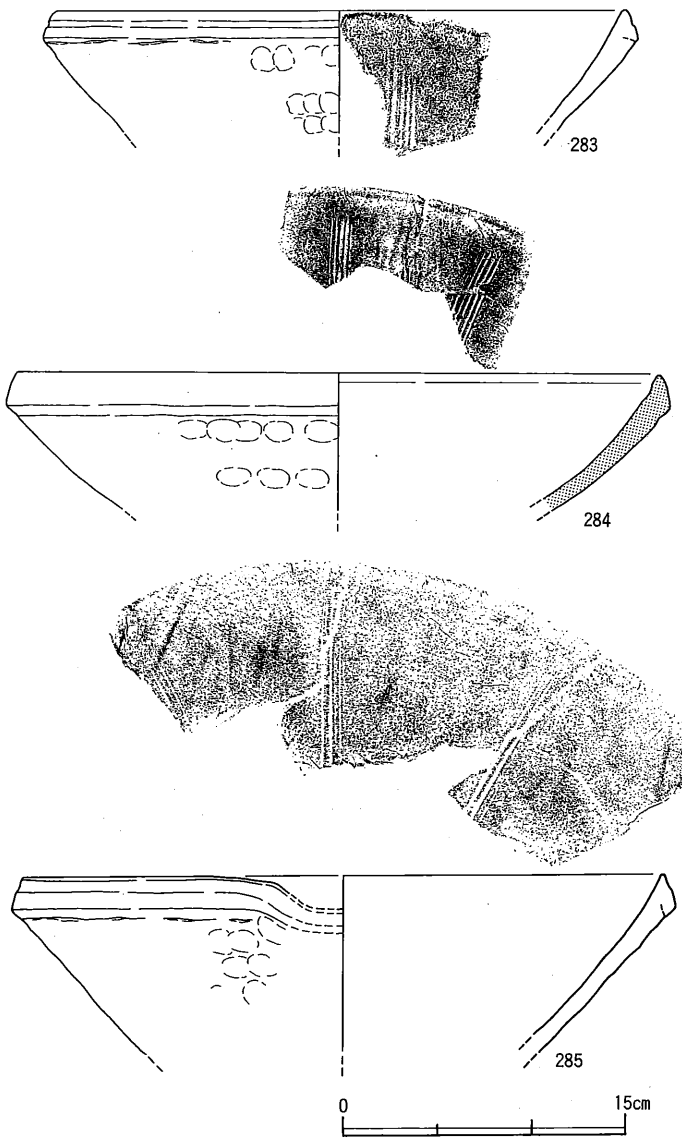
第69図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(6)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
272	捏鉢	(口)29.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	調整不明	□径1/4
273	擂鉢 AⅡ	(口)24.8	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	□径1/10
274	擂鉢 AⅡ	(口)26.0	2mm以下の砂粒	土師質	黄褐	(口・体)縦ハケ→(口)回転ナデ	(口・体)横ハケ	□径1/8
275	擂鉢 AⅡ	(口)30.4	3mm以下の砂粒	須恵質	灰黄	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	□径1/5
276	擂鉢 AⅡ	(口)34.8	3mm以下の砂粒	瓦質	(内・外)灰 (断)灰白	(口)横ハケ→回転ナデ	(口・体)板ナデ	□径1/4
277	擂鉢 AⅡ	(口)34.6	2mm以下の砂粒	須恵質	(外)灰白 (内)灰	(口)板ナデ	(口・体)板ナデ	□径1/8
278	擂鉢 AⅡ	(口)30.0	2mm以下の砂粒	土師質	暗灰黄	(口)横ハケ→回転ナデ	(口・体)横ハケ	□径1/4
279	擂鉢 AⅡ	(口)34.0	5mm以下の砂粒を多量	土師質	橙	(口)回転ナデ	調整不明	□径1/8

第29表　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物観察表(3)



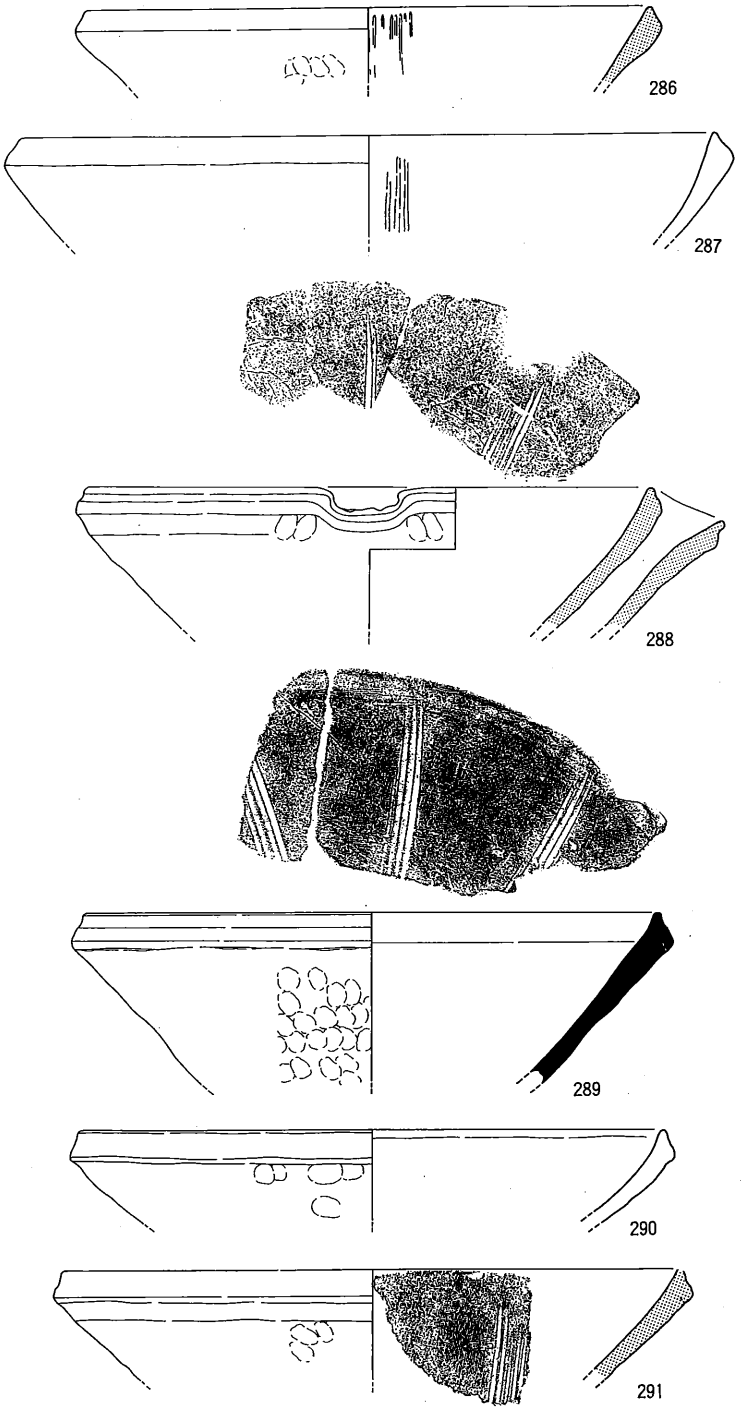
第70図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(7)



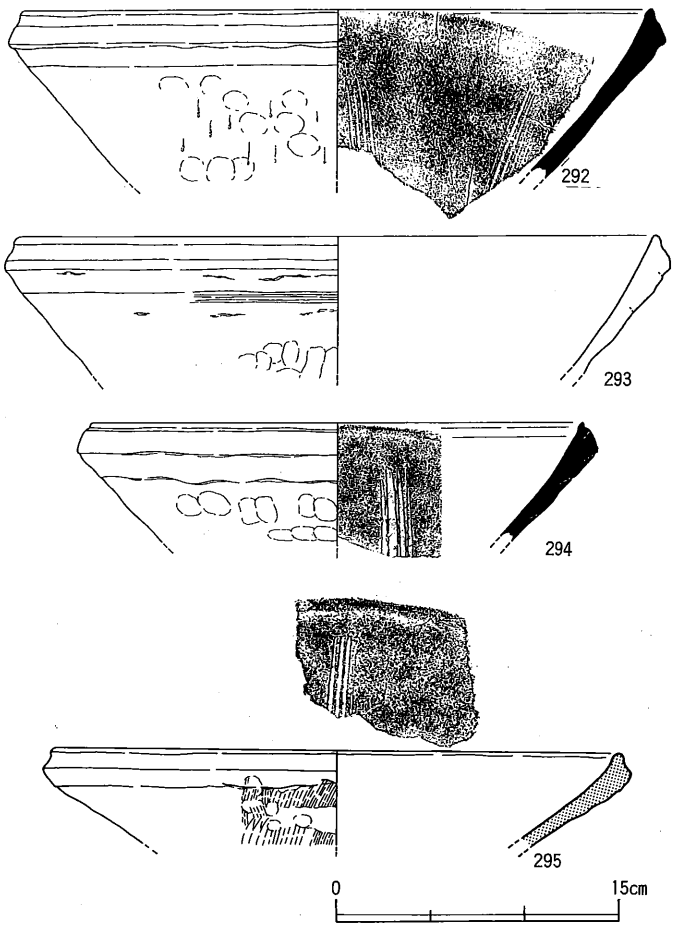
第71図　土器溜り1　第Ⅰa層出土遺物(8)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
280	擂鉢 AⅡ	(口)36.0	2mm以下の砂粒を少量	須恵質	灰	(口)板ナデ→回転ナデ	(口・体)板ナデ　使用痕	口径1/4
281	擂鉢 AⅡ	(口)29.0	1mm以下の砂粒を少量	瓦質	灰黄	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/6
282	擂鉢 AⅡ	(口)32.1	2mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ　使用痕	口径1/8
283	擂鉢 AⅡ	(口)30.0	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄褐	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/12
284	擂鉢 AⅡ	(口)34.0	1mm以下の砂粒	瓦質	(内・外)灰 (断)灰黄	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/4
285	擂鉢 AⅡ	(口)34.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口径2/3

第30表　土器溜り1　第Ⅰa層出土遺物観察表(4)



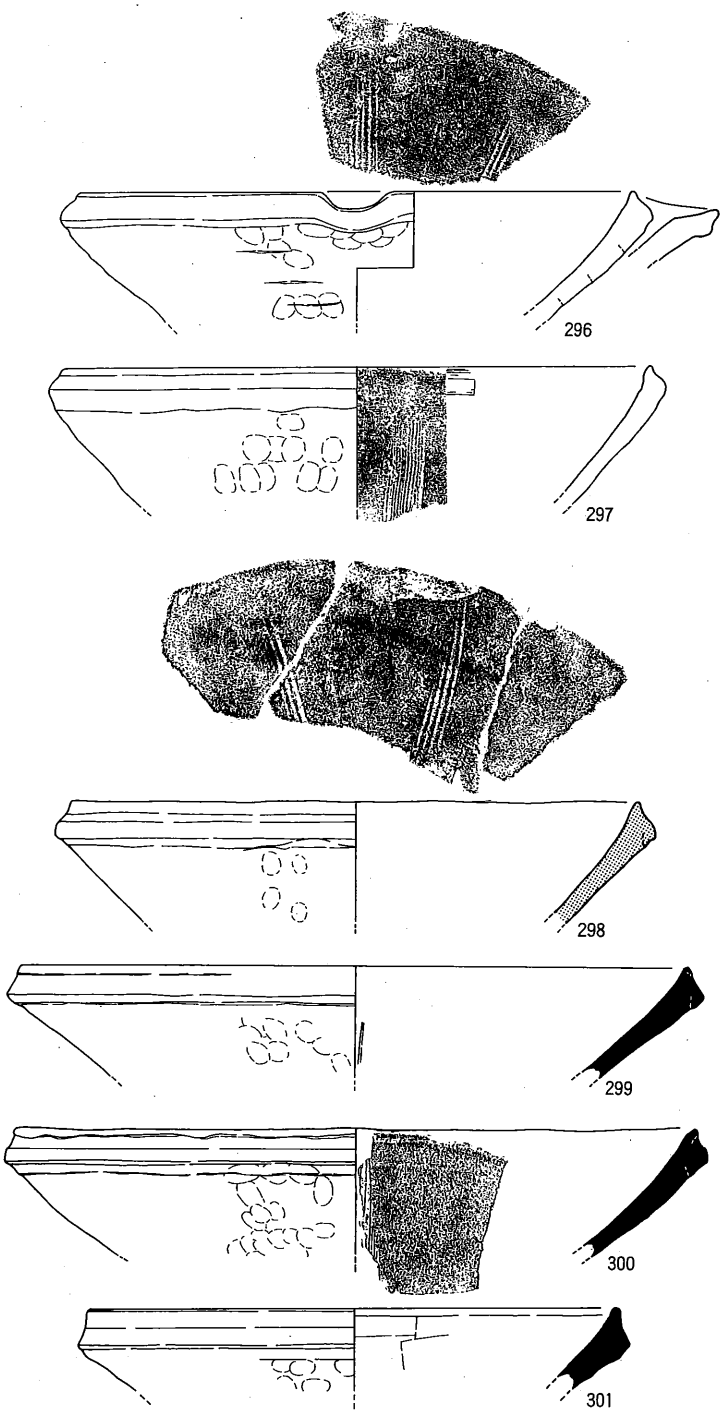
第72図　土器溜り１　第Ｉａ層出土遺物(9)



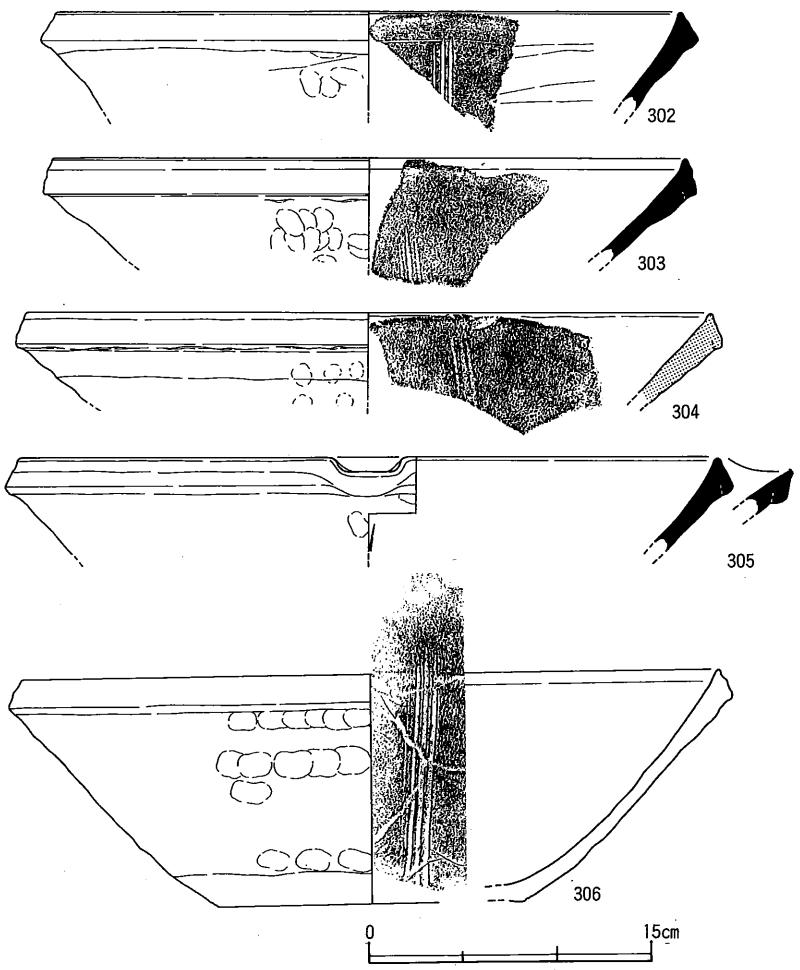
第73図　土器溜り1　第Ⅰa層出土遺物⑽

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
286	擂鉢 AⅡ	(口)29.6	2mm以下の砂粒	瓦質	灰	調整不明	調整不明	口1/12
287	擂鉢 AⅡ	(口)36.4	3mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	調整不明	調整不明	口1/8
288	擂鉢 AⅡ	(口)29.6	1.5mm以下の砂粒	瓦質	青灰	(口)板ナデ	(口・体)板ナデ	口1/5
289	擂鉢 AⅡ	(口)30.4	2mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ　使用痕	口1/4
290	擂鉢 AⅡ	(口)31.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/12
291	擂鉢 AⅡ	(口)32.8	2mm以下の砂粒	瓦質	灰白	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/10
292	擂鉢 AⅡ	(口)33.0	1mm以下の砂粒	須恵質	(内・外)灰 (断)浅黄	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ　使用痕	口1/8
293	擂鉢 AⅡ	(口)33.6	3mm以下の砂粒	土師質	(外)にぶい橙 (内)にぶい黄橙	(口)横ハケ→回転ナデ	(体)板ナデ→(口)回転ナデ	口1/8
294	擂鉢 AⅡ	(口)26.0	1mm以下の砂粒	須恵質	灰黄	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/8
295	擂鉢 AⅡ	(口)30.0	1mm以下の砂粒	瓦質	にぶい黄褐	(体)縦ハケ→(口)回転ナデ	(口・体)ナデ	口1/12

第31表　土器溜り1　第Ⅰa層出土遺物観察表(5)



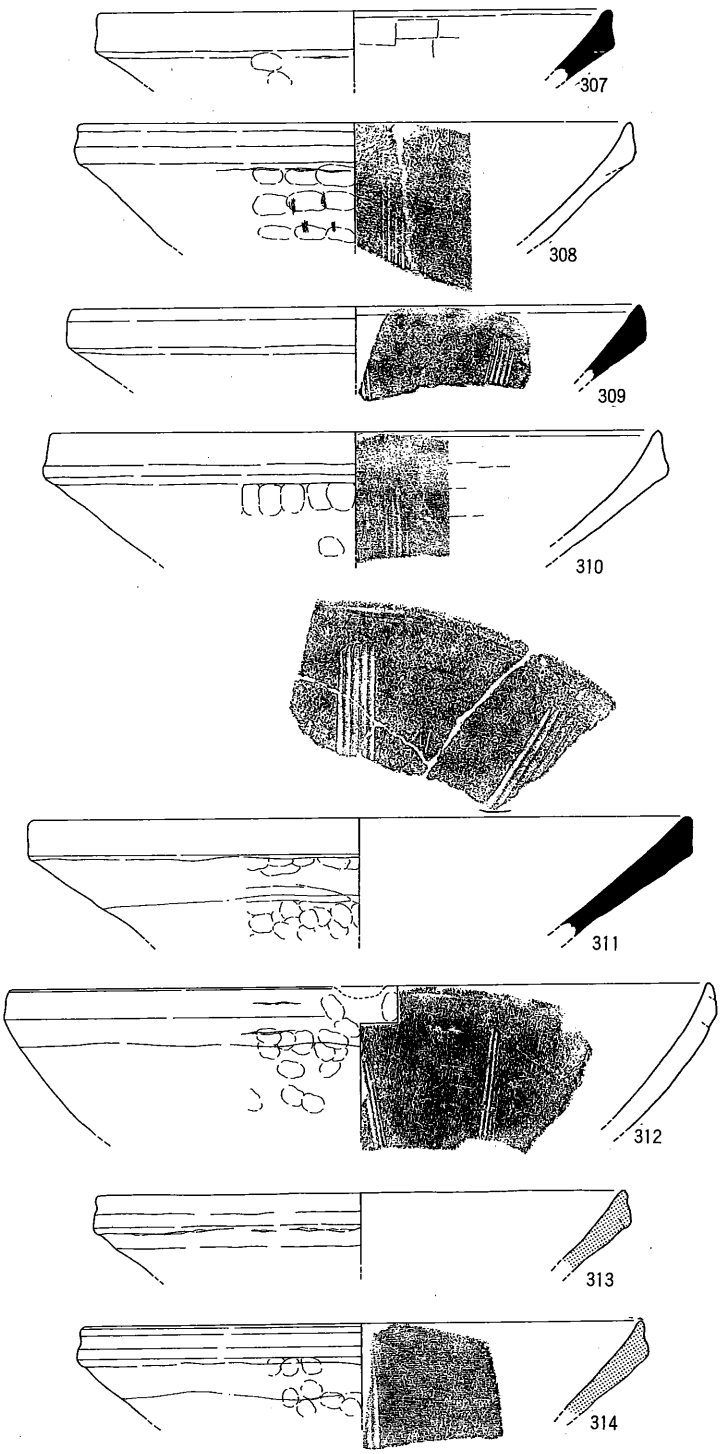
第74図　土器溜り１　第Ｉａ層出土遺物(11)



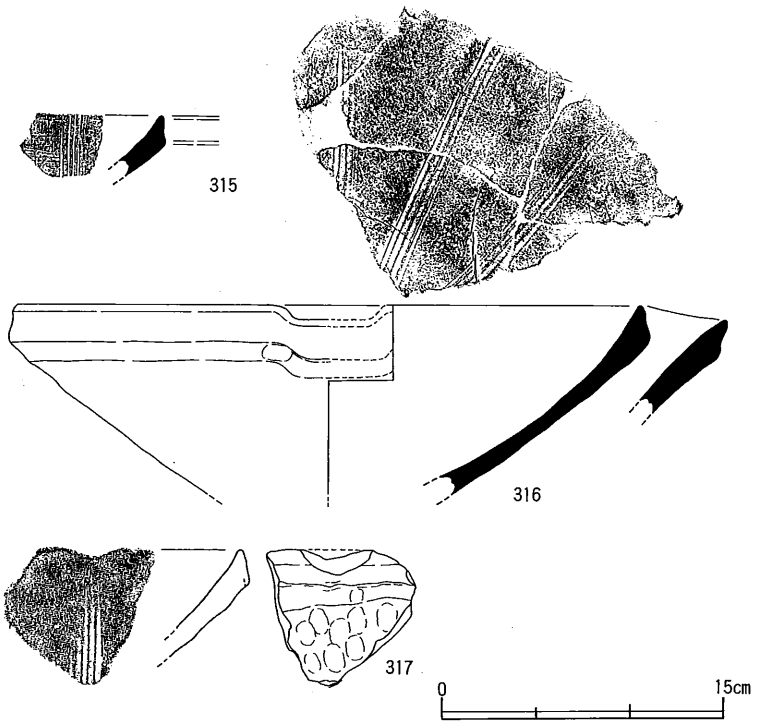
第75図　土器溜り１　第Ｉａ層出土遺物(12)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
296	擂鉢 AII	(口)29.0	2㎜以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/5
297	擂鉢 AII	(口)31.0	5㎜以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/5
298	擂鉢 AII	(口)30.0	1㎜以下の砂粒	瓦質	黄褐	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ　使用痕	口1/2
299	擂鉢 AII	(口)35.2	3㎜以下の砂粒	須恵質	灰	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/8
300	擂鉢 AII	(口)26.0	2㎜以下の砂粒	須恵質	オリーブ黒	(口)回転ナデ	(体)横ナデ→(口)回転ナデ	口1/10
301	擂鉢 AII	(口)28.0	2㎜以下の砂粒	須恵質	灰	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ→(口)回転ナデ	口1/10
302	擂鉢 AII	(口)33.0	2㎜以下の砂粒	須恵質	灰白	(口)回転ナデ	(体)ナデ→(口)回転ナデ	細片
303	擂鉢 AII	(口)33.2	2㎜以下の砂粒	須恵質	灰白	(口)回転ナデ	(口・体)ナデ	口1/12
304	擂鉢 AII	(口)36.0	1㎜以下の砂粒	瓦質	灰黄	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/8
305	擂鉢 AII	(口)36.8	2㎜以下の砂粒	須恵質	灰白	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/12
306	擂鉢 AII	(口)36.4(高)12.1 (底)16.0	2㎜以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ (底外)削り状の強いナデ	(口・体・底)横ナデ	口1/10

第32表　土器溜り１　第Ｉａ層出土遺物観察表(6)



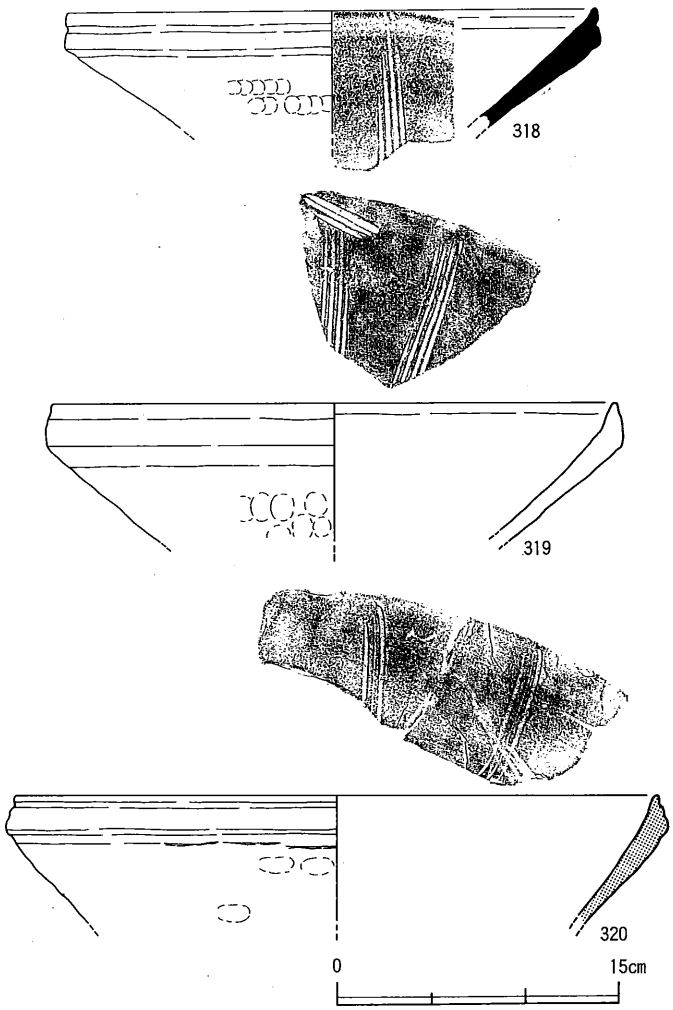
第76図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(13)



第77図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(14)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
307	擂鉢 AⅢ	(口)27.0	1mm以下の砂粒	須恵質	灰白	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/12
308	擂鉢 AⅢ	(口)29.0	2mm以下の砂粒	土師質	(外)にぶい橙 (内)明赤褐	(口)回転ナデ	調整不明	口1/8
309	擂鉢 AⅢ	(口)30.0	2mm以下の砂粒	須恵質	灰白	(口)回転ナデ	(体)板ナデ→(口)回転ナデ	口1/12
310	擂鉢 AⅢ	(口)32.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)板ナデ→回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/4
311	擂鉢 AⅢ	(口)35.0	2mm以下の砂粒	須恵質	灰	(体)板ナデ (口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/6
312	擂鉢 AⅢ	(口)36.8	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)回転ナデ	(口)ナデ？	口1/8
313	擂鉢 AⅢ	(口)28.0	2mm以下の砂粒	瓦質	(内・外)黒オリーブ (断)浅黄橙	(口)回転ナデ	調整不明	口1/12
314	擂鉢 AⅢ	(口)29.6	2mm以下の砂粒	瓦質	オリーブ黒	(口)回転ナデ	調整不明	口1/12
315	擂鉢 AⅢ	—	1mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
316	擂鉢 AⅢ	(口)33.0	1mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口)板ナデ→回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/4
317	擂鉢 AⅢ	—	1mm以下の砂粒	土師質	灰黄	(口)回転ナデ	(口・体)ナデ	細片

第33表　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物観察表(7)



第78図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(15)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
318	擂鉢 AⅢ	(口)28.0	2mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口)沈線→回転ナデ	(口・体)回転ナデ　使用痕	口1/8
319	擂鉢 AⅢ	(口)30.0	1mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ　使用痕?	口1/6
320	擂鉢 AⅢ	(口)34.0	1mm以下の砂粒	瓦質	灰黄	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/4

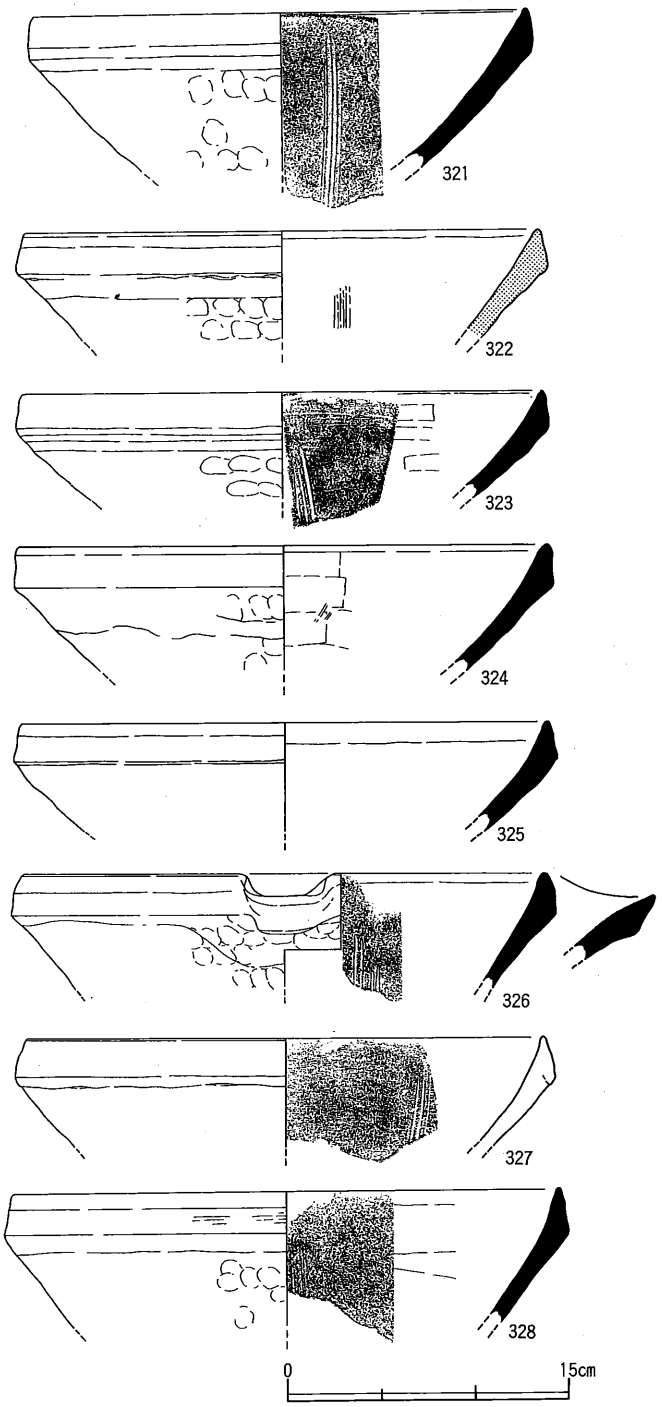
第34表　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物観察表(8)

向の板ナデ調整を施すが，体部外面に縦ハケもしくは縦方向の板ナデ調整を行う。口縁部の回転ナデは体部の縦ハケ調整後になされている。このように，両者には口縁部や体部の調整手法に明瞭な差異が指摘できるのであるが，一方でハケ目原体となる，木目の浮き出た板状工具を意識的に多用する点で共通している。調整段階での板状工具の使用は他の型式の擂鉢にも認められるが，多くは木目が浮き出ていない工具で弱いナデつけ（板ナデ）が行われる程度である。凹凸の掻き取りによる器壁の平滑化がハケ目の効果であるとするならば，擂鉢ＡⅠ類には他の型式よりも手間を惜しまない丁寧な調整が行われていることになろう。

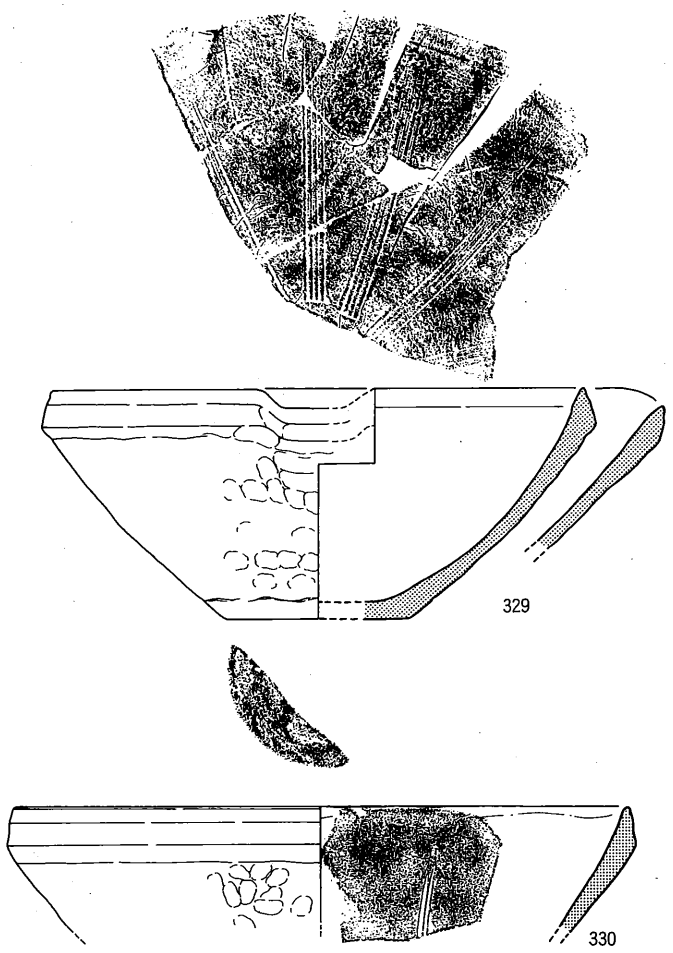
擂鉢ＡⅡ類（273～306）は，口縁部端面が体部に対してやや鈍角気味に外傾するものである。直線的で平坦な口縁部端面をもつもの（ＡⅡ－１類：273～279）と，端面に強い回転ナデ調整ないし沈線状の押圧（押し挽き）による凹面をもち，やや上方にツマミ上げたようにみえるもの（ＡⅡ－２類：280～301），また端面の上下端を拡張気味にさせたもの（ＡⅡ－３類：302～306）がある。ＡⅡ－３類の口縁端部の拡張は，強い回転ナデ調整によって行われており，特に上方への挽き出しが顕著である。なお後述するように，土器溜り２・３出土の擂鉢ＡⅡ類はほぼＡⅡ－２類で占められており，本例とほぼ同様な構成比を示すことが注意される。

273は内面の卸し目上端に「〓」状の刻線を斜め（右下がり）に施している。２本の刻線は平行していることから，卸し目原体のような工具で１度に引かれた可能性がある。ただし，本例の卸し目原体とは明瞭に異なった，幅の広いものである。275～277は口縁部端面が体部に対して直角に近く，またやや肥厚気味であることから，擂鉢ＡⅠ－１類に近い形態をもつ。293は口縁部直下の体部外面に横ハケ調整を施す。また294はやや特殊な形態であり，沈線を口縁部端面上端に施すために，突帯状の端部をなす。外面には接合痕が顕著に残る。295は口縁部直下にまで強い回転ナデ調整がみられ，また体部には縦ハケ調整が行われる。口縁部の外傾度以外は，擂鉢ＡⅠ－２類に共通する要素をもつといえよう。303はＡⅡ－３類の中でも特に著しく上方へ挽き出した口縁端部をもち，同時期の東播系須恵器捏鉢に近い形態である。

擂鉢ＡⅢ類（307～361）は，端面がほぼ垂直方向に肥厚するものである。端部がシャープなもの（ＡⅢ－１類：307～345）と，端面下端の屈曲が弱く丸味をもって体部と連続するもの（ＡⅢ－２類：346～349），また全体に丸味を帯びた鈍重な作巧のもの（ＡⅢ－３類：350～361）とがある。ＡⅢ－１類はさらに，相対的に端面長の短い一群（307～318）



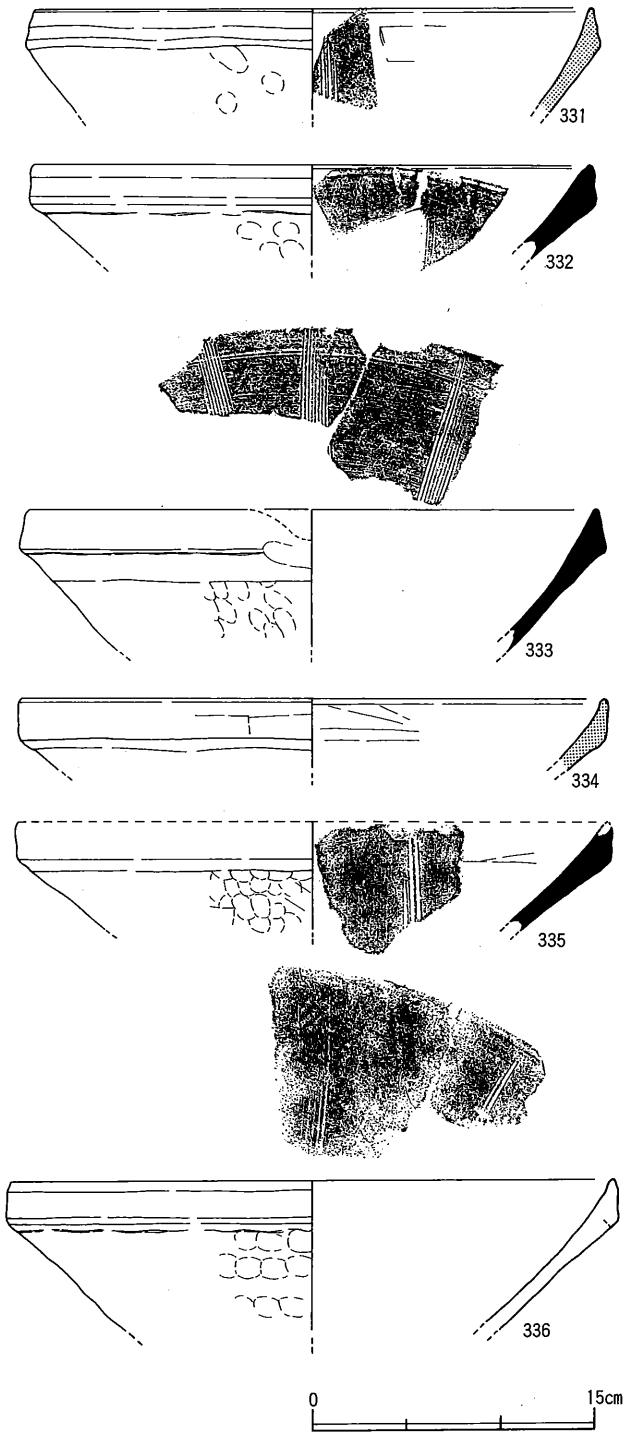
第79図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(16)



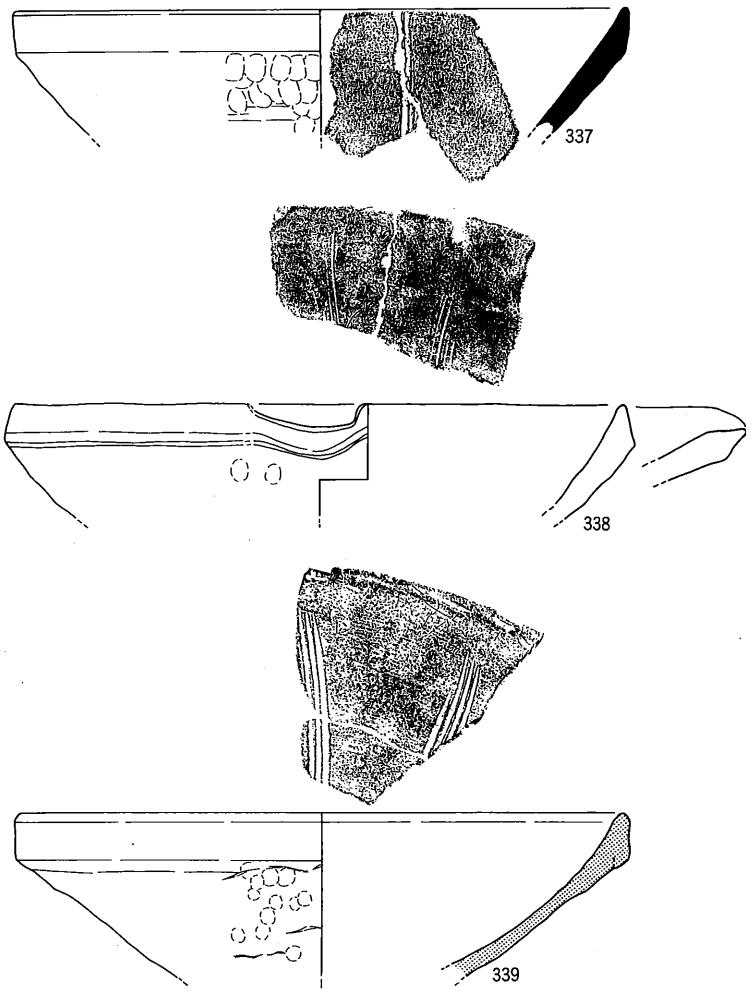
第80図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(17)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
321	擂鉢 AⅢ	(口)26.0	2mm以下の砂粒を少量	須恵質	灰黄褐	(口)板ナデ→回転ナデ	(口・体)板ナデ→(口)回転ナデ	口1/10
322	擂鉢 AⅢ	(口)27.0	1mm以下の砂粒を少量	瓦質	灰	(口)板ナデ→回転ナデ	調整不明	口1/12
323	擂鉢 AⅢ	(口)27.4	1mm以下の砂粒	須恵質	浅黄	(口)板ナデ→回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
324	擂鉢 AⅢ	(口)28.0	1mm以下の砂粒を少量	須恵質	灰	(体)板ナデ (口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
325	擂鉢 AⅢ	(口)28.0	3mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口)板ナデ→回転ナデ	(口・体)板ナデ→(口)回転ナデ	口1/12
326	擂鉢 AⅢ	(口)27.6	3mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/8
327	擂鉢 AⅢ	(口)26.2	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ→回転ナデ	口1/8
328	擂鉢 AⅢ	(口)28.9	2mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口)板ナデ→回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
329	擂鉢 AⅢ	(口)28.0(底)12.2 (底)9.6	2mm以下の砂粒を少量	瓦質	灰白	(口)回転ナデ (底)下駄印	(口・体)板ナデ→(口)回転ナデ 使用痕	口1/4 底1/4
330	擂鉢 AⅢ	(口)32.8	1mm以下の砂粒	瓦質	(外)灰 (内)灰白	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/12

第35表　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物観察表(9)



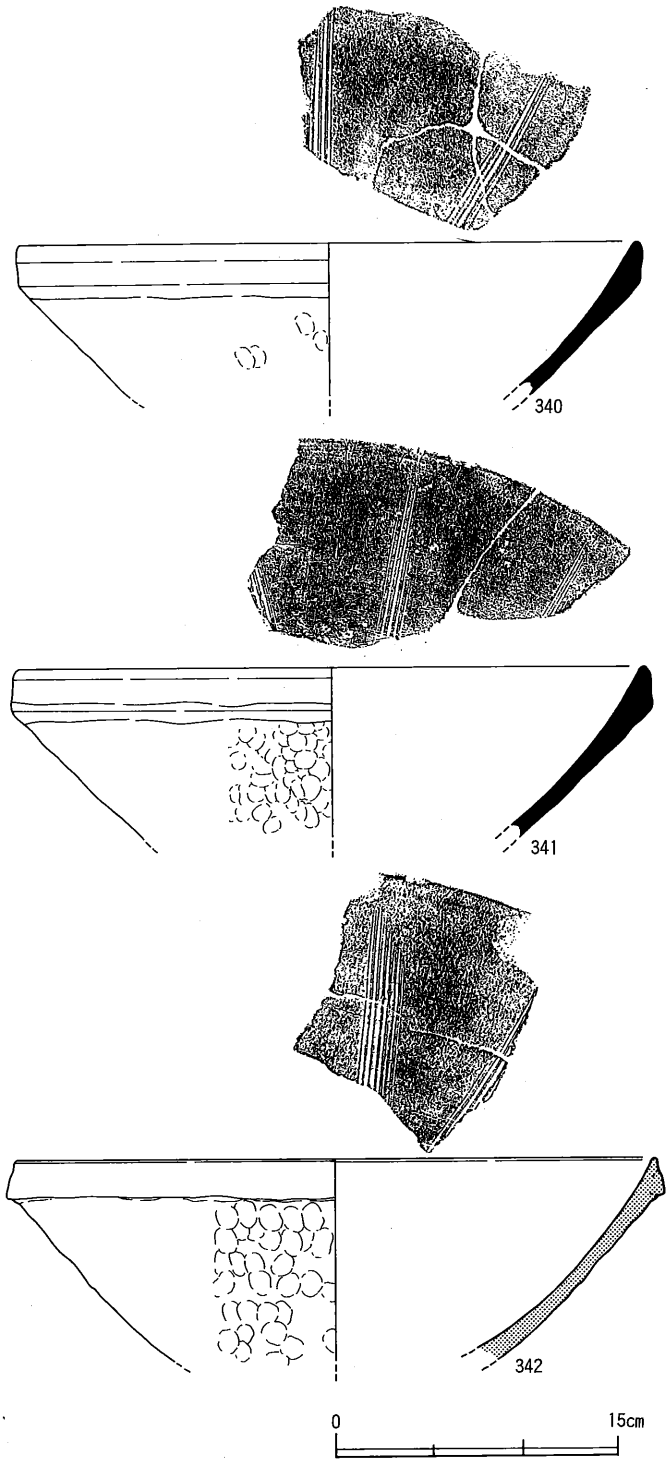
第81図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(18)



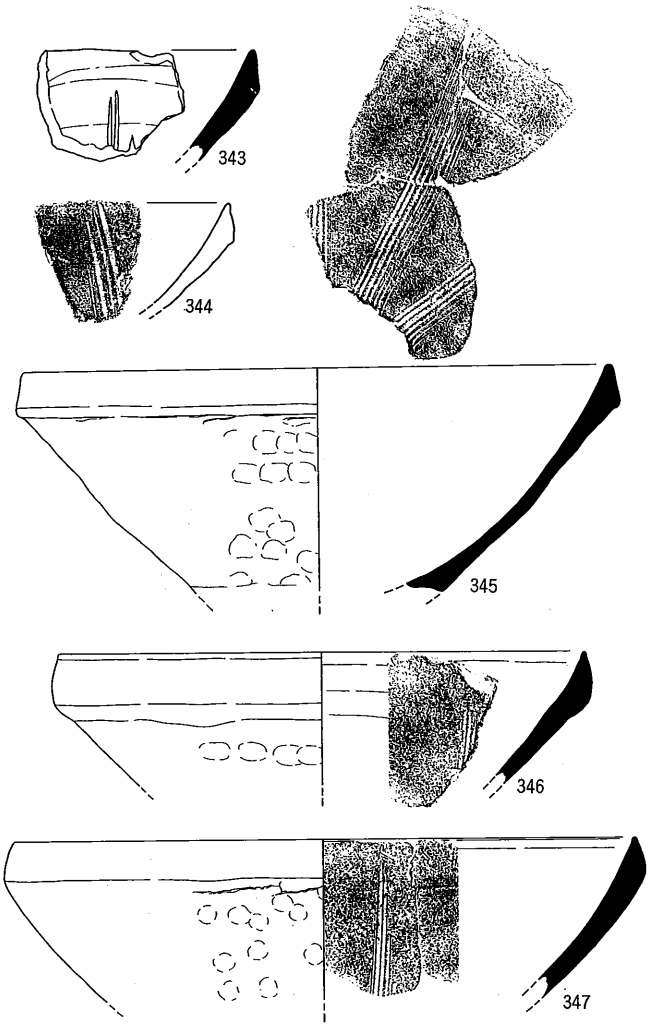
第82図　土器溜り１　第Ｉａ層出土遺物(19)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
331	擂鉢 AIII	(口)29.2	1mm以下の砂粒	瓦質	灰オリーブ	(口)板ナデ→回転ナデ	(口・体)板ナデ	□1/12
332	擂鉢 AIII	(口)29.4	2mm以下の砂粒を少量	須恵質	黄灰	(口)板ナデ→回転ナデ	(口・体)板ナデ	□1/8
333	擂鉢 AIII	(口)30.0	3mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口)板ナデ→回転ナデ	(口・体)板ナデ	□1/4
334	擂鉢 AIII	(口)31.9	1mm以下の砂粒	瓦質	灰	(口)板ナデ→回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
335	擂鉢 AIII	(口)31.2	2mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
336	擂鉢 AIII	(口)32.0	3mm以下の砂粒	土師質	(外)褐灰 (内)橙	(口)板ナデ→回転ナデ	(口・体)板ナデ	□1/6
337	擂鉢 AIII	(口)32.2	4mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	□1/12
338	擂鉢 AIII	(口)32.0	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	□1/6
339	擂鉢 AIII	(口)32.0	1mm以下の砂粒	瓦質	灰	(口)板ナデ→回転ナデ	(口・体)板ナデ　使用痕?	□1/6

第36表　土器溜り１　第Ｉａ層出土遺物観察表(10)



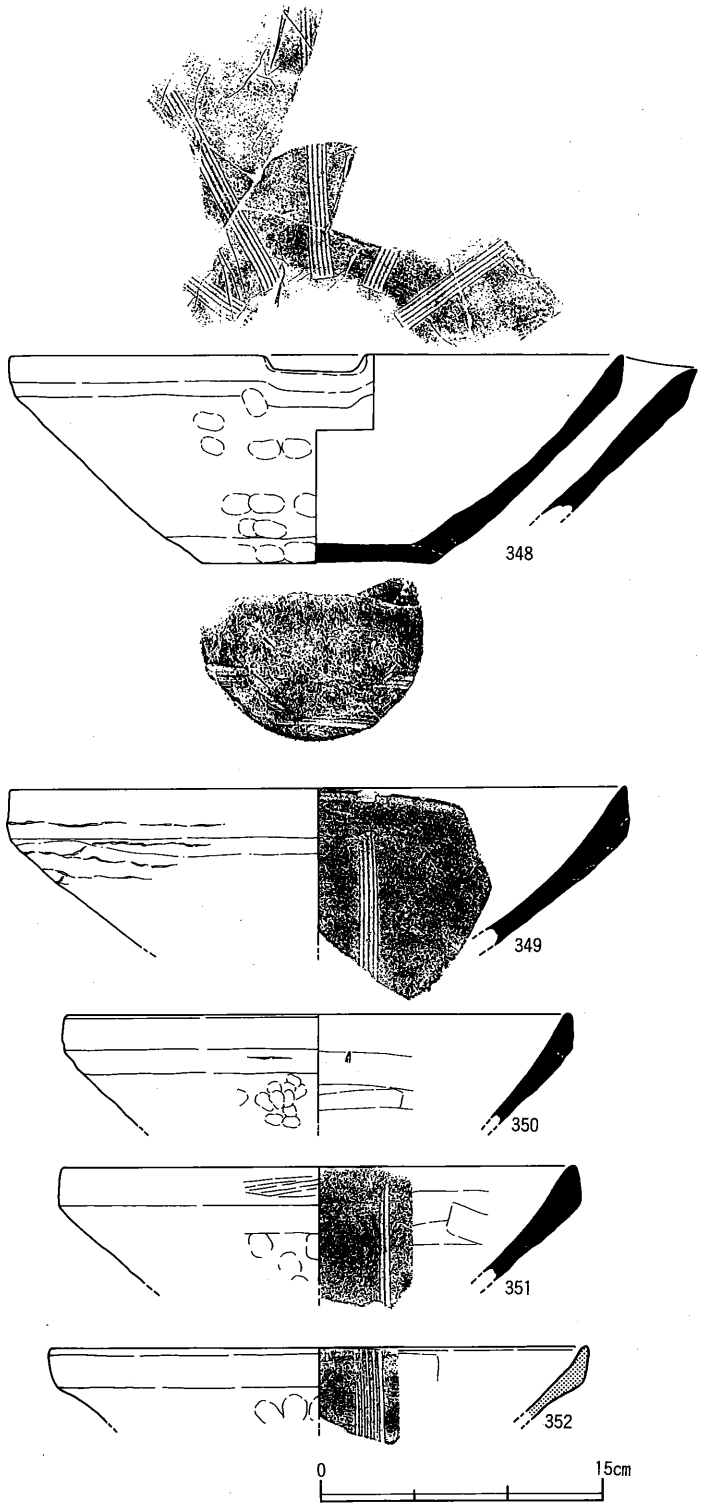
第83図　土器溜り１　第Ｉａ層出土遺物⑳



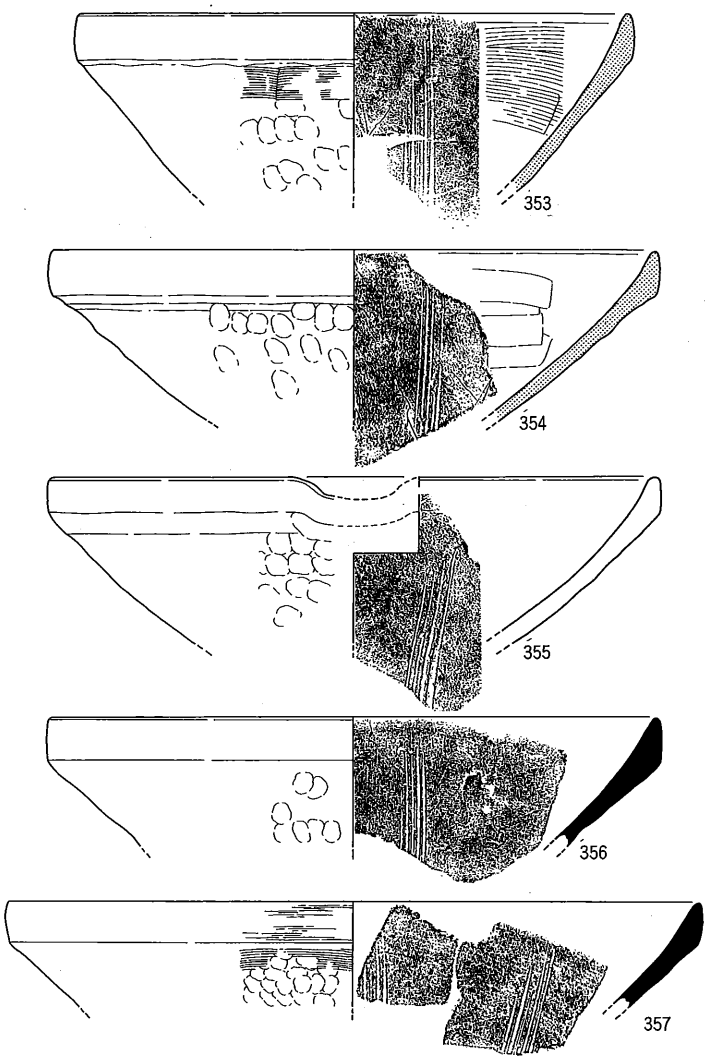
第84図　土器溜り1　第Ⅰa層出土遺物(21)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
340	擂鉢 AⅢ	(口)32.6	2㎜以下の砂粒	須恵質	灰	(口)回転ナデ	(口-体)板ナデ	□径1/6
341	擂鉢 AⅢ	(口)33.0	3㎜以下の砂粒	須恵質	灰	(口)板ナデ→回転ナデ	(口-体)板ナデ　使用痕	□径1/6
342	擂鉢 AⅢ	(口)33.8	2㎜以下の砂粒	瓦質	(外)暗灰 (内)灰	(口)回転ナデ	(口-体)板ナデ→ (口)回転ナデ　使用痕	□径1/8
343	擂鉢 AⅢ	—	2㎜以下の砂粒	須恵質	(外)暗灰 (内)灰	(口)回転ナデ	(口-体)板ナデ	細片
344	擂鉢 AⅢ	—	1㎜以下の砂粒	土師質	淡黄	(口)回転ナデ	(口-体)板ナデ	細片
345	擂鉢 AⅢ	(口)31.0	2㎜以下の砂粒	須恵質	灰白	(口)板ナデ　(櫛描)削り	(口-体)板ナデ　使用痕	□径1/12
346	擂鉢 AⅢ	(口)28.0	5㎜以下の砂粒	須恵質	(外)灰 (内)灰黄褐	(口)板ナデ→回転ナデ	(口-体)板ナデ	□径1/8
347	擂鉢 AⅢ	(口)32.7	2㎜以下の砂粒	須恵質	灰	(口)板ナデ→回転ナデ	(口-体)板ナデ	□径1/8

第37表　土器溜り1　第Ⅰa層出土遺物観察表(11)



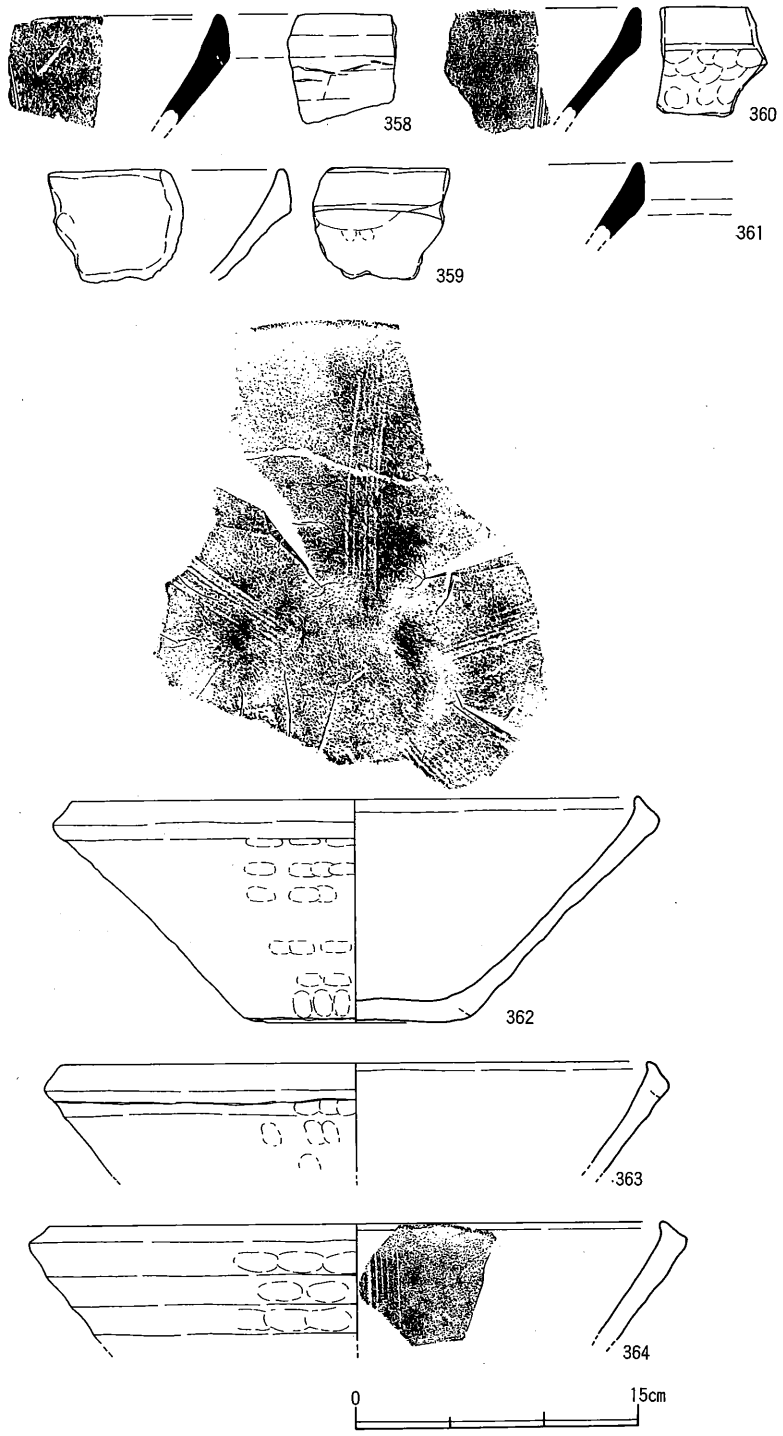
第85図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(22)



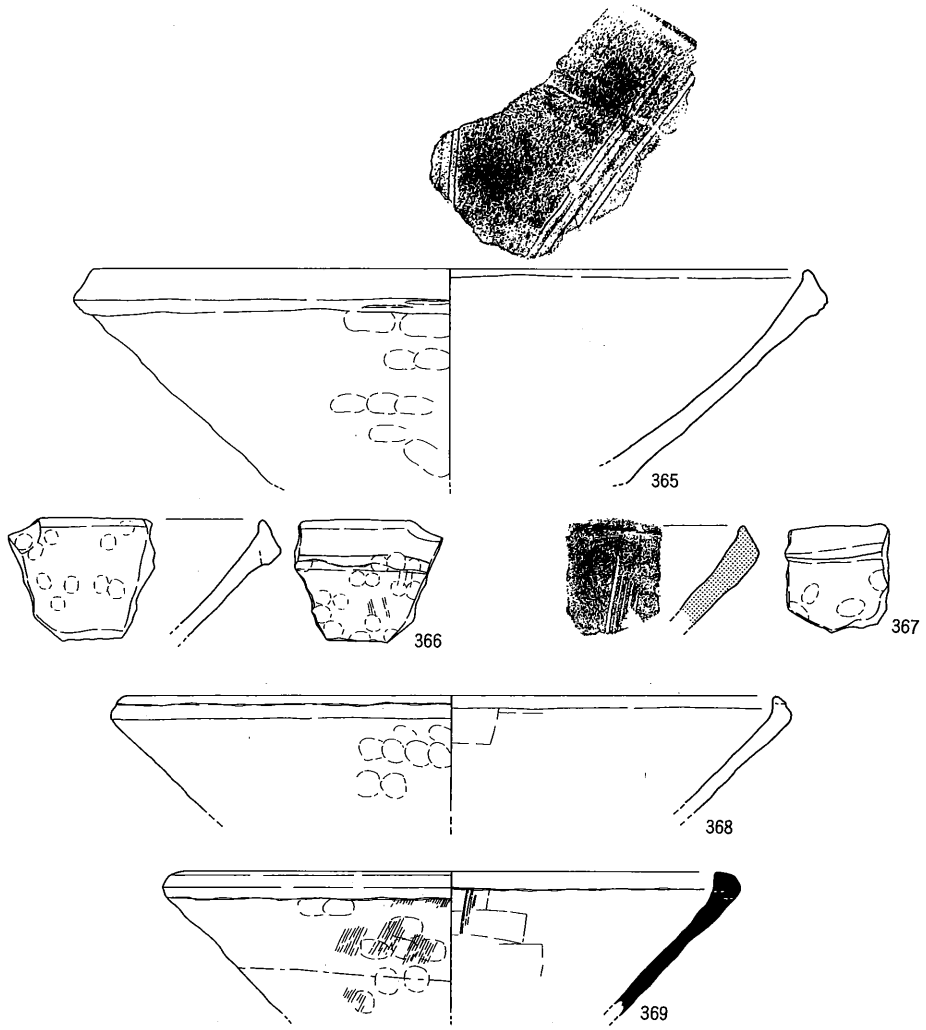
第86図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(23)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
348	擂鉢 AⅢ	(口)32.4(高)11.0 (底)12.0	1mm以下の砂粒	須恵質	(外)灰黄 (内)黄灰	(口)板ナデ→回転ナデ (底縁)削り状のナデ (底)亀板痕？	(口・体)板ナデ (底)回転ナデ	底1/2
349	擂鉢 AⅢ	(口)32.6	1mm以下の砂粒、3mm程の小石	須恵質	灰	(口)板ナデ→回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/8
350	擂鉢 AⅢ	(口)26.4	2mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/8
351	擂鉢 AⅢ	(口)27.0	2mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口)板ナデ→回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/10
352	擂鉢 AⅢ	(口)29.0	1mm以下の砂粒	瓦質	灰白	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/8
353	擂鉢 AⅢ	(口)29.0	2mm以下の砂粒	瓦質	(外)灰褐 (内)灰	(口)板ナデ→回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/6
354	擂鉢 AⅢ	(口)32.0	1mm以下の砂粒	瓦質	灰	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/10
355	擂鉢 AⅢ	(口)32.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)板ナデ→回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/10
356	擂鉢 AⅢ	(口)32.0	2mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/8
357	擂鉢 AⅢ	(口)36.6	2mm以下の砂粒	須恵質	(外)にぶい赤褐 (内)褐灰	(口)板ナデ→回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/8

第38表　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物観察表(12)



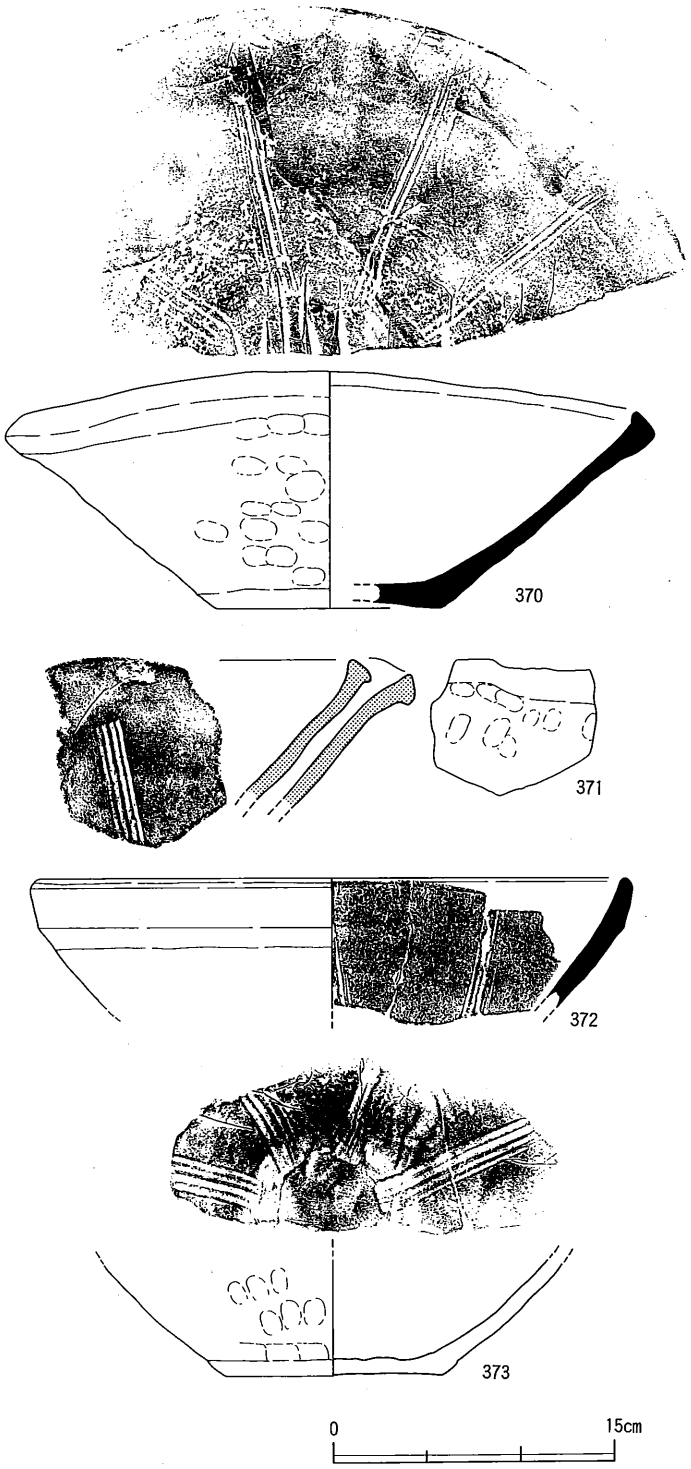
第87図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(24)



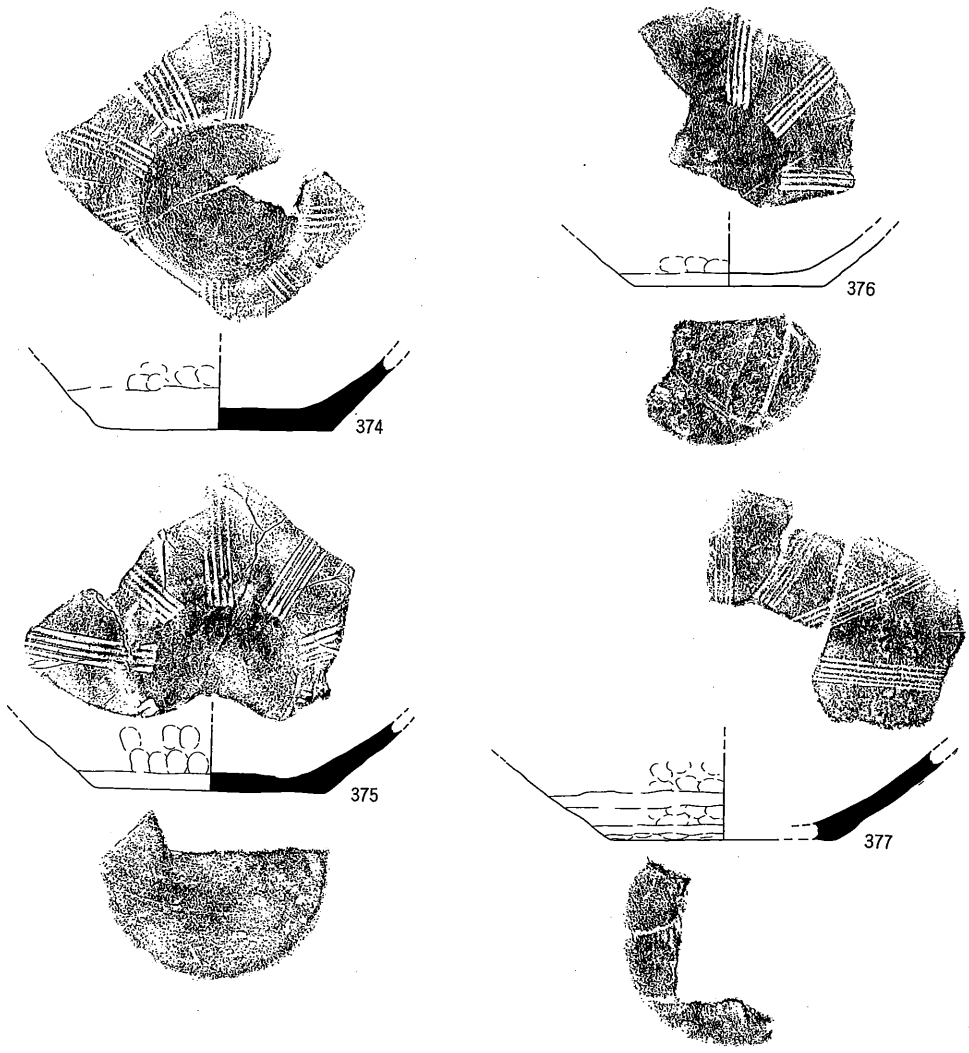
第88図　土器溜り1　第Ⅰa層出土遺物(25)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
358	擂鉢 AⅢ	—	2.5㎜以下の砂粒	須恵質	黄灰	(口)板ナデ→回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
359	擂鉢 AⅢ	—	1㎜以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
360	擂鉢 AⅢ	—	1㎜以下の砂粒	須恵質	灰白	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
361	擂鉢 AⅢ	—	1㎜以下の砂粒	須恵質	(外)青灰 (内)灰	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
362	擂鉢 AⅣ	(口)30.0(底)11.9 (底)12.0	2㎜以下の砂粒	土師質	褐灰	(口)回転ナデ (底)下駄印?	調整不明	底部1/6完存
363	擂鉢 AⅣ	(口)31.0	2㎜以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(口)回転ナデ?	(口・体)回転ナデ?	口縁1/10
364	擂鉢 AⅣ	(口)32.2	3㎜以下の砂粒	土師質	(外)にぶい橙 (内)橙	(口)回転ナデ	(口)回転ナデ	口縁1/10
365	擂鉢 AⅣ	(口)37.8	2㎜以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ (底)横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
366	擂鉢 AⅣ	—	1㎜以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
367	擂鉢 AⅣ	—	1㎜以下の砂粒	瓦質	灰黄	(口)板ナデ→回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
368	擂鉢 AⅣ	(口)34.4	4㎜以下の砂粒	土師質	にぶい黄褐	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ→(口)回転ナデ	口縁1/12
369	擂鉢 AⅣ	(口)28.0	1㎜以下の砂粒	須恵質	灰黄	(体)縦ハケ→(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口縁1/6

第39表　土器溜り1　第Ⅰa層出土遺物観察表(13)



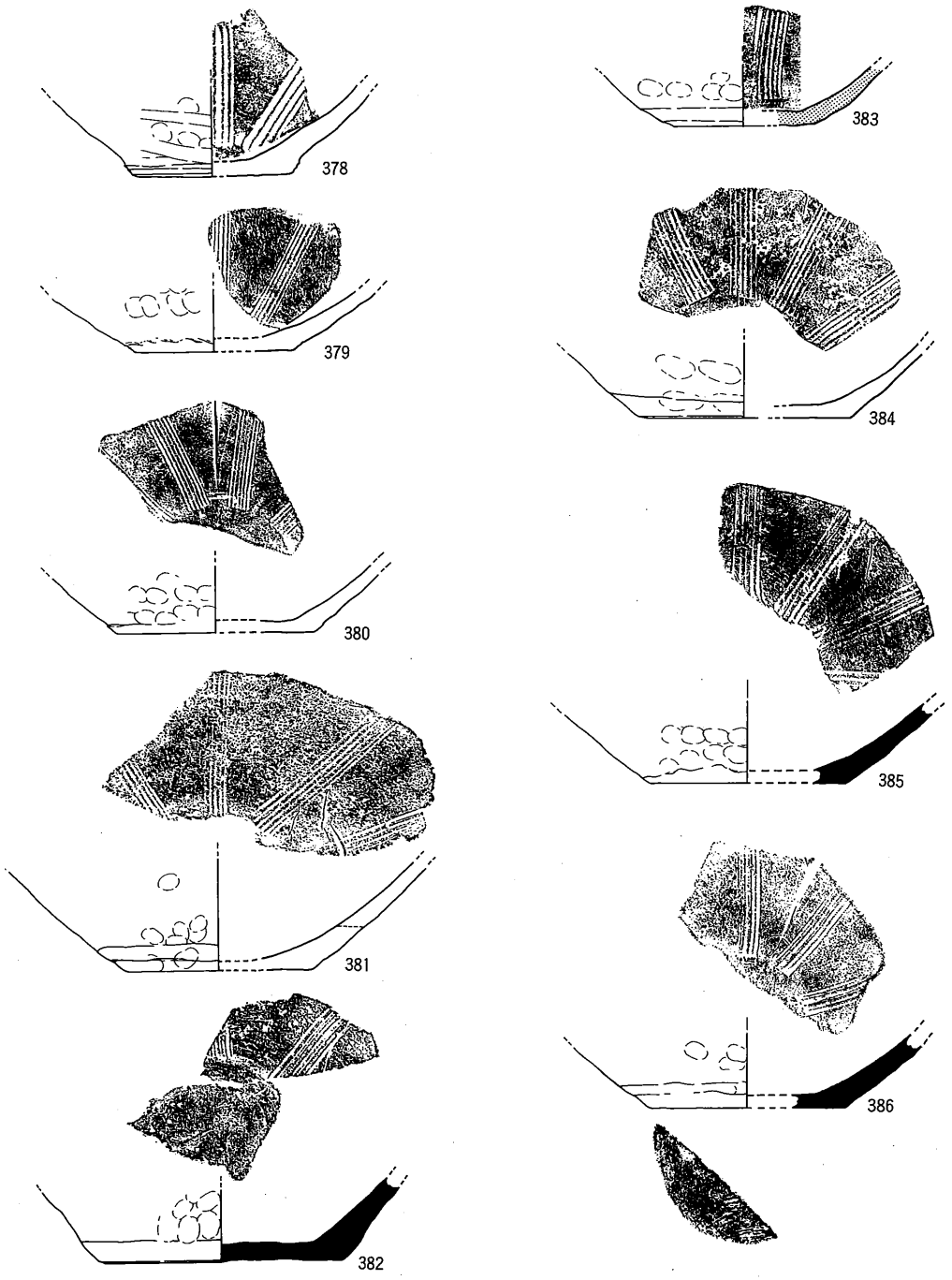
第89図　土器溜り１　第Ｉａ層出土遺物(26)



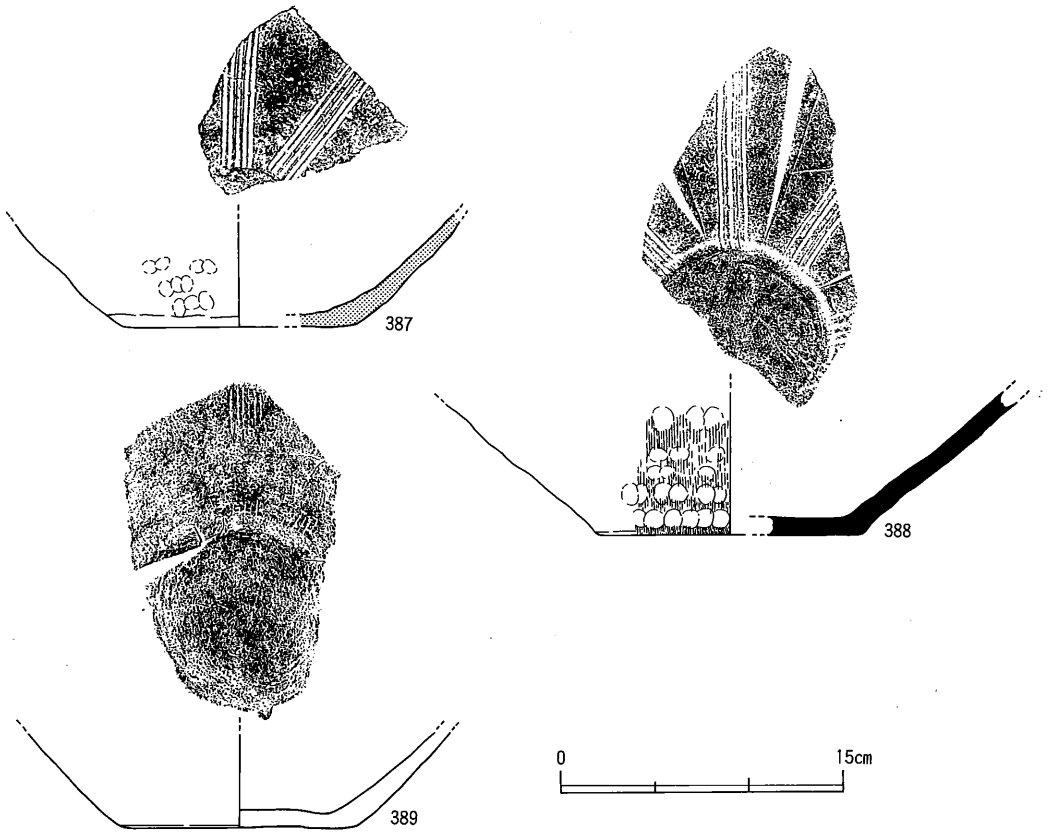
第90図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(27)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
370	擂鉢 AIV	(口)32.3(肩)10.5 (底)12.0	2mm以下の砂粒	須恵質	灰オリーブ	(体)縦ハケ→(口)木目状圧痕→回転ナデ (底)横ナデ	(口・体)板ナデ　使用痕	口縁1/3
371	擂鉢	—	2mm以下の砂粒	瓦質	灰	(口)回転ナデ?	(口・体)板ナデ	細片
372	擂鉢 BⅠ	(口)31.0	3mm以下の砂粒を少量	須恵質	灰	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口縁1/8
373	擂鉢 底部	(底)11.6	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(底外縁)削り状のナデ	(体)回転ナデ (底)ナデ	底縁1/2
374	擂鉢 底部	(底)12.0	1mm以下の砂粒を少量	須恵質	灰	(底外縁)削り状のナデ	(底)ナデ　使用痕	底縁1/2
375	擂鉢 底部	(底)12.0	1mm以下の砂粒	須恵質	灰白	(底)板ナデ→ナデ (底外縁)削り状のナデ	(体)板ナデ→(底)ナデ	底縁1/2
376	擂鉢 底部	(底)10.0	2mm以下の砂粒	土師質	灰褐	(底外縁)削り状のナデ (底)下駄印	(体)板ナデ (底)ナデ	底縁1/3
377	擂鉢 底部	(底)12.0	1mm以下の砂粒を少量	須恵質	灰	(底外縁・体)削り状のナデ (底)下駄印	(体)板ナデ 使用痕	底縁1/3

第40表　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物観察表(14)



第91図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(28)



第92図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(29)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
378	擂鉢 底部	(底)9.0	2mm以下の砂粒を少量	土師質	にぶい黄橙	(体)横ナデ (底外縁)削り	(体)ナデ? 使用痕	底径1/4
379	擂鉢 底部	(底)9.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(底外縁)削り状のナデ	(体)板ナデ	底径1/6
380	擂鉢 底部	(底)11.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(底外縁)削り状のナデ	(体)板ナデ 使用痕	底径1/4
381	擂鉢 底部	(底)10.8	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(底外縁)削り状のナデ	(体)板ナデ 使用痕?	底径1/3
382	擂鉢 底部	(底)13.8	2mm以下の砂粒	須恵質	暗灰	(底外縁)削り状のナデ	(体)板ナデ 使用痕	底径1/4
383	擂鉢 底部	(底)8.0	1mm以下の砂粒	瓦質	灰	(底外縁)削り状のナデ	(体)板ナデ	底径1/6
384	擂鉢 底部	(底)12.1	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(底外縁)削り状のナデ	(体)板ナデ 使用痕	底径3/10
385	擂鉢 底部	(底)11.0	2mm以下の砂粒を少量	須恵質	灰	(底外縁)削り状のナデ	(体)板ナデ 使用痕	底径1/4
386	擂鉢 底部	(底)11.0	2mm以下の砂粒を少量	須恵質	灰	(底外縁)削り状のナデ (底)ハケ目	(体)板ナデ	底径1/4
387	擂鉢 底部	(底)10.0	2mm以下の砂粒	瓦質	灰	(底外縁)削り状のナデ (底)ナデ	(体)板ナデ	底径1/8
388	擂鉢 底部	(底)14.0	1mm以下の砂粒	須恵質	灰	(体)縦ハケ (底)ナデ	(体)板ナデ (底)ナデ	底径1/4
389	擂鉢 底部	(底)12.6	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(底)板ナデ	使用痕により表面摩滅	底径1/4

第41表　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物観察表(15)

と長い一群（319～345）に細分できる。前者は端面を１段に，後者は２段に分けて回転ナデ調整する。

318の口縁部端面には沈線状の押し挽きが施され，その後回転ナデ調整される。319には内面の卸し目上端に「二」状の刻線が右下がりに施される。273と同様に１度に線引きされているとみられるが，やはり卸し目原体とは異なる条数・幅をもつ。328の口縁部端面下端にはハケ目状の板ナデ調整が認められる。329の底部外面には，下駄印がかすかに看取できる。また333の内面には，回転を利用した極めて丁寧で明瞭な板ナデ調整が認められる。345は接合部で底部円板が剝離しており，剝離面が擬口縁状を呈する。348の底部外面には，板目状の圧痕がみられる。亀板痕か。353と357は内面全体と口縁部外面ないし口縁部直下に横ハケ調整が施される。328と併せて，普遍的ではないがＡⅠ類にみられた板状工具による器面調整が行われていたことを示す。

擂鉢ＡⅣ類（362～370）は，口縁端部を突帯状にツマミ上げるものである。資料数が少ないこともあり，ほぼ形態的にまとまっているといえるが，368・369は若干異質な端部形態をもつ。370は硬質な須恵質焼成であり，口縁部が大きく焼け歪んでいる。

371は丸く肥厚する口縁部をもっており，上記の型式分類にそぐわない資料である。内面の卸し目は上端を明瞭に止めていることから，上（口縁部）から下（底部）へ施されたことが考えられる。これは，下から上へという楠井産土器一般の在り方と異なっており，形態・技法ともに異質な存在であることを示している。搬入品か。

372は擂鉢ＢⅠ類である。体部から口縁部への屈曲は極めて緩慢であり，回転ナデの及ぶ範囲でかろうじて口縁部・体部の識別ができる。

擂鉢底部（373～389）は残存状況が良好なものを図示した。外見上底部が突出気味になるものは少なく，わずかに378を挙げ得るのみである。これは，底部外縁に強い回転ナデ（もしくはヘラ削り）をほぼ例外なく行っていることと関係しよう。なお底部外縁のナデを多回起的に行うことは稀で，１周のみ行うものがほとんどである。

底部外面には下駄印がみられるもの（376・377）や亀板痕がみられるもの（375）がある。綾南町十瓶山窯跡群でしばしばみられるような，剝離材としてのワラや籾殻の痕跡は見受けられないことから，ロクロ盤上での剝離材の使用は想定できない。

卸し目の方向については，多くが８～９方向と思われる。ただし全方向が概ね観察できる374・375をみると，卸し目の施文にあたっては丁寧に円周を割り付けるような規則性は読み取れず，むしろロクロ盤を少しずつ回しながら，その都度手早く施文したような状況

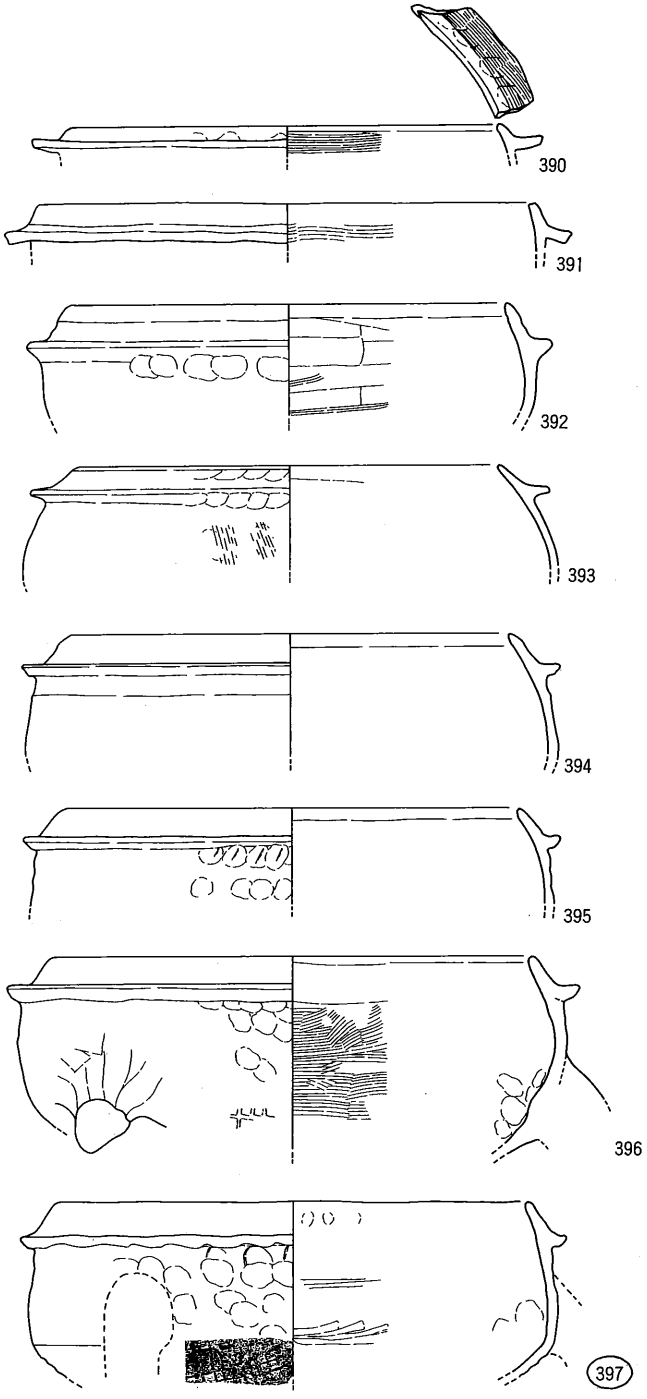
である。また底部と体部の境に卸し目原体の止めがみられることから，卸し目は底部から口縁部へと施されたといえる。なお，擂鉢内面に使用痕がみられることは既に述べたが，使用による摩滅は体部下半と底部に顕著であり，389のように頻繁な使用によって卸し目がほとんど消滅するような事例も存在する。

足釜（390～484・486～491）には，ＡⅠ類とＢⅡ・Ⅲ・Ⅳ類，Ｃ類がある。ＡⅠ類とＣ類はごく僅かな存在であり，ＢⅡ類も少量にとどまる。したがって大多数はＢⅢ・Ⅳ類ということになる。この点は土器溜り２・３ともに共通しており，既にいくつか指摘してきた相違点とともに，注意される。また，法量は１／４以下の小片が多いことから若干ばらつきが認められるが，口径については概ね以下の４種類に分類可能である。すなわち，16～18cm前後（Ⅰ），20～24cm前後（Ⅱ），25～27cm前後（Ⅲ），28～30cm前後（Ⅳ）の４者である。

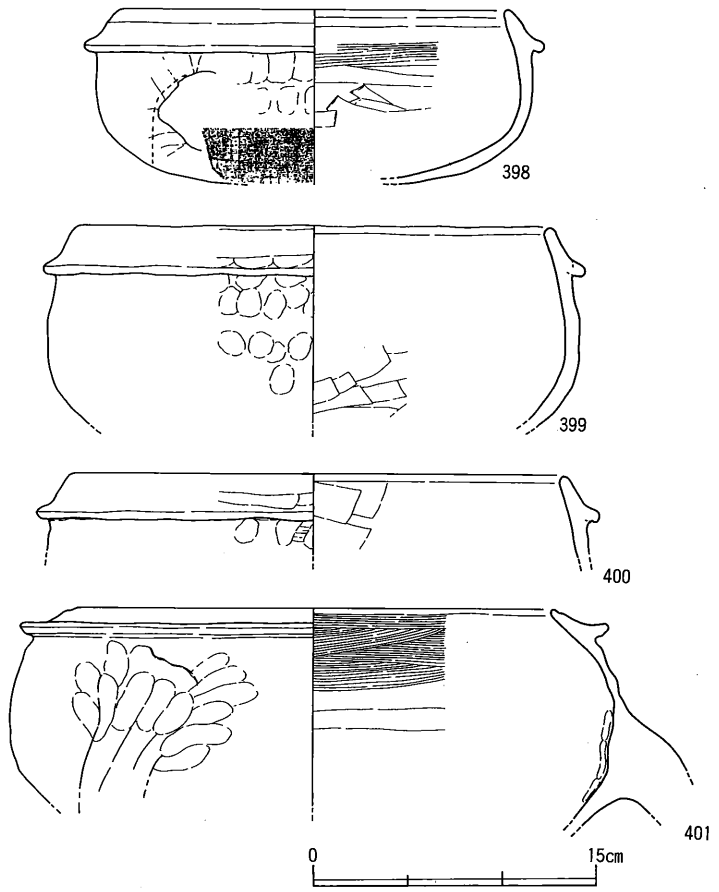
足釜ＡⅠ類（390・391）は，口縁端部と鍔端部に明瞭な平坦面をもつ。内面には横ハケ調整が施されており，390ではさらに鍔部上面にも断続的な横ハケ調整が行わていれる。いずれも小片であることから，後述する第Ⅲ層からの二次的な移動によって混入した可能性が高い。

足釜ＢⅡ類（392～401）は，高く伸びる口縁部と，水平方向に伸びる比較的長くしっかりした鍔部をもつ。いずれも口縁部と体部がスムーズに連続していることから，口縁１技法（鍔部接合法）による成形が行われていることを窺わせる。395・397は鍔部直下に爪形状圧痕を伴う押圧成形痕がみられ，鍔部押圧痕が口縁１技法によっても生じることを示している。その一方で394や401のように，鍔部とその付近を強く横ナデ調整することで成形痕を留めない事例も存在する。また外面に施された格子叩き目は，底部に限定されており，後述するＢⅠ類（721～733）のように体部中位にまで及ぶものはない。397から看取できる直線的な体部と，そこから明瞭に屈曲する底部という形態は，叩き目の施される範囲に直接関係するといえる。

足釜ＢⅢ類（402～447）は，ＢⅡ類に比して短い口縁部と，基部が太くなり突出に明瞭さを欠く鍔部からなる。体部内面には横方向の板ナデもしくは横ハケ調整が施されるが，口縁部までナデ・ハケが及ばないものが存在する（403・407・409・414・416・421・424・426・427・430・431・435・436・439～442・445・447）。それらの中には，体部内面と口縁部内面との境に明瞭な接合痕が看取できるもの（424・426・430・441・442・445）がある。さらに仔細に観察すると，体部外面の縦ハケが鍔部下面まで連続しているもの



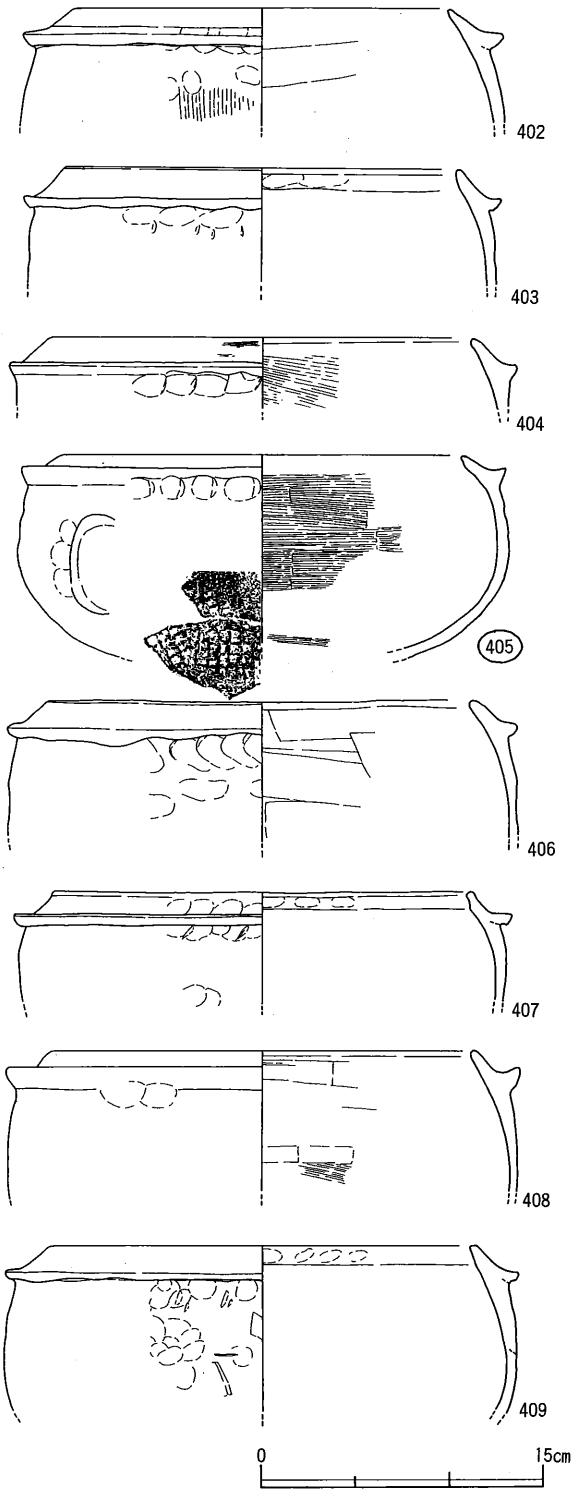
第93図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(30)



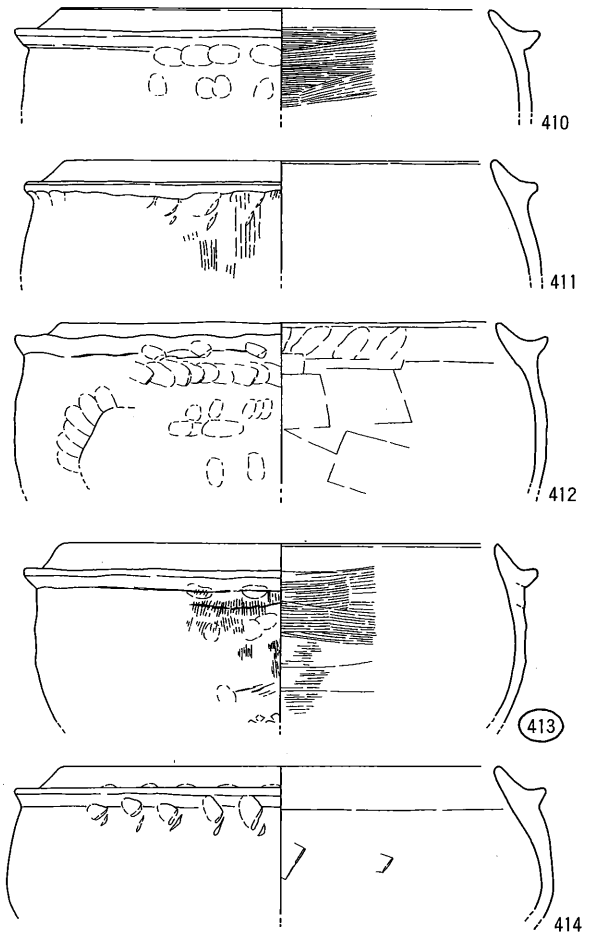
第94図　土器溜り1　第Ⅰa層出土遺物(31)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
390	足釜 AⅠ	(口)22.4	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(胴)ハケ→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	□径1/8
391	足釜 AⅠ	(口)25.2	2mm以下の砂粒	土師質	(外)浅黄 (内)淡黄	(口・胴)横ナデ	(体)横ハケ	□径3/20
392	足釜 BⅡ	(口)23.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	細片
393	足釜 BⅡ	(口)22.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	□径1/10
394	足釜 BⅡ	(口)23.0	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	□径1/3
395	足釜 BⅡ	(口)24.0	2mm以下の砂粒	土師質	明褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	□径1/6
396	足釜 BⅡ	(口)25.4	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ (底)格子叩き目	(体)横ハケ→(口)横ナデ	□径1/8
397	足釜 BⅡ	(口)25.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ (底)格子叩き目	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	□径1/4
398	足釜 BⅡ	(口)20.2	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口・胴)横ナデ(底)格子叩き目	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	□径3/8
399	足釜 BⅡ	(口)24.8	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(口・胴)板ナデ→横ナデ	(体)板ナデ→ナデ (底)板ナデ	□径1/6
400	足釜 BⅡ	(口)26.2	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(体)横ハケ→(胴)押圧→ (口・胴)板ナデ・横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	□径1/8
401	足釜 BⅡ	(口)25.0	1mm以下の砂粒	土師質	浅黄	(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ・板ナデ→ (口)横ナデ	□径1/3

第42表　土器溜り1　第Ⅰa層出土遺物観察表(16)



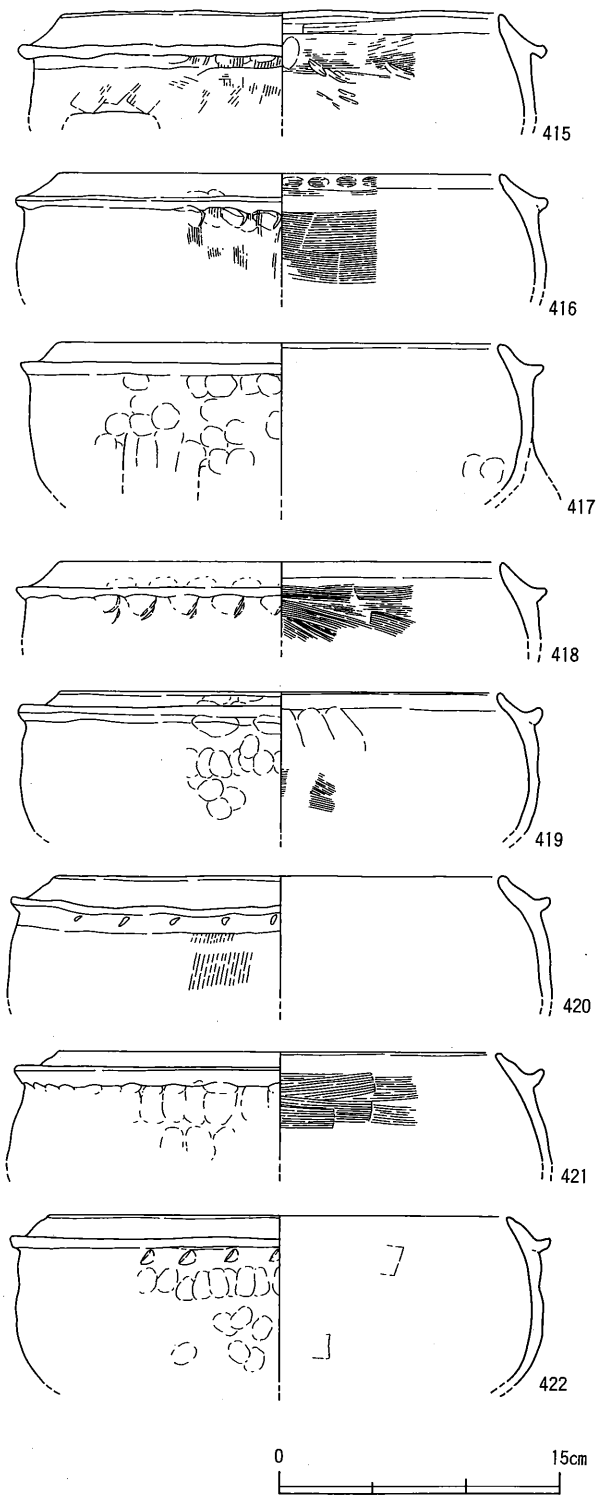
第95図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(32)



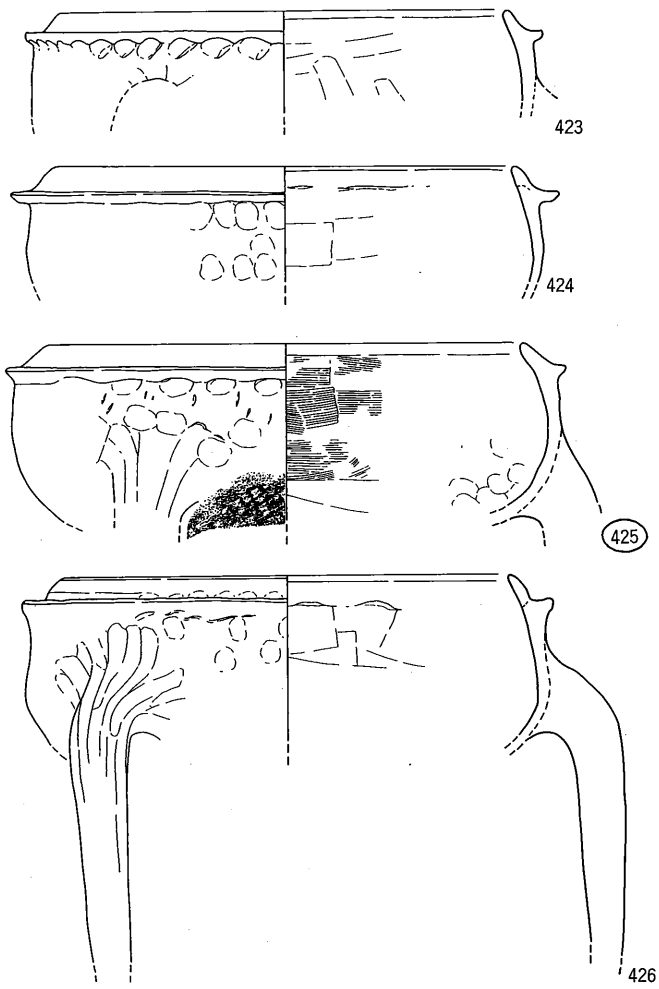
第96図　土器溜り１　第Ｉａ層出土遺物(33)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
402	足釜 ＢⅢ	(口)19.4	2㎜以下の砂粒	土師質	橙	(口-胴)横ナデ (体)縦ハケ	(口-体)板ナデ	□1/4
403	足釜 ＢⅢ	(口)20.6	2㎜以下の砂粒	土師質	(外)浅黄橙 (内)橙	(胴)押圧→(口-胴)横ナデ	(口-体)横ナデ	□1/8
404	足釜 ＢⅢ	(口)21.0	1㎜以下の砂粒	土師質	明黄褐	(胴)押圧→(口-胴)横ナデ	(口-体)横ハケ→(口)横ナデ	□1/6
405	足釜 ＢⅢ	(口)21.0	2㎜以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口-胴)横ナデ (底)格子叩き目	(口-体)横ハケ→(口)横ナデ	□1/3
406	足釜 ＢⅢ	(口)22.0	4.5㎜以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(胴)押圧→(口-胴)横ナデ	(口-体)板ナデ→(口)横ナデ	□1/5
407	足釜 ＢⅢ	(口)22.0	2㎜以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口-胴)横ナデ	(口-体)板ナデ→(口)横ナデ	□1/8
408	足釜 ＢⅢ	(口)22.0	1㎜以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(口-胴)横ナデ	(口-体)板ナデ→(口)横ナデ	□1/10
409	足釜 ＢⅢ	(口)22.0	3㎜以下の砂粒	土師質	明赤褐	(胴)押圧→(口-胴)横ナデ	(口-体)板ナデ?→(口)横ナデ	□1/5
410	足釜 ＢⅢ	(口)22.0	3㎜以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(胴)押圧→(口-胴)横ナデ	(口-体)板ナデ→(口)横ナデ	□1/6
411	足釜 ＢⅢ	(口)22.8	3㎜以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(体)縦ハケ→(胴)押圧→(口-胴)横ナデ	調整不明	□1/8
412	足釜 ＢⅢ	(口)22.7	3㎜以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口-胴)横ナデ	(口-体)板ナデ	□1/2
413	足釜 ＢⅢ	(口)22.8	2㎜以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(胴)押圧→(口-胴)横ナデ (底)格子叩き	(体)横ハケ→(口)横ナデ・(底)板ナデ	□1/6
414	足釜 ＢⅢ	(口)22.8	2㎜以下の砂粒	土師質	橙	(胴)２段押圧→(口-胴)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	□1/4

第43表　土器溜り１　第Ｉａ層出土遺物観察表(17)



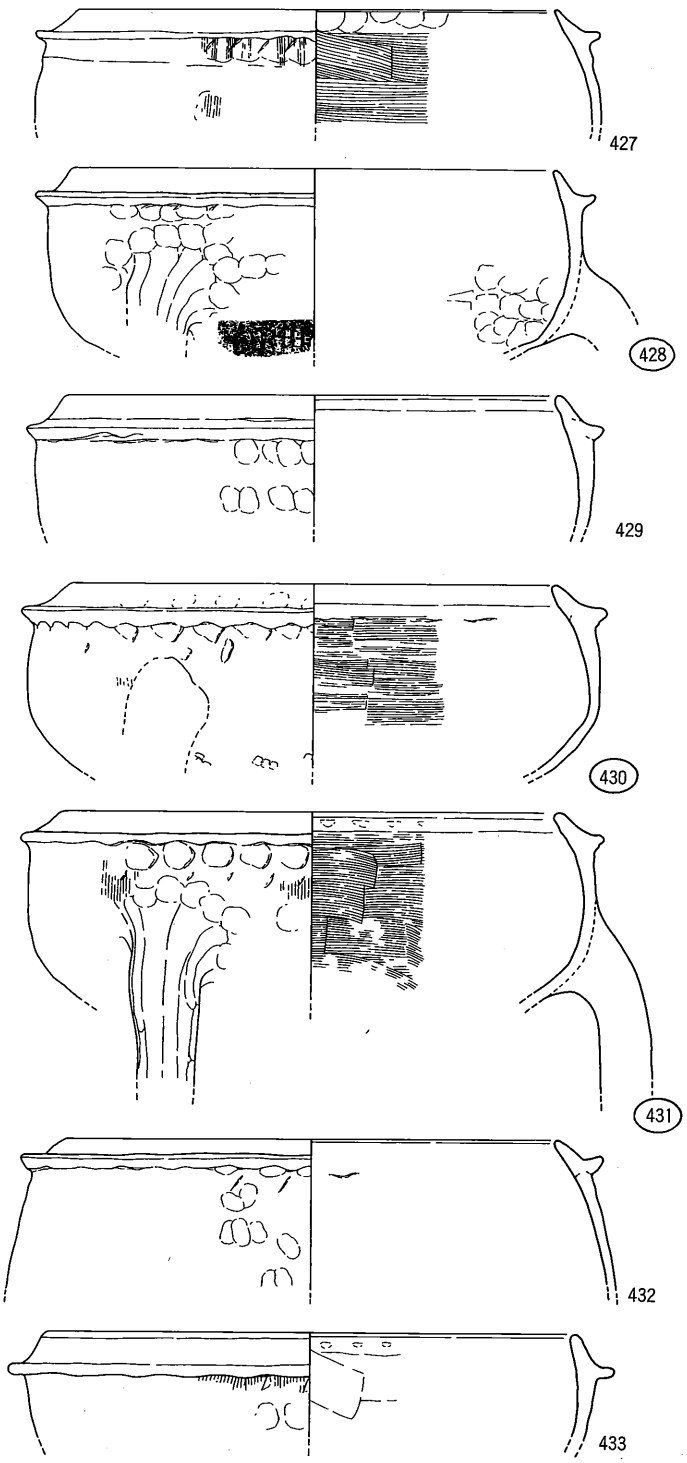
第97図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(34)



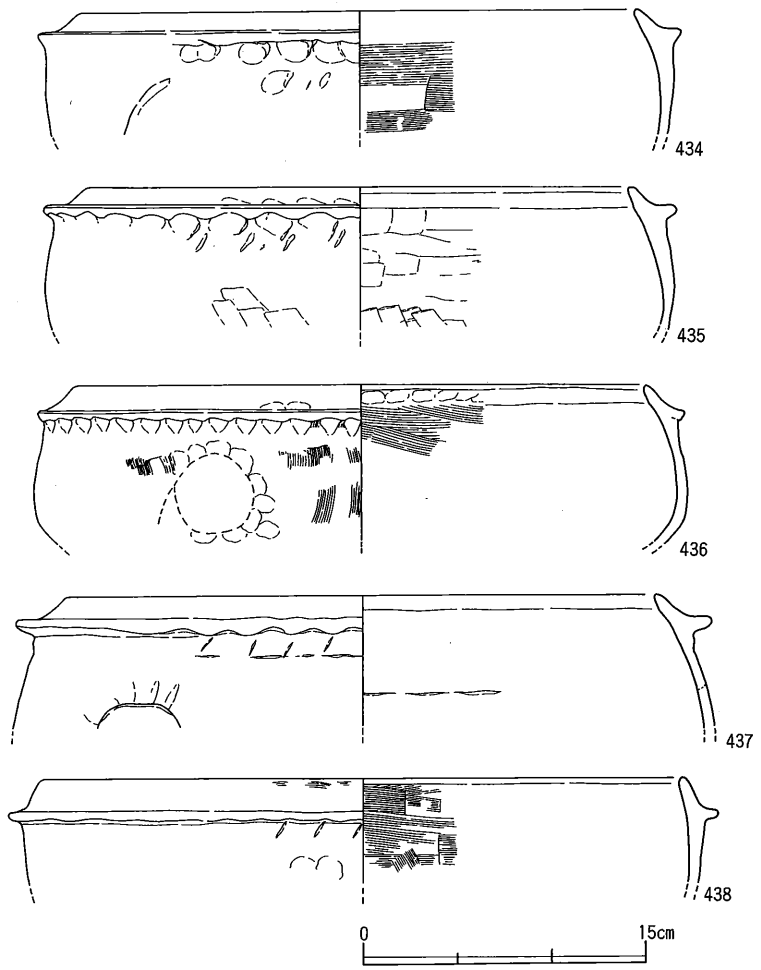
第98図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(35)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法 外面	手法 内面	残存度
415	足釜 BⅢ	(口)23.0	2.5mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(体)縦ハケ→(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・肩)横ハケ	口径1/5
416	足釜 BⅢ	(口)22.3	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	口径1/6
417	足釜 BⅢ	(口)23.0	3mm以下の砂粒を多量	土師質	橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/5
418	足釜 BⅢ	(口)23.4	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(肩)２段押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	口径1/4
419	足釜 BⅢ	(口)23.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(体)横ハケ　(口)横ナデ	口径1/4
420	足釜 BⅢ	(口)23.2	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ・(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)ナデ?	口径1/6
421	足釜 BⅢ	(口)23.4	2mm以下の砂粒、4mm程の小石	土師質	橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	口径1/8
422	足釜 BⅢ	(口)24.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/10
423	足釜 BⅢ	(口)23.7	1mm以下の砂粒	須恵質	青灰	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/8
424	足釜 BⅢ	(口)24.0	3mm以下の砂粒	土師質	明褐	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/4
425	足釜 BⅢ	(口)25.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(肩)２段押圧→(口・肩)横ナデ (底)格子叩き目	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ・(底)板ナデ	口径1/6
426	足釜 BⅢ	(口)23.4	4.5mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/5

第44表　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物観察表(18)



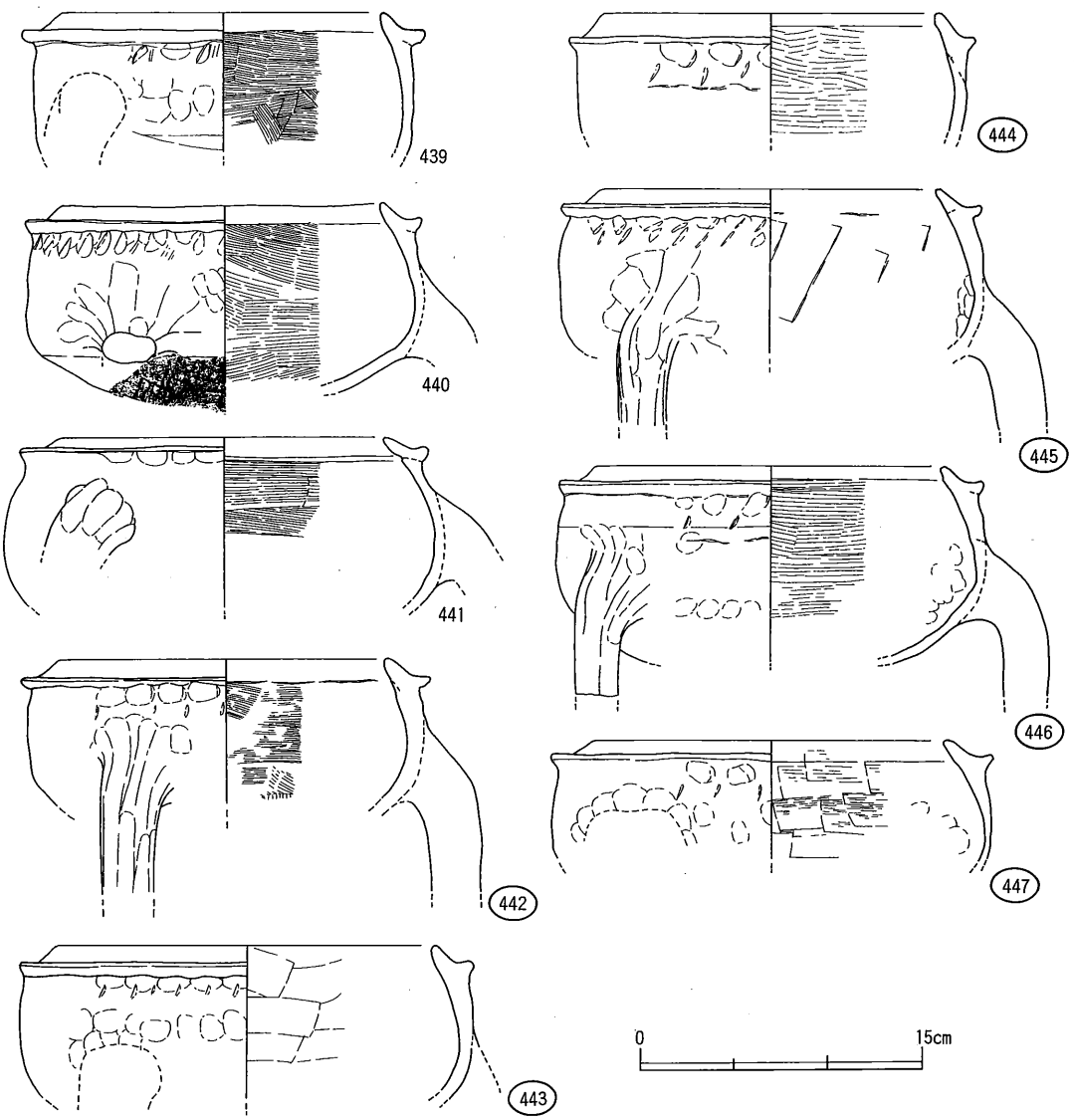
第99図　土器溜り１　第Ｉａ層出土遺物(36)



第100図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(37)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
427	足釜 BⅢ	(口)25.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)横ハケ→(口)横ナデ	口1/6
428	足釜 BⅢ	(口)25.2	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ (底)格子叩き目	(口・体)板ナデ	細片
429	足釜 BⅢ	(口)26.0	4mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・胴)横ナデ	調整不明	口1/5
430	足釜 BⅢ	(口)25.6	2mm以下の砂粒、5mm程の小石	土師質	橙	(胴)２段押圧→(口・胴)横ナデ (底)格子叩き目	(体)横ハケ→(口)横ナデ	口3/8
431	足釜 BⅢ	(口)26.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(胴)２段押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	口1/6
432	足釜 BⅢ	(口)26.1	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)２段押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)ナデ	口1/8
433	足釜 BⅢ	(口)28.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/5
434	足釜 BⅢ	(口)29.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)横ハケ→(口)横ナデ	口1/6
435	足釜 BⅢ	(口)28.5	4mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)２段押圧→(口・胴)横ナデ (底)板ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ・(底)板ナデ	口1/8
436	足釜 BⅢ	(口)30.0	2mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(体)縦ハケ→(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	口1/6
437	足釜 BⅢ	(口)31.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	口1/6
438	足釜 BⅢ	(口)34.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ	口1/10

第45表　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物観察表(19)



第101図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(38)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法 外面	手法 内面	残存度
439	足釜 BⅢ	(口)16.8	1mm以下の砂粒	土師質	浅黄橙	(胴)縦ハケ→押圧→(口・胴)横ナデ (底)ナデ	(体)横ハケ→(口)横ナデ	口1/6
440	足釜 BⅢ	(口)16.6	3mm以下の砂粒	土師質	浅黄橙	(胴)２段押圧→(口・胴)横ナデ (底)格子叩き目	(体)横ハケ→(口)横ナデ・(底)横ハケ	口1/4
441	足釜 BⅢ	(口)17.0	1mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)横ハケ→(口)横ナデ	口1/6
442	足釜 BⅢ	(口)17.4	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(胴)２段押圧→(口・胴)横ナデ	(体)横ハケ→(口)横ナデ	口1/3
443	足釜 BⅢ	(口)20.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)２段押圧→(口・胴)横ナデ	(体)板ナデ	口1/3
444	足釜 BⅢ	(口)17.4	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)２段押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	口1/5
445	足釜 BⅢ	(口)17.4	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)２段押圧→(口・胴)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/4
446	足釜 BⅢ	(口)18.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)２段押圧→(口・胴)横ナデ (底)ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	口1/3
447	足釜 BⅢ	(口)18.3	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)２段押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/3

第46表　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物観察表(20)

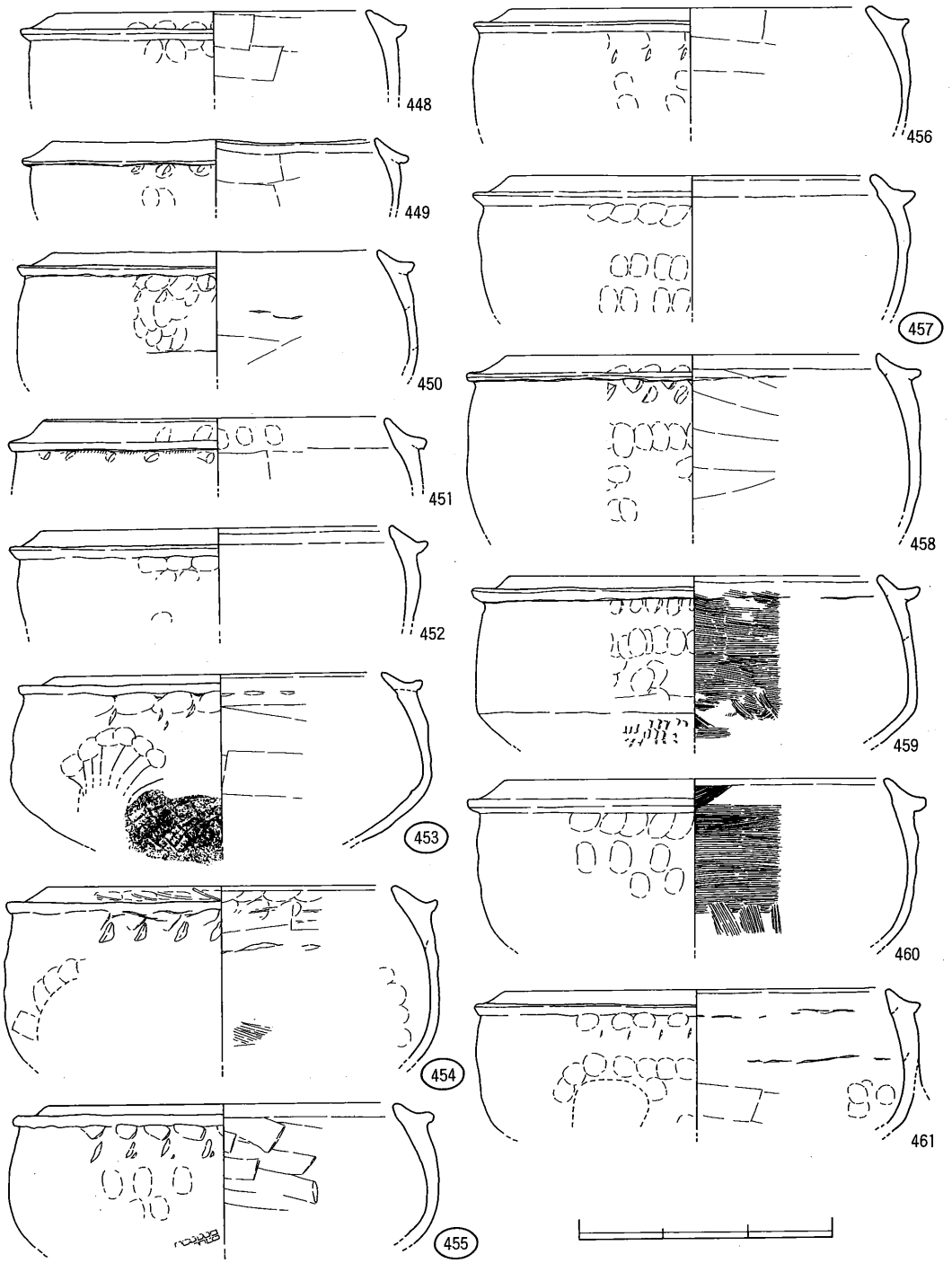
（411・413・416・427・436・439）があり，鍔部押圧に先行している。以上を併せ考えると，次の作業手順が想定できよう（第266図参照）。①粘土紐を積み上げ，内面に横ハケ（横方向の板ナデ），外面に縦ハケ調整を施す。②上端のやや下った部位を押圧し，外反させて鍔部とする。③口縁部となる粘土紐を積んで，口縁部・鍔部を横ナデ調整する。このような作業を口縁２技法（鍔部屈折法）と呼称する。

さて，鍔部押圧に伴う爪形状圧痕は，１段認められるものと２段みられるものがある。また左上側から付されるものと右上側から付されるものがあるが，左上側から付されるものの方が多い。押圧が製作者の手の動きを反映するとするならば，左上方からの押圧は，右手で行われたとみるのが自然である。なお，左側から押圧が加えられる場合には，押圧は右から左（時計回り）に移動し，右側から加えられる場合にはその逆となる。鍔部押圧に棒状工具が使用されたとする意見もあるが，押圧痕の窪みを観察すると，棒状の先で突いたようなシャープな面は確認できず，指紋のような細かい条線が読み取れる。このことから，押圧作業は製作者自身の指で行ったとみるのが妥当であろう。正置もしくはそれに近い状態で作業を行うのであれば，親指では左右の手の動きが交差して不自然な姿勢にならざるを得ない。ところが，人差し指であれば左右の手の動きは明確に分かれることになるのであり，押圧作業は人差し指で行った可能性が高い。このことは，乾燥・焼成による器体の縮小を考慮した本来の押圧幅と，人差し指の腹の幅とがほぼ一致することからも肯定できる。

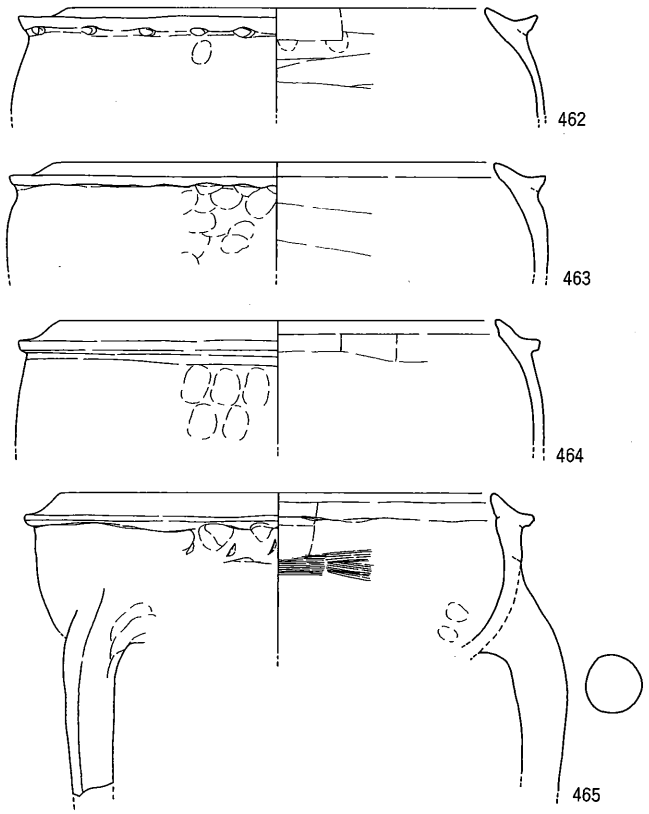
以上のように，爪形状圧痕は鍔部押圧時に器面に付いた製作者の爪の痕跡であることが考えられる。また，爪形状圧痕が２段（時には３段）みられる場合，下段の圧痕は中指（３段の場合は薬指）の痕跡であることが考えられるのである。

また左上方から押圧の行われたものが多いことから，製作者は右手人差し指で押圧を行い，左手で土器を反時計回りに動かしていたことになる。このことは製作者の多くが右利きであった可能性を示唆する。

底部の格子叩き目の施された範囲は，ＢⅡ類よりもさらに狭く，底体部の屈曲部分よりもさらに下方に施されている。換言すれば，ＢⅡ類では叩きによる丸底化の結果，底体部の屈曲が形成されていたのだが，ＢⅢ類では叩きに先行する製作段階で，既にある程度の底部の突出が現出していたことになる。そこでは成形工程における叩き作業の比重の低下が指摘できよう。



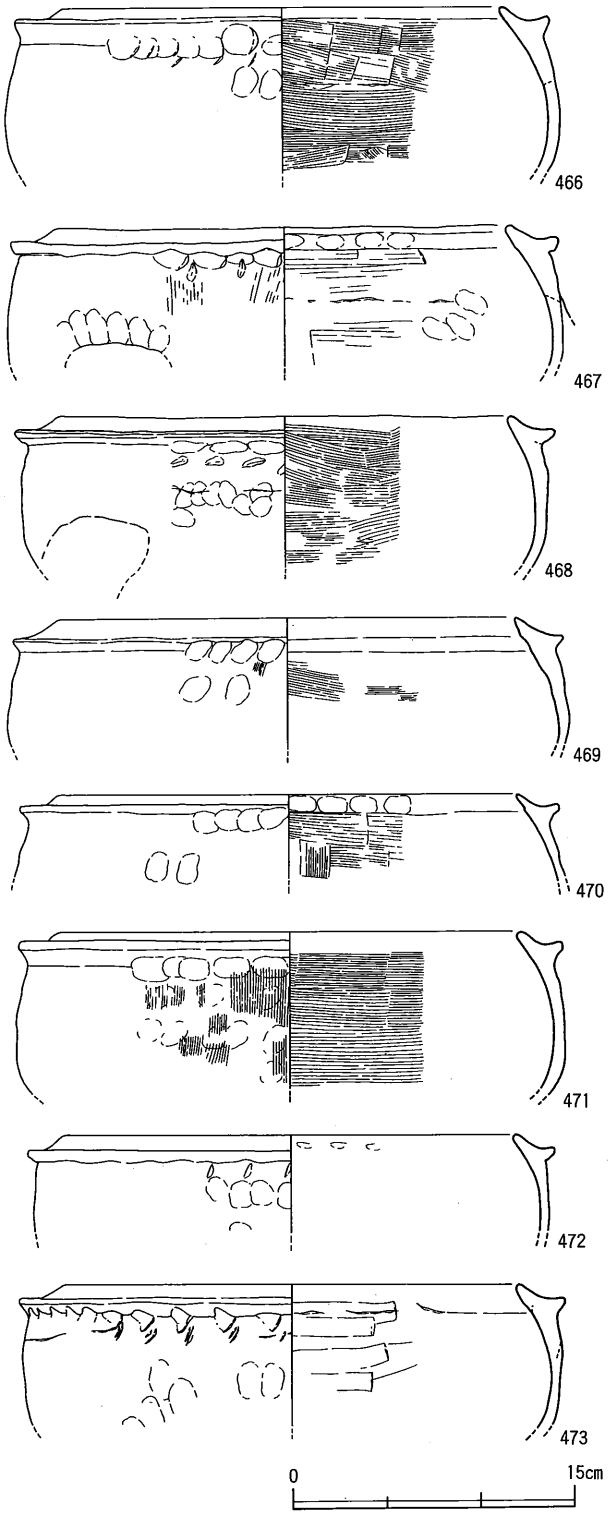
第102図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(39)



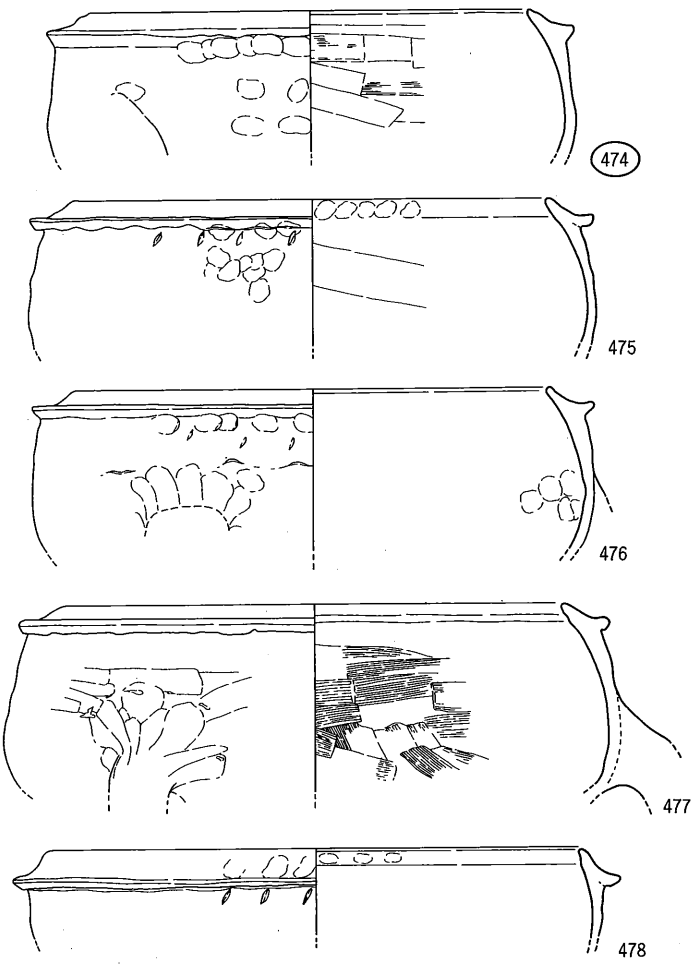
第103図　土器溜り1　第Ⅰa層出土遺物(40)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
448	足釜 BⅣ	(口)18.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口唇1/6
449	足釜 BⅣ	(口)19.0	2mm以下の砂粒	土師質	褐灰	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口唇1/6
450	足釜 BⅣ	(口)19.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)2段押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ→(底)板ナデ	口唇1/3
451	足釜 BⅣ	(口)19.8	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	口唇1/5
452	足釜 BⅣ	(口)20.6	3mm以下の砂粒	土師質	黄橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)ナデ→(口)横ナデ	口唇1/4
453	足釜 BⅣ	(口)19.0	1mm以下の砂粒	土師質	黄褐	(胴)2段押圧→(口・胴)横ナデ (底)格子叩き目	(体・底)板ナデ→(口)横ナデ	口唇1/3
454	足釜 BⅣ	(口)20.1	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)2段押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ (底)横ハケ	口唇1/5
455	足釜 BⅣ	(口)20.4	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)3段押圧→(口・胴)横ナデ (底)格子叩き目	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口唇3/8
456	足釜 BⅣ	(口)20.8	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)2段押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口唇1/4
457	足釜 BⅣ	(口)21.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	口唇1/4
458	足釜 BⅣ	(口)21.6	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(胴)2段押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口唇1/6
459	足釜 BⅣ	(口)21.8	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ (底)格子叩き目	(体)横ハケ→(口)横ナデ・(底)縦～斜めハケ	口唇1/6
460	足釜 BⅣ	(口)22.0	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)横ハケ→(口)斜めハケ・横ナデ，(底)縦ハケ	口唇1/6
461	足釜 BⅣ	(口)22.6	4mm以下の砂粒を多量	土師質	橙	(胴)2段押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(底)板ナデ	口唇1/4
462	足釜 BⅣ	(口)22.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口唇1/8
463	足釜 BⅣ	(口)23.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口唇1/5
464	足釜 BⅣ	(口)23.0	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口唇1/5
465	足釜 BⅣ	(口)22.6	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)2段押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ・横ハケ→(口)横ナデ	口唇1/8

第47表　土器溜り1　第Ⅰa層出土遺物観察表(21)



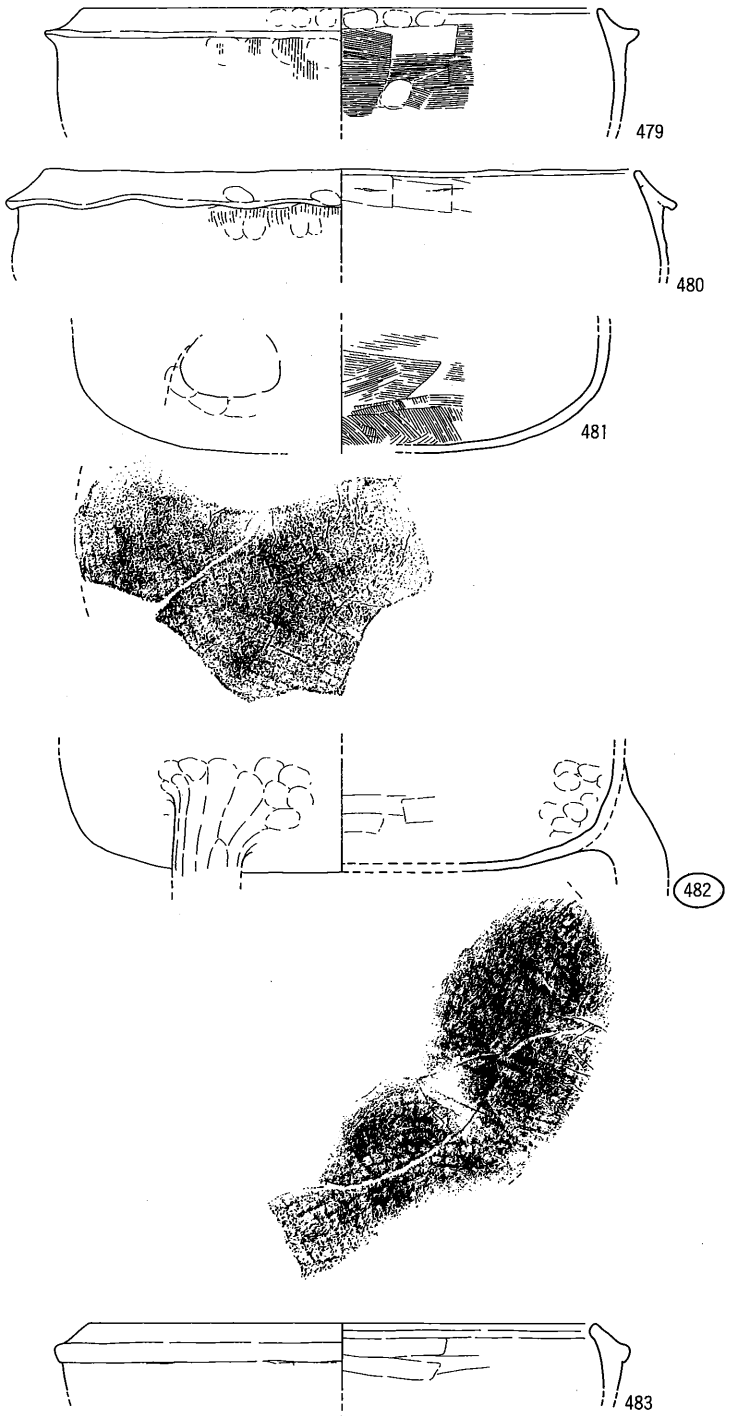
第104図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(41)



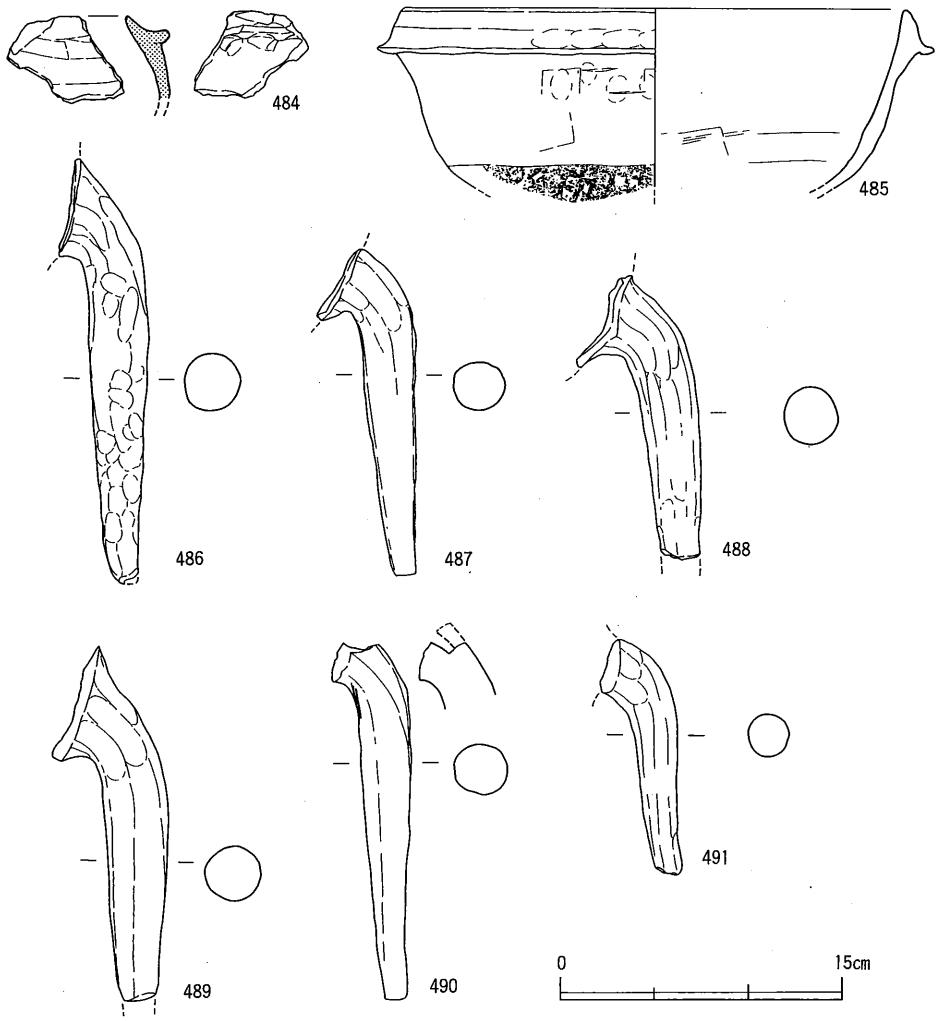
第105図　土器溜り１　第Ｉａ層出土遺物(42)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
466	足釜 BIV	(口)23.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)２段押圧→(口-胴)横ナデ	(体)横ハケ→(口)横ナデ	□径1/4
467	足釜 BIV	(口)23.2	3mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(体)縦ハケ→(胴)２段押圧→(口-胴)横ナデ	(体)横ハケ→(口)横ナデ	□径1/4
468	足釜 BIV	(口)23.6	1mm以下の砂粒	土師質	(外)橙 (内)明赤褐	(胴)２段押圧→(口-胴)横ナデ	(口-体)横ハケ→(口)横ナデ	□径1/3
469	足釜 BIV	(口)24.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口-胴)横ナデ	(体)横ハケ→(口)横ナデ	□径1/4
470	足釜 BIV	(口)24.0	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(胴)押圧→(口-胴)横ナデ	(体)横ハケ→(口)横ナデ	□径1/4
471	足釜 BIV	(口)24.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(胴)押圧→(口-胴)横ナデ	(体)横ハケ→(口)横ナデ	□径1/6
472	足釜 BIV	(口)24.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口-胴)横ナデ	(口-体)ナデ	□径1/5
473	足釜 BIV	(口)24.4	2mm以下の砂粒、5mm程の小石	土師質	橙	(胴)２段押圧→(口-胴)横ナデ	(口-体)板ナデ→(口)横ナデ	□径1/8
474	足釜 BIV	(口)23.0	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(胴)押圧→(口-胴)横ナデ	(口-体)板ナデ→(口)横ナデ	□径1/4
475	足釜 BIV	(口)24.8	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口-胴)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	□径1/4
476	足釜 BIV	(口)25.0	4mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)２段押圧→(口-胴)横ナデ	(口-体)ナデ	□径1/5
477	足釜 BIV	(口)26.5	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口-胴)横ナデ (体)板ナデ	(体)横ハケ→(口)横ナデ	□径1/8
478	足釜 BIV	(口)28.2	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口-胴)横ナデ	(口-体)ナデ	□径1/10

第48表　土器溜り１　第Ｉａ層出土遺物観察表(22)



第106図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(43)



第107図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(44)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法 外面	手法 内面	残存度
479	足釜 BⅣ	(口)27.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(胴)押圧→(口・体)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	口1/8
480	足釜 BⅣ	(口)31.0	2mm以下の砂粒	土師質	明褐	(体)縦ハケ→(口・胴)横ナデ	(口)板ナデ	口1/8
481	足釜 底部	—	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(底)格子叩き目	(体)横ハケ→(底)縦ハケ	底1/4
482	足釜 底部	(底)28.0	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(底)格子叩き目	(底)板ナデ	底1/4
483	足釜 C	(口)24.4	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口・胴・体)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/8
484	足釜 BⅣ	—	2mm以下の砂粒	瓦質	灰	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	細片
485	羽釜	(口)26.0	4mm以下の砂粒を多量	土師質	橙	(体)板ナデ(底)格子叩き目(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ (底)板ナデ	口1/5
486	足釜 脚部	—	2mm以下の砂粒	土師質	橙	ナデ		
487	足釜 脚部	—	1mm以下の砂粒	土師質	赤褐	ナデ		
488	足釜 脚部	—	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	ナデ		
489	足釜 脚部	—	3mm以下の砂粒	土師質	橙	ナデ		
490	足釜 脚部	—	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	ナデ	(基部)接合時の芯痕跡	
491	足釜 脚部	—	2mm以下の砂粒	土師質	橙	ナデ		

第49表　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物観察表(23)

足釜ＢⅣ類（448～480）は，ＢⅢ類よりもさらに短く立ち上がる口縁部をもち，鍔部の突出度もさらに弱いものである。ただし，ＢⅢ類との明瞭な形態差が指摘できるわけではなく，型式の設定にやや不鮮明な要素を残す。口縁部と鍔部の成形方法をみると，爪形圧痕を伴う鍔部押圧が認められるものが多く（449～451・453～456・458・459・461～463・465～468・472・473・475・476・478），内面調整の状況と併せて口縁２技法が主体であることを示す。その一方で，鍔部が垂下気味に伸びて体部縦ハケの上に被さるのにもかかわらず，鍔部押圧が認められないもの（480）がある。これは，体部上端の上に鍔部となる粘土紐が被せられるように貼り付けられたと想定できる。口縁部内面のかなり上部に接合痕がみられることに留意すると，鍔部と口縁部の粘土紐は同一である可能性が高い。同様な形態と接合痕をもつ資料は，土器溜り３の1083でも指摘できる。このような成形技法を口縁３技法（一体接合法）と呼称しておく。

極めて僅かな存在だが，足釜Ｃ類（483）がみられる。瘤状の鍔部下端に接合痕があること，また鍔部押圧がみられないことから口縁３技法による口縁部・鍔部成形であることが考えられる。

上記の足釜は全て土師質焼成であるが，足釜ＢⅣ類の細片（484）に瓦質焼成のものがみられる。確認した限りでは，土師質ではない足釜はこの他に第Ⅱ層出土遺物（689）や土器溜り３の脚部（1066：須恵質）があるだけであり，その出現頻度は極めて低い。このことは，擂鉢にみられたような不安定な焼成の混在とは明らかに異なっており，本来の焼成中に偶然生じたものとは考えられない。恐らく還元焔焼成が行われた際に，焼き台や詰め具などに転用された破片が二次的に被熱したのであろう。

485は脚部を伴わない羽釜である。体部が大きく外傾しており，鍔が本来の機能を果せるようになっている。極めて稀な存在ではあるが，肉眼観察では胎土や焼成が楠井産土器と何ら変わらない。

486～491は足釜脚部である。脚部は極めて多量に出土しているが，全体の形状を留める資料はあまり多くはない。ここでは代表的なもののみ図示した。基部から端部までの脚部長は14cm前後（Ⅰ），18cm前後（Ⅱ），22cm前後（Ⅲ）に分けられる。全体にオサエやナデが施され，また基部には棒状の芯の痕跡がみられるものがある（490）。この芯の痕跡は脚部を体部に接合する際に，接合部に棒状の補強材が挿入されていた可能性を示す。

鍋（492～529）には，ＡⅠ・Ⅱ類とＢⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類がある。多くはＢⅡ・Ⅲ類であり，その他の型式はごく少量である。ＢⅡ・Ⅲ類が多い点では土器溜り２・３とほぼ同様

な傾向を示すが，反面ＡⅡ類が少ない点が異なる要素として指摘できる。法量（口径）は小片が多いために明らかにし難いが，18cm前後（Ⅰ），30～32cm前後（Ⅱ），40～43cm前後（Ⅲ），44～47cm前後（Ⅳ），48cm以上（Ⅴ）に一応整理しておく。口径Ⅰは鍋ＢⅠ類に少量みられるのみであり，特殊例といえる。それ以外の口径でみると，煮沸器種は口径30cm以下が足釜によって占められ，30cm以上が鍋によって賄われていることが，明瞭に読み取れる。

鍋ＡⅠ類（492～494）は，後述する第Ⅲ層で主体を占めるものである。このことといずれも細片であることから，第Ⅲ層からの二次的な堆積による混入とみられる。493・494は表面が摩滅しているために，詳しい調整の状況はわからないが，492から内外面ともにハケ目を多用していることが観察でき，また492・494外面の縦ハケが体部から口縁部下面まで連続している点が注意される。

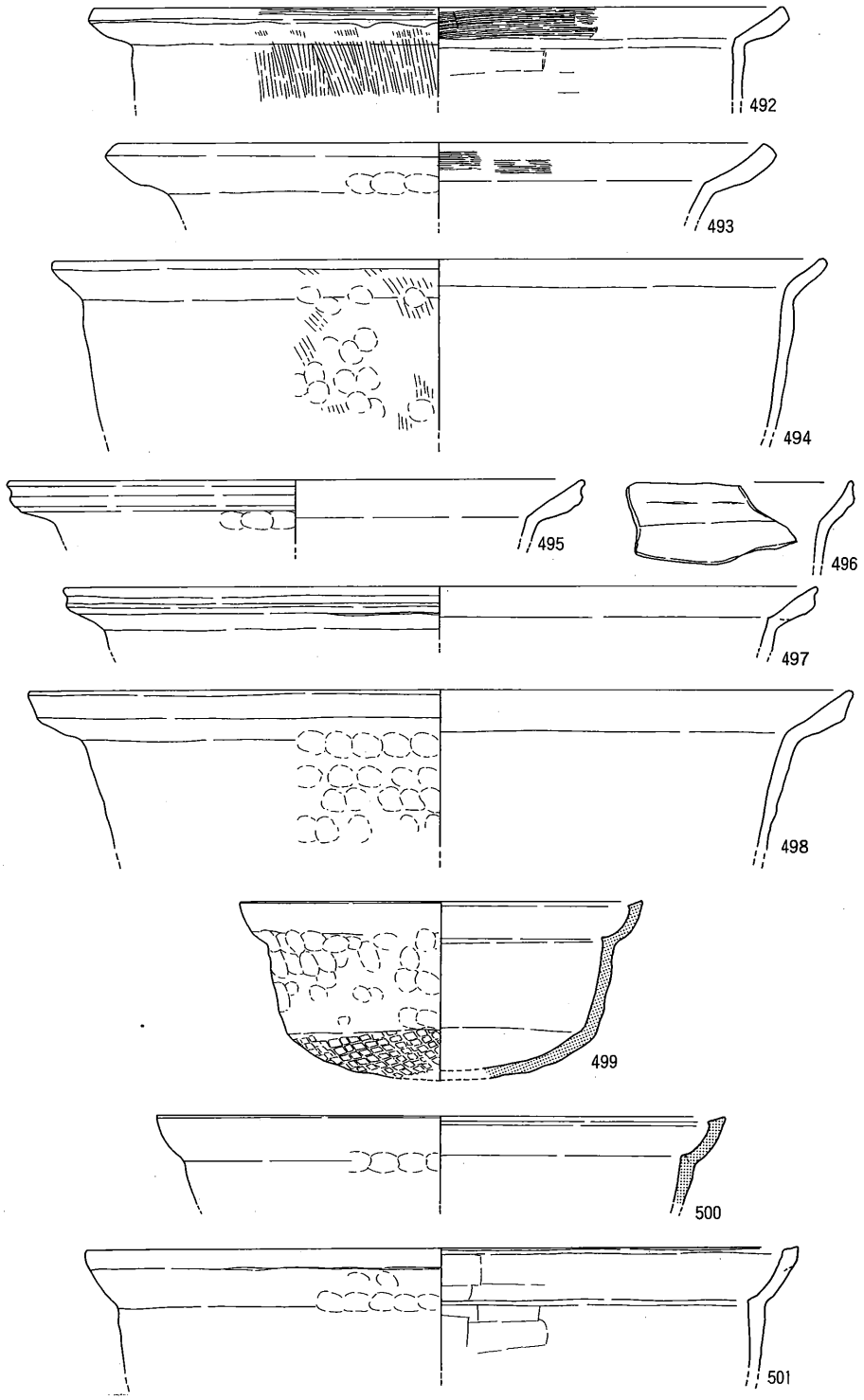
鍋ＡⅡ類（495～498）は，口縁部端面を強く横ナデ調整して，垂直方向の凹面を作出するものである。

鍋ＢⅠ類（499～501）は，鉄鍋模倣形態と考えられるものである。直立した体部から明瞭に屈曲した後内弯する口縁部をもつ。口縁端部は内傾した平坦面を形成し，その面の下端は突帯状にツマミ出される。また頸部内面の屈曲部分も突帯状に作られ，全体に極めてシャープな作巧といえる。焼成は499・500が瓦質であり，501もかなり硬質な土師質焼成であることから，本来瓦質を意図していた可能性がある。これは，土師質で占められる鍋の他の型式とは明らかに異なっており，形態のみならず質感まで鉄鍋模倣指向が看取できる。499の底部には格子叩き目が施され，丸底化される。

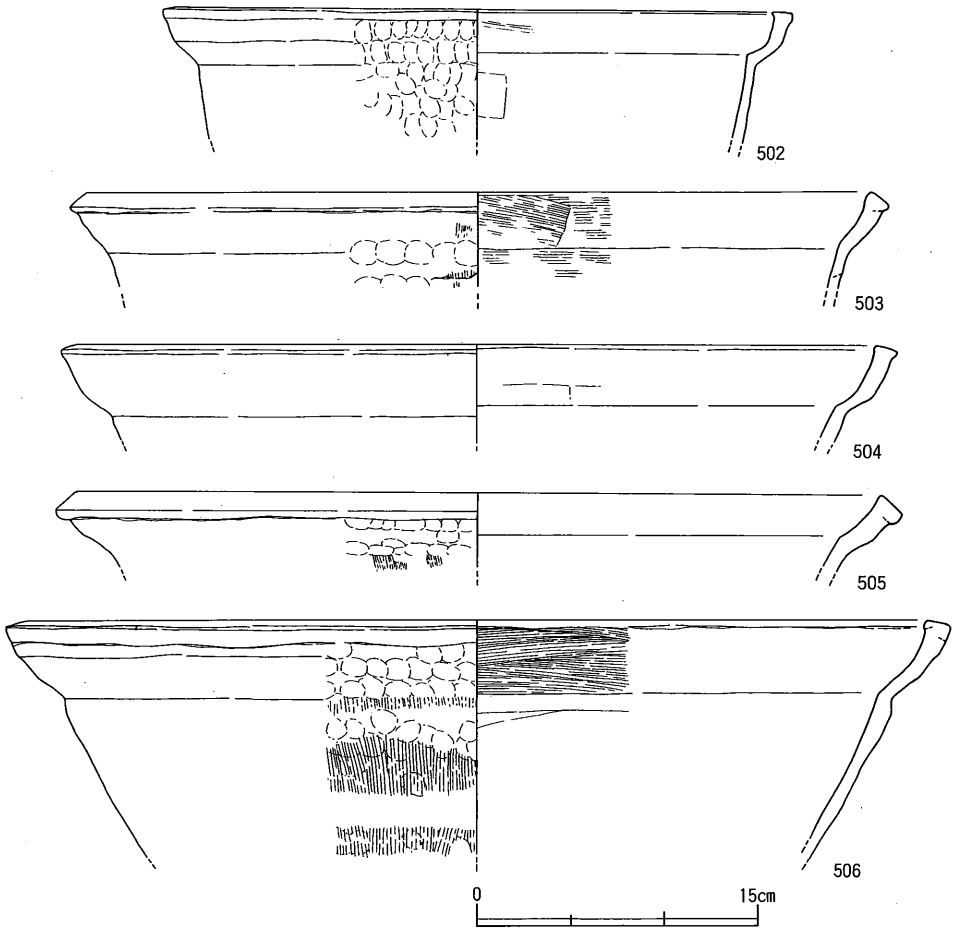
鍋ＢⅡ類（502～517）は，口縁部器壁に対して直交する口縁部端面をもつ。口縁部はＢⅠ類ほど強いカーブを描かず，頸部内面の屈曲部や端面にもＢⅠ類に比してシャープさがない。口縁部の屈曲が弱いのは，体部が外傾していることとも関係があろう。その中でも502は，比較的強く内弯する口縁部と，水平方向の平坦面による口縁部端面をもっており，ＢⅠ類に近い形態である。また，516・517はＢⅡ類の中でもかなり口縁部の内弯が弱いものであり，頸部の屈曲も特に外面で弱い傾向にある。

鍋ＢⅢ類（518～529）は，口縁部器壁に対して鈍角をなして斜交する口縁部端面をもつものである。頸部の屈曲や口縁部の内弯は，外面ではＢⅡ類同様に弱いものが大半であるが，内面ではＢⅡ類よりもやや強調される傾向が指摘できる。

525は口縁部外面に木目状圧痕が認められる。圧痕の条線は，端部の屈曲を超えて口縁



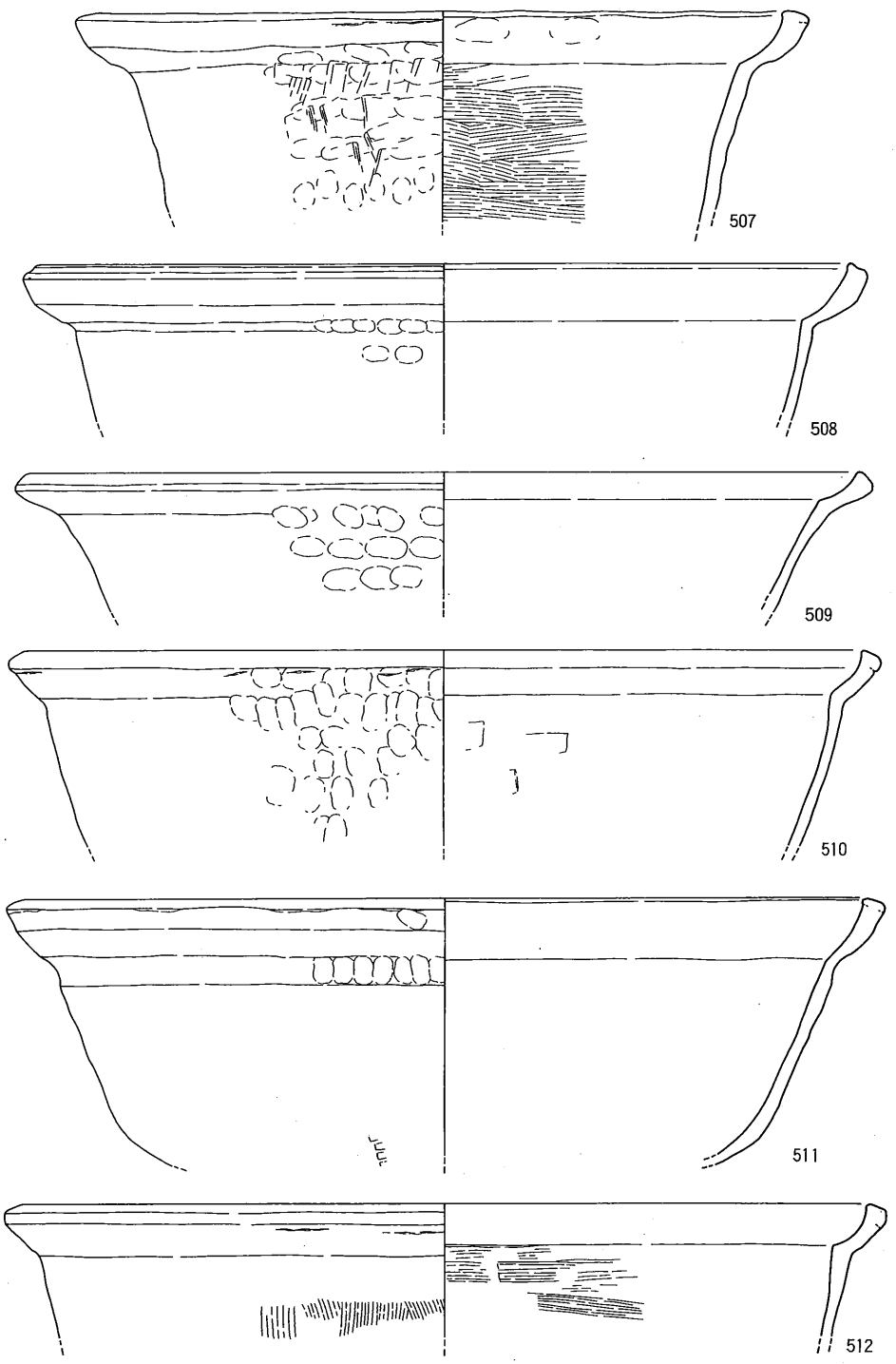
第108図　土器溜り１　第Ｉａ層出土遺物(45)



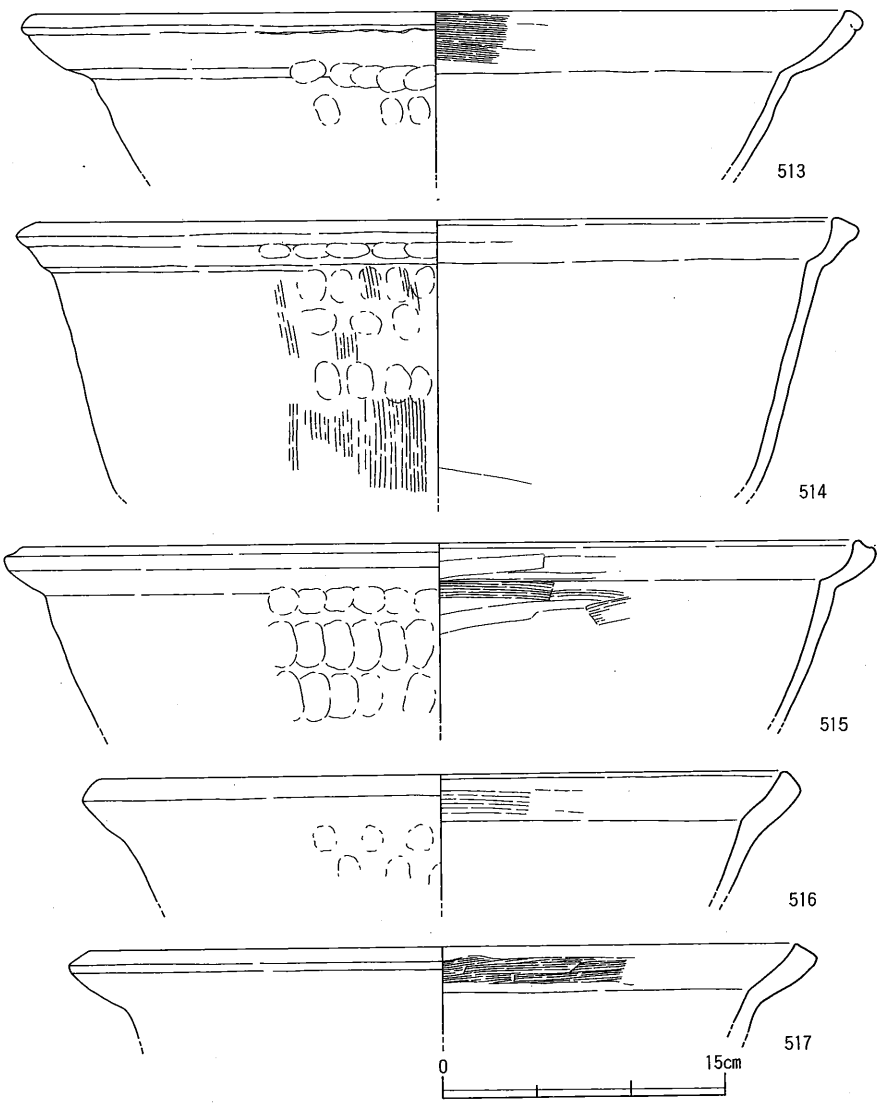
第109図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(46)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
492	鍋 ＡⅠ	(口)38.4	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)横ハケ　(体)縦ハケ	(口)横ハケ　(体)板ナデ	□1/8
493	鍋 ＡⅠ	(口)36.0	1mm以下の砂粒	土師質	明褐	調整不明	(口)横ハケ	細片
494	鍋 ＡⅠ	(口)43.0	2mm以下の砂粒	土師質	黄橙	(口)調整不明 (口-体)縦ハケ	調整不明	□1/12
495	鍋 ＡⅡ	(口)32.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口-体)横ナデ	□1/12
496	鍋 ＡⅡ	—	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口-体)板ナデ	細片
497	鍋 ＡⅡ	(口)42.0	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(口)横ナデ	(口-体)横ナデ	□1/10
498	鍋 ＡⅡ	(口)46.0	4mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口-体)横ナデ	□1/8
499	鍋 ＢⅠ	(口)22.4	2mm以下の砂粒	瓦質	灰黒	(口)横ナデ(底)格子叩き目	(口-体-底)板ナデ	□1/3
500	鍋 ＢⅠ	(口)31.6	2mm以下の砂粒	瓦質	(内外)オリーブ黒(断)灰	(口)横ナデ	(口-体)板ナデ	細片
501	鍋 ＢⅠ	(口)40.0	5mm以下の砂粒を多量	土師質	灰黄褐	(口)横ナデ	(口-体)板ナデ	□1/10
502	鍋 ＢⅡ	(口)31.2	2mm以下の砂粒	土師質	(内外)黒(断)明赤褐	(口)横ナデ	(口-体)板ナデ	□1/4
503	鍋 ＢⅡ	(口)41.2	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)縦ハケ→横ナデ	(口-体)横ハケ	□1/10
504	鍋 ＢⅡ	(口)42.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口-体)板ナデ	□1/8
505	鍋 ＢⅡ	(口)42.6	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	調整不明	□1/12
506	鍋 ＢⅡ	(口)47.6	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ (口)横ナデ	(口)横ハケ (体)板ナデ	□1/6

第50表　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物観察表(24)



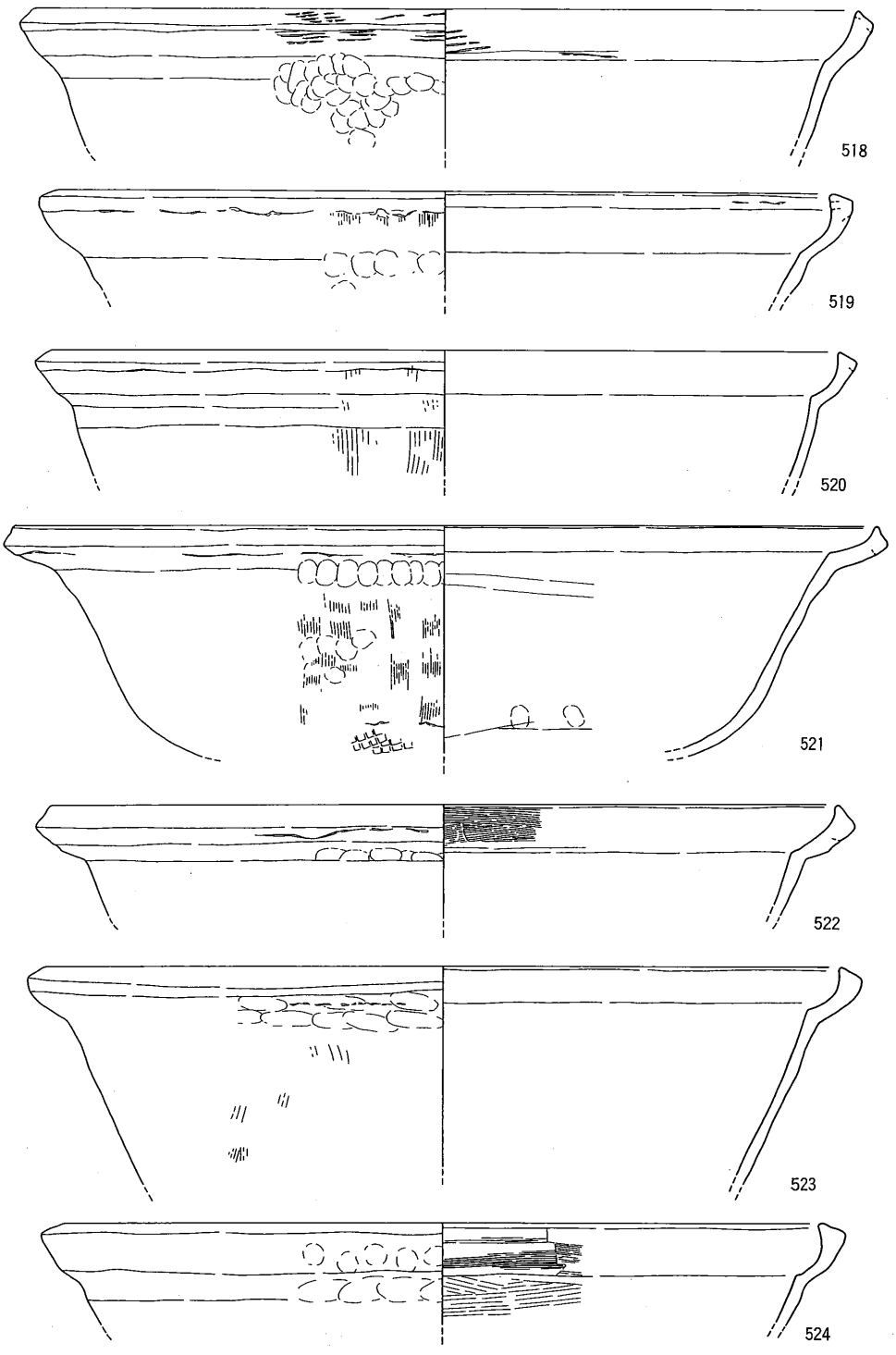
第110図　土器溜り１　第Ⅰa層出土遺物(47)



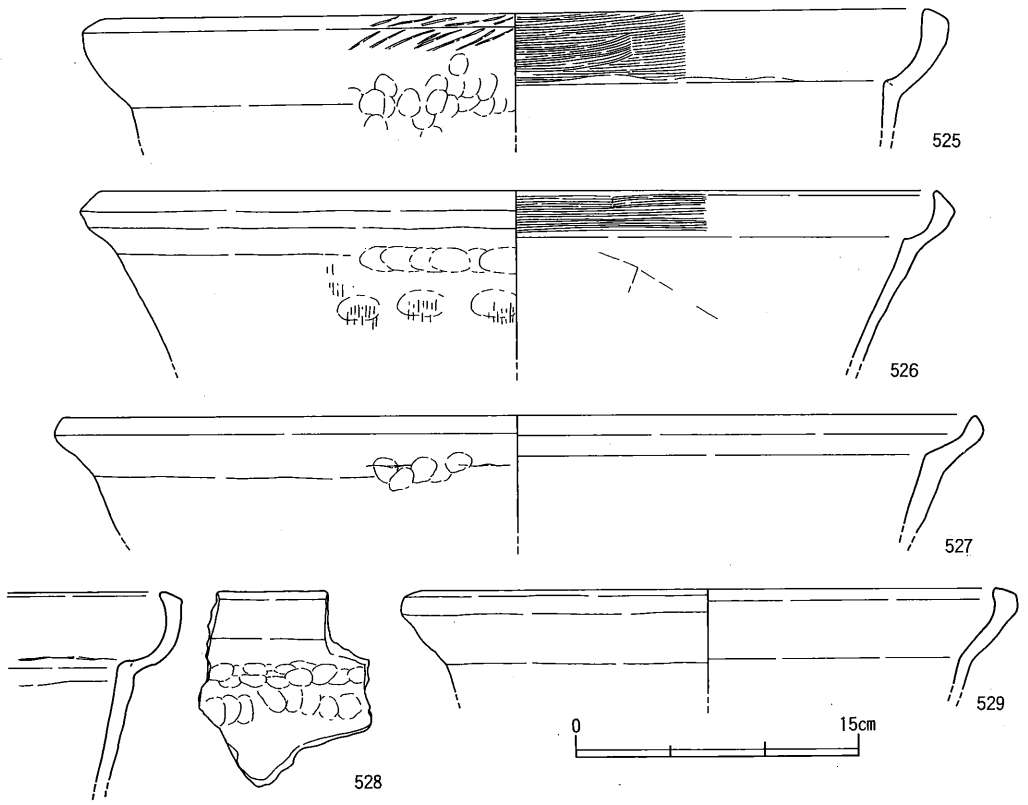
第111図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(48)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
507	鍋 B Ⅱ	(口)38.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ (体)板ナデ	(口)横ナデ (体)横ハケ	口1/5
508	鍋 B Ⅱ	(口)45.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)横ナデ	口1/10
509	鍋 B Ⅱ	(口)46.0	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口・体)横ナデ	細片
510	鍋 B Ⅱ	(口)46.6	2mm以下の砂粒、5mm程の小石	土師質	明黄褐	(口)横ナデ	(口)横ナデ (体)板ナデ	口1/8
511	鍋 B Ⅱ	(口)46.6	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(底)格子叩き目(口・体)不明	調整不明	口1/10
512	鍋 B Ⅱ	(口)47.4	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(口・体)横ナデ	(口)横ナデ (体)横ハケ	口1/8
513	鍋 B Ⅱ	(口)42.0	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口)板ナデ (体)横ナデ	口1/10
514	鍋 B Ⅱ	(口)42.0	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(体)縦ハケ→(口)横ナデ	(口・体)横ナデ→(底)板ナデ	口1/10
515	鍋 B Ⅱ	(口)44.2	2mm以下の砂粒 1~3cmの小石	土師質	(外)明赤褐・明黄褐 (内)明赤褐	(口)横ナデ	(体)横ナデ→(口・体)板ナデ	口1/8
516	鍋 B Ⅱ	(口)36.3	3mm以下の砂粒	土師質	橙	調整不明	(口)横ハケ	口1/8
517	鍋 B Ⅱ	(口)37.8	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口)横ハケ (体)ナデ	口1/8

第51表　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物観察表(25)



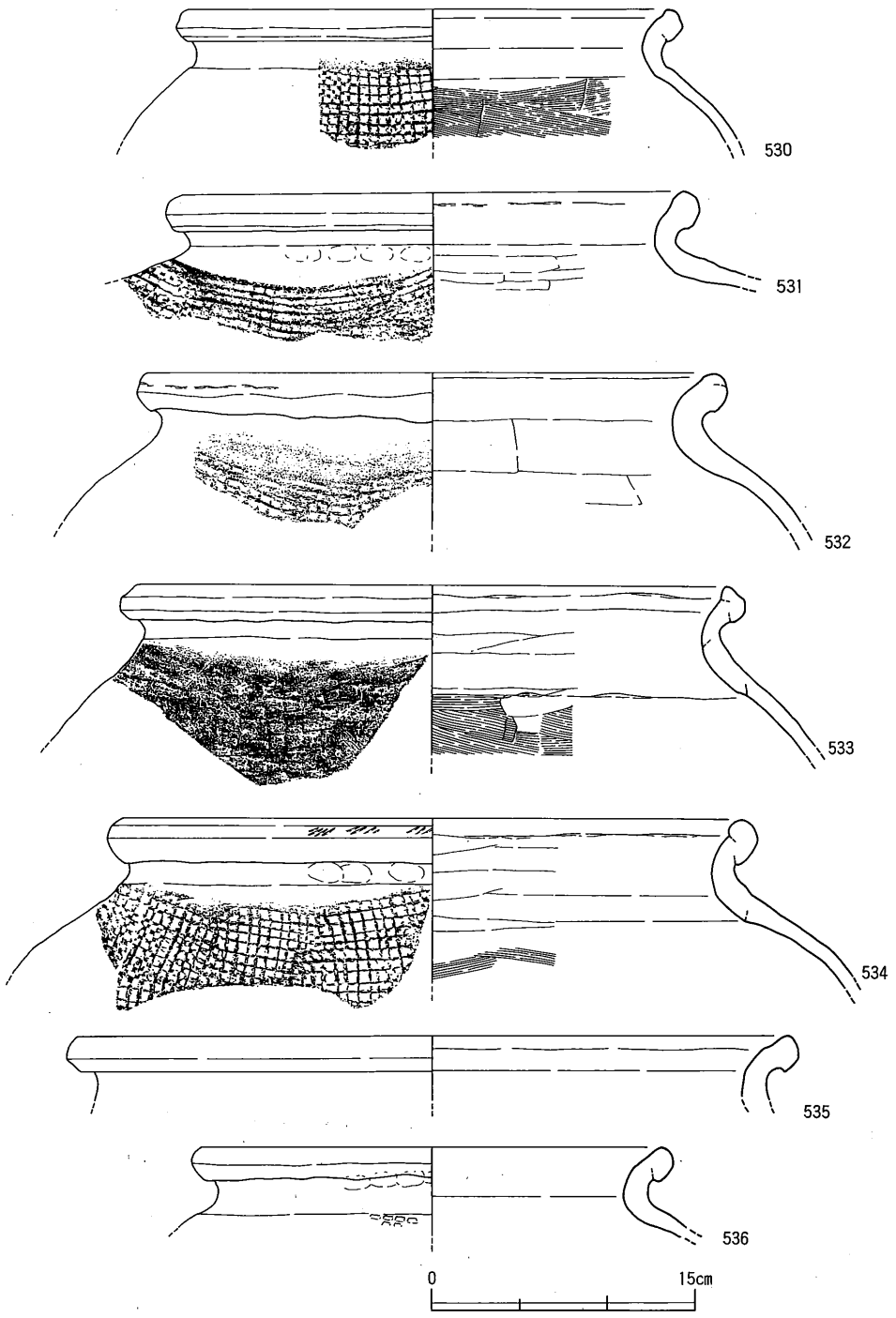
第112図　土器溜り１　第Ｉａ層出土遺物(49)



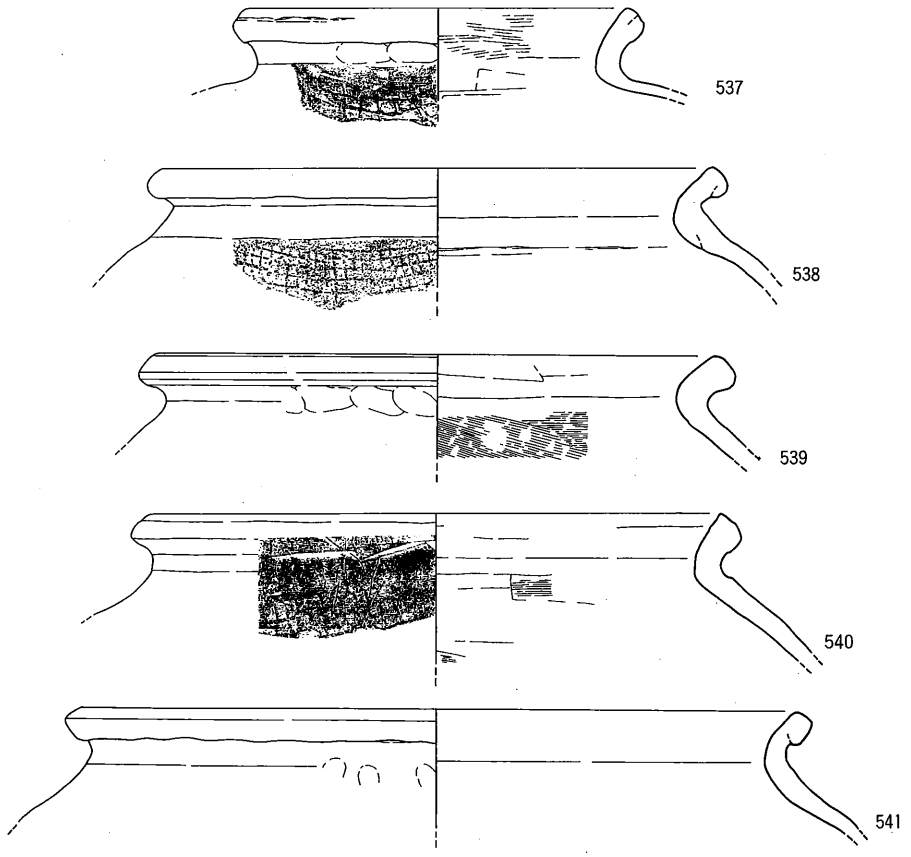
第113図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(50)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
518	鍋 BⅢ	(口)46.8	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)木目状圧痕→横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/8
519	鍋 BⅢ	(口)44.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)縦ハケ→横ナデ	(口)横ナデ (体)ナデ	口1/10
520	鍋 BⅢ	(口)44.8	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口・体)縦ハケ→(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
521	鍋 BⅢ	(口)49.2	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(底)格子叩き目 (口)横ナデ	(口)横ナデ (体・底)板ナデ	口1/6
522	鍋 BⅢ	(口)45.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口)横ハケ (体)横ナデ	口1/6
523	鍋 BⅢ	(口)45.4	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ (口)横ナデ	(口・体)横ナデ	口1/10
524	鍋 BⅢ	(口)43.8	4mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)横ハケ	細片
525	鍋 BⅢ	(口)42.3	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)木目状圧痕→横ナデ	(口)横ハケ (体)縦ハケ	口1/12
526	鍋 BⅢ	(口)44.0	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口)横ハケ (体)板ナデ	口1/8
527	鍋 BⅢ	(口)48.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口)板ナデ	細片
528	鍋 BⅢ	—	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)ナデ→横ナデ	(口)横ナデ (体)横ハケ	細片
529	鍋 BⅢ	(口)31.0	2mm以下の砂粒	土師質	赤褐	(口)横ナデ	(口)横ナデ	口1/12

第52表　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物観察表(26)



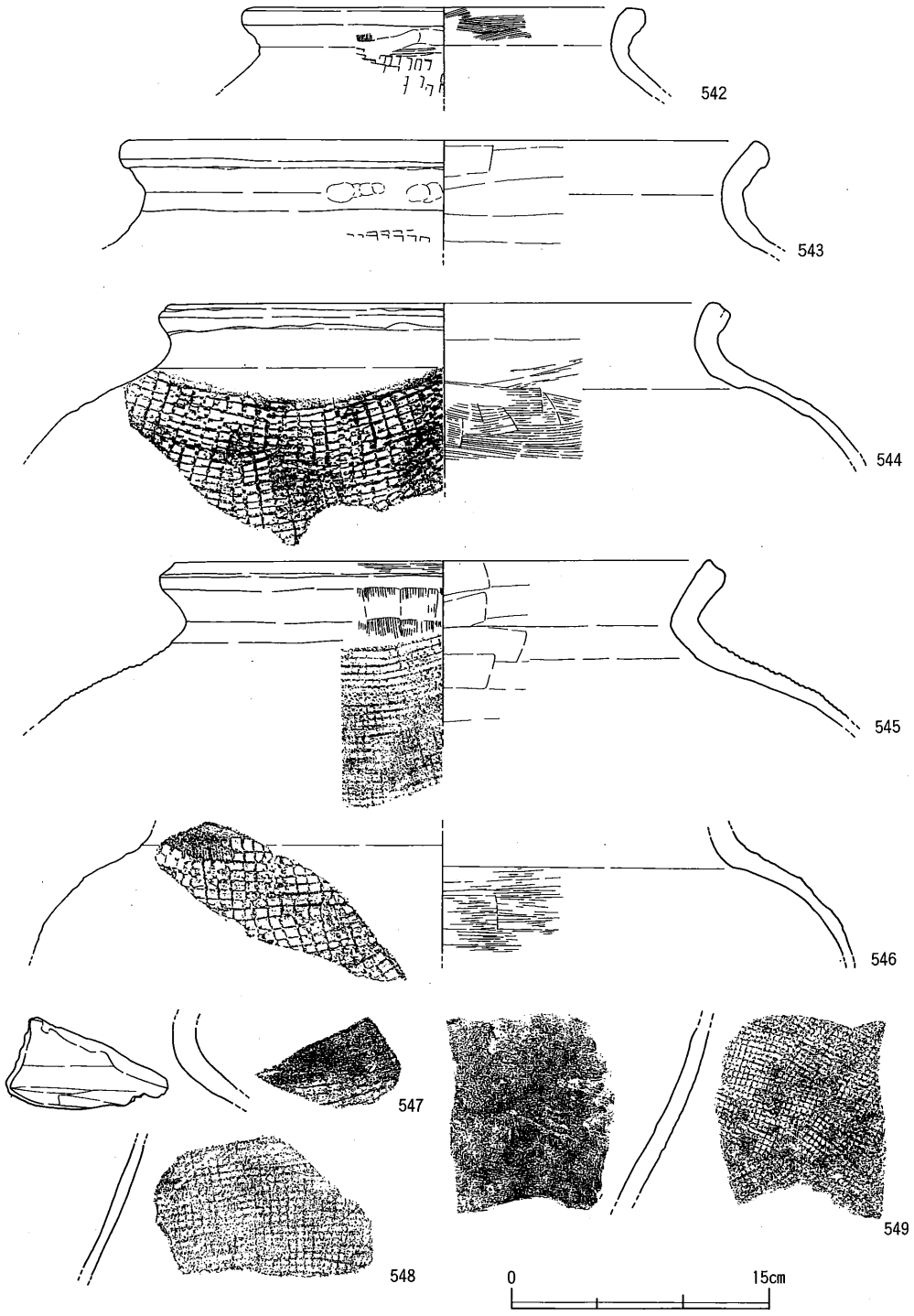
第114図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(51)



第115図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(52)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
530	甕 AⅠ	(口)27.0	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(体)格子叩き目→(口・頸)回転ナデ	(体)横ハケ→(口・頸)回転ナデ	口1/4
531	甕 AⅠ	(口)28.2	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(体)格子叩き目→(口・頸)回転ナデ	(体)板ナデ→(口・頸)回転ナデ	口1/4
532	甕 AⅠ	(口)31.8	4.5mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目→(口・頸)回転ナデ	(体)板ナデ→(口・頸)回転ナデ	口2/5
533	甕 AⅠ	(口)33.2	2mm以下の砂粒	土師質	(外)にぶい褐(内)橙	(体)格子叩き目→(口・頸)回転ナデ	(体)横ハケ→(頸)板ナデ→(口)回転ナデ	口1/4
534	甕 AⅠ	(口)35.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目→(口・頸)回転ナデ　(口)木目状圧痕	(体)横ハケ→(頸)板ナデ→(口)回転ナデ	口1/4
535	甕 AⅠ	(口)40.0	2mm以下の砂粒	土師質	浅黄橙	(口・頸)回転ナデ	(口・頸)回転ナデ	細片
536	甕 AⅡ	(口)25.8	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(体)格子叩き目	調整不明	口1/4
537	甕 AⅡ	(口)19.8	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目→(口・頸)回転ナデ	(頸)板ナデ (口)横ハケ	口1/5
538	甕 AⅡ	(口)29.0	4mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目→(口・頸)回転ナデ	(体)板ナデ→(口・頸)回転ナデ	口1/5
539	甕 AⅡ	(口)29.0	5mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)板ナデ(口・頸)回転ナデ	(体)横ハケ→(口・頸)回転ナデ	口1/10
540	甕 AⅡ	(口)30.0	1mm以下の砂粒	土師質	黄橙	(体)格子叩き目→(口・頸)回転ナデ	(口・頸・体)板ナデ	口底完
541	甕 AⅡ	(口)38.0	4mm以下の砂粒	土師質	橙	調整不明	調整不明	口1/8

第53表　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物観察表(27)



第116図　土器溜り１　第Ⅰa層出土遺物(53)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
542	甕 AⅡ	(口)21.2	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(体)格子叩き目 (頸)縦ハケ→(口・頸)横ナデ	(体)ナデ (口)横ハケ	口唇1/8
543	甕 AⅡ	(口)36.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目 →(口・頸)回転ナデ	(口・頸)板ナデ	口唇1/8
544	甕 AⅡ	(口)30.8	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目 →(口・頸)回転ナデ	(体)横ハケ→板ナデ →(口・頸)回転ナデ	口唇1/4
545	甕 C	(口)30.6	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(頸)縦ハケ→(体)格子叩き目→(口)横ハケ	(口・頸・体)板ナデ	口唇1/5
546	甕 体部	—	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(頸)縦ハケ→(体)格子叩き目→(頸)回転ナデ	(体)横ハケ→(頸)回転ナデ	細片
547	甕 頸部	—	3mm以下の砂粒	土師質	黄褐	(体)格子叩き目	(体)板ナデ→(頸)回転ナデ	細片
548	甕 体部	—	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	格子叩き目	横ナデ	細片
549	甕 体部	—	2mm以下の砂粒	土師質	橙	格子叩き目		細片

第54表　土器溜り1　第Ⅰa層出土遺物観察表(28)

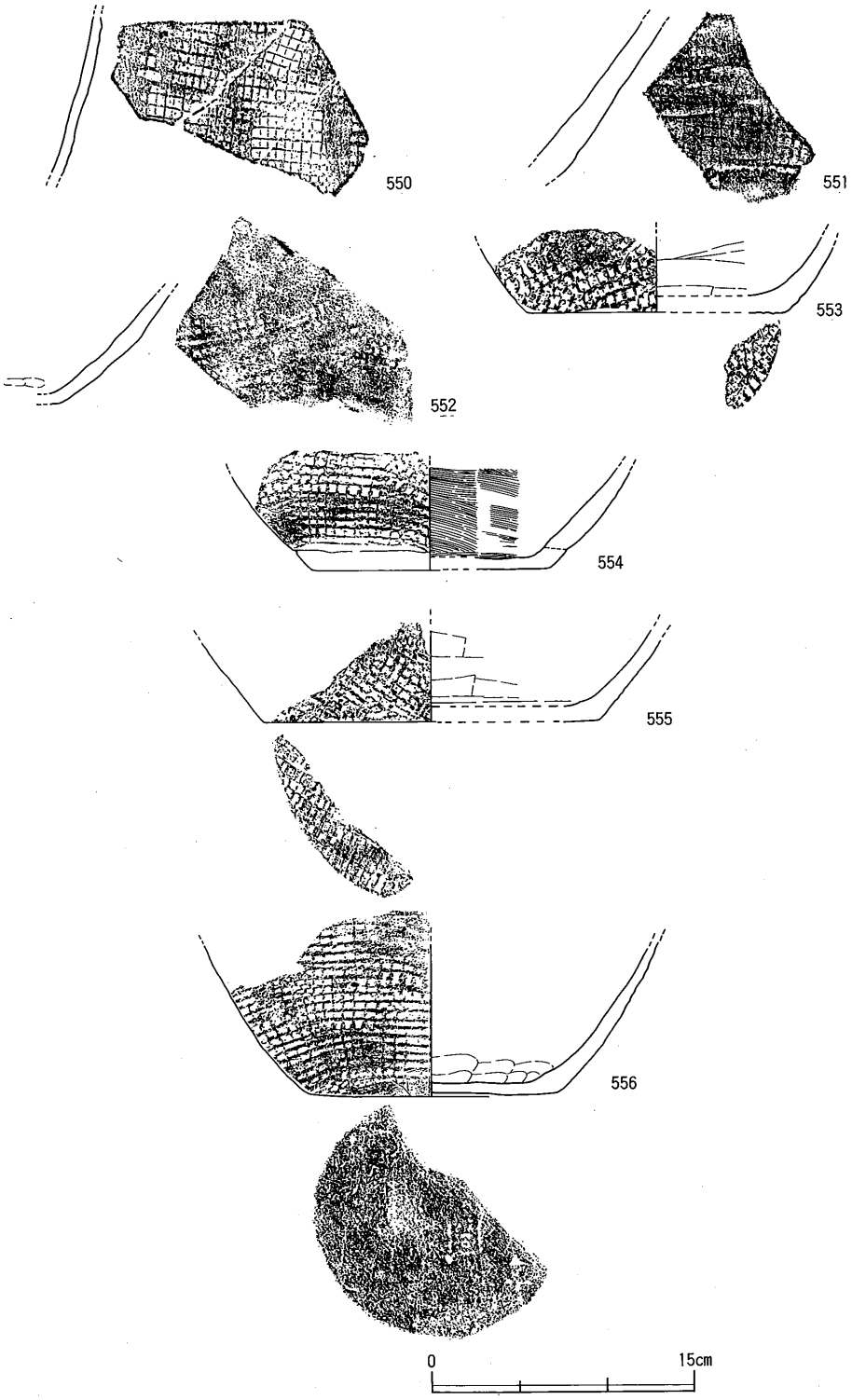
部端面から下面まで連続している。

甕（530～564）には，ＡⅠ・Ⅱ類とＣ類がある。土器溜り２・３でみられる甕Ｂ類の存在が指摘できない点に，器種構成上の相違が読み取れる。法量を検討できるだけの資料に欠けるが，口径が20～25cm前後の小型品と，29～35cm前後の大型品とに大別できるようである。なお，高松市薬王寺遺跡ＳＥ０３出土の甕ＡⅡ（口径33.0cm：第259図）[9]から類推すると，大型品は器高65～70cm前後に達すると思われる。

甕ＡⅠ類（530～535）は，緩く外反した頸部から上下に肥厚する口縁部をもつ。533や534の口縁部に遺存する接合痕の状況から，これは幅広の粘土紐を頸部上端の中央に積み上げた結果と考えられる。体部外面には格子叩き目が施されており，対応する内面には横ハケもしくは板ナデ調整が丁寧に行われる。頸部外面の横ナデ調整が明らかに体部叩きに後出していることから，口頸部の調整（あるいは成形もその可能性がある）は製作工程の最終段階に行われたといえる。これは，533・534の体部内面の横ハケと，これに後出する頸部内面の板ナデ調整に使用された板状工具が，明瞭に異なっていることからも首肯できよう。なお，534の口縁部外面には木目状圧痕が観察できる。

甕ＡⅡ類（536～541）は，ＡⅠ類よりも強く外反した短い頸部をもつ。口縁部は外面側のみが弱く肥厚し，内面は平滑である。また頸部外面を強く回転ナデ調整することで，相対的な肥厚を強調するもの（539・540）もある。

542～544は，一応甕ＡⅡ類に分類できるが，やや特異な口縁部形態をもつものである。542のように口縁部上端に面をもつものは，土器溜り３出土資料（1152・1153）に近い。また543・544は口縁端部がわずかに肥厚気味になるだけであり，むしろ甕Ｃの流れで捉える



第117図　土器溜り１　第Ｉａ層出土遺物(54)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
550	甕 体部	—	2mm以下の砂粒	土師質	橙	格子叩き目	板ナデ	細片
551	甕 体部	—	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	格子叩き目	横ナデ	細片
552	甕 体部	—	3mm以下の砂粒	土師質	明褐	格子叩き目→横ナデ	横ナデ	細片
553	甕 底部	(底)14.8	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目 →(底)格子叩き目	(体・底)板ナデ	底1/8
554	甕 底部	(底)13.4	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(体)格子叩き目 →(底・底縁)ナデ	(体・底)横ハケ	底1/3
555	甕 底部	(底)19.0	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(体)格子叩き目 →(底)格子叩き目	(体・底)板ナデ	底1/5
556	甕 底部	(底)14.0	2mm以下の砂粒、5mm程の小石	土師質	(外)橙 (内)にぶい橙	(体)格子叩き目 (底)下駄印	(底)ナデ (体)回転ナデ	細片

第55表　土器溜り1　第Ⅰa層出土遺物観察表(29)

べきものなのかもしれない。

甕C類（545）は，内面に明瞭な稜を伴い外反する口頸部をもつ。端部は回転ナデのために外傾した凹面をなす。また頸部外面には縦方向の板ナデが施され，体部の格子叩き目もかなり細かい。上記の諸特徴は亀山焼の甕に近いが，胎土・焼成は楠井に通有なものである。

549は甕の体部片である。内面にわずかに当て具痕が読み取れる。

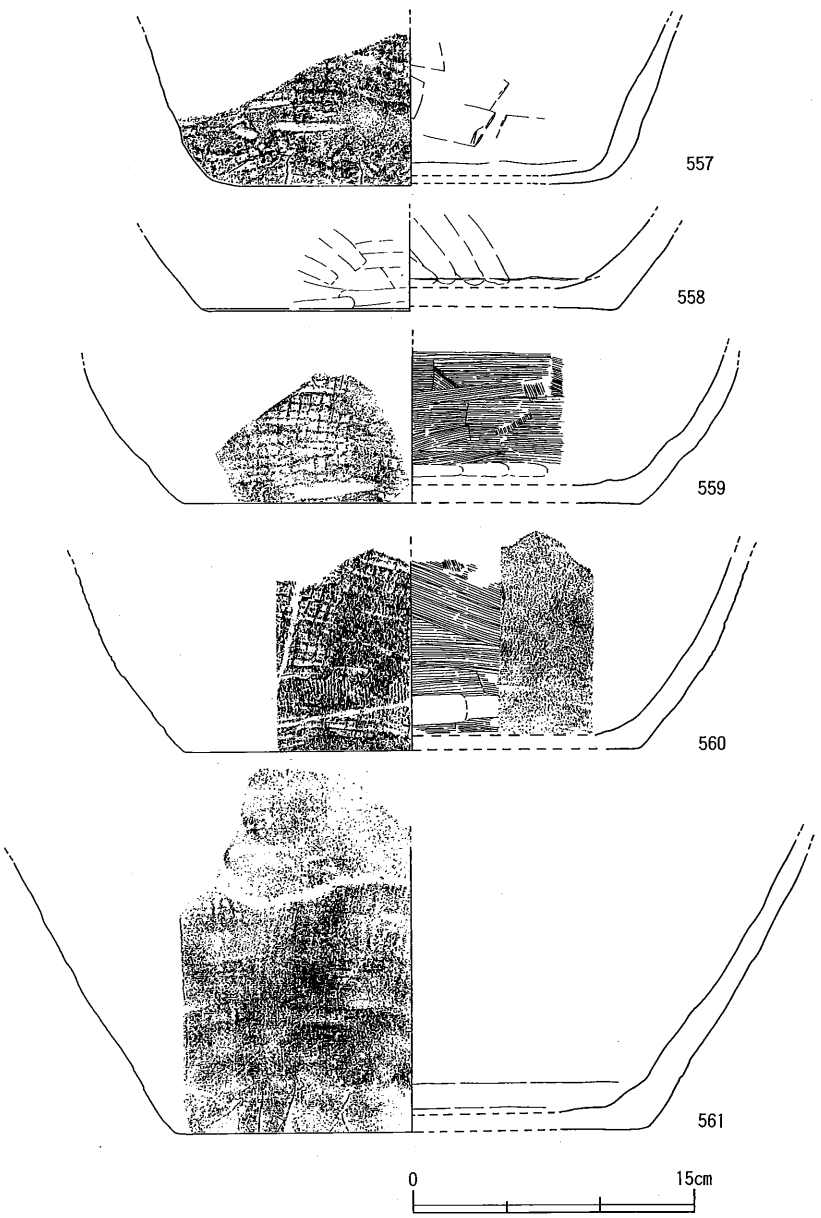
甕底部（553～561）には，底径が14～19cm前後のものと，21～25cm前後のものがある。恐らく前者が口径からみた小型品に，後者が大型品に対応するのであろう。全て平底であり，丸底は確認できない。底部外面には下駄印が看取できるものがあり（556），ロクロ上で製作されたことは間違いない。また，底部外面に格子叩き目を施すものが認められる（553・555）。通常，底部を叩く作業は丸底化に伴う工程の中で行われるが，この場合には底部叩きによって底面の平坦化が図られたかのような感がある。

562～564は，一応甕C類に分類されるものであるが，口頸部の形態が鍋AⅡに近く，また体部の器壁も薄く格子叩き目がみられないなど，異質な要素が多い。562・563の頸部には縦ハケ調整が施される。

565～570は壺である。短く外反して肥厚する口縁部をもつもの（565・566），口縁端部が丸く収まるもの（567・568），やや長く外反し丸い口縁端部をもつもの（569・570）に分けられる。566・568は，体部に格子叩き目を施す。他はナデによって器面を調整する。

574は壺ないし筒状の容器の底部である。底部外面には指による押圧痕が顕著に残る。また内面は粗くナデ調整される。

575は瓦質茶釜の口縁部である。C－4区包含層出土資料（1275）のような形態の把手を



第118図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(55)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
557	甕 底部	(底)21.0	2.5mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目	(底)ナデ　(体)板ナデ	底1/6
558	甕 底部	(底)22.0	2mm以下の砂粒を少量	土師質	灰褐	(体・底)板ナデ	(体・底)ナデ	底1/8
559	甕 底部	(底)24.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目→(底外縁)横ナデ	(底)横ナデ　(体)横ハケ	底1/5
560	甕 底部	(底)24.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目→(底外縁)縦ハケ	(体・底)横ハケ	細片
561	甕 底部	(底)25.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(体)格子叩き目→横ナデ	(体・底)ナデ	底1/5

第56表　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物観察表(30)

伴うものであろう。

焙烙（576・577）は，3号窯跡窯体内（143）や土器溜り2（925）・3（1146）などの事例に比較すると，口径が小さく器壁も薄い。また口縁端部も拡張させることなく，外傾面を作って収まるなどの相違点がある。

578は用途不明の土製品である。一方を欠損しているものの，方柱状の形態をもち各面を丁寧にナデ調整する。

ツマミをもつ土製品（579～582）には，平面円形のツマミを伴うもの（579・580・582）と，平面長方形のツマミをもつもの（581）がある。前者のツマミはさらに擬宝珠形のもの（579）と，円柱状のもの（580），ボタン状のもの（582）に細別でき，個体差が顕著である。580・581では，ツマミの接合された体部内面に同心円状の当て具痕が，磨り消されてわずかに遺存する。壺・甕類の体部に接合された把手の可能性もあるが，蓋形製品に伴うツマミとしておきたい。

583は甕体部に付くと考えられる把手である。

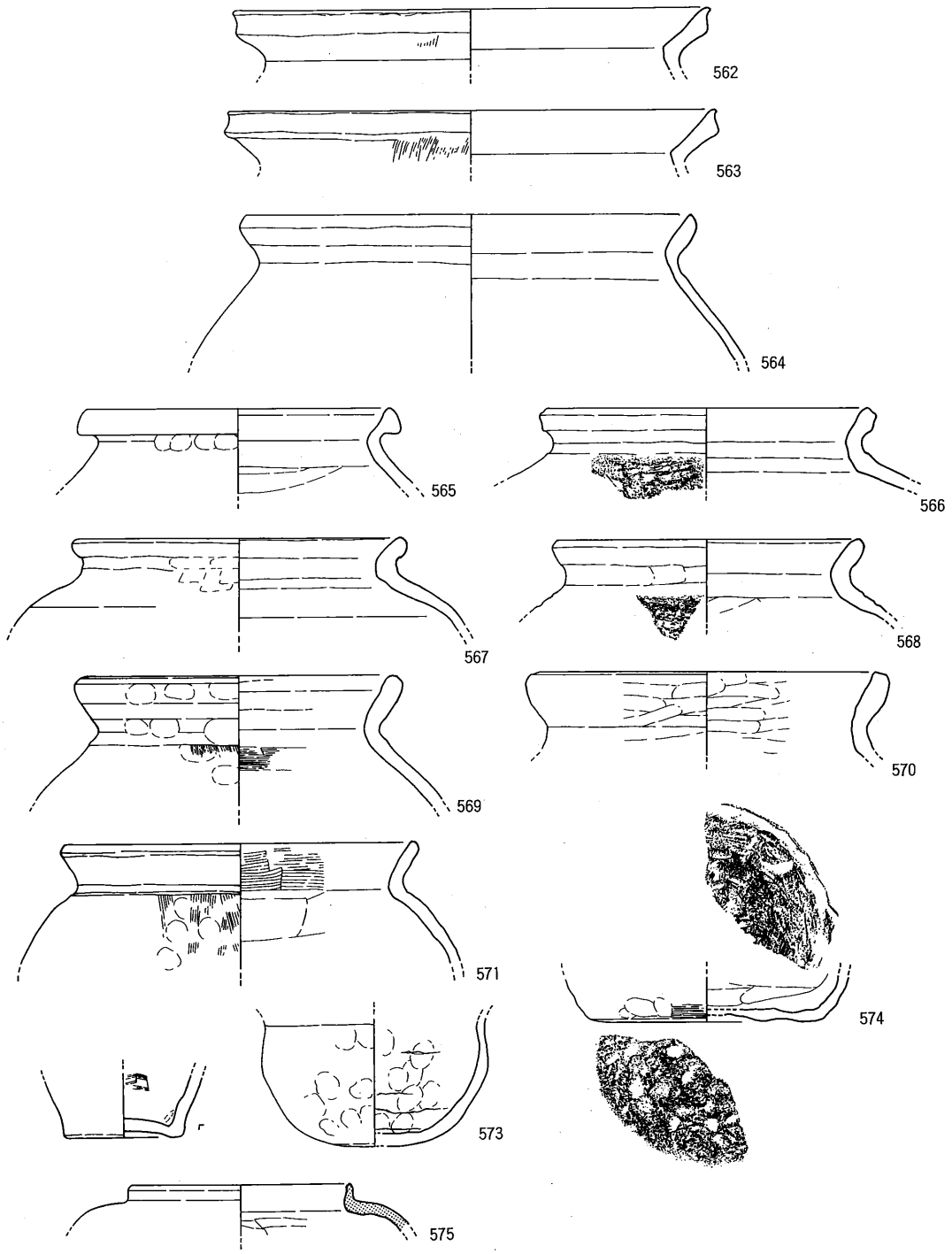
584～593は，讃岐国外からの搬入品と考えられる土器・陶器である。東播系須恵器や亀山焼，備前焼，堺近郊産瓦質土器がある。

東播系須恵器捏鉢（584～587）は，上下に肥厚する口縁部をもつもの（584）と，体部から水平に外反した後上方に肥厚する口縁部をもつもの（585）の2者がある。若干形態差はあるが，これらは山仲分類[10]のＤ１類，荻野編年[11]の近畿Ⅵ期にあたり，13世紀後葉～14世紀前半の幅の中で捉えられる。

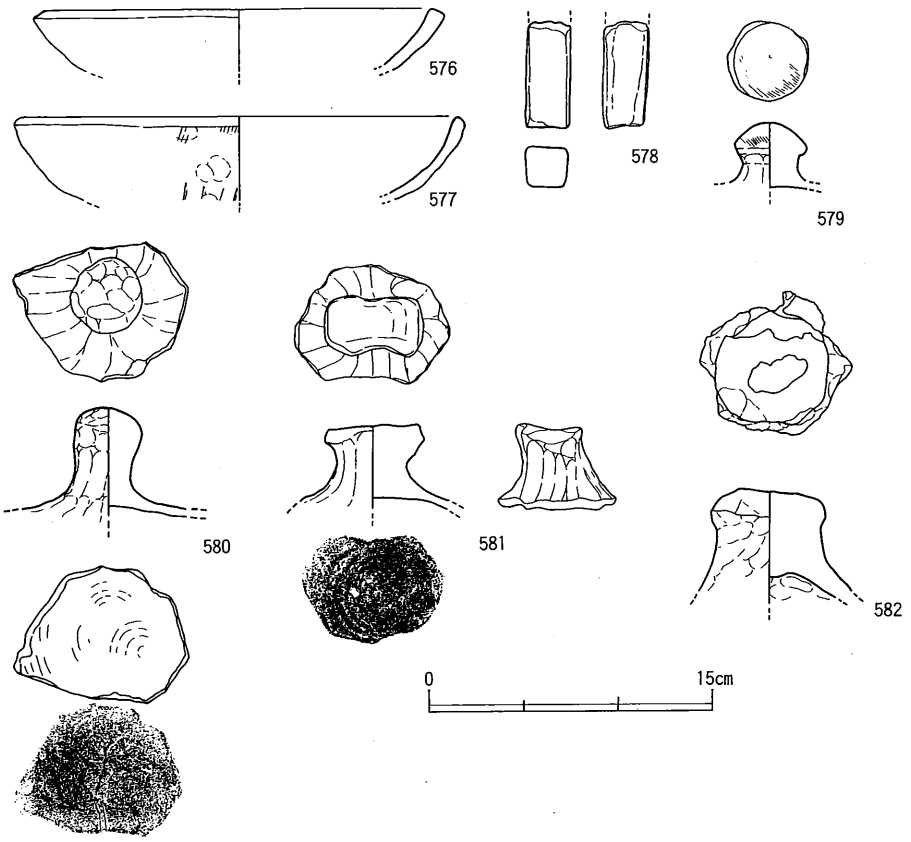
亀山焼甕（588～590）には，直立気味に立ち上がる頸部と上下に鈍く肥厚する口縁部をもつもの（588）と，よく張った体部と強く外反する口頸部をもつもの（589）とがある。588は頸部外面に縦ハケ調整を施しており，形態・技法から伊藤編年[12]の亀山焼第4段階，荻野編年のⅦ期にあたるとみられ，15世紀中葉～後葉の年代が想定される。また589は恐らく781のような口縁部形態をもっていた考えられ，岡田編年[13]の第2段階，伊藤編年の亀山焼第2群，荻野編年のⅣ期，すなわち13世紀後半頃が想定できる。

備前焼甕（591）は底部の破片で，全体の形状を窺うまでには至らないが，赤褐色を呈した酸化気味の焼成であることから，間壁編年第Ⅳ期頃が考えられる。

堺近郊産の瓦質甕（592・593）は，短く直立する頸部とそこから外反し端部が垂下する口縁部をもつ。体部外面には，細かい平行叩きがほぼ水平に施される。また593の体部内面には，当て具痕がかすかな器面の凹凸として認められる。堺環濠都市遺跡ＳＫＴ１１２の



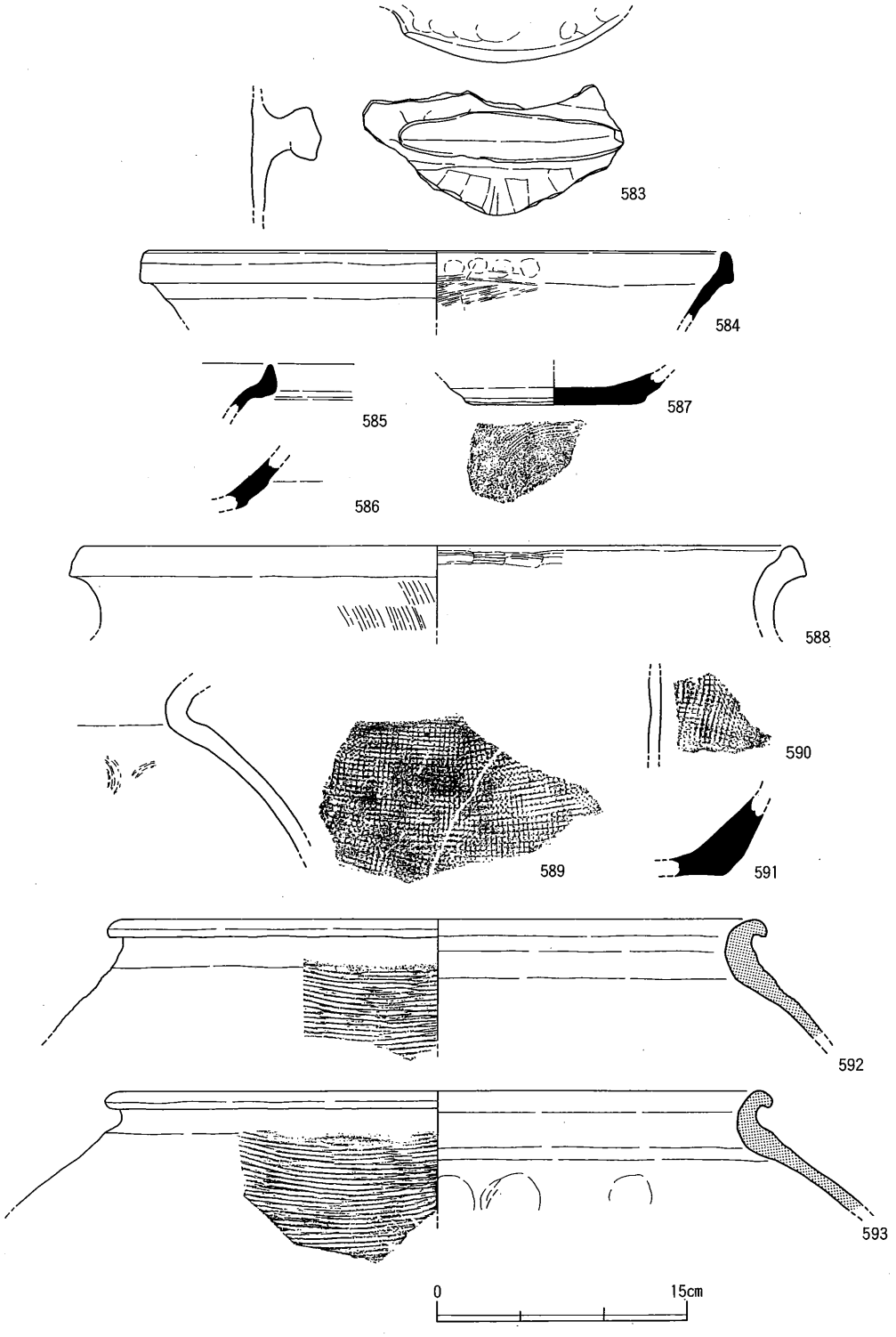
第119図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(56)



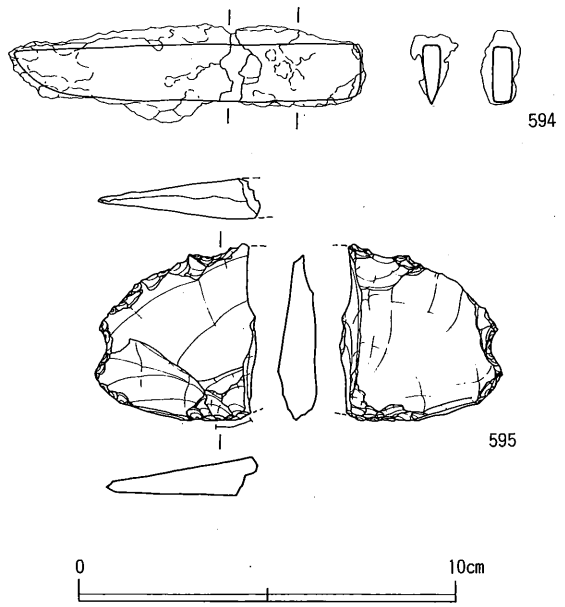
第120図　土器溜り１　第Ｉａ層出土遺物(57)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
562	甕 C	(口)28.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)縦ハケ 他は調整不明	(胴)板ナデ 他は調整不明	口縁1/8
563	甕 C	(口)29.0	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(胴)縦ハケ→(口)横ナデ	調整不明	口縁1/8
564	甕 C	(口)27.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・体)横ナデ	(口・体)横ナデ	細片
565	壺	(口)20.0	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口・体)横ナデ	(体)板ナデ→(口・胴)横ナデ	口縁1/8
566	壺	(口)19.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目→(口)横ナデ	(口)横ナデ	口縁1/4
567	壺	(口)19.4	3mm以下の砂粒を多量	土師質	橙	(胴)板ナデ (口)ナデ	(口・体)ナデ	口縁1/12
568	壺	(口)18.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目→(口)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	口縁1/8
569	壺	(口)18.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(口)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	口縁1/6
570	壺	(口)20.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・頸)横ナデ	(口・頸)横ナデ	口縁1/6
571	壺	(口)21.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(口)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	口縁1/4
572	壺	(底)7.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(体・底)横ナデ	(体)板ナデ	底縁2/3
573	壺	(頸部)12.7	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	オサエ後無調整	オサエ後無調整	1/4
574	壺？	(底)14.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(底)押圧 (底縁)板ナデ	(底・体)横ナデ	底縁1/4
575	茶釜	(口)13.2	2mm以下の砂粒	瓦質	灰	(口・体)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	口縁1/10
576	焙烙	(口)20.4	2mm以下の砂粒を多量	土師質	(内外)明赤褐 (内面口縁)黒褐	(口)横ナデ	調整不明	口縁1/4
577	焙烙	(口)22.8	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(底)板ナデ？ (体)縦ナデ→(口)横ナデ	(口・体)ナデ	細片
578	棒状土製品	—	3mm以下の砂粒	土師質	灰黄褐・橙	ナデ		細片
579	蓋ツマミ	—	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(ツマミ)板ナデ (接合部)ナデ	ナデ	
580	蓋ツマミ	—	3mm以下の砂粒	土師質	橙	ナデ	当て具痕	
581	蓋ツマミ	—	2mm以下の砂粒	土師質	橙	ナデ	当て具痕	
582	蓋ツマミ	—	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	ナデ	ナデ	

第57表　土器溜り１　第Ｉａ層出土遺物観察表(31)



第121図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(58)

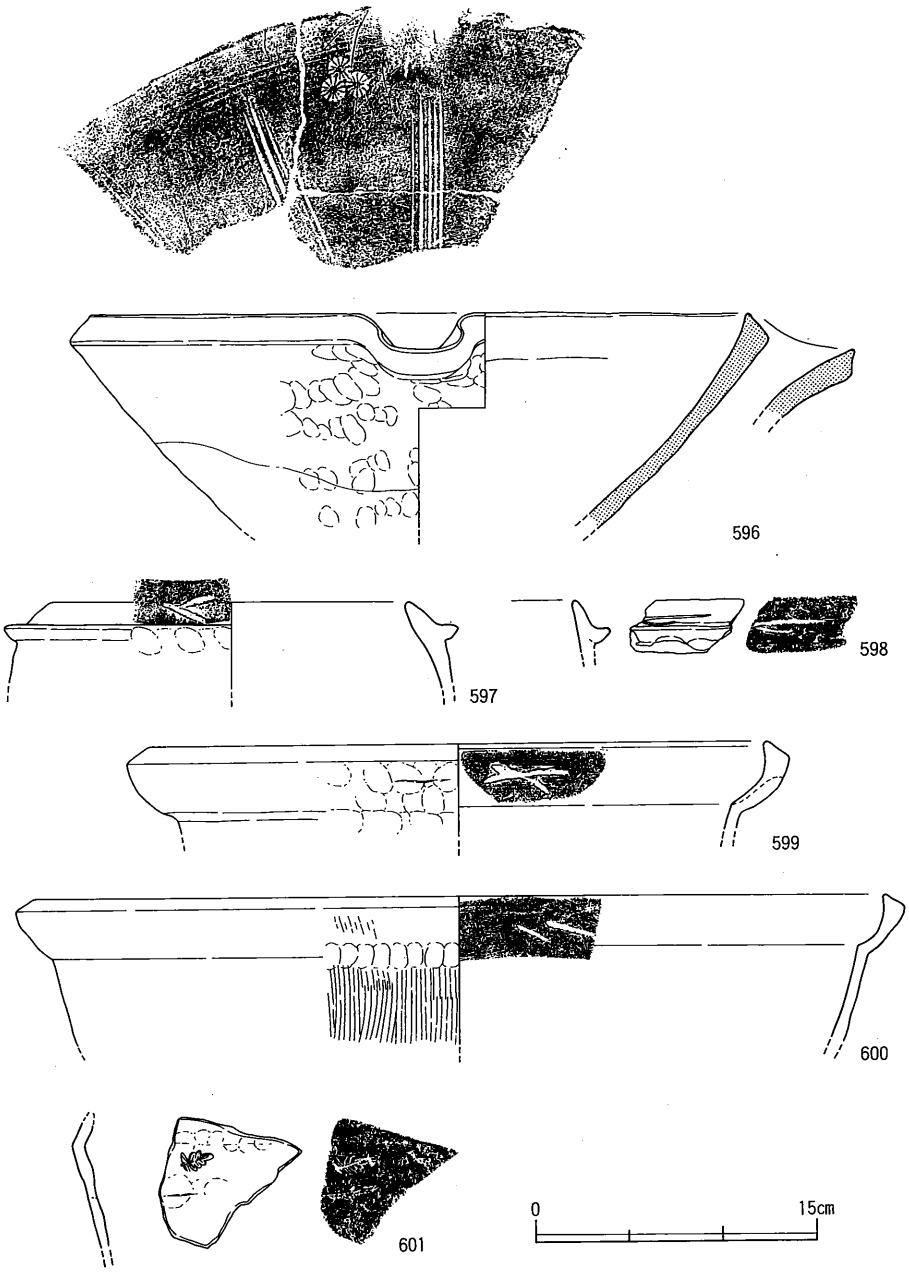


第122図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(59)

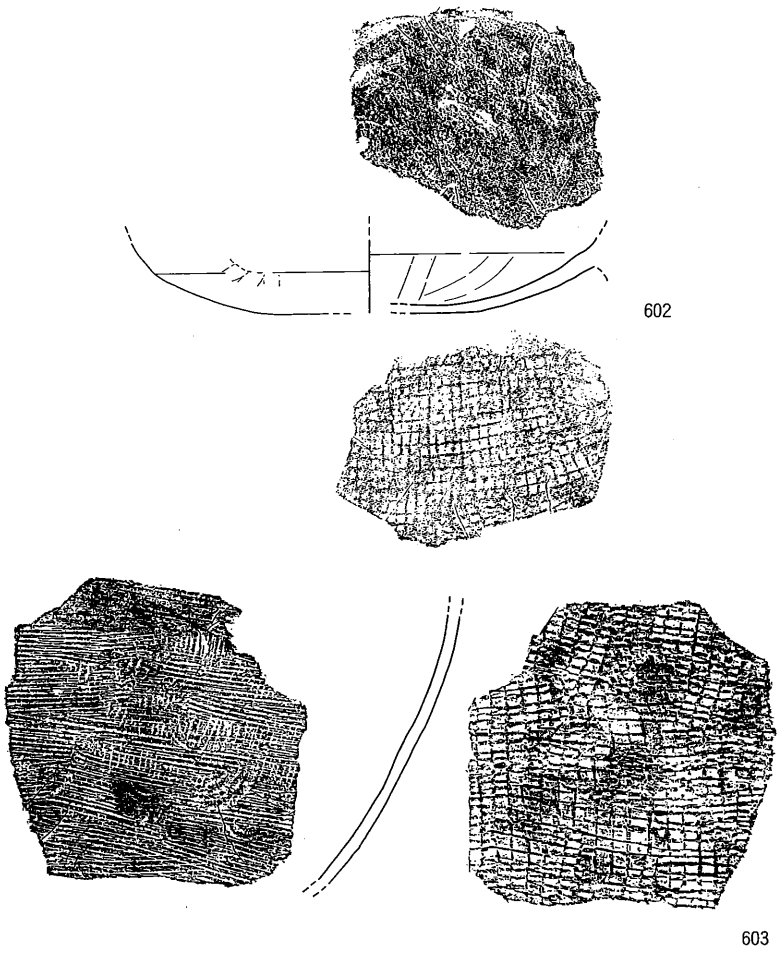
番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
583	甕 把手	—	2mm以下の砂粒	土師質	(外)橙 (内)黒褐	(把手部)ナデ (体)板ナデ	(体)ナデ	
584	東播系須恵器 擂鉢	(口)33.3	1.5mm以下の砂粒	須恵質	灰白	回転ナデ	回転ナデ	細片
585	東播系須恵器 擂鉢	—	1mm以下の砂粒	須恵質	にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	細片
586	東播系須恵器 擂鉢	—	2mm以下の砂粒を少量	須恵質	灰白	回転ナデ	回転ナデ	細片
587	東播系須恵器 擂鉢	(底)9.6	1mm以下の砂粒	須恵質	明黄褐	(体)回転ナデ (底)糸切り	回転ナデ	底1/6
588	亀山焼 甕	(口)42.0	1mm以下の砂粒を多量	土師質	(外)褐灰 (内)橙	(頸)縦ハケ	(口)横ハケ	口1/8
589	亀山焼 甕	—	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(体)格子叩き目	(体)当て具痕	細片
590	亀山焼 甕	—	1mm以下の砂粒	土師質	(外)黒褐 (内)灰褐	(体)格子叩き目	(体)横ナデ	細片
591	備前焼 甕	—	1mm以下の砂粒	陶質	褐灰	板ナデ	板ナデ	細片
592	堺産瓦質甕	(口)37.8	2mm以下の砂粒	瓦質	灰黄	(体)平行叩き目 (口)不明	調整不明	口1/6
593	堺産瓦質甕	(口)38.0	3mm以下の砂粒	瓦質	(外)灰 (内)にぶい黄橙	(体)平行叩き目 (口・頸)横ナデ	(体)当て具痕 (口・頸)横ナデ	口1/6

番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
594	刀子	鉄	(9.4)	刃部 1.5	0.5	(32.65)	柄部先端を欠損
595	石包丁	サヌカイト	(4.3)	4.2	1.1	(19.08)	中央部から半分欠損。刃部に使用痕あり

第58表　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物観察表(32)



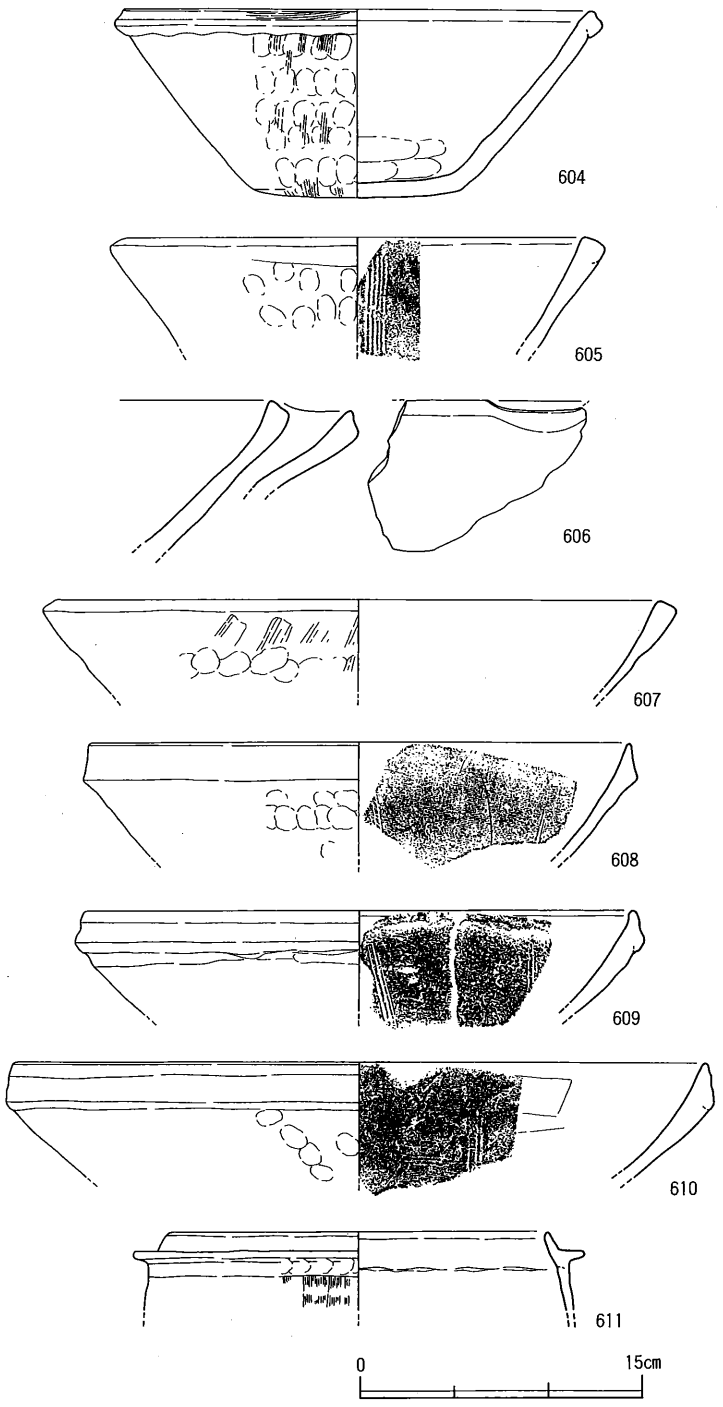
第123図　土器溜り１　第Ⅰａ層出土遺物(60)



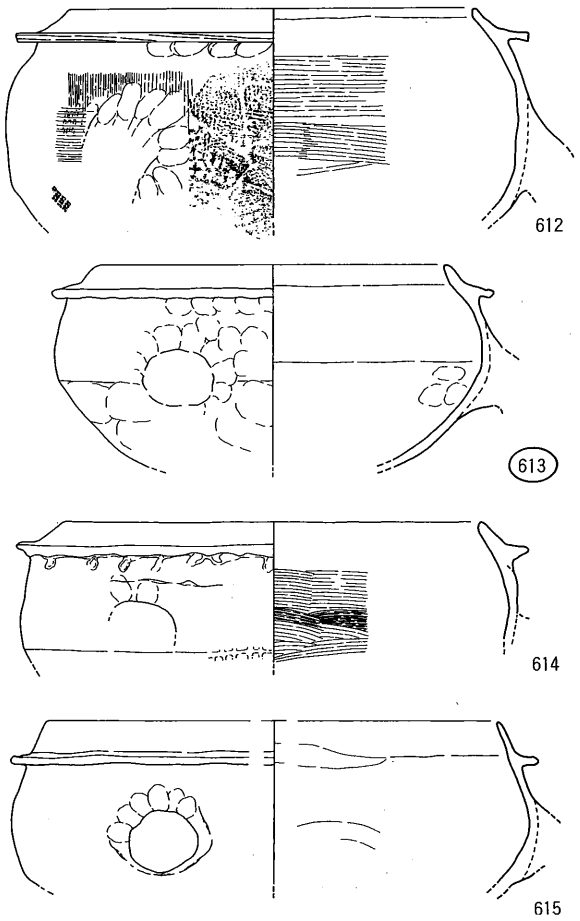
第124図　土器溜り１　第Ｉａ層出土遺物(61)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
596	擂鉢 ＡⅡ	(口)34.6	2mm以下の砂粒	瓦質	(内・外)灰 (断)灰白	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ (口)印花文	口1/4
597	足釜 ＢⅢ	(口)18.8	2mm以下の砂粒	土師質	明褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ (口)刻線「＜」	(口・体)横ナデ	口1/8
598	足釜 ＢⅢ	—	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ (口)刻線「＜」	(口・体)横ナデ	細片
599	鍋 ＢⅢ	(口)32.8	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ(口)刻線「×」	口1/12
600	鍋 ＢⅢ	(口)44.6	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・体)縦ハケ→(口)横ナデ	(口・体)板ナデ(口)刻線「//」	口1/12
601	鍋	—	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)横ナデ (体)羊歯文	(口・体)横ナデ	細片
602	足釜 底部	—	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(底)格子叩き目	(底)当て具痕	底1/4
603	甕 体部	—	3mm以下の砂粒	土師質	橙	格子叩き目	当て具痕→横ハケ	細片

第59表　土器溜り１　第Ｉａ層出土遺物観察表(33)



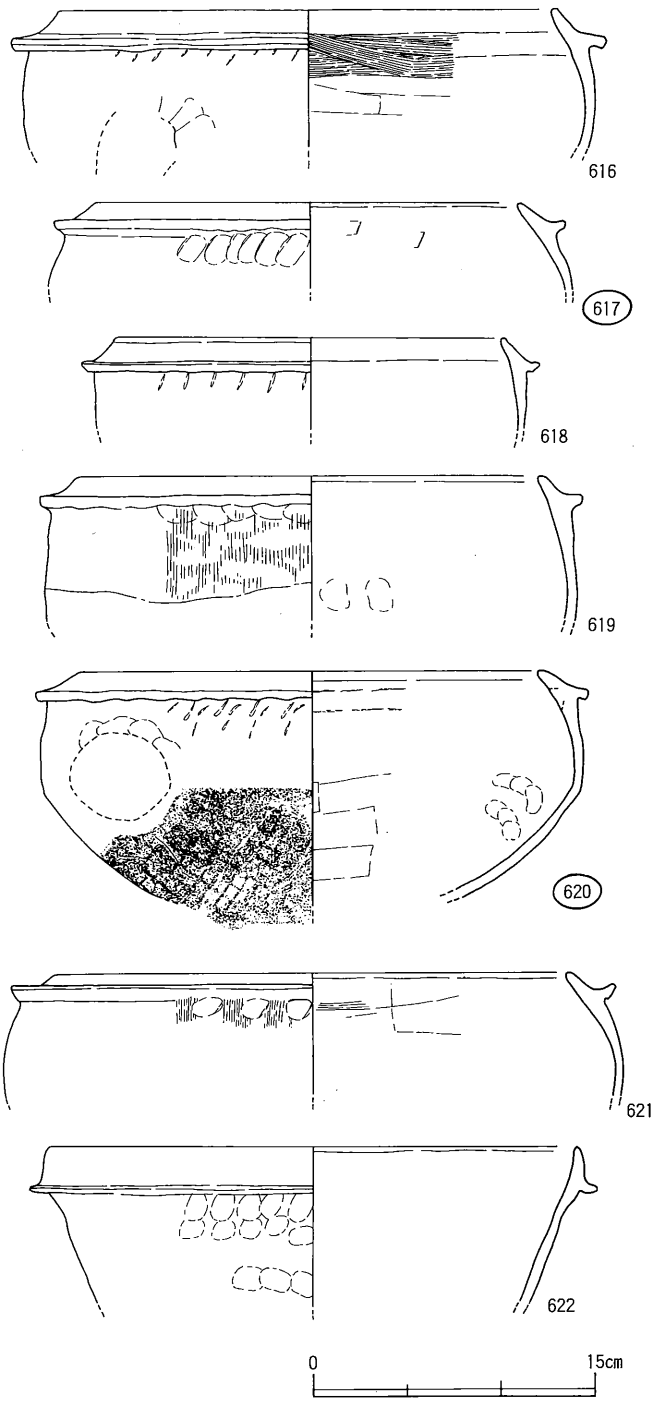
第125図　土器溜り１　第Ⅰｂ層出土遺物(1)



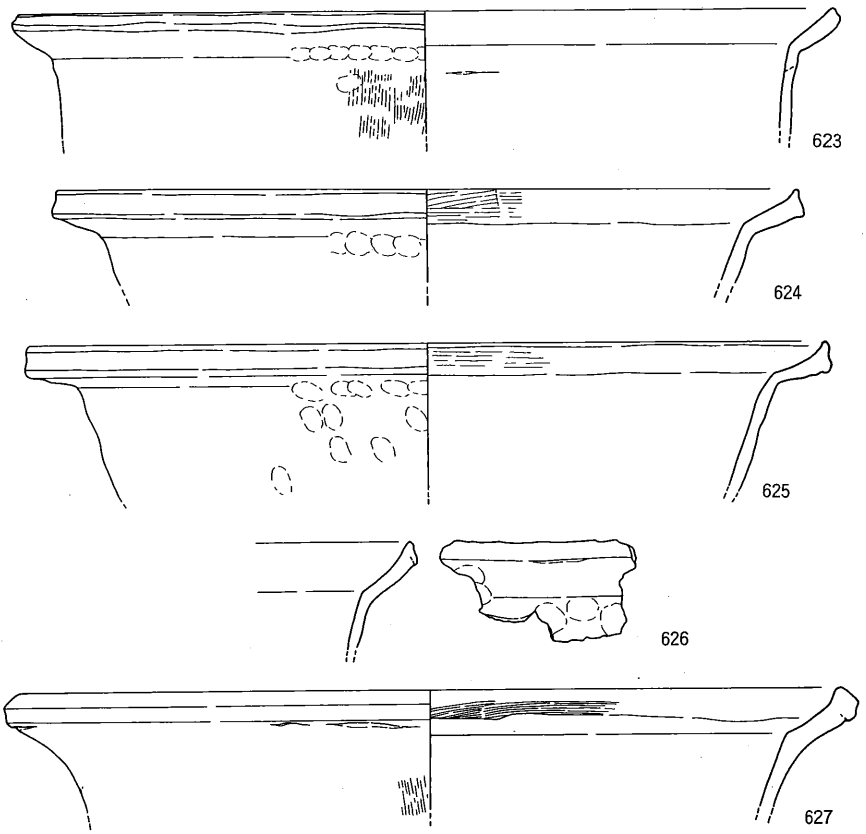
第126図　土器溜り１　第Ｉｂ層出土遺物(2)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
604	捏鉢	(口)24.6(高)9.9 (底)11.0	1mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(体)縦ハケ→(口)横ハケ (底)ナデ	(口・体・底)横ナデ	底部完存
605	擂鉢 ＡⅠ	(口)24.0	3mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ？	口縁1/12
606	擂鉢 ＡⅠ	—	2mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	調整不明	調整不明	細片
607	擂鉢 ＡⅠ	(口)32.1	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(体)縦ハケ 他は調整不明	調整不明	口縁1/8
608	擂鉢 ＡⅢ	(口)28.6	2mm以下の砂粒を少量	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ　使用痕？	口縁1/8
609	擂鉢 ＡⅢ	(口)28.9	2mm以下の砂粒	土師質	明褐	(口)回転ナデ？	(口・体)回転ナデ？	口縁1/8
610	擂鉢 ＡⅢ	(口)36.8	3mm以下の砂粒	土師質	(外)にぶい橙 (内)明赤褐	(口)板ナデ→回転ナデ	(口・体)板ナデ	口縁1/10
611	足釜 ＡⅢ	(口)20.0	4mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(肩)押圧 →(口・肩)横ナデ	(口・体)横ナデ	口縁1/8
612	足釜 ＢⅠ	(口)21.0	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄褐	(体)縦ハケ→(肩)押圧 →(口・肩)横ハケ→横ナデ	(体)横ハケ→(口)横ナデ	口縁1/3
613	足釜 ＢⅡ	(口)18.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口)横ナデ	口縁1/3
614	足釜 ＢⅡ	(口)22.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ (底)格子叩き目	(体)横ハケ→(口)横ナデ	口縁1/3
615	足釜 ＢⅡ		1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・肩)横ナデ	(口)板ナデ (体)横ハケ	細片

第60表　土器溜り１　第Ｉｂ層出土遺物観察表(1)



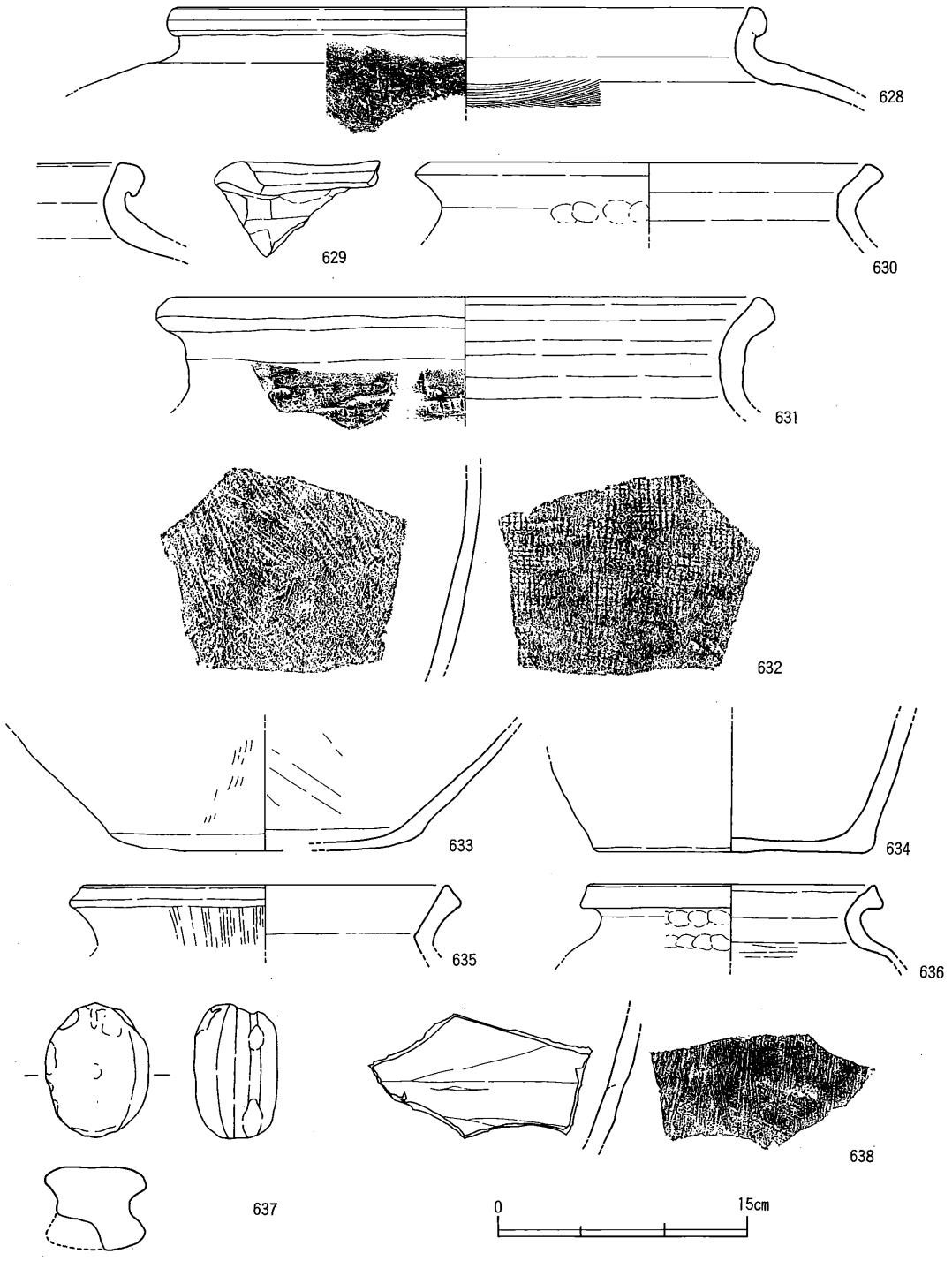
第127図　土器溜り１　第Ⅰｂ層出土遺物(3)



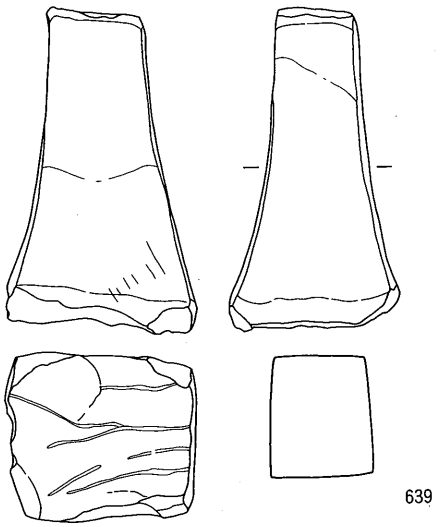
第128図　土器溜り1　第Ⅰb層出土遺物(4)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
616	足釜 BⅡ	(口)25.8	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)横ハケ→板ナデ (口)横ナデ	口1/8
617	足釜 BⅢ	(口)22.0	5mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/6
618	足釜 BⅢ	(口)20.4	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)ナデ→(口)横ナデ	口1/8
619	足釜 BⅢ	(口)24.1	1.5mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(胴)押圧→(口・胴)横ナデ (底)ナデ	(口・体)横ナデ	口1/9
620	足釜 BⅢ	(口)24.1	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄褐	(胴)2段押圧→(口・胴)横ナデ (底)格子叩き目	(口・体)ナデ→(底)板ナデ	口1/3
621	足釜 BⅢ	(口)27.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)縦ハケ→押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/7
622	羽釜	(口)28.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	口1/5
623	鍋 AⅠ	(口)42.7	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(体)縦ハケ→(口)横ナデ？	調整不明	細片
624	鍋 AⅡ	(口)39.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口)横ハケ (体)ナデ	口1/10
625	鍋 AⅡ	(口)42.0	2mm以下の砂粒	土師質	明褐	(口)横ナデ	(口)横ハケ	口1/12
626	鍋 AⅡ	—	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)ナデ	細片
627	鍋 BⅡ	(口)43.3	2mm以下の砂粒	土師質	(外)明褐 (内)黄褐	(口)横ナデ (体)縦ハケ	(口)横ハケ	口1/8

第61表　土器溜り1　第Ⅰb層出土遺物観察表(2)



第129図　土器溜り１　第Ⅰｂ層出土遺物(5)

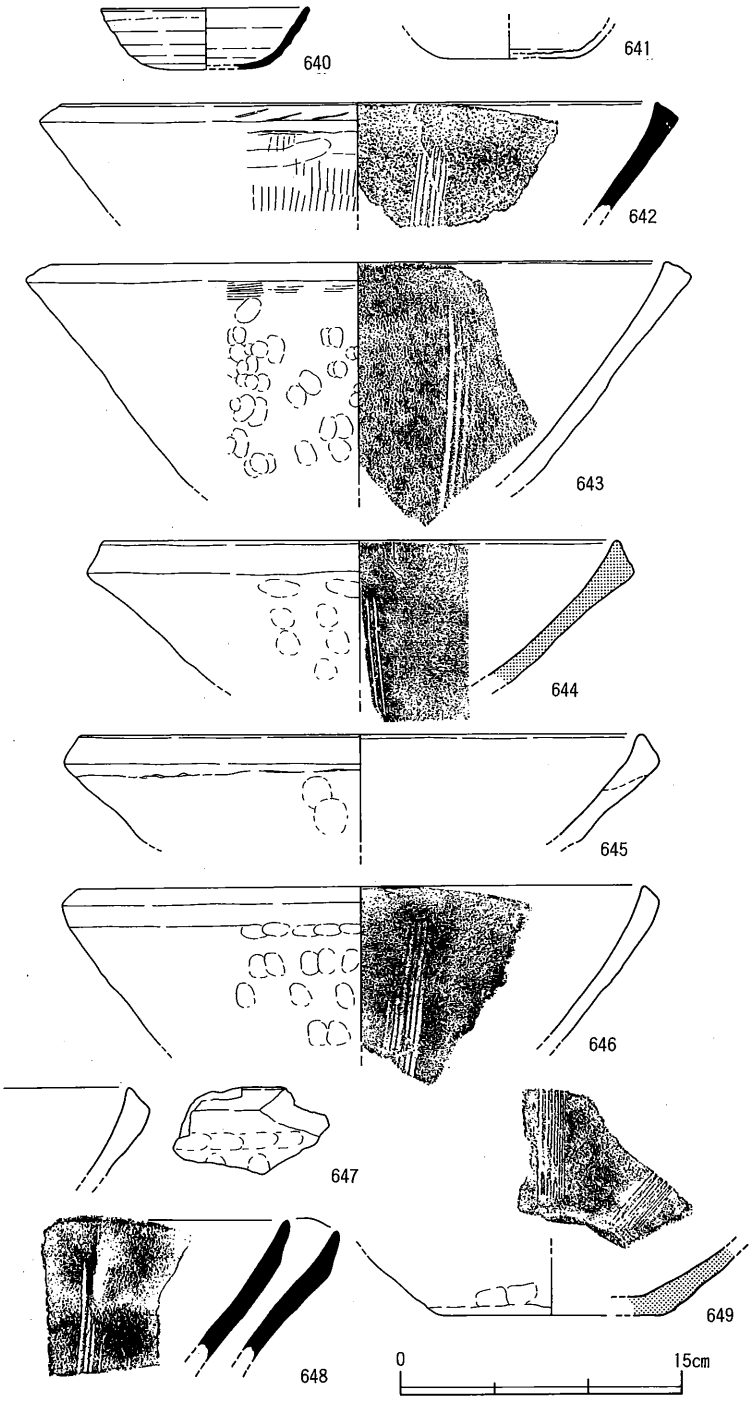


第130図　土器溜り１　第Ｉｂ層出土遺物(6)

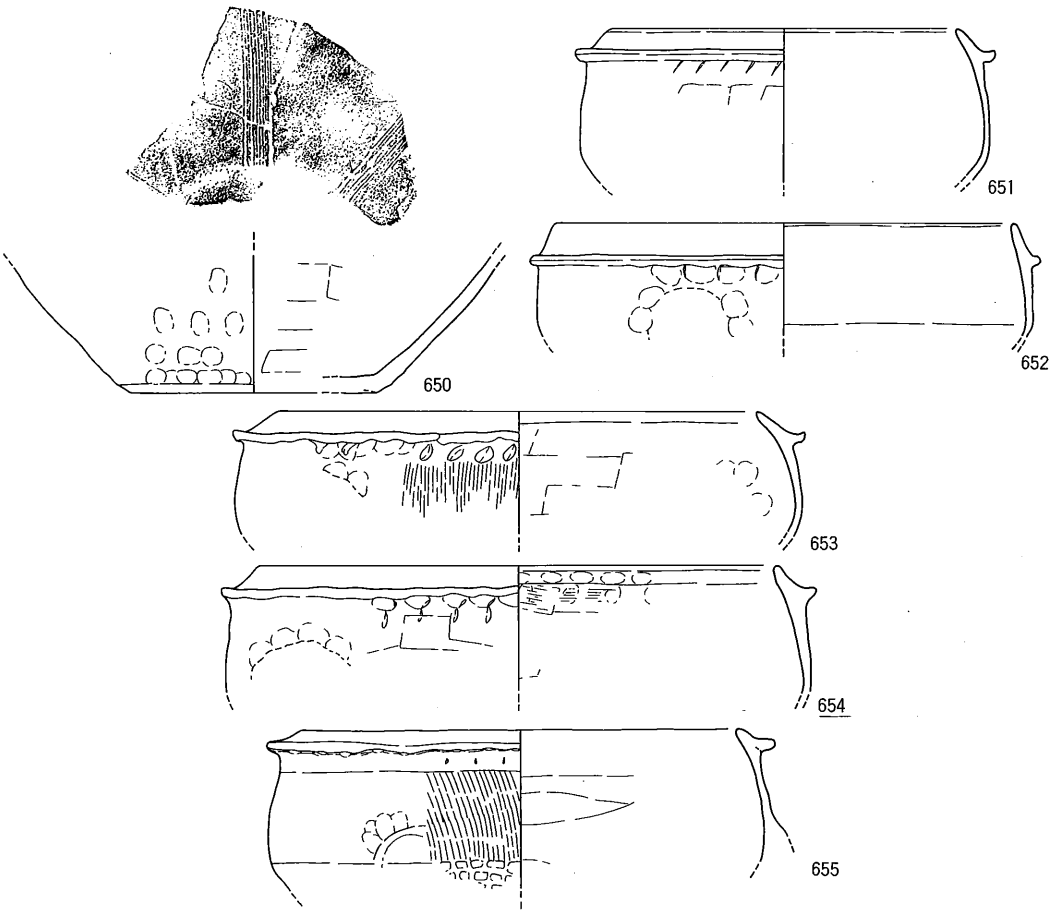
番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
628	甕 ＡⅠ	(口)33.6	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目→(口・頸)回転ナデ	(体)横ハケ→(口・頸)回転ナデ	細片
629	甕 ＡⅡ	—	2.5mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)板ナデ→(口・頸)回転ナデ	(口・頸)回転ナデ	細片
630	甕 Ｃ	(口)26.0	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(口・頸)回転ナデ	口径1/8
631	甕 Ｃ	(口)35.9	2.5mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(体)格子叩き目→(口・頸)回転ナデ	(口・頸)回転ナデ	口径1/8
632	甕 体部	—	2mm以下の砂粒	土師質	(外)にぶい黄橙(内)灰黄褐	格子叩き目	当て具痕→縦ハケ	細片
633	甕 底部	(底)12.6	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ (底)ナデ	(体)板ナデ (底)ナデ	底径1/4
634	甕 底部	(底)16.0	3mm以下の砂粒	土師質	赤褐	調整不明	調整不明	底径完存
635	甕 Ｃ	(口)21.2	2mm以下の砂粒	土師質	(外)明黄褐(内)橙	(頸)縦ハケ→(口)横ナデ	(口・頸)横ナデ？	口径1/8
636	壺	(口)17.0	3mm以下の砂粒を多量	土師質	橙	(口)横ナデ	(頸・体)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/6
638	備前焼 甕	—	3mm以下の砂粒	陶質	にぶい赤褐	板ナデ	板ナデ	細片

番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
637	錘	土製（土師質）	8.0	6.1	5.0	(190.44)	有溝土錘。5mm以下の砂粒を多く含む。一部欠損
639	砥石	砂岩	12.9	7.5	6.7	634.31	各面に擦痕。一部に煤付着。

第62表　土器溜り１　第Ｉｂ層出土遺物観察表(3)



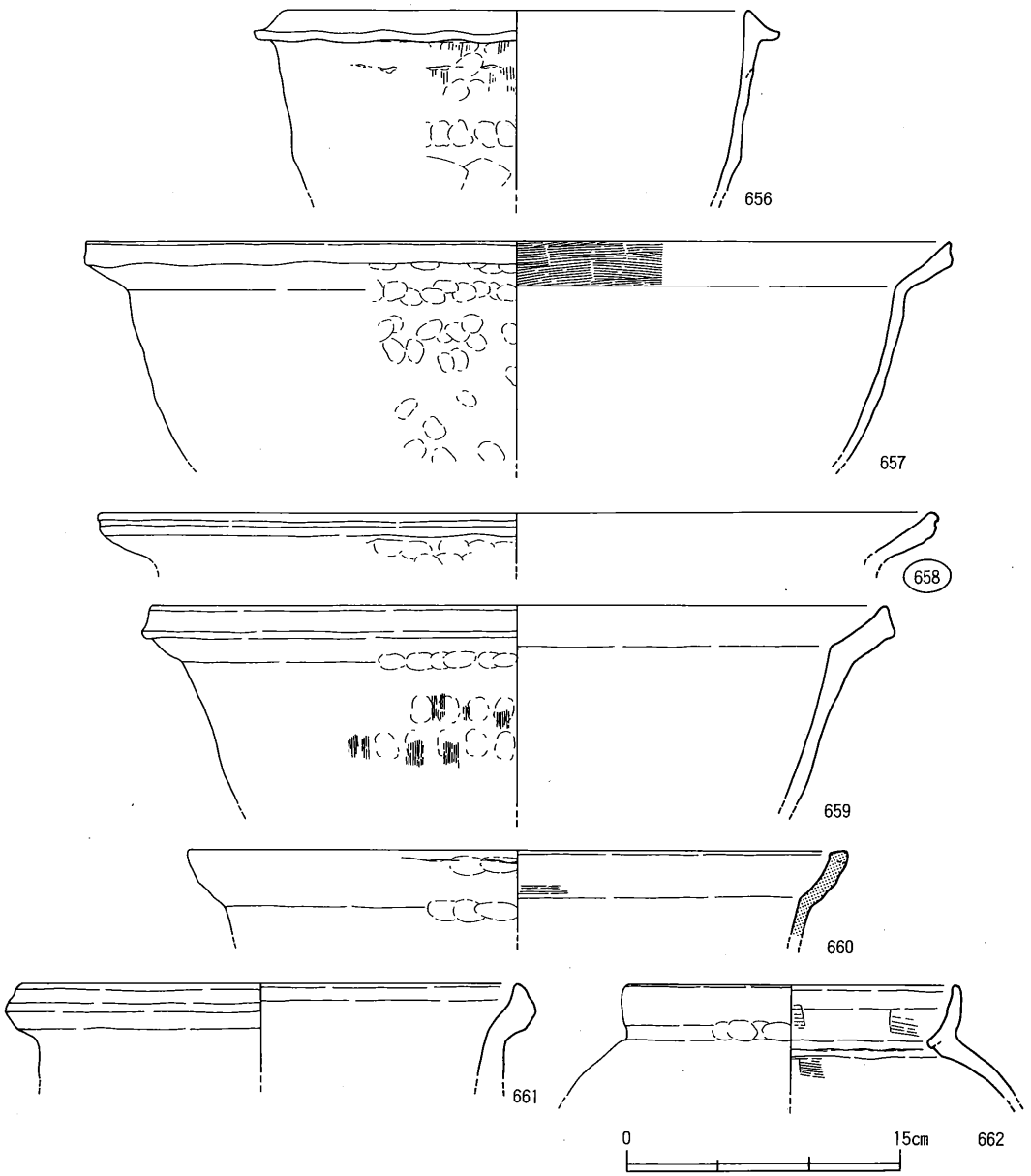
第131図　土器溜り１　第Ⅰａ・ｂ層出土遺物(1)



第132図　土器溜り1　第Ⅰa・b層出土遺物(2)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法 外面	手法 内面	残存度
640	杯（擂鉢?）	(口)11.0 (高)3.3 (底)3.4	2mm以下の砂粒を少量	須恵質	灰白	(口・体)回転ナデ→(底)糸切り→ナデ	(口・体・底)回転ナデ	口径1/3 底径1/6
641	杯	(底)7.2	1mm以下の砂粒	土師質	(外)浅黄 (内)灰白	(体)回転ナデ (底)板ナデ	(体・底)回転ナデ→(底)ナデ	底径1/4
642	擂鉢 AⅠ	(口)31.4	2mm以下の砂粒	須恵質	灰	(体)縦ハケ→(口)回転ナデ (口)木目状圧痕	(口・体)板ナデ	口径1/8
643	擂鉢 AⅠ	(口)32.3	2mm以下の砂粒	土師質	(外)にぶい黄橙 (内)橙	(口)横ハケ	調整不明	口径1/12
644	擂鉢 AⅡ	(口)27.0	2mm以下の砂粒	瓦質	浅黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/8
645	擂鉢 AⅡ	(口)29.6	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	調整不明	調整不明	口径1/8
646	擂鉢 AⅡ	(口)30.0	3mm以下の砂粒	土師質	明褐	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/8
647	擂鉢 AⅡ	—	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
648	擂鉢 BⅠ	—	1mm以下の砂粒	須恵質	灰白	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
649	擂鉢 底部	(底)12.0	1mm以下の砂粒	瓦質	(内・外)灰 (断)明黄褐	(底外縁)削り状のナデ	(体・底)横ナデ	底径1/4
650	擂鉢 底部	(底)13.0	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(底外縁)削り状のナデ	(体・底)板ナデ	底径1/4
651	足釜 BⅡ	(口)18.0	5mm以下の砂粒	土師質	橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)横ナデ	口径1/6
652	足釜 BⅡ	(口)24.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)ナデ	口径1/4
653	足釜 BⅡ	(口)25.0	2.5mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/8
654	足釜 BⅢ	(口)27.2	4mm以下の砂粒を多量	土師質	橙	(体)板ナデ→(肩)2段押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/4
655	足釜 BⅣ	(口)23.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(肩)押圧→(口・肩)横ナデ・(底)叩き目	(口・体)板ナデ	口径1/2

第63表　土器溜り1　第Ⅰa・b層出土遺物観察表(1)



第133図　土器溜り１　第Ⅰａ・ｂ層出土遺物(3)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法 外面	手法 内面	残存度
656	羽釜	(口)25.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(口・鍔)横ナデ	(口・体)ナデ	口径1/10
657	鍋 AⅡ	(口)47.0	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口)横ハケ (体)調整不明	口径1/8
658	鍋 AⅡ	(口)45.6	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)沈線→横ナデ	(口)横ナデ	口径1/8
659	鍋 AⅡ	(口)40.0	1mm以下の砂粒	土師質	赤褐	(体)縦ハケ→(口)横ナデ	(口・体)横ナデ	口径1/6
660	鍋 BⅠ	(口)36.0	1mm以下の砂粒	瓦質	灰黄	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
661	甕 C	(口)28.0	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口・頸)横ナデ	(口・頸)横ナデ	口径1/8
662	壺	(口)17.8	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/8

第64表　土器溜り１　第Ⅰａ・ｂ層出土遺物観察表(2)

第６次生活面出土資料[14]に近く，ＳＫＴ２０２出土資料[15]よりも先行する形態的特徴をもつ。ＳＫＴ１１２第６次生活面下位の第７層から出土した瓦器皿は，内面にハケ目があり河内長野市金剛寺ＳＸ７（1360年頃）[16]とほぼ同時期の所産であるが，第６次生活面を覆う第６層の瓦器皿にはハケ目がなく，明らかに後出的な要素をもつ。一方，ＳＫＴ２０２では永楽銭が伴っていることから，永楽銭の国内流入以前であることがわかる。このことからＳＫＴ１１２第６次生活面は，14世紀末葉～15世紀初頭の年代が想定でき，592・593についてもほぼ同じ年代が想定できよう[17]。

594は鉄製刀子である。直線的で幅も一定した刃部と，緩やかなカーブを描く切先をもつ。関部は片関と考えられるが，わずかな段差として表れるのに過ぎない，弱いものである。第４節１(2)で述べたように，この層位から少量の古墳時代須恵器が出土しており，付近に古墳の存在も想定されることから古墳時代の鉄器の可能性もある。しかし，ほぼ完形に遺存していることから，中世土器生産に関わるものとする方に妥当性があろう。

595はサヌカイト製石包丁である。端部に抉りがある。

第Ｉａ層より出土した，加飾された土器を一括して掲示した。印花文（596）や記号文（597～600），プレスによる木葉文（601）がある。印花文は中房状の小円と，そこから放射状に伸びる直線によって表現されており，かなり簡略化された写実性に欠けるものである。３個が「∴」形に配列されており，相互に重複することから同一の印判を３回押捺していることがわかる。擂鉢片口に近い口縁部上端にあり，使用時に最も目に付きやすい箇所に施文されていることが窺える。なお，596は擂鉢ＡⅡ－１類にあたる。

記号文は，「＜」（597・598），「×」（599），「＼」（600）形のヘラ描きが施されるものである。「＜」形のものは一筆描きではなく，２本の直線を交差させるような状況にあるため，本来「×」形を意図したものである可能性がある。597・598は足釜ＢⅢ類，599・600は鍋ＢⅢ類にあたる。足釜では口縁部外面に，鍋では口縁部内面に施文されており，やはりいずれも目に付きやすい箇所にみられる。

木葉文は，器面に葉を直接プレスするものであり，１点のみ出土した。葉の形が不定形であり，輪郭が刻線状をなすことから，当初は針状工具による稚拙な描写とも思われた。しかし詳細に観察すると，葉脈状の細かい繊維が各所に認められ，人為的に描かれたものとはいえない状況を呈していた。またシダ科植物先端の新芽が全く同じ形であり，葉の端がめくれ上がっているために，粘土に転写すると線刻状の輪郭をなすことが観察できた。このことから，シダ科植物の葉を器面に転写したことは間違いない。この文様が施された

601は，鍋もしくは壺と考えられる。

602・603は，叩き作業に伴う当て具痕を内面に残す資料である。602は足釜底部であり，外面には格子叩き目がみられる。内面の当て具痕は，板ナデ調整によってほとんど消されているが，当て具の輪郭が「C」形に遺存している。足釜底部に当て具痕がみられることは，後述する叩き技法の評価に極めて重要な知見をもたらす。603は甕体部片である。内面は横ハケ調整が行われているが，それに先行する円弧状の当て具痕が明瞭に読み取れる。

［第Ⅰb層出土遺物（604～639）］

第Ⅰa層に比して遺物量は少ない。また第Ⅲ層と直接接している部分もあるため，第Ⅲ層からの混入とみられる遺物も認められる。捏鉢・擂鉢・足釜・羽釜・鍋・甕・壺・土錘・備前焼甕・砥石などが出土している。

捏鉢（604）は，口縁端部が外方に大きく肥厚する形態をもつ。口縁部端面や体部外面にはハケ目調整がみられる。胎土・焼成から楠井産とみられるが，他遺構・層位での出土はなく，むしろ西村遺跡西村北地区Ｓ５－ＳＫ０１出土遺物[18]のような十瓶山窯産須恵器捏鉢の最終形態に近いものである。

足釜にはＢⅠ類（612）とＢⅡ類（613～616），ＢⅢ類（617～621）がある。612は水平に伸びる長い鍔部をもち，鍔端部には横ハケ調整が行われる。また体部まで底部叩きが連続しており，明瞭な屈曲をもたない緩やかなカーブを描く底体部を形成する。613は底部に叩き目が認められないが，わずかに２㎝四方の平坦面の連続が読み取れ，刻みのない叩き板で叩き作業が行われた可能性がある。

甕Ｃは，短く外反する口頸部をもつもの（630）と，緩やかに外反する長い口頸部をもつもの（631）がある。631の口縁端部は丸味をもって収まる。

有溝土錘（637）は，片面の一部（約２／５）が接合面で剝離している。重量は190.44ｇ，溝部から想定される綱の幅は約２㎝である。土師質焼成で肉眼観察による胎土の特徴から楠井産とみてよい。

638は備前焼甕体部片である。外面には縦方向の板ナデ調整がみられる。酸化気味の焼成であり，間壁編年第Ⅳ期にあたると考えられる。

639は砂岩製の砥石である。側面はいずれもよく使用されている。また被熱した痕跡がある。

［第Ⅰａ・ｂ層出土遺物（640～662）］

調査時に両層一括して取り上げた遺物を図示した。須恵質杯（640），土師質杯（641），瓦質（土師質・須恵質含む）擂鉢（642～650），足釜（651～655），羽釜（656），鍋（657～660），甕（661），壺（662）がある。この中で須恵質杯は，底部の大半にナデ調整が施されるが，先行する糸切りの痕跡がかすかに読み取れる。焼成は軟質な須恵質であり，口縁部外面には重ね焼きの際に生じた炭素の吸着がみられる。底部糸切りは讃岐の中世須恵器にはみられないため，讃岐以外の地域から搬入された可能性があり，焼成の特徴や全体の形状・法量から，13世紀代の備前焼とも考えられる。

［第Ⅱ層出土遺物（663～691）］

杯・皿・擂鉢・足釜・鍋・甕，備前焼甕などが出土している。

土師質杯（663）は直線的な体部・口縁部をもつ。土師質皿（664）は，長く直線的に伸びる体部をもち，底部と体部との屈曲が極めてシャープである。これは，第Ⅰａ層とはやや異なる特徴である。

擂鉢はＡⅠ類（665・666），ＡⅡ類（667・668），ＡⅢ類（669～672），ＡⅣ類（673）がある。675は底部が完存している。内面の卸し目は11方向に施されるが，既に指摘したように，いくつかの基準線から分割した形跡は読み取れない。また外面には下駄印が良好な状態で遺存する。

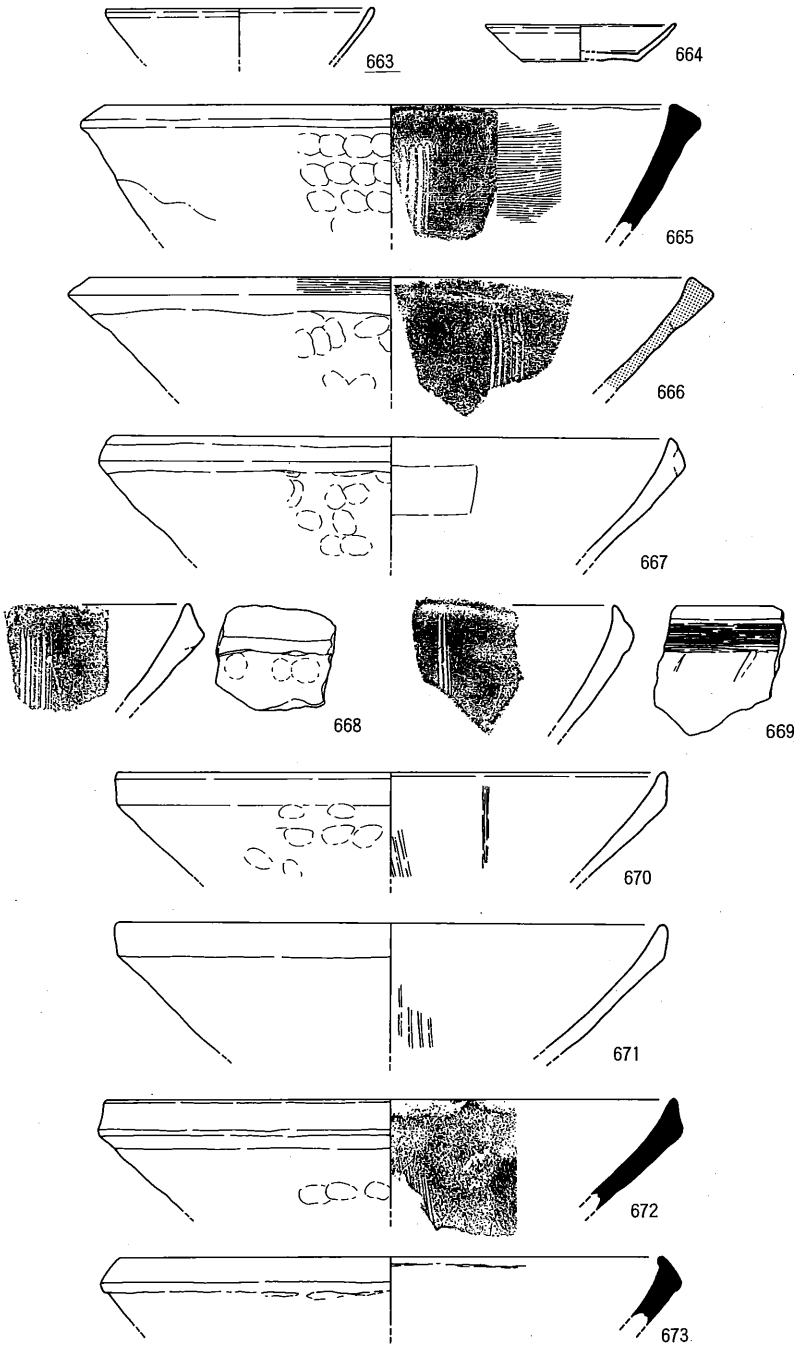
足釜には，ＡⅡ類（678・679），ＢⅡ類（680～682），ＢⅢ類（683～689），ＢⅣ類（690）がある。ＡⅡ類は，口縁部や鍔部の端部にハケ目調整を行わずに，横ナデ調整で仕上げている。このため端部に明瞭な平坦面が形成されない。しかし体部調整にはハケ目が多用され，ことに体部下半に横ハケ調整が行われる点は他の型式には認められない。678鍔部は，基部が太いが水平に伸びる。これに対し679鍔部は，やや下方に向く。

686は足釜ＢⅢ類で，口縁部外面に「＜」ないし「×」形のヘラ描き刻線をもつ。

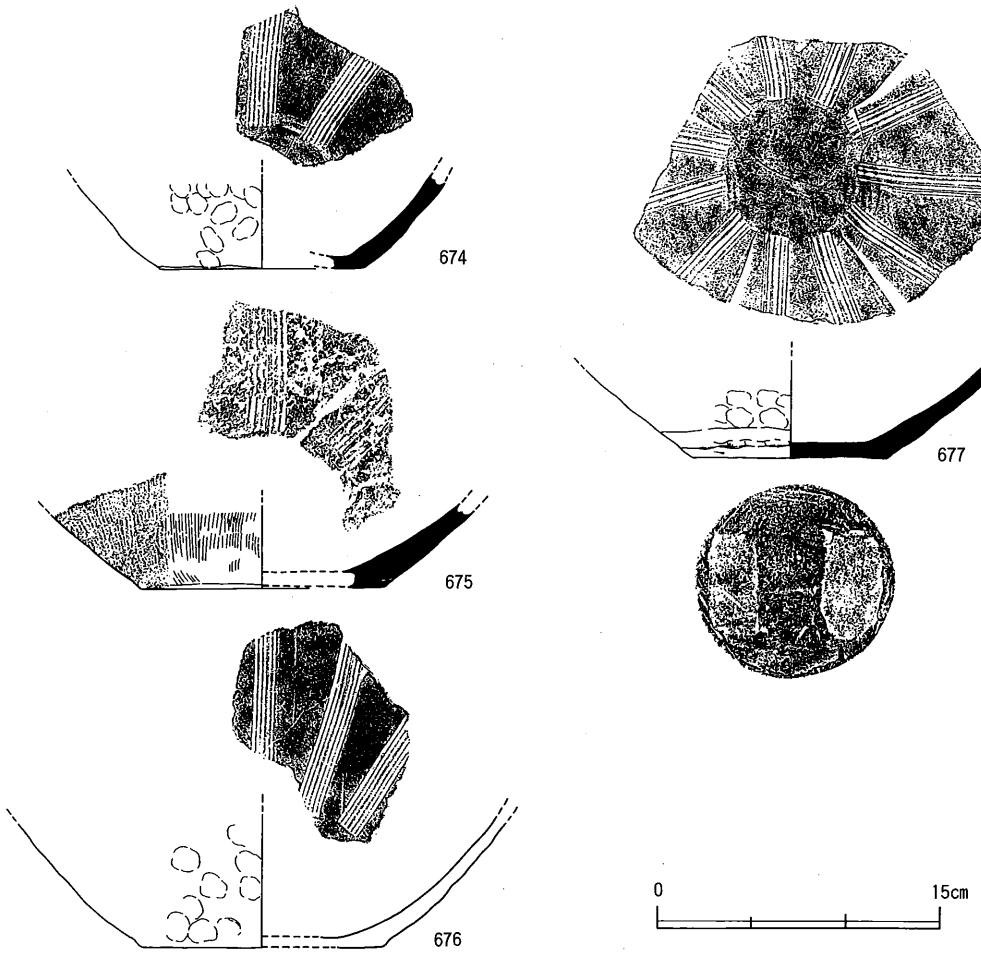
689は瓦質の足釜であるが，既に述べたように二次的な被熱によって還元したとみられる。

［第Ⅲ層出土遺物（697～758）］

須恵質杯，土師質杯・皿・捏鉢・足釜・羽釜・鍋・壺，須恵質擂鉢（土師質含む），東播系須恵器捏鉢，備前焼甕片，亀山焼甕などが出土している。この層位は，東半部では第Ⅱ層によって第Ⅰ層と分離できるが，西半部では第Ⅰ層の直下に堆積している。このため遺物取り上げ時に第Ⅰ層から混入したとみられる遺物も少量存在する。



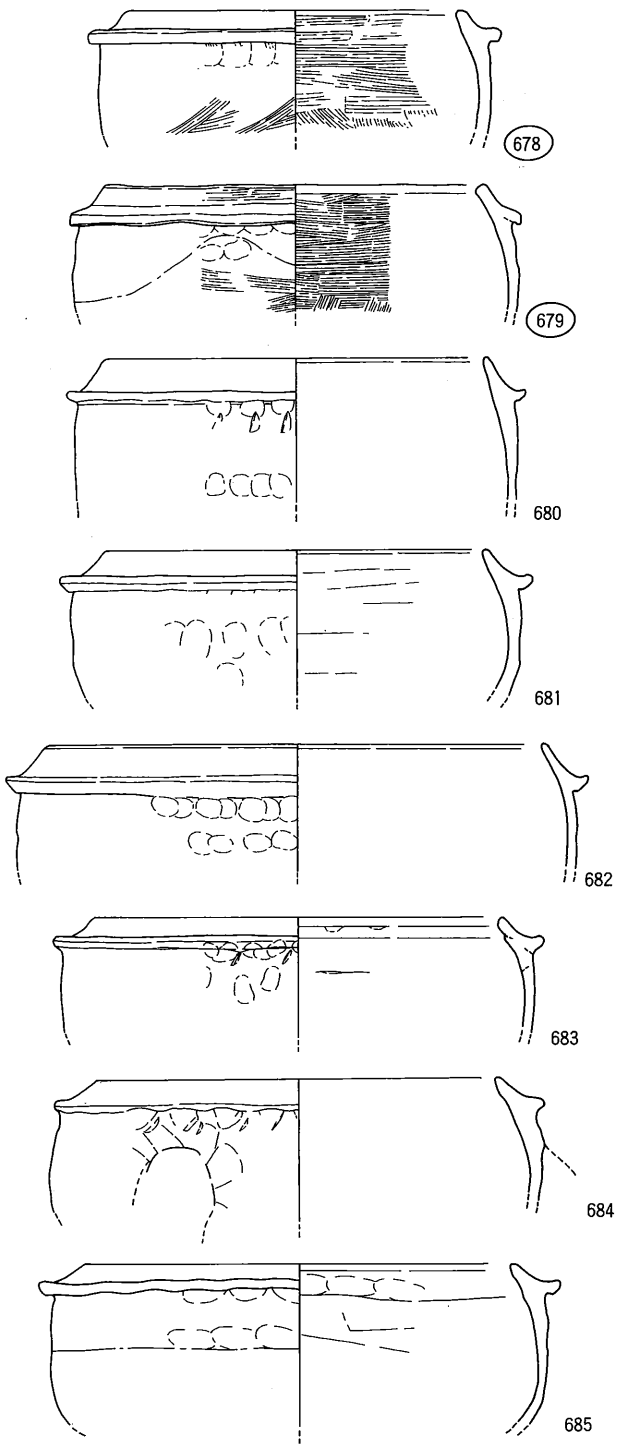
第134図　土器溜り１　第Ⅱ層出土遺物(1)



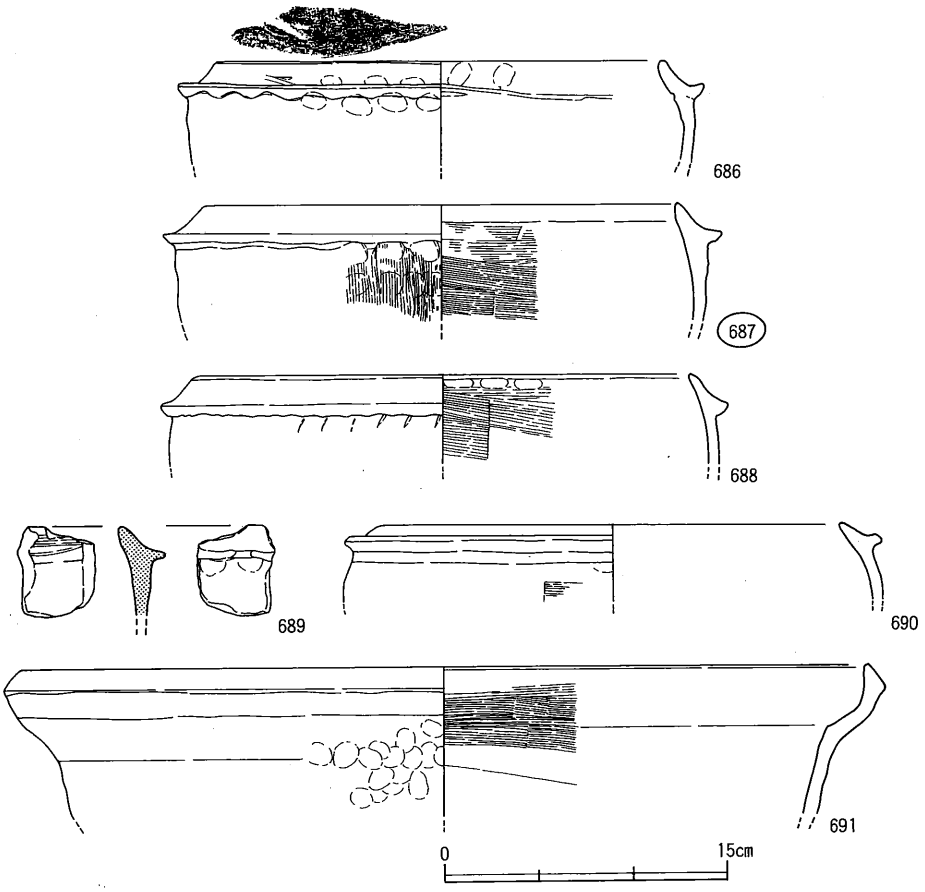
第135図　土器溜り１　第Ⅱ層出土遺物(2)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
663	杯	(口)14.0	3mm以下の砂粒	土師質	淡赤橙	調整不明	調整不明	口径1/8
664	皿	(口)10.0 (高)1.9 (底)6.2	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口-体)回転ナデ (底)回転ヘラ切り→板ナデ	(口-体-底)回転ナデ	口径1/4
665	擂鉢 AⅠ	(口)30.0	2mm以下の砂粒を少量	須恵質	灰	(口)回転ナデ	(口-体)横ハケ	口径1/12
666	擂鉢 AⅠ	(口)31.6	4mm以下の砂粒	瓦質	(内-外)黄灰 (断)灰白	(口)横ハケ・回転ナデ	(口-体)板ナデ	口径1/10
667	擂鉢 AⅡ	(口)29.4	4mm以下の砂粒	土師質	明褐	(口)回転ナデ	(口-体)板ナデ	細片
668	擂鉢 AⅡ	—	1mm以下の砂粒	土師質	明褐	(口)回転ナデ	(口-体)回転ナデ	細片
669	擂鉢 AⅢ	(口)29.0	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ハケ・回転ナデ	(口-体)回転ナデ	細片
670	擂鉢 AⅢ	(口)29.0	5mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(口)回転ナデ	調整不明	口径1/8
671	擂鉢 AⅢ	(口)28.8	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	調整不明	口径1/8
672	擂鉢 AⅢ	(口)30.0	3mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口)回転ナデ	(口-体)回転ナデ	口径1/8
673	擂鉢 AⅣ	(口)28.9	2mm以下の砂粒	須恵質	灰白	(口)回転ナデ	(口-体)回転ナデ	口径1/8
674	擂鉢 底部	(底)10.8	2mm以下の砂粒	須恵質	灰	(底)ナデ	(体)板ナデ 使用痕	底径1/6
675	擂鉢 底部	(底)13.0	3mm以下の砂粒	須恵質	(外)灰白 (内)灰	(体)縦ハケ→(底外縁)横ナデ	(体-底)板ナデ 使用痕	底径1/4
676	擂鉢 底部	(底)12.6	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(体)ナデ	(体)板ナデ	底径1/8
677	擂鉢 底部	(底)10.2	1mm以下の砂粒を少量	須恵質	灰白	(底外縁)削り状の横ナデ (底)下駄印	(体)板ナデ (底)ナデ	底径完存

第65表　土器溜り１　第Ⅱ層出土遺物観察表(1)



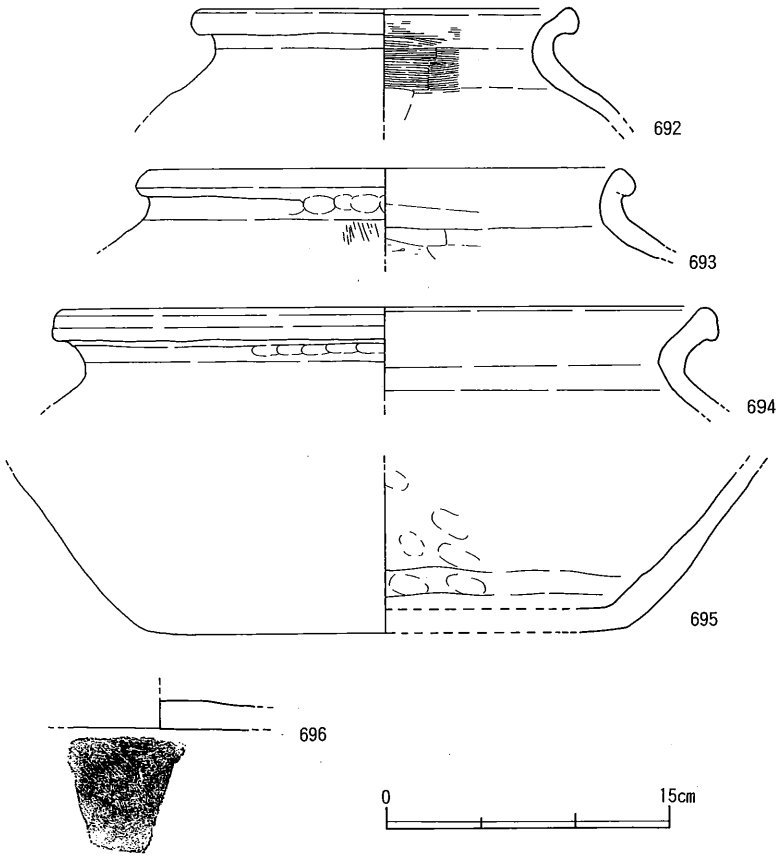
第136図　土器溜り１　第Ⅱ層出土遺物(3)



第137図　土器溜り1　第Ⅱ層出土遺物(4)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法 外面	手法 内面	残存度
678	足釜 AⅡ	(口)17.4	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口-胴)横ナデ (体)横ハケ	(体)横ハケ→(底)縦ハケ	口1/8
679	足釜 AⅡ	(口)19.6	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口-胴)横ハケ・横ナデ (体)横ハケ	(口-胴)横ハケ →(口)横ナデ・(底)縦ハケ	口1/6
680	足釜 BⅡ	(口)20.0	2mm以下の砂粒	土師質	浅黄橙	(胴)2段押圧→(口-胴)横ナデ	調整不明	口1/8
681	足釜 BⅡ	(口)20.2	3mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(胴)押圧→(口-胴)横ナデ	(口-体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/8
682	足釜 BⅡ	(口)26.4	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口-胴)横ナデ	(口-体)横ナデ	口1/12
683	足釜 BⅢ	(口)21.6	2mm以下の砂粒	土師質	灰白	(胴)2段押圧→(口-胴)横ナデ	(体)ナデ→(口)横ナデ	口1/8
684	足釜 BⅢ	(口)21.4	3mm以下の砂粒	土師質	浅黄橙	(胴)2段押圧→(口-胴)横ナデ	調整不明	口1/8
685	足釜 BⅢ	(口)22.7	4.5mm以下の砂粒	土師質	にぶい赤褐	(胴)押圧→(口-胴)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/5
686	足釜 BⅢ	(口)23.2	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口-胴)横ナデ (口)刻線「<」か「×」	(口-体)横ナデ	細片
687	足釜 BⅢ	(口)24.8	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(胴)押圧 →(口-胴)横ナデ	(口-体)横ハケ→(口)横ナデ	口1/6
688	足釜 BⅢ	(口)26.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口-胴)横ナデ	(口-体)横ハケ	口1/5
689	足釜 BⅢ	—	2mm以下の砂粒	瓦質	灰	(胴)押圧→(口-胴)横ナデ	(体)ナデ (口)横ハケ	細片
690	足釜 BⅣ	(口)24.0	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口-胴)横ナデ (体)板ナデ	(口-体)横ナデ	口1/8
691	鍋 BⅢ	(口)44.8	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ハケ	口1/12

第66表　土器溜り1　第Ⅱ層出土遺物観察表(2)



第138図　土器溜り１　第Ⅱ層出土遺物(5)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
692	甕 AⅠ	(口)19.4	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・胴)回転ナデ (体)板ナデ	(胴)横ハケ→(体)板ナデ・(口)回転ナデ	口径1/5
693	甕 AⅡ	(口)24.6	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(体)縦ハケ→(口・胴)回転ナデ	(口・胴)板ナデ→(体)削り状の板ナデ	口径1/12
694	甕 C	(口)34.0	1mm以下の砂粒	土師質	明褐	(口・胴)回転ナデ	(口・胴)回転ナデ	口径1/10
695	甕 底部	(底)25.4	5mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)ナデ	(体・底)ナデ	細片
696	備前焼 甕	—	1mm以下の砂粒を少量	陶質	にぶい褐	(底)板ナデ	(底)ナデ	細片

第67表　土器溜り１　第Ⅱ層出土遺物観察表(3)

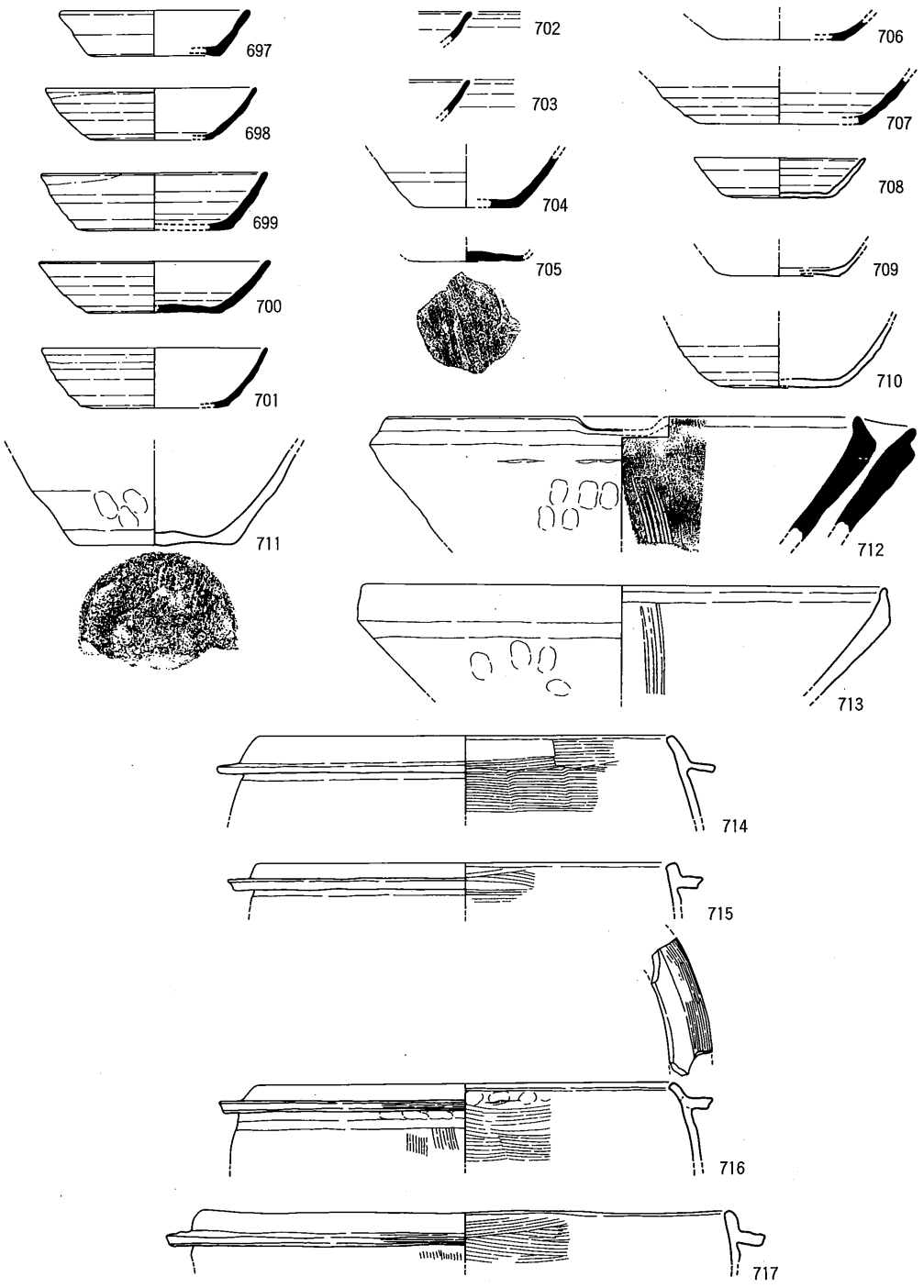
須恵質杯（697～707）には，707のように回転ヘラ切りによる平坦な底部と，そこから明瞭に屈曲して若干内弯気味に立ち上がる体部をもつものがあり，先行した時期（９～10世紀）の十瓶山窯産須恵器である可能性もあり，判断が難しい。しかしヘラ切り後に底部外面を板ナデ調整する手法は９～10世紀代の須恵器では一般的ではない。このため，西村遺跡付近で生産された中世須恵器杯であるともみられる。土師質杯（708～710）もほぼ同形態である。また698・699・701は底部切り離し手法が不明だが，640に比較的近い形態と焼成状況をもっており，備前焼である可能性を残す。このように帰属時期や産地に問題を残すが，第Ｉａ層でみられたような皿（236～243）が見当らない点に注意したい。

土師質捏鉢（711）は表面の摩滅が著しいが，底部外面に下駄印が観察される。

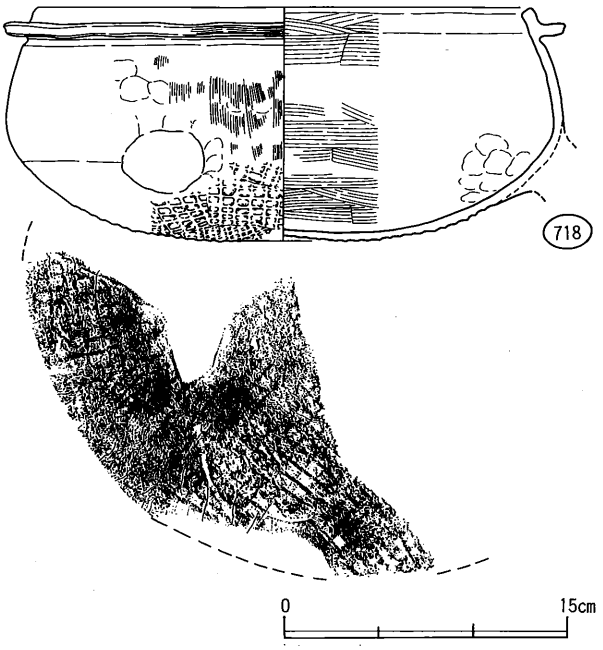
擂鉢（712・713）は，口縁端部を内方に折り込むようにしてツマミ出す特徴をもつ。擂鉢ＡⅣ類とＡⅢ類との中間的な形態を呈するが，一応ＡⅣ類の範疇で理解しておきたい。712の卸し目原体は６本／1.5cmであり，条数／原体幅が第Ｉａ層のＡⅠ・Ⅳ類に近い。713の卸し目は，摩滅が著しく本来の条数／原体幅が明らかでないため，検討できない。

土師質足釜ではＡⅠ類・ＢⅠ類が主体的であり，これに少量のＢⅢ類（735～737）とＢⅣ類（738・739）が加わるが，ＢⅢ・Ⅳ類は形態・技法ともに第Ｉａ層出土資料と同一であり，以下に述べるようなＡⅠ類・ＢⅠ類間で指摘できる技法の共有が認められない。このことは，ＢⅢ・Ⅳ類が堆積時もしくは取り上げ時の混入であることを示していよう。法量を口径でみてみると，18～22cm（Ⅰ）と24～26cm前後（Ⅱ）に分けられ，口径Ⅰは足釜ＢⅠ類に，また口径Ⅱは足釜ＡⅠに明瞭に群別される。

足釜ＡⅠ類（714～720）は，水平に伸びる鍔部が口縁部よりもやや長いかほぼ同じもので，口縁端部には内傾する平坦面が形成される。第Ｉａ層や他の遺構ではほとんど認められない型式であるが，この層位では足釜ＢⅠ類に匹敵する存在である。また作巧をやや詳しく観察すると，厚手で直線的な器壁をもつ一群（ＡⅠ－１類：714～718）と，薄手で内弯気味の器壁をもつ一群（ＡⅠ－２類：719・720）の２者が存在することが指摘できる。前者では，相対的に口縁部の器厚が厚く，体部と鍔部は共通してやや薄い。また716の口縁部内面にみえる接合痕は，外面の口縁部と鍔部の屈曲部分に連続しているようであり，口縁２技法（鍔部屈折法）が採用されていたのは確かであろう。これに対し後者では，口縁部と体部の器厚はほぼ同じであり，鍔部が相対的に厚い特徴をもつ。また口縁から体部への器壁の連続もスムーズである。資料数が少ないために断定はできないが，口縁１技法（鍔部接合法）による可能性がある。



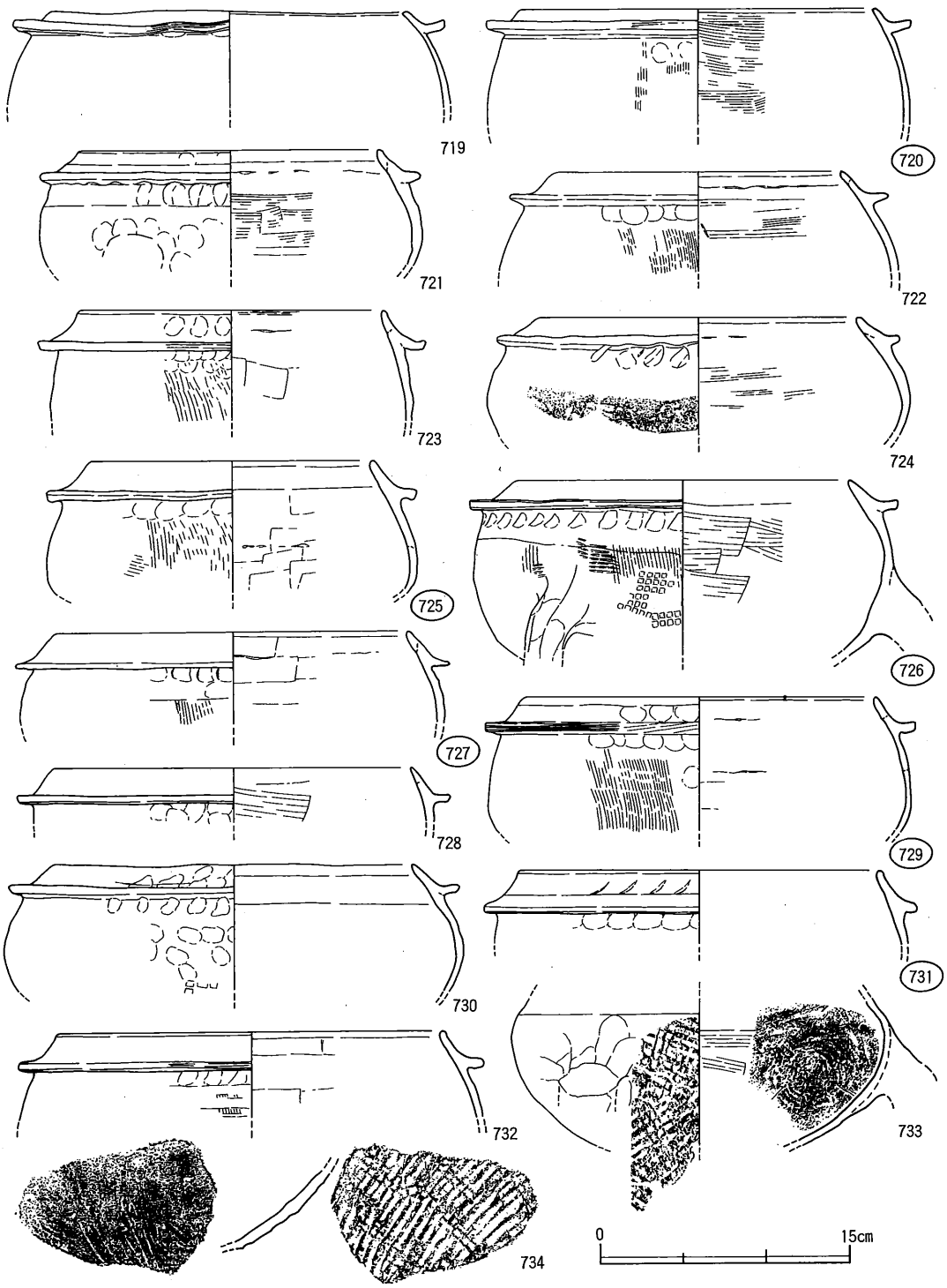
第139図　土器溜り１　第Ⅲ層出土遺物(1)



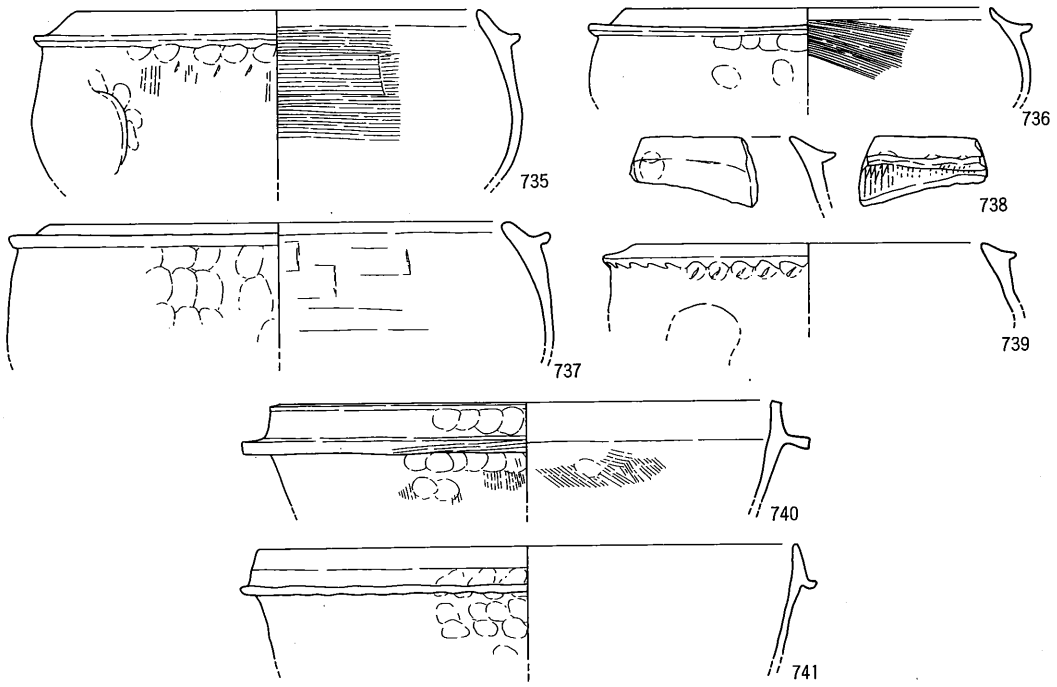
第140図　土器溜り１　第Ⅲ層出土遺物(2)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法 外面	手法 内面	残存度
697	杯	(口)10.8 (高)2.6 (底)7.6	1mm以下の砂粒を少量	須恵質	(外)灰 (内)灰白	(口・体)回転ナデ →(底)回転ヘラ切り	(口・体)回転ナデ→(底)ナデ	口径1/8
698	杯(備前焼 椀?)	(口)12.2 (高)3.0 (底)6.0	1mm以下の砂粒	須恵質	灰白	(口・体)回転ナデ→(底)ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/12
699	杯(備前焼 椀?)	(口)13.0 (高)3.3 (底)8.8	1mm以下の砂粒を少量	須恵質	灰白	(口・体)回転ナデ→(底)ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/12 底径1/10
700	杯	(口)12.9 (高)3.0 (底)7.6	0.5mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口・体)回転ナデ →(底)回転ヘラ切り	(口・体)回転ナデ→(底)ナデ	口径1/8 底径1/6
701	杯(備前焼 椀?)	(口)13.0 (高)3.4 (底)8.6	1mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口・体)回転ナデ→(底)ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/8
702	杯	—	1mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口)回転ナデ	(口)回転ナデ	細片
703	杯	—	1mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口)回転ナデ	(口)回転ナデ	細片
704	杯	(底)6.0	1mm以下の砂粒	須恵質	灰	(体)回転ナデ→(底)回転ヘラ切り	(口)回転ナデ	底径1/8
705	杯	(底)6.7	精良	須恵質	灰白	(底)回転ヘラ切り→ナデ	(底)ナデ	細片
706	杯	(底)7.4	2mm以下の砂粒	須恵質	灰白	(体)回転ナデ	(体)回転ナデ	底径1/8
707	杯	(底)9.4	1mm以下の砂粒	須恵質	灰	(体)回転ナデ	(体)回転ナデ	底径1/8
708	杯	(口)9.8 (高)2.3 (底)6.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄褐	(口・体)回転ナデ →(底)回転ヘラ切り	(口・体・底)回転ナデ	口径1/2 底径1/2
709	杯	(底)6.8	1.5mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)回転ナデ→(底)回転ヘラ切り	(体・底)回転ナデ	底径5/8
710	杯	(底)5.0	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(体)回転ナデ→(底)回転ヘラ切り	(体・底)回転ナデ	底径1/2
711	捏鉢	(底)9.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	調整不明　(底)下駄印	調整不明	底径1/2
712	擂鉢 AⅣ	(口)27.0	2mm以下の砂粒	須恵質	灰白	(口)回転ナデ	(体)板ナデ→(口)回転ナデ	口径1/8
713	擂鉢 AⅣ	(口)30.0	2mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(口)回転ナデ	(体)板ナデ→(口)回転ナデ	口径1/12
714	足釜 AⅠ	(口)24.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・鍔)横ナデ	(体)横ハケ→(口)横ハケ	口径1/6
715	足釜 AⅠ	(口)24.2	1mm以下の砂粒	土師質	浅黄橙	(口・鍔)横ハケ→横ナデ	(口・体)横ハケ	細片
716	足釜 AⅠ	(口)24.1	1mm以下の砂粒	土師質	浅黄橙	(体)縦ハケ→(鍔)横ナデ・横ハケ (口)横ナデ	(体)横ハケ→横ナデ	細片
717	足釜 AⅠ	(口)30.8	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ　(鍔)横ハケ (口)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	口径1/12
718	足釜 AⅠ	(口)26.0(高)12.3 (底)27.6	2mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(体)縦ハケ→(鍔)横ナデ・(口)横ナデ ・(底)格子叩き	(口・体・底)横ハケ →(口)横ナデ	口径1/8

第68表　土器溜り１　第Ⅲ層出土遺物観察表(1)



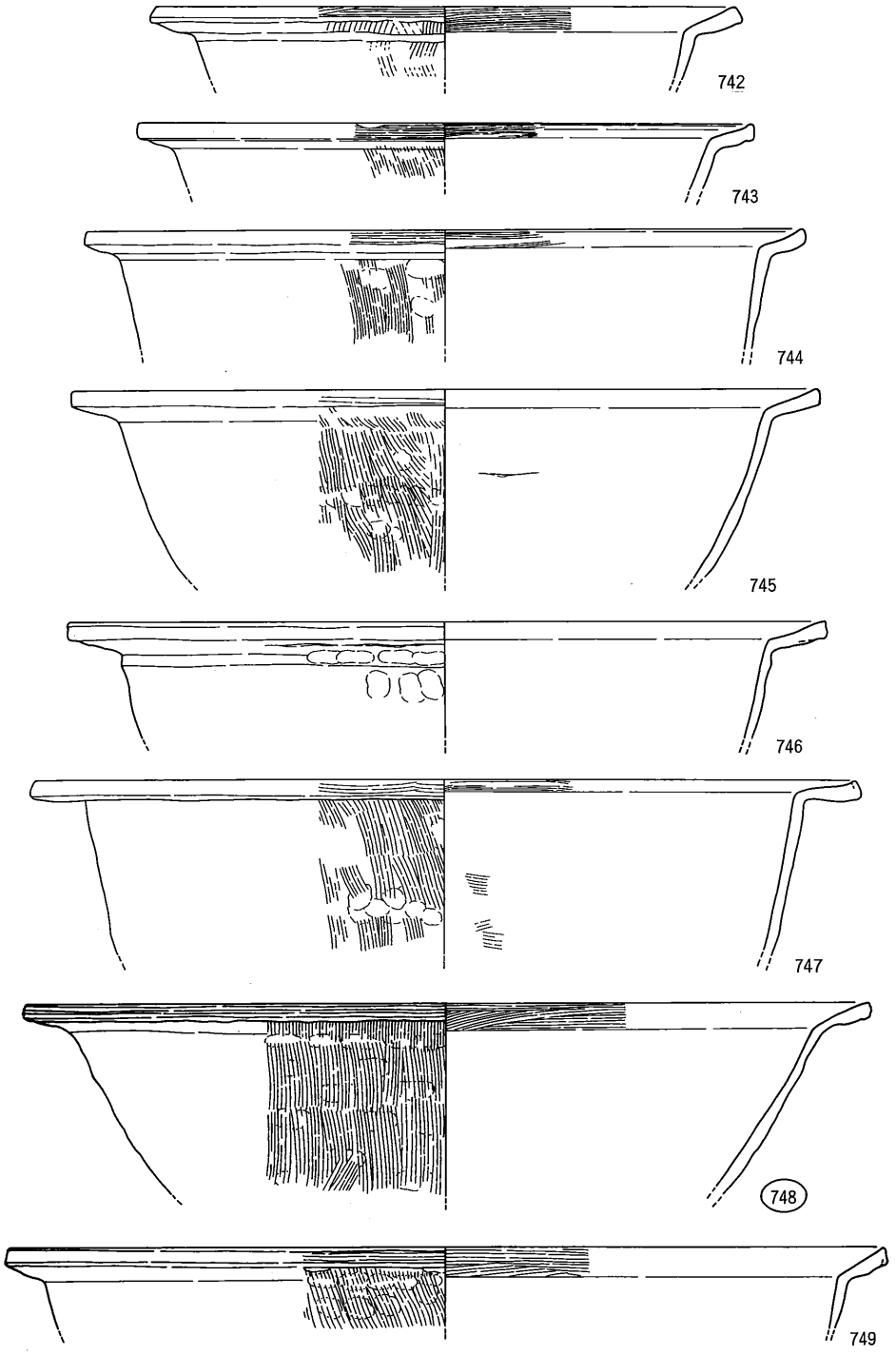
第141図　土器溜り１　第Ⅲ層出土遺物(3)



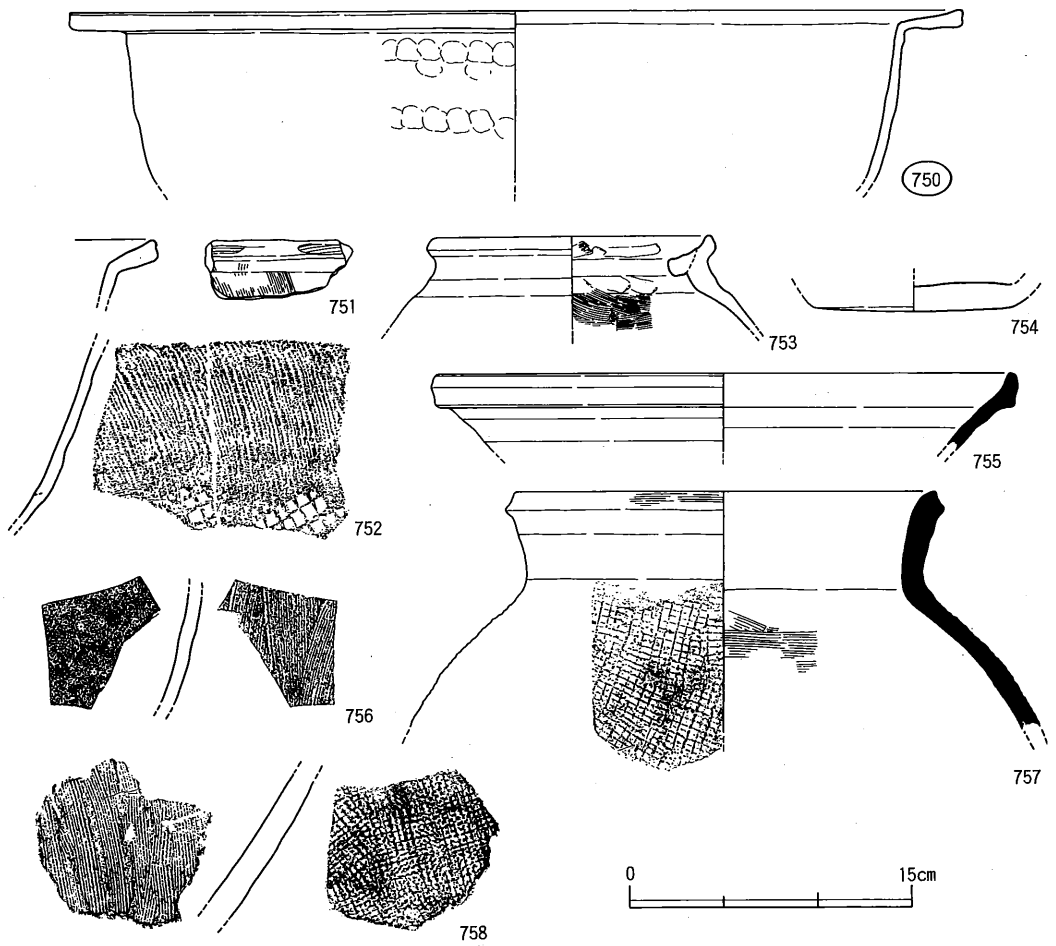
第142図　土器溜り１　第Ⅲ層出土遺物(4)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
719	足釜 AⅠ	(口)21.0	2mm以下の砂粒	土師質	浅黄橙	(胴)横ハケ 他は調整不明	調整不明	□径1/3
720	足釜 AⅠ	(口)21.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ (胴)横ハケ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	□径1/3
721	足釜 BⅠ	(口)17.6	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)横ハケ→(口)横ナデ	□径1/3
722	足釜 BⅠ	(口)17.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)横ハケ→(口)横ナデ	□径1/10
723	足釜 BⅠ	(口)18.0	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(体)縦ハケ→(胴)押圧→横ハケ→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	□径1/8
724	足釜 BⅠ	(口)18.8	2mm以下の砂粒	土師質	(外)黄灰 (内)にぶい黄橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ	□径1/4
725	足釜 BⅠ	(口)16.6	3mm以下の砂粒	土師質	(外)橙 (内)にぶい黄橙	(体)縦ハケ→(胴)押圧→横ハケ→(口・胴)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	細片
726	足釜 BⅠ	(口)19.6	2mm以下の砂粒	土師質	灰白	(体)縦ハケ→(胴)押圧→(口・胴)横ナデ (底)格子叩き目	(体)横ハケ→(口)横ナデ	□径3/4
727	足釜 BⅠ	(口)21.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	□径1/6
728	足釜 BⅠ	(口)21.2	3mm以下の砂粒	土師質	灰白	(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	□径1/6
729	足釜 BⅠ	(口)21.0	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(体)縦ハケ→(胴)押圧→横ハケ→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	□径1/10
730	足釜 BⅠ	(口)21.4	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧 他は調整不明	調整不明	□径1/8
731	足釜 BⅠ	(口)21.6	2mm以下の砂粒	土師質	(外)明黄褐 (内)にぶい黄橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	□径1/4
732	足釜 BⅠ	(口)22.8	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(胴)押圧→(胴)横ハケ→(口・胴・体)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	□径1/12
733	足釜 底部	—	3mm以下の砂粒を多量	土師質	橙	(体・底)格子叩き目	(体・底)当て具痕→横ハケ	1/4
734	足釜 底部	—	1mm以下の砂粒	土師質	橙	格子叩き目	平行条線の当て具痕	細片
735	足釜 BⅢ	(口)21.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(胴)２段押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	□径1/8
736	足釜 BⅢ	(口)19.0	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	□径1/8
737	足釜 BⅣ	(口)24.2	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	□径1/4
738	足釜 BⅣ	—	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(胴・体)縦ハケ→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
739	足釜 BⅣ	(口)18.3	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	□径1/4
740	羽釜	(口)26.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(体)縦ハケ→(胴)押圧→横ハケ→(口)横ナデ・横ハケ	(体)斜めハケ (口)横ナデ	□径1/4
741	羽釜	(口)28.4	4mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	調整不明	□径1/4

第69表　土器溜り１　第Ⅲ層出土遺物観察表(2)



第143図　土器溜り１　第Ⅲ層出土遺物(5)



第144図　土器溜り１　第Ⅲ層出土遺物(6)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法 外面	手法 内面	残存度
742	鍋 A I	(口)32.0	2mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(口・体)縦ハケ→(口)横ハケ	(口)横ハケ (体)板ナデ	口径1/12
743	鍋 A I	(口)34.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(口・体)縦ハケ→(口)横ハケ	(口)横ハケ (体)板ナデ	口径1/6
744	鍋 A I	(口)40.0	1mm以下の砂粒	土師質	黄褐	(体)縦ハケ→(口)横ハケ	(口)横ハケ (体)板ナデ	細片
745	鍋 A I	(口)41.2	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・体)縦ハケ→(口)横ハケ	調整不明	口径1/4
746	鍋 A I	(口)42.0	2mm以下の砂粒	土師質	褐	(口・体)縦ハケ→(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/5
747	鍋 A I	(口)45.4	2mm以下の砂粒、7mm程の小石	土師質	橙	(口・体)縦ハケ→(口)横ハケ	(口・体)横ハケ	口径1/4
748	鍋 A I	(口)47.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(口・体)縦ハケ→(口)横ハケ	(口)横ハケ (体)板ナデ	口径1/4
749	鍋 A I	(口)48.6	1mm以下の砂粒	土師質	(外)灰黄褐 (内)にぶい橙	(口・体)縦ハケ→(口)横ハケ	(口)横ハケ (体)板ナデ	細片
750	鍋 A I	(口)47.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)板ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/4
751	鍋 A I	—	1mm以下の砂粒	土師質	黒褐・明黄褐	(口・体)縦ハケ→(口)横ハケ	(口)横ハケ (体)板ナデ	細片
752	鍋 体部	—	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(底)格子叩き目	(体・底)板ナデ	細片
753	壺	(口)14.5	2mm以下の砂粒を少量	土師質	褐灰	(体)横ハケ→(頸)板ナデ→(破付)貼付→横ナデ	(口・頸)横ナデ	口径3/8
754	壺 底部	(底)10.3	3mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	ナデ	ナデ→ハケ目	底径完存
755	東播系須恵器 揺鉢	(口)30.0	微細粒	須恵質	灰白	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/12
756	備前焼 甕	—	2mm以下の砂粒、5mm程の小石	陶質	(外)灰褐 (内)黄灰	板ナデ	板ナデ	細片
757	亀山焼 甕	(口)22.1	2mm以下の砂粒を少量	須恵質	青灰	(体)格子叩き目→(口・頸)回転ナデ (口)横ハケ	(体)横ハケ (口・頸)調整不明	口径1/2
758	亀山焼 甕	—	2mm以下の砂粒	土師質	褐	格子叩き目	縦ハケ	細片

第70表　土器溜り１　第Ⅲ層出土遺物観察表(3)

なおＡＩ類では，ハケ目調整の多用が指摘できる。すなわち体部外面には縦ハケ，内面には横ハケがほぼ例外なく行われるが，鍔部端面にまでも横ハケ調整が行われ，さらには716のように鍔上面にまでハケ目がみられるものもある。ハケ目の原体は，５～６本／cmのやや粗いものであり，それをかなり強く器壁に押し当てて引いている。このため，器面の凹凸を掻き取り平滑化にする効果は，第Ｉａ層で中心的なＢⅢ・Ⅳ類よりも優れていたといえよう。さらに横ハケ調整を詳細にみると，716の体部内面や鍔部上面，714・718の体部内面のように，原体を１周させるうちに何回か器壁から離す作業が主体であり，ロクロ回転を利用したとみられるものはない。鍔部端面についても同様であり，ロクロ上での製作工程は想定できない。また格子叩き目は体部には及ばないが，器壁はかなり強く叩かれて叩き目の凹凸が明瞭である。

ＡＩ類の胎土は直径２㎜以下の砂粒を少量含む，ややきめ細かなものであり，黄褐色ないし黄白色の色調を呈する。これは，他の器種や型式に普遍的な胎土とは異質な特徴をもっている。

足釜ＢＩ類（721～732）は，足釜ＡＩ類とともに第Ⅲ層における中心的な器種である。長く立ち上がる口縁部と，水平方向に明瞭に突出する鍔部よりなる。口縁端部は面をもたずに丸く収められる。鍔部端面に横ハケ調整が施して平坦面を形成するものが，かなりの頻度で認められる。また体部外面や内面にもハケ目調整が顕著に認められる。このようなハケ目の多用は，足釜ＡＩ類と共通しているといえよう。ただし，鍔部上面にはハケ目はみられず，横ナデによって鍔部上下面の凹凸を均している。叩き目は724・726のように，底部のみならず体部下半にまで及んでおり，成形段階における叩き作業の効果の大きさを窺わせる。なお，721や724の鍔部直下には明瞭な押圧痕が認められるが，接合痕や断面観察では鍔部を接合する口縁１技法によっている可能性が高い。

ＢＩ類の胎土にはＡＩ類に近いものも少数認められるが，大半は楠井産土器に普遍的な砂粒をかなり含む赤褐色系の色調を呈している。

733・734は，胎土の特徴から足釜ＢＩ類の底部とみられるものである。ともに強く押された明瞭な叩き目を外面にもち，内面には当て具痕を残す。733の当て具痕は同心円状のものであるが，734では平行叩き状の条線をもつ，特異なものである。また734外面の叩き目も一見，平行叩きと格子叩きが混在するかのような状況を示す。これは２種類の叩き板を用いたとも考えられるが，格子状の彫り込みがある部分と一方の条線が深い平行状の部分とがある叩き板を用いた可能性も否定できない。

740は脚部の付かない羽釜である。楠井産土器には稀な形態であるが，口縁端部と鍔端部にハケ目調整を施すことや胎土の特徴から，楠井産と判断できる。741も同様な羽釜であるが，第Ⅰａ層出土遺物（485）や土器溜り２出土遺物（882）に近く，本来は第Ⅲ層に伴わない新しい時期の所産であるとみられる。

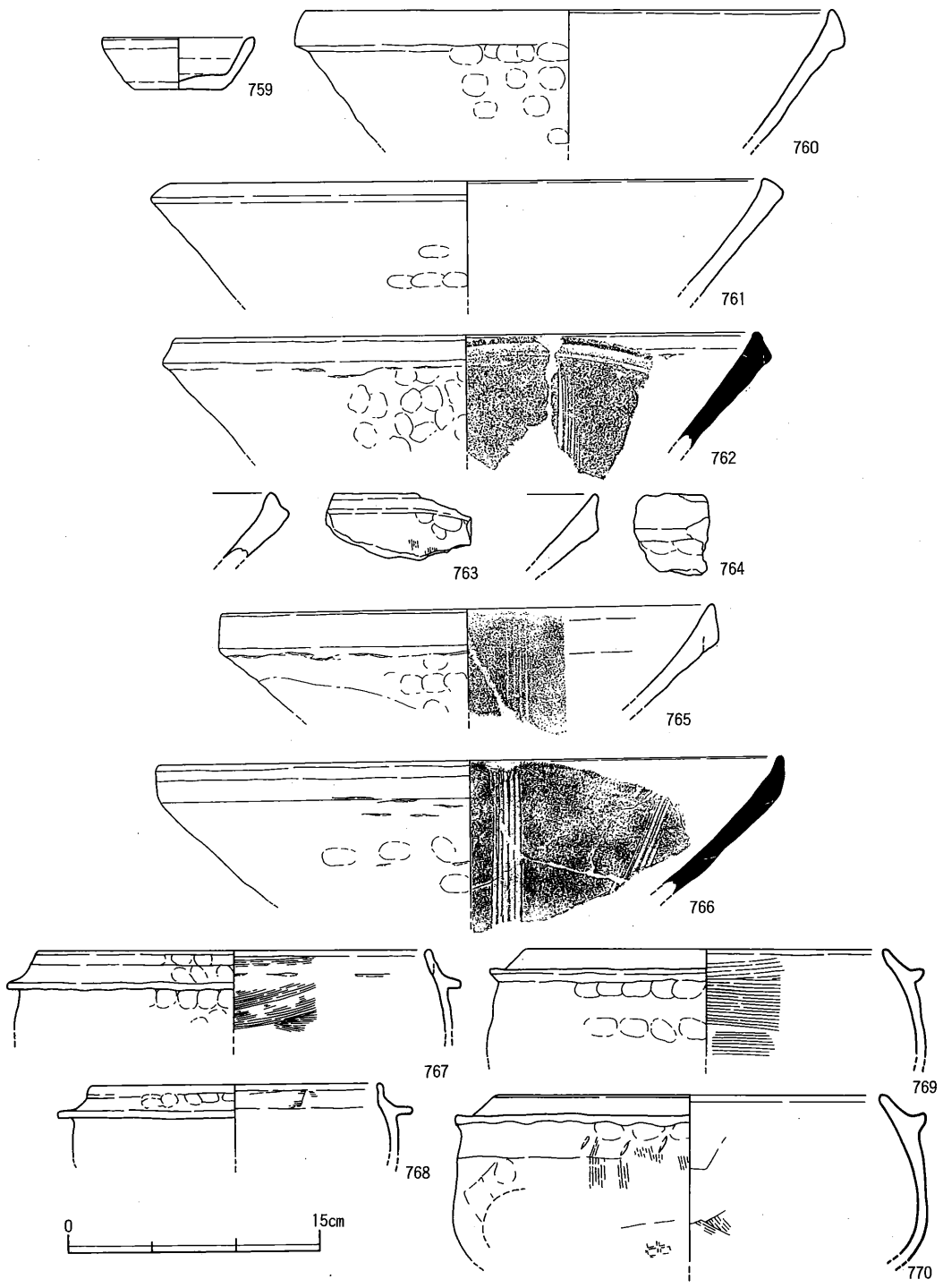
鍋（742～752）は，全てＡⅠ類に帰属させ得るものである。体部から強く明瞭に屈曲する口縁部をもち，口縁端部には器壁に対して直交して垂直方向に作られる端面がある。端面調整は，摩滅の著しいものを除いて全て横ハケ調整であり，足釜ＡⅠ・ＢⅠ類の鍔端部と同様な作巧を呈する。また口縁部内面には横ハケ調整，体部と頸部の外面には縦ハケ調整が施されており，足釜同様にハケ目調整の多用が指摘できる。745・748・749・751をみると，頸部外面の縦ハケ調整は体部ハケ目と一連のものであるが，明確に連続している事例はない。したがって頸部のハケ目調整は，一応口頸部が成形後に施されたことになる。口縁端部の横ハケ調整は，747のように連続的に周回することなく，原体を何回か器面から離して断続的に施されている。しかも詳細に観察すると，ハケ目１回分の軌跡は円弧を描くように両端が上がり，中央が下がっている。このことは，ロクロ回転に依らない製作者の手の動きと密接な関係があろう。また751では口縁端部に横ハケ調整を施した後に，横ナデ調整を行っている。

752は鍋の底体部片である。体部には粗く顕著な縦ハケ調整がみられ，それを切るかたちで底部に格子叩き目が施されている。底部から体部への器壁のカーブは緩やかに内弯しており，叩き成形による屈曲はみられない。

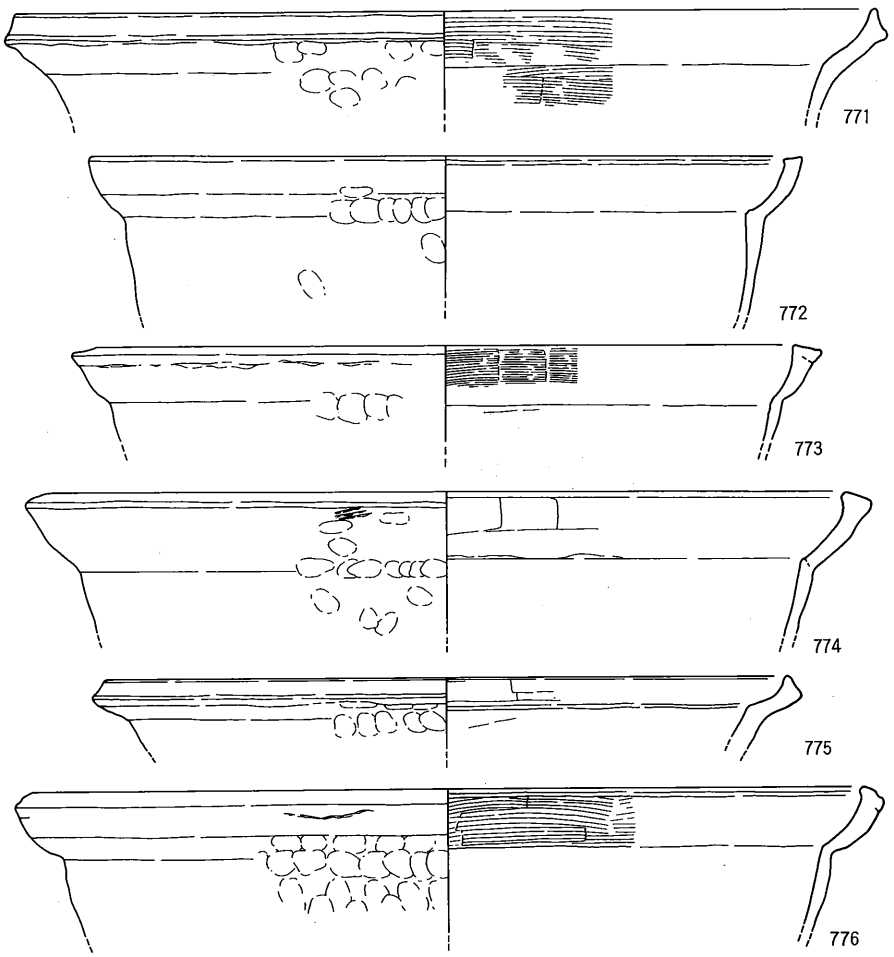
753は，頸部内面に蓋受けと考えられる突帯をもつ壺である。口頸部は短く外反し，端部に外傾する平坦面をもつ。調整の先後関係から，全体の製作が完了した段階で突帯を貼付していることがわかる。

755～758は搬入品である。東播系須恵器涅鉢（755）は，口縁端部の挽き上げが顕著なために，口縁部内面が弱く窪み，さらに端面下端が垂下する傾向を指摘できる。山仲分類でD_1類に該当するものであろう。備前焼甕（756）は，体部の細片のために時期を限定する特徴を読み取りにくいが，内外面ともに強い板ナデ調整を行うこと，また焼成が酸化気味であることから，間壁編年第Ⅲ期を上限とすることが考えられる。亀山焼甕（757・758）には須恵質焼成のもの（757）があり，直立気味の口頸部の特徴や細かくシャープな格子叩き目から，岡田編年の第２段階にあたるものと考える。

［第Ⅰ～Ⅲ層出土遺物（759～781）］



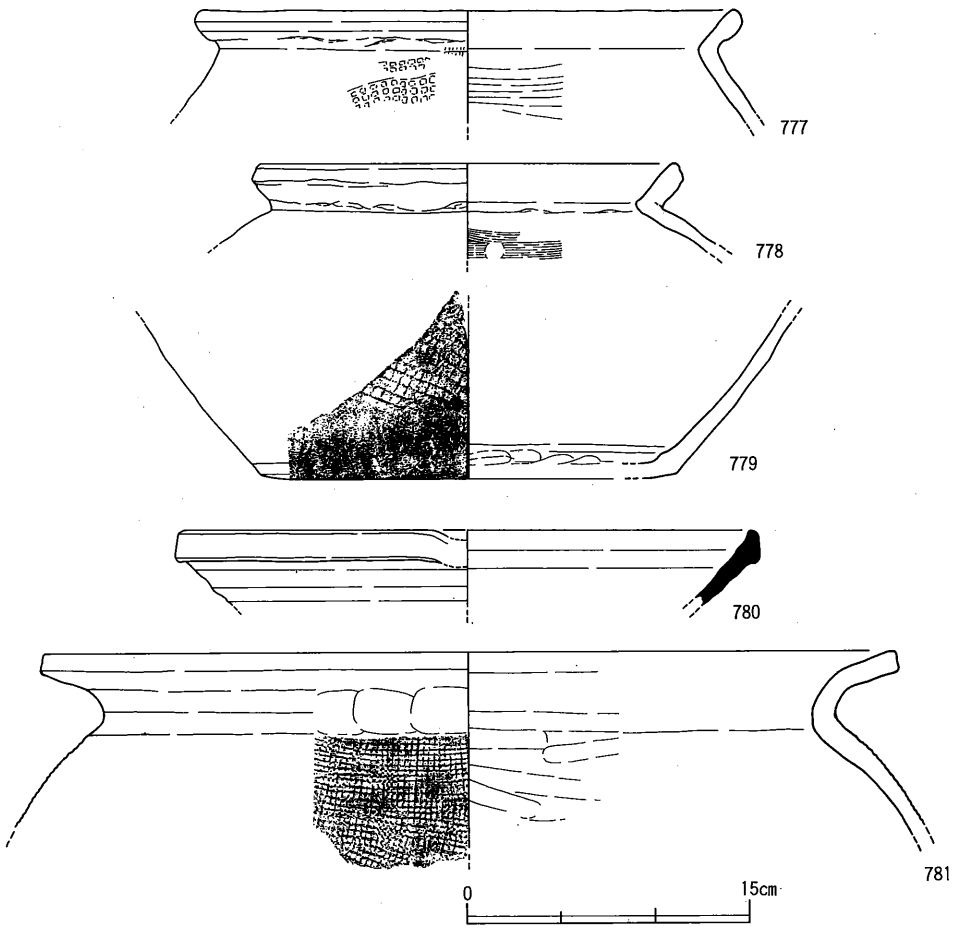
第145図　土器溜り１　第Ⅰ～Ⅲ層出土遺物(1)



第146図　土器溜り1　第Ⅰ～Ⅲ層出土遺物(2)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
759	杯	(口)8.8 (高)3.1 (底)5.2	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(口・体)横ナデ (底)板ナデ	(口・体・底)横ナデ	□1/3 底1/2
760	捏鉢	(口)31.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
761	擂鉢 AⅠ	(口)35.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	調整不明	調整不明	□1/7
762	擂鉢 AⅠ	(口)34.4	3mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	□1/8
763	擂鉢 AⅠ	—	3mm以下の砂粒	須恵質	灰	(体)縦ハケ→(口)回転ナデ	(口)板ナデ→(口・体)ナデ	細片
764	擂鉢 AⅢ	—	2.5mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
765	擂鉢 AⅢ	(口)29.0	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	□1/6
766	擂鉢 AⅢ	(口)37.0	2mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口)木目状圧痕→回転ナデ	(口・体)板ナデ　使用痕	□1/9
767	足釜 BⅡ	(口)23.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	□1/6
768	足釜 BⅡ	(口)17.0	5mm以下の砂粒	土師質	にぶい赤褐	(口・胴)横ナデ	(口)板ナデ	□1/8
769	足釜 BⅢ	(口)21.0	2mm以下の砂粒	土師質	明褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	□1/4
770	足釜 BⅢ	(口)22.6	2.5mm以下の砂粒	土師質	(外)浅黄橙 (内)黄橙	(体)縦ハケ→(胴)2段押圧→(口・胴)横ナデ (底)格子目状	(口・体)板ナデ→(底)横ハケ	□1/5
771	鍋 AⅡ	(口)45.4	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)横ハケ	□1/10
772	鍋 BⅠ	(口)36.0	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
773	鍋 BⅡ	(口)37.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口)横ハケ (体)板ナデ	□1/12
774	鍋 BⅡ	(口)42.0	2mm以下の砂粒	土師質	(外)にぶい橙 (内)橙	(口)木目状圧痕→横ナデ	(口)板ナデ (体)ナデ	□1/10
775	鍋 BⅢ	(口)36.0	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
776	鍋 BⅣ	(口)43.8	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(口)横ナデ	(口)横ハケ (体)ナデ	□1/8

第71表　土器溜り1　第Ⅰ～Ⅲ層出土遺物観察表(4)



第147図　土器溜り1　第Ⅰ～Ⅲ層出土遺物(3)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
777	甕 C	(口)28.0	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(体)格子叩き→(口・頸)横ナデ	(体)横ハケ→(口・頸)横ナデ	口1/8
778	甕 C	(口)22.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・頸)横ナデ	(体)横ハケ→(口・頸)横ナデ	口1/6
779	甕 底部	(底)22.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目→(底縁)横ナデ	(体・底)横ナデ	底1/10
780	東播系須恵器 擂鉢	(口)30.0	1mm以下の細砂粒	須恵質	灰白	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/12
781	亀山焼 甕	(口)45.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目→(頸)板ナデ→(口)回転ナデ	(頸・体)板ナデ→(口)回転ナデ	細片

第72表　土器溜り1　第Ⅰ～Ⅲ層出土遺物観察表(5)

土層観察畦の除去や深掘りトレンチの掘削時に出土したもので，細かな帰属層位は不明な土器を図示した。杯・捏鉢・擂鉢・足釜・鍋・甕・東播系須恵器捏鉢・亀山焼甕などがある。

土師質杯（759）は厚手のものであり，器表に回転ナデ調整がみられず，また底部にはロクロからの切り離し痕がみられないことから，ロクロ上での製作が想定できない。胎土は砂粒を多く含む，楠井産土器に通有な特徴をもっており，楠井産杯と考えられる稀有な事例である。

土師質捏鉢（760）は，断面三角形状に肥厚する口縁部をもち，一見して東播系須恵器捏鉢に近似した形態をもつことがわかる。ただし胎土の特徴は楠井産に普遍的なものであり，体部に回転ナデがみられない，鈍重な作巧である。

東播系須恵器捏鉢（780）は上方への挽き出しがまだ顕著ではないものであり，山仲分類Ｃ３類にあたるとみられる。また亀山焼甕は，岡田編年第３段階に相当しよう。

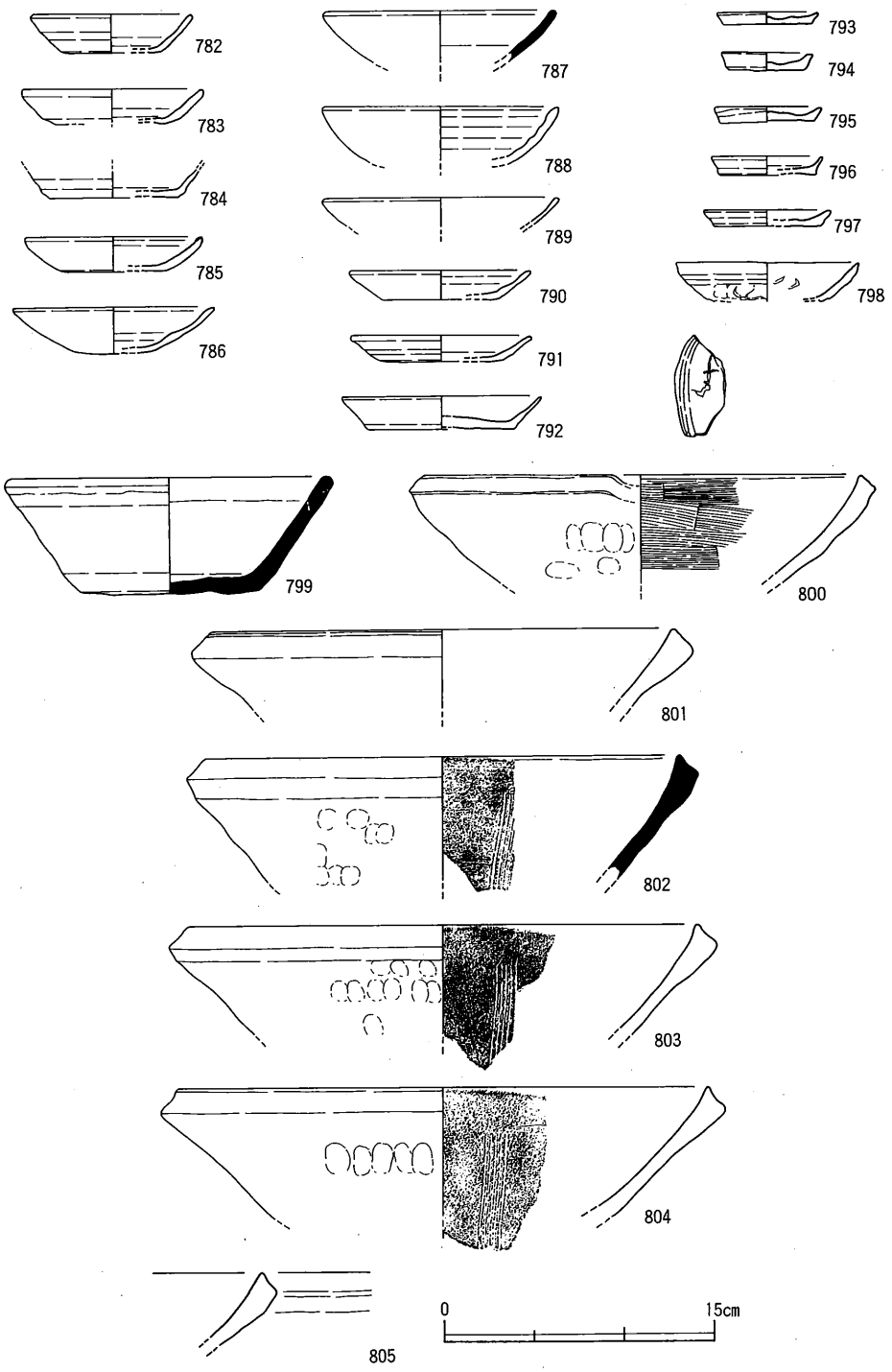
(5) **土器溜り２出土遺物**（第148～178図，第73～88表）

杯・皿・小皿・捏鉢・擂鉢・足釜・羽釜・鍋・焙烙・甕が出土している。搬入品とみられる供膳器種以外では足釜・鍋が圧倒的に多く，次いで壺・甕などの貯蔵器種と擂鉢が一定量みられる，という状況である。

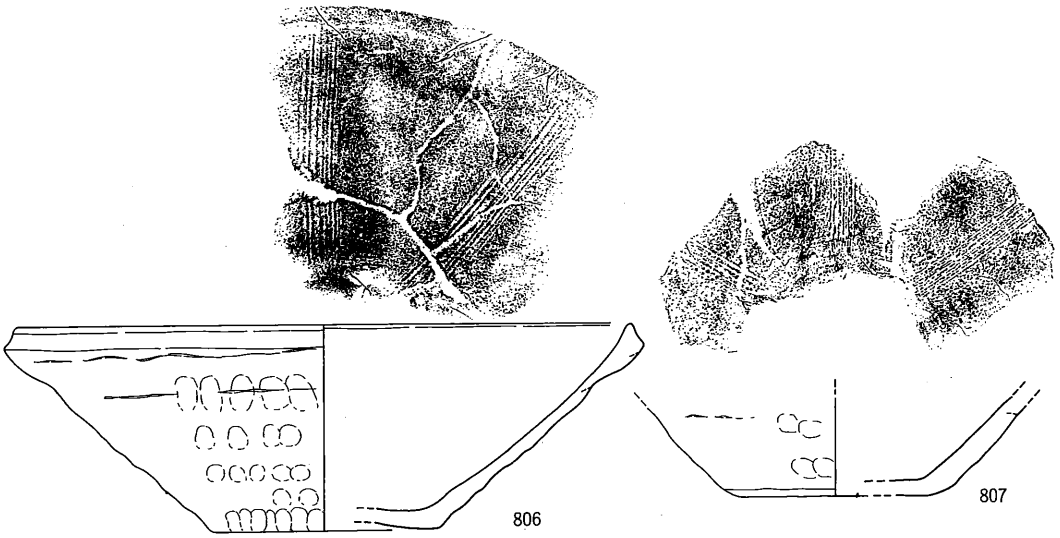
杯（782～789）は，やや底の浅い皿形のものである。直線的な体部と平坦な底部をもつ一群（782～785）と，内弯する体部と丸い底部をもつ一群（786～789）がある。皿（790～792）は，直線的で比較的長く立ち上がる体部をもつ。土器溜り１の皿（240～243）と同系統とみられるが，口径がやや大きく，また体部があまり開かない相違点が指摘できる。小皿（793～797）は，円盤状の底部から極めて短く伸びる体部（口縁部）をもち，底部には回転ヘラ切り痕が認められる。恐らくロクロ上の円盤から惰力を利用して口縁部を成形しているのであろう。

以上の杯・皿類はロクロ上での製作が考えられるが，798は底部外面に押圧した痕跡が顕著に残り，口縁部のみを横ナデ調整している。また，体部には縦方向に接合痕がみられる。形態・技法ともに，畿内の土師器皿に近いものである。

須恵質捏鉢（799）は，直線的な体部をもち，端部はやや丸味を帯びる。十瓶山窯産の中世須恵器であろう。また土師質捏鉢（800）は，土器溜り１の事例（253）に近い口縁部形態・技法をもつ。



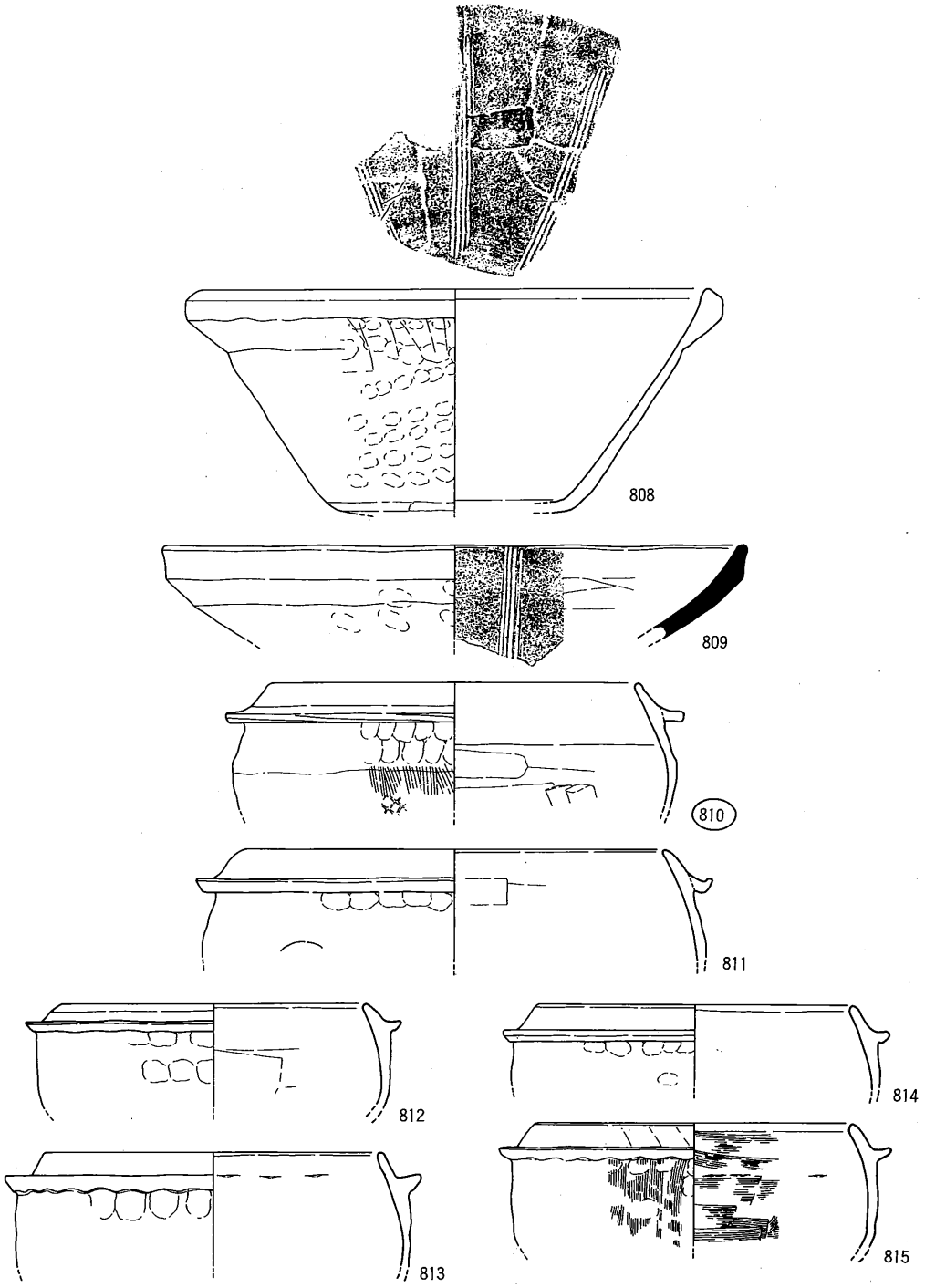
第148図　土器溜り２出土遺物(1)



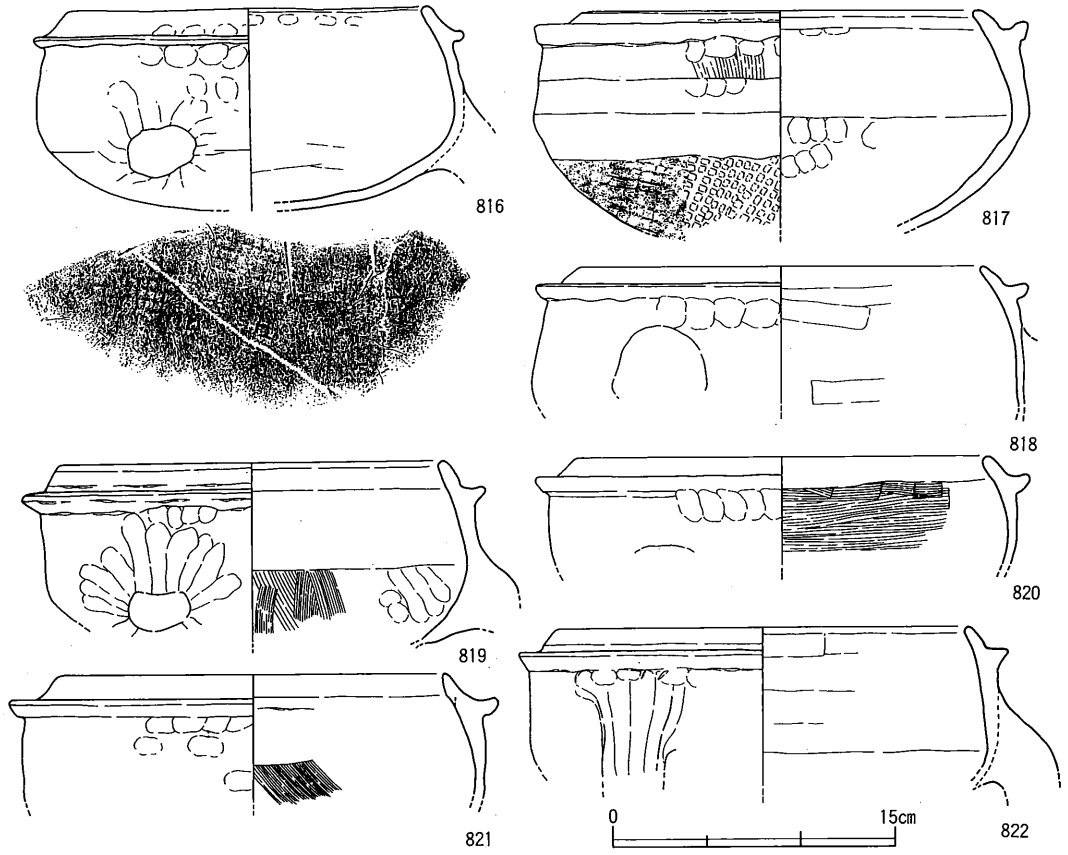
第149図　土器溜り２出土遺物(2)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法 外面	手法 内面	残存度
782	杯	(口)8.4 (高)2.1 (底)5.6	1mm以下の砂粒を少量	土師質	橙	(口・体)回転ナデ (底)ナデ	(口・体・底)回転ナデ	底径1/4
783	杯	(口)10.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/6
784	杯	(口)7.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)回転ナデ →(底)回転ヘラ切り	(体・底)回転ナデ	底径1/4
785	杯	(口)9.7 (高)1.9 (底)5.8	2.5mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/4
786	杯	(口)11.0 (高)2.6 (底)3.4	1mm以下の砂粒	土師質	灰黄	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/6
787	杯	(口)12.2	1mm以下の砂粒	須恵質	灰白	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/8
788	杯	(口)13.0	1mm以下の砂粒	土師質	灰白	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/6
789	杯	(口)12.7	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/12
790	皿	(口)10.0 (高)1.6 (底)6.4	5mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/8
791	皿	(口)9.8 (高)1.5 (底)6.8	1mm以下の砂粒を少量	土師質	橙	(口・体)回転ナデ (底)ナデ	(口・体・底)回転ナデ	口径1/4 底径1/4
792	皿	(口)11.0 (高)1.8 (底)8.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・体)回転ナデ →(底)回転ヘラ切り	(口・体・底)回転ナデ	底径1/4
793	小皿	(口)5.3 (高)0.7 (底)4.8	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ →(底)回転ヘラ切り	(口・底)回転ナデ	底径1/4
794	小皿	(口)5.0 (高)1.0 (底)4.4	2mm以下の砂粒	土師質	黄橙	(口)回転ナデ→ (底)回転ヘラ切り→ナデ	(口・底)回転ナデ	1/2
795	小皿	(口)5.7 (高)0.9 (底)5.1	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ →(底)回転ヘラ切り	(口・底)回転ナデ →(底)ナデ	底径3/4
796	小皿	(口)6.1 (高)1.1 (底)5.2	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ →(底)回転ヘラ切り	(口・底)回転ナデ	底径1/4
797	小皿	(口)7.0 (高)0.9 (底)5.8	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ→ (底)回転ヘラ切り→ナデ	(口・底)回転ナデ	口径1/8
798	皿	(口)10.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)ナデ	口径1/6
799	捏鉢	(口)17.2	2mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口・体)回転ナデ	(口・体・底)回転ナデ	口径1/4 底径1/2
800	捏鉢	(口)24.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)横ハケ	細片
801	擂鉢 AⅠ	(口)25.3	2mm以下の砂粒	土師質	(外)黄灰 (内)橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/8
802	擂鉢 AⅡ	(口)26.0	1mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/12
803	擂鉢 AⅡ	(口)28.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄褐	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ?	口径1/8
804	擂鉢 AⅡ	(口)29.0	3mm以下の砂粒	土師質	(外)にぶい黄褐 (内)明黄褐	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/3
805	擂鉢 AⅡ	—	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
806	擂鉢 AⅡ	(口)32.0 (高)10.9 (底)12.0	2mm以下の砂粒	土師質	(外)褐灰 (内)橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ (底)横ナデ 使用痕	口径1/2
807	擂鉢 底部	(底)12.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(底外縁)削り状のナデ	(底)回転ナデ	底径1/2

第73表　土器溜り２出土遺物観察表(1)



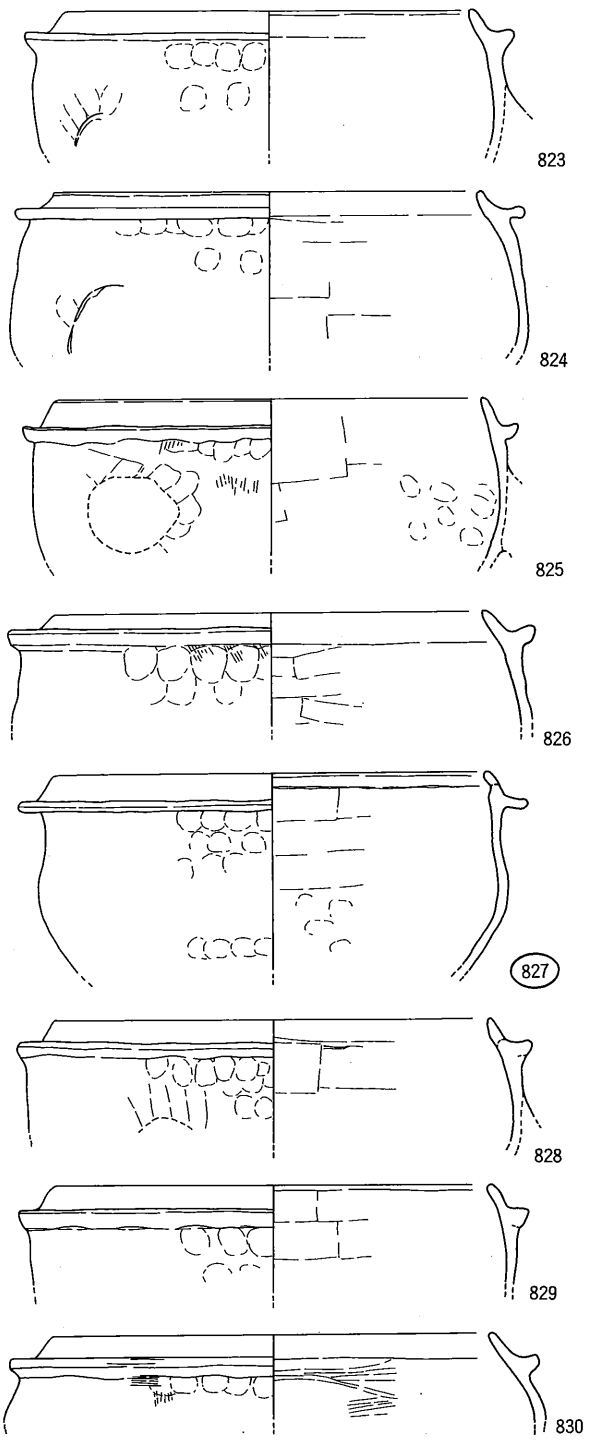
第150図　土器溜り２出土遺物(3)



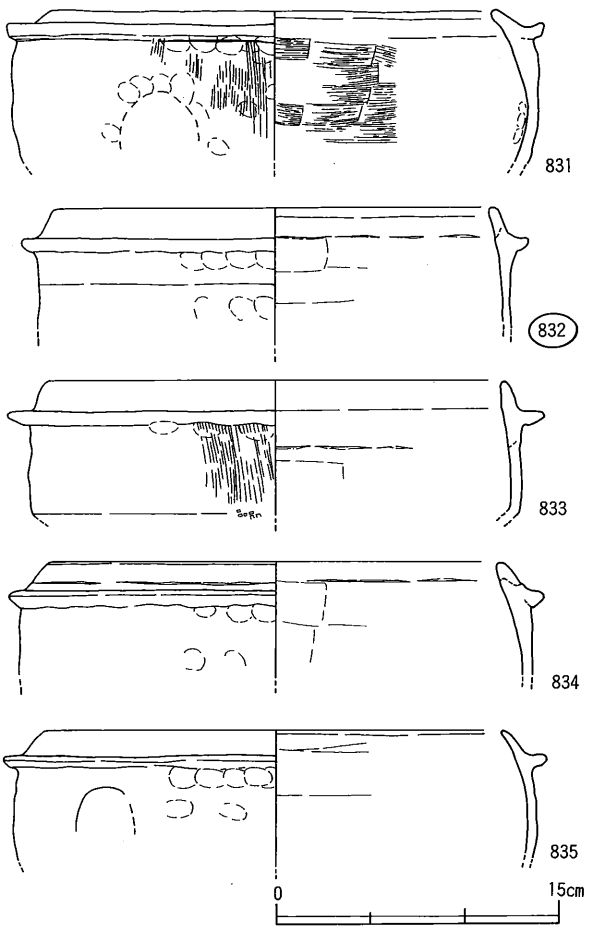
第151図　土器溜り２出土遺物(4)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
808	擂鉢 AII	(口)29.0(高)13.0 (底)13.3	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ (底)削り状の横ナデ	(口・体)板ナデ (底)横ナデ	口1/5
809	擂鉢 BI	(口)33.3	2mm以下の砂粒	須恵質	オリーブ灰	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/6
810	足釜 BI	(口)20.9	2mm以下の砂粒	土師質	(外)明黄褐 (内)橙	(体)縦ハケ→(肩)横ハケ→(口・肩)横ナデ(体)格子叩き	(体)板ナデ→(口・体)横ナデ	口1/4
811	足釜 BII	(口)24.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/10
812	足釜 BIII	(口)17.8	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(口・肩)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/10
813	足釜 BIII	(口)19.2	2mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/8
814	足釜 BIII	(口)18.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・肩)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/3
815	足釜 BIII	(口)18.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(肩)押圧→(口)板ナデ→(口・肩)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	口1/8
816	足釜 BIII	(口)18.8	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/4
817	足釜 BIII	(口)20.0	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい赤褐	(体)縦ハケ→(肩)横ハケ→(口・肩)横ナデ(体)格子叩き	(口・体)横ナデ→(底)ナデ	口1/4
818	足釜 BIII	(口)21.4	1mm以下の砂粒、5mm程の小石	土師質	橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/4
819	足釜 BIII	(口)20.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・肩)横ナデ	(口・体)横ナデ　(底)縦ハケ	口1/3
820	足釜 BIII	(口)21.8	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(体)横ハケ→(口)横ナデ	口1/5
821	足釜 BIII	(口)20.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)横ナデ　(底)縦ハケ	口1/6
822	足釜 BIII	(口)21.2	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)横ナデ→(口)横ナデ	口1/12

第74表　土器溜り２出土遺物観察表(2)



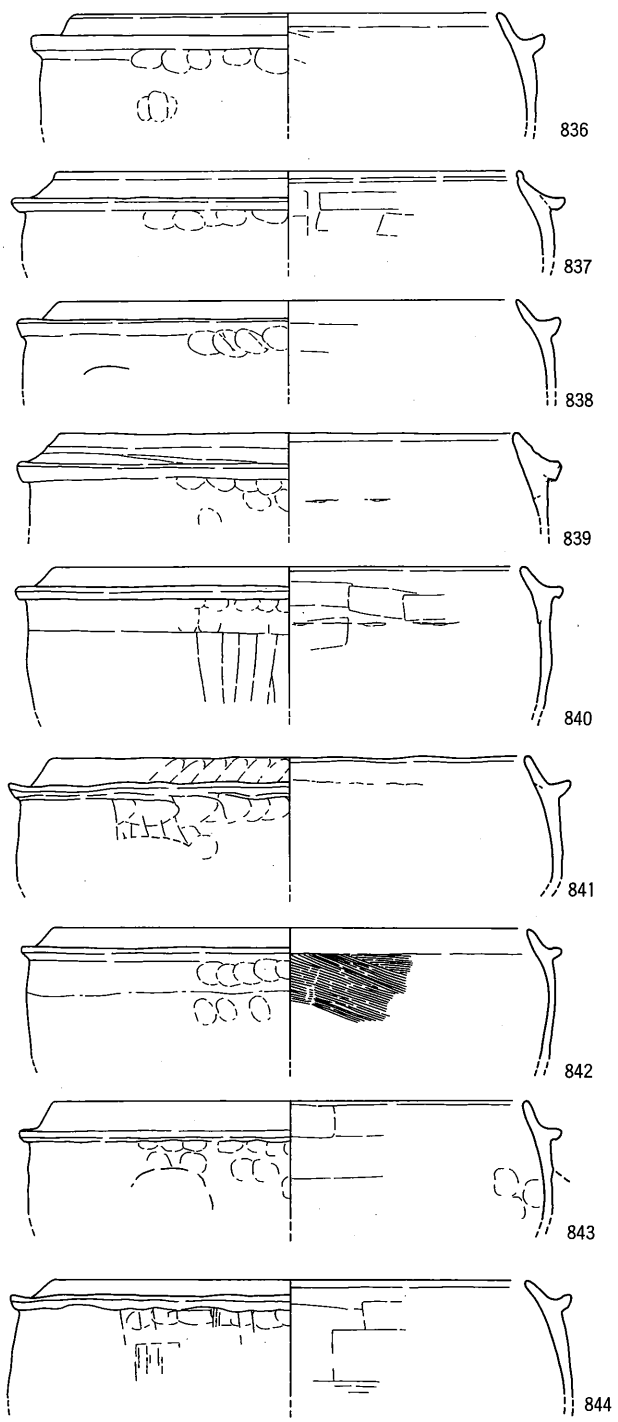
第152図　土器溜り２出土遺物(5)



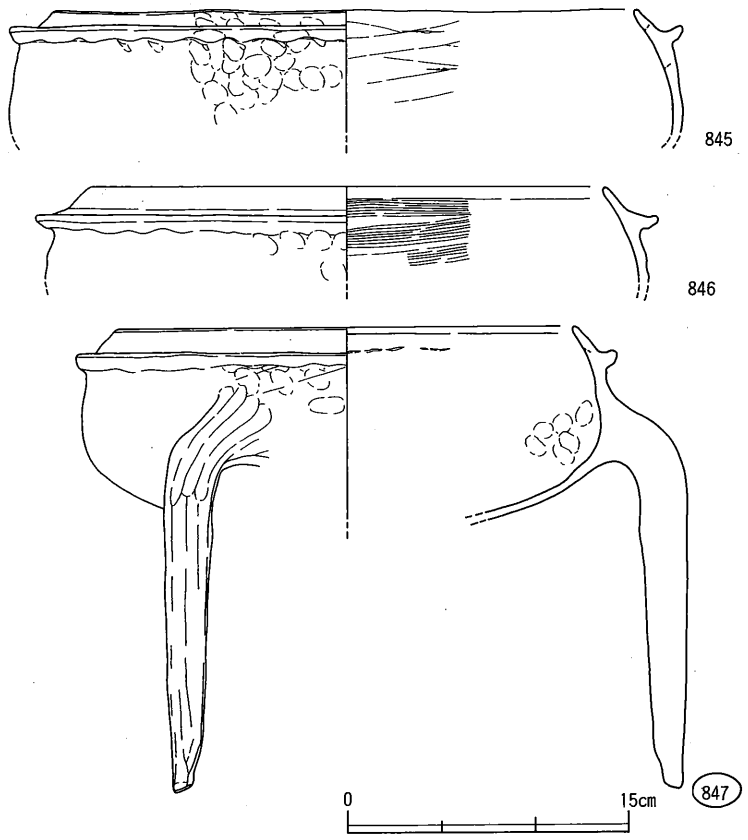
第153図　土器溜り２出土遺物(6)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
823	足釜 BⅢ	(口)21.0	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/2
824	足釜 BⅢ	(口)22.0	5mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/8
825	足釜 BⅢ	(口)22.2	5mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(体)縦ハケ→(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/4
826	足釜 BⅢ	(口)22.5	2mm以下の砂粒、5mm程の小石	土師質	橙	(体)縦ハケ→(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/4
827	足釜 BⅢ	(口)22.6	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/3
828	足釜 BⅢ	(口)23.0	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/6
829	足釜 BⅢ	(口)23.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/4
830	足釜 BⅢ	(口)23.0	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(体)縦ハケ・横ハケ→(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)横ハケ→(口)横ナデ	口1/6
831	足釜 BⅢ	(口)23.2	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(体)縦ハケ→(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)横ハケ→(口)横ナデ	口1/4
832	足釜 BⅢ	(口)23.2	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口2/3
833	足釜 BⅢ	(口)24.0	5mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(胴)押圧→(口・胴)横ナデ(底)格子叩き	(体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/10
834	足釜 BⅢ	—	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/3
835	足釜 BⅢ	(口)24.0	1mm以下の砂粒	土師質	明褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/2

第75表　土器溜り２出土遺物観察表(3)



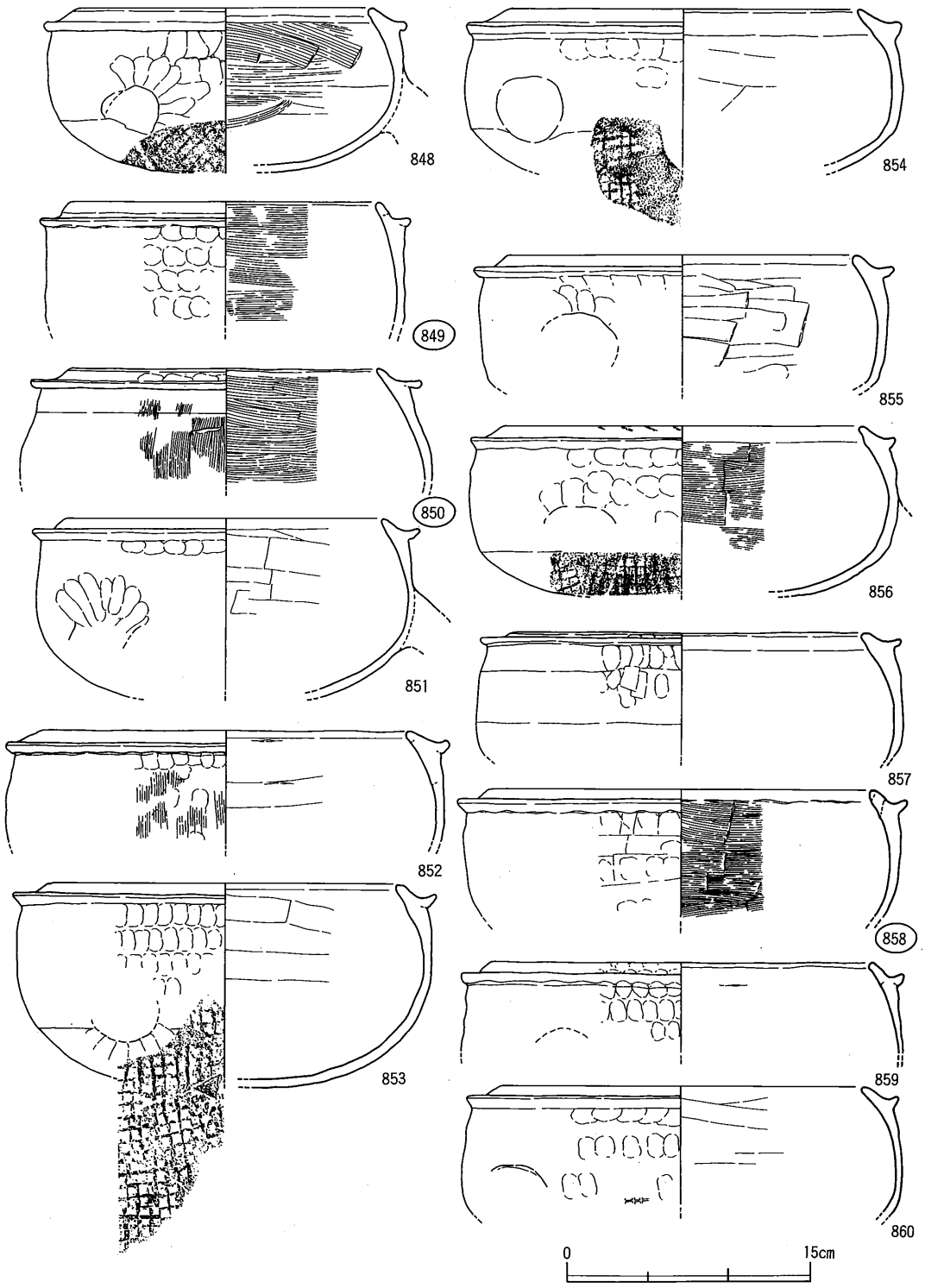
第154図　土器溜り２出土遺物(7)



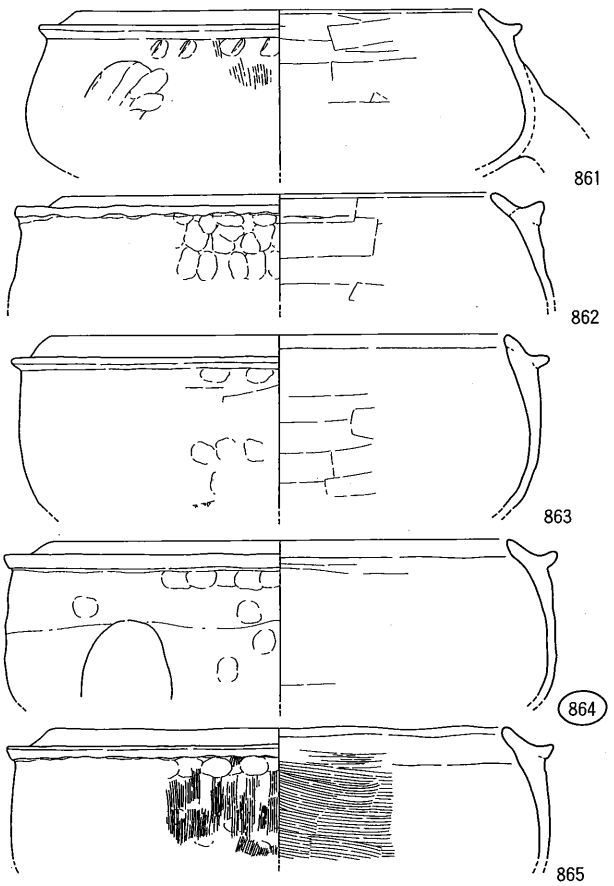
第155図　土器溜り２出土遺物(8)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
836	足釜 BIII	(口)22.0	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	□1/8
837	足釜 BIII	(口)24.0	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	□1/6
838	足釜 BIII	(口)24.0	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	□1/4
839	足釜 BIII	(口)24.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	□1/4
840	足釜 BIII	(口)24.6	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)板ナデ→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	□1/8
841	足釜 BIII	(口)24.8	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)ナデ	□1/6
842	足釜 BIII	(口)25.0	2mm以下の砂粒	土師質	明褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)横ハケ→(口)横ナデ	□1/2
843	足釜 BIII	(口)25.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	□1/4
844	足釜 BIII	(口)24.9	4mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	□1/4
845	足釜 BIII	(口)30.6	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	□1/8
846	足釜 BIII	(口)27.0	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	□1/6
847	足釜 BIII	(口)23.8	4mm以下の砂粒	土師質	灰黄褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)ナデ	□1/3

第76表　土器溜り２出土遺物観察表(4)



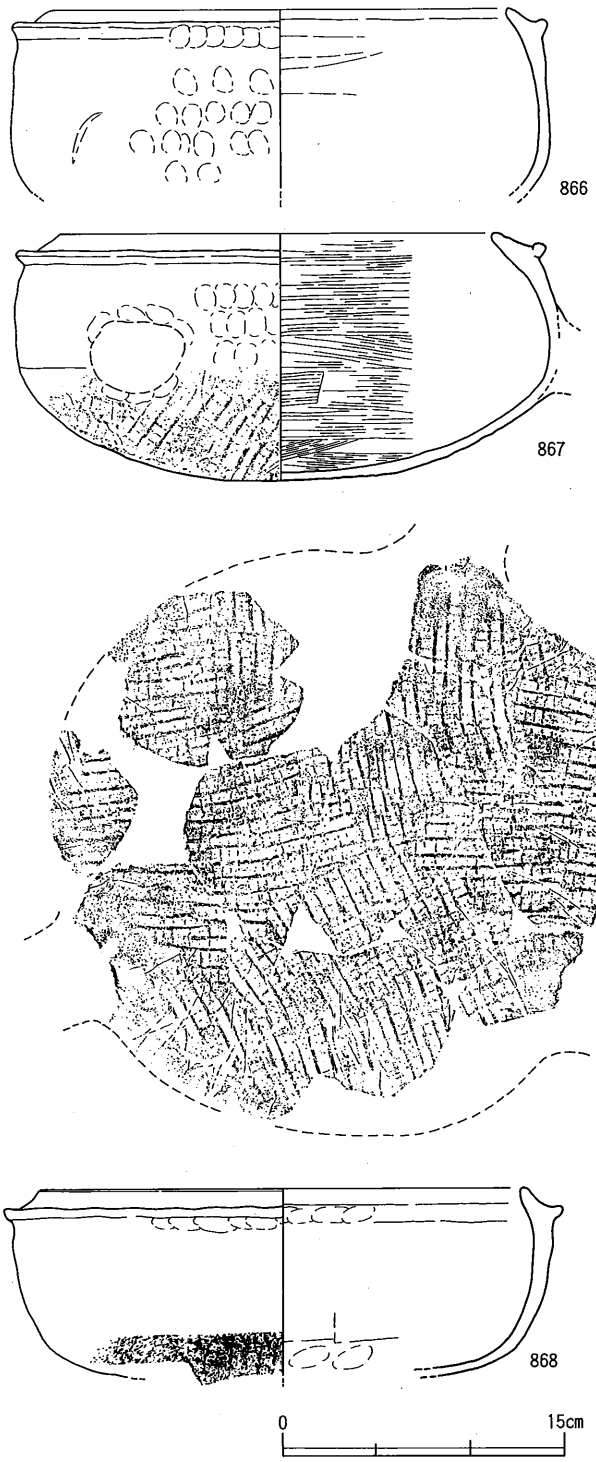
第156図　土器溜り２出土遺物(9)



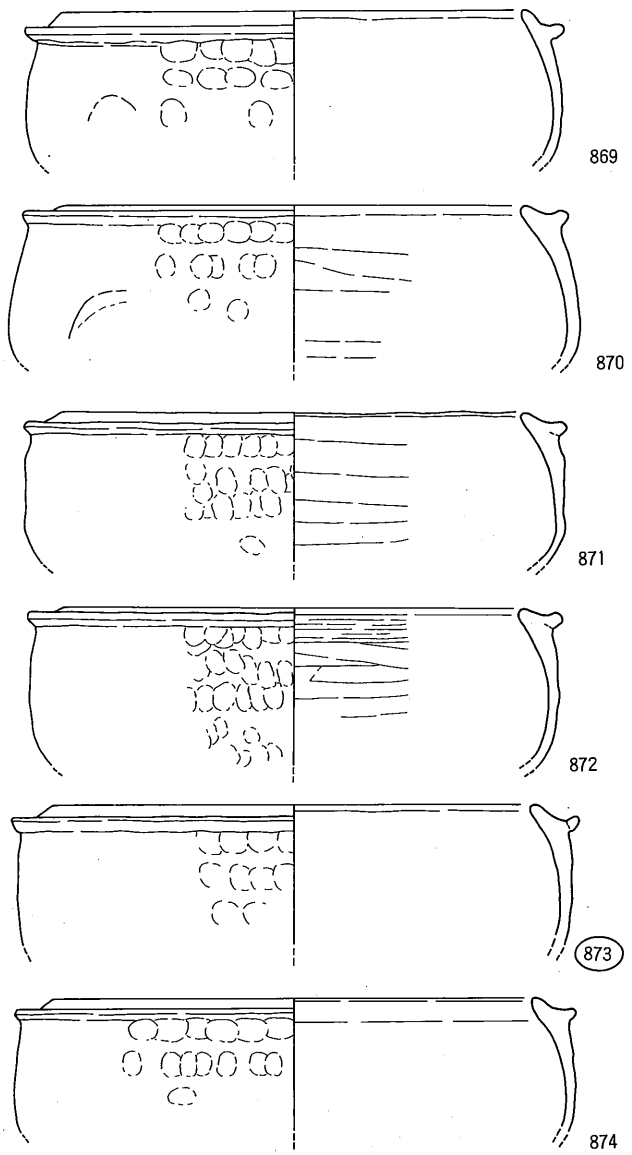
第157図　土器溜り２出土遺物(10)

番号	器　種	法　量	胎　土	焼成	色　調	手　法		残存度
						外　面	内　面	
848	足釜 BⅣ	(口)17.6	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・胴)横ナデ(底)格子叩き	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	口径3/8
849	足釜 BⅣ	(口)18.4	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ	口径1/4
850	足釜 BⅣ	(口)18.6	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(体)縦ハケ→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ	口径1/6
851	足釜 BⅣ	(口)19.0	1mm以下の砂粒	土師質	明褐	(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口径完存
852	足釜 BⅣ	(口)22.4	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→横ナデ	口径ほぼ完存
853	足釜 BⅣ	(口)21.2(高)12.5	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口・胴)横ナデ(底)格子叩き	(口・体)板ナデ	口径1/3
854	足釜 BⅣ	(口)21.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ(底)格子叩き目	(体)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/2
855	足釜 BⅣ	(口)21.2	2mm以下の砂粒、5mm程の小石	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	口径3/8
856	足釜 BⅣ	(口)21.6	2mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ(底)格子叩き目	(体)横ハケ→(口)横ナデ	口径1/2
857	足釜 BⅣ	(口)22.0	1mm以下の砂粒	土師質	明褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ(体)板ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/4
858	足釜 BⅣ	(口)23.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(体)板ナデ→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	口径1/6
859	足釜 BⅣ	(口)23.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ→(口)横ナデ	口径1/3
860	足釜 BⅣ	(口)22.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/4
861	足釜 BⅣ	(口)21.0	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(体)縦ハケ→(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/10
862	足釜 BⅣ	(口)22.8	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/3
863	足釜 BⅣ	(口)24.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/6
864	足釜 BⅣ	(口)24.0	1mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/4
865	足釜 BⅣ	(口)23.8	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)横ハケ→(口)横ナデ	口径1/4

第77表　土器溜り２出土遺物観察表(5)



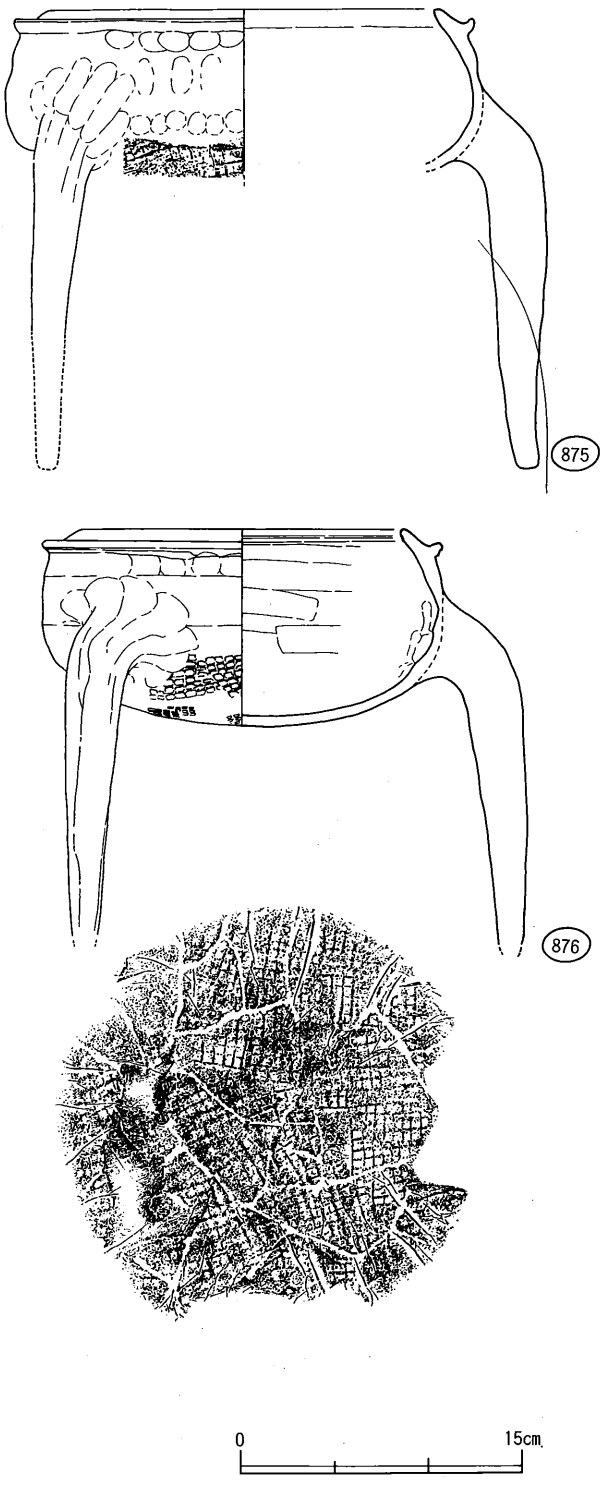
第158図　土器溜り２出土遺物(11)



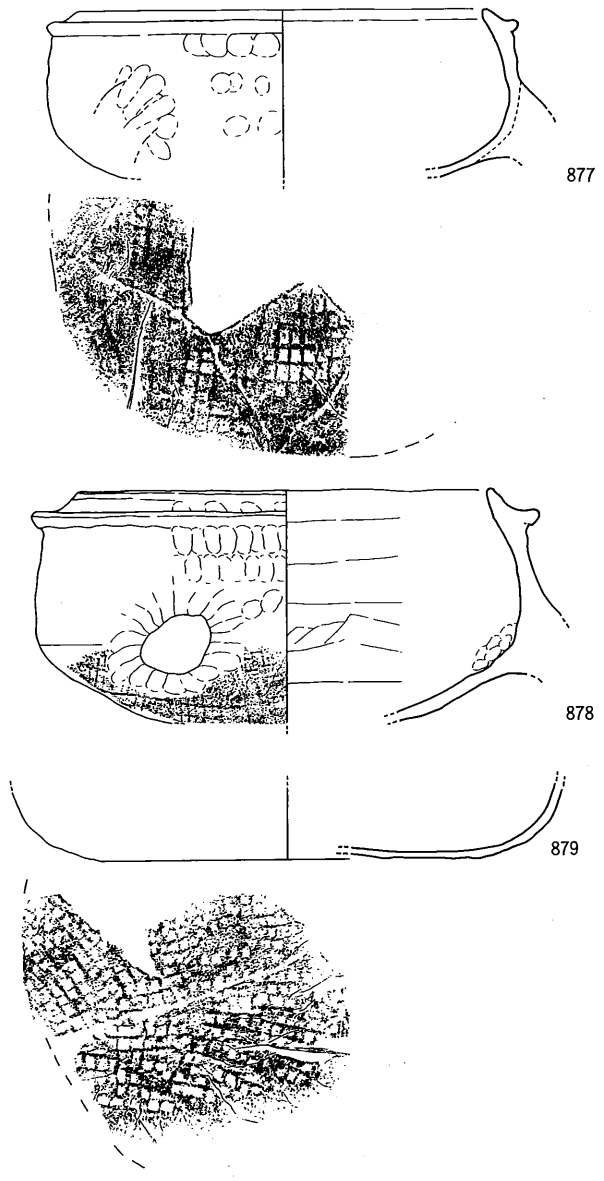
第159図　土器溜り２出土遺物(12)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
866	足釜 BIV	(口)24.0	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	□径1/2
867	足釜 BIV	(口)22.4(高)12.7	2mm以下の砂粒	土師質	赤褐	(口・胴)横ナデ(底)格子叩き	(口・体)横ハケ	口底完存
868	足釜 BIV	(口)24.2	4mm以下の砂粒を多量	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ(底)格子叩き目	(口・体)板ナデ	□径完存
869	足釜 BIV	(口)24.0	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	□径1/2
870	足釜 BIV	(口)24.0	1mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	□径1/2
871	足釜 BIV	(口)24.2	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	□径1/2
872	足釜 BIV	(口)24.4	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	□径1/4
873	足釜 BIV	(口)25.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)ナデ	□径1/6
874	足釜 BIV	(口)25.0	1mm以下の砂粒	土師質	(内外)橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ？	□径1/6

第78表　土器溜り２出土遺物観察表(6)



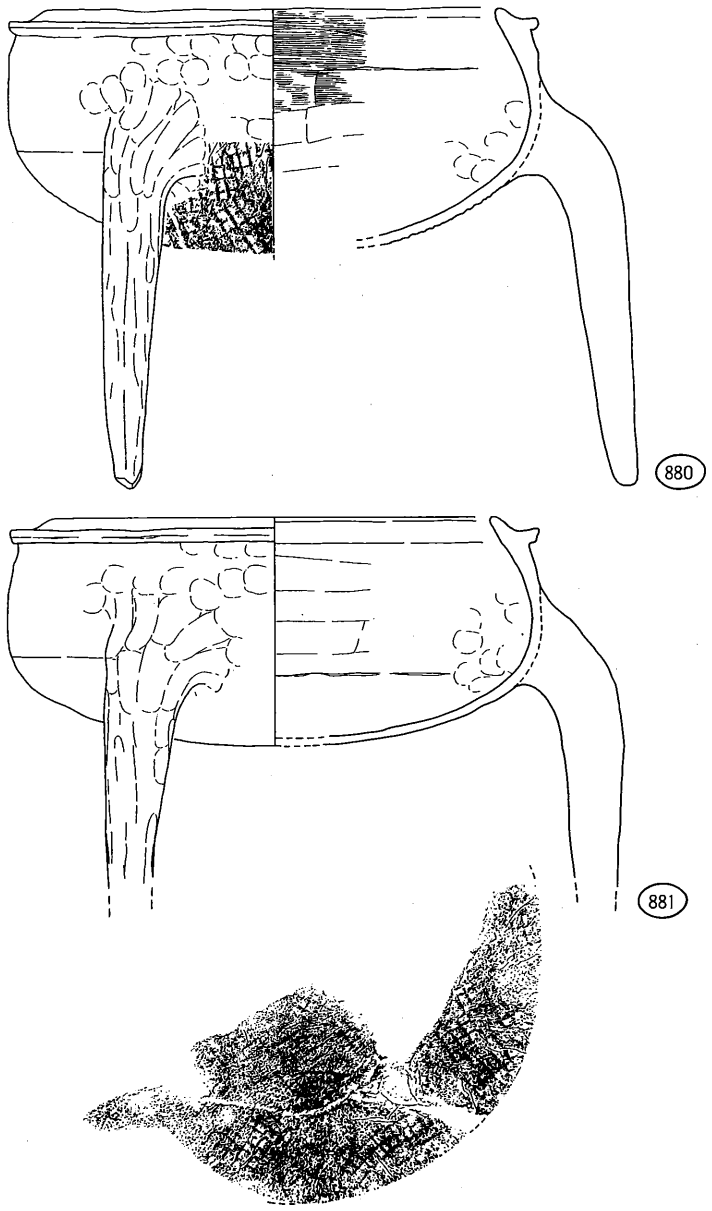
第160図　土器溜り２出土遺物(13)



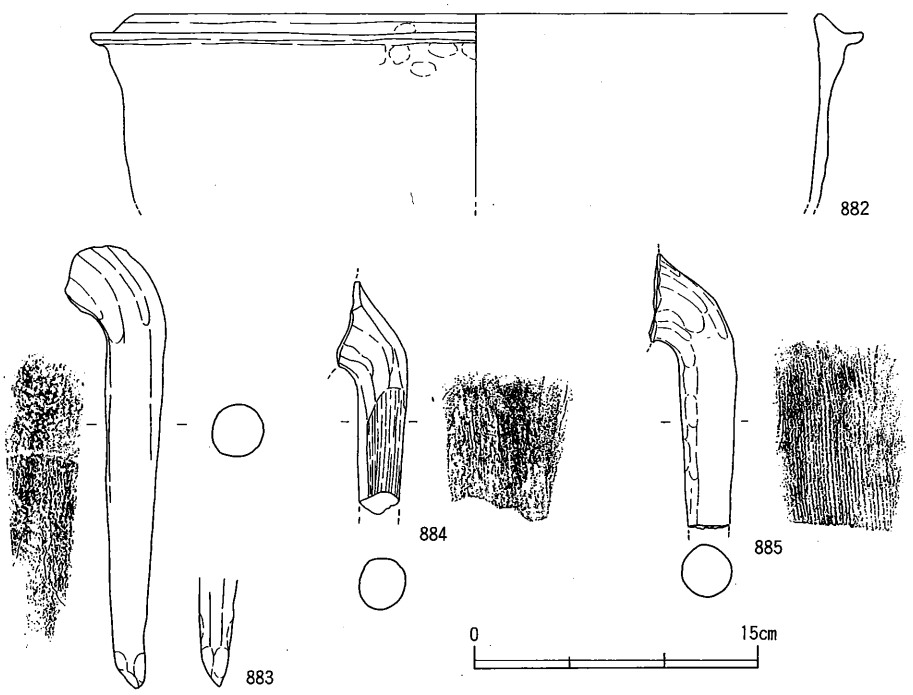
第161図　土器溜り２出土遺物(14)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
875	足釜 BIII	(口)20.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい赤褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ (底)格子叩き目	(口・体)横ナデ	口底完存
876	足釜 BIII	(口)16.8	2mm以下の砂粒、5mm程の小石	土師質	(内)浅黄橙 (外)淡黄	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ (底)格子叩き目	(口・体)板ナデ→(底)ナデ	口径7/8
877	足釜 BIV	(口)25.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ (底)格子叩き目	調整不明	口径1/4
878	足釜 BIII	(口)21.4	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ (底)格子叩き目	(口・体)板ナデ→(底)板ナデ	口径1/3
879	足釜 底部	(底)27.0	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	格子叩き目	ナデ	底径1/4

第79表　土器溜り２出土遺物観察表(7)



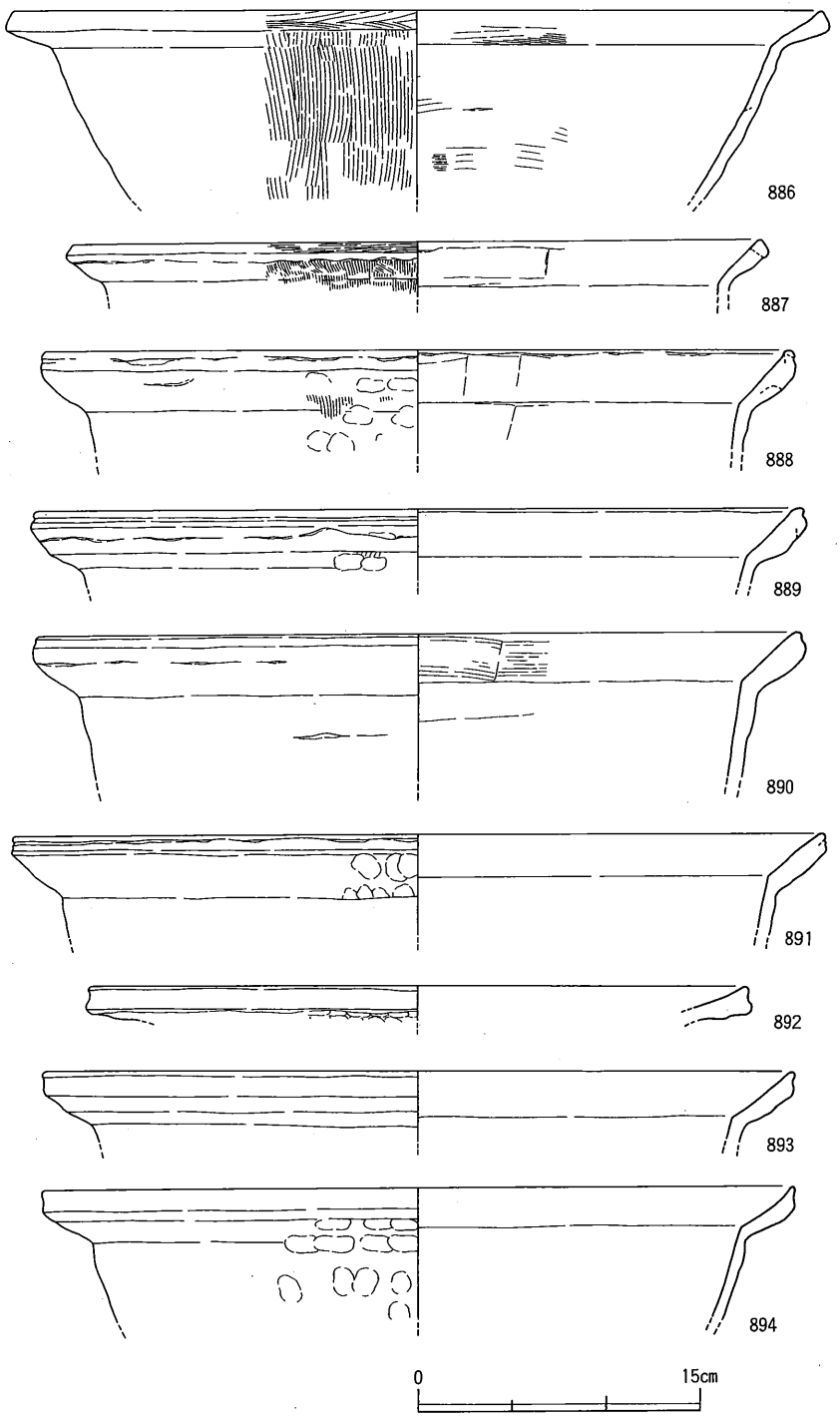
第162図　土器溜り２出土遺物(15)



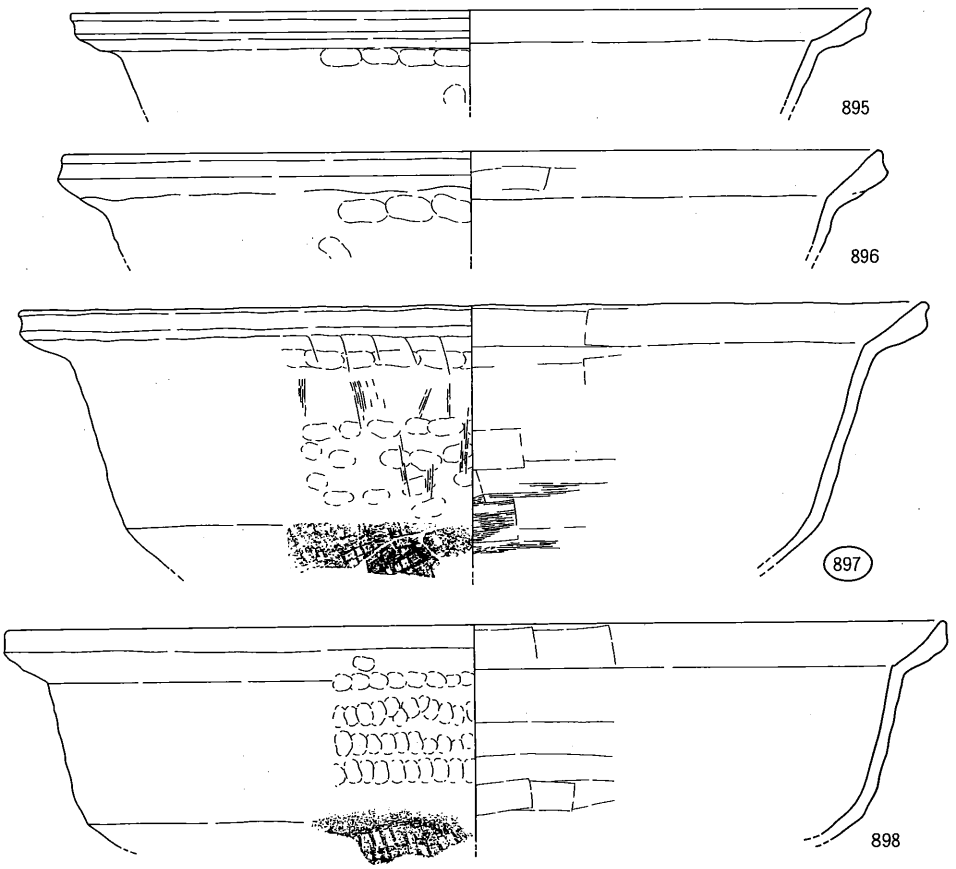
第163図　土器溜り２出土遺物(16)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
880	足釜 BIV	(口)23.8	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ (底)格子叩き目	(口・体)横ハケ→(底)板ナデ (口)横ナデ	口縁完存 底部1/3
881	足釜 BIV	(口)23.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ (底)格子叩き目	(体・底)板ナデ→(口)横ナデ	口縁1/3 底縁1/3
882	羽釜	(口)36.0	2mm以下の砂粒	土師質	(外)明黄褐 (内)橙	(口・胴)横ナデ	(口・体)ナデ	口縁1/12
883	足釜 脚部	—	1mm以下の砂粒	土師質	赤褐	木目状圧痕→ナデ		
884	足釜 脚部	—	1mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	木目状圧痕→ナデ		
885	足釜 脚部	—	2mm以下の砂粒	土師質	橙	木目状圧痕→ナデ		

第80表　土器溜り２出土遺物観察表(8)



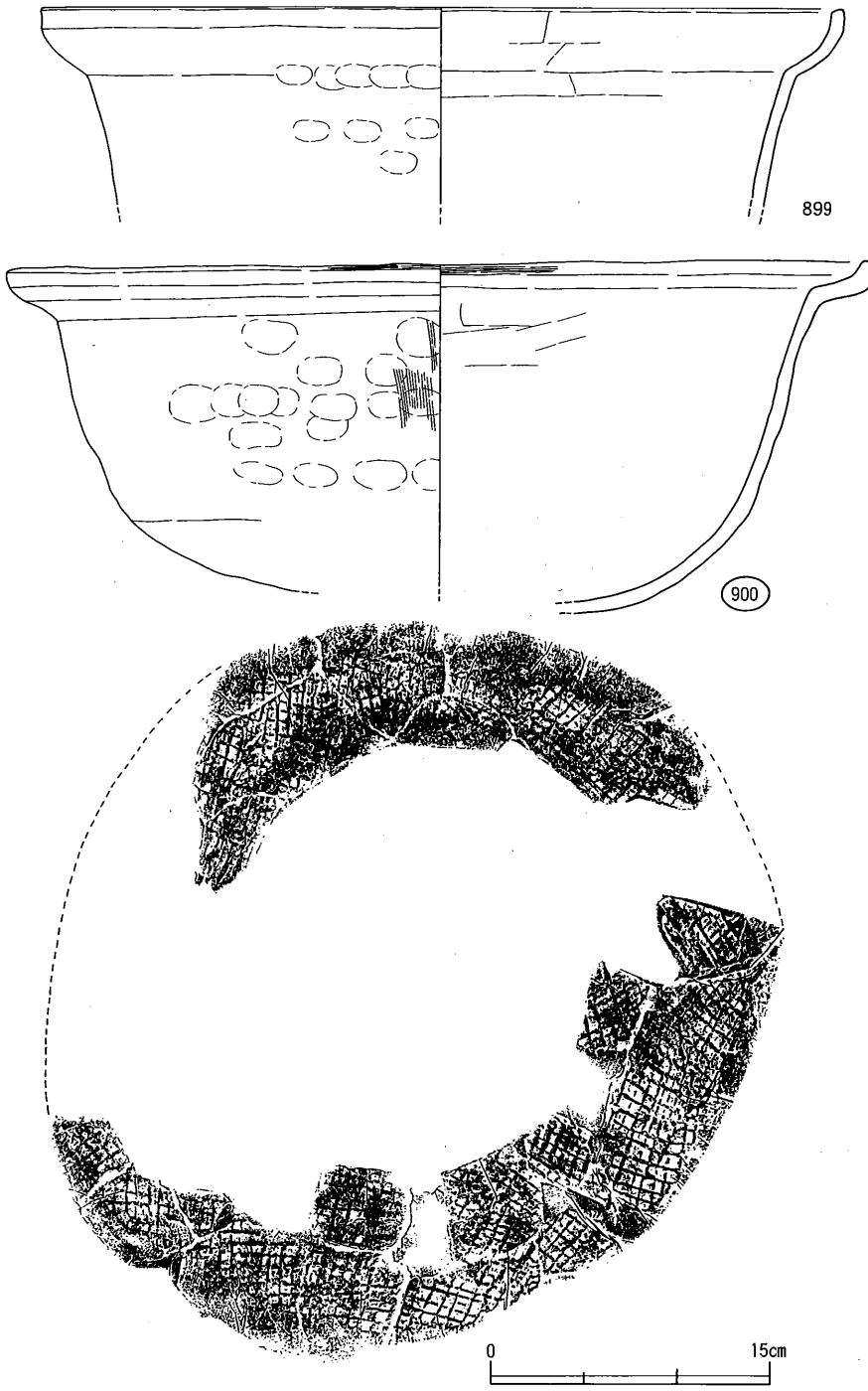
第164図　土器溜り２出土遺物(17)



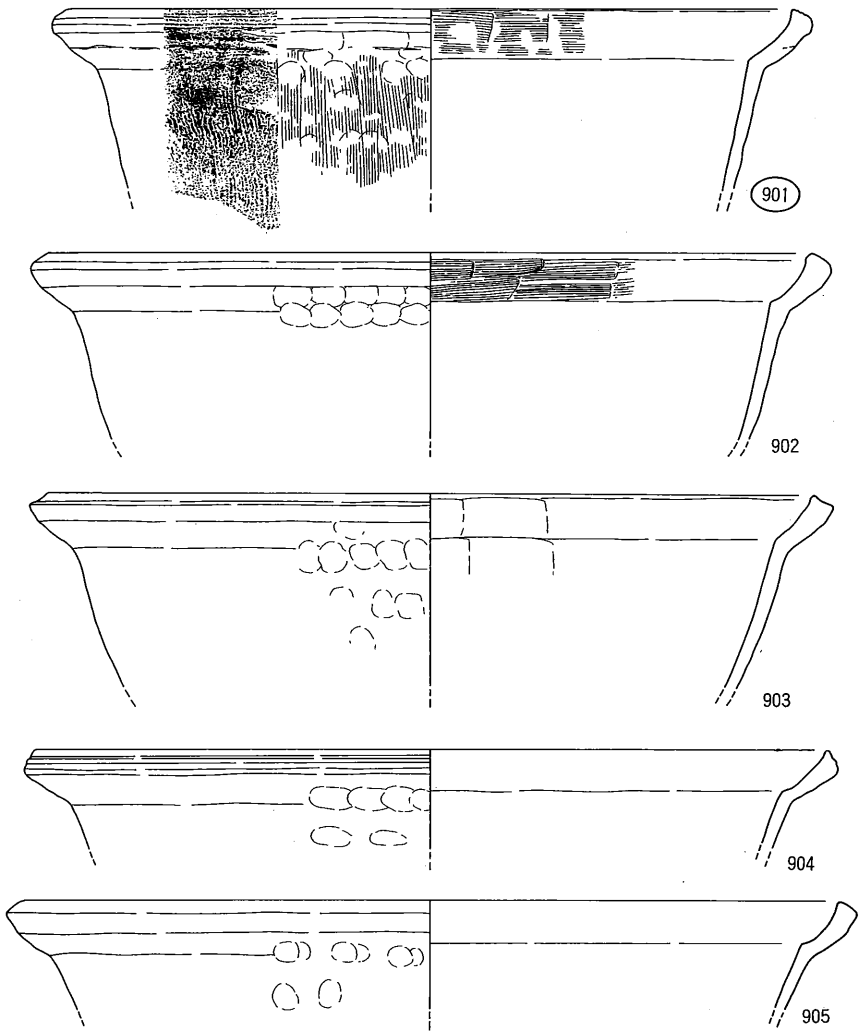
第165図　土器溜り２出土遺物(18)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
886	鍋 AI	(口)42.6	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口・体)縦ハケ (口)横ハケ	(口・体)横ハケ	口1/8
887	鍋 AI	(口)36.2	1mm以下の砂粒	土師質	褐灰	(口・体)縦ハケ (口)横ハケ	(口・体)板ナデ	細片
888	鍋 AII	(口)39.8	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)縦ハケ→横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/6
889	鍋 AII	(口)40.0	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(口)縦ハケ→横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/6
890	鍋 AII	(口)40.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口)横ハケ (体)板ナデ	口1/5
891	鍋 AII	(口)22.0	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口)横ナデ	口1/6
892	鍋 AII	(口)34.6	2mm以下の砂粒	土師質	黒褐	(口)横ナデ	(口)板ナデ	細片
893	鍋 AII	(口)40.0	1mm以下の砂粒	土師質	(外)にぶい褐 (内)橙	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
894	鍋 AII	(口)40.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/6
895	鍋 AII	(口)42.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/6
896	鍋 AII	(口)43.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/8
897	鍋 AII	(口)47.0	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ (底)格子叩き	(口・体)板ナデ (底)横ハケ	口1/4
898	鍋 AII	(口)49.4	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ (底)格子叩き	(口・体)板ナデ	口1/8

第81表　土器溜り２出土遺物観察表(9)



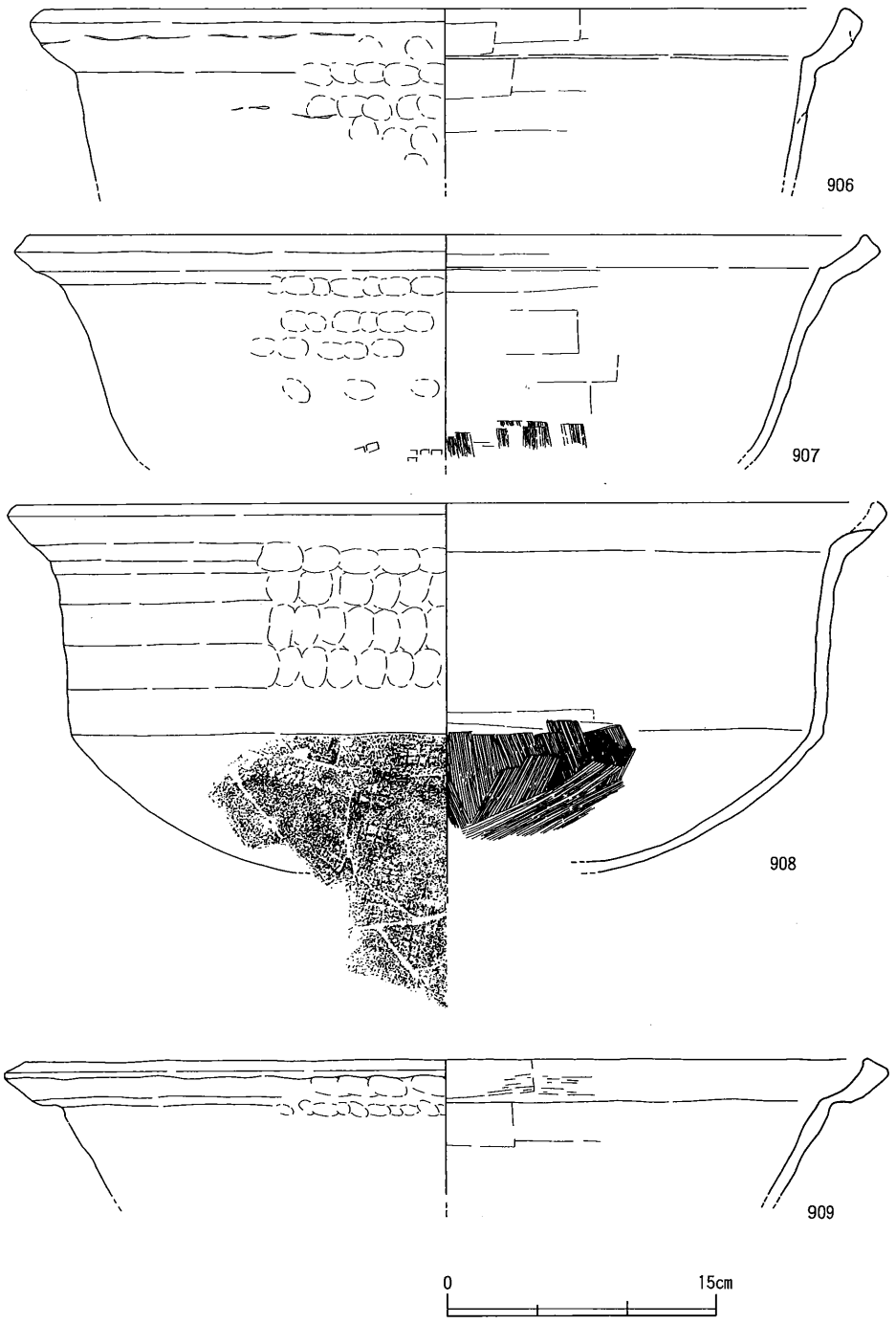
第166図　土器溜り２出土遺物(19)



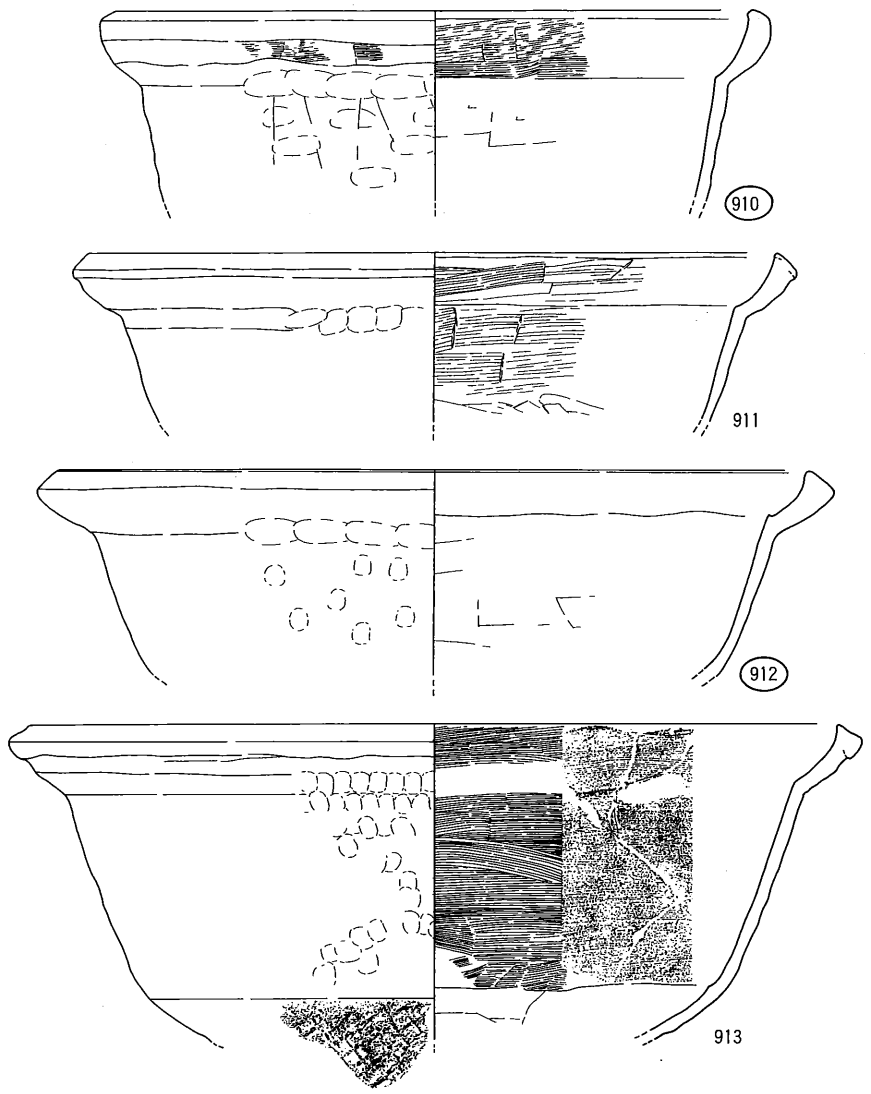
第167図　土器溜り２出土遺物⑳

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
899	鍋 B Ⅰ	(口)41.0	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/8
900	鍋 B Ⅱ	(口)44.0	2mm以下の砂粒	土師質	灰黄褐	(体)縦ハケ→(口)板ナデ・横ハケ (底)格子叩き目	(口・体)板ナデ・横ハケ	口1/8 底
901	鍋 B Ⅱ	(口)37.8	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(口)板ナデ・横ハケ	(口)横ハケ (体)ナデ	口1/8
902	鍋 B Ⅱ	(口)40.3	2mm以下の砂粒	土師質	(外)灰褐 (内)橙	(口)横ナデ	(口)横ハケ→横ナデ (体)ナデ	口1/8
903	鍋 B Ⅱ	(口)40.4	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/8
904	鍋 B Ⅱ	(口)42.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ？	口1/6
905	鍋 B Ⅱ	(口)43.0	1mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/10

第82表　土器溜り２出土遺物観察表⑽



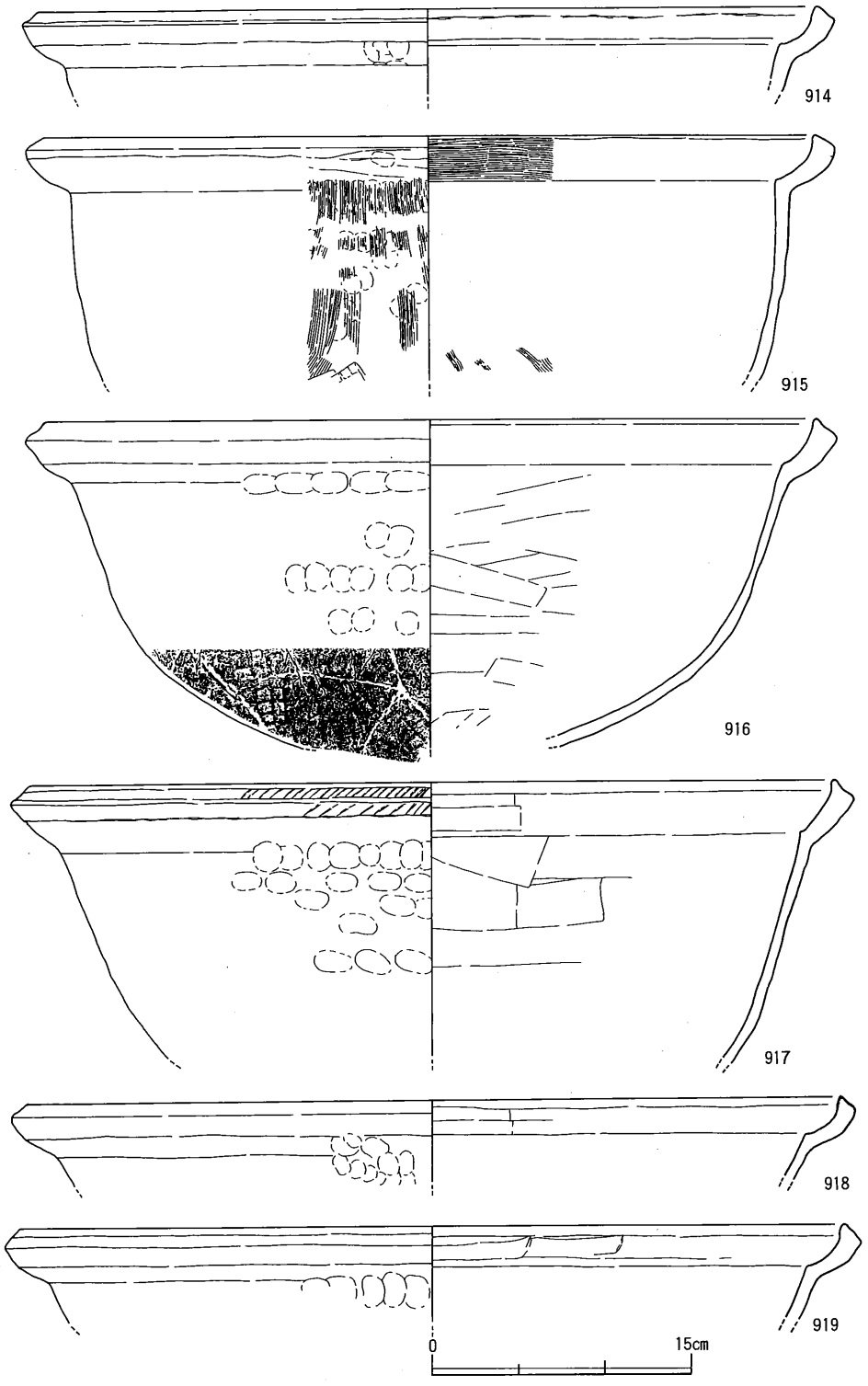
第168図　土器溜り２出土遺物(21)



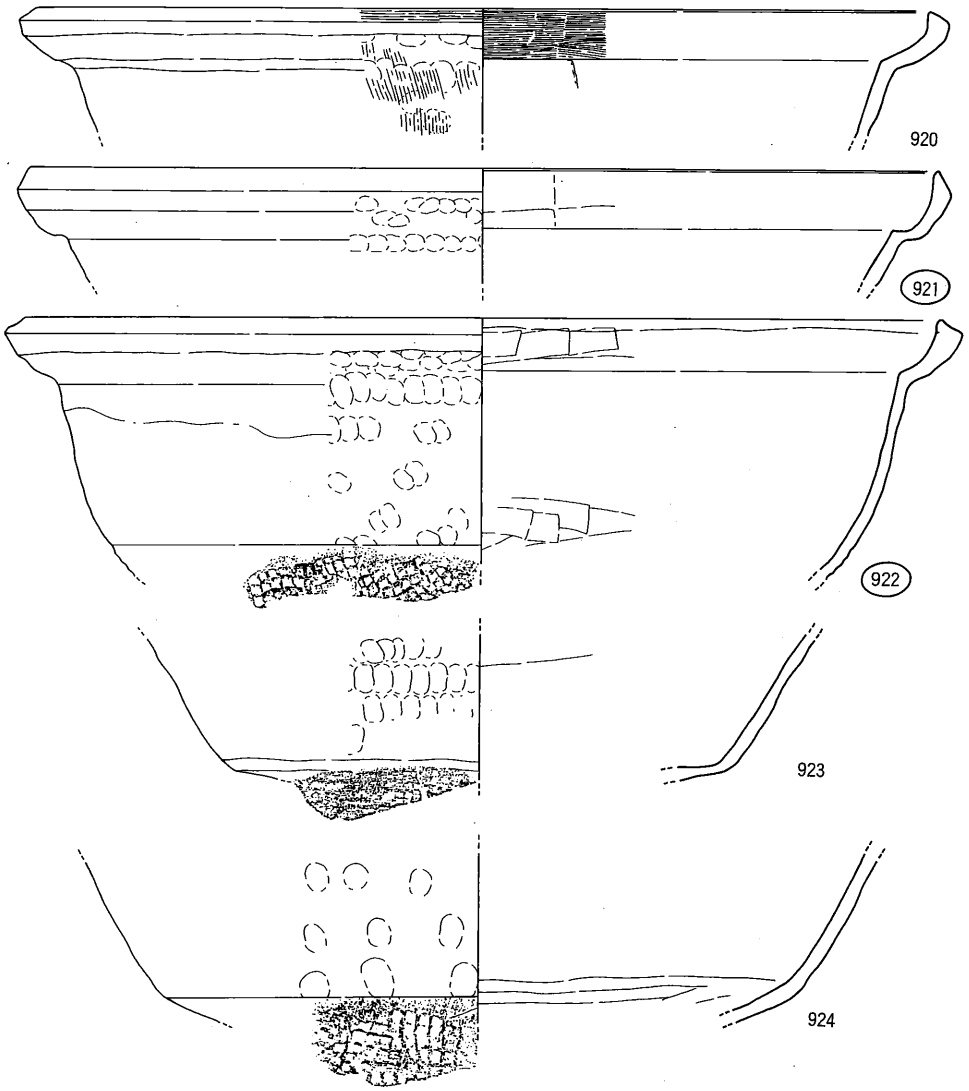
第169図　土器溜り２出土遺物(22)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
906	鍋 BⅡ	(口)44.4	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/4
907	鍋 BⅡ	(口)46.0	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ (底)格子叩き	(口・体)板ナデ (底)縦ハケ	口1/2
908	鍋 BⅡ	(口)47.4	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ (底)格子叩き	(口・体)板ナデ (底)縦ハケ	口1/8
909	鍋 BⅡ	(口)46.0	2.5mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/12
910	鍋 BⅢ	(口)33.2	4mm以下の砂粒	土師質	(外)にぶい橙 (内)にぶい橙	(口)横ナデ→板ナデ	(体)板ナデ→(口)横ハケ	口1/8
911	鍋 BⅢ	(口)36.0	2mm以下の砂粒、5mm程の小石	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)横ハケ→(底)板ナデ	口1/4
912	鍋 BⅢ	(口)39.4	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/6
913	鍋 BⅢ	(口)42.6	4mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(口)横ナデ (底)格子叩き	(口・体)横ハケ→(底)板ナデ	口1/8

第83表　土器溜り２出土遺物観察表(11)



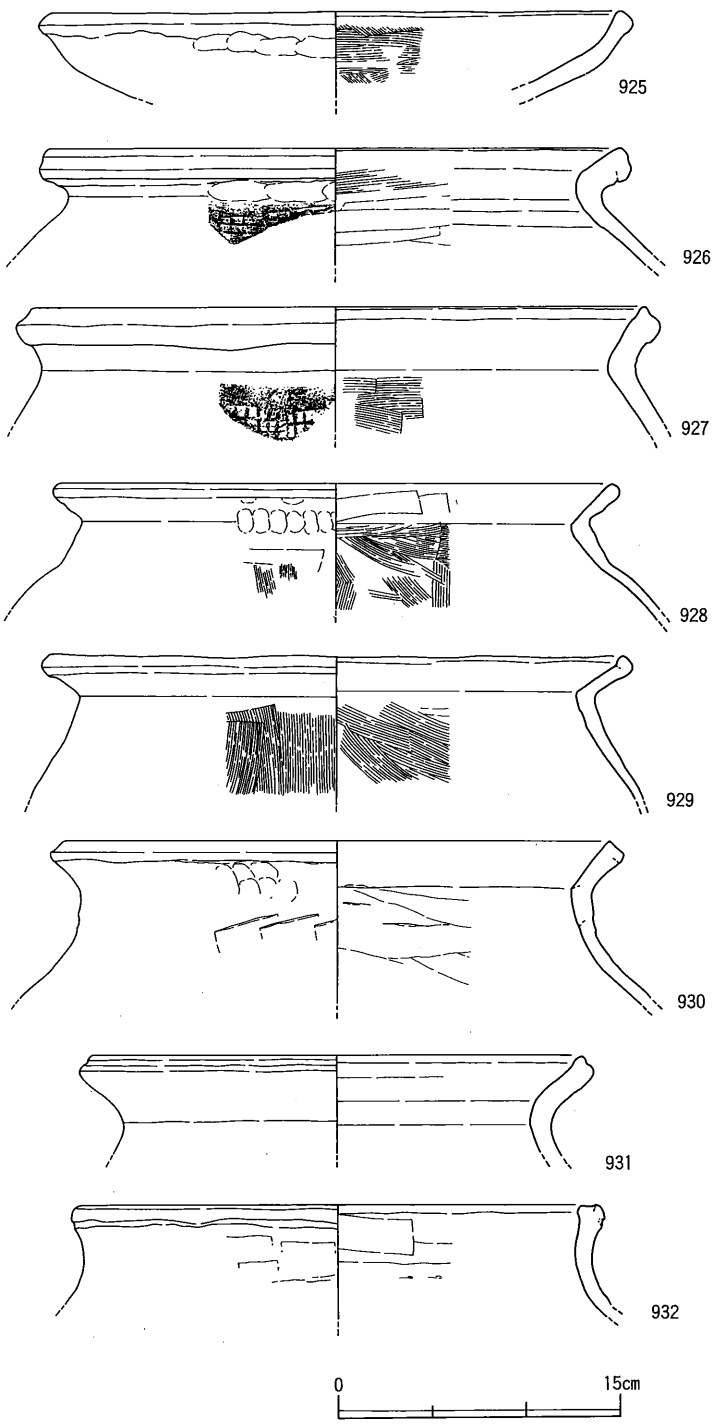
第170図　土器溜り２出土遺物(23)



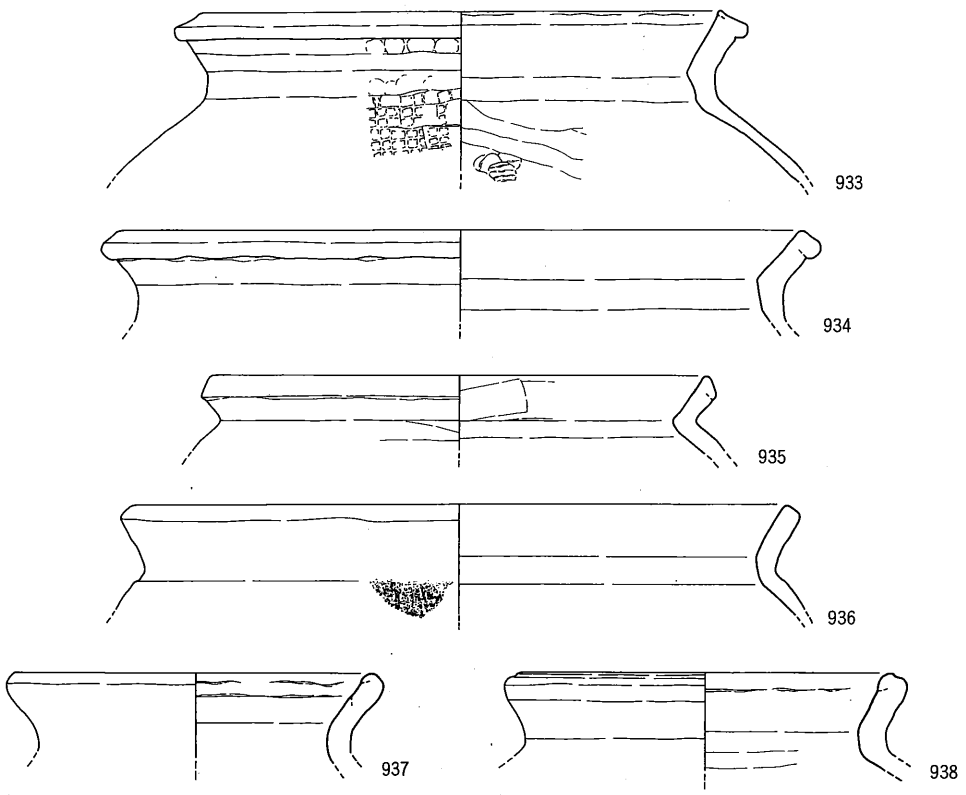
第171図　土器溜り２出土遺物(24)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
914	鍋 BⅢ	(口)44.0	1㎜以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(口)横ナデ	(口・体)横ナデ	口1/8
915	鍋 BⅢ	(口)44.0	2㎜以下の砂粒	土師質	にぶい赤褐	(体)縦ハケ→(底)格子叩き目 (口)横ナデ	(口)横ハケ (体)板ナデ→(底)縦ハケ	口1/8
916	鍋 BⅢ	(口)44.0	2㎜以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ(底)格子叩き目	(口・体・底)板ナデ	口1/2
917	鍋 BⅢ	(口)46.0	2㎜以下の砂粒	土師質	橙	(口)木目状圧痕→横ナデ	(口・体)板ナデ	口縁部破片
918	鍋 BⅢ	(口)47.0	2㎜以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
919	鍋 BⅢ	(口)47.0	2㎜以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/8
920	鍋 BⅢ	(口)47.0	2㎜以下の砂粒	土師質	橙	(口・体)縦ハケ→(口)横ナデ・横ハケ	(口)横ハケ (体)板ナデ	口1/10
921	鍋 BⅢ	(口)47.6	2㎜以下の砂粒	土師質	(外)にぶい橙 (内)橙	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
922	鍋 BⅢ	(口)47.6	2㎜以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ(底)格子叩き目	(口・体・底)板ナデ	口1/4
923	鍋 底体部	(底)26.0	2㎜以下の砂粒	土師質	橙	(底)格子叩き目→横ナデ	(体)板ナデ	底1/8
924	鍋 底体部	—	1㎜以下の砂粒	土師質	褐	(底)格子叩き目	(体・底)板ナデ	細片

第84表　土器溜り２出土遺物観察表(12)



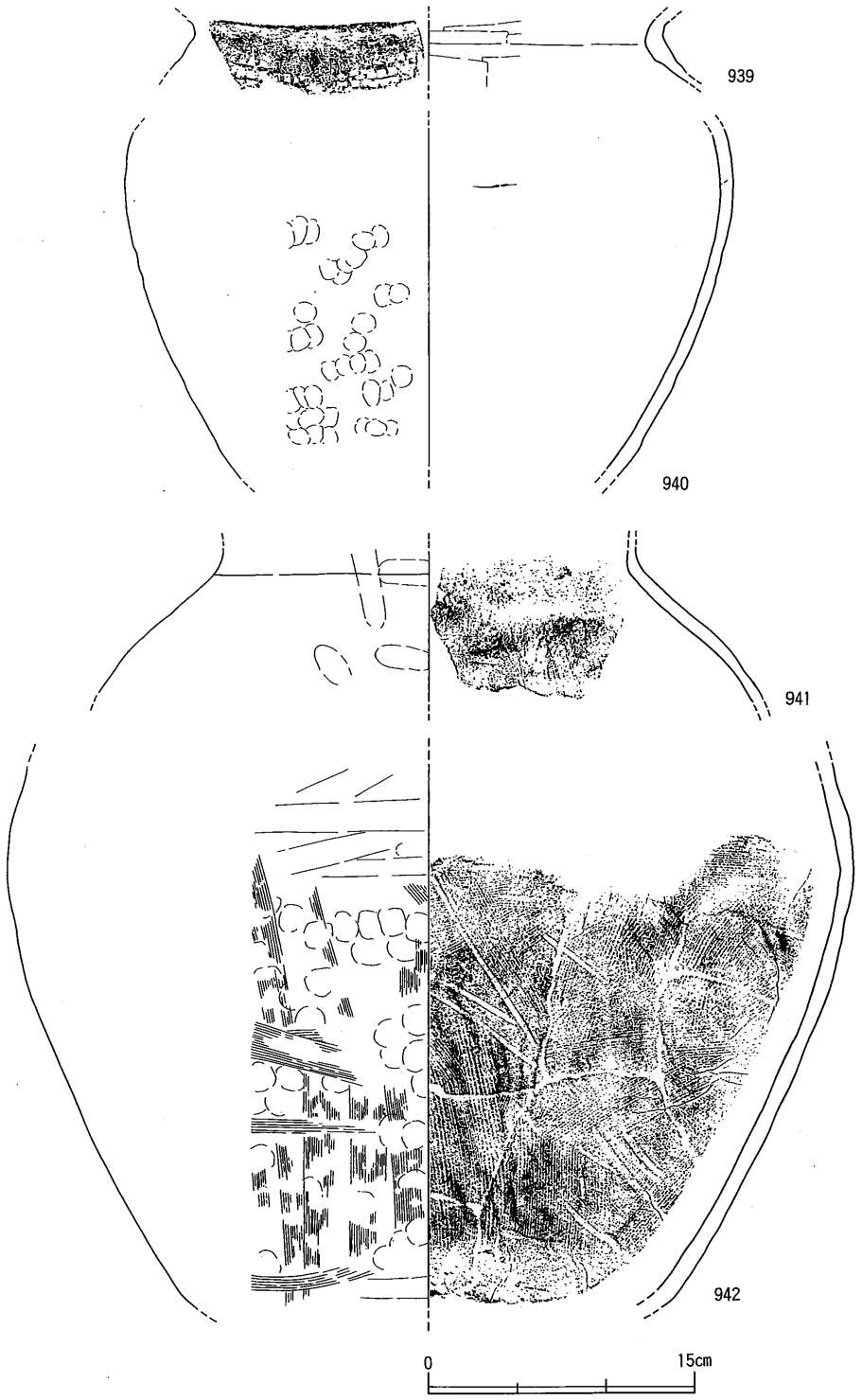
第172図　土器溜り２出土遺物(25)



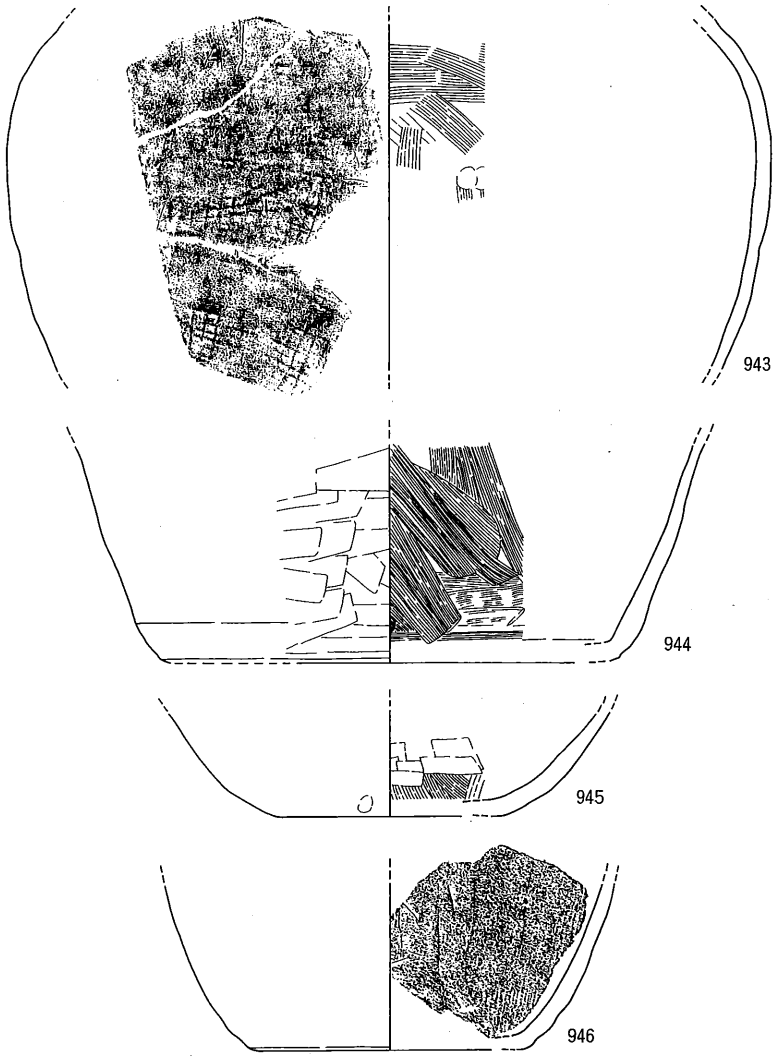
第173図　土器溜り２出土遺物(26)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法 外面	手法 内面	残存度
925	焙烙	(口)30.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)横ハケ→縦ハケ	口径1/12
926	甕 B	(口)29.8	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(体)格子叩き目→(口・頸)回転ナデ	(体)板ナデ→(頸)横ハケ	口径1/2
927	甕 B	(口)32.0	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(体)格子叩き目→(口・頸)回転ナデ	(体)横ハケ→(口・頸)回転ナデ	口径1/10
928	甕 C	(口)29.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)横ナデ (頸・体)板ナデ	(体)縦ハケ→(頸)横ハケ→(口)横ナデ	口径1/3
929	甕 C	(口)30.1	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)横ナデ (頸・体)縦ハケ	(口)板ナデ (頸・体)横ハケ	口径1/6
930	甕 C	(口)29.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ (頸・体)板ナデ	(口・頸・体)板ナデ	口径1/2
931	甕 C	(口)26.0	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい赤褐	(口)回転ナデ？	(口・頸)板ナデ？	口径1/10
932	甕 C	(口)25.8	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)横ナデ (頸・体)板ナデ	(口)板ナデ (頸)ヘラ削り	口径1/10
933	甕 C	(口)27.0	2mm以下の砂粒	土師質	明褐	(体)格子叩き目→(口・頸)回転ナデ	(体)当て具痕→板ナデ→(口・頸)回転ナデ	口径1/3
934	甕 C	(口)36.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・頸)回転ナデ	(口・頸)回転ナデ	口径1/10
935	甕 C	(口)26.0	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄褐	(頸・体)板ナデ→(口)回転ナデ	(口・頸・体)板ナデ	細片
936	甕 C	(口)34.2	4mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目→(口・頸)回転ナデ	(体・頸)板ナデ→(口)回転ナデ	細片
937	甕 C	(口)19.0	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい赤褐	(口・頸)横ナデ	(口・頸)横ナデ	口径1/10
938	甕 C	(口)19.2	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口・頸)横ナデ	(頸・体)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/3

第85表　土器溜り２出土遺物観察表(13)



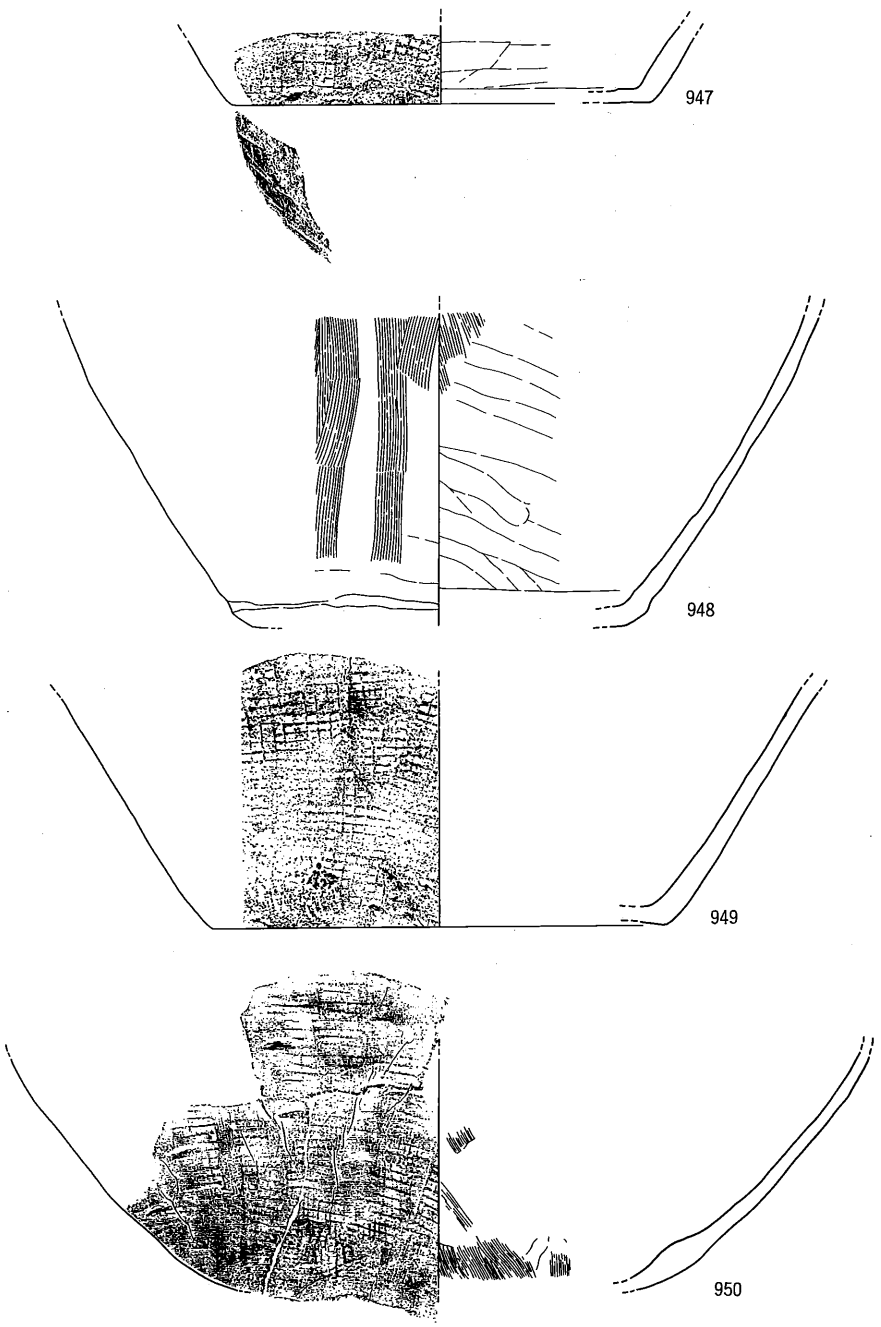
第174図　土器溜り２出土遺物(27)



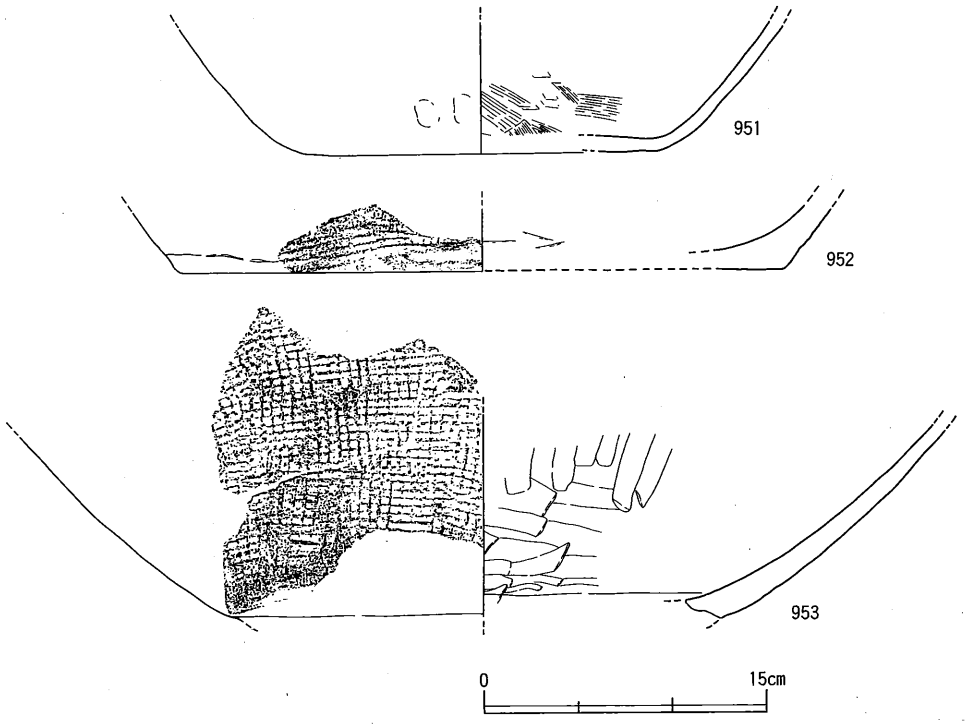
第175図　土器溜り２出土遺物(28)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
939	甕 頸部	—	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄褐	(体)格子叩き目 →(頸)回転ナデ	(頸-体)板ナデ	細片
940	甕 体部	—	2mm以下の砂粒	土師質	橙	ナデ	板ナデ	細片
941	甕 頸部	—	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(体)縦ハケ→(頸-体)横ナデ	(頸)横ナデ	頸部1/10
942	甕 体部	—	3mm以下の砂粒	土師質	橙	縦ハケ→横ハケ	縦ハケ	体部1/3
943	甕 体部	—	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	格子叩き目	横ハケ→縦ハケ	体部1/8
944	甕 底体部	(口)23.2	2mm以下の砂粒	土師質	橙	板ナデ	横ハケ→縦ハケ	底径1/6
945	甕 底体部	(口)10.6	2mm以下の砂粒	土師質	(外胎)にぶい橙 (内)橙	ナデ	縦ハケ→板ナデ	底径1/6
946	甕 底体部	(口)14.8	2mm以下の砂粒	土師質	(外)黄橙 (内)にぶい黄橙		縦ハケ	口径1/8

第86表　土器溜り２出土遺物観察表(14)



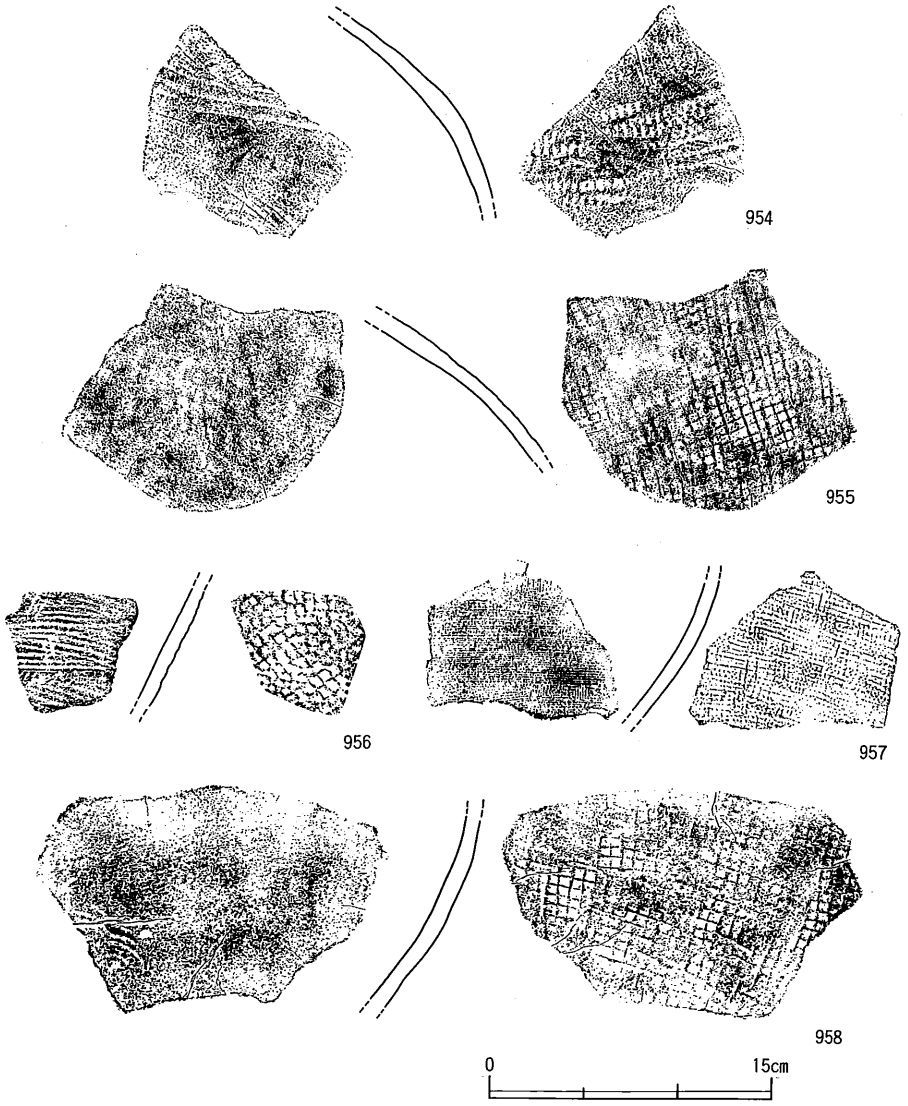
第176図　土器溜り２出土遺物(29)



第177図　土器溜り２出土遺物(30)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
947	甕 底体部	(底)21.8	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(底外縁)格子叩き目 (底)板ナデ	板ナデ	底1/8
948	甕 底体部	(底)19.8	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(底外縁)横ナデ (体)縦ハケ	(体)板ナデ→縦ハケ	底1/6
949	甕 底体部	(底)24.0	2mm以下の砂粒	土師質	赤褐	格子叩き目	ナデ	底1/6
950	甕 底体部	—	4mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	格子叩き目→縦ハケ	縦ハケ	細片
951	甕 底体部	(底)19.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	ナデ	横ハケ	底1/4
952	甕 底体部	(底)31.8	2mm以下の砂粒	土師質	橙	格子叩き目→横ナデ	板ナデ	底1/10
953	甕 底体部	—	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	格子叩き目→横ナデ	板ナデ	底1/8

第87表　土器溜り２出土遺物観察表(15)



第178図　土器溜り２出土遺物(31)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
954	甕 体部	—	1mm以下の砂粒	土師質	橙	格子叩き目→板ナデ	板ナデ	細片
955	甕 体部	—	2mm以下の砂粒	土師質	(外)橙 (内面)明黄褐	格子叩き目	縦ハケ	細片
956	甕 体部	—	3mm以下の砂粒	土師質	(外)橙 (内)黄灰	格子叩き目	横ハケ	細片
957	甕 体部	—	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい赤褐	格子叩き目	横ハケ→縦ハケ	細片
958	甕 体部	—	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	格子叩き目	当て具痕→板ナデ	細片

第88表　土器溜り２出土遺物観察表(16)

擂鉢（801～809）は，ＡⅠ類（801）やＢⅠ類（809）が僅かにみられるが，ほぼＡⅡ類を中心に構成される。ＡⅡ類（802～806・808）では，細分型式でＡⅡ－２類（802～806）が主体になり，やや特異な形態のＡⅡ－１類（808）もみられる。ＡⅡ－２類は口縁端部に回転ナデを１段施しており，外傾する端面が窪み気味になるため，相対的に上方に挽き出されたような端部形態となる。卸し目は５条／1.2cmで条線の極めてシャープなものが多いが，806は例外的に条数が多くシャープさに欠けるものである。

足釜（810～881）は，ＢⅢ類（812～847・867・875・876・878）とＢⅣ類（848～874・877・880・881）が主体であり，極めて微量のＢⅠ類（810），ＢⅡ類（811）も存在する。個々の説明は土器溜り１と重複するため，観察表を参照されたい。土器溜り１との相違点は，鍔部押圧に伴う爪形状圧痕が少ないことであり，工人差を反映する微細なクセである可能性がある。

足釜脚部（883～885）の中で，木目状圧痕が認められるものを図示した。圧痕を詳細に観察すると，丸い器面にもかかわらず条線が全て平行しており，相互に重複しないことを指摘でき，通常のハケ目とは明瞭に異なる。

鍋（886～924）では，ＡⅡ類（888～898）とＢⅡ類（900～909），ＢⅢ類（910～922）の３者が中心的な存在であり，ごく少量のＡⅠ類（886・887），ＢⅠ類（899）もみられる。ＡⅡ類は器壁に対して斜交し，垂直方向に拡張する端面をもつもの（ＡⅡ－２類）で占められる。ＡⅠ類でみられたハケ目調整の多用は認められず，内面調整には木目の浮き出ない板状工具によるナデが行われる。また口縁端部調整は横ナデである。

焙烙（925）は比較的器壁が厚く，口縁端部が肥厚気味になる。底部は遺存していないが，同様な形態をもつ土器溜り３出土遺物（1146）からみて，格子叩き目が施されていたと考えられる。

甕（926～958）には，口縁部が短く外反して断面矩形に肥厚するＢ類（926・927）が少量ある他は，全てＣ類（928～938）である。ただしＣ類の中にもかなりバリエーションが認められる。すなわち，内傾して長く伸びる頸部とそこから明瞭に外反する口縁部をもつ，器壁の薄い一群（928～932）と，同様な頸部をもつが口縁部が厚くなり，また端部が外方に肥厚する一群（933・934），さらに明瞭な頸部を作り出さず，短く外反する口縁部をもつ一群（935～938）がある。前１者には，頸部と体部に縦方向の板ナデもしくは細かい縦ハケ調整が施され，後２者では体部に格子叩き目がみられる。

940では，体部外面に粘土紐接合時の指オサエの痕跡が顕著であるが，叩き目は認めら

れない。また942では，体部外面のハケ目が粗雑に施されるため，指オサエの痕跡を残すものの，叩き目の痕跡は読み取れない。これらは，叩き成形を経ずに製作された甕の存在を示していよう。ただし口縁部との対応関係は明らかにできない。

格子叩き目による甕の体部下半と底部をみると，平底から明瞭に立ち上がる体部下半をもつもの（949・952）と，底部からの立ち上がりがやや不明瞭で大きく外側に開く体部下半をもつもの（950・953）の2者が存在する。後者は同時期の亀山焼甕に近い特徴をもつが，胎土は楠井に普遍的なものである。

(6) **土器溜り3出土遺物**（第179～207図，第90～105表）

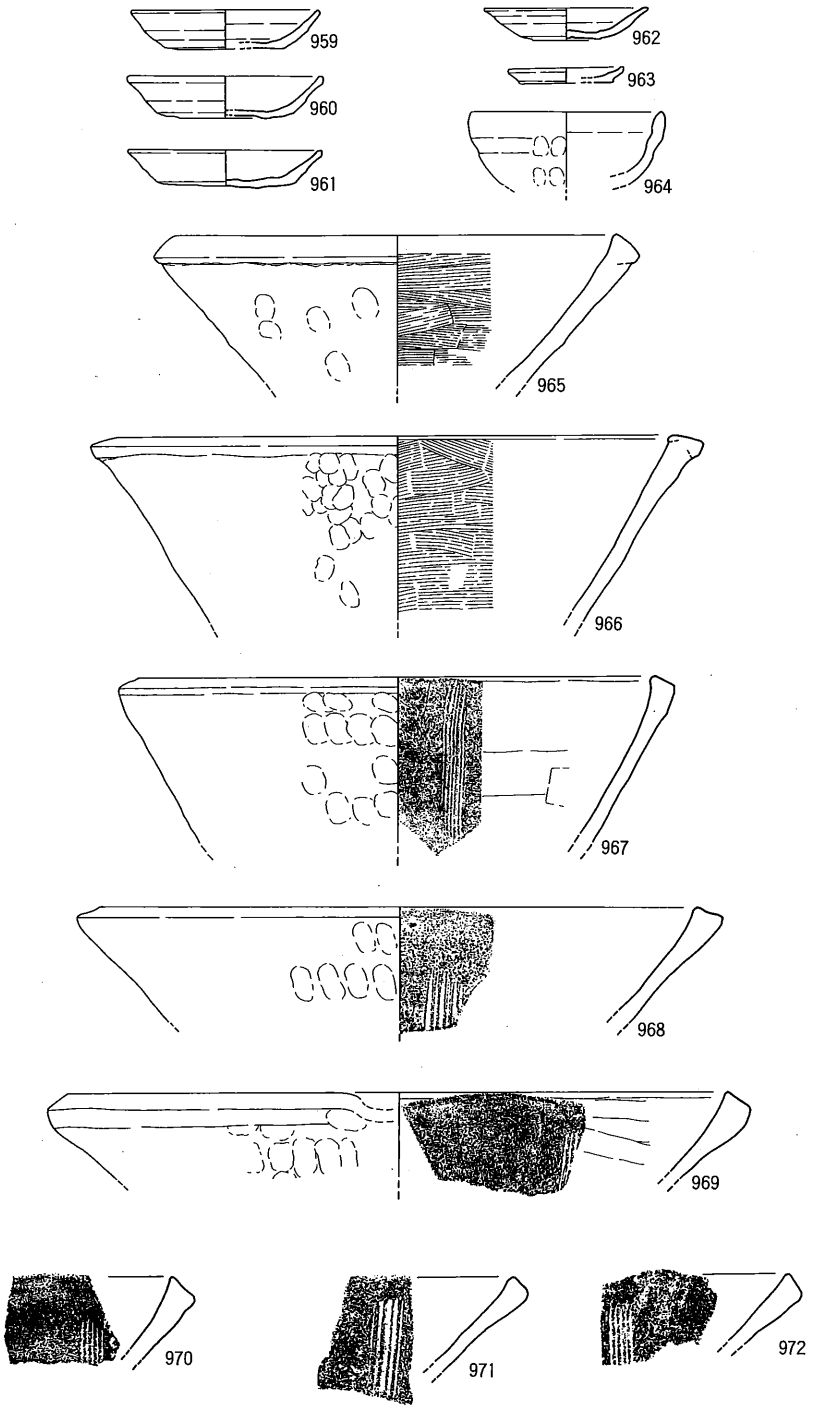
2号窯跡構築面（整地層上面）に堆積していた土器溜り出土の遺物である。杯・小皿・椀・捏鉢・擂鉢・足釜・鍋・焙烙・甕・壺・小壺・蓋ツマミ・亀山焼甕・備前焼甕などが28㍑入りコンテナで約40箱出土した。

土師質杯（959～962）・小皿（963）は，底部外面に回転ヘラ切り痕が認められ，比較的硬質な焼き上がりである。また胎土のきめも細かく，砂粒をほとんど含まない。これに対して，外面に指オサエ痕を残す手づくね状の椀（964）は，回転を利用しない肉厚な器壁をもち，胎土も肉眼上は楠井産土器と同一である。

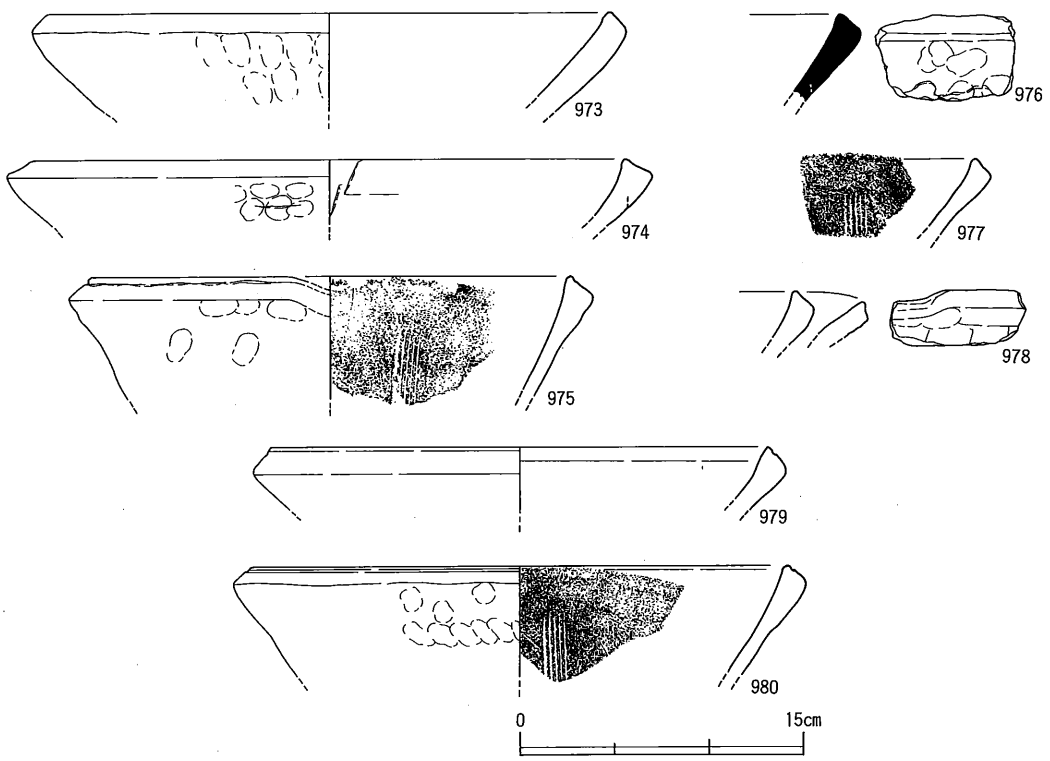
擂鉢（965～1028）には，ＡⅠ～Ⅳ類とＢⅠ・Ⅱ類があり，ほぼ全型式を認めることができる。数量的にはＡⅡ類が最も多く，ＡⅠ類がこれに次ぐ。ＡⅢ・Ⅳ類やＢⅠ・Ⅱ類はごく僅かであり，ほぼ図示した点数が認められる程度にとどまる。卸し目原体は，条数や条線の間隔によって11種類に分類可能である（第89表）。条数の確定できない原体1を除いて，5ないし6本を1単位とするのが中心である。中でも原体3・5（5本／1単位）が多用されている。また原体と型式との対応関係をみると，同一原体が複数型式にまたがるものが原体3（擂鉢ＡⅠ・Ⅱ類），原体5（擂鉢ＡⅡ・Ⅲ類），原体6（擂鉢ＡⅠ・Ⅱ・Ⅲ類）において認められる。ただし原体5では，ＡⅡ類とＡⅢ類では条線1本分の幅が異なっており，別原体とすべきかもしれない。このことから土器溜り1第Ⅰａ層で指摘できた，擂鉢ＡⅠ類原体とＡⅡ・Ⅲ類原体との断絶は認められず，むしろＡⅠ－2類とＡⅡ－2類との近縁性が看取される。原体5を使用した擂鉢の口縁部は，端面を強く回転ナデ調整することで，端面上端をツマミ上げたようにする特徴を共有している。これは同一製作者に起因する，微細なクセ（個体差）の表れた形態と，卸し目原体がよく対応した事例といえよう。

原体	本数／原体幅 (単位㎜)	点数	A類							B類	底部
			Ⅰ-2	Ⅰ-3	Ⅱ-1	Ⅱ-2	Ⅲ-2	Ⅲ-3	Ⅳ	Ⅱ	
1	2以上／6	1								1	
2	5／8	1				1					
3	5／11	10	6			1					3
4	5／10．5	2					1	1			
5	5／13	9			2	6					1
5′	5／13	2					1	1			
6	5／15	4	1			1	1				1
7	5／17	1								1	
8	6／10	1	1								
9	6／11	1						1			
10	6／16	1		1							
11	8／19	1							1		
合　計		33	7	1	2	9	3	3	1	2	5

第89表　土器溜り3出土擂鉢の卸し目原体と型式の対応関係



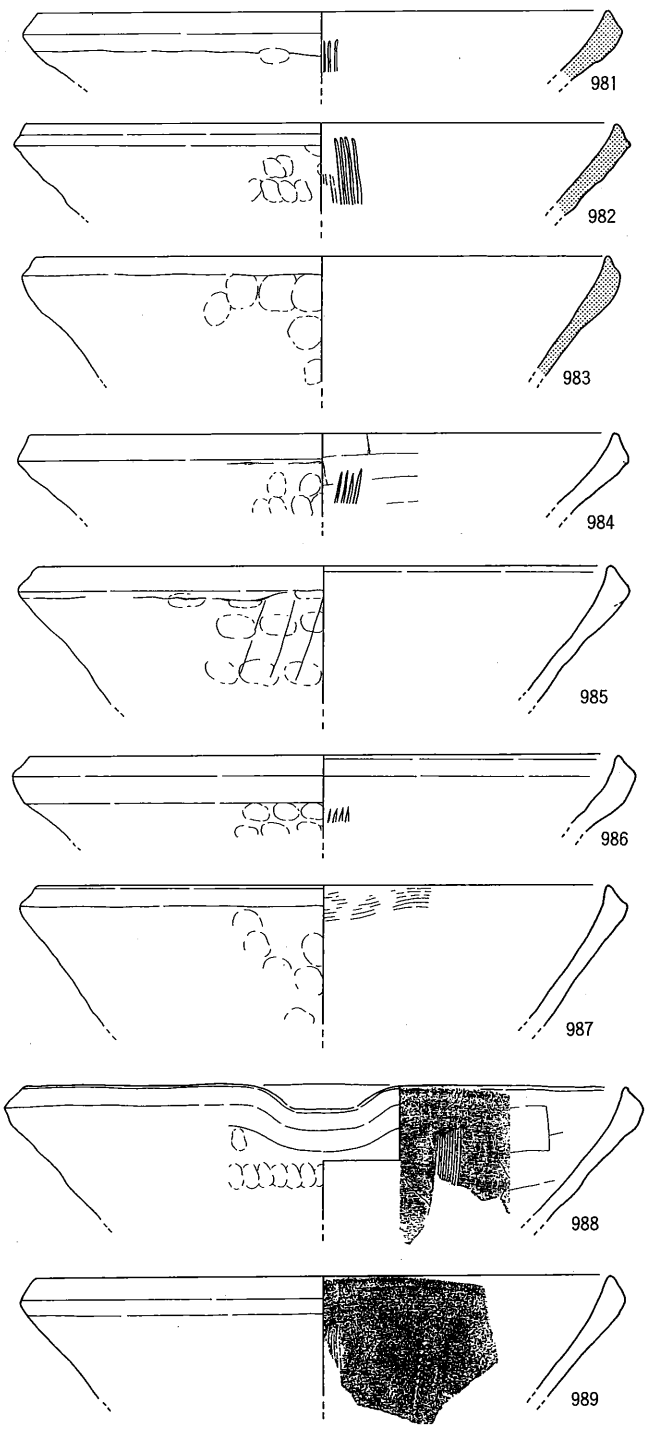
第179図　土器溜り３出土遺物(1)



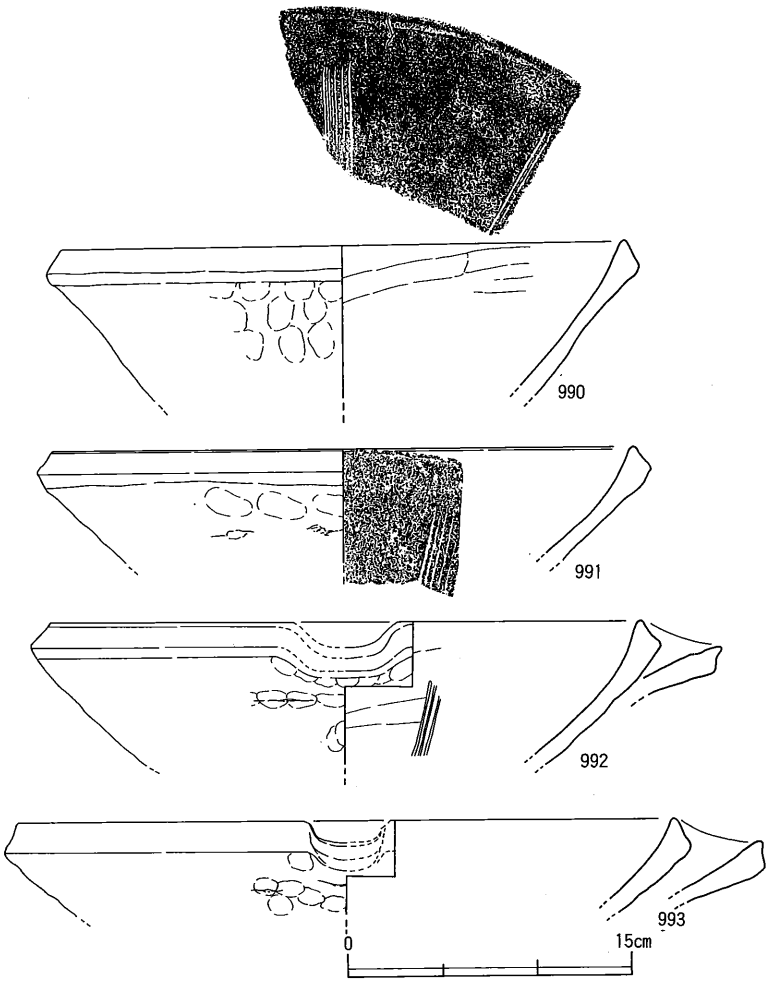
第180図　土器溜り３出土遺物(2)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法 外面	手法 内面	残存度
959	杯	(口)9.6 (高)2.1 (底)6.2	4mm以下の砂粒を微量	土師質	浅黄橙	(口・体)回転ナデ (底)ヘラ切り→ナデ	(口・体・底)回転ナデ	口唇1/4
960	杯	(口)9.8 (高)2.2 (底)7.2	精良	土師質	浅黄橙	(口・体)回転ナデ (底)ヘラ切り	(口・体・底)回転ナデ→ナデ	口唇1/2
961	杯	(口)11.0 (高)2.0 (底)7.3	1mm以下の砂粒を少量	土師質	浅黄橙	(口・体)回転ナデ (底)ヘラ切り→板ナデ	(口・体・底)回転ナデ	口唇2/5
962	杯	(口)8.6 (高)1.7 (底)4.6	1mm以下の砂粒を微量	土師質	浅黄橙	(口・体)回転ナデ (底)ヘラ切り	(口・体・底)回転ナデ	口唇1/8
963	小皿	(口)6.0	微細砂粒を少量	土師質	にぶい橙	(口・体)回転ナデ (底)ヘラ切り→ナデ	(口・体・底)回転ナデ	底部1/3
964	手捏ね椀	(口)10.0	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄褐	(口・体)横ナデ	(口・体)横ナデ	細片
965	擂鉢 A I	(口)23.0	1mm以下の砂粒	土師質	赤褐	(口)回転ナデ	(体)横ハケ→(口)回転ナデ	口唇1/9
966	擂鉢 A I	(口)28.6	3mm以下の砂粒	土師質	褐灰	(口)回転ナデ	(体)横ハケ	口唇1/8
967	擂鉢 A I	(口)27.2	3mm以下の砂粒	土師質	黒褐	(口)回転ナデ	(体)板ナデ	口唇1/8
968	擂鉢 A I	(口)33.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口唇1/10
969	擂鉢 A I	(口)34.7	2mm以下の砂粒を少量	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(体)板ナデ→(口)板ナデ	口唇1/8
970	擂鉢 A I	—	1mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
971	擂鉢 A I	—	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
972	擂鉢 A I	—	4mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ	調整不明	細片
973	擂鉢 A I	(口)29.5	3mm以下の砂粒	土師質	明褐	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口唇1/8
974	擂鉢 A I	(口)30.8	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
975	擂鉢 A I	(口)25.0	1mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(口)沈線→回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口唇1/5
976	擂鉢 A I	—	2mm以下の砂粒	須恵質	灰黄	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
977	擂鉢 A I	—	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
978	擂鉢 A I	—	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)板ナデ→(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
979	擂鉢 A I	(口)26.0	3mm以下の砂粒	土師質	灰白	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口唇1/8
980	擂鉢 A I	(口)27.9	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)沈線→回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口唇1/8

第90表　土器溜り３出土遺物観察表(1)



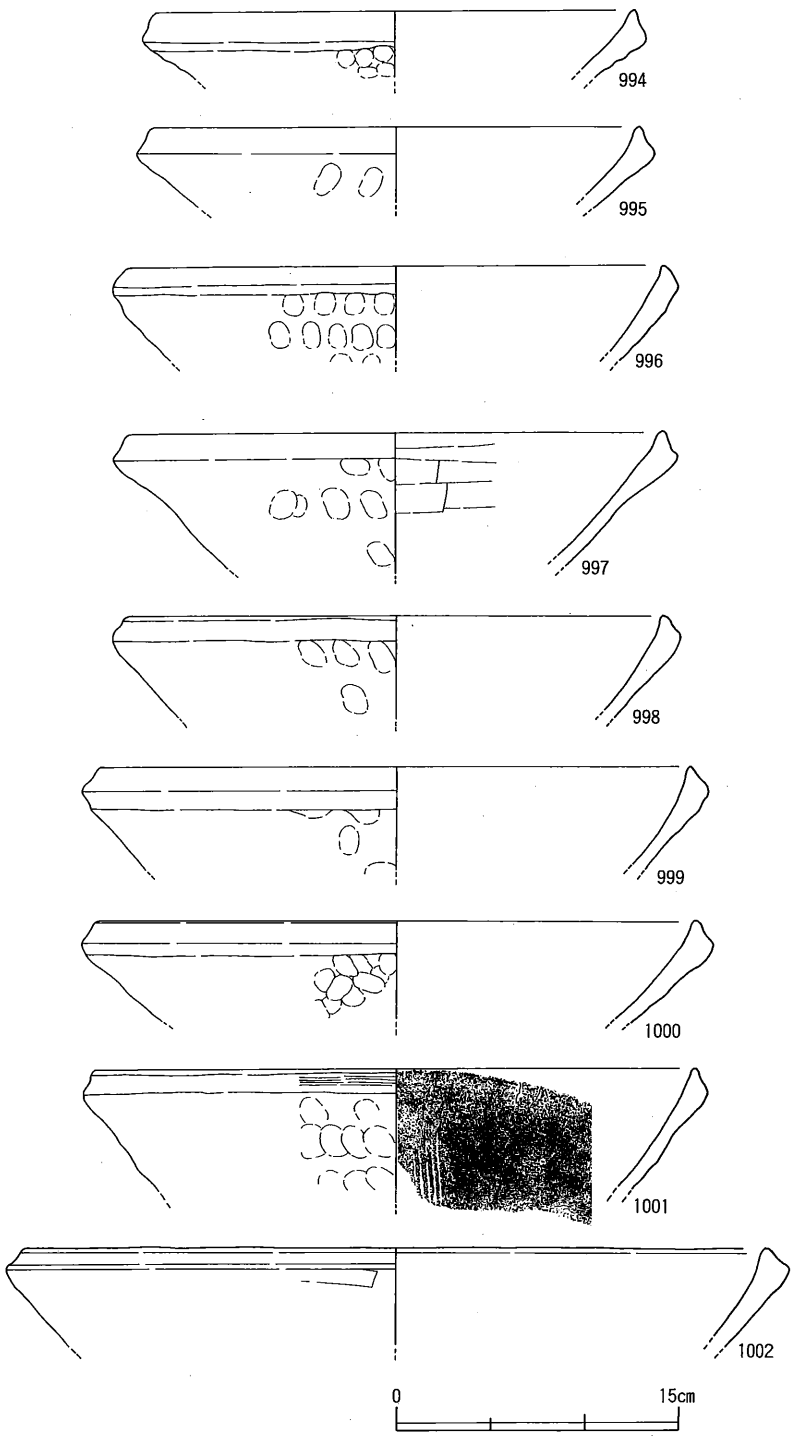
第181図　土器溜り３出土遺物(3)



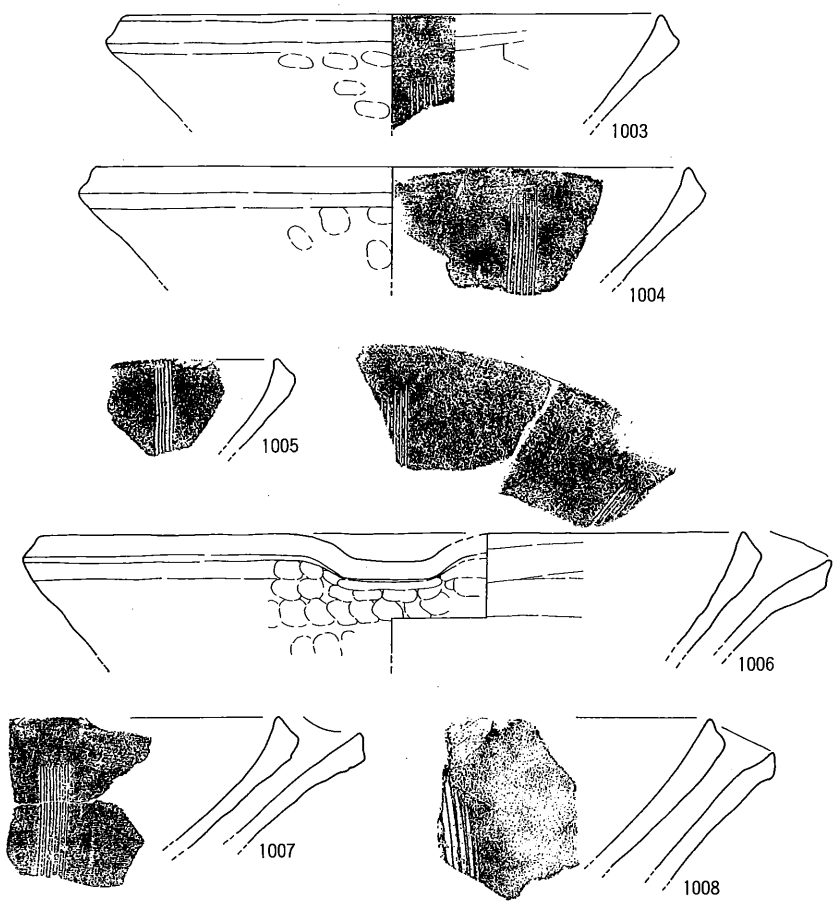
第182図　土器溜り３出土遺物(4)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
981	擂鉢 AⅡ	(口)29.6	2mm以下の砂粒	瓦質	(内・外)黒 (断)明黄褐	(口)回転ナデ	調整不明	細片
982	擂鉢 AⅡ	(口)30.6	2mm以下の砂粒	瓦質	黒褐	(口)回転ナデ	調整不明	口1/8
983	擂鉢 AⅡ	(口)29.0	2mm以下の砂粒	瓦質	灰黄褐	(口)回転ナデ	(口)回転ナデ	口1/12
984	擂鉢 AⅡ	(口)30.6	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/12
985	擂鉢 AⅡ	(口)30.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/4
986	擂鉢 AⅡ	(口)31.0	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/10
987	擂鉢 AⅡ	(口)30.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)横ハケ→(口)回転ナデ	口1/10
988	擂鉢 AⅡ	(口)32.0	1mm以下の砂粒	土師質	灰黄	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/5
989	擂鉢 AⅡ	(口)30.3	1mm以下の砂粒を少量	土師質	明黄褐	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/8
990	擂鉢 AⅡ	(口)29.4	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/8
991	擂鉢 AⅡ	(口)30.2	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/10
992	擂鉢 AⅡ	(口)30.8	2mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/12
993	擂鉢 AⅡ	(口)34.4	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ	調整不明	口1/8

第91表　土器溜り３出土遺物観察表(2)



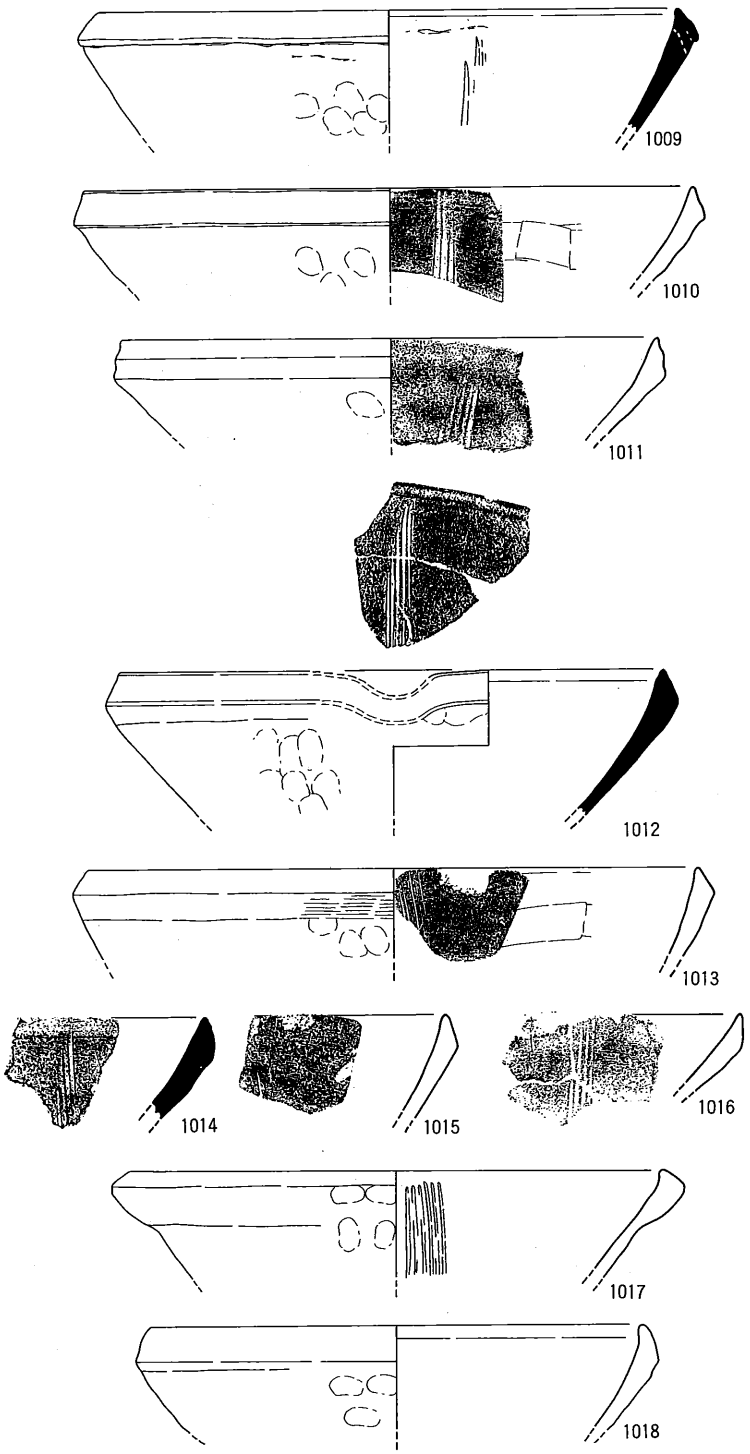
第183図　土器溜り 3 出土遺物(5)



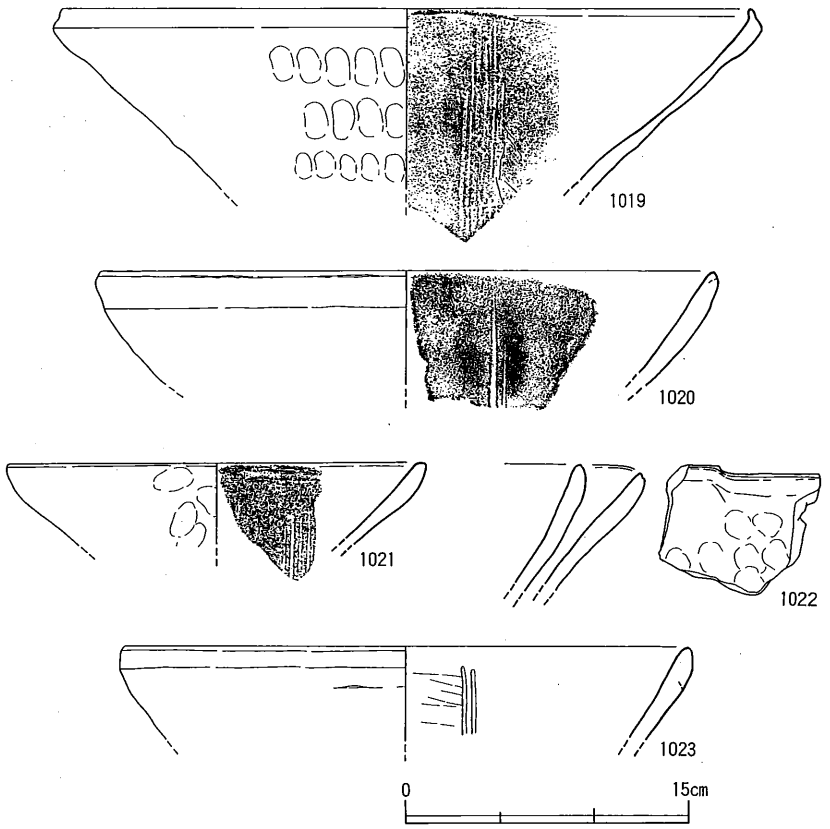
第184図　土器溜り３出土遺物(6)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
994	擂鉢 AII	(口)25.0	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
995	擂鉢 AII	(口)25.4	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
996	擂鉢 AII	(口)28.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/6
997	擂鉢 AII	(口)28.0	1mm以下の砂粒	土師質	灰黄	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/12
998	擂鉢 AII	(口)28.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
999	擂鉢 AII	(口)31.0	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/8
1000	擂鉢 AII	(口)31.2	2mm以下の砂粒	土師質	浅黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/12
1001	擂鉢 AII	(口)31.6	2mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(口)横ハケ(カキ目状)→回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/6
1002	擂鉢 AII	(口)39.0	4.5mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)板ナデ→回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/10
1003	擂鉢 AII	(口)28.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1004	擂鉢 AII	(口)31.0	1mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1005	擂鉢 AII	—	2mm以下の砂粒	土師質	(内外)黒 (断)にぶい橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1006	擂鉢 AII	(口)37.0	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄褐	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ→(口)回転ナデ	口1/6
1007	擂鉢 AII	—	2mm以下の砂粒	土師質	(外)にぶい橙 (内)浅黄	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ→(口)回転ナデ	細片
1008	擂鉢 AII	—	5mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片

第92表　土器溜り３出土遺物観察表(3)



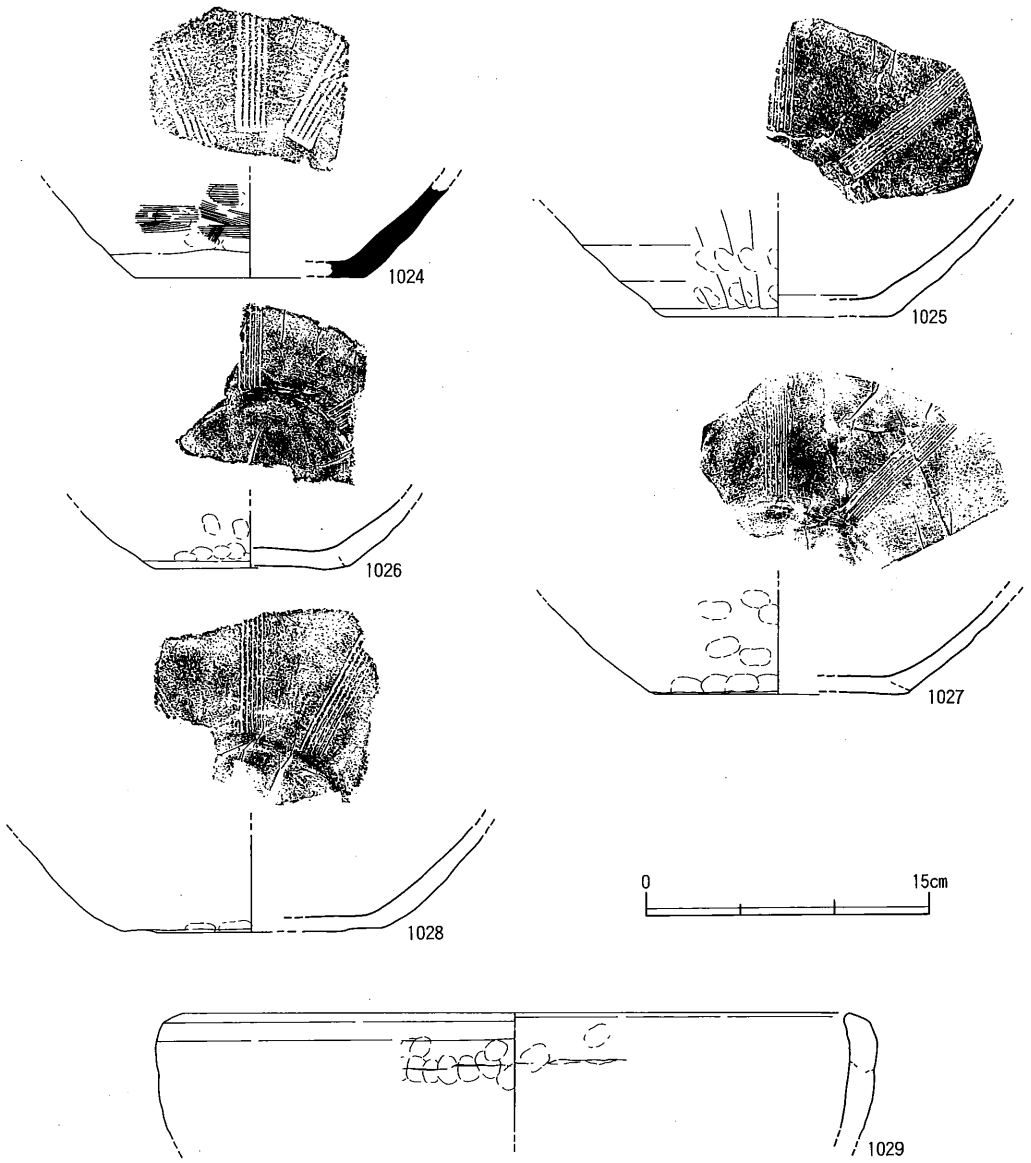
第185図　土器溜り３出土遺物(7)



第186図　土器溜り３出土遺物(8)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1009	擂鉢 AⅢ	(口)30.0	2mm以下の砂粒	須恵質	灰黄	(体)ナデ→(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ→ナデ	細片
1010	擂鉢 AⅢ	(口)31.8	1mm以下の砂粒を少量	土師質	にぶい黄橙	(体)ナデ→(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1011	擂鉢 AⅢ	(口)28.0	1mm以下の砂粒	土師質	明褐	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
1012	擂鉢 AⅢ	(口)28.5	2mm以下の砂粒を多量	須恵質	灰	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口唇1/8
1013	擂鉢 AⅢ	(口)32.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ハケ→回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1014	擂鉢 AⅢ	—	1mm以下の砂粒	須恵質	(内・外)灰 (断)にぶい橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
1015	擂鉢 AⅢ	—	3mm以下の砂粒を多量	土師質	灰	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1016	擂鉢 AⅢ	—	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
1017	擂鉢 AⅣ	(口)28.0	4mm以下の砂粒	土師質	(外)明褐 (内・断)赤褐	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
1018	擂鉢 AⅣ	(口)25.8	1mm以下の砂粒	土師質	明褐	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
1019	擂鉢 AⅣ	(口)36.0	4mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口唇1/6
1020	擂鉢 BⅠ	(口)32.0	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口唇1/10
1021	擂鉢 BⅠ	(口)21.8	2mm以下の砂粒を多量	土師質	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口唇1/8
1022	擂鉢 BⅠ	—	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
1023	擂鉢 BⅠ	(口)29.6	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ→(口)回転ナデ	細片

第93表　土器溜り３出土遺物観察表(4)



第187図　土器溜り３出土遺物(9)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1024	擂鉢 底部	(底)12.0	3mm以下の砂粒	須恵質	灰黄褐	(体)板ナデ(底際)削り状ナデ	(体・底)板ナデ	底1/5
1025	擂鉢 底部	(底)12.0	2mm以下の砂粒	土師質	浅黄	(体)板ナデ→(底際)削り状ナデ	(体・底)板ナデ	底1/4
1026	擂鉢 底部	(底)10.0	1mm以下の砂粒	土師質	(外)にぶい橙(内)明黄褐	(底際)強い横ナデ	(体・底)板ナデ	底1/4
1027	擂鉢 底部	(底)13.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(底)ナデ	(体・底)板ナデ	底1/4
1028	擂鉢 底部	(底)14.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	無調整	(体・底)回転ナデ	底1/4
1029	鉢	(口)35.0	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(体)ナデ→(口)横ナデ	(体)ナデ→(口)横ナデ	口1/12

第94表　土器溜り３出土遺物観察表(5)

擂鉢ＡⅠ類（965～980）には，ＡⅠ－１類も少量みられる（965・966）が，多くはＡⅠ－２類（967～980）である。土器溜り１第Ⅰａ層の資料と比較すると，体部外面に縦ハケ調整がみられず，また内面調整もハケ目ではなく木目の浮き出ない板ナデである点が異なる。現状ではこれを時期差か工人差か判断できないが，一応工人差と理解しておく。また回転ナデが不十分なために，先行して行われた内面調整（板ナデ）によって口縁にはみ出した部分が接合痕状の沈線となって残る例（975・979・980）も認められる。

擂鉢ＡⅡ類（981～1008）は，外傾する口縁部端面を１段回転ナデ調整する。内面には横方向の板ナデ調整が施される。体部に比べて口縁端部はやや器壁の厚いものが多く，回転ナデ調整によって端部が上方に挽き出されたようにみえるＡⅡ－２類が多い。985は体部外面に縦方向の板ナデ調整を施す。

擂鉢ＡⅢ類（1009～1016）は，直立気味の口縁部端面に２段ないし幅広い１段の回転ナデ調整を行う。いずれもシャープな端部をもつもので，土器溜り１のＡⅢ－１類にあたるが，中に口縁部最上段に幅の広い粘土紐を接合して，肥厚した縁帯状の端部とするやや特異な一群（1009・1010）がある。前者は，第Ⅳ期初頭の備前焼擂鉢に似た形態である。

擂鉢ＡⅣ類（1017～1019）は，口縁端部のツマミ出しが強いもの（1019）と弱いもの（1017・1018）がある。1018は，あるいは東播系須恵器捏鉢の模倣形態か。

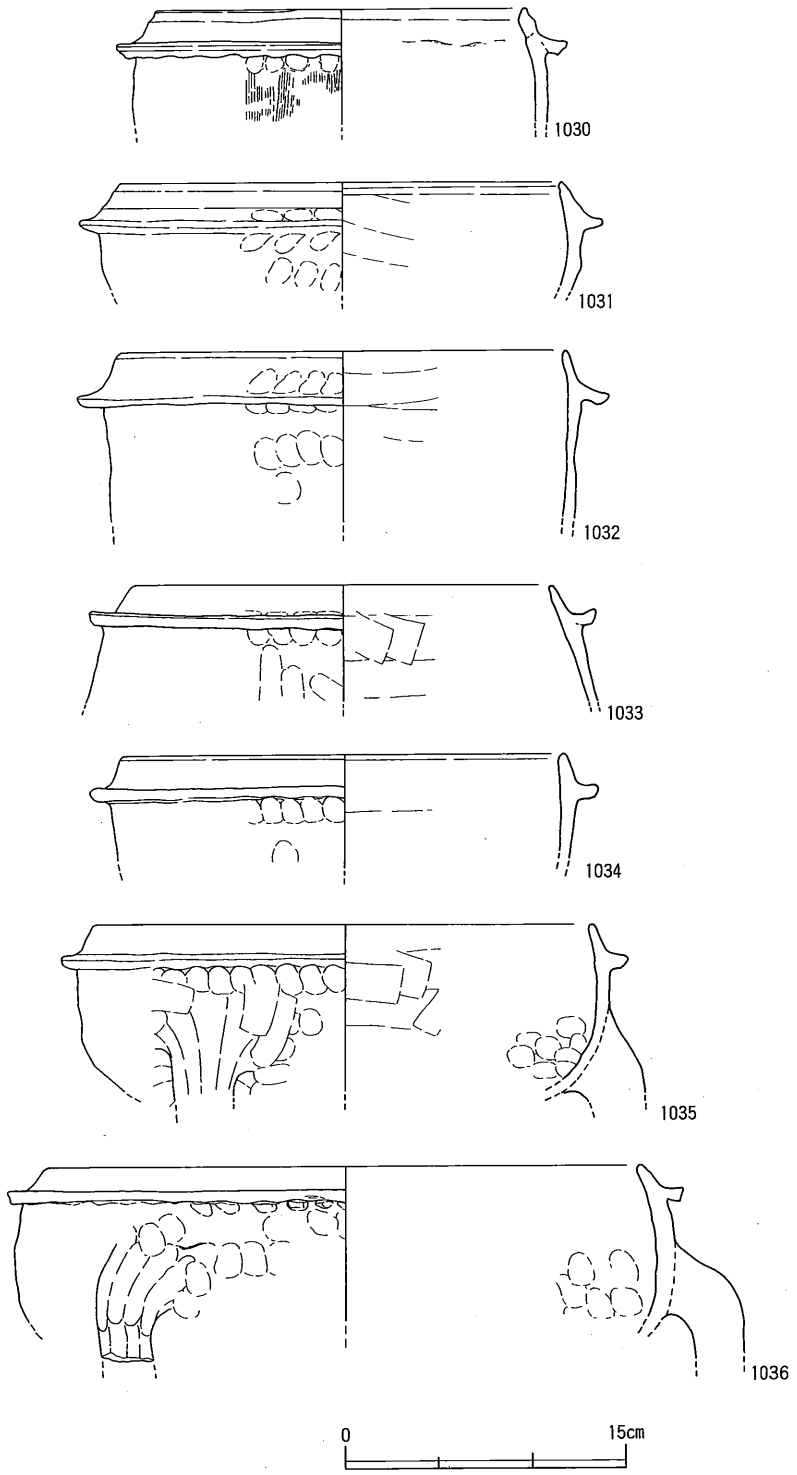
擂鉢ＢⅠ類（1020）は，回転ナデ調整によって口縁部に端面状のアクセントをつけるが，土器溜り１のＢⅠ類（178・372）よりもナデが弱い。ＢⅡ類（1021～1023）同様，卸し目の条数は少なく，また粗雑に施している。

1029は捏鉢もしくは火鉢と考えられる。

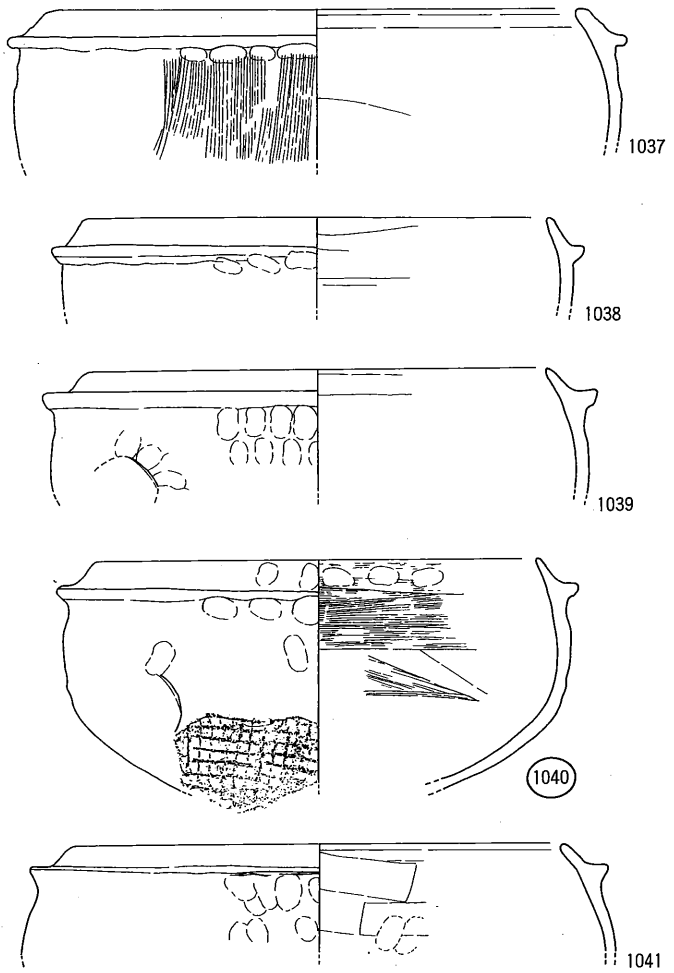
土師質足釜（1030～1087）にはＢⅡ～Ⅳ類とＣ類があるが，ＢⅡ類は少なく，大半がＢⅢ・Ⅳ類である。またＣ類は図示した２点が認められただけであった。

足釜ＢⅡ類（1030～1034）は形態にバリエーションがあり，一定していない。1031は口縁端部から鍔端部までの外面を３段に強く横ナデ調整し，弱い稜線を形成する。あるいは鉄製羽釜を意識したものか。胎土・焼成は典型的な楠井産土器の特徴をもつ。1032・1033は底の深い体部をもち，特に1032は脚部をもたない羽釜である可能性もある。

足釜ＢⅢ類（1035～1064）には，接合痕や断面の状況，あるいは内面調整の重複から，鍔部を屈折（外反）させる口縁２技法と考えられるものが存在する（1047・1048・1051・1059）。また内面の板ナデ（横ハケ）調整が，口縁部から体部まで連続するものについては，鍔部を貼付する口縁１技法による可能性が考えられるが，1064のように断面形態から



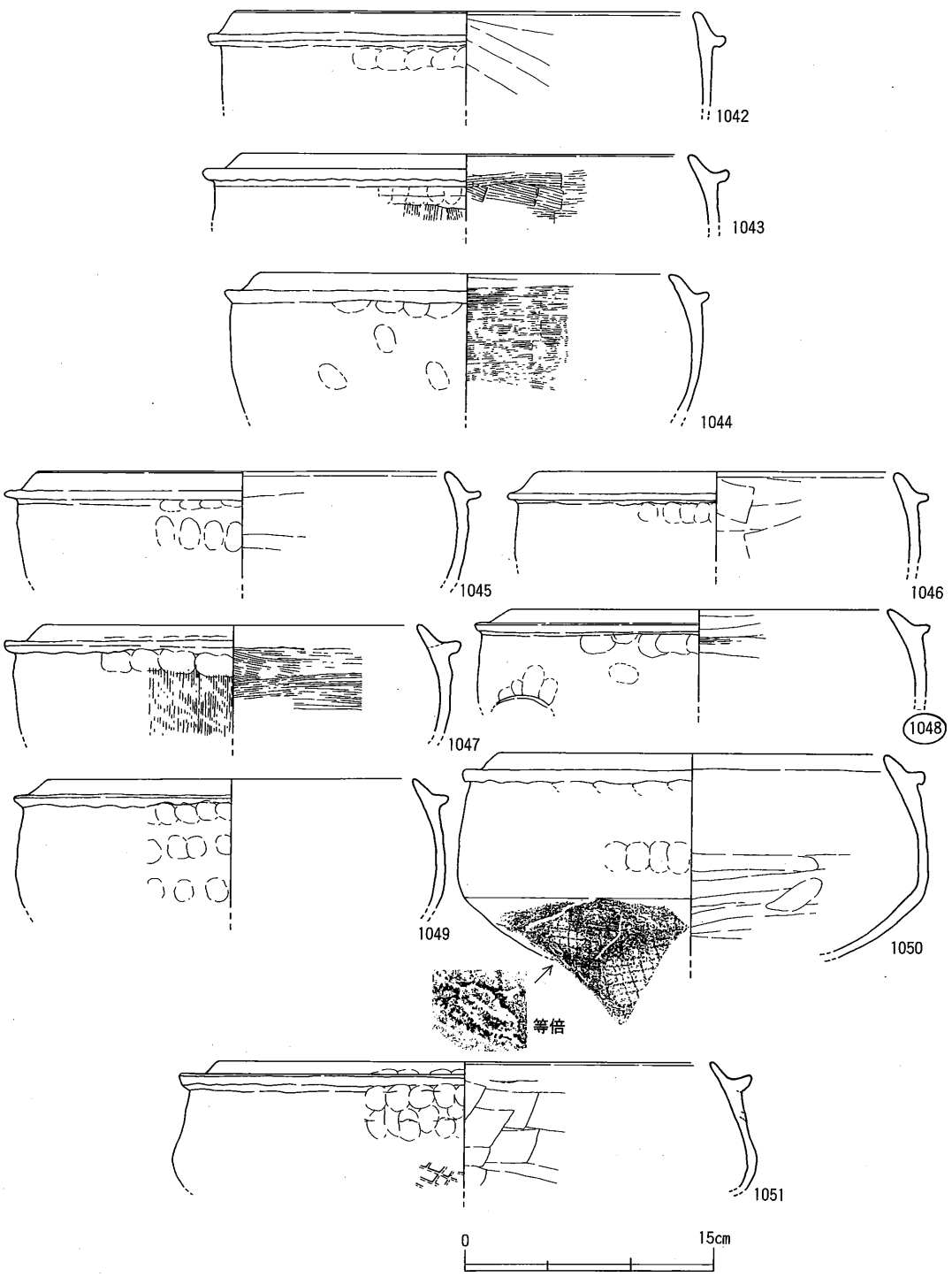
第188図　土器溜り３出土遺物(10)



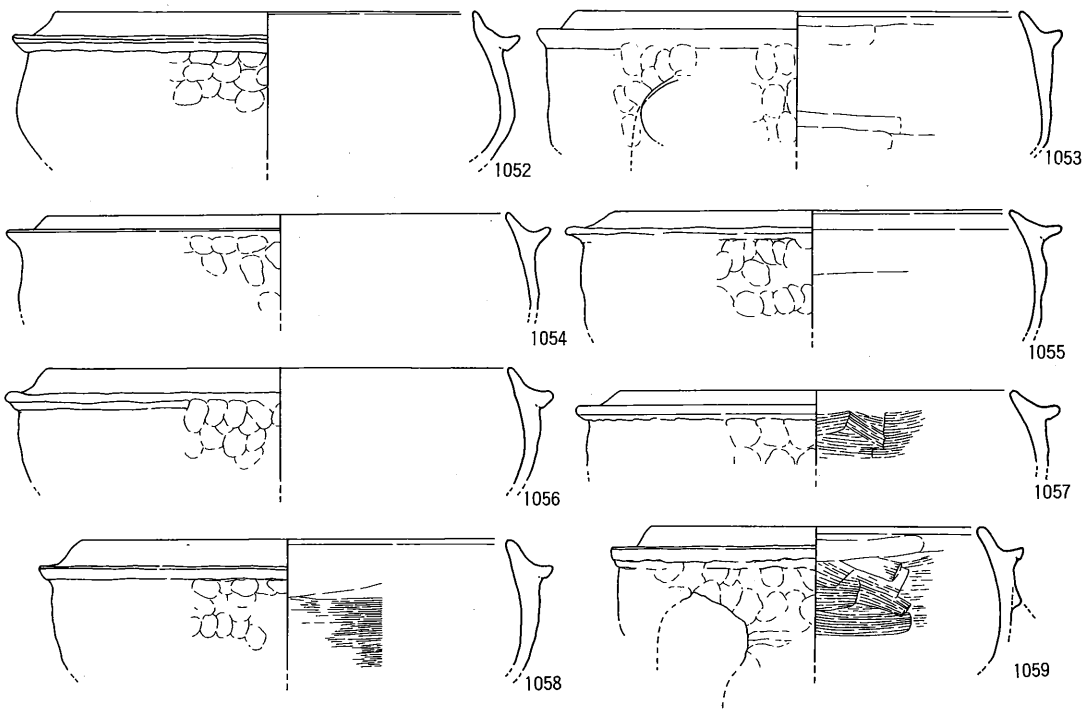
第189図　土器溜り３出土遺物(11)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1030	足釜 BII	(口)19.6	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)横ナデ	口1/6
1031	足釜 BII	(口)23.0	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/10
1032	足釜 BII	(口)23.4	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/8
1033	足釜 BII	(口)22.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい赤褐	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/7
1034	足釜 BII	(口)23.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/8
1035	足釜 BIII	(口)26.0	4mm以下の砂粒	土師質	橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(体)板ナデ？→(口・肩)横ナデ	口1/8
1036	足釜 BIII	(口)31.4	3mm以下の砂粒を多量	土師質	明赤褐	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(体)押圧→(口・肩)横ナデ	口1/8
1037	足釜 BIII	(口)27.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(体)板ナデ→(口・肩)横ナデ	口1/6
1038	足釜 BIII	(口)24.0	1mm以下の砂粒	土師質	明褐	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/4
1039	足釜 BIII	(口)24.0	1mm以下の砂粒	土師質	赤褐	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/6
1040	足釜 BIII	(口)23.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ (底)格子叩き目	(口)押圧→(口・体)板ナデ→(底)板ナデ	口2/3
1041	足釜 BIII	(口)25.6	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/6

第95表　土器溜り３出土遺物観察表(6)



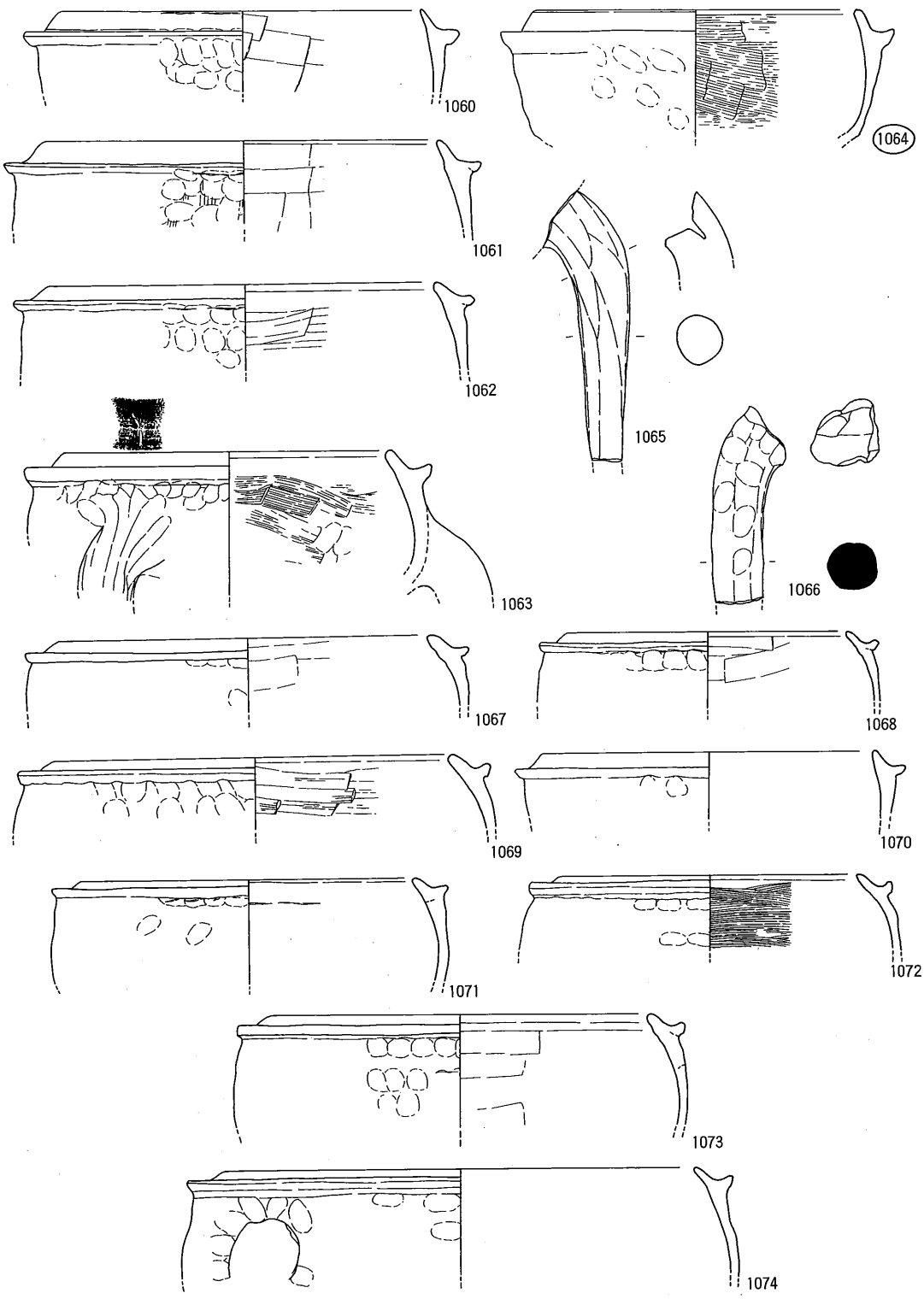
第190図　土器溜り３出土遺物(12)



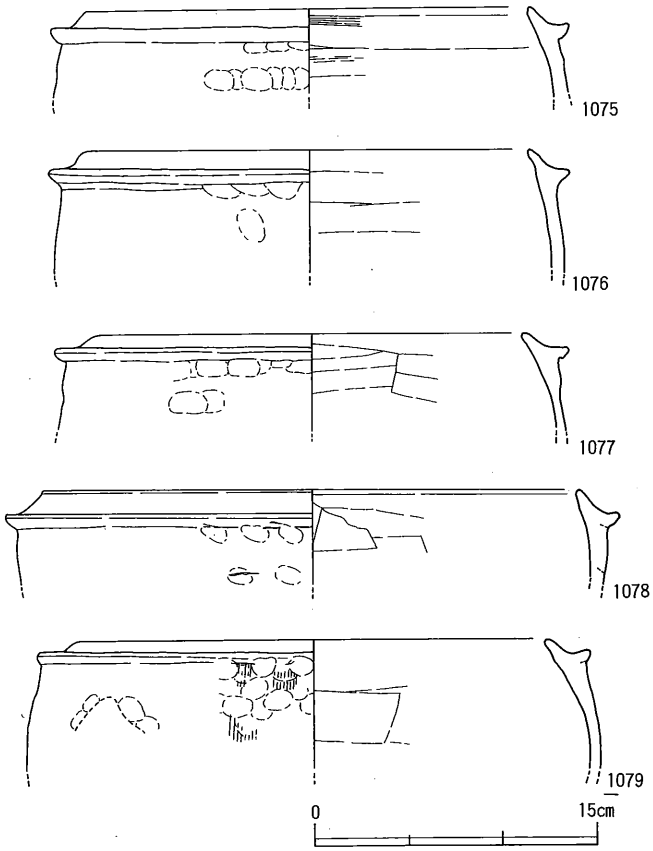
第191図　土器溜り３出土遺物(13)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1042	足釜 BIII	(口)27.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/10
1043	足釜 BIII	(口)26.6	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい赤褐	(体)縦ハケ→(胴)押圧→→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	口径1/8
1044	足釜 BIII	(口)24.0	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	口径1/12
1045	足釜 BIII	(口)24.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/10
1046	足釜 BIII	(口)21.0	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/6
1047	足釜 BIII	(口)22.0	3mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(体)縦ハケ→(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)横ハケ→(口)横ナデ	口径1/6
1048	足釜 BIII	(口)22.2	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1049	足釜 BIII	(口)21.6	5mm以下の砂粒を多量	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	調整不明	口径1/8
1050	足釜 BIII	(口)23.3	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ (底)羊歯文	(体)ナデ→(口)横ナデ→(底)横ナデ	口径1/4
1051	足釜 BIII	(口)29.2	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口)横ナデ (底)格子叩き目	(体)板ナデ (口)横ナデ	口径1/8
1052	足釜 BIII	(口)21.8	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	調整不明	口径1/8
1053	足釜 BIII	(口)23.4	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/8
1054	足釜 BIII	(口)24.0	1mm以下の砂粒	土師質	(内・外)オリーブ黒 (断)灰白	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	調整不明	口径1/8
1055	足釜 BIII	(口)20.6	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/10
1056	足釜 BIII	(口)24.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)ナデ→(口)横ナデ	口径1/8
1057	足釜 BIII	(口)20.4	1mm以下の砂粒	土師質	黄橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	口径1/8
1058	足釜 BIII	(口)23.2	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)横ハケ→板ナデ	口径1/8
1059	足釜 BIII	(口)17.5	1mm以下の砂粒、5mm程の小石	土師質	にぶい赤褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)横ハケ→(口)板ナデ	口径1/4

第96表　土器溜り３出土遺物観察表(7)



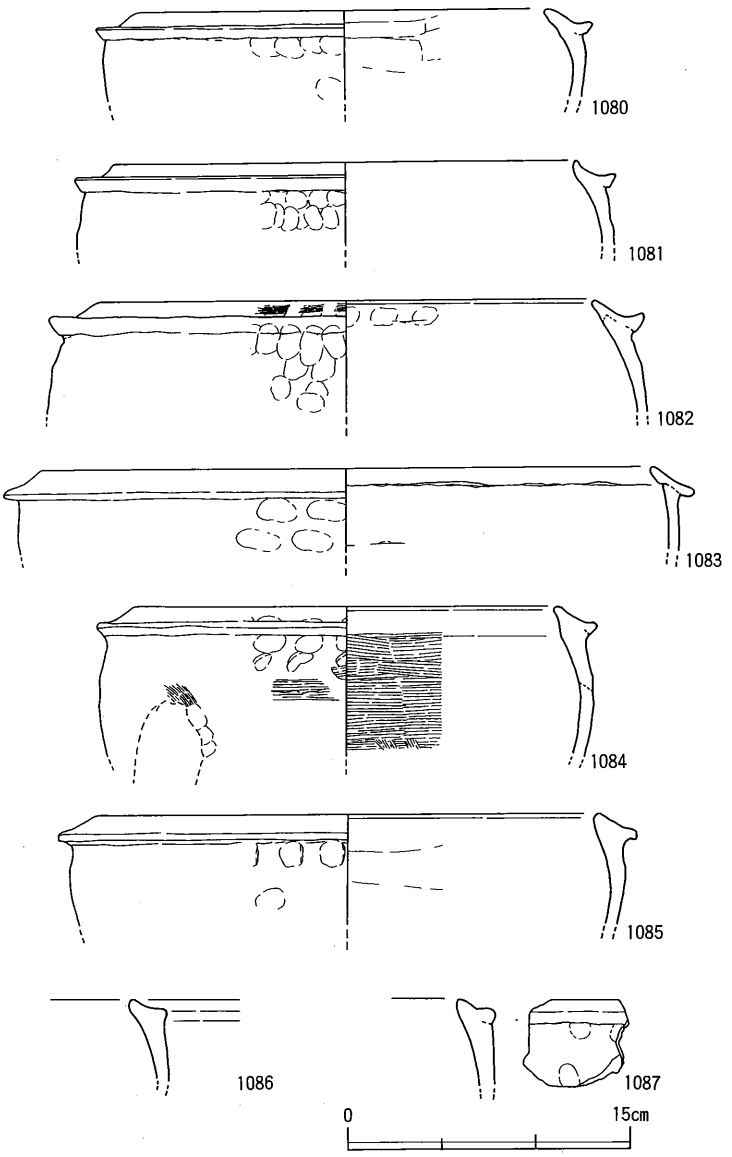
第192図　土器溜り３出土遺物(14)



第193図　土器溜り３出土遺物(15)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1060	足釜 BⅢ	(口)21.8	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/6
1061	足釜 BⅢ	(口)23.6	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/8
1062	足釜 BⅢ	(口)25.4	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/8
1063	足釜 BⅢ	(口)20.1	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(胴)押圧→(口)横ナデ→記号文？	(口)横ナデ (体)横ハケ	口1/4
1064	足釜 BⅢ	(口)19.6	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	細片
1065	足釜 脚部	—	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	ナデ		細片
1066	足釜 脚部	—	2mm以下の砂粒	須恵質	灰	オサエ→ナデ	(体)横ハケ	細片
1067	足釜 BⅣ	(口)22.2	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/4
1068	足釜 BⅣ	(口)17.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/4
1069	足釜 BⅣ	(口)24.6	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/4
1070	足釜 BⅣ	(口)20.2	3mm以下の砂粒を多量	土師質	橙	(胴)押圧→調整不明	調整不明	口1/6
1071	足釜 BⅣ	(口)20.4	2mm以下の砂粒	土師質	明褐	(胴)押圧→調整不明	調整不明	口1/5
1072	足釜 BⅣ	(口)18.0	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	口1/5
1073	足釜 BⅣ	(口)23.2	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/4
1074	足釜 BⅣ	(口)29.0	2mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	口1/3
1075	足釜 BⅣ	(口)23.0	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/8
1076	足釜 BⅣ	(口)23.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/5
1077	足釜 BⅣ	(口)22.0	1mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/5
1078	足釜 BⅣ	(口)27.8	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい赤褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/8
1079	足釜 BⅣ	(口)24.2	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/5

第97表　土器溜り３出土遺物観察表(8)



第194図　土器溜り３出土遺物(16)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1080	足釜 BIV	(口)21.0	5mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/6
1081	足釜 BIV	(口)24.2	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	調整不明	口1/8
1082	足釜 BIV	(口)25.8	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)ナデ→(口)横ナデ	口1/8
1083	足釜 BIV	(口)26.0	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	口1/12
1084	足釜 BIV	(口)21.6	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(胴)２段押圧→(口・胴)横ナデ	(体)横ハケ→(口)横ナデ	口1/5
1085	足釜 BIV	(口)26.8	2mm以下の砂粒	土師質	褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/8
1086	足釜 C	—	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・体)横ナデ	(口・体)横ナデ	細片
1087	足釜 C	—	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	細片

第98表　土器溜り３出土遺物観察表(9)

むしろ口縁２技法に近いものも存在し，判断が難しい。また1063の口縁部外面には，ヘラ描きの刻線状のものがみられるが，極めて浅く弱いものである点で他の刻線事例とは異なる。工具が偶然当たった可能性も大きい。

足釜脚部で特異な事例を２点図示した。1065は脚基部中央に長さ1.6cm，径0.4cm程の芯状の痕跡がみられる。土器溜り１でもみられたように（490），脚部接合時に棒状の補強材が挿入されていた可能性がある。また1066は須恵質焼成の脚部であり，断面中心まで完全に還元している。欠損した足釜脚部を窯道具として転用したものであろう。

足釜ＢⅣ類（1067～1085）は，口縁部と鍔部が極めて短い。1083は接合痕の状況から，体部上端に薄く延ばした粘土紐をのせて口縁部と鍔部を一緒に作る，口縁３技法の典型的な事例といえる。断面形態や接合痕の状況から，1080～1085もこの技法で口縁部・鍔部を成形している可能性が高い。

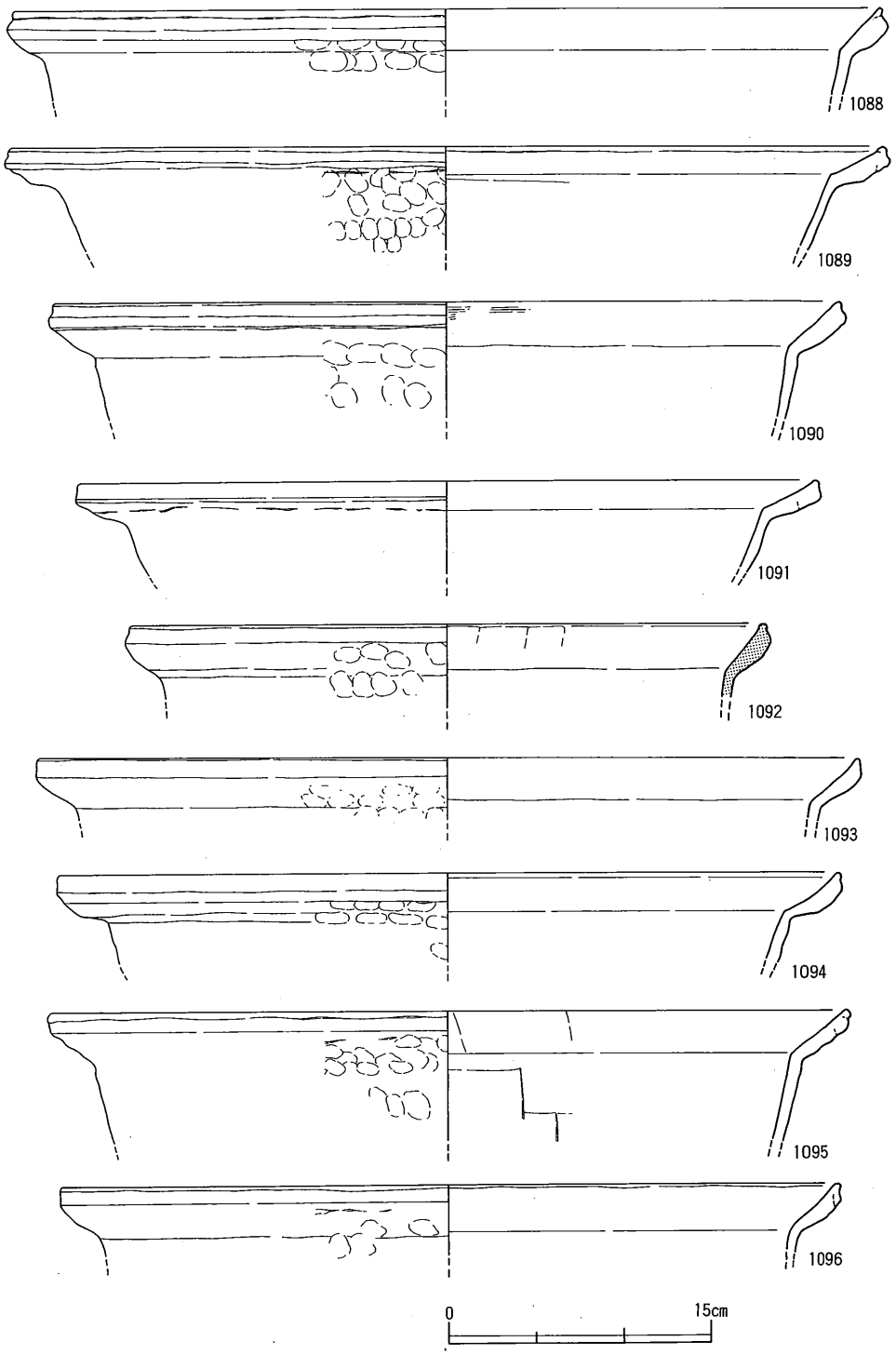
土師質鍋（1088～1143）には，ＡⅡ・Ⅲ類ＢⅠ～Ⅳ類がある。ＡⅡ類とＢⅡ・Ⅲ類が主体であり，ＡⅢ類とＢⅠ・Ⅳ類はわずかな量を占めるに過ぎない。

鍋ＡⅡ類（1088～1100）は，口縁部器壁に対して直交する端面をもつもの（ＡⅡ－１類：1088～1091）もあるが，斜交して垂直気味の端面をもつもの（ＡⅡ－２類：1092～1100）の方が多い。これは，土器溜り２出土遺物と同様な傾向であるといえよう。ＡⅡ－２類には，口縁部内外面を強く板ナデ調整するために端部へ粘土がはみ出し，接合痕状に窪んだ端面をもつもの（1097～1099）がみられるが，これも土器溜り２と同じである。

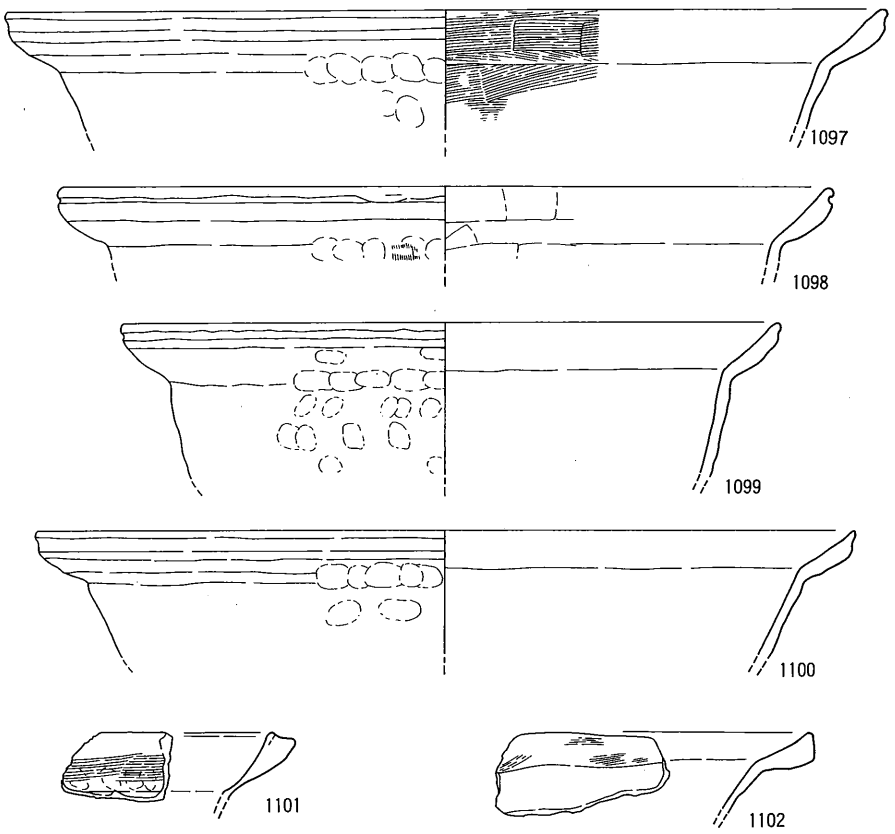
鍋ＡⅢ類（1101・1102）は，口縁部内面にやや粗い横ハケ調整を施す。1101は端面が拡張して凹面を形成する。擂鉢ＡⅠ－２類と同様な技法的特徴といえよう。

鍋ＢⅡ類（1105～1121）は，口縁部内面に幅の狭い板ナデか横ハケを２～３段施し，内弯した器表を平滑にしている。1105は端面に横ハケ調整が認められ，手法的に鍋ＡⅠ類に近い要素をもつといえよう。1115は弱く内弯した口縁部内面をもつが，外面は直線的に伸びており，また内面の板ナデは１段である。あるいはＡⅡ類の範疇で捉えた方がよいかもしれない。1117～1121は直立気味の口縁部と屈曲の弱い頸部をもつ。内面では頸部の屈曲は明瞭であるが，外面では極めて弱く緩やかなカーブを描く。

鍋ＢⅢ類（1122～1131）には，口縁部外面に木目状圧痕をもつもの（1128・1129）がある。この圧痕については，既に観察したようにハケ目とは異なる特徴をもっている。まず1129で指摘できるように，口縁部端面から下面（外面）まで器壁の屈曲を超えて連続していることである。これをハケ目で行うとすれば，器面の向きや凹凸の変化にもかかわらず



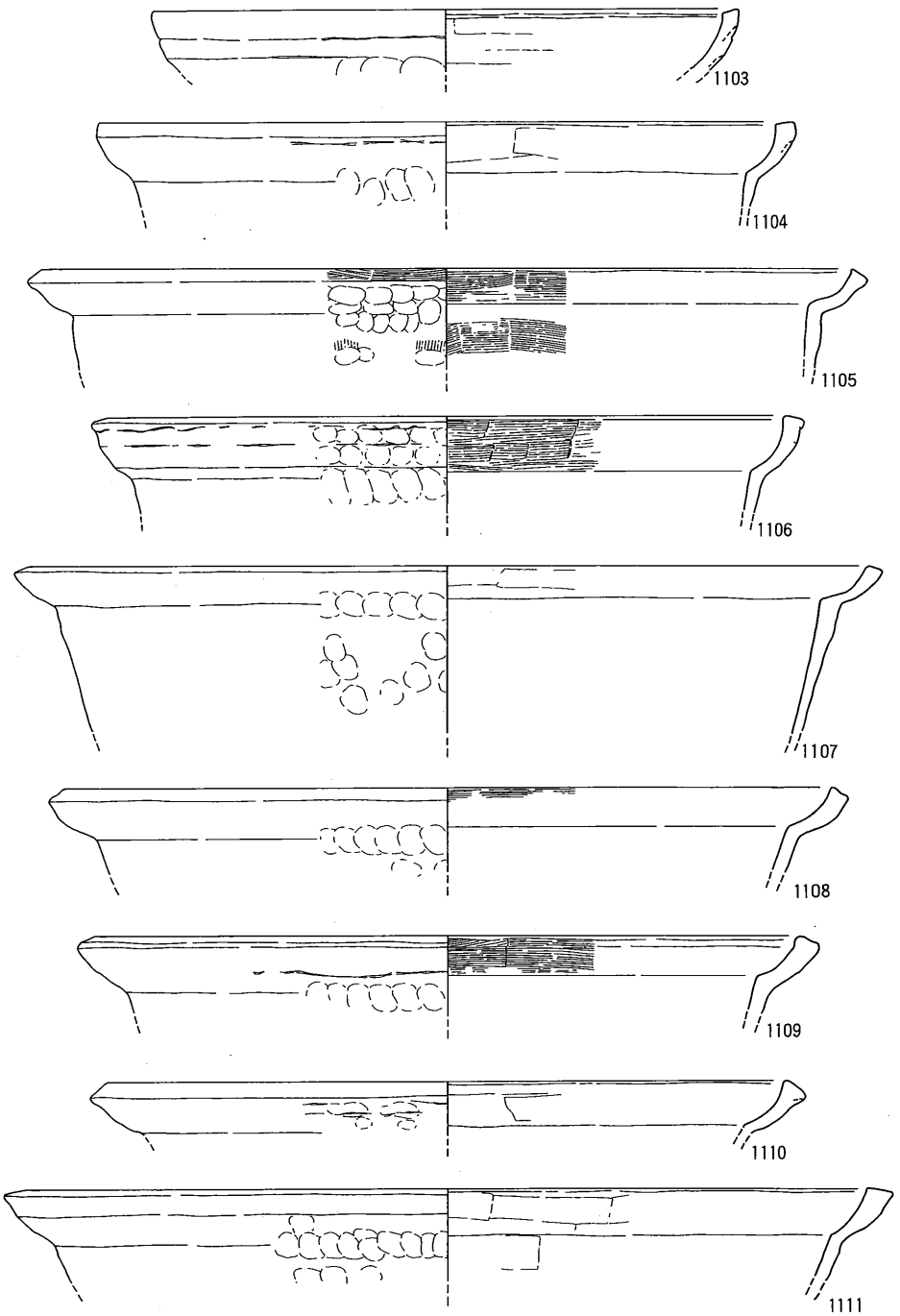
第195図　土器溜り３出土遺物(17)



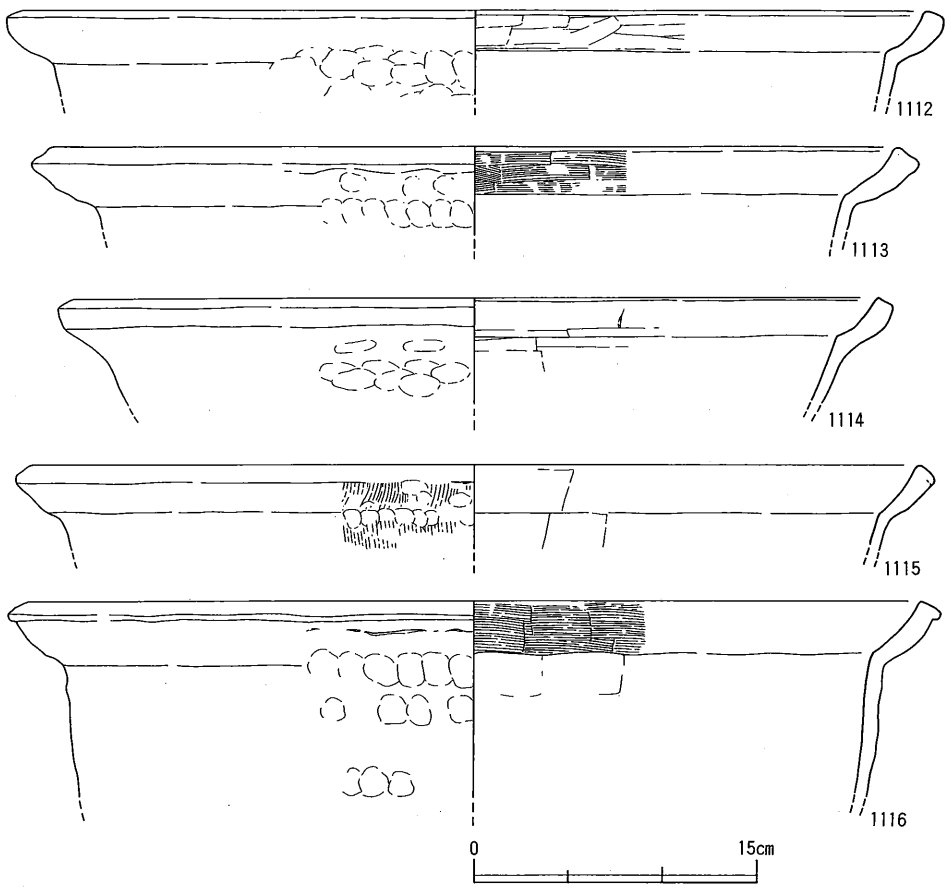
第196図　土器溜り３出土遺物(18)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1088	鍋 AII	(口)48.4	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)横ナデ	細片
1089	鍋 AII	(口)48.8	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口唯1/6
1090	鍋 AII	(口)44.2	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口)横ハケ	細片
1091	鍋 AII	(口)41.5	3mm以下の砂粒	土師質	(外)にぶい褐 (内)橙	(口)横ナデ	(口・体)横ナデ	口唯1/8
1092	鍋 AII	(口)36.0	2mm以下の砂粒	瓦質	褐灰	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1093	鍋 AII	(口)46.2	1mm以下の砂粒	土師質	(外)明赤褐 (内)橙	(口)横ナデ	調整不明	口唯1/8
1094	鍋 AII	(口)44.0	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口・体)横ナデ	
1095	鍋 AII	(口)44.8	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	口唯1/8
1096	鍋 AII	(口)44.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい赤褐	(口)横ナデ	(口・体)横ナデ	細片
1097	鍋 AII	(口)46.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(体)横ハケ→(口)横ハケ	口唯1/8
1098	鍋 AII	(口)40.2	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1099	鍋 AII	(口)35.0	1mm以下の砂粒	土師質	明褐	(口)横ナデ	(口・体)横ナデ	口唯1/8
1100	鍋 AII	(口)43.0	1mm以下の砂粒	土師質	(外)にぶい橙 (内)橙	(口)横ナデ	(口・体)横ナデ	口唯1/12
1101	鍋 AIII	—	1.5mm以下の砂粒	土師質	灰	(口)横ナデ	(口)横ハケ	細片
1102	鍋 AIII	—	3.5mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口)横ハケ	細片

第99表　土器溜り３出土遺物観察表(10)



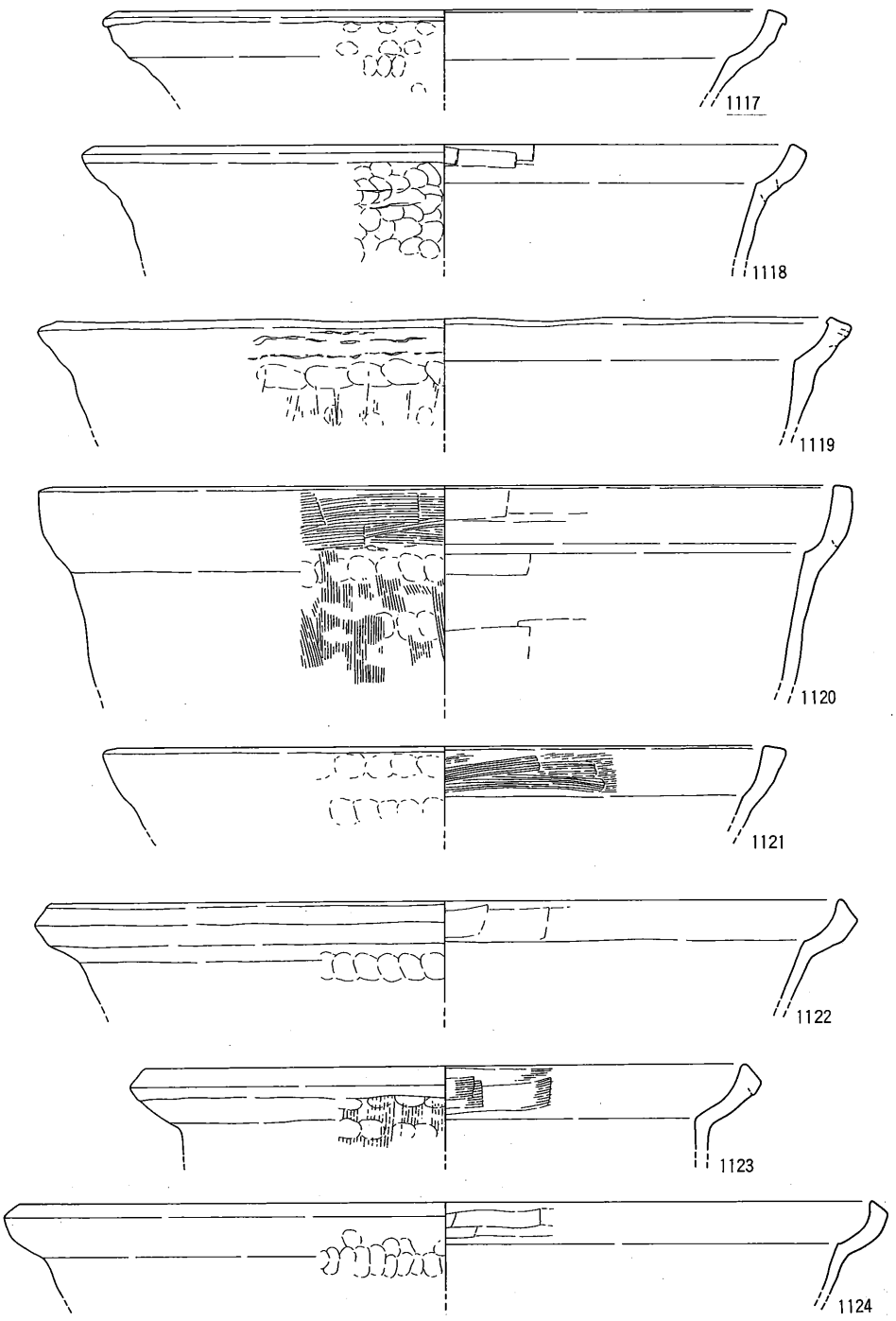
第197図　土器溜り３出土遺物(19)



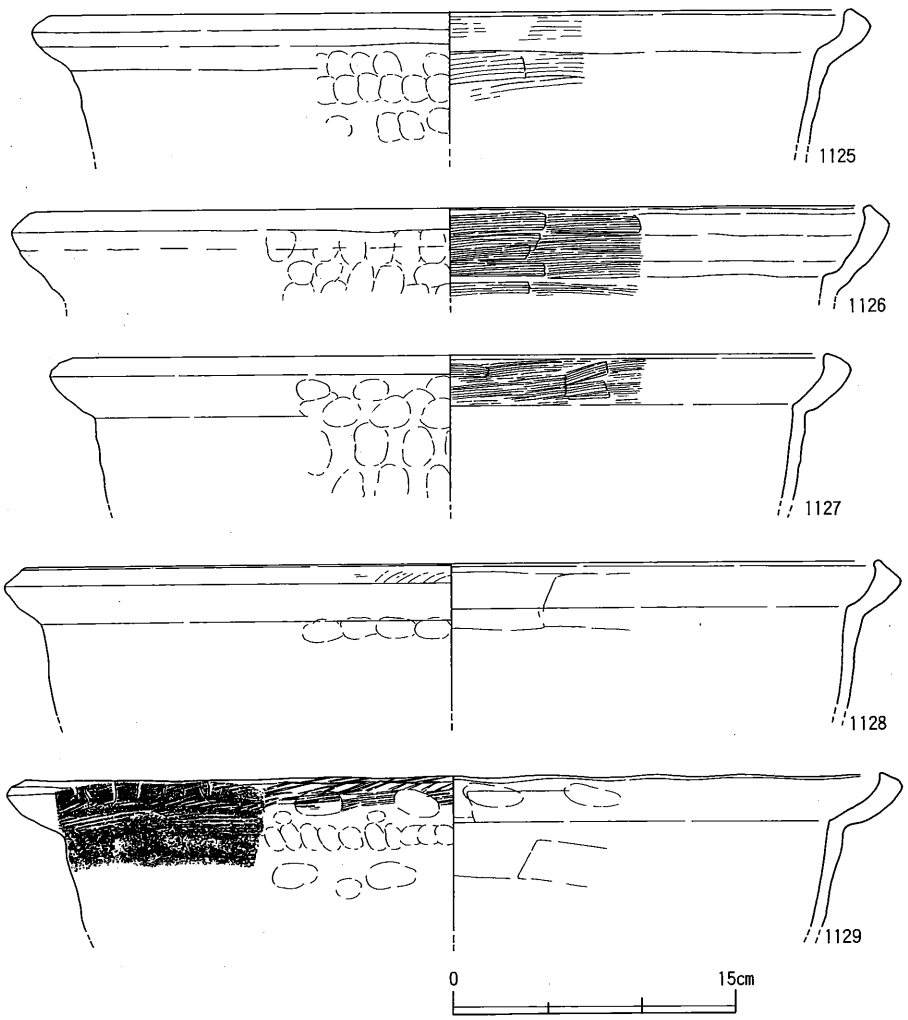
第198図　土器溜り３出土遺物⑳

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法 外面	手法 内面	残存度
1103	鍋 B I	(口)32.0	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)横ナデ	(口)板ナデ→横ナデ	口径1/12
1104	鍋 B I	(口)37.8	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1105	鍋 B II	(口)44.0	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(体)縦ハケ→(口)横ハケ	(口・体)横ハケ→横ナデ	口径1/12
1106	鍋 B II	(口)37.0	1mm以下の砂粒、5mm程の小石	土師質	橙	(口)横ナデ	(口)横ハケ (体)ナデ？	口径1/8
1107	鍋 B II	(口)45.8	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1108	鍋 B II	(口)42.0	3mm以下の砂粒	土師質	(外)灰黄褐 (内)明黄褐	(口)横ナデ	(口)横ハケ→(口・体)ナデ	細片
1109	鍋 B II	(口)38.4	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口)横ハケ (体)横ナデ	細片
1110	鍋 B II	(口)37.0	1.5mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(口)横ナデ	(口)板ナデ	細片
1111	鍋 B II	(口)46.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1112	鍋 B II	(口)47.4	3mm以下の砂粒	土師質	(外)橙 (内)明赤褐	(口)横ナデ	(口)板ナデ→横ナデ (体)ナデ	口径1/8
1113	鍋 B II	(口)44.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口)横ハケ (体)ナデ	細片
1114	鍋 B II	(口)42.1	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1115	鍋 B II	(口)46.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・体)縦ハケ→(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/12
1116	鍋 B II	(口)46.6	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(口)横ナデ	(口)横ナデ (体)板ナデ	細片

第100表　土器溜り３出土遺物観察表⑾



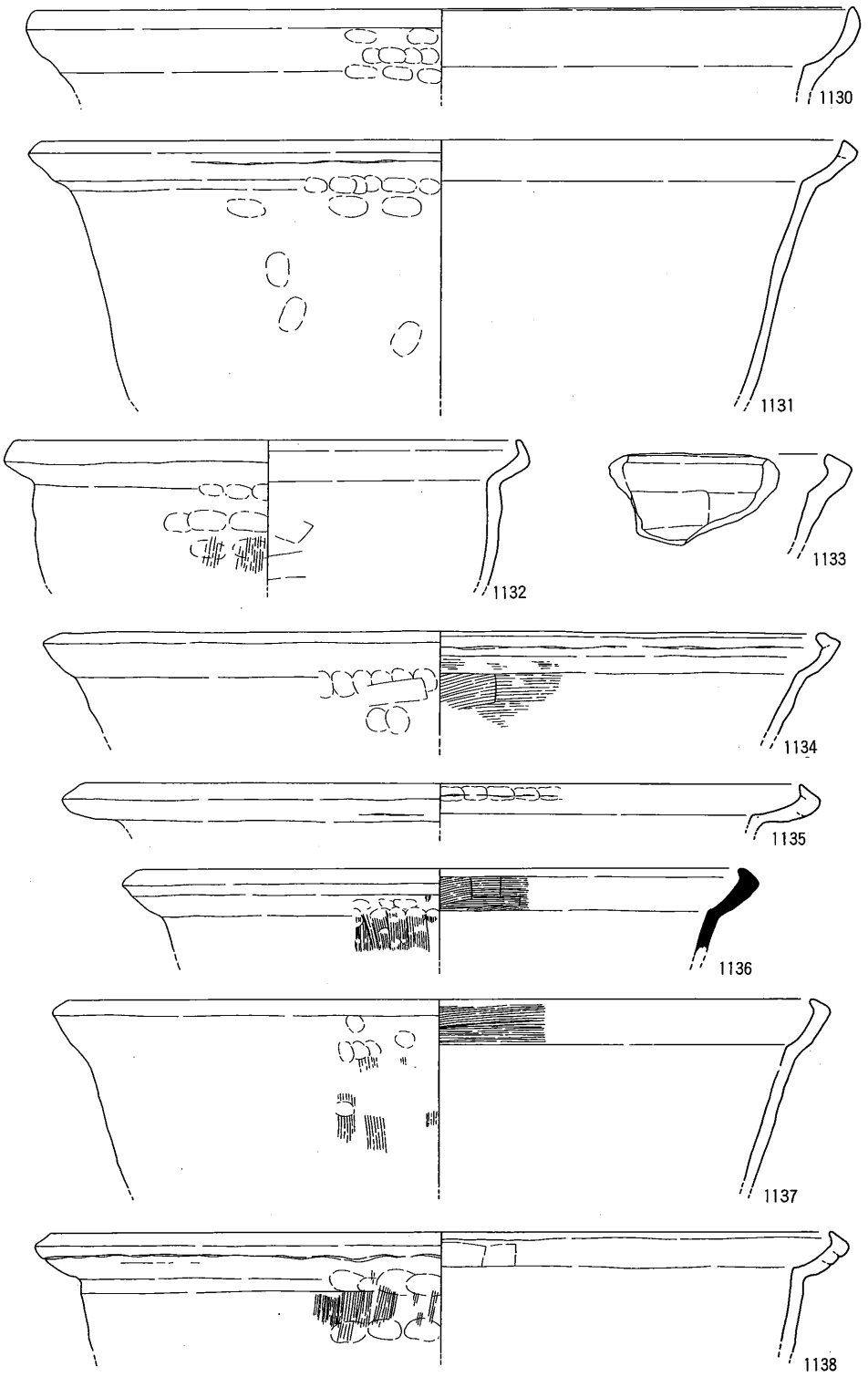
第199図　土器溜り３出土遺物(21)



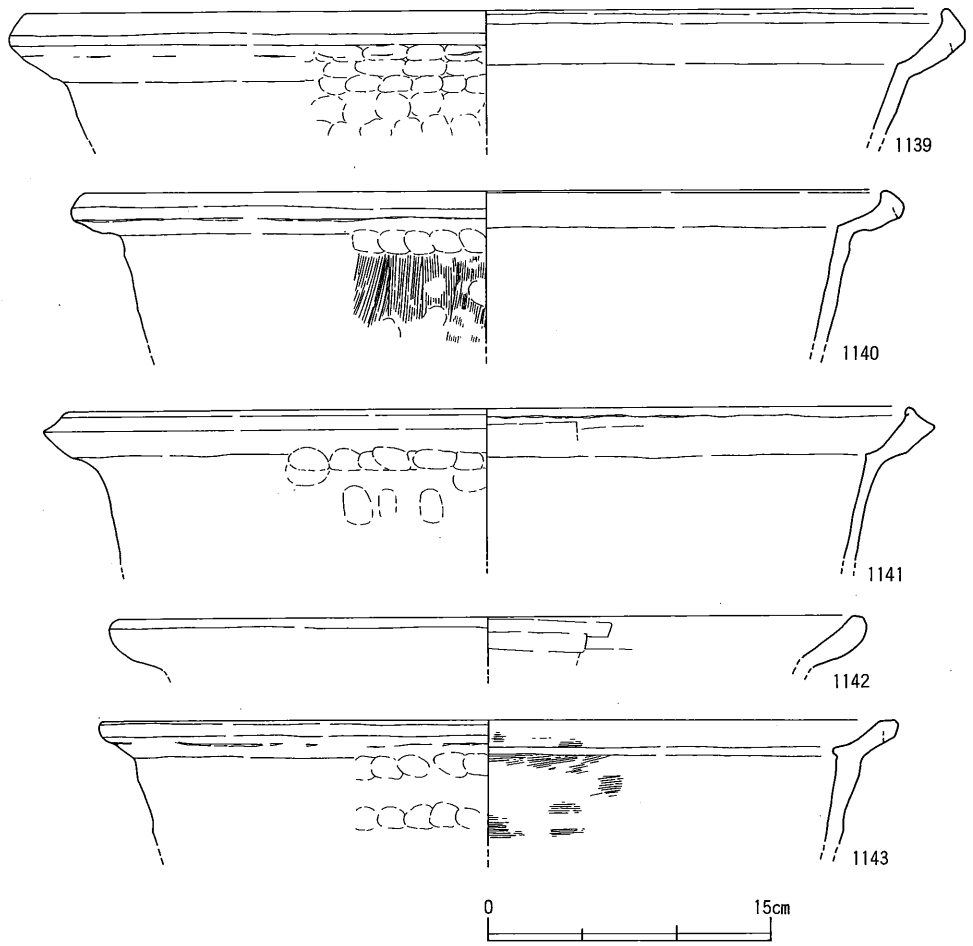
第200図　土器溜り３出土遺物(22)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1117	鍋 B II	(口)36.0	3mm以下の砂粒を多量	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ？	口径1/10
1118	鍋 B II	(口)38.4	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口)板ナデ (体)ナデ	口径1/8
1119	鍋 B II	(口)42.4	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(口)横ナデ	(口・体)横ナデ	口径3/20
1120	鍋 B II	(口)43.4	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口・体)縦ハケ→(口)横ハケ→横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/5
1121	鍋 B II	(口)35.6	2mm以下の砂粒、7mm程の小石	土師質	橙	(口)横ナデ	(口)横ハケ (体)ナデ	口径1/8
1122	鍋 B III	(口)44.0	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口)板ナデ	細片
1123	鍋 B III	(口)33.2	2mm以下の砂粒	土師質	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい橙	(口・体)縦ハケ→(口)横ナデ	(口)板ナデ (体)板ナデ	口径1/8
1124	鍋 B III	(口)47.2	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)横ナデ	(口)板ナデ (体)ナデ	口径1/10
1125	鍋 B III	(口)42.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)横ハケ	細片
1126	鍋 B III	(口)43.5	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)横ハケ	口径1/8
1127	鍋 B III	(口)39.2	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口)横ハケ (体)横ナデ	口径1/8
1128	鍋 B III	(口)44.6	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)木目状圧痕→横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1129	鍋 B III	(口)44.8	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(口)木目状圧痕→横ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/5

第101表　土器溜り３出土遺物観察表(12)



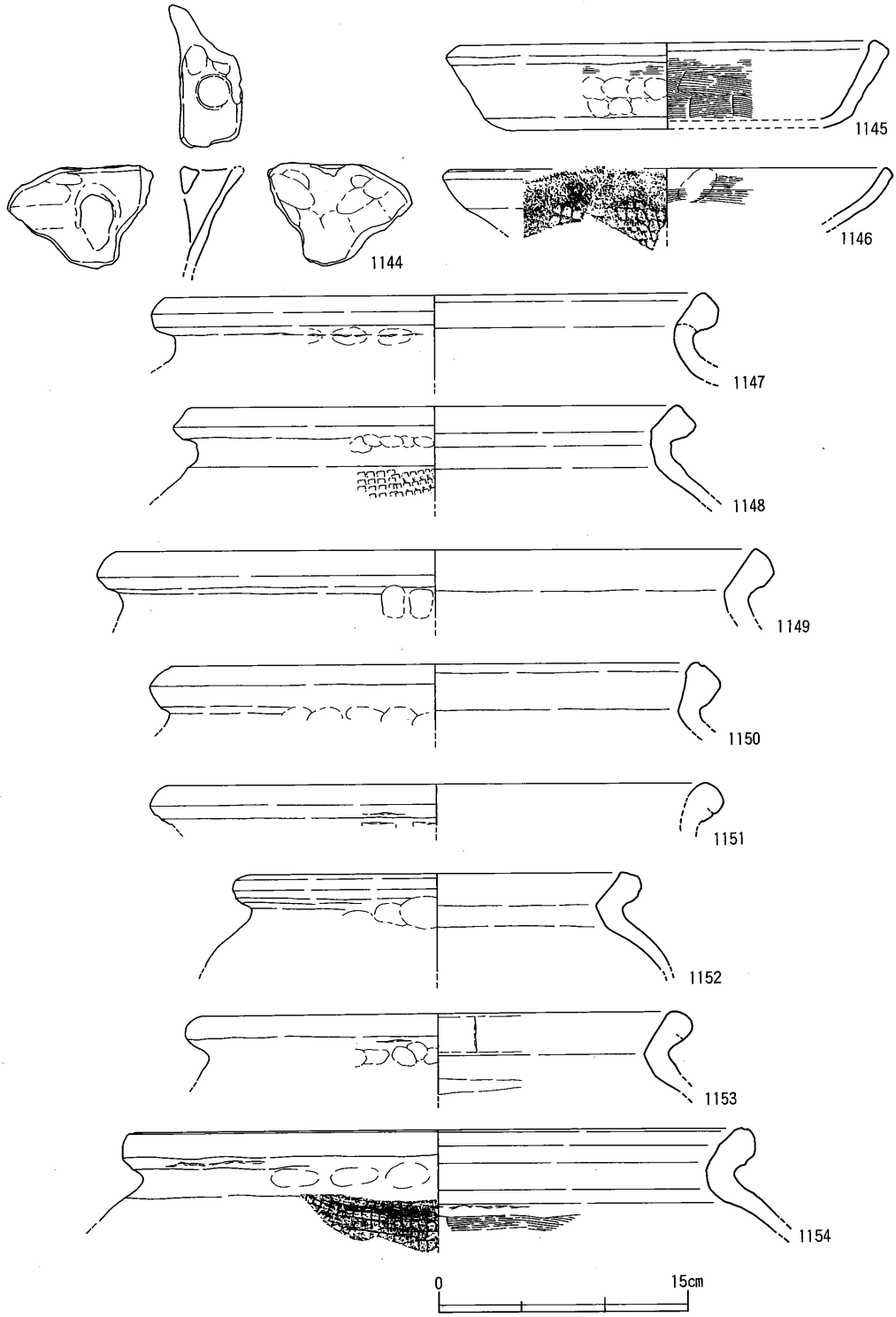
第201図　土器溜り３出土遺物(23)



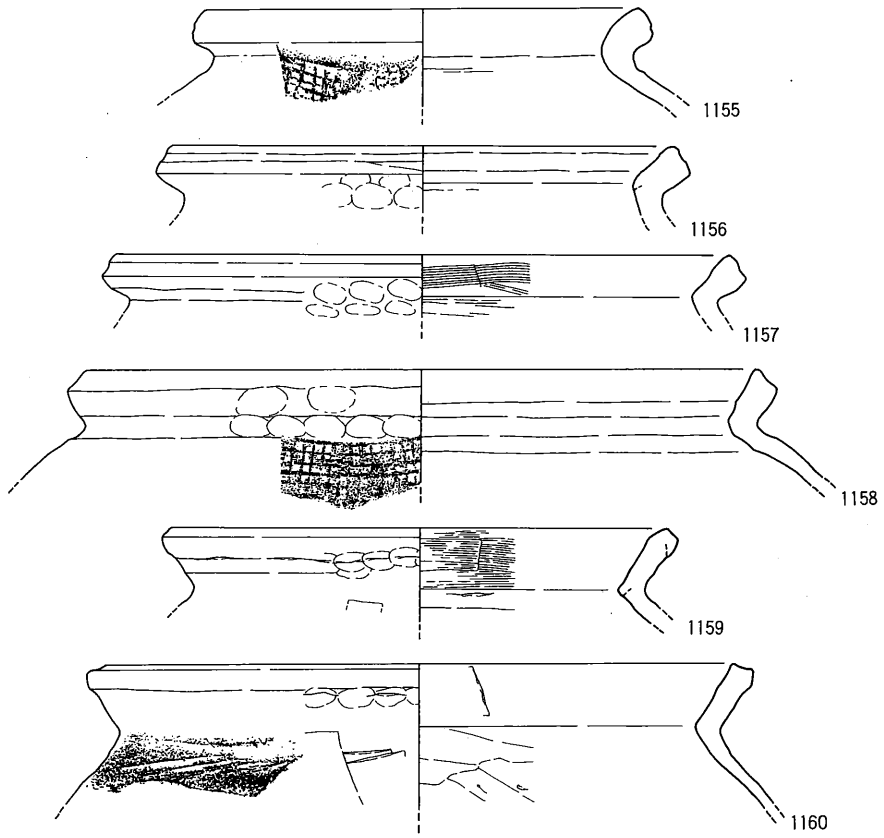
第202図　土器溜り３出土遺物(24)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1130	鍋 BⅢ	(口)47.0	2mm以下の砂粒	土師質	赤褐	(口)横ナデ	(口-体)横ナデ	細片
1131	鍋 BⅢ	(口)46.0	1mm以下の砂粒	土師質	明褐	(口)横ナデ	(口-体)横ナデ	□1/10
1132	鍋 BⅣ	(口)28.6	1mm以下の砂粒	土師質	(外)褐 (内)明赤褐	(口)横ナデ (体)縦ハケ	(口)横ナデ (体)板ナデ	□1/8
1133	鍋 BⅣ	—	5mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口)横ナデ (体)板ナデ	細片
1134	鍋 BⅣ	(口)44.0	3mm以下の砂粒	土師質	(外)灰褐 (内)橙	(口)横ナデ (底)板ナデ	(口-体)横ハケ→(口)横ナデ	細片
1135	鍋 BⅣ	(口)41.4	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい赤褐	(口)横ナデ	(口)横ナデ	□1/12
1136	鍋 BⅣ	(口)35.0	2mm以下の砂粒を少量	須恵質	暗灰黄	(口-体)縦ハケ→(口)横ナデ	(口)横ハケ→横ナデ (体)ナデ	細片
1137	鍋 BⅣ	(口)42.6	2mm以下の砂粒	土師質	褐灰	(体)縦ハケ→(口)横ナデ	(口)横ハケ→横ナデ	□1/12
1138	鍋 BⅣ	(口)45.0	1mm以下の砂粒	土師質	黄褐	(口)横ナデ	(口-体)板ナデ	細片
1139	鍋 BⅣ	(口)48.2	2mm以下の砂粒、5mm程の小石	土師質	橙	(口)横ナデ	(口-体)横ナデ	□1/8
1140	鍋 BⅣ	(口)42.0	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(体)縦ハケ→(口)横ナデ	(口)横ナデ (体)ナデ	□1/6
1141	鍋 BⅣ	(口)44.0	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(口)横ナデ	(口-体)板ナデ	□1/7
1142	(鍋 A)	(口)38.8	2mm以下の砂粒	土師質	(外)明赤褐 (内)橙	(口)横ナデ	(口)板ナデ	□1/8
1143	(鍋 A)	(口)42.8	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口-体)横ハケ→(口)ナデ	□1/8

第102表　土器溜り３出土遺物観察表(13)



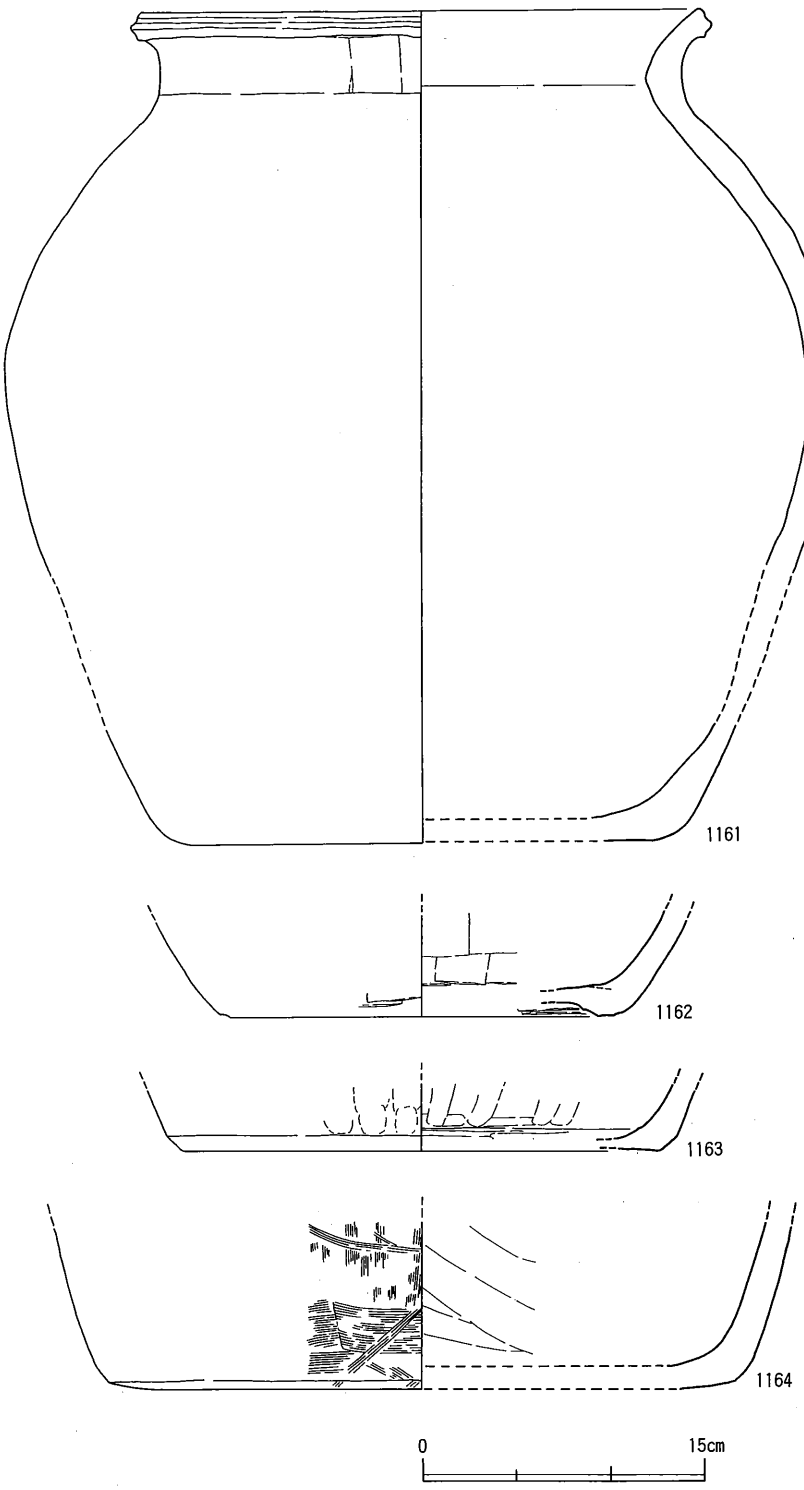
第203図　土器溜り３出土遺物(25)



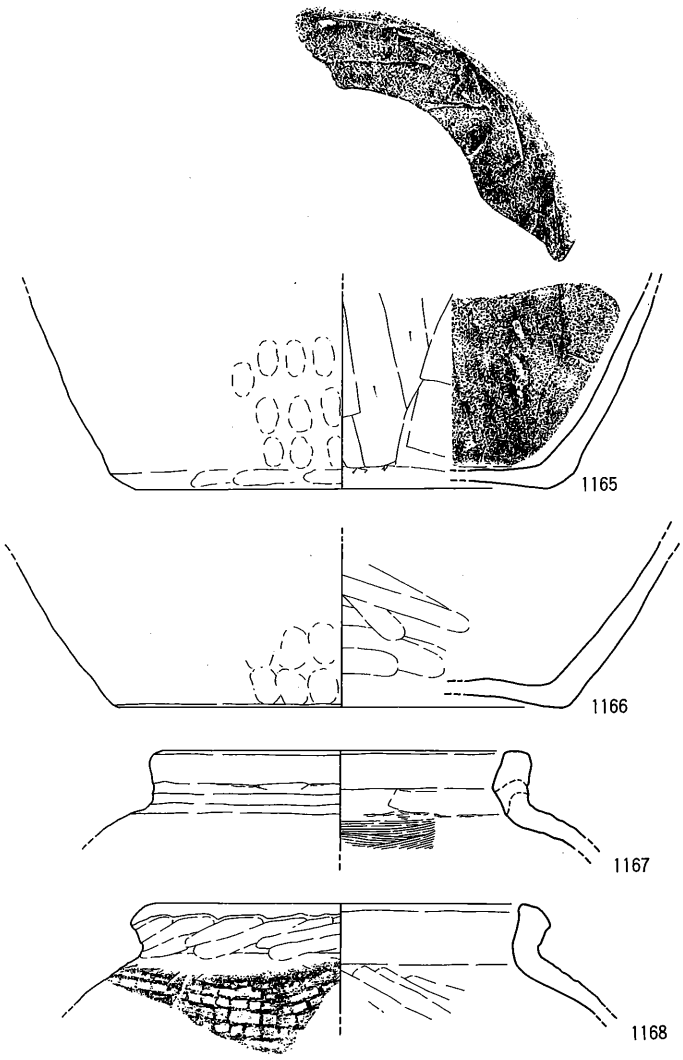
第204図　土器溜り３出土遺物(26)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1144	把手付鍋	—	3mm以下の砂粒	土師質	橙		(口・体)板ナデ	細片
1145	焙烙	(口)24.6 (高)5.2 (底)21.8	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ (底外縁)横ナデ	(体・底)横ハケ→(口)横ナデ	□1/4
1146	焙烙	(口)26.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・体)横ナデ →(底)格子叩き目	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	□1/5
1147	甕 AⅠ	(口)32.0	2.5mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(口・頸)回転ナデ	(口・頸)回転ナデ	□1/8
1148	甕 AⅡ	(口)28.8	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目 →(口・頸)回転ナデ	(頸・体)板ナデ →(口)回転ナデ	□1/8
1149	甕 AⅡ	(口)38.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・頸)回転ナデ	(口・頸)回転ナデ	細片
1150	甕 AⅡ	(口)30.7	2mm以下の砂粒	土師質	(外)橙 (内)にぶい黄橙	(口・頸)回転ナデ	(口・頸)回転ナデ	□1/8
1151	甕 AⅡ	(口)32.0	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(口)回転ナデ (頸)板ナデ	調整不明	□1/8
1152	甕 AⅡ	(口)22.0	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口・頸)回転ナデ	(口・頸・体)板ナデ	□1/10
1153	甕 AⅡ	(口)28.0	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(口・頸・体)板ナデ	□1/8
1154	甕 AⅡ	(口)36.4	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(体)格子叩き目 →(口・頸)回転ナデ	(体)横ハケ →(口・頸)回転ナデ	□1/6
1155	甕 B	(口)22.8	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(体)格子叩き目 →(口・頸)回転ナデ	(体)板ナデ→(口)回転ナデ	□1/8
1156	甕 B	(口)26.0	2mm以下の砂粒を多量	土師質	橙	(口)板ナデ→回転ナデ	(口)板ナデ→回転ナデ	□1/8
1157	甕 B	(口)32.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・頸)回転ナデ	(口・頸)横ハケ	□1/6
1158	甕 B	(口)35.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目 →(口・頸)回転ナデ	(口・頸・体)回転ナデ	□1/9
1159	甕 C	(口)26.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・頸)回転ナデ→(体)板ナデ	(口)横ハケ (体)板ナデ	□1/8
1160	甕 C	(口)33.0	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(口・頸)回転ナデ→(体)板ナデ	(体)板ナデ→ヘラ削り？ (口)板ナデ	□1/4

第103表　土器溜り３出土遺物観察表(14)



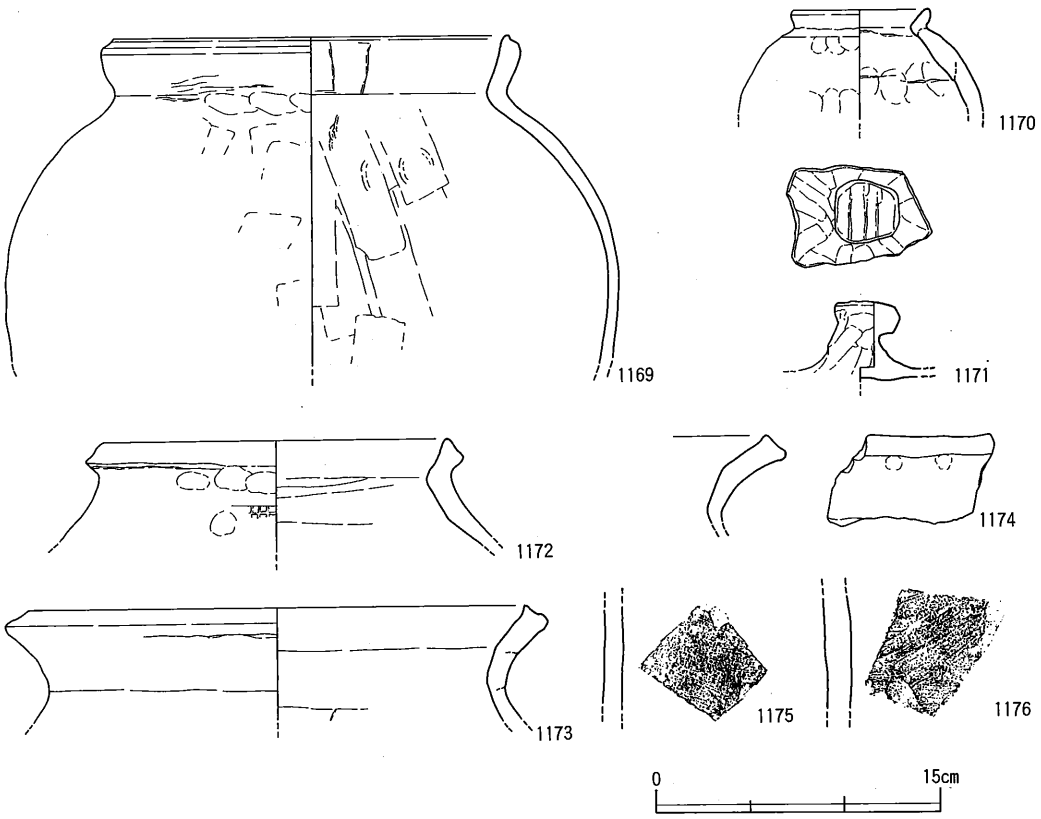
第205図　土器溜り３出土遺物(27)



第206図　土器溜り３出土遺物(28)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1161	甕 C	(口)29.0	4mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(頸・体)板ナデ(口)回転ナデ	調整不明	口1/3
1162	甕 底体部	(底)21.2	3mm以下の砂粒	土師質	明褐	(体・底)板ナデ	(体・底)板ナデ	底1/4
1163	甕 底体部	(底)25.0	4mm以下の砂粒	土師質	(外)明黄褐 (内)橙	(底外縁)横ナデ (底)板ナデ	(体・底)板ナデ	底1/4
1164	甕 底体部	(底)33.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(体・底)板ナデ	(体・底)板ナデ	細片
1165	甕 底体部	(底)21.6	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(底外縁)横ナデ	(体・底)板ナデ	底3/10
1166	甕 底体部	(底)23.3	2mm以下の砂粒	土師質	(外)明黄褐 (内)黄褐	(体・底)ナデ	(体・底)ナデ	底1/2
1167	壺	(口)18.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ (体)ナデ	(体)横ハケ→(口・頸)板ナデ	口1/5
1168	壺	(口)19.4	1mm以下の砂粒を少量	土師質	橙	(体)格子叩き目 →(口)横ナデ→(頸)ナデ	(体)板ナデ→(口・頸)横ナデ	口1/4

第104表　土器溜り３出土遺物観察表(15)



第207図　土器溜り３出土遺物(29)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1169	壺	(口)20.6	3mm以下の砂粒	土師質	オリーブ黒	(口)横ナデ (体)板ナデ	(体)当て具痕→板ナデ →(口)板ナデ	細片
1170	小壺	(口)6.9	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(口)横ナデ	(口)横ナデ	口1/4
1171	蓋ツマミ	—	2mm以下の砂粒	土師質	橙	板ナデ	ナデ	細片
1172	亀山焼 甕	(口)18.0	1mm以下の砂粒	土師質	(内外)褐灰 (断)明褐	(体)格子叩き目 →(口・頸)回転ナデ？	(頸・体)板ナデ →(口)回転ナデ？	口1/4
1173	亀山焼 甕	(口)26.0	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)回転ナデ	(口)回転ナデ (体)板ナデ	口1/5
1174	亀山焼 甕	—	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口)回転ナデ	細片
1175	備前焼 甕	—	5mm以下の砂粒	陶質	(内外)黄灰 (断)灰褐	板ナデ		細片
1176	備前焼 甕	—	3mm以下の砂粒	陶質	にぶい橙	板ナデ		細片

第105表　土器溜り３出土遺物観察表(16)

常に工具を当てていなければならず，器壁各面毎に調整を行う板ナデ・ハケ目の在り方とはかけ離れている。また，1129口縁部下面の圧痕の一部が指オサエに切られている点も看過できない。通常ハケ目は，オサエの後の最終器面調整として行われるのであり，これも異なる要素である。さらに圧痕は間隔がかなり粗く，１本毎の条線が詳細に観察できるが，そこに工具で器面を掻いたことを示す擦痕が全くみられない点も，通常のハケ目とは異なる。このことは，木目状圧痕がまさしく「圧痕」であり，ハケ目とは異なる作業で付けられたことを示していよう。

鍋ＢⅣ類（1132～1141）には，口縁端部が内側へ折り込まれたように顕著に屈折するもの（1132～1134）と，弱くツマミ出したようにみえるもの（1135～1141）の２者が存在する。前者は西部瀬戸内地域にみられる足鍋に近い口縁部形態をもっており，山口県下右田遺跡では鎌倉時代後半～室町時代前半に類例がある(19)。

土師質把手付鍋（1144）は，口縁部と鍔部が退化した羽釜状の形態に１対の把手（外耳）が付き，外耳から体部上半部に円孔が穿たれる。細片であり，当遺跡での出土事例はこの他に予備調査第７トレンチ出土遺物（1459）と併せてわずかに２点のみである。胎土に雲母を含み黄白色の色調を呈することからみても，楠井産土器ではないといえよう。

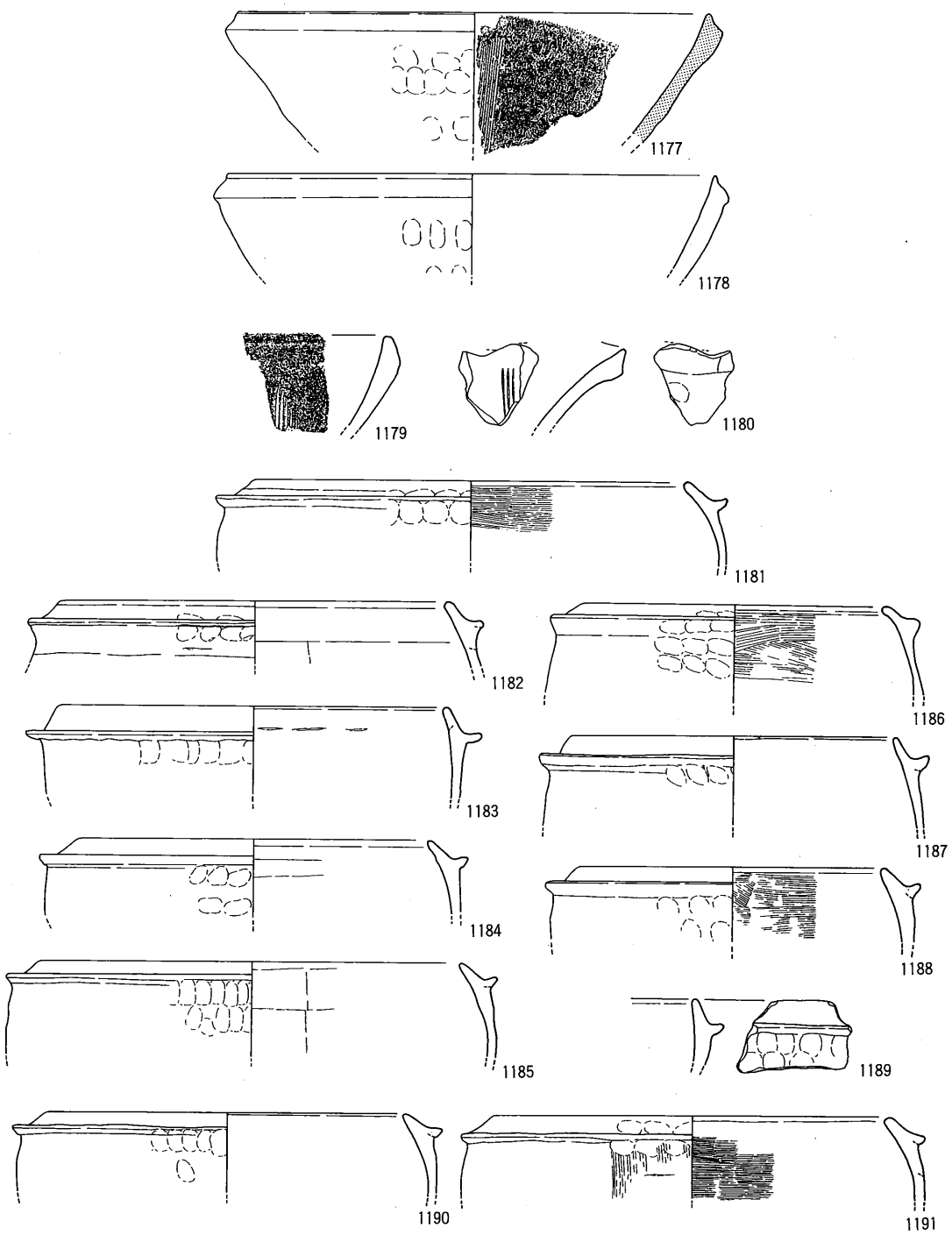
土師質焙烙（1145・1146）は，直線的に開く体部と平底をもつ浅い鉢形のもの（1145）と，内弯気味の体部と叩き成形による丸い底部をもつもの（1146）がある。両者とも胎土や焼成の特徴は楠井産土器であり，後者は３号窯跡窯体内や土器溜り２に類例があるが，前者はこの１例のみである。

土師質甕（1147～1166）には，ＡⅠ・Ⅱ類とＢ類，Ｃ類がある。全体に少量しか出土していないが，中でもＡⅠ類と判断されるのはわずか１点（1147）のみである。

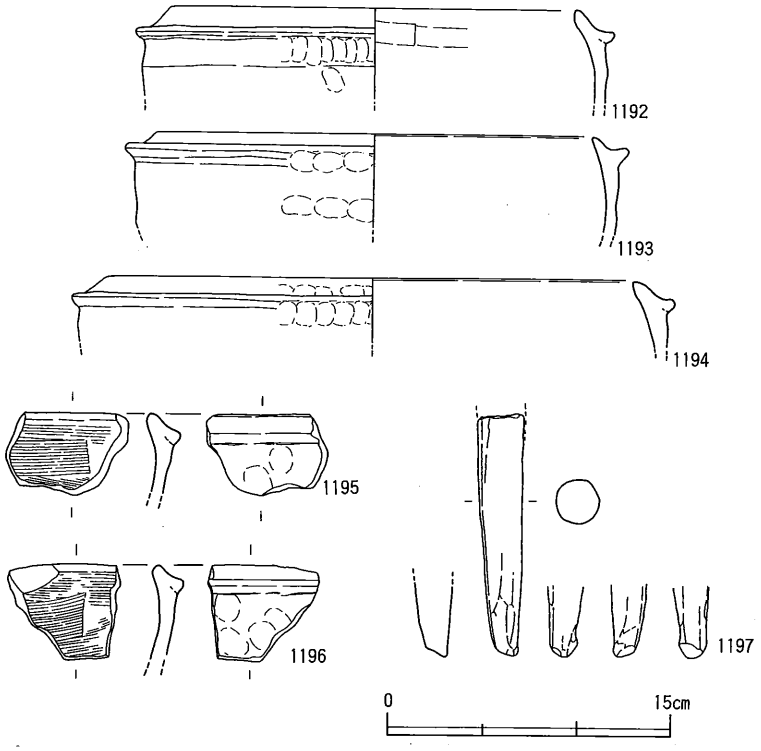
甕ＡⅡ類（1148～1154）は，頸部の立ち上がりの短いものが多い。また口縁部と頸部の内面が強く板ナデ調整されるために，平坦面が形成される点が，１号窯跡窯体内や土器溜り１の出土遺物と異なる特徴である。また，頸部と口縁部の器厚がほぼ同じもの（1152～1154）も存在するが，これは回転ナデによって相対的な口縁部の肥厚を作出する，という１号窯跡窯体内出土遺物で指摘できた技法が行われていないためであろう。

甕Ｂ（1155～1158）は，頸部の立ち上がりが存在しないもので占められる。口縁部端面には，外傾する明瞭な平坦面が形成される。

甕Ｃ（1159～1161）は，体部から「く」の字形に明瞭に外反して長く立ち上がる口頸部をもつ。口縁端部には強い回転ナデによる外傾する平坦面が形成される。いずれも体部外



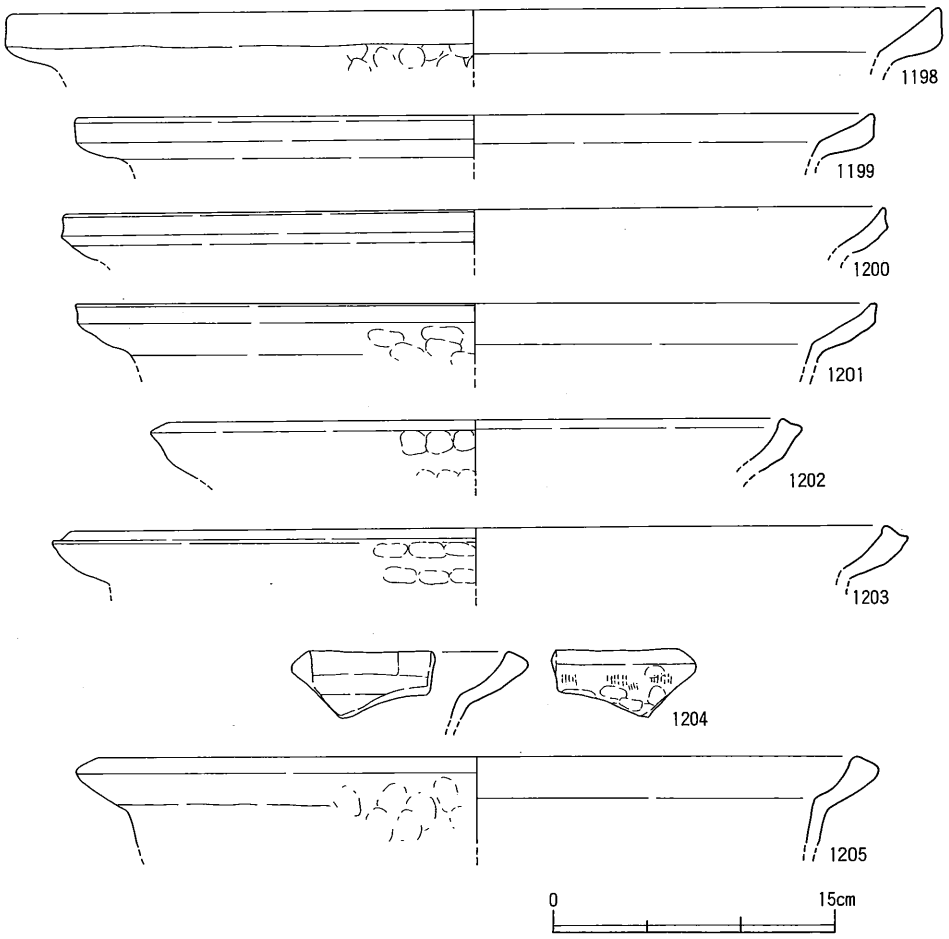
第208図　2号窯跡　整地層上層出土遺物(1)



第209図　2号窯跡　整地層上層出土遺物(2)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1177	擂鉢 AII	(口)28.0	2mm以下の砂粒	瓦質	浅黄	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/10
1178	擂鉢 AII	(口)29.0	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/10
1179	擂鉢 AIII	—	3mm以下の砂粒を多量	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
1180	擂鉢 AII	—	2mm以下の砂粒	土師質	浅黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
1181	足釜 BIII	(口)26.1	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ	口1/8
1182	足釜 BIII	(口)23.2	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/8
1183	足釜 BIII	(口)23.2	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	口1/8
1184	足釜 BIII	(口)21.0	2mm以下の砂粒	土師質	(外)明黄褐 (内)橙 (断)にぶい黄橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/9
1185	足釜 BIII	(口)25.5	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/10
1186	足釜 BIII	(口)18.0	2mm以下の砂粒	土師質	(外)橙 (内)にぶい黄橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	口1/6
1187	足釜 BIII	(口)19.8	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	口1/7
1188	足釜 BIII	(口)18.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	口1/8
1189	足釜 BIII	—	0.5mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ？	調整不明	細片
1190	足釜 BIV	(口)21.3	4mm以下の砂粒	土師質	浅黄橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	口1/8
1191	足釜 BIV	(口)23.9	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(体)縦ハケ→(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)横ハケ→(口)横ナデ	口1/8
1192	足釜 BIV	(口)21.2	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/6
1193	足釜 BIV	(口)23.0	1mm以下の砂粒	土師質	明褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	調整不明	口1/6
1194	足釜 BIV	(口)27.6	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	口1/10
1195	足釜 C	—	6mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ	細片
1196	足釜 C	—	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ	細片
1197	足釜 脚部	—	2mm以下の砂粒、5mm程の小石	土師質	橙	ナデ		

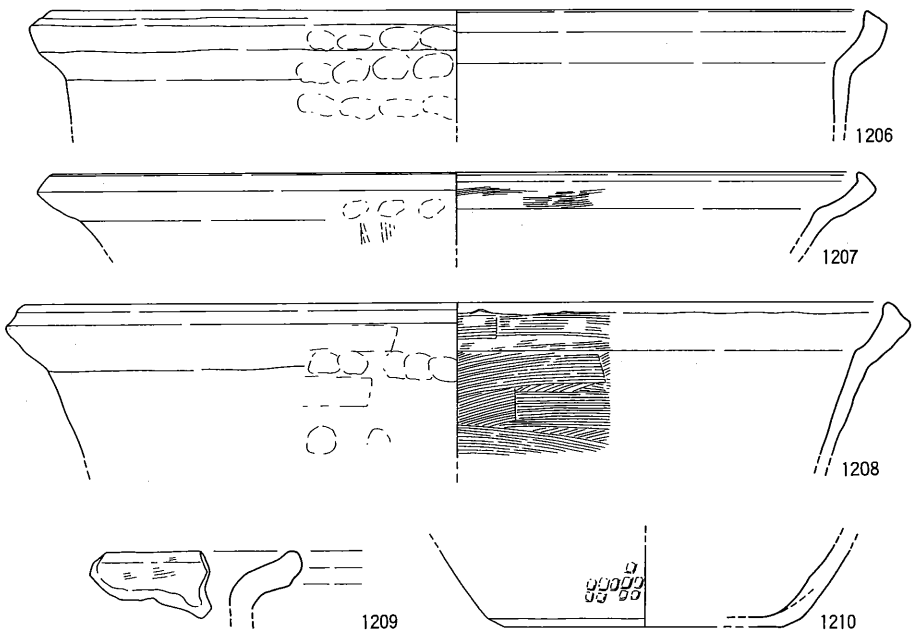
第106表　2号窯跡　整地層上層出土遺物観察表(1)



第210図　2号窯跡　整地層上層出土遺物(3)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1198	鍋 AII	(口)48.4	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口)横ナデ	口1/8
1199	鍋 AII	(口)42.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)横ナデ	細片
1200	鍋 AII	(口)43.0	2mm以下の砂粒	土師質	(外)にぶい橙 (内)黒褐	(口)横ナデ	(口)板ナデ	細片
1201	鍋 AII	(口)42.4	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/12
1202	鍋 BII	(口)32.0	2mm以下の砂粒	土師質	(内外)明黄褐 (断)橙	(口)横ナデ	(口)横ナデ	細片
1203	鍋 BII	(口)43.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口)横ナデ	口1/12
1204	鍋 BII	—	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)縦ハケ→横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1205	鍋 BII	(口)40.3	1mm以下の砂粒	土師質	明褐	調整不明	調整不明	口1/8
1206	鍋 BIII	(口)43.0	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口・体)横ナデ	口1/12
1207	鍋 BIV	(口)43.0	2.5mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(口)横ナデ	(口)横ハケ	細片
1208	鍋 BIV	(口)45.2	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	口1/10
1209	甕 C	—	2mm以下の砂粒	土師質	浅黄橙	(口・頸)横ナデ？	(口・頸)横ハケ	細片
1210	甕 底部	(底)14.6	3mm以下の砂粒	土師質	(外)にぶい橙 (内)橙	(体)格子叩き目 →(底外縁)削り状のナデ	(体・底)ナデ	底1/4

第107表　2号窯跡　整地層上層出土遺物観察表(2)



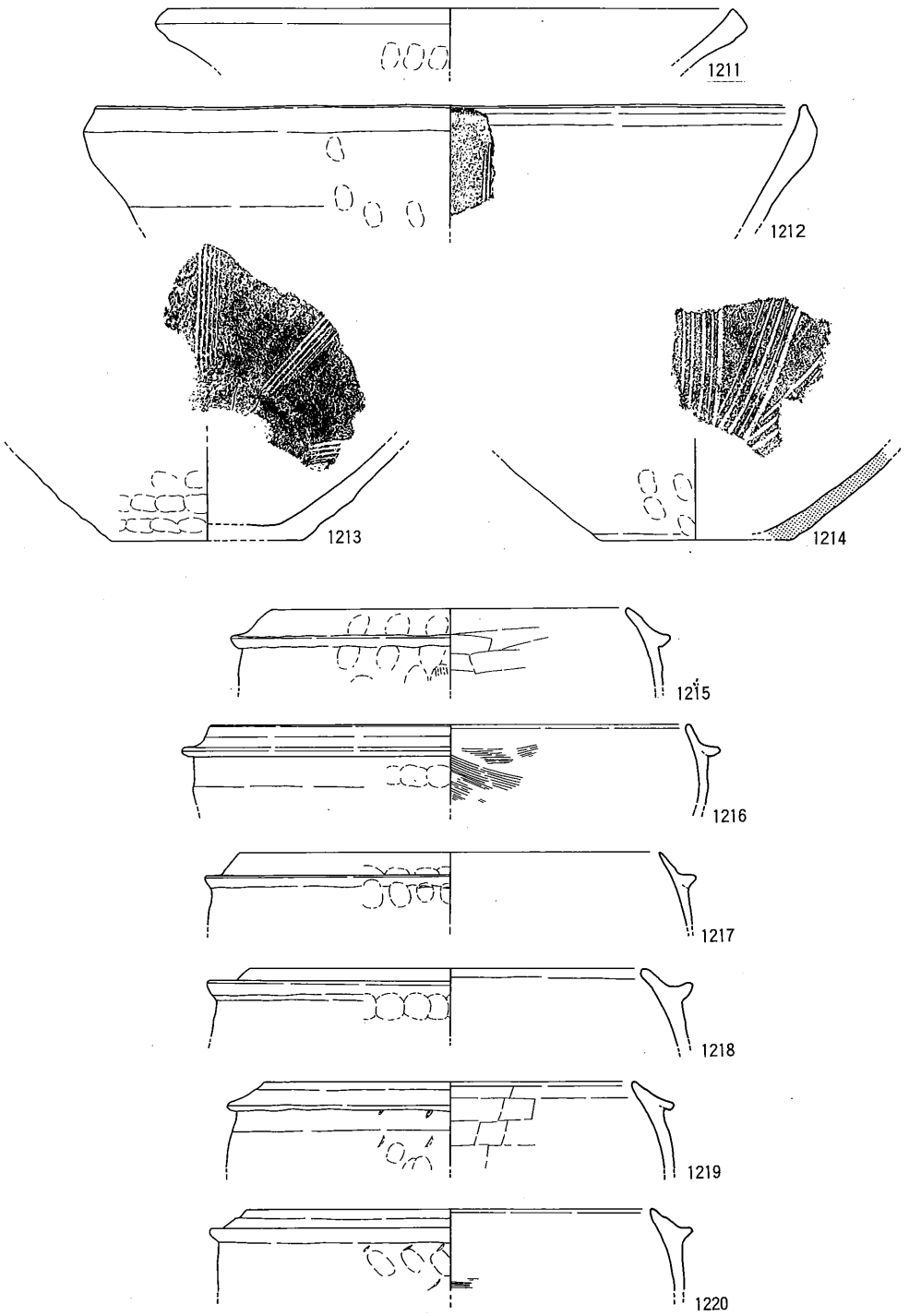
第211図　2号窯跡　整地層上層出土遺物(4)

面には縦方向の板ナデ調整が行われ，1161では頸部上端にも板ナデ調整が及ぶ。1159・1160は土器溜り2の甕C類における，器壁の薄く板ナデ調整を行う一群（928～932）と同一形態・手法をもつといえよう。1161は詳細に観察すると，体部に叩き成形痕が読み取れ，叩きの後に板ナデを行っていることがわかる。また口縁端部に凹面状の端面が形成されることや，頸部外面上端まで縦ハケ調整を行っていることは，むしろ亀山焼甕などに近い特徴である。

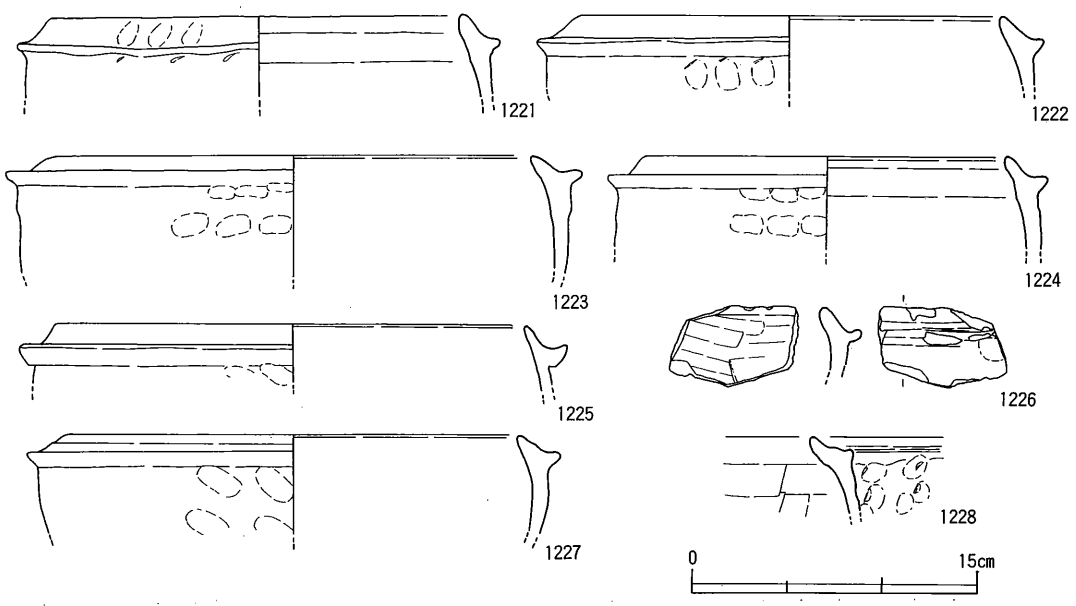
1165では，底部内面に逆時計回りの方向で板ナデ調整が行われ，体部下半も縦方向の板ナデを施す。

土師質壺（1167～1169）は，直立する短い口頸部をもつ。1168は頸部に連続した右上がりのナデ調整を施しており，その方向は内面の板ナデ調整同様，逆時計回り（左回り）である。1169は体部内面に当て具痕を残すことから，叩き成形されたことがわかる。叩き成形後，内外面に縦方向の板ナデを施して叩き目をナデ消している。

この他，特殊品として土師質小壺（1170）や蓋ツマミ（1171）がある。いずれも胎土・焼成は楠井産の特徴をもつ。小壺は内面に接合痕を残しており，体部を作る粘土紐の幅は約3㎝であることがわかる。また蓋ツマミは，上面に磨きのような丁寧なナデ調整がみられる。



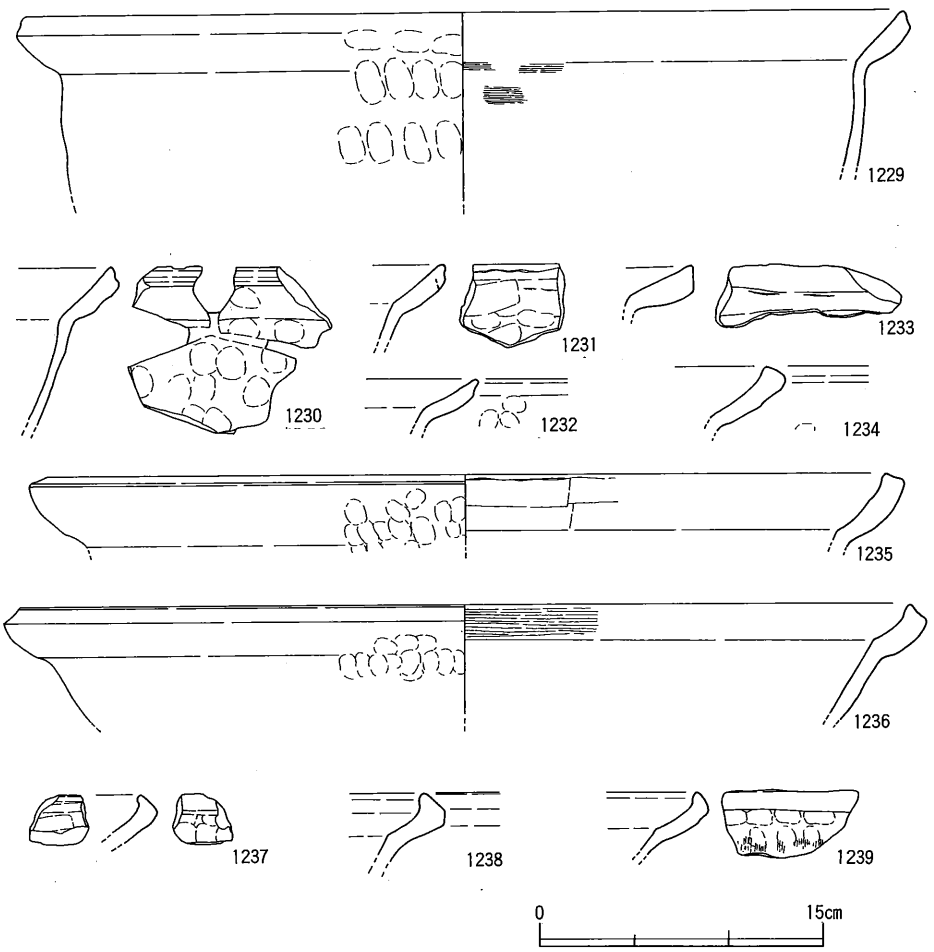
第212図　2号窯跡　整地層下層出土遺物(1)



第213図　2号窯跡　整地層下層出土遺物(2)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1211	擂鉢 AⅠ	(口)32.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口縁1/10
1212	擂鉢 AⅢ	(口)40.1	2mm以下の砂粒	土師質	(外)灰 (内)にぶい橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
1213	擂鉢 底部	(底)10.8	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)ナデ	(体・底)ナデ	底縁1/4
1214	擂鉢 底部	(底)11.0	1mm以下の砂粒	瓦質	(外)にぶい橙 (内)灰	(体)ナデ	(体・底)ナデ？　使用痕	底縁1/12
1215	足釜 BⅢ	(口)20.4	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	細片
1216	足釜 BⅢ	(口)27.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ	口縁1/12
1217	足釜 BⅢ	(口)24.0	2mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(胴)押圧→調整不明	調整不明	口縁1/8
1218	足釜 BⅢ	(口)22.0	4mm以下の砂粒	土師質	暗灰黄	(胴)押圧→調整不明	調整不明	口縁1/8
1219	足釜 BⅣ	(口)21.1	2mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(胴)２段押圧 →(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口縁1/8
1220	足釜 BⅣ	(口)23.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)２段押圧 →(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口縁1/12
1221	足釜 BⅣ	(口)21.3	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口縁1/10
1222	足釜 BⅣ	(口)22.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	口縁1/8
1223	足釜 BⅣ	(口)25.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	口縁1/6
1224	足釜 BⅣ	(口)19.0	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	口縁1/12
1225	足釜 BⅣ	(口)25.0	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	細片
1226	足釜 BⅣ	—	3mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(口)板ナデ→横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	細片
1227	足釜 BⅣ	(口)23.8	1mm以下の砂粒	土師質	明褐	(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	口縁1/8
1228	足釜 BⅣ	—	4mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(胴)２段押圧 →(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	細片

第108表　2号窯跡　整地層下層出土遺物観察表(1)



第214図　2号窯跡　整地層下層出土遺物(3)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1229	鍋 AII	(口)46.0	1mm以下の砂粒	土師質	暗褐	(口)横ナデ	(口)横ナデ (体)板ナデ	口1/5
1230	鍋 AII	—	3mm以下の砂粒を少量	土師質	にぶい黄褐	(口)横ナデ	(口-体)板ナデ	細片
1231	鍋 AII	—	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)板ナデ→横ナデ	(口-体)板ナデ	細片
1232	鍋 AII	—	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(口)横ナデ	(口)横ナデ	細片
1233	鍋 AII	—	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口)横ナデ	細片
1234	鍋 BII	—	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口)横ナデ	細片
1235	鍋 BII	(口)44.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(口)横ナデ	(口-体)板ナデ	口1/12
1236	鍋 BII	(口)46.8	4mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口)横ハケ (体)板ナデ	口1/12
1237	鍋 BIV	—	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄	(口)横ナデ	(口)板ナデ→横ナデ	細片
1238	鍋 BIV	—	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)板ナデ→横ナデ	(口)横ナデ	細片
1239	鍋 BIV	—	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(口)横ナデ	(口-体)横ナデ	細片

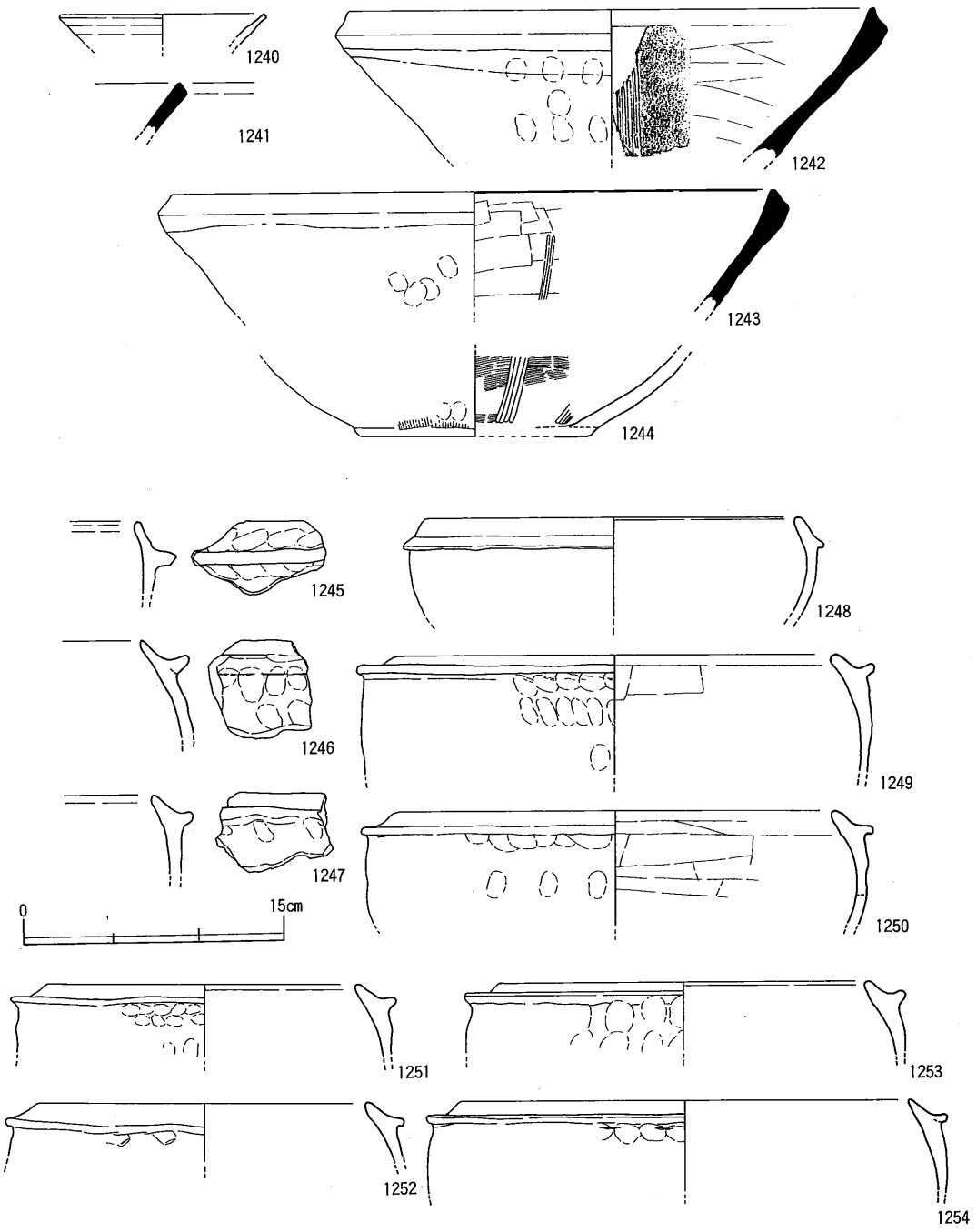
第109表　2号窯跡　整地層下層出土遺物観察表(2)

搬入品には，亀山焼甕（1172～1174）と備前焼甕体部片（1175・1176）がある。亀山焼甕は土師質焼成であり，「亀山系土器」とされる一群にあたる[20]。口縁端部は若干肥厚気味ではあるが上下の拡張が著しくなく，岡山県鴨方町沖の店遺跡を標識とする亀山系土器よりは先行する要素をもつ。また備前焼甕は外面に板ナデ調整が認められ，酸化焔焼成が行われるものである。

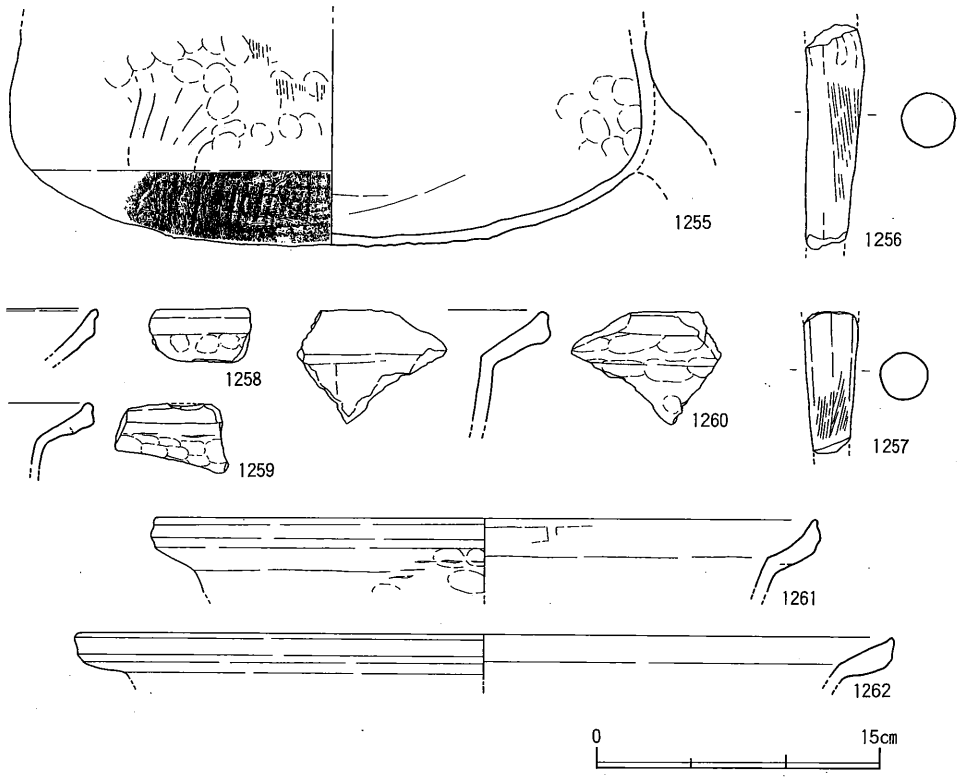
(7)　**2号窯跡整地層出土遺物**（第208～217図，第106～111表）

2号窯跡構築にあたって，3号窯跡窯体や灰原を破壊・攪拌するかたちで，付近を整地したと考えられる土層から出土した遺物である。層位の性格上，明瞭な時期差を示すような出土状況ではないが，上層・下層の各出土遺物に分けて図示した。土師質杯・足釜・鍋・甕，須恵質捏鉢・擂鉢，備前焼甕などが出土している。出土量はさほど多くなく，また整地層上面の土器溜り3ほど残存率の高い破片もない。このため個別に詳述できる資料も少ない。

全体の傾向として，擂鉢ＡⅡ類・足釜ＢⅢ類・鍋ＡⅡ類・ＢⅡ類が多い点では，3号窯跡窯体内や土器溜り2の出土遺物に近似しているといえる。しかし反面，足釜Ｃ類（1195・1196）のように，2号窯跡窯体内にみられた遺物も出土しており，包含される遺物が単一時期の所産でないことを示唆していよう。なお，須恵質捏鉢（1241）は，十瓶山窯跡群産のものとみられる。



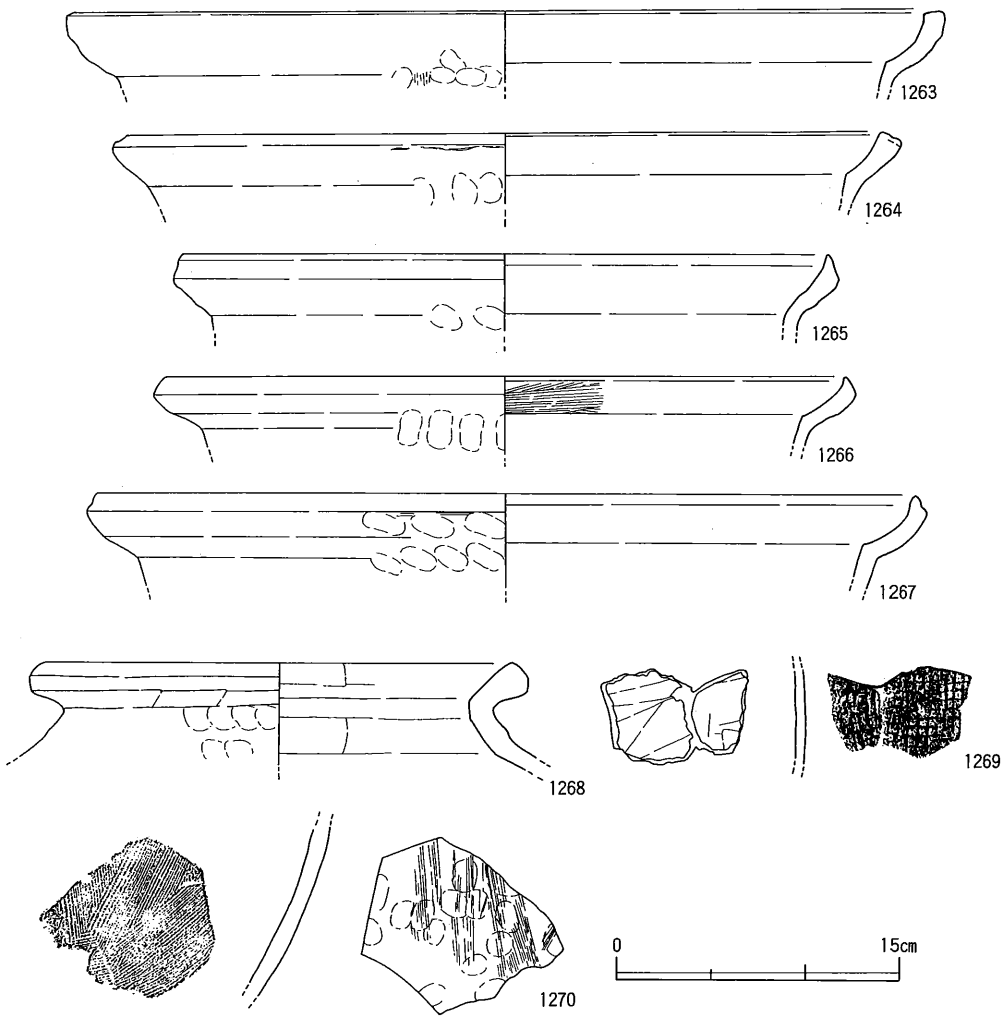
第215図　2号窯跡　整地層上層・下層出土遺物(1)



第216図　2号窯跡　整地層上層・下層出土遺物(2)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1240	杯	(口)11.8	精良	土師質	にぶい橙	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口径1/10
1241	捏鉢	—	0.5mm以下の砂粒	須恵質	(外)灰 (内)灰白	(口・体)回転ナデ？	(口・体)回転ナデ？	細片
1242	擂鉢 BⅡ	(口)30.0	3mm以下の砂粒	須恵質	灰白	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/6
1243	擂鉢 BⅡ	(口)34.4	3mm以下の砂粒	須恵質	灰白	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/8
1244	擂鉢 底部	(底)12.5	1mm以下の砂粒	土師質	(内外)暗灰黄 (断)橙	(体)縦ハケ	(体・底)横ハケ	底径1/5
1245	足釜 BⅢ	—	2.5mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1246	足釜 BⅢ	—	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1247	足釜 BⅢ	—	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1248	足釜 BⅣ	(口)21.4	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・胴)横ナデ	調整不明	細片
1249	足釜 BⅣ	(口)25.5	4mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口径3/20
1250	足釜 BⅣ	(口)25.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/8
1251	足釜 BⅣ	(口)17.8	2mm以下の砂粒	土師質	黄橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1252	足釜 BⅣ	(口)19.0	4mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口径3/20
1253	足釜 BⅣ	(口)21.1	2mm以下の砂粒を多量	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ？	調整不明	口径1/8
1254	足釜 BⅣ	(口)26.3	4mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	調整不明	口径1/8
1255	足釜 底部	(底)31.6	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(体)縦ハケ (底)格子叩き	(底)板ナデ	細片
1256	足釜 脚部	—	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	木目状圧痕→ナデ		細片
1257	足釜 脚部	—	1mm以下の微砂粒	土師質	にぶい橙	木目状圧痕→ナデ		脚部1/3
1258	鍋 AⅡ	—	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口)横ナデ	細片
1259	鍋 AⅡ	—	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)横ナデ	細片
1260	鍋 AⅡ	—	2mm以下の砂粒	土師質	(外)にぶい橙 (内)明赤褐	(口)横ナデ	(口)横ナデ (体)板ナデ	細片
1261	鍋 AⅡ	(口)35.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1262	鍋 AⅡ	(口)42.8	4mm以下の砂粒	土師質	橙	調整不明	調整不明	口径1/12

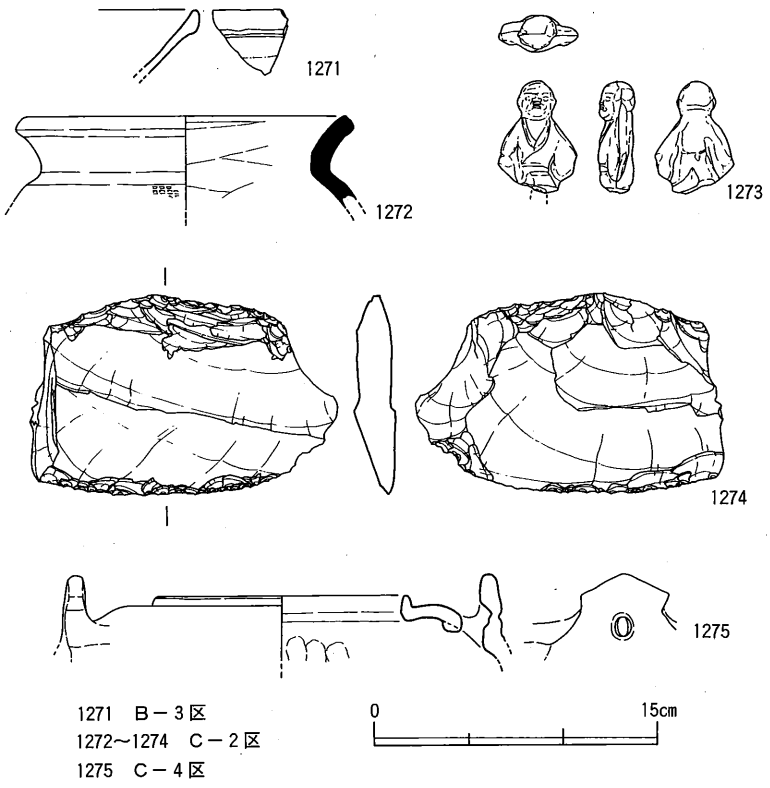
第110表　2号窯跡　整地層上層・下層出土遺物観察表(1)



第217図　2号窯跡　整地層上層・下層出土遺物(3)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1263	鍋 B I	(口)43.8	4mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口)横ナデ (体)ナデ	細片
1264	鍋 B II	(口)39.6	3mm以下の砂粒を多量	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1265	鍋 B III	(口)34.0	2mm以下の砂粒を少量	土師質	橙	(口)横ナデ	(口・体)ナデ	口唇1/8
1266	鍋 B III	(口)36.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口)横ハケ (体)板ナデ	細片
1267	鍋 B III	(口)43.4	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口)横ナデ	細片
1268	甕 C	(口)24.4	3mm以下の砂粒	土師質	(外)明褐 (内)橙	(胴)板ナデ→(口)横ナデ	(口・胴・体)板ナデ	口唇1/6
1269	甕 体部	—	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄褐	格子叩き目	板ナデ	細片
1270	甕 体部	—	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	縦ハケ	縦ハケ	細片

第111表　2号窯跡　整地層上層・下層出土遺物観察表(2)



第218図　包含層出土遺物(1)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法 外面	手法 内面	残存度
1271	白磁 碗	—	精緻	灰白		(体)回転ヘラ削り	(口・体)回転ナデ	細片
1272	須恵器 甕	(口)17.0	5mm以下の砂粒	須恵質	灰	(体)格子叩き目 →(口・頸)回転ナデ	(口・頸)回転ナデ	口1/6
1273	土人形	—	1mm以下の砂粒	土師質	橙	型成形		
1275	茶釜	(口)13.2	2mm以下の砂粒、5mm程の小石	土師質	(外)明黄褐 (内)浅黄	(口・体)横ナデ	(口)横ナデ (頸)板ナデ	口1/4

番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1274	打製石包丁	サヌカイト	8.1	5.3	1.1	(56.43)	片側欠損

第112表　包含層出土遺物観察表(1)

(8) 包含層・その他の遺構出土遺物（第218～247図，第112～127表）

遺構に伴わない，包含層の出土資料を図示した。大半は中世土器であるが，弥生時代の石器や近世土器なども少量みられる。また，既に第4節1で述べたように，古墳に関連する須恵器なども出土している。

1271は白磁碗Ⅳ類[21]の破片である。1272は十瓶山窯跡群産の須恵器甕であり，佐藤編年の第Ⅳ期第4段階[22]の所産とみられる。1273は，素焼きの土人形である。胴体下半に穿孔が認められる。また側縁には鋳張り状の粘土のはみ出しがみられることから，合わせ型による製作が考えられる。生産地については不明であるが，香川県内においても高松で泥人形の生産が行われていたとされている[23]。

1274はサヌカイト製の打製石包丁である。石包丁は土器溜り1第Ⅰa層においても出土している（595）。弥生土器の出土例はないが，北東約500mの同様な山麓谷部にある国分寺六ツ目遺跡において弥生土器が出土しており，谷部の湧水を利用した小規模な耕地開発か，堂山山中における高地性集落の存在を示す可能性がある。

1275は土師質の茶釜である。同様な茶釜の口縁部は土器溜り1第Ⅰa層（575）にもみられる。1対の把手があり，把手外側には円孔状の刺突がみられるが，実際には把手の内側から体部が貫通しており，外耳鍋と同様な穿孔方法をとる。

1288は脚付の甕とみられる。細片のため脚部の本数は明らかではないが，3本の可能性がある。中世末ないし近世の所産であろう。1290は土師質捏鉢で，胎土の特徴から楠井産土器とみられる。底部外面に下駄印が明瞭に残る。1295は土師質甕であり，土器溜り3の事例（1161）に近い。1296は，堺近郊産の瓦質甕である。1297は土師質甕で，逆三角形状に肥厚する口縁部と，直立する体部をもつ。体部上端にはタガ状の突帯がみられる。近世後半のものであろう。

1299～1426は，E－5区包含層出土遺物である。包含層の遺物としては最も量的に豊富であるが，谷底に厚く堆積した土層であり，特定の窯跡に伴うものではない。ただし，各器種のバリエーションや足釜の鍔部押圧に伴う爪形圧痕などで，土器溜り1と共通しており，土器溜り1から流出・再堆積した遺物が主体とみられる。1425の東播系須恵器捏鉢は，山仲分類のD1類にあたる。また1426・1427は焙烙であるが，底部外面が外型成形であり，調整に回転ナデを駆使している点で，楠井産焙烙とは明確に異なる。佐藤編年c型式にあたり，19世紀後葉頃の年代が考えられる[24]。

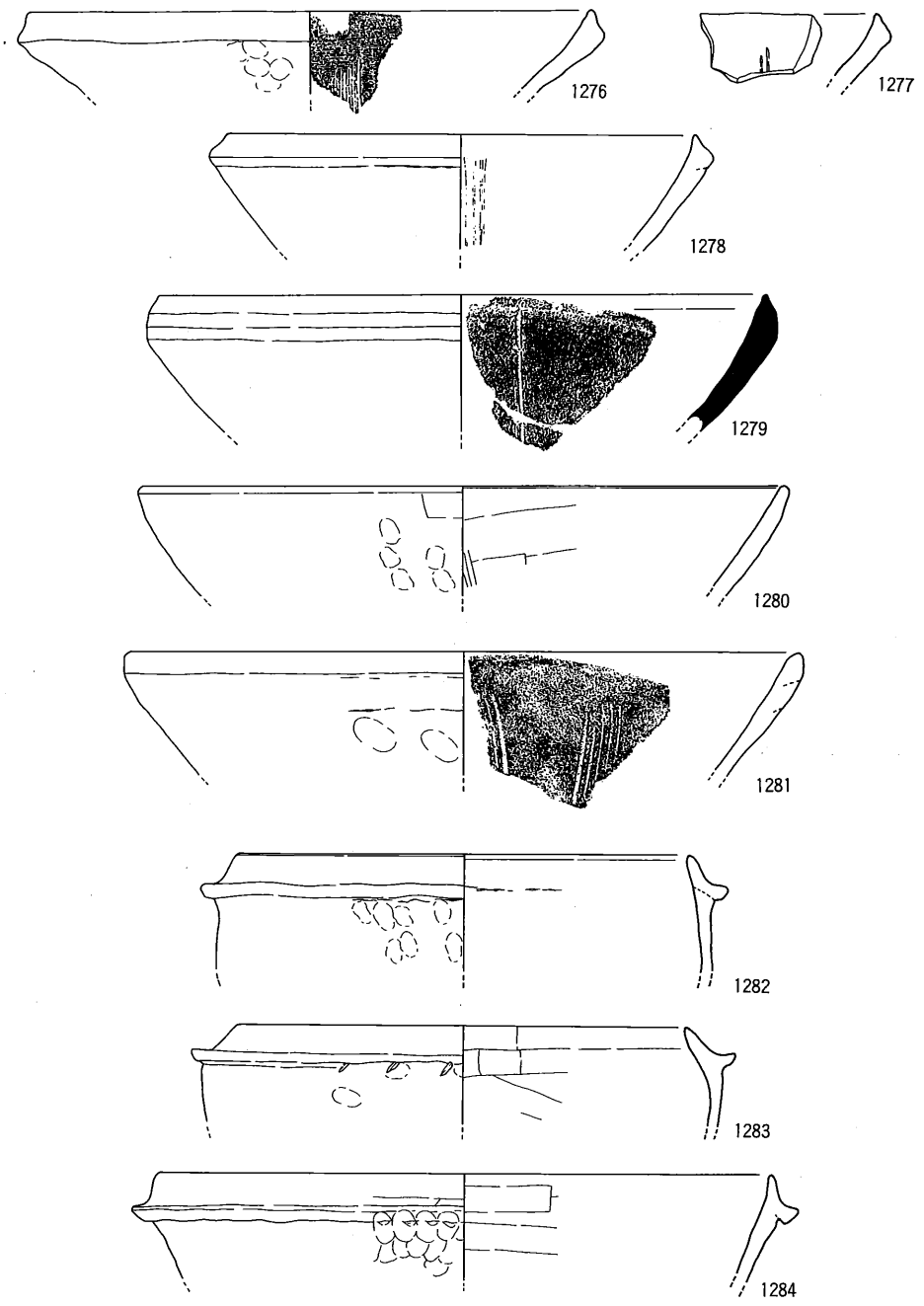
1429は1442とともに，楠井産土器と考えられる数少ない供膳器種である。1433は足釜B

Ⅰ類であるが，接合痕から鍔部屈折法（口縁２技法）によることが明瞭に読み取れる。足釜ＢⅠ類は鍔部接合（口縁１技法）が多いと考えられることは既に述べたが，少量ながら口縁２技法の事例も存在することがわかる。1441は備前焼甕であり，玉縁状口縁をもつ。間壁編年第ⅢＢ期のものであろう。

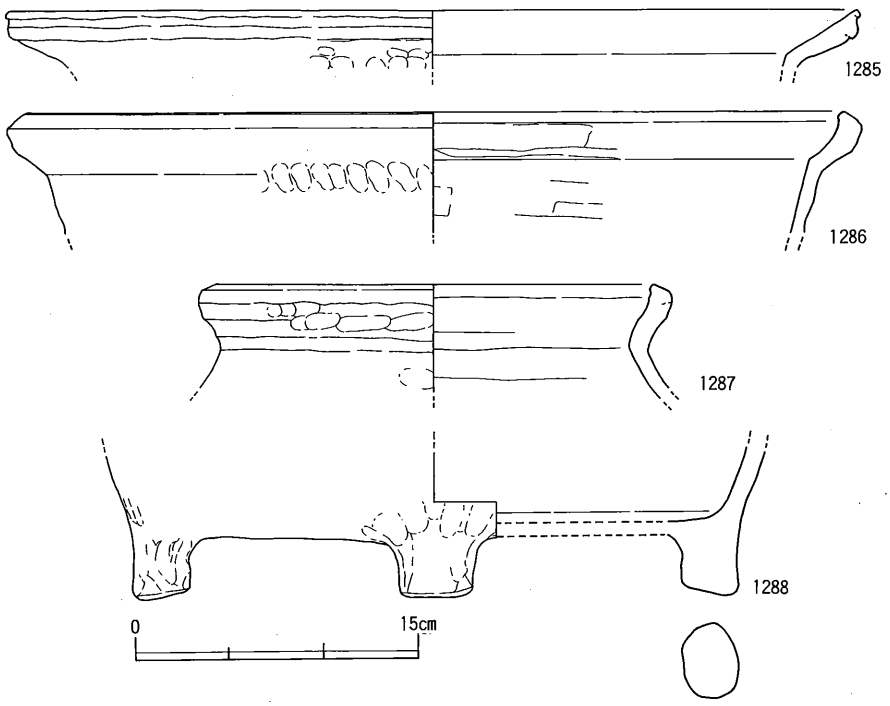
1444は小壺の体部である。体部内面には接合痕が明瞭に残り，また頸部内面にはシボリ込んだ痕跡がみえる。1445は，同安窯系の青磁皿である。1449は土師質の棒状土製品である。側面が面取りされるため，多角形状の断面形態をもつ。1454は東播系須恵器捏鉢である。山仲分類のＤ１類にあたる。1456は土師質焙烙である。体部外面に縦ハケを施し，底部を叩き成形する。３号窯跡窯体内や土器溜り２・３の出土事例に近いが，口縁部端面を強くナデ，凹面状にしている点が異なっている。

1457は，ＳＫ０１出土の擂鉢ＢⅢ類である。また1458は，ＳＢ０２に伴うと考えられる溝であるＳＤ０２出土の擂鉢ＢⅢ類である。いずれも口縁部端面に回転ナデを２段行い，シャープな端部を作出しているもので，細分型式ではＢⅢ－１類にあたる。

最後に包含層出土の印花文土器を一括して図示した。いずれも器種は土師質捏鉢であり，口縁部外面に押捺されている。1463と1464の印花文は中房が小さく，1465は逆に中房が大きい。また1463は２箇所遺存するが，その配置から本来「∴」形に３個配列されていたとみられる。1465は横１列に３個押捺する。１号窯跡窯体内出土のもの（119）や土器溜り１第Ⅰａ層出土のもの（596）などと併せ考えると，楠井における印花文は３個を１単位としていたことが想定できるようである。



第219図　包含層出土遺物(2)

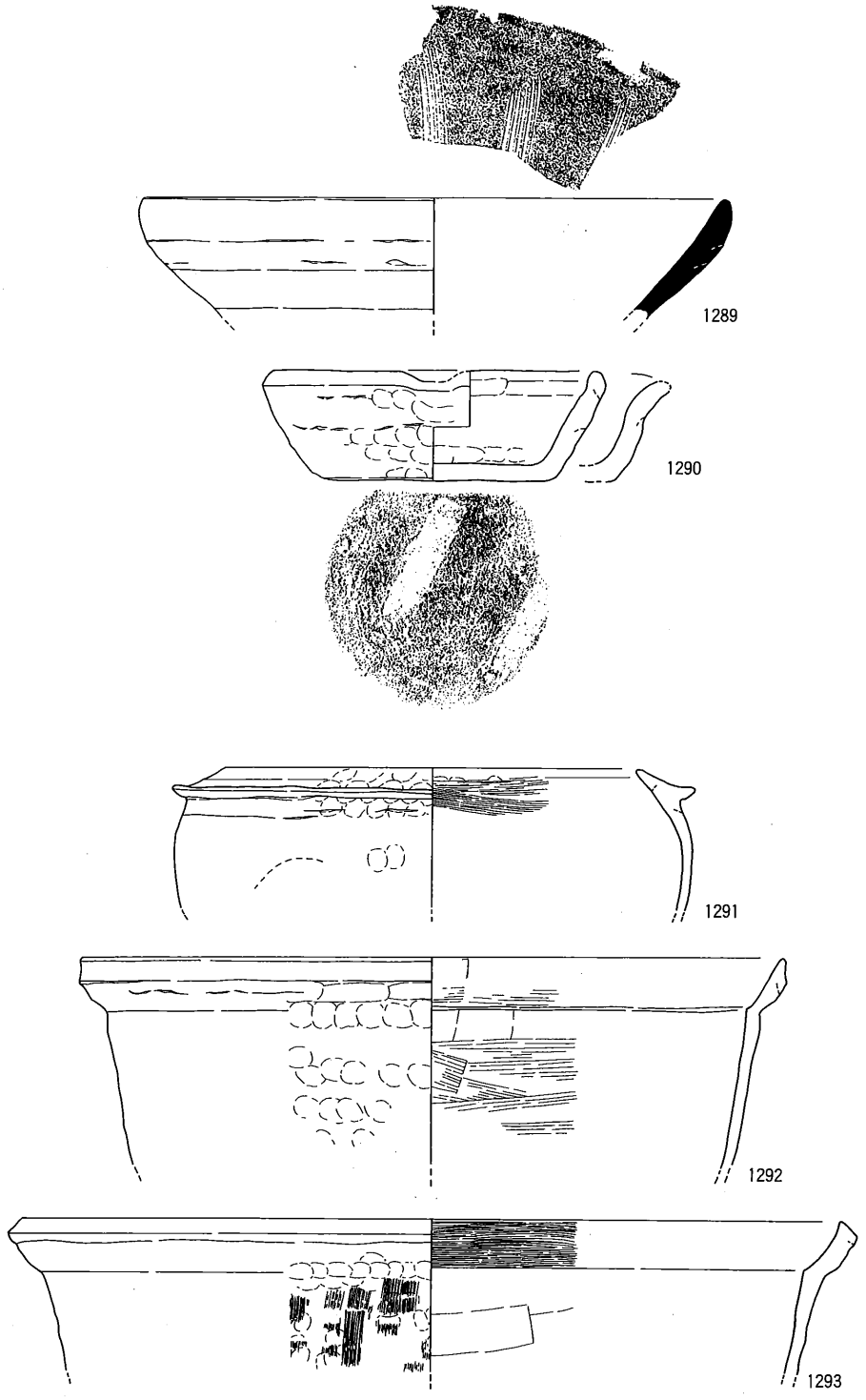


1276～1288　C－3区

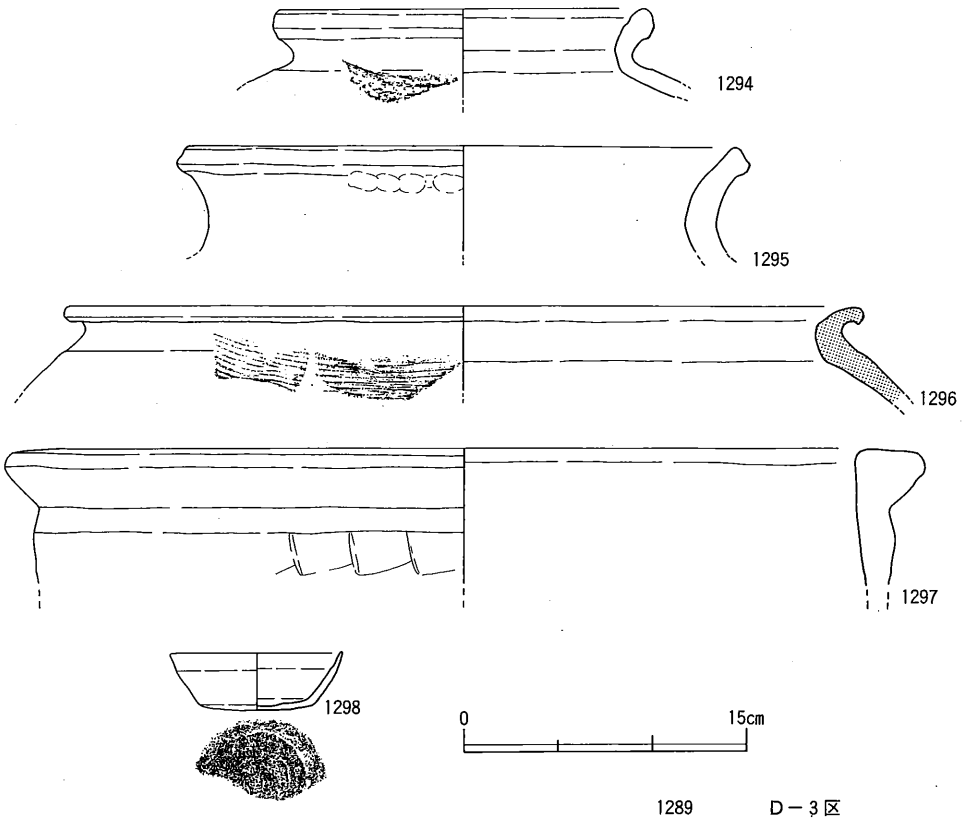
第220図　包含層出土遺物(3)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1276	擂鉢 AII	(口)30.0	2mm以下の砂粒	土師質	浅黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1277	擂鉢 AII	—	3mm以下の砂粒	土師質	明褐	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1278	擂鉢 AII	(口)25.0	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄褐	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/8
1279	擂鉢 AIII	(口)32.6	3mm以下の砂粒	須恵質	暗灰黄	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/10
1280	擂鉢 BII	(口)34.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1281	擂鉢 BII	(口)36.0	5mm以下の小石	土師質	(外)明赤褐 (内)灰褐	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1282	足釜 BIII	(口)24.2	1.5mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)ナデ	口径3/20
1283	足釜 BIII	(口)24.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/8
1284	羽釜	(口)33.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい赤褐	(胴)押圧→(口・胴)板ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/10
1285	鍋 AII	(口)44.8	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	調整不明	口径1/8
1286	鍋 BIII	(口)43.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/10
1287	壺	(口)20.0	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口・頸)横ナデ	(口・頸・体)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/8
1288	脚付甕	—	2mm以下の砂粒	土師質	(外)オリーブ褐 (内)黄褐			1/8

第113表　包含層出土遺物観察表(2)



第221図　包含層出土遺物(4)

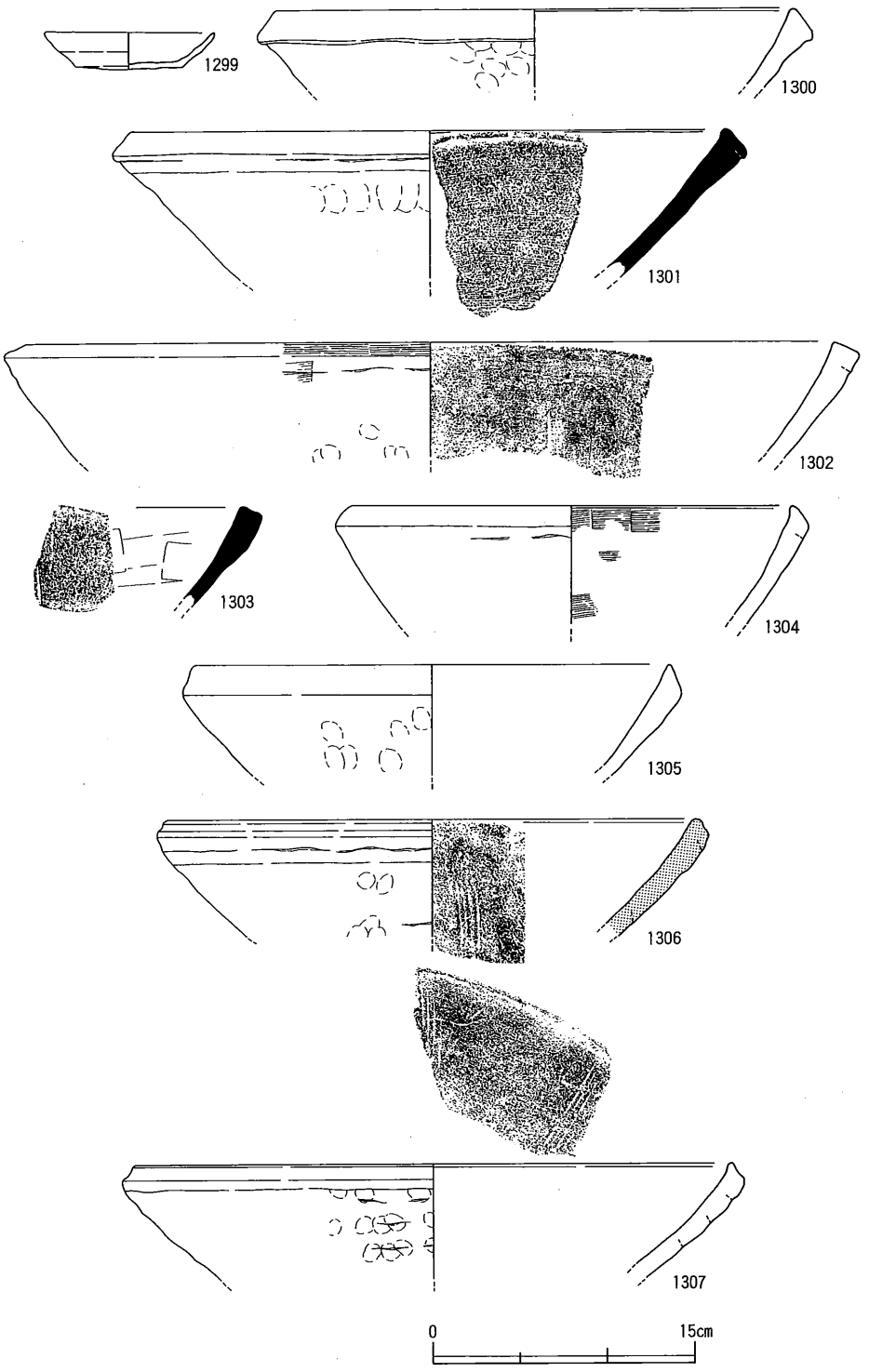


1289　　D－3区
1290～1297　D－5区
1298　　E－4区

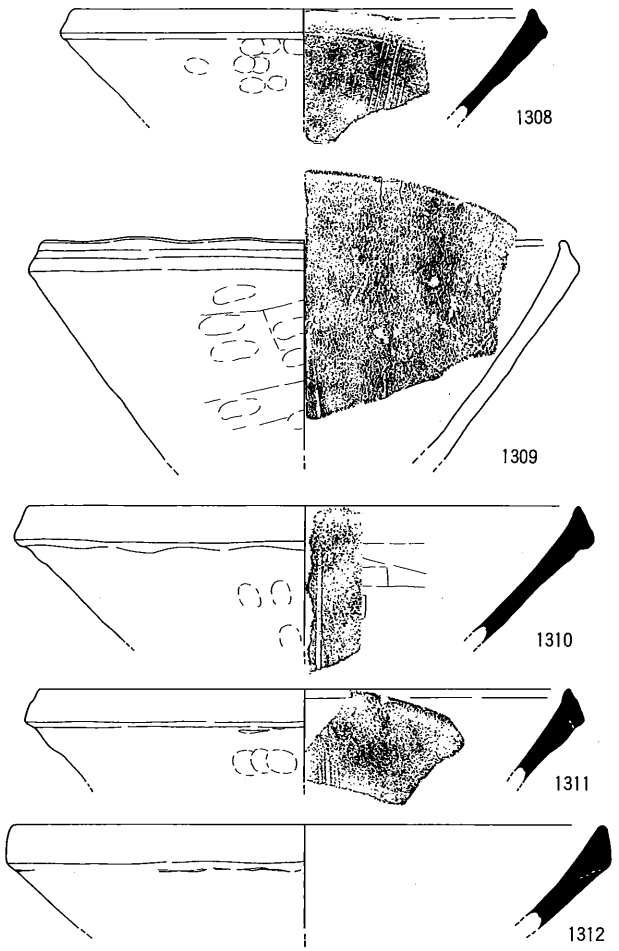
第222図　包含層出土遺物(5)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1289	擂鉢 BI	(口)32.1	2mm以下の砂粒	須恵質	(外)灰 (内)褐灰	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口唯1/8
1290	捏鉢	(口)18.0 (高)6.1 (底)12.4	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ (底)下駄印	(口・体)回転ナデ	3/4
1291	足釜 BIII	(口)22.6	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(鍔)押圧→(口・鍔)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	口唯1/4
1292	鍋 AII	(口)39.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)板ナデ→横ナデ	(口・体)横ハケ・板ナデ	口唯1/8
1293	鍋 BII	(口)45.6	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(体)縦ハケ→(口)横ナデ	(口)横ハケ (体)板ナデ	口唯1/8
1294	甕 AII	(口)19.0	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(体)格子叩き目 →(口・鍔)回転ナデ	(口・鍔)回転ナデ	口唯1/6
1295	甕 C	(口)29.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	調整不明	口唯1/8
1296	鉢	(口)42.4	1mm以下の砂粒	瓦質	灰	(体)平行叩き目 →(口・鍔)横ナデ	(体)当て具痕 →(口・鍔)横ナデ	口唯1/8
1297	甕	(口)43.0	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(口)回転ナデ？	(口)回転ナデ？	口唯1/10
1298	杯	(口)9.0 (高)3.0 (底)6.0	1mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(口・体)回転ナデ →(底)回転ヘラ削り	(口・体・底)回転ナデ →(底)ナデ	1/2

第114表　包含層出土遺物観察表(3)



第223図　包含層出土遺物(6)

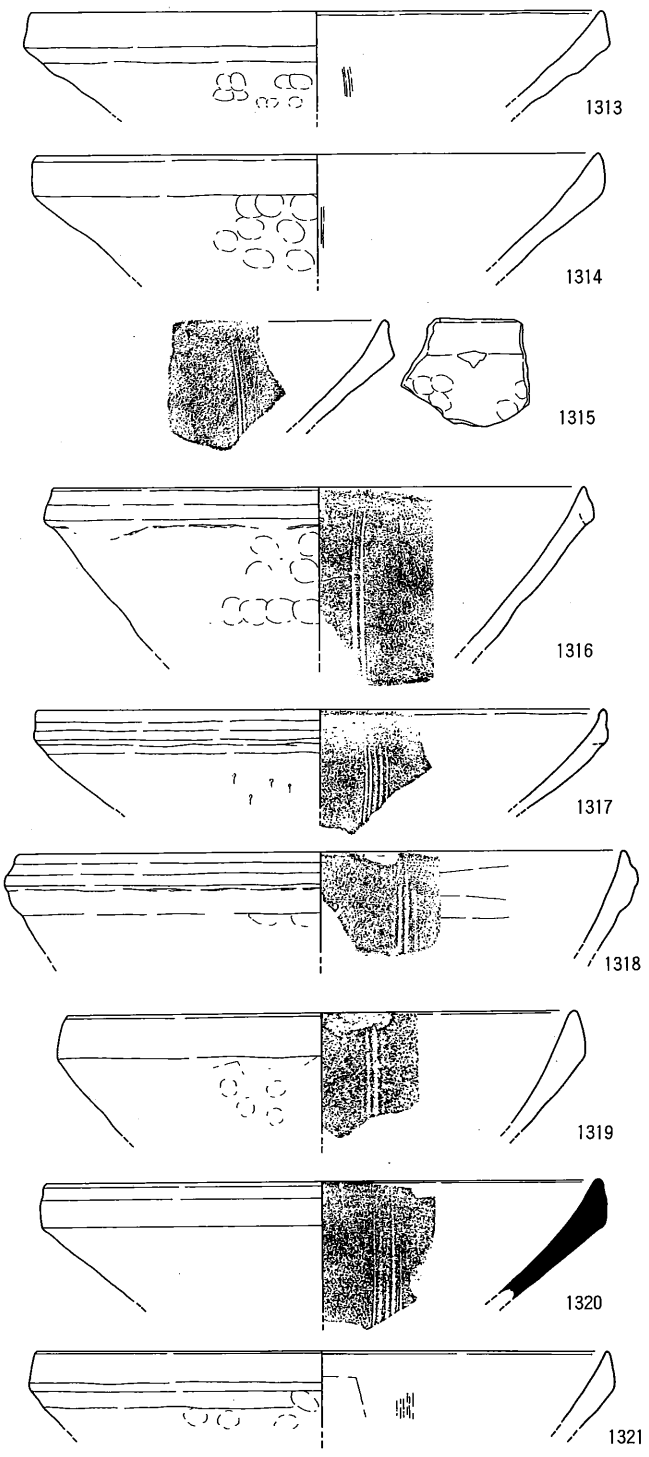


1299～1312　E－5区(1)

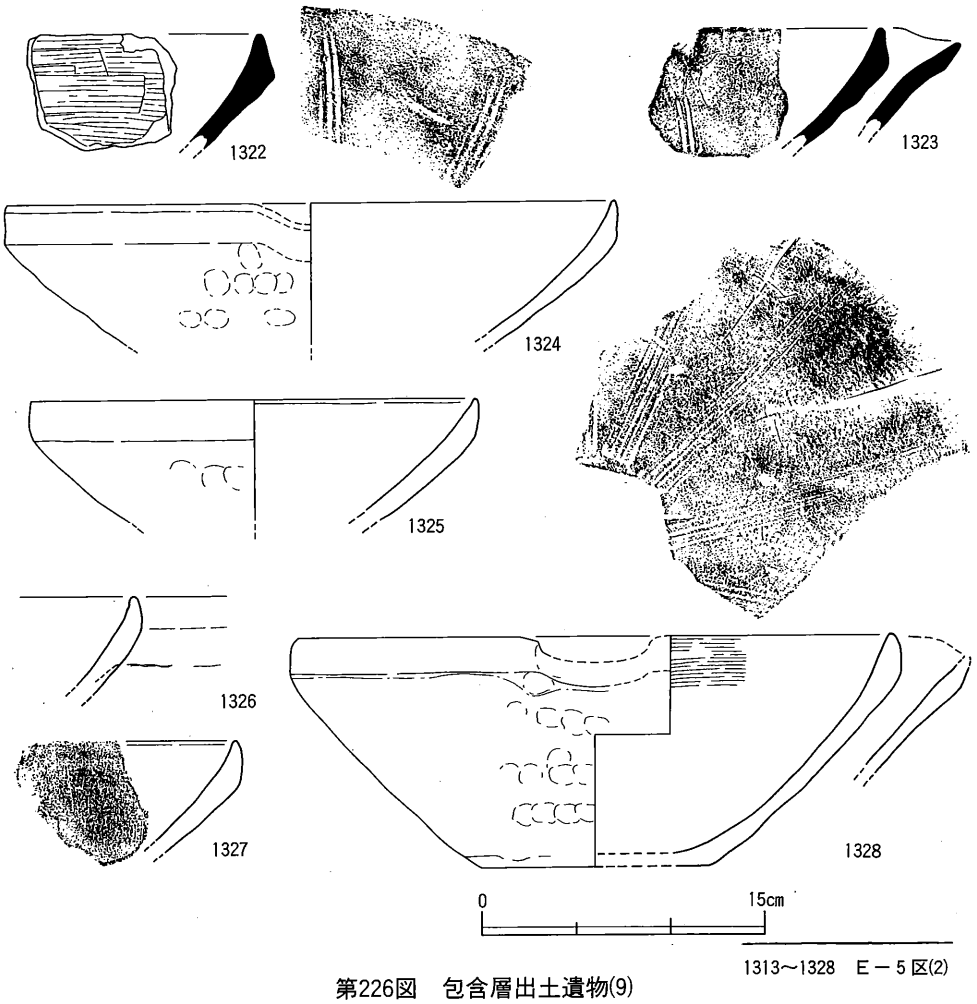
第224図　包含層出土遺物(7)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法 外面	手法 内面	残存度
1299	杯	(口)9.6 (高)2.1 (底)6.0	1mm以下の砂粒	土師質	浅黄橙	(口・体)回転ナデ →(底)回転ヘラ削り	(口・体・底)回転ナデ	底1/8
1300	擂鉢 AⅠ	(口)29.2	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/10
1301	擂鉢 AⅠ	(口)33.7	2mm以下の砂粒	須恵質	(外)灰 (内)灰オリーブ	(口)回転ナデ	(口・体)横ハケ →(口)回転ナデ	口1/8
1302	擂鉢 AⅠ	(口)45.6	2mm以下の砂粒	土師質	浅黄橙	(口)横ハケ	(口・体)板ナデ	口1/8
1303	擂鉢 AⅠ	—	2.5mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1304	擂鉢 AⅡ	(口)25.0	3mm以下の砂粒、金雲母を多量	土師質	橙	調整不明	(口・体)横ハケ	口1/12
1305	擂鉢 AⅡ	(口)27.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/8
1306	擂鉢 AⅡ	(口)30.0	2mm以下の砂粒	瓦質	(外)にぶい黄橙 (内)黄灰 (断)にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)ナデ	口1/8
1307	擂鉢 AⅡ	(口)34.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/8
1308	擂鉢 AⅡ	(口)22.0	1mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/8
1309	擂鉢 AⅡ	(口)27.2	2mm以下の砂粒	土師質	黄灰	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/8
1310	擂鉢 AⅡ	(口)29.0	5mm以下の砂粒	須恵質	灰白	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/12
1311	擂鉢 AⅡ	(口)28.0	1mm以下の砂粒	須恵質	黄灰	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1312	擂鉢 AⅢ	(口)31.1	3mm以下の砂粒、5mm程の小石	須恵質	(外)灰 (内)橙	(口)回転ナデ	調整不明	口1/8

第115表　包含層出土遺物観察表(4)



第225図　包含層出土遺物(8)

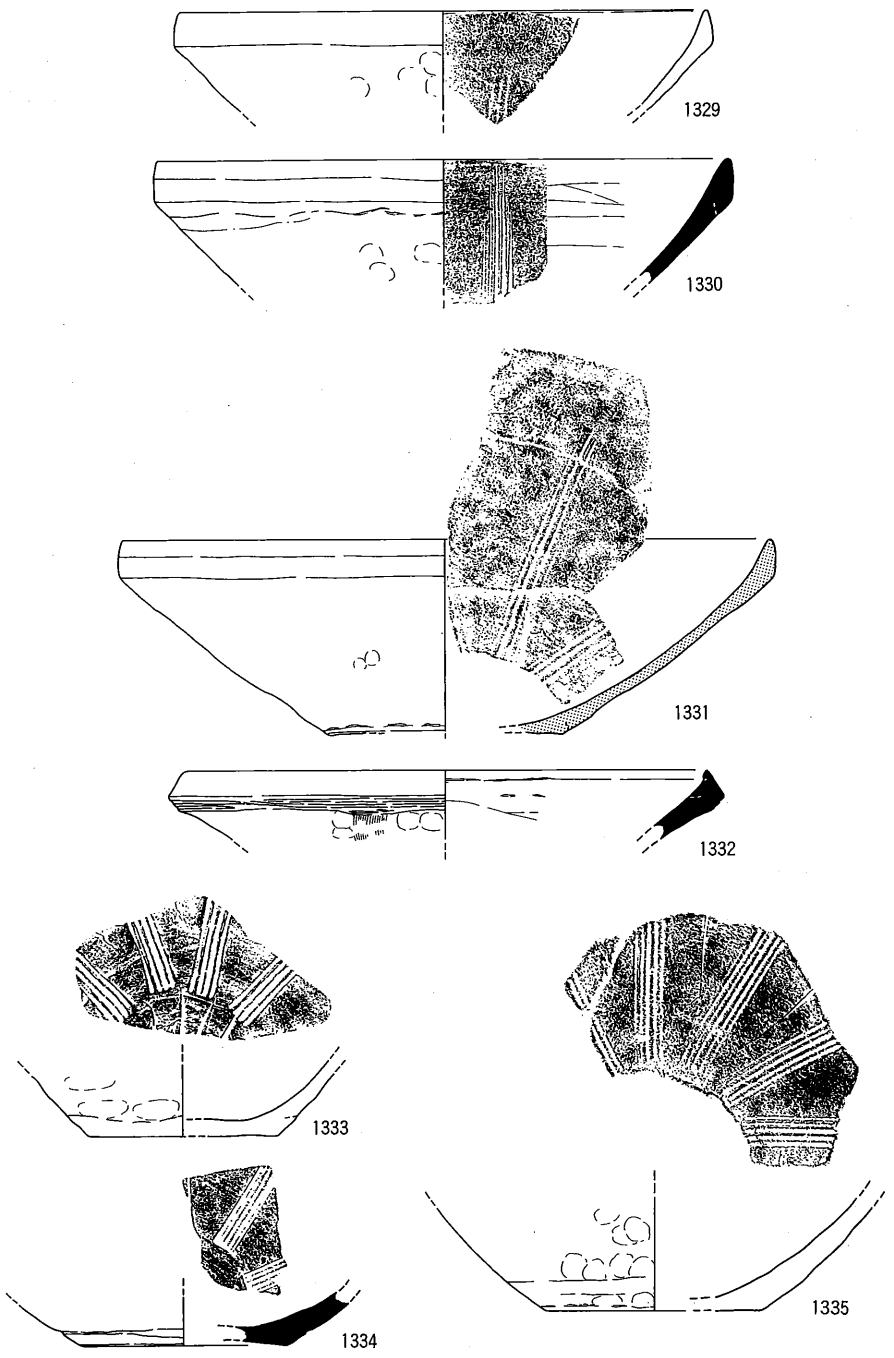


1313～1328　E－5区(2)

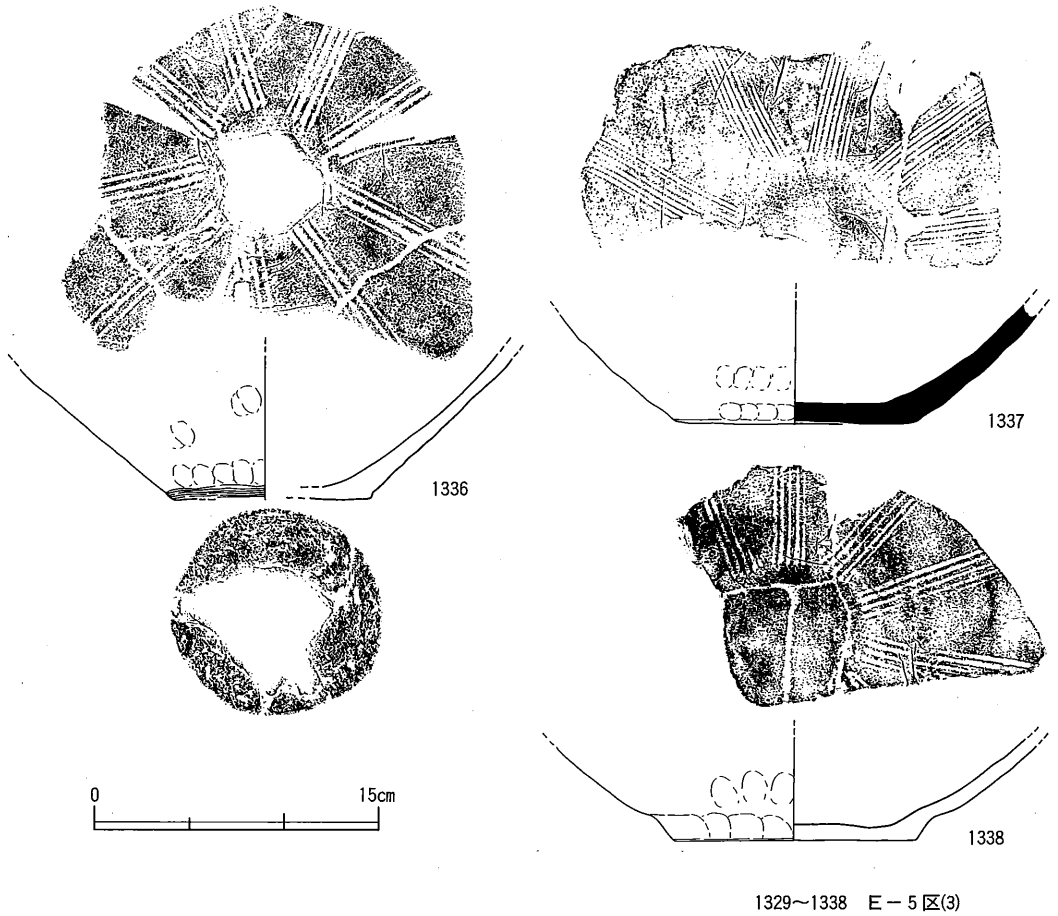
第226図　包含層出土遺物(9)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1313	擂鉢 AIII	(口)30.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ		口1/12
1314	擂鉢 AIII	(口)30.0	2mm以下の砂粒	土師質	褐	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/12
1315	擂鉢 AIII	—	2mm以下の砂粒	土師質	灰白	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1316	擂鉢 AIII	(口)14.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/6
1317	擂鉢 AIII	(口)30.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/12
1318	擂鉢 AIII	(口)32.0	2mm以下の砂粒	土師質	浅黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/12
1319	擂鉢 AIII	(口)26.8	2.5mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/12
1320	擂鉢 AIII	(口)29.2	1.5mm以下の砂粒	須恵質	灰白	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1321	擂鉢 AIII	(口)30.2	2.5mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/8
1322	擂鉢 AIII	—	2mm以下の砂粒	須恵質	(外)灰 (内)灰白	(口)回転ナデ	(口・体)横ハケ	細片
1323	擂鉢 AIII	—	3mm以下の砂粒	須恵質	灰黄	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
1324	擂鉢 AIII	(口)32.0	5mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/4
1325	擂鉢 AIII	(口)23.4	3mm以下の砂粒	土師質	橙	調整不明	調整不明	口1/12
1326	擂鉢 AIII	—	1mm以下の砂粒	土師質	(外)浅黄 (内)橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
1327	擂鉢 AIII	—	2mm以下の砂粒	土師質	浅黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1328	擂鉢 AIII	(口)31.6(高)12.2 (底)12.0	4mm以下の砂粒	土師質	灰黄	(口)回転ナデ	(口・体)横ハケ 使用痕	口1/6 底1/4

第116表　包含層出土遺物観察表(5)



第227図　包含層出土遺物⑽

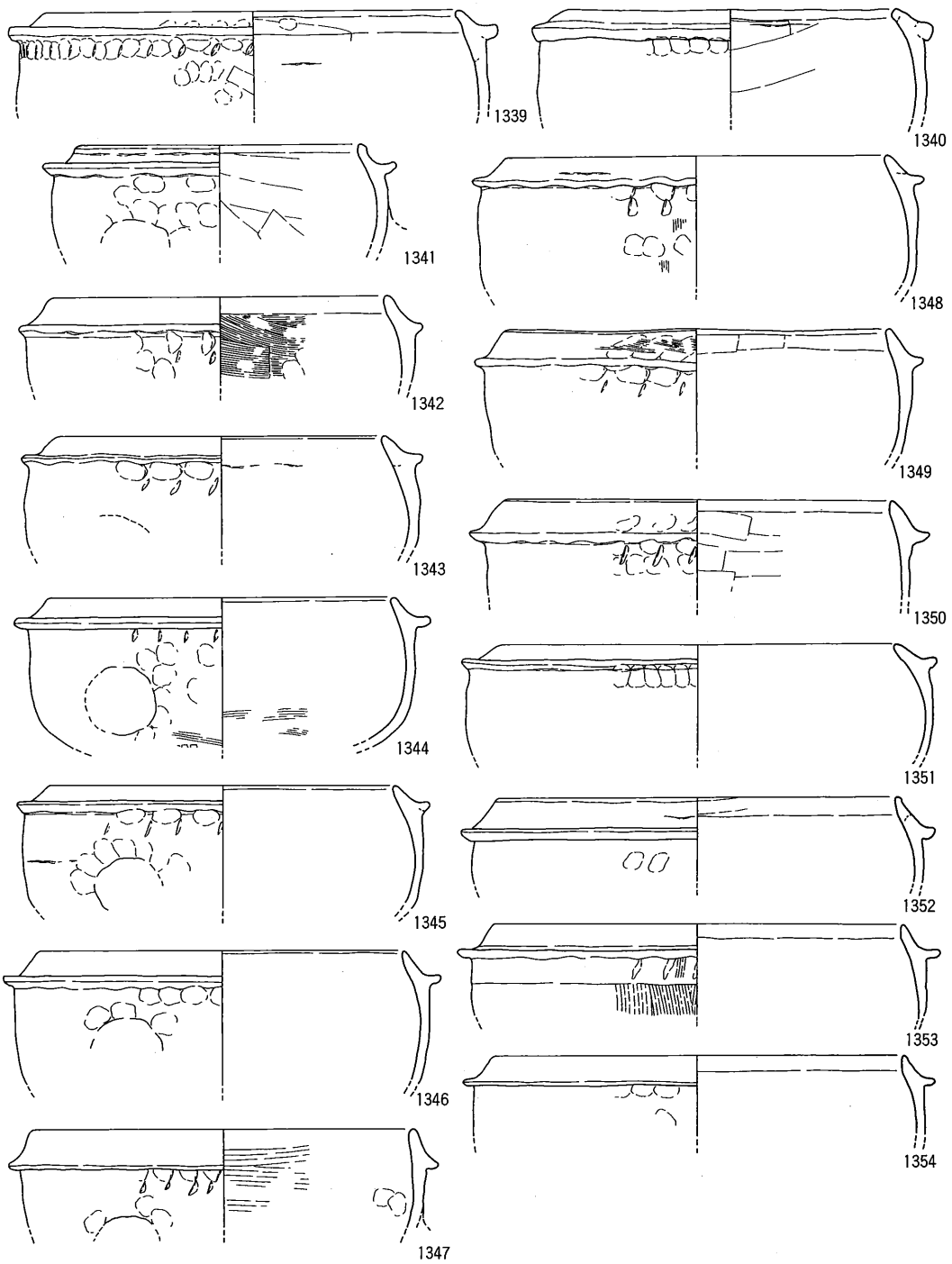


1329～1338　E－5区(3)

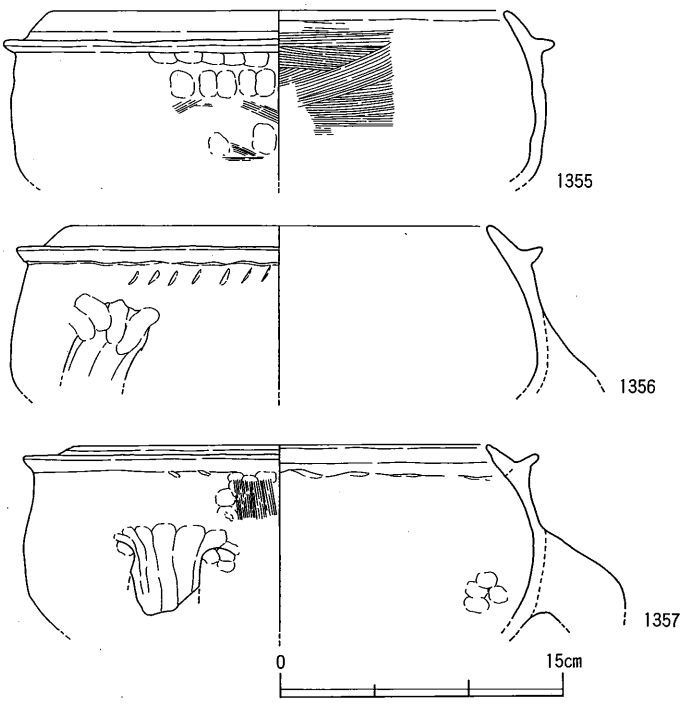
第228図　包含層出土遺物(11)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1329	擂鉢 AⅢ	(口)27.8	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/12
1330	擂鉢 AⅢ	(口)30.0	2mm以下の砂粒を少量	須恵質	灰白	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/12
1331	擂鉢 AⅢ	(口)34.4	1mm以下の砂粒	瓦質	(内外)明黄褐 (断)橙	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口径1/8
1332	擂鉢 AⅣ	(口)27.4	1mm以下の砂粒を少量	須恵質	灰	(体)縦ハケ→(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ→(口)回転ナデ	口径1/12
1333	擂鉢 底部	(底)10.0	2mm以下の砂粒	土師質	(外)浅黄橙 (内)灰白	(底外縁)削り状ナデ	(体・底)回転ナデ	底径1/3
1334	擂鉢 底部	(底)11.2	2mm以下の砂粒	須恵質	灰	(底外縁)削り状ナデ	(体・底)板ナデ	口径1/8
1335	擂鉢 底部	(底)11.4	2mm以下の砂粒	土師質	(外)橙 (内)灰黄	(底外縁)削り状ナデ	(体・底)板ナデ	底径1/3
1336	擂鉢 底部	(底)10.5	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(底外縁)ヘラ削り(底)下駄印	(体・底)板ナデ	底径完存
1337	擂鉢 底部	(底)13.0	2mm以下の砂粒	須恵質	灰		(体・底)板ナデ	底径1/2
1338	擂鉢 底部	(底)13.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(底外縁)削り状ナデ	(底)ナデ	底径1/2

第117表　包含層出土遺物観察表(6)



第229図　包含層出土遺物(12)

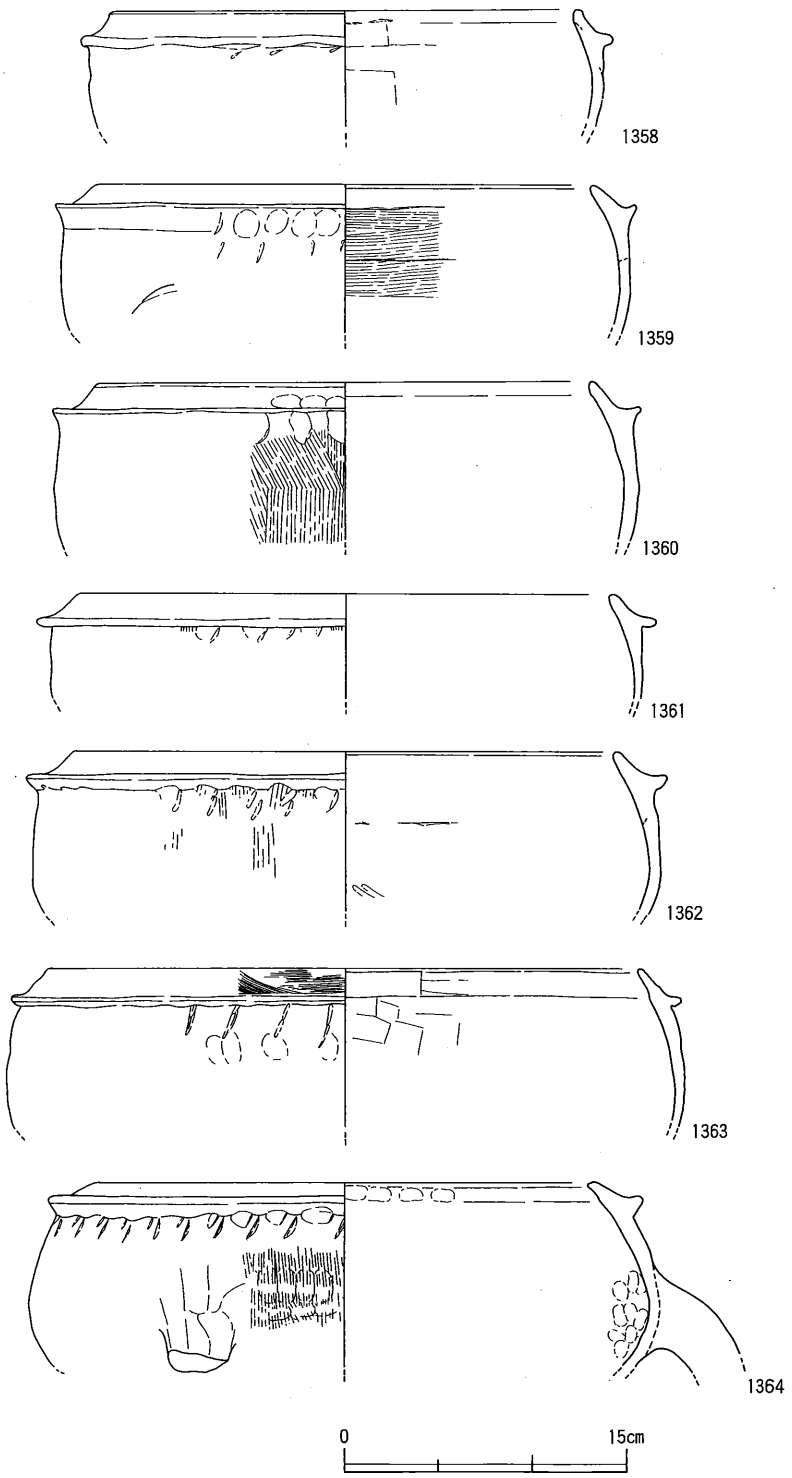


1339～1357　E－5区(4)

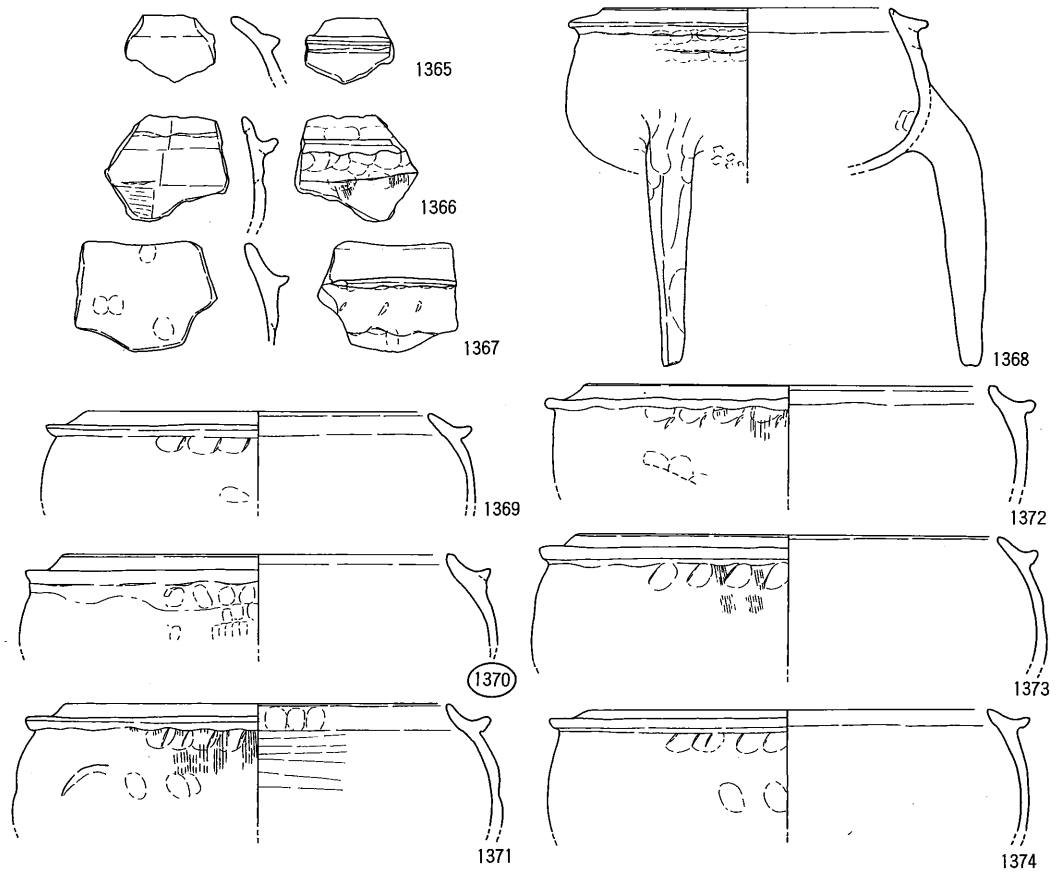
第230図　包含層出土遺物(13)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1339	足釜 AII	(口)24.0	4mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	□1/4
1340	足釜 AII	(口)19.2	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	□1/4
1341	足釜 BII	(口)16.4	2mm以下の砂粒	土師質	浅黄橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	□1/4
1342	足釜 BIII	(口)19.6	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)2段押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	□1/8
1343	足釜 BIII	(口)18.8	2.5mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)2段押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)ナデ	□1/6
1344	足釜 BIII	(口)20.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ (底)横ハケ→格子叩き目	(底)横ハケ	□1/10
1345	足釜 BIII	(口)20.4	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)2段押圧→(口・胴)横ナデ	調整不明	□1/6
1346	足釜 BIII	(口)21.4	3mm以下の砂粒を多量	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	調整不明	□1/6
1347	足釜 BIII	(口)22.0	4mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)2段押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ	□1/12
1348	足釜 BIII	(口)22.0	3mm以下の砂粒	土師質	浅黄橙	(体)縦ハケ→(胴)2段押圧 →(口・胴)横ナデ	(口・体)ナデ	□1/4
1349	足釜 BIII	(口)22.1	2.5mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)2段押圧→(口・胴)横ナデ→(口)横ハケ	(口・体)板ナデ	□1/4
1350	足釜 BIII	(口)22.6	5mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)2段押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	□1/4
1351	足釜 BIII	(口)23.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(胴)押圧→調整不明	調整不明	□1/6
1352	足釜 BIII	(口)23.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1353	足釜 BIII	(口)24.0	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(体)縦ハケ→(胴)押圧 →(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	□1/12
1354	足釜 BIII	(口)24.0	3mm以下の砂粒を多量	土師質	橙	調整不明	調整不明	□1/4
1355	足釜 BII	(口)24.0	2mm以下の砂粒	土師質	明褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ (体)横ハケ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	□1/8
1356	足釜 BII	(口)22.0	2mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	□1/8
1357	足釜 BIII	(口)22.0	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ →(体)縦ハケ	(口・体)横ナデ	□1/4

第118表　包含層出土遺物観察表(7)



第231図　包含層出土遺物(14)

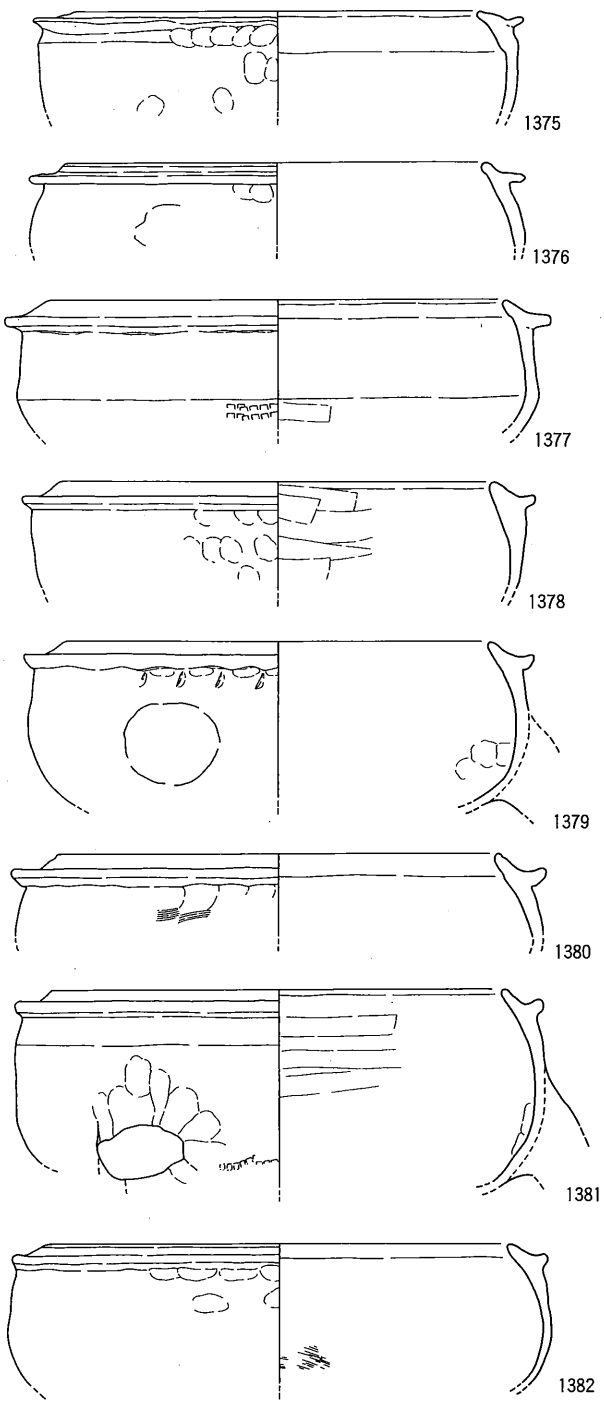


第232図　包含層出土遺物(15)

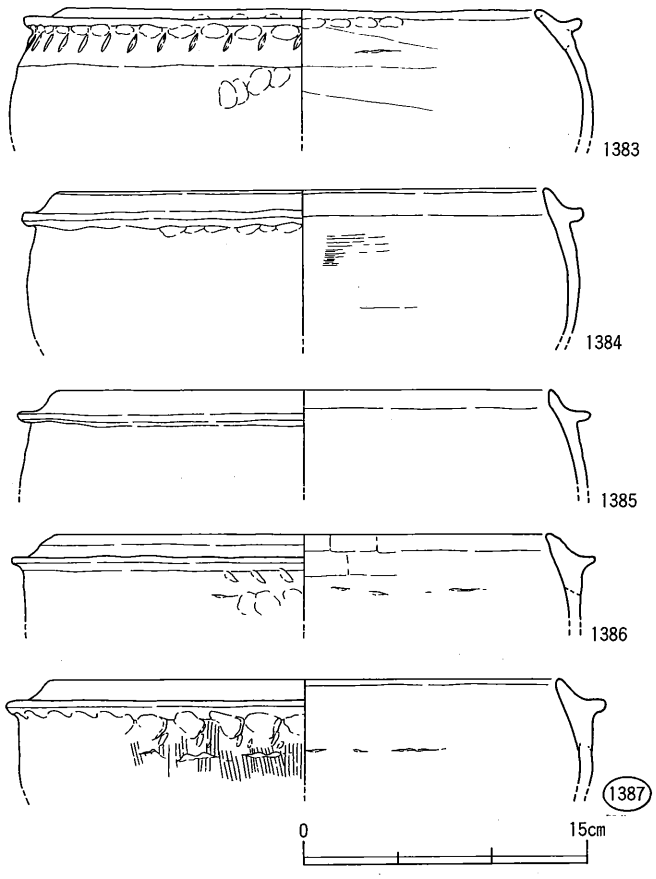
1358～1374　E－5区(5)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法 外面	手法 内面	残存度
1358	足釜 BIII	(口)24.2	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	細片
1359	足釜 BIII	(口)26.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)2段押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	□1/4
1360	足釜 BIII	(口)26.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	□1/8
1361	足釜 BIII	(口)28.1	3mm以下の砂粒	土師質	黄褐	(体)縦ハケ→(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	調整不明	□1/8
1362	足釜 BIII	(口)28.3	2mm以下の砂粒、5mm程の小石	土師質	明黄褐	(体)縦ハケ→(胴)2段押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ (底)当て具痕	□1/4
1363	足釜 BIII	(口)31.0	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(胴)2段押圧→(口・胴)板ナデ	(口・体)板ナデ	□1/8
1364	足釜 BIII	(口)26.0	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(体)縦ハケ→(胴)2段押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ？	□1/4
1365	足釜 BIII	—	1mm以下の砂粒	土師質	明黄橙	調整不明	調整不明	細片
1366	足釜 BIII	—	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	細片
1367	足釜 BIII	—	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	細片
1368	足釜 BIV	(口)15.0	2mm以下の砂粒	土師質	(外)浅黄橙 (内)黄橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ (底)格子叩き目	調整不明	□1/4
1369	足釜 BIV	(口)18.0	1mm以下の砂粒	土師質	明黄褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	□1/4
1370	足釜 BIV	(口)20.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	□1/6
1371	足釜 BIV	(口)20.0	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(体)縦ハケ→(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	□1/2
1372	足釜 BIV	(口)21.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)縦ハケ→(胴)2段押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	□1/3
1373	足釜 BIV	(口)22.0	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(体)縦ハケ→(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	□1/3 ほぼ完存
1374	足釜 BIV	(口)22.0	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	□1/5

第119表　包含層出土遺物観察表(8)



第233図　包含層出土遺物(16)

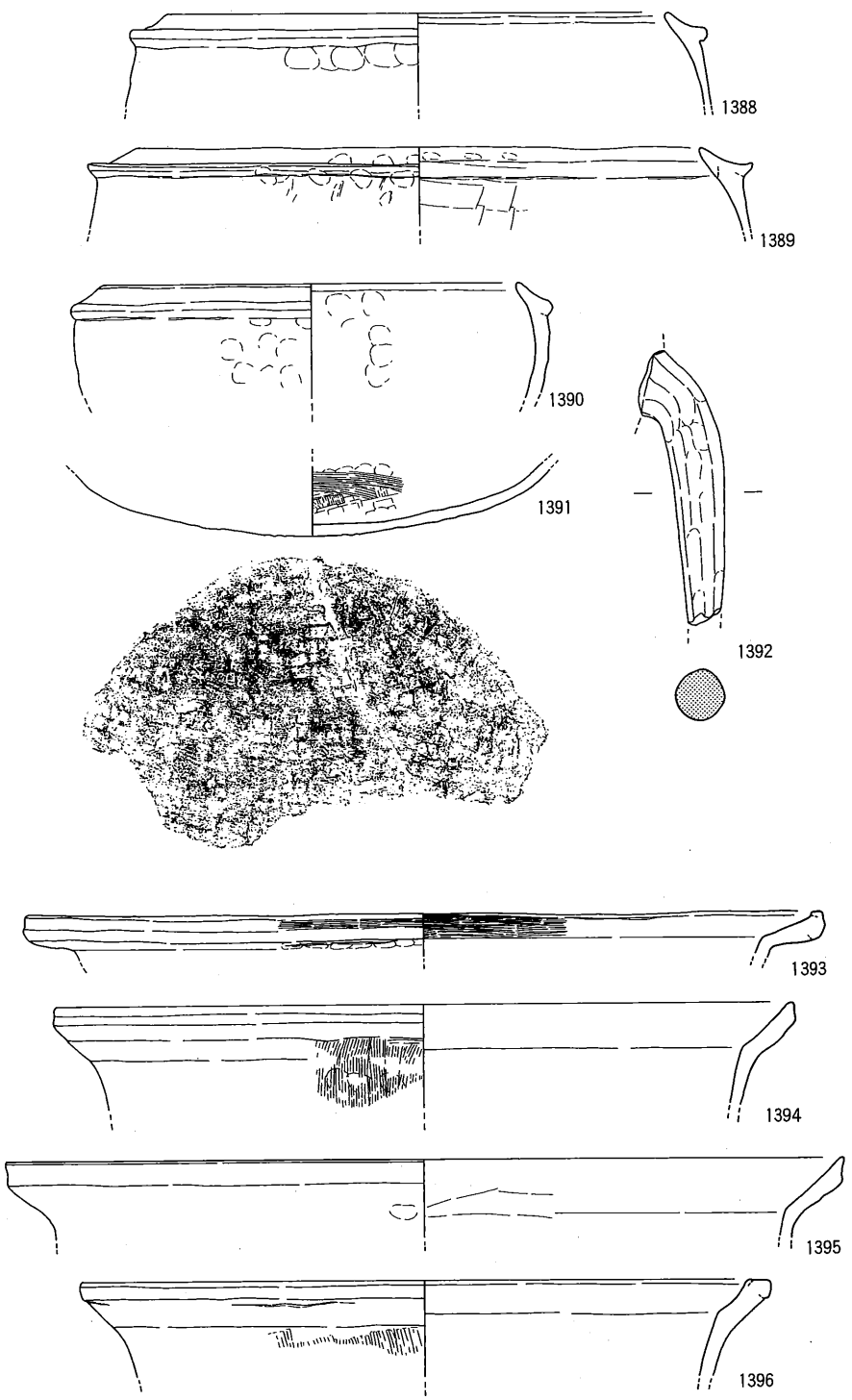


1375～1387　E－5区(6)

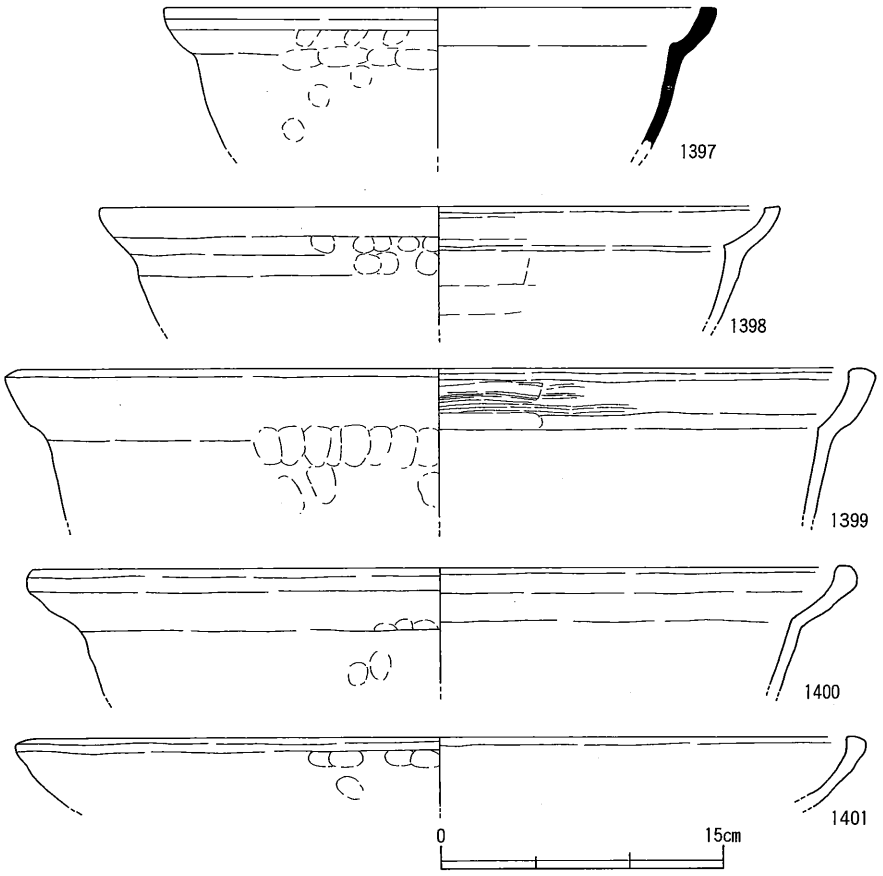
第234図　包含層出土遺物(17)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1375	足釜 BIV	(口)21.0	2mm以下の砂粒	土師質	明褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	口1/4
1376	足釜 BIV	(口)22.0	2mm以下の砂粒	土師質	(内外)明赤褐 (断)浅黄橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	調整不明	口1/8
1377	足釜 BIV	(口)24.0	3mm以下の砂粒	土師質	明褐	(口・胴・体)横ナデ (底)格子叩き目	(口・体)横ナデ→(底)板ナデ	口1/6
1378	足釜 BIV	(口)22.8	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/8
1379	足釜 BIV	(口)22.4	3mm以下の砂粒を多量	土師質	橙	(胴)2段押圧→調整不明	調整不明	口1/5
1380	足釜 BIV	(口)23.0	3mm以下の砂粒	土師質	(外)にぶい黄橙 (内)橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ・(体)横ハケ	(口・体)横ナデ	口1/8
1381	足釜 BIV	(口)24.1	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口・胴)横ナデ(底)格子叩き	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/4
1382	足釜 BIV	(口)24.2	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(底)横ハケ	口1/8
1383	足釜 BIV	(口)24.6	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)2段押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/4
1384	足釜 BIV	(口)25.6	4.5mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)横ハケ	口1/6
1385	足釜 BIV	(口)26.0	2mm以下の砂粒	土師質	明褐	(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	口1/5
1386	足釜 BIV	(口)26.2	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/6
1387	足釜 BIV	(口)26.8	3mm以下の砂粒、5mm程の小石	土師質	(外)灰褐 (内)橙	(体)縦ハケ→(胴)2段押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)横ナデ	口1/8

第120表　包含層出土遺物観察表(9)



第235図　包含層出土遺物(18)

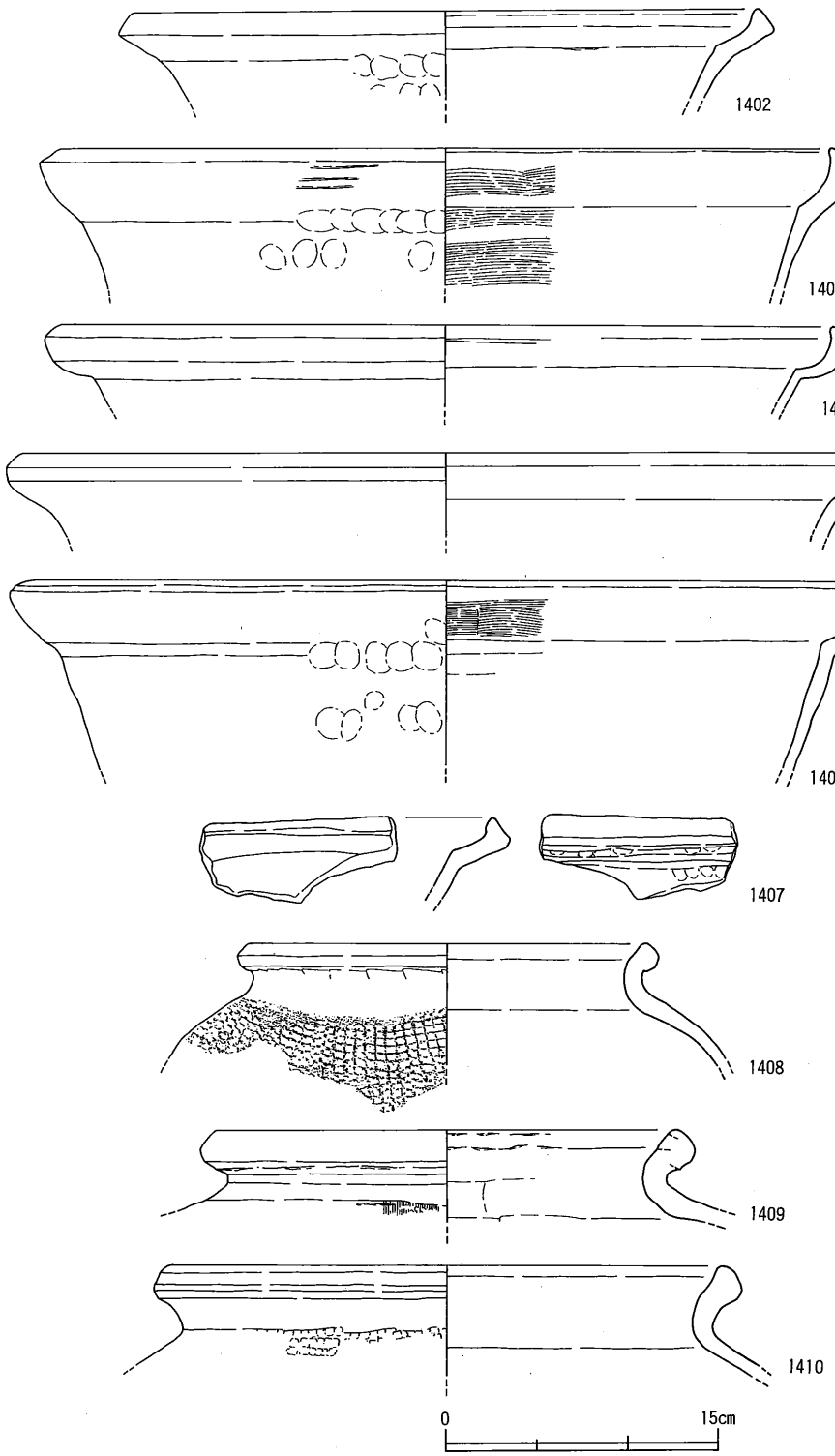


1388～1401　E－5区(7)

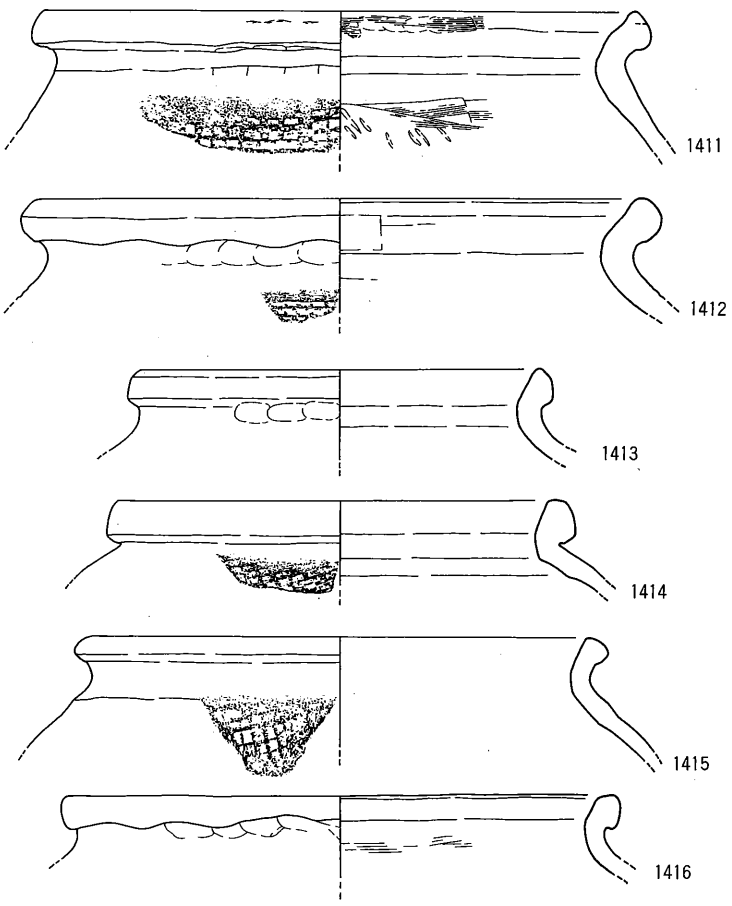
第236図　包含層出土遺物(19)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1388	足釜 BIV	(口)27.0	1mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口-胴)横ナデ	(口-体)横ナデ	口1/4
1389	足釜 BIV	(口)31.0	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(胴)2段押圧→(口-胴)横ナデ	(口-体)板ナデ	口1/10
1390	足釜 C	(口)22.8	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口-胴)横ナデ	(口-体)板ナデ	口1/8
1391	足釜 底部	(底)3.4	1mm以下の砂粒	土師質	橙	格子叩き目	横ハケ→板ナデ	口1/2
1392	足釜 脚部	—	2mm以下の砂粒	瓦質	灰黄褐	ナデ		
1393	鍋 AI	(口)43.8	5mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)横ハケ	(口)横ハケ (体)板ナデ	口1/12
1394	鍋 AII	(口)40.6	2mm以下の砂粒	土師質	橙	(口-体)縦ハケ→(口)横ナデ	(口-体)板ナデ	細片
1395	鍋 AII	(口)46.0	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(口)横ナデ	(口-体)板ナデ	細片
1396	鍋 AIII	(口)36.4	2mm以下の砂粒、5mm程の小石	土師質	明褐	(口)横ナデ (体)縦ハケ	(口-体)板ナデ	口1/8
1397	鍋 BI	(口)28.0	2mm以下の砂粒	須恵質	灰	(口)横ナデ	(口-体)横ナデ	口1/8
1398	鍋 BI	(口)36.0	5mm以下の砂粒	土師質	(外)にぶい黄橙 (内)灰黄	(口)横ナデ	(口-体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/10
1399	鍋 BII	(口)44.4	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口)横ハケ (体)板ナデ	口1/8
1400	鍋 BII	(口)42.4	1mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口)横ナデ	口1/4
1401	鍋 BII	(口)43.0	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口)横ナデ	口1/12

第121表　包含層出土遺物観察表(10)



第237図　包含層出土遺物(20)

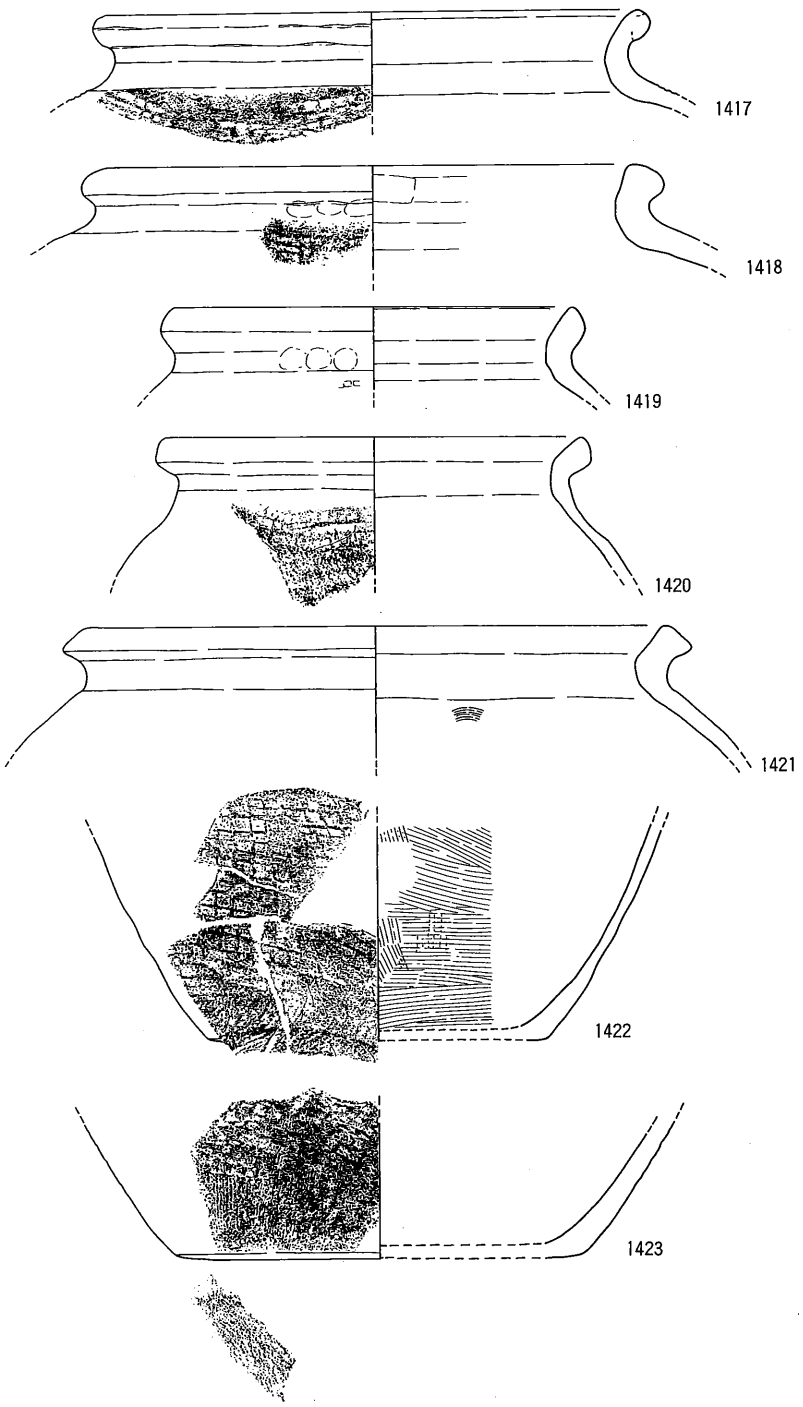


1402～1416　E－5区(8)

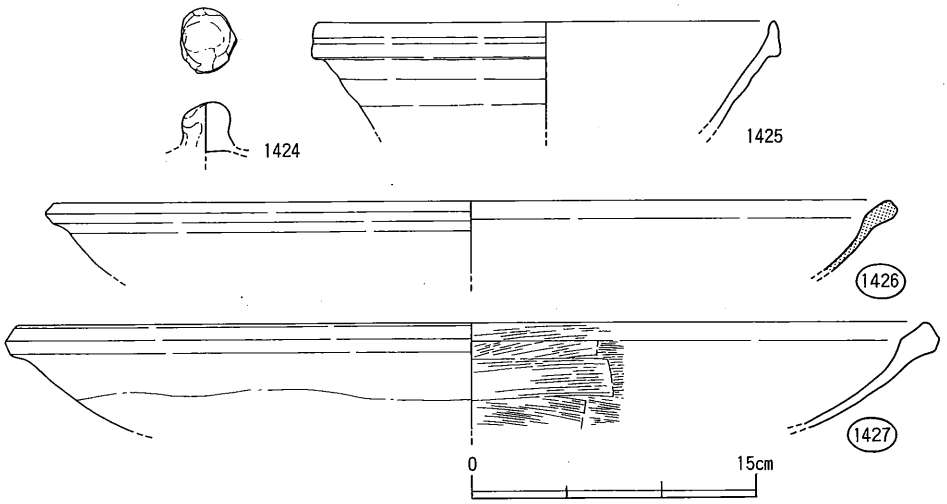
第238図　包含層出土遺物(21)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1402	鍋 BⅢ	(口)34.1	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口)横ナデ (体)板ナデ	口径1/12
1403	鍋 BⅢ	(口)42.0	2mm以下の砂粒	土師質	黄褐	(口)木目状圧痕→(口)横ナデ	(口・体)横ハケ	口径1/12
1404	鍋 BⅢ	(口)42.0	1mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ？	口径1/12
1405	鍋 BⅢ	(口)46.2	3mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	調整不明	調整不明	口径1/12
1406	鍋 BⅢ	(口)45.0	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい橙	(口)横ナデ	(口)横ハケ (体)板ナデ	細片
1407	鍋 BⅣ	—	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)横ナデ	(口・体)横ナデ	細片
1408	甕 AⅠ	(口)21.5	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄褐	(体)格子叩き目→(頸)板ナデ→(口)回転ナデ	(体)ナデ→(口・頸)回転ナデ	口径1/4
1409	甕 AⅠ	(口)24.6	2mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(体)格子叩き目→縦ハケ→(口・頸)回転ナデ	(頸・体)板ナデ→(口)回転ナデ	口径1/12
1410	甕 AⅠ	(口)30.2	3mm以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(体)格子叩き目	調整不明	口径1/8
1411	甕 AⅠ	(口)31.2	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目→(頸)板ナデ→(口)回転ナデ	(口・頸)板ナデ・横ハケ (体)当て具痕→板ナデ	口径1/12
1412	甕 AⅠ	(口)31.4	3mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目→(口・頸)回転ナデ	(頸・体)板ナデ→(口)回転ナデ	口径1/12
1413	甕 AⅡ	(口)21.0	2mm以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口・頸)回転ナデ	(口・頸)回転ナデ	口径1/4
1414	甕 AⅡ	(口)22.0	5mm以下の砂粒	土師質	明褐	(体)格子叩き目→(口・頸)回転ナデ	(口・頸)回転ナデ	口径1/10
1415	甕 AⅡ	(口)26.0	5mm以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目→(口・頸)回転ナデ	(口・頸)回転ナデ	口径1/7
1416	甕 AⅡ	(口)27.4	5mm以下の砂粒	土師質	橙	(口・頸)回転ナデ	(口・頸)横ハケ→回転ナデ	口径1/6

第122表　包含層出土遺物観察表(11)



第239図　包含層出土遺物(22)

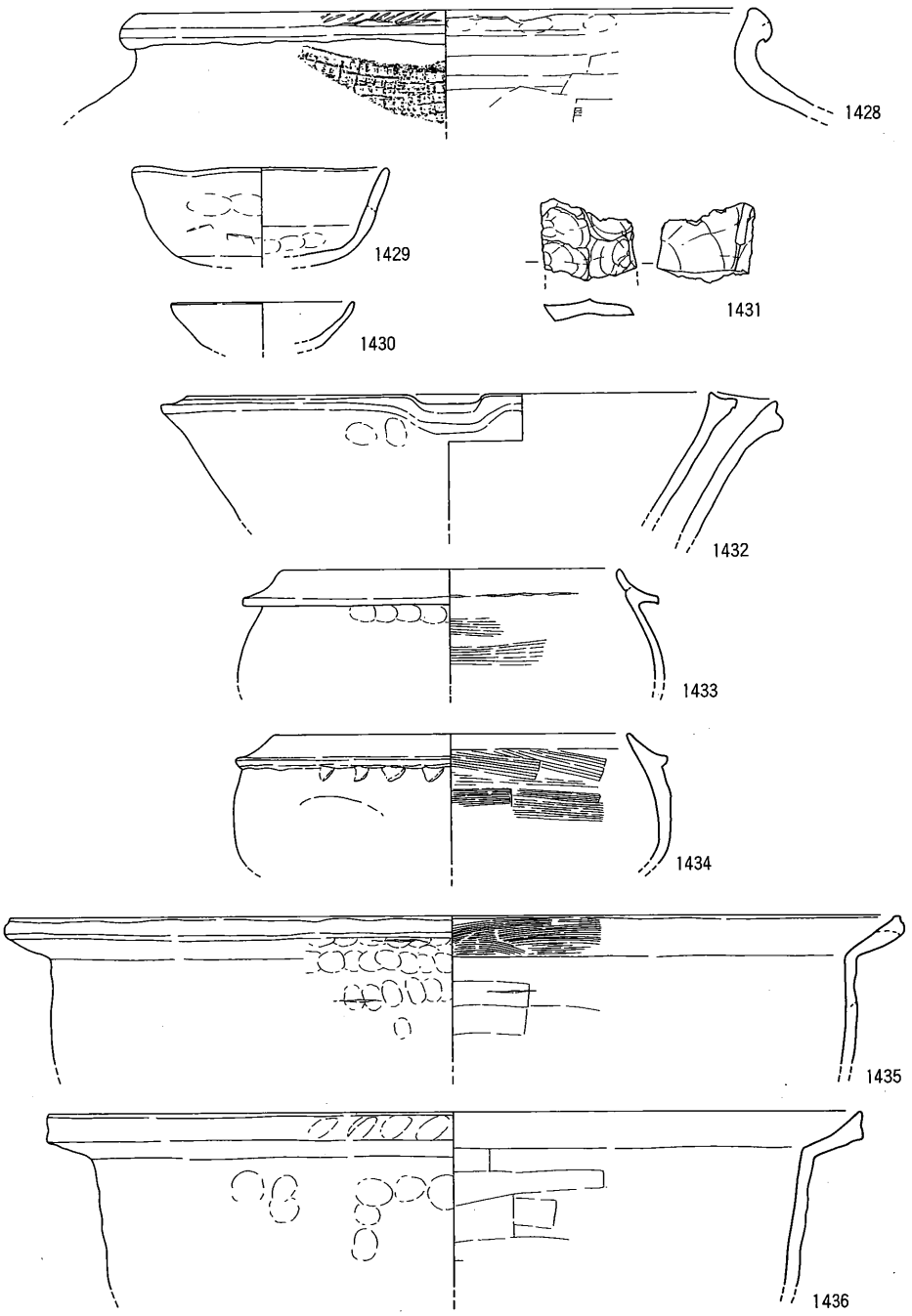


1417～1427　E－5区(9)

第240図　包含層出土遺物(23)

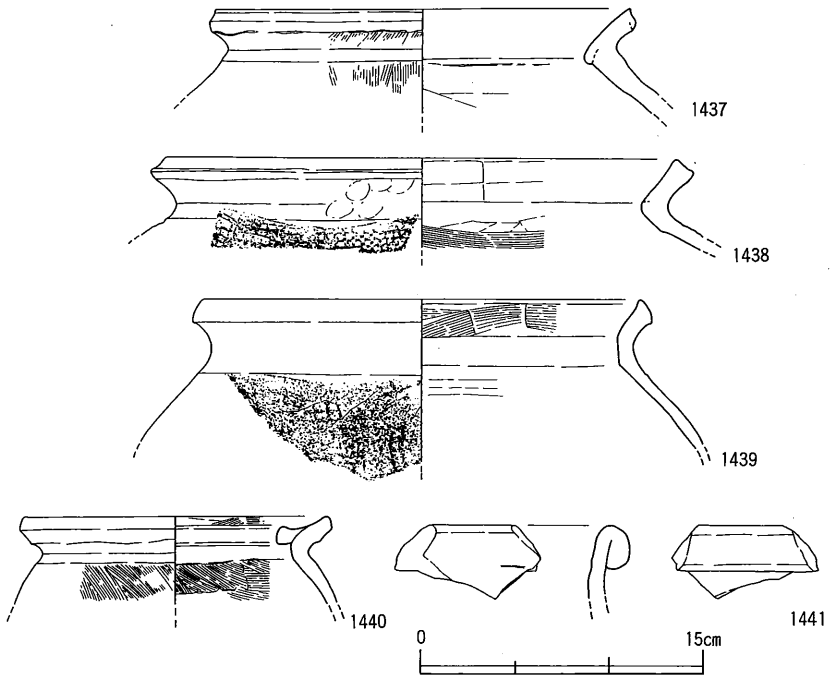
番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1417	甕 AⅡ	(口)28.0	2㎜以下の砂粒	土師質	明赤褐	(体)格子叩き目→(口・頸)回転ナデ	(体)板ナデ→(口・頸)回転ナデ	口1/5
1418	甕 AⅡ	(口)27.0	3㎜以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目→(口・頸)回転ナデ	(口・頸)板ナデ	口1/12
1419	甕 B	(口)21.0	5㎜以下の砂粒	土師質	褐	(体)格子叩き目→(口・頸)回転ナデ	(口・頸)回転ナデ	口1/10
1420	甕 B	(口)22.0	5㎜以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目→(口・頸)回転ナデ	(口・頸・体)回転ナデ	口1/8
1421	甕 B	(口)30.0	2㎜以下の砂粒	土師質	橙	(口・頸)回転ナデ (体)ナデ	(体)当て具痕 (口・頸)ナデ	口1/6
1422	甕 底体部	(底)18.0	2㎜以下の砂粒	土師質	橙	(体・底)格子叩き目	(体・底)横ハケ	底1/4
1423	甕 底体部	(底)21.8	3㎜以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目→(底縁)縦ハケ (底)下駄印ナデ	(体)ナデ	底1/4
1424	蓋ツマミ	—	3㎜以下の砂粒	土師質	橙			
1425	須恵系土器 坏	(口)24.0	1㎜以下の砂粒	土師質	浅黄橙	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/12
1426	焙烙	(口)44.0	1㎜以下の砂粒	瓦質	黄灰	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/10
1427	焙烙	(口)46.6	1㎜以下の砂粒	土師質	黒褐・灰黄褐	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ (回転ナデ)	口1/8

第123表　包含層出土遺物観察表(12)



1428　E－6区
1429　E－9区

第241図　包含層出土遺物(24)



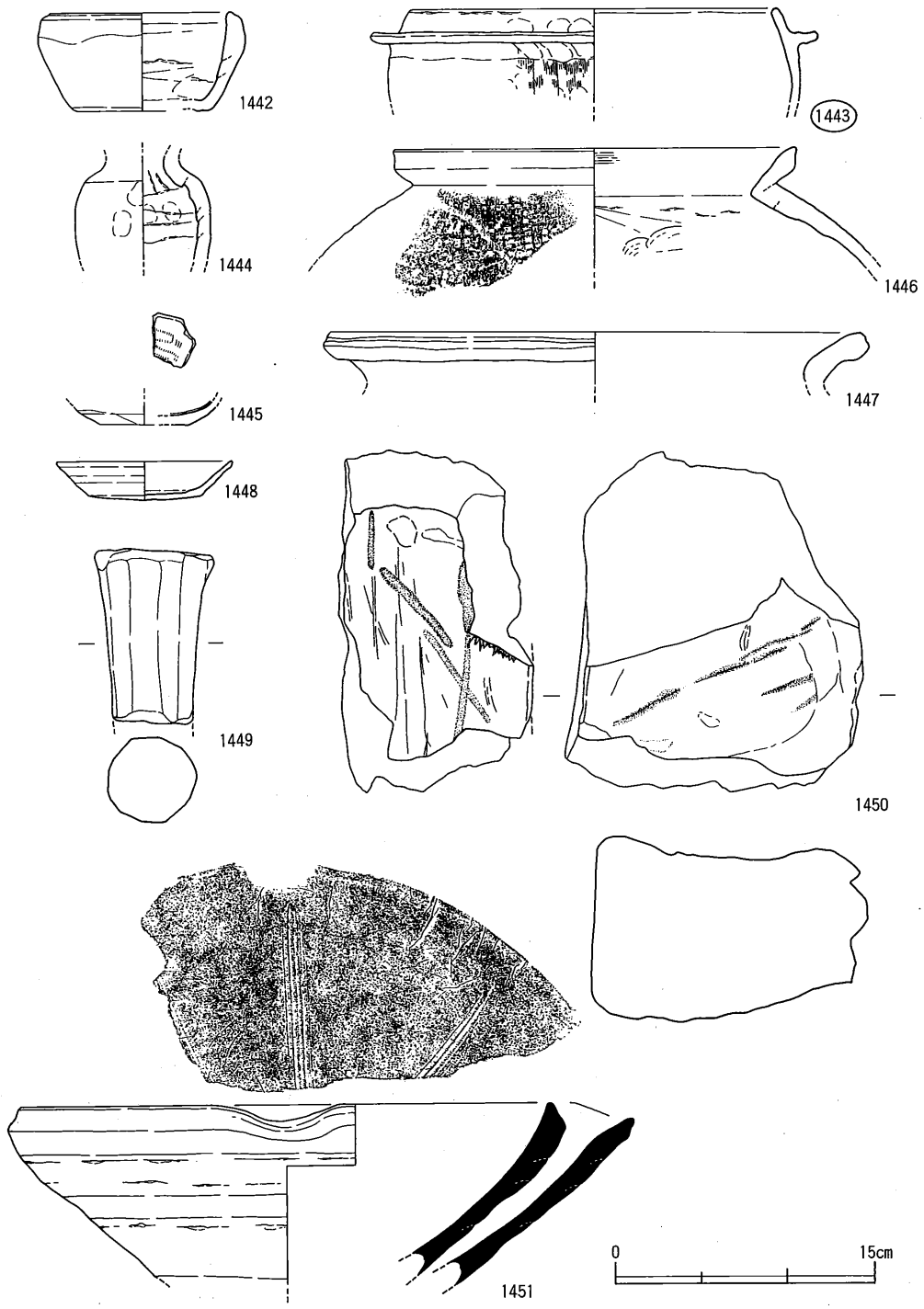
1430～1441　F－3区

第242図　包含層出土遺物(25)

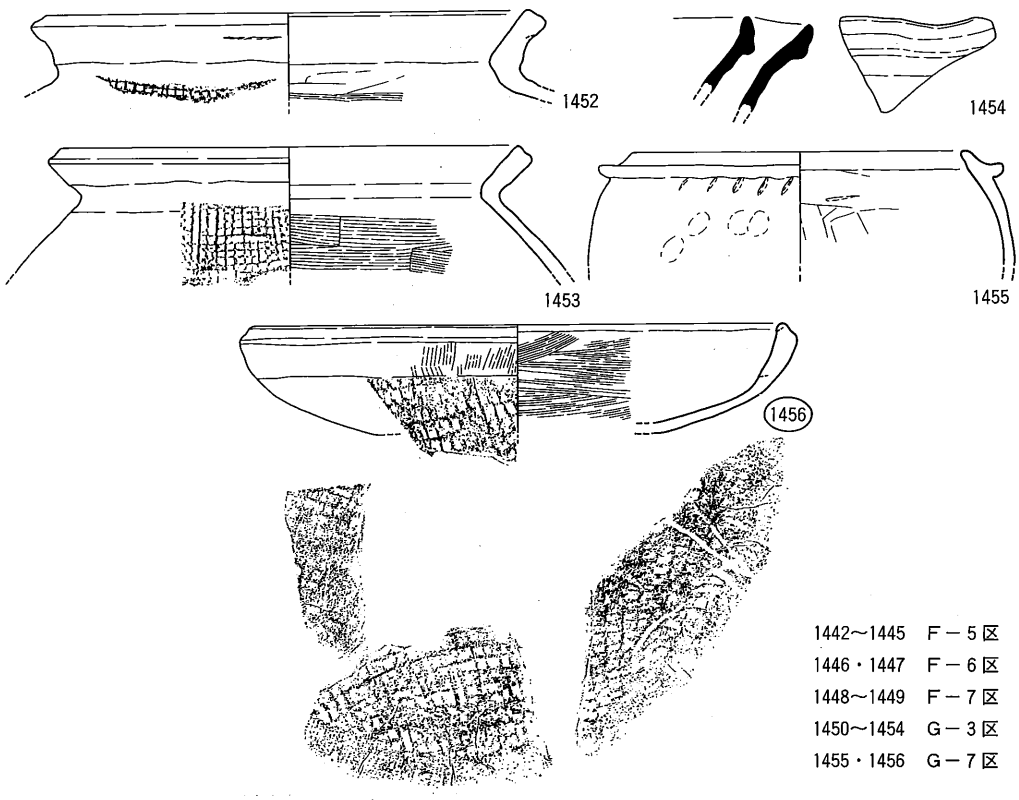
番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法 外面	手法 内面	残存度
1428	甕 AI	(口)32.9	4㎜以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目 (口)木目状圧痕→(口・頸)回転ナデ	(口・頸・体)板ナデ→(口)回転ナデ	口1/8
1429	椀	(口)13.6 (高)9.0	4㎜以下の砂粒	土師質	黄灰	(口・体)ナデ	(口・体)ナデ	口1/6
1430	杯	(口) 9.8	2㎜以下の砂粒	土師質	灰白	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/4
1432	擂鉢 AI	(口)28.2	4㎜以下の砂粒	土師質	橙	(口)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	口1/12
1433	足釜 BI	(口)18.4	2㎜以下の砂粒	土師質	橙	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(体)横ハケ→(口)横ナデ	口1/6
1434	足釜 BIII	(口)19.1	3㎜以下の砂粒	土師質	明黄褐	(肩)押圧→(口・肩)横ナデ	(口・体)横ハケ→(口)横ナデ	口1/4
1435	鍋 AI	(口)48.0	3㎜以下の砂粒	土師質	明黄褐	(口)横ナデ	(口)横ハケ (体)板ナデ	口1/12
1436	鍋 AII	(口)44.0	3㎜以下の砂粒	土師質	明褐	(口)横ナデ	(口・体)板ナデ	口1/12
1437	甕 C	(口)22.0	3㎜以下の砂粒	土師質	橙	(頸・体)縦ハケ→(口・頸)回転ナデ	(体)板ナデ→(口)回転ナデ	口1/4
1438	甕 C	(口)26.8	3㎜以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目→(口・頸)回転ナデ	(口・頸)板ナデ→(体)横ハケ	口1/6
1439	甕 C	(口)23.0	2㎜以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(体)格子叩き目→(口・頸)回転ナデ	(口)横ハケ (頸・体)板ナデ	口1/6
1440	壺	(口)16.0	2㎜以下の砂粒	土師質	にぶい黄褐	(体)縦ハケ→(口・頸)回転ナデ	(体・口)横ハケ→(頸)ナデ	口1/8
1441	備前焼 甕	—	2㎜以下の砂粒	陶質	灰褐	(口・頸)回転ナデ	(口・頸)回転ナデ	細片

番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1431	剥片	サヌカイト	(2.2)	2.6	0.6	(2.69)	

第124表　包含層出土遺物観察表(13)



第243図　包含層出土遺物(26)

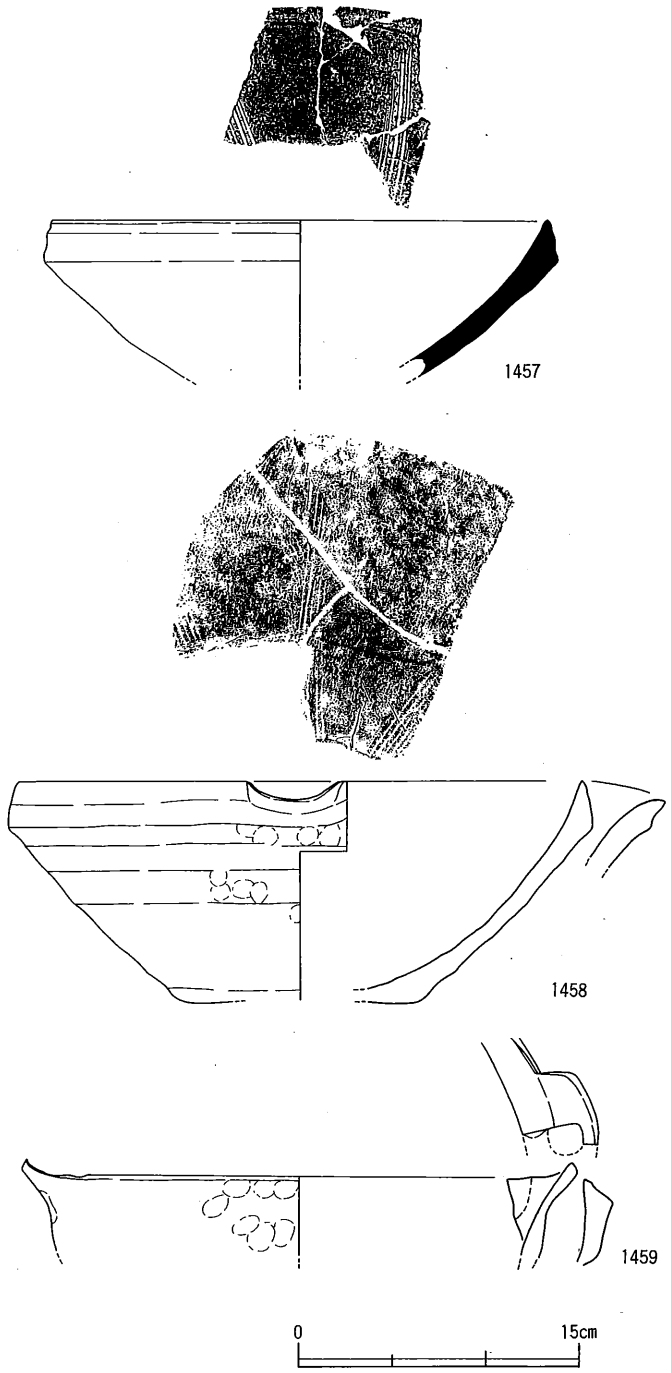


第244図　包含層出土遺物(27)

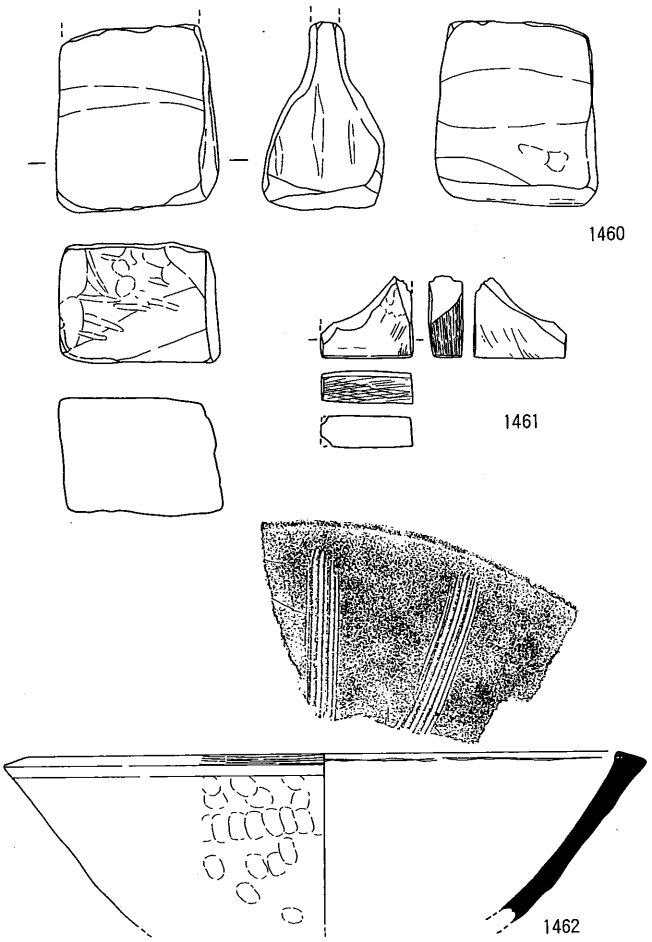
番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法 外面	手法 内面	残存度
1442	椀	(口)10.0 (高)5.7 (底) 8.0	3㎜以下の砂粒	土師質	褐灰	(口)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/6
1443	足釜 AⅠ	(口)20.8	2㎜以下の砂粒	土師質	橙	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(口・体)ナデ	口1/8
1444	小壺	—	4㎜以下の砂粒	土師質	橙	(体)ナデ→(頸)横ナデ	(頸)ナデ	体1/2
1445	青磁 Ⅲ	(底) 5.0	精良		(釉)灰白 (胎)灰	(底)回転ヘラ削り	(底)回転ナデ	底1/6
1446	甕 C	(口)22.8	3㎜以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目→(口・頸)回転ナデ	(体)当て具痕→板ナデ→(口)横ハケ	口1/6
1447	甕 C	(口)30.0	2㎜以下の砂粒	土師質	明褐	(口)沈線→調整不明	調整不明	口1/8
1448	杯	(口)10.0 (高)2.6 (底) 6.4	2㎜以下の砂粒	土師質	橙	(口・体)回転ナデ→(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口・体・底)回転ナデ	底部完存
1449	不明土製品	(径) 4.9	3㎜以下の砂粒	土師質	橙	ヘラ削り→ナデ		
1451	擂鉢 AⅡ	(口)30.5	2㎜以下の砂粒	須恵質	灰	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口3/8
1452	甕 C	(口)25.2	3㎜以下の砂粒	土師質	橙	(体)格子叩き目→(口・胴)回転ナデ	(体)横ハケ・板ナデ→(口・頸)回転ナデ	口1/8
1453	甕 C	(口)24.0	3㎜以下の砂粒	土師質	明褐	(体)格子叩き目→(口・胴)回転ナデ	(体)横ハケ→(口・頸)回転ナデ	口1/4
1454	須恵系土器 把手	—	1㎜以下の砂粒	須恵質	灰白	(口・体)回転ナデ	(口・体)回転ナデ	細片
1455	足釜 BⅣ	(口)18.0	2㎜以下の砂粒	土師質	にぶい褐	(胴)押圧→(口・胴)横ナデ	(体)板ナデ→(口)横ナデ	口1/4
1456	焙烙	(口)28.0	3㎜以下の砂粒	土師質	明赤褐	(体)縦ハケ→(口)横ナデ (底)格子叩き目	(口・体・底)横ハケ→(口)横ナデ	口1/2

番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1450	砥石	安山岩	(14.7)	8.2	11.5	(2037.89)	条溝状の擦痕あり

第125表　包含層出土遺物観察表(14)



第245図　その他の遺構・トレンチ出土遺物(1)



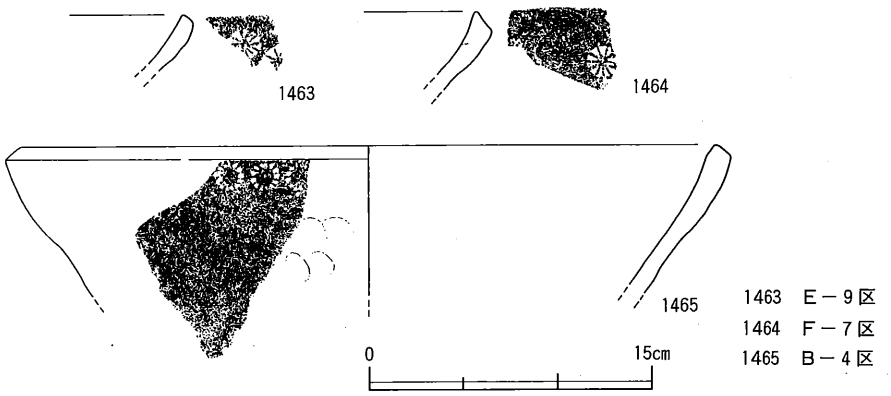
1457　ＳＫ01
1458　ＳＤ02
1459～1461予備調査
1462　不明

第246図　その他の遺構・トレンチ出土遺物(2)

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1457	擂鉢 ＡⅢ	(口)26.0	5㎜以下の砂粒	須恵質	灰	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/12
1458	擂鉢 ＡⅢ	(口)30.0 (高)11.7 (底)11.2	2㎜以下の砂粒	土師質	明赤褐	(口)回転ナデ	(口・体)板ナデ	口1/8
1459	把手付鍋	(口)29.0	2㎜以下の砂粒	土師質	にぶい黄橙	(口)横ナデ	(口・体)ナデ	細片
1462	擂鉢 ＡⅠ	(口)31.0	3㎜以下の砂粒	須恵質	灰白	(口)横ハケ	(口・体)板ナデ　使用痕	口1/6

番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1460	砥石	砂岩	(7.1)	6.4	4.6	(273.68)	側面に条溝状の擦痕あり
1461	砥石	泥岩？	(3.3)	3.7	1.3	(19.88)	側面に条線状の細かい擦痕あり

第126表　その他の遺構・トレンチ出土遺物観察表



第247図　包含層出土の印花文土器

番号	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法		残存度
						外面	内面	
1463	捏鉢	－	3㎜以下の砂粒	土師質	黄褐	調整不明	調整不明	細片
1464	捏鉢	－	2㎜以下の砂粒	土師質	明赤褐	(Ⅱ)回転ナデ	(Ⅱ-ⓐ)板ナデ	細片
1465	捏鉢	(Ⅱ)36.6	4㎜以下の砂粒	土師質	暗褐	調整不明	調整不明	細片

第127表　包含層出土の印花文土器

註(1)　横山浩一「須恵器の叩き目」『史淵』117号　1980

(2)　松本敏三・岩橋孝「香川県古代窯業遺跡分布調査報告Ⅰ（旧刈田郡・旧三野郡）」　『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第1号　1984

松本敏三・岩橋孝「香川県古代窯業遺跡分布調査報告Ⅱ（旧多度郡・那珂郡以東）」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第2号　1985

(3)　田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1980

(4)　中村浩「出土須恵器の編年的考察」『和泉陶邑窯の研究』柏書房　1981

(5)　藤澤良祐「総括――瀬戸大窯の編年的研究――」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ　1986

(6)　間壁忠彦『考古学ライブラリー　60　備前焼』ニュー・サイエンス社　1991

葛原克人・栗野克己・狐塚省蔵「学術調査報告」『海底の古備前』山陽新聞社　1978

(7)　註(6)葛原・栗野・狐塚論文に同じ。

(8)　荻野繁春「財産目録に顔を出さない焼物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第25集　1990

(9)　「正箱遺跡・薬王寺遺跡」『県道山崎御厩線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（財）香川県埋蔵文化財調査センター・香川県教育委員会　1994

(10)　山仲進「東播系中世須恵器の分類と編年」『神出1986』妙見山麓遺跡調査会　1989

(11)　荻野繁春「西日本における中世須恵器系陶器の生産資料と編年」『福井考古学会会誌』1985

⑿ 伊藤晃「窯業」『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987

⒀ 岡田博ほか「亀山遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』3 岡山県教育委員会 1988

⒁ 『堺市文化財調査報告』第41集 堺市教育委員会 1989

⒂ 『堺市文化財調査報告』第49集 堺市教育委員会 1989

⒃ 『天野山金剛寺遺跡』河内長野市遺跡調査会 1994

⒄ 堺近郊産瓦質甕の年代観は，續伸一郎氏の御教示による。

⒅ 「西村遺跡」Ⅱ『国道32号綾南バイパス建設工事にともなう埋蔵文化財発掘調査」 香川県教育委員会 1981

⒆ 『下右田遺跡』第3次調査概報 山口県教育委員会 1979

⒇ 註⑿に同じ。

(21) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について――型式分類と編年を中心として――」『九州歴史資料館研究論集』4 1978

(22) 佐藤竜馬「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論叢』1993

(23) 石沢誠司「土人形」『講座・日本技術の社会史』第4巻 窯業 日本評論社 1984

(24) 佐藤竜馬「18～19世紀の土器・瓦について」『空港跡地遺跡発掘調査概報』平成5年度（財）香川県埋蔵文化財調査センター・香川県教育委員会 1994

第４章　自然科学調査の成果

第１節　楠井遺跡より採取した焼土試料の残留磁気の測定について

花園大学自然科学研究室　前中　一晃

はじめに

1990年６月26日に（財）香川県埋蔵文化財調査センターの依頼を受け，綾歌郡国分寺町福家字楠井楠井遺跡のＳＦ０１窯より焼土試料の採取を行い，その残留磁気の測定を行った。西南日本の考古地磁気研究は近畿・東海地方を中心として行われ，四国については昨夏の高松市前田東町の古窯および綾歌郡綾南町陶字北山田西の奥下池南窯（須恵器窯）の２ヶ所の古窯より採取した焼土試料についての考古地磁気研究がはじめてのものであった。

遺構の概要

今回採取の対象となった楠井遺跡について「国分寺楠井遺跡現地説明会資料」(1990）は次のように記述している。

綾歌郡国分寺町字楠井の山林には，古くから土器片が散布していることが知られていた。この地に平成３年度完成を目指して四国横断自動車道（高松～善通寺）が建設されることになり，それに先立ち埋蔵文化財の発掘調査が行われることになった。平成元年度には遺跡の範囲を確定させる予備調査が実施され，お前泉裏の谷を中心に遺跡が広がることが分かった。そこで，この遺跡を『国分寺楠井遺跡』と命名し，4400㎡を対象に平成２年４月より調査を開始したが，大量の土器片とともに土器を焼いた窯跡が検出され，この遺跡が窯業生産遺跡であることが判明した。

現在までに検出された遺構には，窯跡２基その他があるが，今回そのうちの１基の窯

（ＳＦ０１）より焼土試料を採取した。ＳＦ０１は直径１ｍ・深さ0.5m程度の大きさをもつ窯跡である。燃料を燃やす部分（焚き口）と土器を焼く部分（焼成部）からなり，焼成部には粘土を貼って壁（窯壁）としている。焼成部は，上に向かって開いているが，本来はこの上に天井が設けられていたと考えられる。また，焼成部天井奥には煙を出す煙道があったようである。焼成部の床面には，素焼きの土器（土師器）の土釜・土鍋・甕の破片が残されていた。これらの出土品からこの窯の年代は14世紀後半～15世紀初頭と考えられている。

考古地磁気測定試料は窯壁および床面から総計17点採取した。

残留磁気の測定手続き

採取された焼土試料は実験室で「岩石切断機」を使って残留磁気測定に供されるように整形された後，「残留磁気測定装置」および「交流消磁装置」を使ってその残留磁気の測定が行われた。

第１表は，ＳＦ０１窯より採取された焼土試料の残留磁気測定の結果を纏めたものであ

試料番号	NRM強度 ($\times10^{-5}$emu/g)	交流消磁前の残留磁化方位 D(°E)	I(°)	α_{95}(°)	K	交流消磁後の残留磁化方位 D(°E)	I(°)	α_{95}(°)	K	MDF (×mT)
K11	37.1	28.3	52.1			27.3	51.8			5.7
K12	82.8	23.2	52.0			24.8	50.5			5.6
K13	48.0	12.0	55.8			18.3	56.2			6.8
K14＊	0.6	− 55.5	54.7			−−	−−			2.9
K21	14.1	14.2	50.3			14.8	51.2			−−
K22	11.1	5.3	45.7			5.9	47.5			4.3
K23＃	0.6	5.0	38.9			4.8	40.1			6.3
K24＃	0.5	9.0	38.5			15.7	41.2			3.8
K25＊	0.3	39.7	−52.6			−−	−−			−−
K31	27.1	21.2	55.7			16.5	55.0			6.0
K32	14.9	11.1	55.7			7.1	54.2			5.7
K33	35.4	12.3	52.7			10.8	52.4			6.1
K34＃	15.3	−127.7	−54.0			−124.6	−58.6			6.3
K41＊	0.5	17.1	31.4			−−	−−			8.2
K51＊	0.2	25.1	28.2			−−	−−			−−
K52＊	0.4	− 5.1	54.6			−−	−−			3.3
K53＃	2.5	66.6	60.3			73.2	57.7			4.7
平均(8)		15.8	52.6	3.9	198	15.6	52.6	3.8	215	

第128表　ＳＦ０１窯焼土試料の残留磁気測定結果

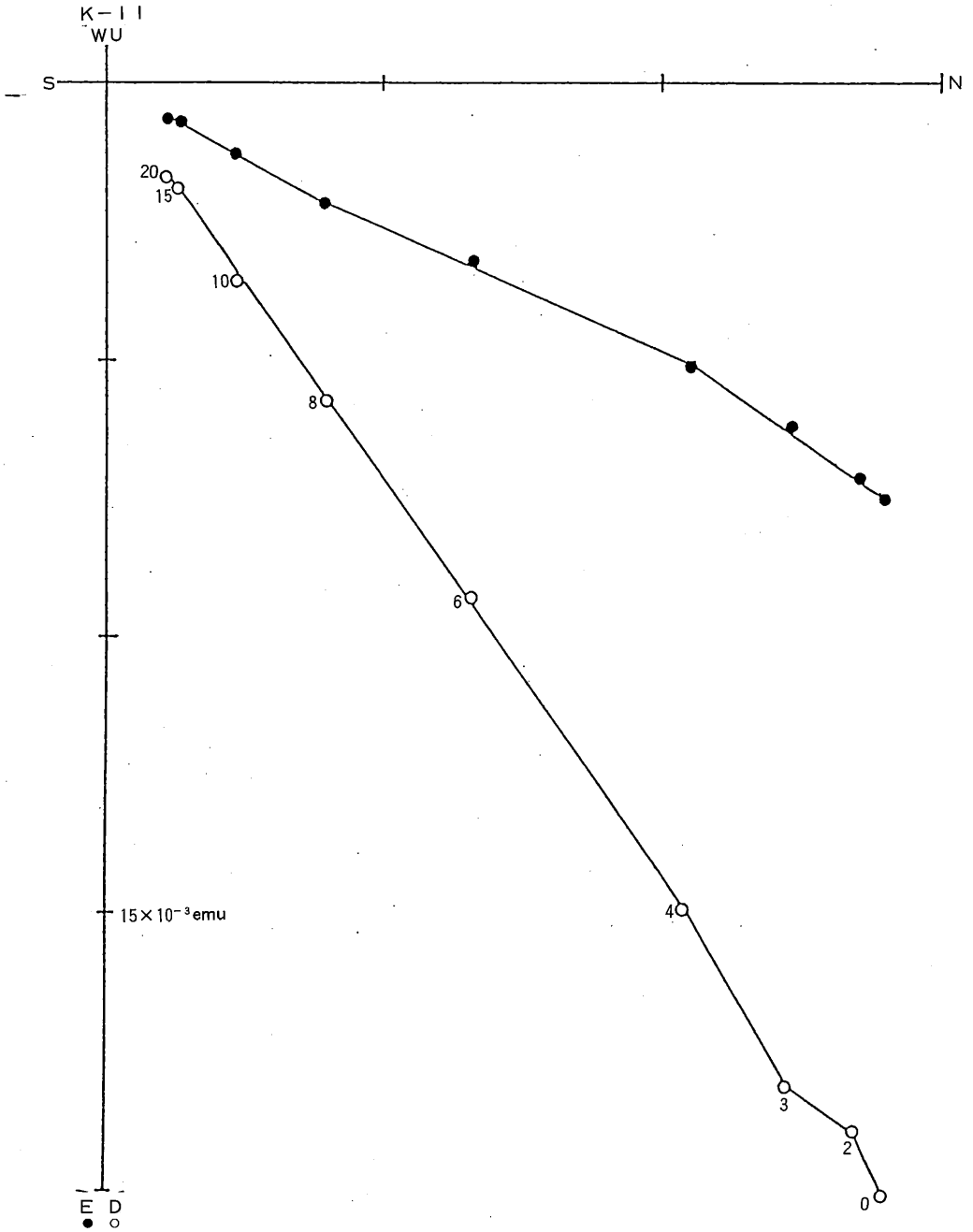
る。これを例にして残留磁気測定結果を得る基本的な手続きについて記しておきたい。第1表は左から順に，①試料番号，②NRM強度，③交流消磁前の残留磁化方位，④交流消磁後の残留磁化方位，⑤MDFを表している。次にそれらについて簡単に説明しておく。

①試料番号；試料は窯壁および床面から採取した。窯壁の試料は3ヶ所（K10番台，K20番台，K30番台）のトレンチを切って上から順に番号が，また床面の試料は2ヶ所（K40番台および50番台）から採取されている。

②NRM強度；NRM（Natural Remanent Magnetization，自然残留磁気）の強度は（0.2～82.8）×10－5 emu／gで，千倍近い強度の違いを有している。

③交流消磁前の残留磁化方位；残留磁化の方向は地球地場の方向と同様，南北，東西，鉛直上下方向を基準とする直交座標軸上で偏角（磁針の指し示す北すなわち磁北の真北からの偏りの角度，D）と伏角（地磁気方向の水平面よりの傾きの角度，I）で表され，最下段にFisher（1959）の統計法によって計算されたベクトル平均の値が95％誤差角（α_{95}，95％の確率で真の値が誤差の範囲内に収まることを示す数値で小さい程磁化方向の集中度は良い）および信頼度係数（K，大きい程磁化方向の集中度は良い）の値を付して載せられている。

④交流消磁後の残留磁化方位；焼土試料が最後の焼成時に獲得した磁化を初生磁化と呼ぶが，多くの場合焼成後長時間の埋没中獲得した二次磁化が重複して観測される。この二次磁化の除去には交流消磁が有効である。第248図に交流消磁一例を示す。直交消磁図（Zijderveld，1976）と呼ばれるこの図は，消磁の各段階で磁化ベクトルの終点を順次つないだものの平面図と立面図とを一つに纏めて描いたもので，黒丸が平面図（上が西，下が東，右が北，左が南）を表している。白丸の横に記した数字は交流磁場の強度で，単位mT（ミリテスラ）である。試料番号K11と命名されたこの試料は1,2,3,4,6,8,10,15,20 mTの各段階で処理されたが，4 mT以上のすべての点が原点に向かう一直線上にのっていることが分かる。これはこの試料4 mTまでの交流消磁で二次磁化が消え，試料が焼成を受けた時に獲得した一次磁化成分を分離するのに成功したことを示している。その直線成分は最小二乗法を適用して決定された。最下段にFisher（1959）の統計法によって計算されたベクトル平均の値が95％誤差角および信頼度係数の値を付して載せられている。ただし交流消磁法によって信頼できる磁化成分を分離できなかったもの（＊印を付したもの）はもちろん，平均の磁化方向から10度以上かけ離れた磁化方向を示すものは（＃印を



第248図　ＳＦ０１号窯焼土試料の直交座標交流消磁図

付したもの）信頼できないものとして最終的な結果からは除外されている。

⑤MDF；測定試料の残留磁化の信頼性の一つの目安ともなるMDF（Median Destructive Field，磁化の強さが最初の磁化強度の半分になる消磁磁場強度）は3～8mTである。なかにMDFの値の求められていないものがあるが，一つは試料が途中で破壊されてしまい，他の二つは途中で測定を打ち切ったものである。

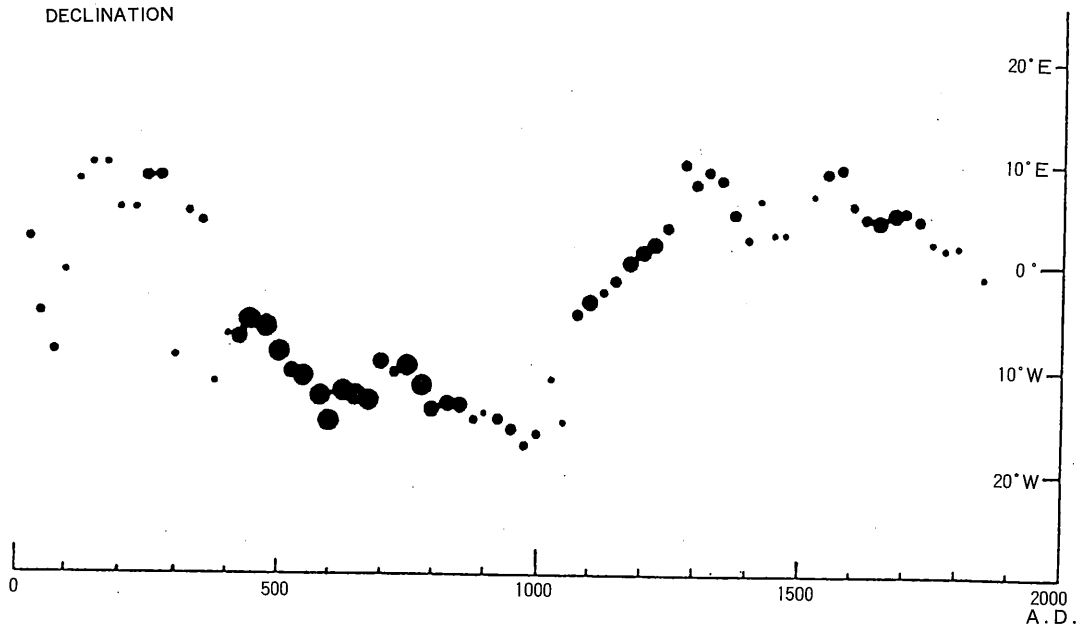
残留磁気の測定結果

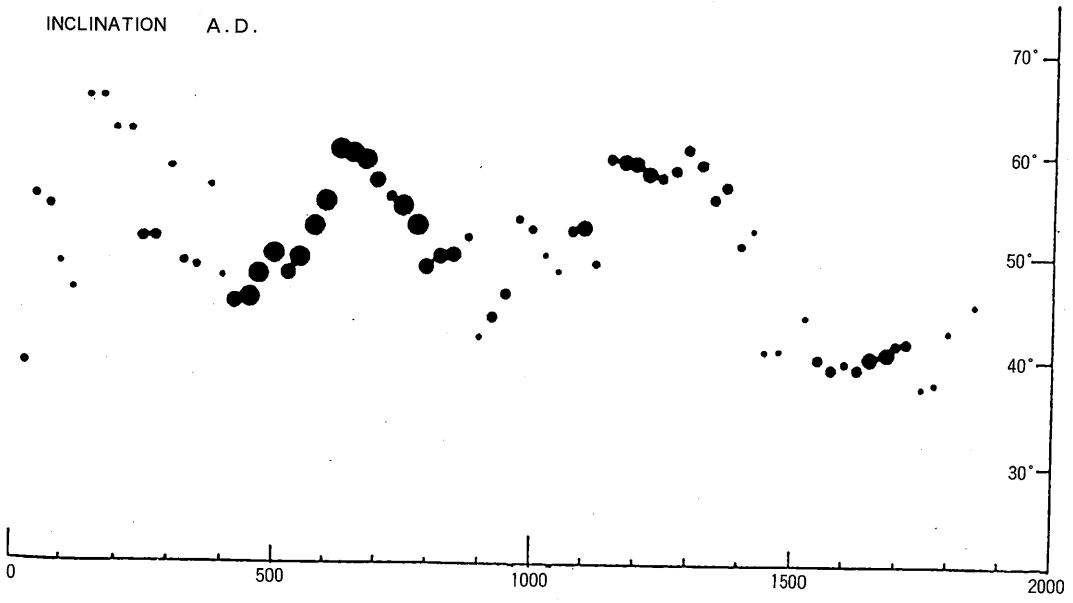
第128表に纏めた測定結果に示されるように，NRM強度は千倍近い違いを有する。床面から採取した試料（K40およびK50番台）は明らかに弱い磁化強度しか持っていないことが分かる。一方窯壁から採取した試料も下方が弱くなっていることを示しているので，床面は窯壁上部に比べて焼成温度が低かったことが予想される。

交流消磁によって焼土試料が焼成を受けたときに獲得した一次磁化を分離すべく努力したが，NRM強度の小さい5つの試料については分離することができなかった。これらの試料は＊印を付けて区別することにする。その殆どは床面から採取した試料である。残り12個の試料については形の上で一次成分が分離できたようにみえる。しかしFisher（1959）の統計によって平均の磁化方向を求めたところ，そのうち4個は平均の磁化方向から大きくかけ隔たることがることがわかる。採集時のミスか整形時のミスかあるいは他に原因が求められるのかもしれないが，いずれにしてもこれら4個の試料についてはその磁化方向が信頼のおけないものとして棄却した。最終的に残り8個の試料から求めた値を今回の測定値とした。今回の測定値の特徴は東の偏角値の大きいことである。

年代推定

日本の考古地磁気研究としてはWatanabe（1959）による関東・東海地方の窯・炉跡焼土の残留磁気測定，Yukutake（1961）による伊豆大島の溶岩，川井ら（1966）による近畿・東海地方の窯跡焼土の測定など先駆的な研究があるが，それ以降は主として京大・阪大を中心とした関西グループによって近畿・東海地方の多くの古窯跡について精力的な考古地磁気研究が行われた。特にHirooka（1971）は陶邑窯を中心に各地の窯跡から焼土試料を採取して，過去二千年にわたる西南日本の偏角および伏角の永年変化曲線を発表した。そ





第249図　考古地磁気測定第250図　K_2O-CaO 散布図　国分寺楠井遺跡窯跡出土土器の器種別による分析値の比較

Median Age	Number of Sites	Dec(° E)	Inc(°)	α_{95}	K	Median Age	Number of Sites	Dec(° E)	Inc(°)	α_{95}	K
25	3	2.0	38.9	9.9	156	950	5	−16.1	46.1	5.3	210
50	3	− 4.7	55.0	18.2	47	975	4	−17.6	53.4	5.4	200
75	3	− 8.7	54.5	13.4	86	1000	4	−16.2	52.3	7.9	138
100	2	− 1.1	48.9	18.0	195	1025	2	−11.3	50.1	23.2	118
125	2	8.0	46.5	41.3	39	1050	2	−15.5	48.2	9.8	655
150	2	9.6	65.2	17.4	209	1075	8	− 5.0	52.2	3.5	258
175	2	9.6	65.2	17.4	209	1100	10	− 3.8	52.5	2.4	412
200	2	5.3	62.0	9.2	742	1125	4	− 2.9	49.2	6.4	210
225	2	5.3	62.0	9.2	742	1150	6	− 1.8	59.1	4.1	268
250	6	8.3	51.6	5.6	143	1175	17	− 0.1	58.9	1.8	406
275	6	8.3	51.6	5.6	143	1200	18	0.8	58.6	1.6	474
300	1	− 9.1	58.3	.....	.....	1225	14	2.0	57.6	2.0	398
325	3	4.8	49.2	25.8	24	1250	9	3.5	57.3	2.2	525
350	3	3.9	48.7	25.8	24	1275	7	9.6	58.3	3.9	241
375	1	−11.7	56.4	.....	.....	1300	9	7.9	60.3	3.7	196
400	1	− 7.1	47.7	.....	.....	1325	8	8.9	58.5	4.5	150
425	10	− 7.2	45.2	3.2	233	1350	8	8.0	55.3	2.8	383
450	38	− 5.9	45.5	1.8	169	1375	6	4.7	56.4	3.7	332
475	53	− 6.1	47.8	1.5	167	1400	3	3.2	50.9	14.3	76
500	29	− 8.8	49.8	1.7	250	1425	1	8.9	52.6	.....	.....
525	12	−10.6	47.9	2.9	226	1450	1	2.9	40.6	.....	.....
550	27	−11.1	49.4	2.2	164	1475	1	2.9	40.6	.....	.....
575	33	−12.8	52.4	1.8	191	1500	...	.....	.....	.....	.....
600	27	−15.6	54.7	2.1	174	1525	2	6.6	43.9	1.3	36476
625	23	−12.4	60.0	2.2	193	1550	6	8.9	39.9	5.2	165
650	20	−13.0	59.4	2.3	201	1575	5	9.3	38.8	6.1	160
675	20	−13.5	58.9	2.3	219	1600	4	5.8	39.3	4.7	391
700	16	− 9.5	56.9	2.4	247	1625	5	4.5	38.8	3.4	494
725	9	−10.8	55.5	3.4	230	1650	10	4.1	40.0	2.5	380
750	38	−10.1	54.0	1.5	237	1675	12	4.9	40.4	2.3	351
775	48	−12.0	52.7	1.4	208	1700	9	5.1	41.5	2.1	611
800	14	−14.2	48.3	1.8	422	1725	6	4.2	41.8	2.0	1136
825	10	−13.4	49.8	2.4	342	1750	2	2.1	37.1	19.7	163
850	11	−13.5	49.9	2.7	281	1775	2	1.5	37.7	22.2	129
875	4	−15.3	51.7	5.4	294	1800	1	1.6	42.7	.....	.....
900	1	−14.5	42.0	.....	.....	1825	...	.....	.....	.....	.....
925	5	−15.2	43.8	3.5	469	1850	4	− 1.3	45.3	3.2	829

第129表　西南日本における過去二千年の考古地磁気資料

の後Shibuya（1980）はHirooka（1971）とそれ以降の西日本における考古地磁気測定結果を纏めた。さらに最近，前中・笹嶋（1989），前中（1990）は愛知県，奈良県，京都府，大阪府，香川県など西日本の各地から広く各種遺構の焼土試料を採取し，その残留磁気を測定した。前中（1990）はその結果をShibuya（1980）の結果につけ加えて新たな永年変化曲線（第249図）を描く基本的な考えを提示した。

第129表は50年間の平均偏角・伏角を25年ごとに順次動かす移動平均法で求めたものである。当然のことながら測定密度の大きいところ，たとえばサイト数が10サイトを越える期間，は95％誤差角も３度以下と小さくてその磁化方向の信頼度は大きく，一方測定密度の小さいところは信頼度も小さいといえよう。この結果を図に忠実に反映できるように，サイト数の大小を円の大小で表すように工夫して描き表したのが第２図である。この図では年代軸を横軸とし，縦軸に偏角および伏角の値をとってそれぞれの永年変化曲線を表している。これらの図で円の大きい部分をつなげていくと自ずと地磁気の永年変化曲線が描き連ねられることになる。描かれた曲線はたとえばサイン曲線を描くがごとく規制的な変化を示している。しかし逆に言えばこのことが年代未詳の考古遺物の偏角・伏角の測定値によって唯一解を見つけだすことを可能としている。今回の測定試料を第249図に示された地磁気永年変化曲線と対比する場合には京都における現在の偏角西偏値6.7°で更正する必要がある。更正後の平均測定値（D＝8.9°，I＝52.6°，$\alpha 95$＝3.8°）からすると，適応する年代として1350A.D.～1425A.D.が与えられる。この年代は出土品から考えられるこの窯の年代，14世紀後半～15世紀初頭，とよく調和する。

参考文献

Fisher, R. A. (1959): Dispersion on a sphere, Proc. Roy. Soc. Lon., A217, 295～305.

Hirooka,K. (1971): Archaeomagnetic study for the past 2000 years in southwest Japan, Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ.,Ser.Geol. & Mineral., 38, 167～207

川井直人，広岡公夫，笹嶋貞雄，前中一晃，久米昭一，安川克己，伊藤晴明（1966）：大阪府および近隣地区の窯跡における考古地磁気について，大阪府文化財調査報告書，第15輯，99～104.

前中一晃（1990）：考古地磁気測定と永年変化曲線，花園大学研究紀要，21,51～74.

前中一晃，笹嶋貞雄（1989）：考古地磁気年代測定，花園大学研究紀要，20,21～50.

Shibuya,H. (1980): Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2000 years by means of archaeomagnetism, M. E. thesis, Fac. Eng. Sci., Osaka Univ., 54p.

Watanabe,N. (1959): The direction of remanent magnetism of baked earth and archaeology in Japan, J. Fac. Sci. Univ., Tokyo, Sec. V, 2, 1～180.

Yukutake,T. (1961) :Archaeomagnetic study on volcanic rocks in Oshima Island, Japan, Bull. Earthq. Res. Inst., 39, 467～476.

Zijderveld, J. D. A. (1976): A. C. demagnetization of rocks; Analsis of results. In "Method in Paleomagnetism", p. 254～286, Eds. D. W. Collinson et al., Elsevier, Netherlands.

第2節　楠井遺跡より採取した焼土試料の残留磁気の測定について（Ⅱ）

花園大学自然科学研究室　前中　一晃

1990年6月26日に（財）香川県埋蔵文化財調査センターの依頼を受け，綾歌郡国分寺町福家字楠井に所在する楠井遺跡のＳＦ０１窯より焼土試料の採取を行い，その残留磁気の測定を行い，その成果については既に報告した。今回は同年10月17日に（財）香川県埋蔵文化財調査センターより送付されてきた5遺構の焼土試料の残留磁気測定を行った。送付されてきた試料は次の通りである。

1. 国分寺楠井遺跡
   (1) ＳＦ０２（略称ＫⅡ）　8個体
   (2) ＳＴ０２（略称ＫＴ）　13個体
2. 綾南町所在窯跡（十瓶山窯跡群）
   (1) すべっと4号窯跡（略称ＳＢ）
      1.1次窯（古い窯体）　10個体
      2.2次窯（新しい窯体）　8個体
   (2)かめ焼谷1号窯跡（略称ＫＭ）　10個体

送付された試料は実験室で「岩石切断機」を使って残留磁気測定に供されるように整形

された後，「残留磁気測定装置」および「交流消磁装置」を使ってその残留磁気の測定が行われた。測定は前回報告したのと同じ手続きによっている。

得られた測定結果（前回報告分も含めて）を纏めると次表のようになる。

遺構名	試料数	平均偏角	偏角更正値	平均伏角	誤差角
ＳＦ０１	8	15.6°	8.9°	52.6°	3.8°
ＫⅡ	信頼すべき結果得られず				
ＫＴ	8	14.1°	7.4°	52.1°	4.4°
ＳＢ－１	9	3.0°	－ 3.7°	50.5°	3.4°
ＳＢ－２	4	16.6°	9.9°	55.3°	7.4°
ＫＭ	10	－ 3.4°	－10.1°	54.5°	2.5°

考古地磁気の結果からみると，ＳＦ０１，ＫＴおよびＳＢ２の３基の窯は磁化方向が一致することから同時期（14世紀後半～15世紀初頭）のものとみなせるが，残りの２基の窯は西への偏角をもつことから11世紀後半～12世紀初頭に遡る可能性がある。

編者註

第１節と第２節は，平成２年度に前中氏に依頼した熱残留磁気測定の成果である。したがって遺構名称や内容については，調査途上（概報段階）の所見であることを明記しておきたい。

第3節　国分寺楠井遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所
白　石　　純

1. はじめに

この分析では，蛍光X線分析装置を用いて国分寺楠井遺跡の窯跡から出土した土器を分析し，以下のことについて検討した。

(1)　窯跡出土土器の器種（擂鉢，足釜，羽釜，鍋，甕）および型式[1]ごとに胎土に差異がみられるかどうか。また，型式的に古い様相を呈している一群と新しい一群との間に，胎土的に差が認められるかどうか検討した。

(2)　周辺遺跡の飯野東二瓦礫遺跡，高松市神高池北西古墳，綾歌郡綾南町北条池北西遺跡の各遺跡から出土した擂鉢・甕と生産地である国分寺楠井遺跡窯跡資料との比較。

(3)　国分寺遺跡と岡山県南部の亀山・備前焼[2]の窯跡資料との比較。

2. 分析方法および測定試料

分析は，波長分散型蛍光X線分析装置（理学電機製KG-4型）で測定し，測定方法・条件，試料調整などは，現在までに行っている方法である[3]。

分析試料は，表130～132の国分寺遺跡（擂鉢19，足釜29，羽釜1，鍋41，甕18，窯壁12）120点，飯野東二瓦礫（擂鉢）9点，神高池北西古墳（擂鉢）2点，北条池北西遺跡（擂鉢3，甕1）4点の合計135点である。また，岡山県の亀山焼は亀山遺跡2・4号窯で，備前焼は稲荷山窯跡，ガンガ谷窯跡，弁天池窯跡の分析試料[4]である。

3. 分析結果

(1)の検討結果のうち，器種ごとに胎土に差があるかどうかでは，第250図K_2O-CaO，第

251図$Fe_2O_3-TiO_2$の散布図から各器種により分析値に差がみられなかった。また，各器種の中で細分した型式ごとに差があるかどうかでは，第252図$Fe_2O_3-TiO_2$から足釜のＡⅠ類とＢⅠ，Ⅲ，Ⅳ類の間でFe_2O_3値差があり，識別できた。しかし，その他の器種の型式では，差がなかった。また，土器の時期差により胎土にも差があるかどうかでも，差異はみられなかった。

次に，これら窯跡出土土器群と窯跡の窯壁との差異では，第250・251図の散布図のように明確に差があり識別できた。

⑵の周辺遺跡出土の土器と国分寺楠井遺跡の窯跡資料の比較では，第253図K_2O-CaO，第254図$Fe_2O_3-TiO_2$の散布図から，飯野東二瓦礫遺跡（121～129），神高池北西古墳（130，131），北条池北西遺跡（132～134）の各擂鉢とも国分寺楠井遺跡の土器の分布範囲内に入った。しかし，北条池北西遺跡の甕（135）１点だけが分布範囲内に入らず離れてプロットし，国分寺楠井遺跡とは異なる分析結果となった。

⑶の国分寺楠井遺跡の窯跡資料と岡山県亀山焼，備前焼の窯跡資料との比較では第255図K_2O-CaO，第256図$Fe_2O_3-TiO_2$，第257図Sr-Rbの各散布図から検討した。この結果，第255図では半分ほどが，また第256・257図では一部分が重なるもののほぼ両窯跡群とも識別できる結果となった。

4. まとめ

今回の国分寺楠井遺跡の窯跡資料の分析で明確になったことおよび今後の検討課題を挙げてまとめとしたい。

1) 国分寺楠井遺跡出土土器のうち，足釜のＡⅠ類とＢⅠ・Ⅲ・Ⅳ類の間で胎土に差があり識別することができた。また，胎土の肉眼観察では，ＡⅠ類に緻密な粘土が使用されている印象を受けた。しかしながら，足釜ＡⅠ類の分析試料の点数が４点と少ないこともあり，試料点数を増やして検討する必要がある。

2) 国分寺楠井遺跡の窯跡土器群とこの窯跡の窯壁の比較では，明瞭な差があらわれた。しかし，他の窯跡での土器と窯壁の比較したデータがなく，これ以上検討ができないが国分寺楠井遺跡窯跡出土土器と窯壁の識別ができたことがどのような意味があるのか今後の課題である。

3) 須恵器の生産地である国分寺楠井遺跡の窯跡出土土器と消費地である飯野東二瓦礫

遺跡（121～129），神高池北西古墳（130,131），北条池北西遺跡（132～134）のすべての擂鉢が楠井遺跡の窯跡の領域に入った。しかし，北条池北西遺跡の甕（135）だけがこれらとは別に離れてプロットされた。このように，今回の分析では消費地の擂鉢が国分寺楠井遺跡窯跡出土土器とよく似た分析結果となったが，生産地となる窯跡が１基と比較する基礎データが十分でなく，今後讃岐地方の窯跡資料を蓄積し，改めて検討する必要がある。また，岡山県亀山・備前焼の窯跡資料との比較でも，差がみられ識別できたが，この点に関しても窯跡の基礎データの蓄積を行い再検討しなければならない。

この胎土分析を行うにあたり，香川県埋蔵文化財調査センターの職員の方々にお世話になりました。末筆ながら記して感謝の意を表します。

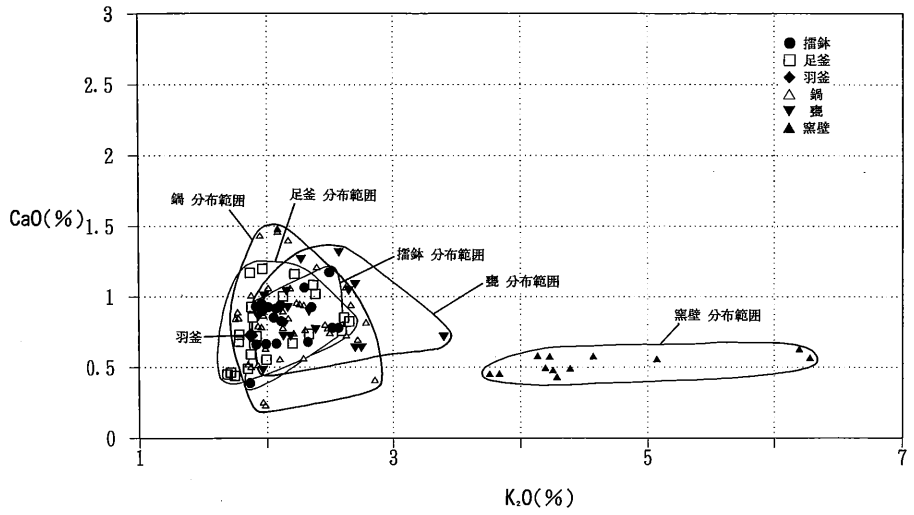
註

(1) 国分寺楠井遺跡の分析試料の器種・型式分類は試料提供者である佐藤竜馬氏による。

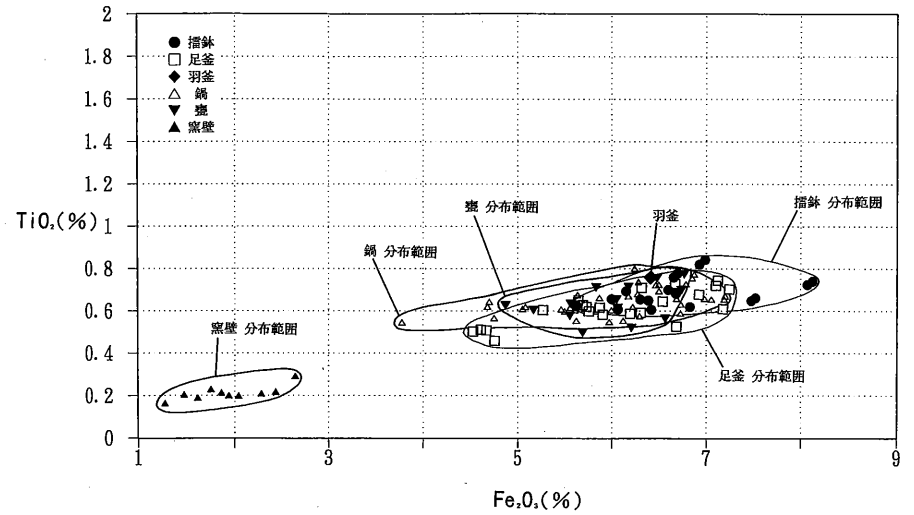
(2) 白石　純「中世須恵器の胎土分析（２）－備前・備中・美作地域の窯跡資料について－」岡山理科大学蒜山研究所研究報告　第18号　1992．今回の国分寺楠井遺跡の窯跡資料と比較した亀山・備前焼は，前記した報文で分析した試料を使用した。

(3) 白石　純「蛍光Ｘ線による考古学遺物（石器・土器）の化学分析（Ⅱ）」岡山理科大学蒜山研究所研究報告　第12号　1986.

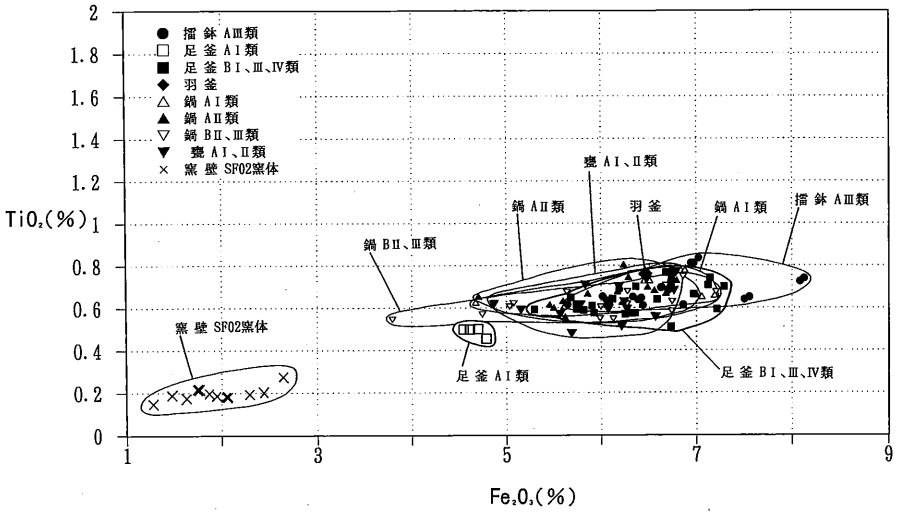
(4) 註２で報告した分析試料を今回の窯跡の比較試料としたが，国分寺楠井遺跡の窯跡とは時期がやや異なっている。



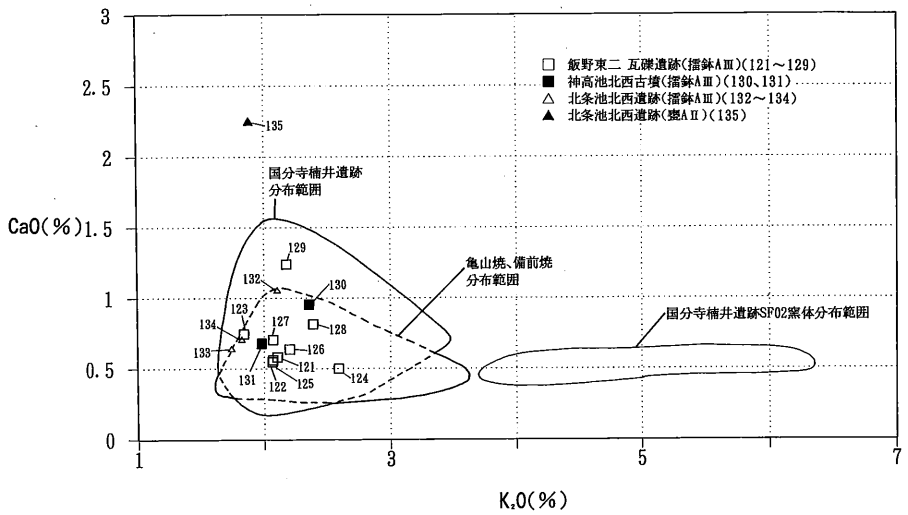
第250図　K_2O－CaO散布図　国分寺楠井遺跡窯跡出土土器の器種別による分析値の比較



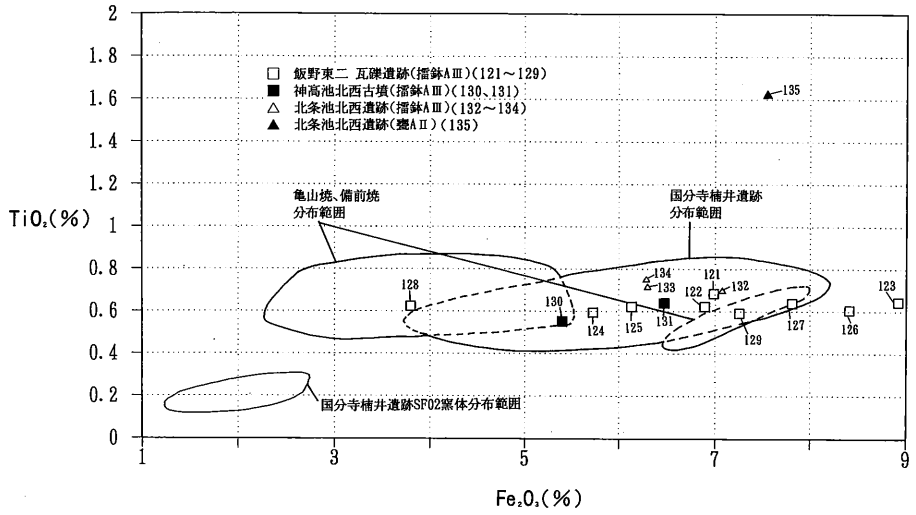
第251図　Fe_2O_3－TiO_2散布図　国分寺楠井遺跡窯跡出土土器の器種別による分析値の比較



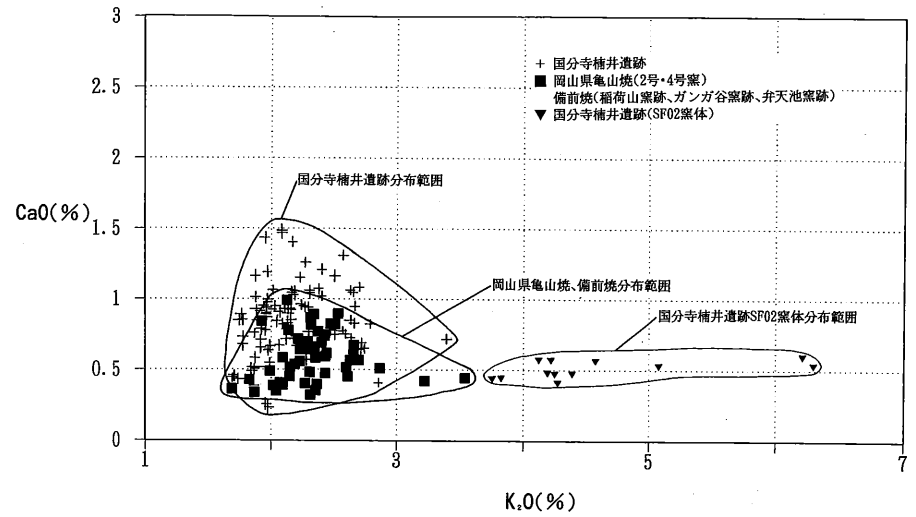
第252図　Fe_2O_3－TiO_2散布図　国分寺楠井遺跡窯跡出土土器の各器種の中での型式別の分析値の比較



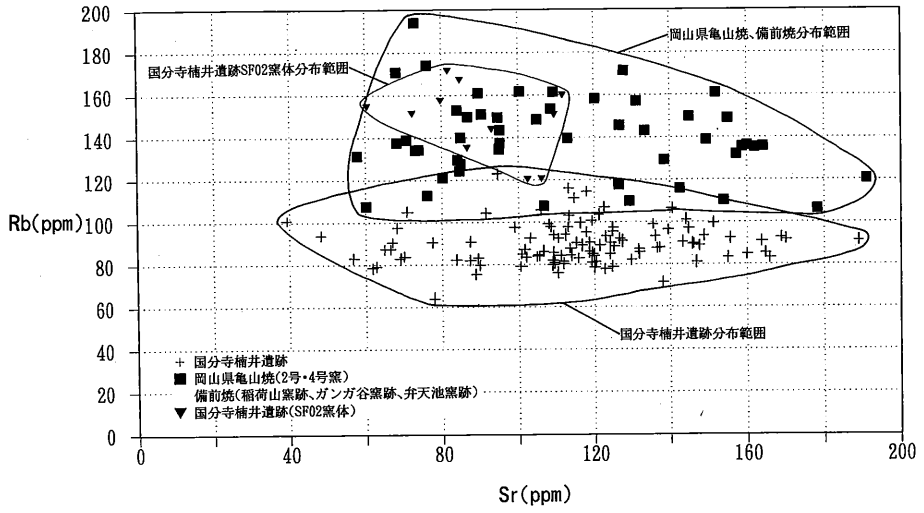
第253図　K_2O－CaO散布図　国分寺楠井遺跡窯跡出土土器と周辺遺跡出土土器との分析値の比較



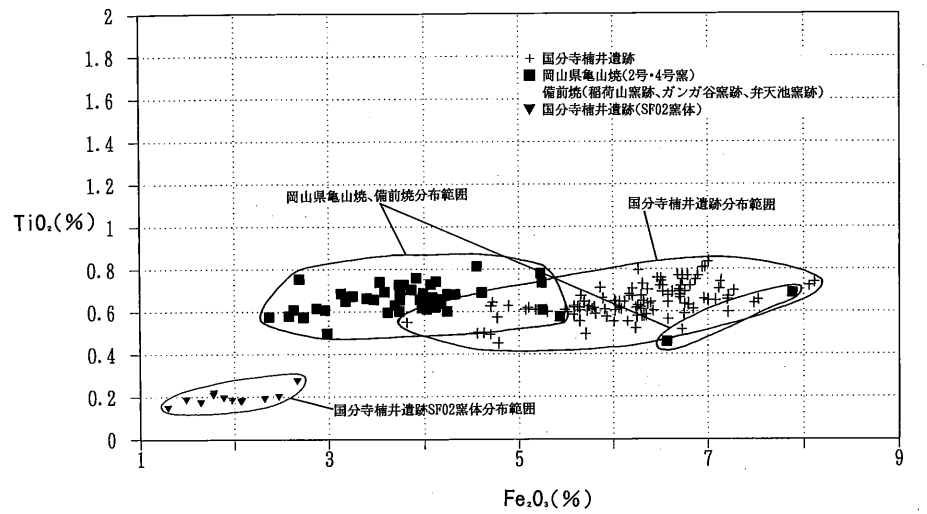
第254図　Fe_2O_3－TiO_2散布図　国分寺楠井遺跡窯跡出土土器と周辺遺跡出土土器との分析値の比較



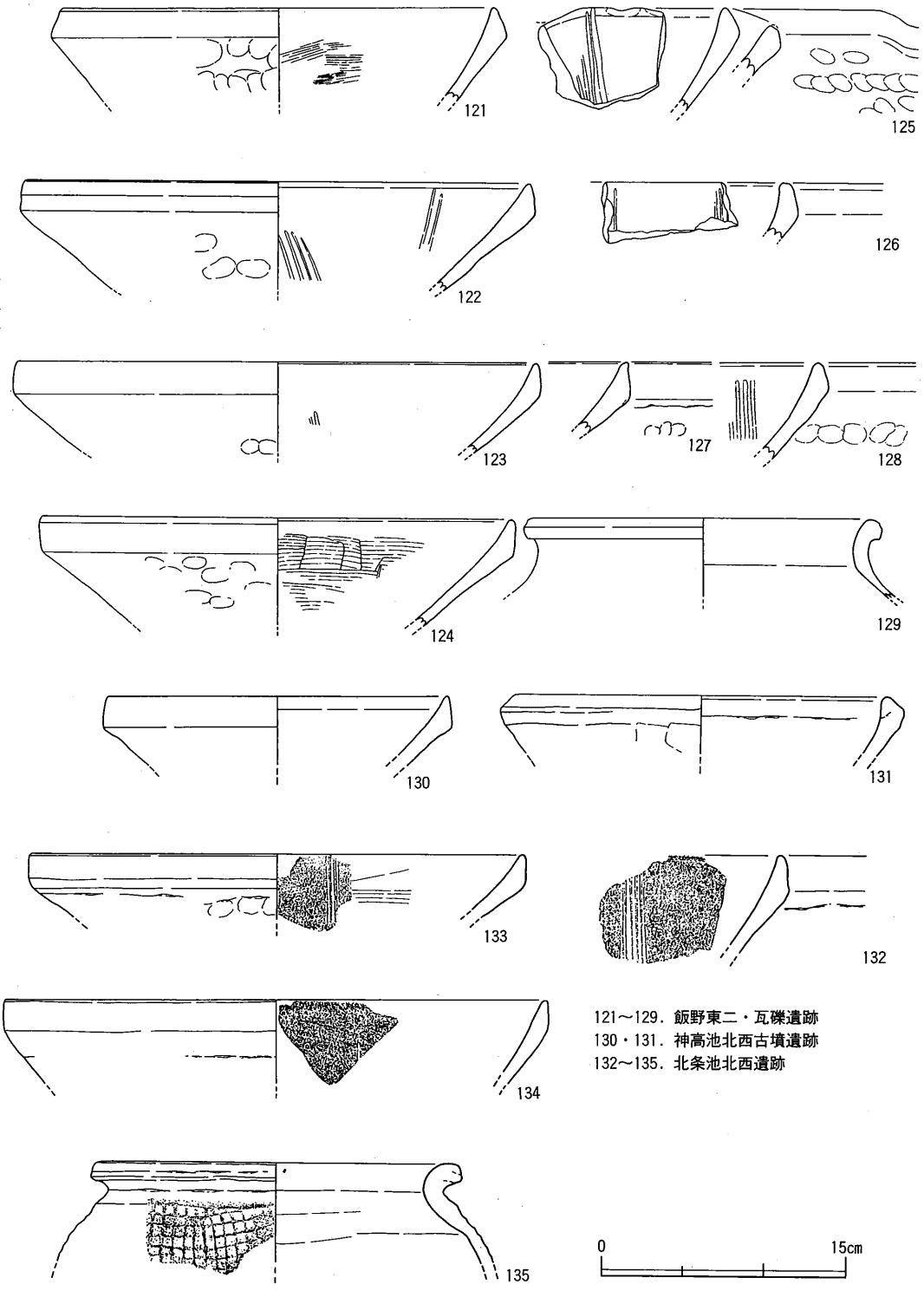
第255図　K_2O－CaO散布図　国分寺楠井遺跡窯跡出土土器と岡山県亀山・備前焼窯跡出土土器との比較



第256図　Fe_2O_3-TiO_2散布図　国分寺楠井遺跡窯跡出土土器と岡山県亀山・備前焼窯跡出土土器との比較



第257図　Sr-Rb散布図　国分寺楠井遺跡窯跡窯跡出土土器と岡山県亀山・備前焼窯跡出土土器との比較



第258図　胎土分析試料実測図

試料番号	遺跡名	器種	K_2O	Fe_2O_3	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	Sr	Rb	実測図番
1	国分寺楠井	擂鉢 AⅢ類	1.92	6.72	64.72	0.77	20.49	0.92	1.37	120	82	1030
2	〃	〃	1.94	6.95	64.05	0.81	20.68	0.95	1.58	121	89	467
3	〃	〃	2.06	8.11	63.98	0.74	20.15	0.91	1.23	112	80	1083
4	〃	〃	2.10	6.61	66.72	0.70	20.01	0.82	1.10	109	81	1025
5	〃	〃	2.00	6.36	68.91	0.64	18.45	0.67	1.10	101	87	1033
6	〃	〃	2.35	6.83	68.90	0.62	17.13	0.93	1.07	120	84	889
7	〃	〃	2.32	6.00	68.02	0.65	19.75	0.68	0.91	87	91	1001
8	〃	〃	2.56	5.63	68.69	0.62	18.86	0.77	1.02	112	95	1061
9	〃	〃	2.05	6.39	68.65	0.65	18.61	0.84	1.38	116	89	1012
10	〃	〃	2.07	6.31	69.64	0.65	19.18	0.67	1.23	103	93	1031
11	〃	〃	1.87	6.42	67.20	0.61	18.31	0.39	0.68	61	79	496
12	〃	〃	2.51	6.05	67.72	0.62	18.64	0.78	0.96	135	99	495
13	〃	〃	1.92	7.48	64.96	0.64	17.55	0.66	0.74	89	83	468
14	〃	〃	2.01	6.93	65.36	0.81	21.00	0.93	1.31	129	82	1014
15	〃	〃	2.30	7.53	65.67	0.66	18.52	1.06	1.37	131	87	1040
16	〃	〃	1.96	7.00	65.14	0.84	21.03	0.94	1.18	116	83	626
17	〃	〃	2.10	6.15	66.27	0.69	20.45	0.93	1.29	123	78	1043
18	〃	〃	2.49	6.68	65.57	0.68	18.60	1.17	1.27	149	94	470
19	〃	足釜 AⅠ類	1.74	4.78	69.10	0.45	19.31	0.44	0.44	62	80	930
20	〃	〃	1.85	4.56	69.06	0.50	19.40	0.49	0.52	66	88	620
21	〃	〃	1.71	4.62	69.62	0.50	19.18	0.46	0.66	69	84	970
22	〃	〃	1.70	4.69	69.02	0.50	19.35	0.45	0.77	56	84	793
23	〃	足釜 BⅠ類	1.90	7.26	62.91	0.70	18.10	0.85	1.03	100	85	798
24	〃	〃	1.99	6.01	69.59	0.65	17.89	0.55	0.65	70	84	779
25	〃	〃	2.22	5.90	66.19	0.61	17.19	1.15	0.81	155	84	964
26	〃	〃	1.87	6.95	64.93	0.66	17.97	1.17	0.87	138	72	966
27	〃	〃	1.78	6.72	63.00	0.75	20.69	0.73	0.67	87	82	968
28	〃	〃	2.62	5.92	67.82	0.58	17.20	0.85	0.70	122	107	932
29	〃	〃	2.65	5.79	66.23	0.59	17.76	0.83	0.63	118	115	933
30	〃	足釜BⅢ・Ⅳ類	1.88	6.67	65.18	0.77	20.76	0.93	1.20	110	76	696
31	〃	〃	1.97	7.11	64.99	0.71	17.01	1.19	1.18	147	81	963
32	〃	〃	2.17	6.10	65.83	0.65	18.20	1.03	0.96	151	100	896
33	〃	〃	2.14	5.68	68.04	0.65	17.12	0.90	0.84	118	91	601
34	〃	〃	2.21	5.77	70.32	0.61	18.48	0.67	1.06	105	84	876
35	〃	〃	2.37	6.24	65.70	0.58	18.08	1.08	0.86	144	101	729
36	〃	〃	2.30	6.71	67.37	0.52	15.71	1.05	0.89	155	93	673
37	〃	〃	2.33	5.72	64.99	0.62	18.11	0.92	0.82	144	97	697
38	〃	〃	2.58	5.71	67.06	0.61	17.77	0.75	0.67	125	96	699
39	〃	〃	2.12	6.35	66.95	0.70	18.52	0.98	1.12	125	89	875
40	〃	〃	2.33	6.29	66.29	0.58	17.46	0.72	0.50	112	82	873
41	〃	〃	2.15	5.29	68.16	0.60	18.11	0.94	0.80	120	79	878
42	〃	〃	2.39	6.34	66.84	0.59	16.80	1.02	0.69	143	91	702
43	〃	〃	1.78	6.71	63.41	0.72	19.60	0.68	0.85	90	80	676
44	〃	〃	1.92	7.13	63.14	0.74	19.40	0.71	1.17	88	76	706
45	〃	〃	2.30	7.20	65.86	0.60	17.34	1.06	0.91	132	86	672
46	〃	〃	2.03	6.57	65.13	0.64	17.43	0.95	0.86	109	82	703
47	〃	〃	1.88	6.79	64.77	0.63	18.28	0.58	0.90	77	91	877
48	〃	羽釜	1.87	6.45	64.88	0.76	18.70	0.76	1.12	99	98	795
49	〃	鍋 AⅠ類	1.94	7.20	64.20	0.66	16.93	1.44	1.71	165	86	807
50	〃	〃	1.97	5.62	67.84	0.61	17.50	0.98	1.00	136	88	803
51	〃	〃	1.77	6.51	62.88	0.72	19.76	0.85	0.70	105	85	974
52	〃	〃	1.97	4.70	69.35	0.63	18.32	0.26	0.41	48	94	802
53	〃	〃	1.87	6.89	62.74	0.77	20.52	1.01	1.13	119	81	801
54	〃	〃	1.76	6.48	62.22	0.73	19.39	0.89	1.04	109	86	935
55	〃	〃	2.08	7.07	62.59	0.65	17.29	1.47	1.46	169	93	806
56	〃	鍋 AⅡ類	2.00	5.61	66.69	0.62	17.60	0.95	1.04	137	88	805

第130表　国分寺楠井遺跡および周辺遺跡の胎土分析試料・分析値一覧表(1)（%）
ただしSr，Rbはppm

試料番号	遺跡名	器種	K_2O	Fe_2O_3	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	Sr	Rb	実測図番
57	国分寺楠井	鍋 AⅡ類	1.99	4.72	68.40	0.64	17.51	0.24	0.44	39	101	810
58	〃	〃	1.99	6.80	65.19	0.72	18.16	0.64	0.78	83	82	419
59	〃	〃	1.96	6.29	64.40	0.73	18.58	0.78	1.03	102	84	376
60	〃	〃	2.01	6.51	62.74	0.70	19.48	1.07	1.38	123	94	266
61	〃	〃	1.87	6.70	62.95	0.67	20.85	0.51	0.78	67	91	254
62	〃	〃	2.29	6.99	66.21	0.66	18.85	0.94	0.86	140	107	78
63	〃	〃	2.17	6.19	65.05	0.67	17.95	1.41	0.96	166	84	363
64	〃	〃	1.75	6.26	63.70	0.80	19.72	0.85	1.08	111	84	85
65	〃	〃	2.78	5.57	66.36	0.62	18.54	0.82	0.70	116	100	424
66	〃	〃	2.08	5.88	65.95	0.66	17.57	1.49	1.23	189	91	175
67	〃	〃	2.50	5.47	65.32	0.61	18.39	0.75	0.88	113	116	288
68	〃	〃	2.30	6.23	65.62	0.62	18.29	0.77	0.90	113	98	377
69	〃	〃	2.48	5.50	66.72	0.60	17.02	0.78	0.60	121	104	287
70	〃	〃	2.39	5.64	66.09	0.56	18.45	1.21	0.97	147	89	421
71	〃	〃	1.85	6.57	61.90	0.68	20.45	0.52	0.73	65	88	303
72	〃	鍋BⅡ・Ⅲ類	2.29	5.09	67.21	0.62	16.59	0.57	0.47	94	123	586
73	〃	〃	2.18	5.06	67.35	0.61	17.58	1.06	0.79	136	93	588
74	〃	〃	2.16	4.77	66.17	0.57	17.77	0.85	0.74	146	90	924
75	〃	〃	2.26	6.74	66.05	0.59	16.98	0.95	0.60	115	90	739
76	〃	〃	2.23	6.68	63.39	0.70	19.46	0.96	0.61	119	85	738
77	〃	〃	2.63	6.14	68.41	0.55	17.08	0.73	0.53	110	93	880
78	〃	〃	2.66	6.75	64.03	0.63	18.38	0.95	0.77	126	93	714
79	〃	〃	1.93	7.21	63.15	0.67	19.12	0.79	0.82	100	79	644
80	〃	〃	2.12	5.65	65.06	0.68	19.12	0.79	0.85	119	101	737
81	〃	〃	2.62	5.62	66.02	0.61	17.87	1.07	1.23	139	97	587
82	〃	〃	2.12	6.29	63.02	0.68	19.59	0.90	0.91	125	98	881
83	〃	〃	1.97	6.70	64.84	0.70	18.44	0.87	0.80	124	90	897
84	〃	〃	2.10	6.01	61.01	0.61	18.96	0.57	0.86	91	105	986
85	〃	〃	2.46	5.99	65.98	0.55	17.56	0.81	0.70	114	112	569
86	〃	〃	2.85	3.81	66.53	0.55	19.19	0.42	0.53	70	105	715
87	〃	〃	1.93	6.86	63.80	0.75	19.94	0.52	0.31	78	64	849
88	〃	〃	2.20	6.28	64.94	0.62	17.86	0.74	0.81	106	87	645
89	〃	甕AⅠ・Ⅱ類	2.64	5.16	66.98	0.61	19.39	1.05	1.01	146	90	5
90	〃	〃	2.69	4.88	67.15	0.63	18.80	1.09	0.65	160	85	13
91	〃	〃	2.13	6.16	64.26	0.71	19.49	0.83	0.72	113	88	33
92	〃	〃	1.96	6.49	63.25	0.75	19.97	0.89	0.78	109	80	29
93	〃	〃	2.73	5.70	70.31	0.49	17.59	0.65	0.50	108	99	9
94	〃	〃	2.38	5.78	69.70	0.62	19.41	0.77	0.63	118	96	14
95	〃	〃	1.97	6.27	64.79	0.61	19.45	0.49	0.64	68	98	612
96	〃	〃	2.12	6.25	67.90	0.63	18.24	0.72	0.66	105	84	682
97	〃	〃	3.39	6.07	65.24	0.61	19.42	0.72	0.95	113	103	893
98	〃	〃	1.93	6.05	65.06	0.65	19.71	0.87	0.73	125	79	716
99	〃	〃	2.18	5.57	66.30	0.58	18.51	0.72	0.61	108	98	598
100	〃	〃	2.16	5.84	67.40	0.71	19.43	1.05	1.02	124	85	683
101	〃	〃	2.15	6.78	67.16	0.77	21.34	0.93	1.22	114	85	719
102	〃	〃	2.33	6.57	68.23	0.57	16.66	0.90	0.59	119	86	596
103	〃	〃	1.97	6.49	63.84	0.76	19.62	1.00	1.17	127	92	681
104	〃	〃	2.56	5.57	67.34	0.63	18.25	1.31	1.30	170	92	622
105	〃	〃	2.70	6.22	68.85	0.52	17.09	0.65	0.65	109	94	751
106	〃	〃	2.26	6.75	64.71	0.70	19.64	1.26	1.30	164	91	717
107	〃	〃	2.71	6.31	66.06	0.58	17.27	0.69	0.55	106	106	285
108	〃	〃	1.96	8.06	63.18	0.72	18.53	0.90	1.04	118	86	1084
109	〃	窯壁SF02窯体	4.20	1.49	78.05	0.19	12.33	0.49	0.51	81	172	
110	〃	〃	4.22	2.30	76.73	0.20	14.09	0.57	0.28	106	121	
111	〃	〃	4.28	1.78	79.33	0.22	12.62	0.42	0.43	60	155	
112	〃	〃	3.75	1.88	79.33	0.20	12.79	0.44	0.29	72	152	

第131表　国分寺楠井遺跡および周辺遺跡の胎土分析試料・分析値一覧表(2)（%）
ただしSr，Rbはppm

試料番号	遺跡名	器種	K_2O	Fe_2O_3	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	Sr	Rb	実測図番
113	国分寺楠井	窯壁SF02窯体	5.07	2.07	75.50	0.19	14.15	0.55	0.48	84	135	
114	〃	〃	4.25	1.29	81.43	0.15	10.73	0.48	0.13	79	158	
115	〃	〃	6.28	2.06	75.41	0.19	13.80	0.56	0.47	111	160	
116	〃	〃	4.13	1.64	79.08	0.18	12.15	0.58	0.64	93	144	
117	〃	〃	4.57	2.46	76.08	0.21	15.61	0.58	0.89	102	121	
118	〃	〃	3.82	1.78	78.63	0.21	12.07	0.45	1.21	84	167	
119	〃	〃	4.39	2.66	70.19	0.28	17.79	0.49	0.95	109	153	
120	〃	〃	6.19	1.97	75.02	0.19	13.50	0.62	0.55	104	148	
121	飯野東二瓦礫	擂鉢AⅢ類	2.12	6.98	65.57	0.69	20.23	0.59	0.74	89	92	
122	〃	〃	2.08	6.89	68.79	0.62	19.26	0.56	0.83	79	91	
123	〃	〃	1.85	8.90	65.63	0.64	19.48	0.75	0.68	87	70	
124	〃	〃	2.60	5.72	72.36	0.60	18.61	0.51	0.67	87	89	
125	〃	〃	2.09	6.12	67.71	0.63	19.89	0.57	0.76	90	94	
126	〃	〃	2.21	8.41	66.51	0.60	17.32	0.64	0.64	91	80	
127	〃	〃	2.08	7.80	65.16	0.64	20.79	0.71	1.01	81	82	
128	〃	〃	2.41	3.79	70.85	0.63	17.96	0.82	0.86	137	92	
129	〃	〃	2.20	7.24	65.79	0.59	18.00	1.24	1.13	165	73	
130	神高池北西古墳	擂鉢AⅢ類	2.37	5.41	66.02	0.55	18.21	0.95	0.74	115	91	
131	〃	〃	2.00	6.47	66.48	0.64	20.26	0.68	0.99	89	78	
132	北条池北西	擂鉢AⅢ類	2.12	7.07	66.31	0.70	20.04	1.05	1.14	131	84	
133	〃	〃	1.75	6.28	70.37	0.72	18.80	0.65	0.93	92	84	
134	〃	〃	1.83	6.27	71.14	0.75	19.09	0.72	1.23	105	85	
135	〃	甕 Ⅱ類	1.90	7.53	60.49	1.62	22.80	2.25	1.94	168	58	

第132表　国分寺楠井遺跡および周辺遺跡の胎土分析試料・分析値一覧表(3)（%）
ただしSr，Rbはppm

第5章　総括

第1節　楠井産土器の生産技術

1. 製作技法

(1) 特徴的な製作技法

［叩き成形］

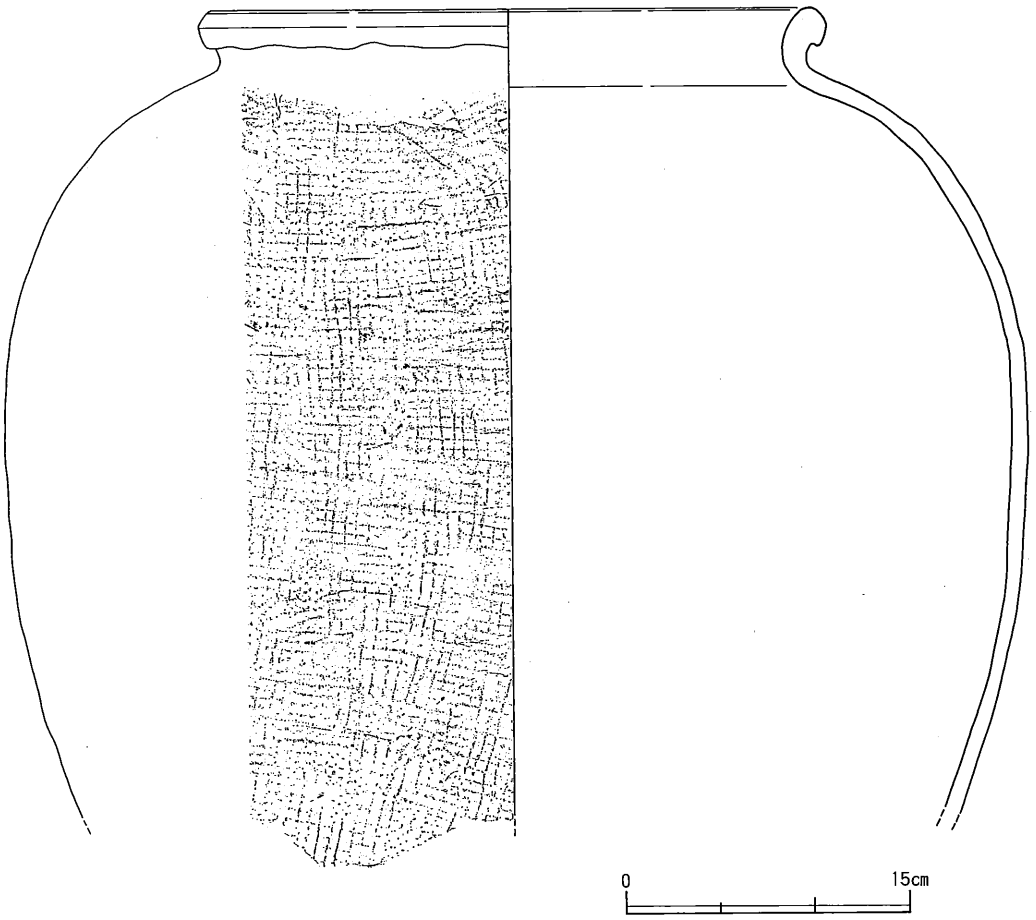
足釜・鍋・甕の主要3器種の他，丸底の捏鉢や焙烙・壺にも叩き成形技法が施される。甕や壺については体部成形に対して行われ，他の器種については底部成形に際して行われている。時期的に先行する土器生産（十瓶山窯跡群）との対比でみるならば，楠井では鉢類の体部成形に叩き技法が全くみられない点が特徴的である。また，甕口頸部の成形に叩き技法が行われないことも，十瓶山窯の製作技術とは異なる。さらに鍋釜類の叩き成形も，12世紀代の西村遺跡で先駆的に存在するが，量産品として多用されるようになるのは，楠井産土器の特徴である。

以下，甕壺などの貯蔵器種体部の叩きと，鍋釜などの煮沸器種底部の叩きについて，それぞれの手順や使用工具を検討することで，製作技法からみた須恵器生産技術との連続性・不連続性の有無について考える。

体部叩き成形

楠井で出土した土師質甕や壺は完形品に乏しく，体部全体にわたる叩き技法の検討が十分には行えない。このため，楠井産とみられる高松市薬王寺遺跡ＳＥ０３上層出土の土師質甕[1]を中心にして，細部を楠井の資料で補完して検討することにしたい。

通常，須恵器甕の体部叩きは，製作者の手の動きを反映して「叩き締めの円弧」[2]を描くような傾きを呈する。楠井に先行する十瓶山窯跡群産須恵器甕には，この軌跡が明瞭に読み取れる。楠井産の土師質甕にも，非常に緩やかな傾きの変化ではあるが，このような「叩き締めの円弧」が看取できる。すなわち，体部中位で格子目がほぼ水平方向になり，上半では右上がり，下半では右下がりとなっている。十瓶山窯産須恵器ほど明瞭な円弧を

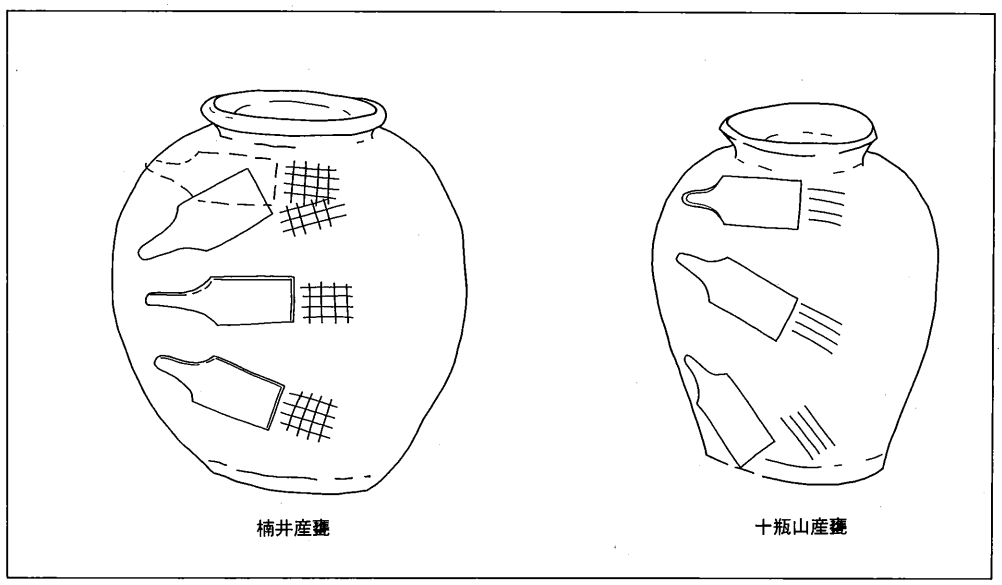


第259図　薬王寺遺跡ＳＥ03出土の土師質甕

形成しないのは，器体に対する製作者の位置が楠井の場合ほぼ横であるのに対し，十瓶山窯の場合はかなり上方であるためであろう（第260図参照）。

一方，内面には叩き成形時の当て具痕がみられる（549・603・933・958・1411・1421）。ハケ目や板ナデなどの内面調整によって多くは消されているが，叩き成形に例外なく当て具が使用されたのは間違いなかろう。

以上のようにみると，甕や壺の体部に行われた叩き成形は，須恵器製作技術を正当に継承していると評価できる。ただし，既に述べたように口頸部の叩きが伴わないことや，成形時における製作者の位置が十瓶山窯産須恵器とは異なっており，十瓶山窯からの直接的な技術伝播は想定し難い。



第260図　「叩き締めの円弧」と叩き板の傾き

底部叩き成形

鍋釜類底部の叩き目は，讃岐以外に播磨・備中などの中東部瀬戸内地域と，長門・周防・豊前・筑前などの西部瀬戸内・北部九州地域，さらに肥後（中部九州）に認められる。このうち，西部瀬戸内・北部九州の瓦質鍋釜類については，菅原正明氏によって詳細な観察をもとに製作工程が推定されている(3)。それによると，「タタキ調整は成形後に底部外面のみに行われており，かつ強く殴打され，深さ2㎜位も深く窪んでいるものがあるにもかかわらず，内面は平滑であることから，タタキ調整は，鍋を裏返しにして，上方に突出する半球面をなす型にのせ，底部外面をタタキ調整したものとみることができる」という。そして，「このようなタタキ調整は須恵器の製作にはみられないことからみて，底部外面に格子タタキのある瓦器鍋・釜は，新たな瓦器の調整手法とみることができよう」という評価に及ぶのである。

西部瀬戸内地域の鍋釜類については，実見していないため，菅原氏の想定したような，型と叩き技法の併用の当否を検討することはできない。ただし，楠井産の土師質足釜・鍋も見かけ上，器壁に残る成形・調整痕の状況が同じであるため，楠井産土器がこのような技法によるものかどうか，検討を要する。

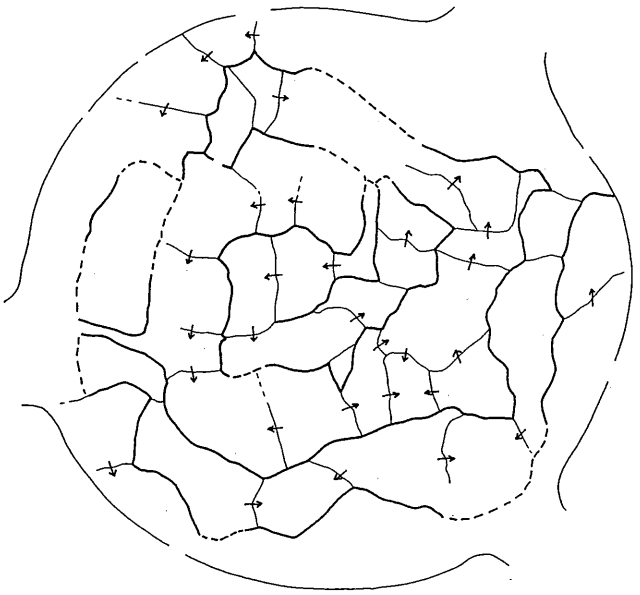
底部叩きに対応する内面の器面は，かなり平滑である。しかしこれは，内面調整に板ナ

デかハケ目がほぼ例外なく行われた結果であり，内型の存在の証左にはならない。また，内面調整に先行する，当て具痕の存在を観察できる事例が少数存在する（602・733・734）ことは注意できよう。同様な当て具痕は，西村遺跡西村北地区Ｓ５－ＳＫ０１出土遺物[4]でも指摘することができる（第275図25）。このことと，後述する叩き目の規則的な施し方を考慮すると，楠井産の鍋釜類に内型の使用は想定できない。

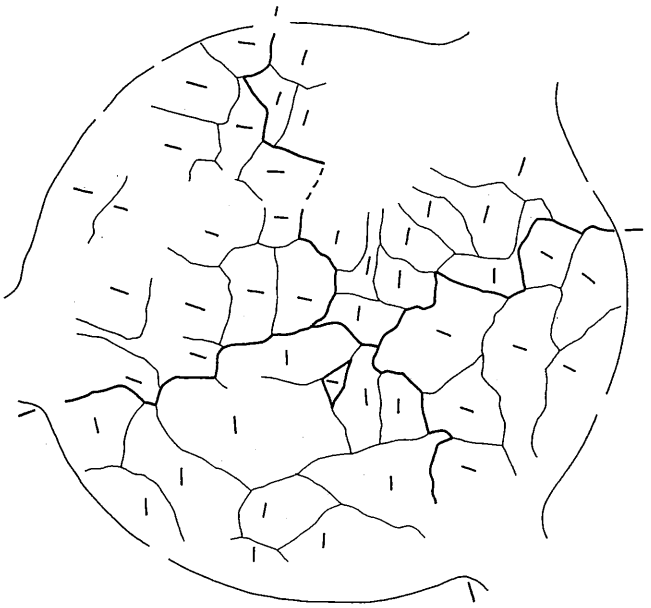
次に底部叩きの原体・順序・方向について，検討する。まず原体であるが，叩き目は長期間の使用で木目が浮き出たものではなく，原体に格子状の彫り込みを行っていることがわかる。格子は木目に平行した方向のものが太く深い。

叩いた順序を検討するために，叩き目１回分の範囲と重複関係を観察した（第261図）。観察したのは土器溜り２出土資料（867）である。叩き目の先後関係は判定が難しい。このため訂正される余地が全くないわけではないが，同一円周上に位置する叩き目は左側が後出し，内側よりも外側の方が後出する。一部に角を潰すような叩き直しがみられるが，叩きの手順は概ね底部中央から始まり，左（逆時計）回りに外周へと向かうことが想定できる（第262図）。

第261図　足釜底部叩き目の範囲と重複関係



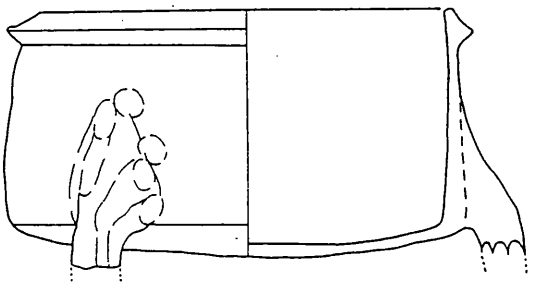
第262図　想定される叩き板の移動方向



第263図　格子叩き目の方向

それでは叩き作業の際に，製作者はどのようにして土器をもったのか。格子のラインで木目に平行する方向を調べると，第263図で示したように４方向から叩き作業を行っていることが判明した。つまり製作者は一度に全体を叩くのではなく，作業しながら土器の向きを変えていたことになる。

底部に叩きを行う理由は，底部を丸く仕上げて，同時に器壁を薄くする点にあるといえよう。したがって叩き成形を行う以前の工程では，底部が丸い必然性はない。伊予における足釜[5]は平坦な底部と直線的に伸びる体部をもつ（第264図）が，このような形態の方が粘土紐巻き上げや体部調整を行いやすい。楠井産の足釜も当初はこのような形態で作られ，その後叩き成形によって丸底化がなされた可能性があろう。ところでこのような製作工程は，須恵器における丸底甕の製作技法と軌を一にするものであり，鍋釜類の底部叩きも須恵器の製作技術を継承したものといえよう。



第264図　伊予における足釜

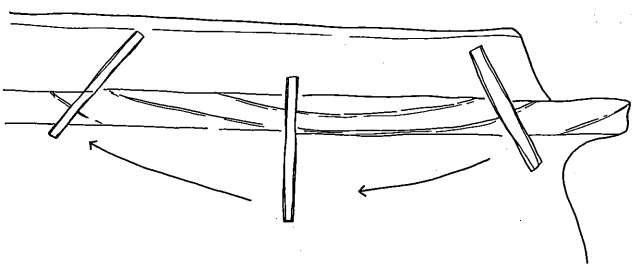
［ハケ目・板ナデ調整］

両者ともに木目平行の板状工具の小口で器面をナデつける調整手法であり，木目が浮き出るか否かで両者は峻別される。楠井の主要４器種の器面調整に用いられ，多くの場合には両者は同一器種・型式に混在するが，中に意識的なハケ目工具の使用が認められる。

足釜ＡⅠ・ＢⅠ類と鍋ＡⅠ類は土器溜り１の第Ⅲ層に特徴的な型式であり，後述するように楠井産土器の中で古式に編年される一群である。これらの器面調整にハケ目が多用されることは既に述べたが，特に鍔部や口縁部の端面に横ハケが施される点が注目される。端部のハケ目調整は，板状工具で明瞭な平坦面を作出する効果があったとみられる。現に端部にハケ目調整を行わない足釜ＢⅡ～Ⅳ類や鍋ＡⅡ類では，端部が丸くなったり凹面を形成するようになる。また既に述べたように，この端部ハケ目調整は回転力を利用せずに断続的に行われるが，これは原体の動きを反映した緩い円弧状のハケ目の軌跡からも読み取れる（第265図）。

また擂鉢にもハケ目調整がみられる。擂鉢ＡⅠ－１類では，口縁部端面と内面全体に粗い横ハケ調整が施され，ＡⅡ－２類では体部外面に縦ハケ，内面全体にわたって横ハケ調

整がみられる。擂鉢がロクロ板上で製作されたことは，底部外面に下駄印がみられること，口縁部に回転ナデ調整がみられることから明らかであるが，縦ハケ調整は勿論，横ハケ調整においても断続的に施されることから，回転を利用していないことがわかる。つまり，本来回転ナデによることの多い器面調整にハケ目が採用されているのである。これは，ロクロ（回転台）の性能とも関わる問題であり，その点で1290の下駄印のように，底部円盤がロクロ中央に位置しない事例の存在が注意される。



第265図　端部ハケ目調整と原体の動き

［木目状圧痕］

鍋や甕の口縁部，また足釜脚部などに木目状の圧痕がみられることが指摘できた。この圧痕に共通しているのは，器壁の凹凸や湾曲を超えて木目状の条線が連続しており，工具で器壁をナデたような擦痕が認められない点で，ハケ目とは異なる特徴をもっている。また成形段階の指オサエに先行して付けられたり（1129），回転ナデ調整によってナデ消されている（534）ことから，器面調整を意図したものではないといえる。叩き目の可能性もあるが，器壁の凹凸を超えて連続して叩き目が転写されることは考え難い上，楠井産土器には明確な平行叩き目（それもかなり細かい）の事例がみられないことから，否定的である。

こうした圧痕を付け得る作業として考えられるのは，粘土紐の成形を板の上で行うことである。この作業によって木目が粘土紐に転写され，接合後のオサエで粘土紐断面が変形すると，凹凸を超えて圧痕が連続するようになる。また足釜脚部であれば，脚部接合時のナデによって消される以外は圧痕がそのまま残る。玉縁状口縁をもつ甕A類の口縁部も丸い粘土紐を生かした接合方法を行うために，圧痕が残るのであろう。

(2)　主要4器種の製作工程

上記した技法や足釜鍔部にみられる押圧などの特徴的な技法の重複関係は，第3章第3

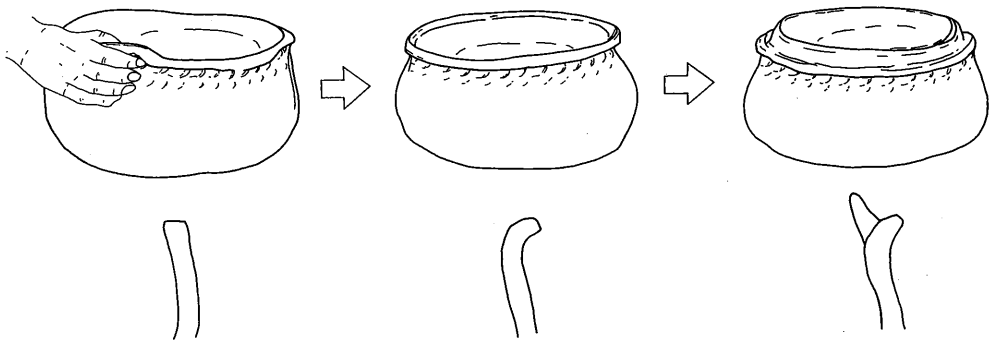
節2の報文中や観察表で触れたので，これらを踏まえて楠井産土器の製作工程の復元を試みてみたい。

［擂鉢］

①ロクロ上に粘土円板を据え，粘土紐を巻き上げて，指オサエで概形を作る。ＡⅠ－2類は体部外面に縦ハケ調整を行うが，他の多くの外面は不調整である。②内面全体にわたって横方向の板ナデ調整（ＡⅠ類の大半とＡⅢ類の一部は横ハケ調整）を行う。ＡⅠ－1類とＡⅢ類の一部では，口縁部外面も板ナデないし横ハケ調整して，端面を平坦にする。③口縁部外面を中心に回転ナデ調整を行う。ＡⅠ－1類では口縁部調整は②の段階で終わらせている。④底部から口縁部へ向かって卸し目を施す。卸し目原体は，櫛状の結束工具による可能性をもつものもあるが，多くは板状工具に刻みを入れたものであるとみられる。⑤底部外縁に削り状の強いナデ調整を行い，製作時に自重ではみ出した部分を掻き取り，ロクロから取り外す。

［足釜］

①粘土紐を巻き上げて鉢状の概形を作り出す。底部は平底の可能性がある。また，鍔部押圧に伴う爪形状圧痕がほぼ水平方向に並ぶことから，工程①～③では何らかの作業台のようなものの上で成形されたと推測される。②体部となる部分の外面に縦ハケ調整を行う。足釜ＢⅢ・Ⅳ類では指オサエ後，不調整の場合が多い。内面には，ほぼ例外なく横ハケないし板ナデ調整を行う。③口縁部と鍔部の成形を行う。既に述べたように，その成形手法は3通り想定できる。すなわち，鍔部を接合する方法（口縁1技法：鍔部接合法）と，体



第266図　鍔部屈折法（口縁2技法）

部上端を外反させて鍔部とし，その上に口縁部を接合する方法（口縁２技法：鍔部屈折法，第266図），さらに口縁部と鍔部を１つの粘土紐から作出する方法（口縁３技法：一体接合法）である。これらの技法で口縁部と鍔部を成形し，その後外面には横ナデ調整，内面に板ナデもしくは横ナデ調整を行う。④ある程度乾燥させた後に，格子状の刻みの入った叩き板と年輪の浮き出た木製当て具を使って底部叩きを行う。作業は底部中央から外周へ向かってラセン状に進められる。足釜ＢⅠ類では底部のみならず，体部にまで叩き作業を行い，全体を半球形に成形する。叩き作業は体部の調整よりも後出するが，底部形態を大きく変える工程とみられるため，調整手法ではなく成形手法と評価するのが妥当である。⑤底部内面にハケ目ないし板ナデ調整を行い，当て具痕の凹凸を平滑にする。⑥断面円形に成形した棒状粘土を体部に接合して，脚部にする。脚基部と体部との接合を補強するために，細い棒を芯にすることがある。恐らく芯棒は，接合後しばらくしてから抜き取られるのであろう。

［鍋］

①粘土紐を巻き上げて概形を作る。足釜同様，底部は平底であった可能性がある。②体部外面に縦ハケ，口縁部外面に横ナデ，内面全体に横ハケもしくは板ナデ調整を行う。鍋ＡⅡ・ＢⅠ～Ⅲ類では，体部外面の縦ハケがみられず不調整のものも多い。また鍋Ｂ類では内弯する口縁部内面に板ナデ（ハケ目）調整を行っているが，これには器面の湾曲に合わせた板状工具が使用されたことが考えられる。③ある程度乾燥すると，底部を叩き成形する。叩きの手順は，良好な完形品に欠けるために明らかではない。④底部内面にハケ目ないし板ナデ調整を行い，当て具痕の凹凸を平滑に均す。

［甕］

①ロクロ上に円板を据え，粘土紐を積み上げて概形を作る。口頸部はこの段階で成形されるか，体部叩き後に接合されるか明らかではない。②体部を叩き成形する。叩き目は緩やかながら「叩き締めの円弧」をなし，製作者の姿勢が一定であることを示す。恐らくロクロ板上で作業が行われたのであろう。③体部内面を横ハケ（板ナデ）調整する。体部外面の叩き目は，Ａ類ではそのまま残されることが多いが，Ｃ類では板状工具でナデ消されることもしばしばである。④口頸部に回転ナデ調整を施す。ＡⅡ類ではこの時頸部を強くナデることで，相対的な口縁部の肥厚を作り出す。⑤底部外縁を削り状にナデ（稀に縦ハケ）調整し，ロクロから外す。小型品の中には，その後底部外面に叩きが施されるものもある。

2. 焼成技術

(1) 窯体構造

小規模な窯による生産が国分寺楠井遺跡の特徴であることは，改めて述べるまでもないが，その技術的な特徴を明確にするためには，まず検出した窯跡の構造的な復元を行い，それを各地の事例と比較することが必要である。以下でこの作業を行う。

［構造の復元］

1号窯跡

周辺の地形には，人為的な削平や自然の浸食などの著しい改変の痕跡がなく，検出した面が後世に特に顕著な削平を被っているとは考えられない。したがって，残存していた壁面高が本来の高さに近いものであったと推測でき，焼成部壁面高は最大でも0.7～0.8m程度であったと想定できる。焼成部上半に円筒形に突出した壁体が存在したことも考えられるが，窯体内に遺存していた崩落窯壁はごく少量であり，存在しなかった可能性が高い。このことは同様にして，恒常的な天井部の存在にも否定的な所見をもたらす。木野や伏見（京都市）の現存窯での報告や御厩（高松市）での聞き取り[6]によれば，同様な円筒形の窯は天井部が開放されており，そこから製品の出し入れを行い，焼成時に仮設的な覆いをするという。このことも踏まえると，やはり1号窯跡には天井部が存在せず，また窯壁の被熱が赤色酸化層を形成することから，焼成時の覆いも密閉状態には至らない簡易なものであったと想定するのが最も妥当であろう。

焼成部内に火格子（ロストル）などの施設は存在したのだろうか。窯壁には火格子を付設したような痕跡は認められない。また，後述するような火格子の存在によって生じる床面被熱も観察できず，むしろ床面に被熱層を形成せずに側壁上方ほど被熱が顕著である状況は，焔の流れを規制するような遮蔽物が存在しなかったことを示す。これらのことから，火格子は存在せずに製品を床面に直接置いたと判断してよい。その場合，床面の溝は排水溝としての機能の他に，焚口床面の段差などを考えると，牀（ロストル）としての役割も果した可能性がある。

次に焚口（燃焼部）の構造である。焚口床面は，特に第1次床面では明瞭な段差をもっているが，これは自然状態では上昇傾向にある焔の流れを効率的に捉えて，なるべく下方から製品に焔が当たることを意図した工夫とみられる。これと関連して焚口天井部の位置（高さ）も焔の流れに影響を与えるが，側壁の石組みの状況などからさほど高い位置に

あったとは考えられない。

窯体の構築方法についても触れておきたい。窯体は大半が斜面を掘り込んで構築しているが，焼成部前面上半や焚口天井部などは粘土を塗り込んで成形されていたと考えられる。同様な構築方法は徳島県神宮寺遺跡でも指摘でき，岡山県沖の店遺跡のように全てを地山掘り抜きで形成するのとは若干異なる。それは基盤層の強度とも関係するだろうが，トンネル式に掘り抜くよりも窯体前面を粘土で構築する方が容易であったのだろう。1号窯跡に先行する3号窯跡が同様な形態をもちながら，既に地上化を達成していたとみられることを考慮するならば，このことはより明瞭になる。

2号窯跡

報告したような検出状況から窯体構造を復元するのは，かなり困難である。ここで確認しておきたいのは，窯体が整地層の頂部に構築されていること，掘り方や窯壁中に礫が使用されていること，崩落窯壁に径10cm程度の芯棒の痕跡がみられること，また壁面が強く被熱して青灰色還元層を形成していること，の4点である。

窯体が整地層頂部に築かれていることは，この窯の大半が地上に突出していたことを推測させる。このことは，わずか0.36mしか残存していない窯体高では，強く還元して焼け締まった壁面を形成するだけの高温が得られないとみられることからも，首肯できる。

窯体掘り方内の石組みには，角礫を3段積んで上2段が地上に突出している部分があり，本来は地表面よりも高く積まれていたことを窺わせる。窯壁は上端で外開きに延びているが，石組みはこの窯体立ち上がりの延長部に接して積まれていることになる。したがって，崩壊して現状をとどめない窯体上半部は，地上に突出した石組みと窯壁中の芯棒によって裏込め・補強されたような形態をとることが想像されるのである。

ところで窯壁の被熱状況から，窯体は焼成の最終段階で完全に密閉されたことがわかるが，出土した擂鉢の焼成状況からみても低火度還元焔による瓦質の焼成が行われたのではなく，通常の須恵質焼成の可能な高火度還元焔焼成が行われたと判断できる。この点を重視すると，窯内の製品に効率的に高い温度の焔が当たるような施設（火格子）の存在があったとみるべきである。窯壁中に塗り込められ，窯内に露出した石材を，火格子の痕跡とみることはできないだろうか。2号窯跡の構造については，各地の事例との比較作業の中で，再び取り上げることとしたい。

3号窯跡

検出窯跡の中で最も遺存状況の悪いものであるが，形態的に1号窯跡との類似点が多い

ことから，その対比によって復元は可能である。すなわち傾斜した床面をもち，焼成部床面の中央と壁面沿いに溝をもつことは，1号窯跡と全く同じであり，基本的な形態については同様な状況にあったといえる。その一方で，削平を被っているとはいえ周囲の地形から地下・半地下式をとるとは考え難く，周囲に礫を伴う掘り方をもつことから，半地上ないし地上式の窯体が想定できる。つまり2号窯跡同様，窯体の大半を粘土によって構築しているとみられるのである。また焚口と焼成部との間に，1号窯跡ほどの明瞭な段差を伴わない。

［西日本各地の事例との比較］

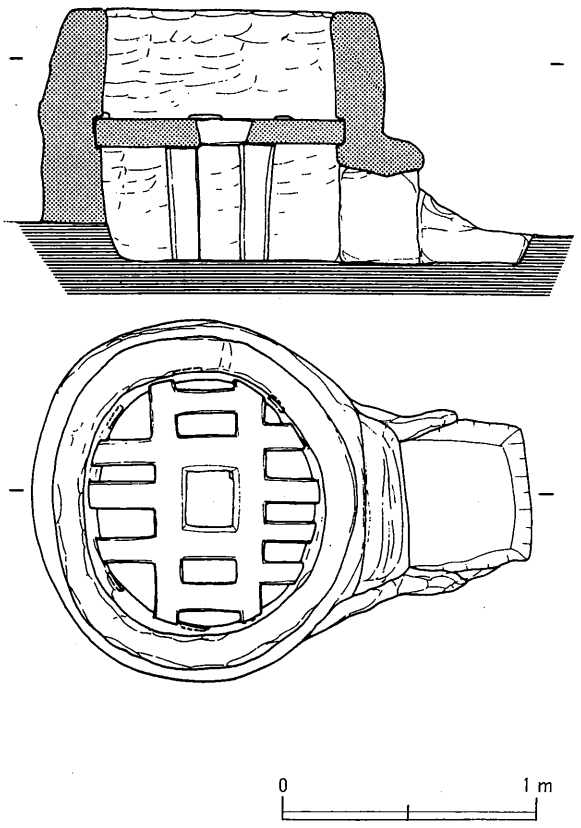
楠井1～3号窯跡との関連で注目されるのは，いわゆる「煙管状窯」と呼称される小型窯の一群である。このタイプの窯は，兵庫県明石市魚住38号窯跡の調査で確認され，命名されたものである(7)。しかしその構造上の特徴については「直焔式の平窯である」という，やや曖昧な規定がみられるのにとどまっており，以後，構造的な特徴が整理されないままにこの用語が独り歩きしている感がある。その後各地で類例が増加したが，焼成方法も含めた構造上の差異ないし同一性が積極的に議論されることはなかった。したがって，形態的には魚住38号窯跡と同じ「円錐台形の焼成室と焚き口」をもつ一群の中に，焼成方法上の差異（つまりどこで燃料を燃やし，どこに製品を詰めるのか）が存在するのか否か，という点については必ずしも明確化されているわけではない。

最近，森隆氏は西日本における中世土器窯の構造を検討している(8)が，「煙管状窯」の多くに「間仕切り」（火格子）をもたない構造を想定する一方，「間仕切り」をもつ木野の現存窯を「煙管状窯」とは別形態の窯としている。森氏の分類案は，窯体の構築方法に基づく形態の差異に重点を置き，同時に焼成器種（土師器・瓦器・須恵器）の違いと窯体構造とに整合性をもたせようとする点で意欲的ではあるが，焼成方法の差異が分類案とは必ずしも一致していない。

窯体の形態と焼成器種とを切り離して，構造上の特徴を検討しておこう。魚住38号窯跡は窯体中位に「間仕切り」と呼称される火格子（ロストル）を設け，下方から吹き上げる焔を「間仕切り」上の窯詰め製品に当てるようにしている。これはイギリスなどでup-draught kiln（垂直焔式窯）と呼称される構造の一種である(8)。火格子は灰や焔を直接製品に当てずに，製品の被熱を均一にするための工夫とする意見がある(9)が，反面，窯体各部で最も破損し易い部位である。魚住38号窯跡の「間仕切り」材（花崗岩角礫）を実見したところ，高熱のため下面（すなわち燃焼部側）が一部融解していた。このため，国外各地の垂直焔式窯に普遍的で，国内でも伊丹郷町遺跡第93次調査焙烙窯(10)でみられる粘

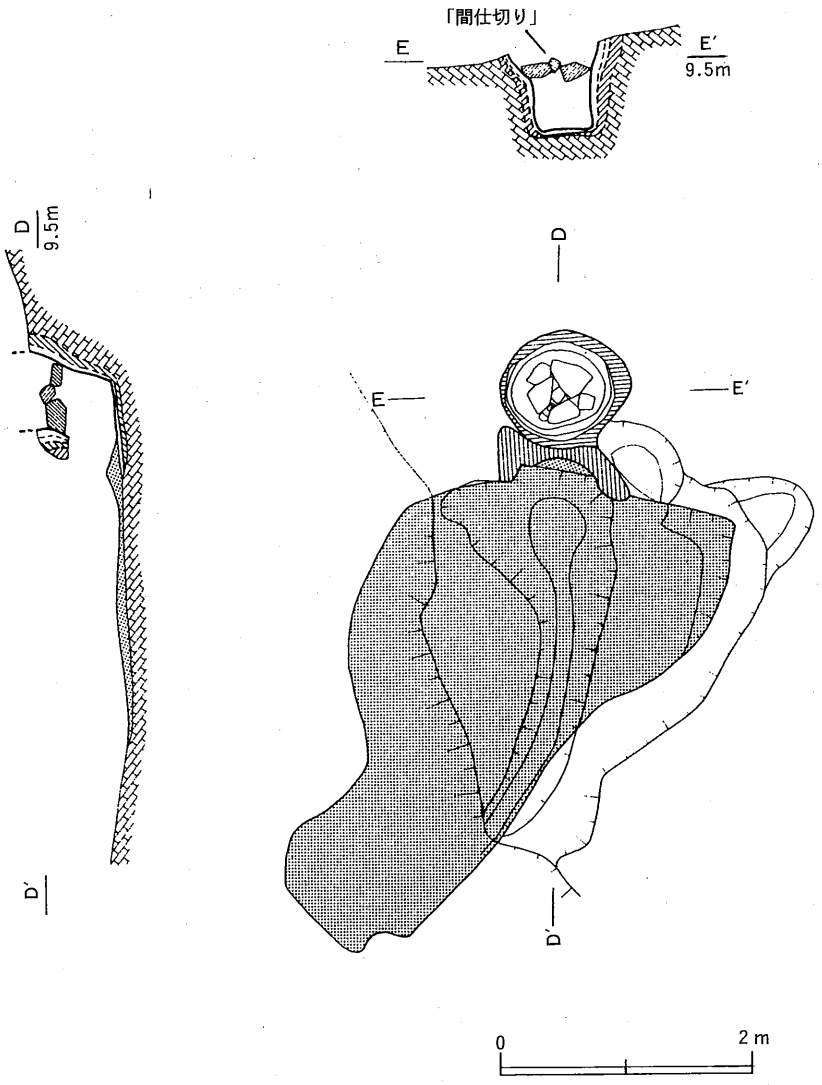
土製の「間仕切り」の場合には，最も亀裂などの破損が著しい箇所といえる。したがって，頻繁な補修の対象となったことは間違いなく，また製品搬出や燃料の掻き出しによる窯の破損を考えると，本来「間仕切り」が存在していても，それが良好なかたちで遺存することは稀であろう。

ところで窯体構造，特に窯内施設の存在は，焼成方法とともに窯体内の焔の流れに影響を与え，結果として被熱箇所と被熱の強弱に反映する。したがって，魚住38号窯跡の被熱状況に特徴があれば，他の事例も「間仕切り」の有無にかかわらず魚住38号窯跡との構造上の異同がある程度判断できるはずである。



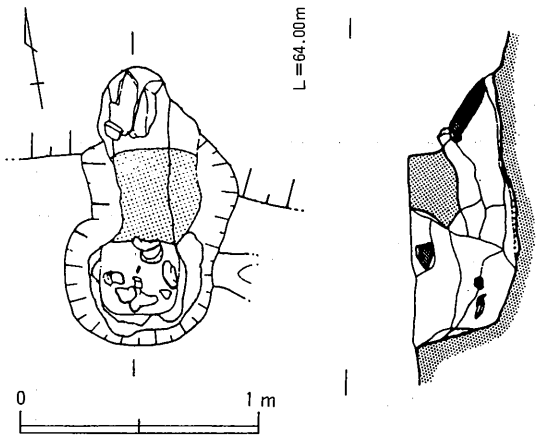
第267図　木野愛宕神社の現存窯

そこで改めて魚住38号窯跡の被熱状況について，報告書から検討してみよう。「間仕切り」を除いた窯体各部で最も被熱が顕著なのは，「間仕切り」上方の壁面であり，次いで「間仕切り」下方の壁面，さらに床面の順になっている。いずれも表面には青灰色還元層が形成されており，製品の焼成（須恵器椀・皿）とよく一致する。問題になるのは，「間仕切り」直下の床面が顕著に被熱している点である。もしここで燃料を燃やしたのであれば，大量に生じる灰・炭によって床面は間接的な被熱となり，報告されたような状況にはならないのではなかろうか。また平面図をみると，開口した焚口のかなり手前（前庭部側）の側壁上半部と天井部が被熱しており，その直下付近から前庭部にかけて灰が堆積している。これらのことから，主に燃料を燃やした部分は「間仕切り」直下ではなく，より手前の「焚口」と報告されている部分である可能性が高いといえる。「間仕切り」直下の床面が焼けているのは，「間仕切り」の輻射熱と窯体密閉時の還元雰囲気が直接的に床面に影響を与えたためだと理解できる。



第268図　魚住38号窯跡

魚住38号窯跡と同様な被熱状況を示す事例としては，一升水遺跡２号窯跡[11]（福岡県），沖の店遺跡[12]（岡山県），緑ケ丘落矢ケ谷８号窯跡[13]・魚住40号窯跡[14]・木器４号窯跡[15]・神出宮ノ裏４号窯跡[16]・伊丹郷町遺跡焙烙窯（兵庫県），西村遺跡西村北地区ＳＦ１[17]（香川県）などがある。この他，窯体の被熱状況が報告されていないものの，側壁の立ち上がりから「間仕切り」の存在が想定されるものとして，屏賀坂遺跡（福岡県）[18]などがある。また，神宮寺遺跡(徳島県板野郡上板町)ＳＫ－１０４０[19]は窯体中位の「粘土帯」に顕著な被熱が認められるといい，この「粘土帯」が粘土製の



第269図　神宮寺遺跡ＳＫ－1040

「間仕切り」の痕跡である可能性もある。被熱状況によって一応「間仕切り」（火格子）の存在が想定できるこれらの一群に限定して「煙管状窯」という呼称を用いたい。これらは立地と窯体構築方法によって，傾斜面に作られた半地下式もしくは地下式のもの（ａ類）と，平地に作られ窯体の大半を粘土で構築する地上式・半地上式のもの（ｂ類）とに分類可能である（第128表）。ａ類は前庭部から燃焼部にかけて床面が上がり気味に傾斜するものが多く，ｂ類は床面がフラットか下がり気味に傾斜する。名称はともかく，木野の現存窯は「煙管状窯」ｂ類として捉えられる。

「煙管状窯」を上記のように捉えるならば，国分寺楠井遺跡で検出した窯体をこの範疇に含めることはできるだろうか。

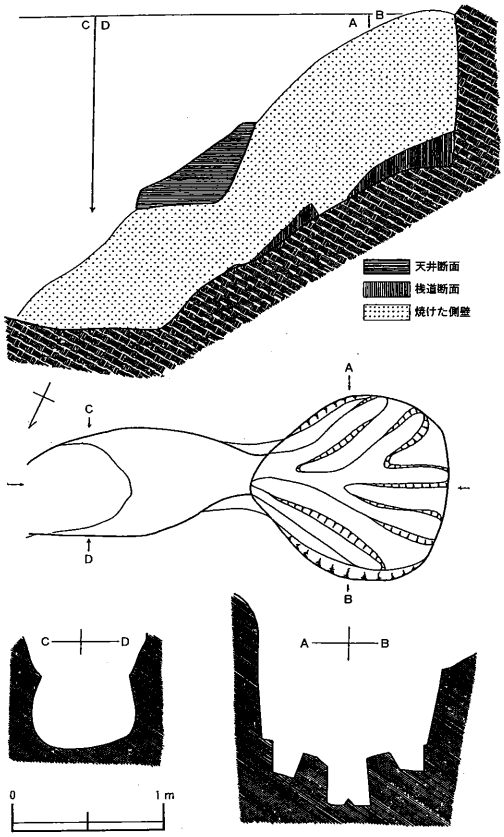
１・３号窯跡は，一見したところ煙管状窯ａ類に近い形態と立地をもっているが，既にみたように火格子の存在は想定できず，床面に直接製品を置いていたと考えられる。特に１号窯跡第１次床面では，焚口と焼成部との間に段差を設けて焔の流れを効率的に捉えようとしているが，小型窯におけるこのような構造はむしろ，瓦窯に近いものである。

かかる観点から注目されるのが，香川県三豊郡高瀬町の二ノ宮瓦窯跡（大水上神社瓦窯跡）である(20)。ここでは通常の小型有牀平窯（２号窯跡）に隣接して，円筒形に近い焼成部をもつ小型窯（１号窯跡）が存在する。１号窯跡は焼成部床面に牀（ロストル）をもつが，通常のものとは異なり葉脈状の平面形を呈しており，高さも低い。しかも燃焼部と焼成部との間に隔壁が認められない（第270図）。このような変形したロストルや床面の段差で効率的な焔の流れを意図する点は，楠井の１・４号窯跡に近似しているといえよう。二ノ宮１号窯跡の操業時期は，出土した瓦から平安時代後期ないし鎌倉時代と考えられ，国分寺楠井遺跡より時期的に先行することは明らかである。一方，讃岐国内における土器生産での煙管状窯の採用は，十瓶山窯跡群の窯場である西村遺跡で12世紀後半にまで遡る。二ノ宮１号窯跡は，十瓶山窯における煙管状窯の影響を受け，有牀平窯を改良した構造をもつと評価できるのではなかろうか。現状では，二ノ宮瓦窯跡のような特定寺社に付属した閉鎖的な小規模生産と，土器生産との関わりは明らかではない。しかし二ノ宮２号窯跡

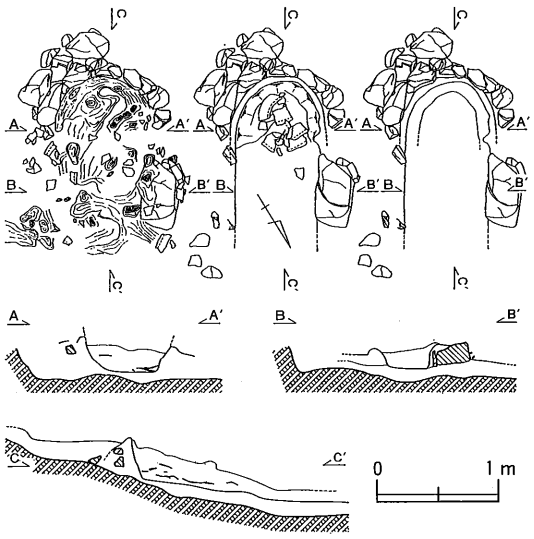
遺　跡　名	所　在　地	規模（m）	窯壁	熱成器種	類型	年　代
一升水遺跡1号窯跡	福岡県北九州市小倉南区湯川	2.35×1.3×0.7	酸化	土師質小皿・杯	a	14c？
一升水遺跡2号窯跡	〃　〃　〃　〃	2.3×1.2×0.7	還元	瓦質擂鉢ほか	a	14c？
屏賀坂遺跡	福岡県北九州市小倉北区金鶏町	2.1×0.75×0.5	？	土師質椀・鍋	a	11c後
沖の店遺跡	岡山県浅口郡鴨方町	1.3×0.9×0.5	酸化	土師質椀・小皿	a	12c中
三蔵畑遺跡	〃　赤磐郡山陽町	1.1×0.7×0.4	還元	土師質鍋・竈	c	12c末
緑ケ丘落矢ケ谷8号窯跡	兵庫県相生市那波	×　×0.7	還元？	須恵質椀・皿	b？	10c
溝谷3号	〃　〃　若狭野町	×1.0×	還元？	須恵質椀・鉢	a	10c
魚住38号窯跡	〃　明石市魚住町中尾	4.0×0.6×0.5	還元	須恵質椀・皿	a	12c初
魚住40号窯跡	〃　〃　〃　〃	1.3×　×	酸化	土師質羽釜	a	12c後
木器4号窯跡	〃　三田市下槻瀬字灰ブ	1.4×0.6×	酸化	土師質槻・皿	a	12c？
神出宮ノ裏4号窯跡	〃　神戸市西区神出町	0.8×0.5×0.5	？	須恵質椀	b	
伊丹郷野遺跡（第93次）	〃　伊丹市	2.3×0.8×0.5	酸化	土師質焙烙	b	18c末
西村遺跡西村北　ＳＦ1	香川県綾歌郡綾南町陶	1.3×0.5×0.35	酸化	土師質（軟質の須恵質）椀	b	12c後
神宮寺遺跡ＳＫ－1040	徳島県板野郡上板町	1.1×0.6×0.35	酸化	土師質椀・皿	a	13c後

規模は，全長×焼成部上端径×焼成部床面径の大まかな数値

第133表　「煙管状窯」地名表



第270図　二ノ宮1号窯跡



第271図　三蔵畑遺跡土師器窯

では，瓦の他に土師器杯・皿・経筒（？）や硯を生産していたようであり，また瓦の製作技法も十瓶山窯系とみられることから，小規模な瓦屋といえども周囲の土器生産と無縁ではあり得なかったことが窺える。1・3号窯跡の構造は，地域内における土器・瓦生産地の技術交流を前提としているといえよう。

一方，2号窯跡にみられるような構造の窯については，森氏も指摘するように三蔵畑遺跡（岡山県赤磐郡山陽町）[21]検出の土師器窯との関わりが注意される。この窯跡は，構築にあたって花崗岩の割石を窯体よりも若干大きく組み，その内側に粘土を塗り込んで窯壁を形成する点で，2号窯跡と共通する。また被熱状況においても，焼成部壁面が顕著に被熱してガラス状を呈するのにもかかわらず床面の被熱が弱いことも共通している。両者ともに窯体の被熱状況は火格子の存在に否定的な要素であるが，いずれも窯体前面に燃焼部にあたる窯室がない。したがって考えられるのは，平井遺跡（大阪府堺市）や小部遺跡（大分県宇佐市）で検出された瓦器窯[22]のように，窯体の開口部付近で燃料を燃やすような操業形態である。あるいは窯体床面で直接燃料を燃やし，その直上に火格子を設定するために，灰の堆積によって床面が被熱しなかったとも考えられる。判断が難しいが，製品が瓦器椀よりも大きな擂鉢などであり，同一面では燃焼部の確保が困

難である。また背後の石組みが窯体を地上に突出させるための補強であるならば，窯体上半を単室のドームのような単純な構造とは考え難い。以上から後者の可能性，すなわち燃焼部を焼成部の前面ではなく直下にもつ煙管状窯の一形態としての可能性を考えておきたい。この想定が妥当であれば，2号窯跡は煙管状窯の地上化への傾斜をさらに強めた形態（c類）として捉えることもできるが，その当否は今後の類例の増加を待ちたい。

なお，掘り方内に石組みを組んでその内側に粘土を塗り込むという，2号窯跡の構築方法は，炭窯の構築方法とよく似ている。このことから，築窯技術が炭窯との関わりをもつことも考えられる。

まとめると楠井における窯の2形態は，煙管状窯と瓦窯との折衷構造として捉えられるもの（1・3号窯跡）と，煙管状窯の一形態として捉えられる可能性をもつもの（2号窯跡）であることがわかった。いずれも普遍的にみられる煙管状窯とはやや構造を異にしており，その出現には複数の生産地の技術交流を前提としていることが考えられる。

(2) 窯詰め方法

今回の調査では，具体的に窯詰め状態を示す資料を得ることはできなかった。しかし窯体規模と製品の大きさ，あるいは製品の被熱状況から，ある程度の類推は可能である。

まず，各器種の詰め方であるが，擂鉢は口縁部外面が顕著に還元したり，炭素の吸着がみられる場合がある。これは，口縁部のみ窯内の還元雰囲気に直接接していたことを窺わせ，重ね焼きが行われたことを示す。これは狭小な窯内容積を有効に使う，という観点からみれば最も効率的な方法といえよう。足釜は窯詰め方法を示す資料に恵まれないが，脚部の位置を少しずつずらせば重ねることができる。また鍋についても，外反する口縁部と外傾気味の体部をもつので，重ね焼きは可能である。

一方甕は，重ね焼きできない。また検出されたような小型窯ではせいぜい1～2個体程度しか焼成できないため，別の大型窯で焼成された可能性を否定できない。御厩では土師質の井筒や甕を「大窯」と呼ばれる直径3間程度の円筒形の窯で焼成していたという。また，同じく現存土器生産地の大原（岡山県浅口郡里庄町）[24]では，煙管状窯と同様の円筒形の窯に大小2形態が存在するようである。これらは，同じ構造の窯の規模によって，製品の焼き分けが行われていたことを示しており，参考になる。

窯道具は検出されていないが，土器溜り1・3で二次的に被熱し，破損面も還元した足釜脚部や口縁部片などが出土している。これらは還元焔焼成を行う時に，簡単な焼き台と

して転用されたものと考えられる。御厩では焙烙全体を燻すために，重ねた焙烙の口縁部に土器片を挟んで隙間を作るが，楠井でも擂鉢の焼成にあたってこれらの土器片を挟むことで，還元焔焼成を行っていたのかもしれない。また，1号窯跡では焼成部床面に甕口縁部が遺存していたが，これも製品を安定させるための焼き台であった可能性がある。

焼成1回分の窯詰め量について，1号窯跡で試算してみよう。足釜は脚部を含めた平均的な直径が35cm程度であるので，床面には4個体並べることができる。また体部高は10～15cm程度であるので，推定焼成部高（最大0.7～0.8m）から5～8段重ねることができる。したがって，1回の窯詰め量は20～32個体程度であったとみられる。また，擂鉢については口径30cm前後のものが多いため，床面に5個体並べることができる。体部高は12～13cm前後であり，底部の厚さ（1.5～2.0cm）を考えると35～40個体を重ねることが可能である。このことから，1回の最大窯詰め量は175～200個体程度に試算される。これは，窯を使用しない民族例からみても，かなり少ない生産量であり，このことは同時に楠井における操業形態を規定する要素となる。

(3) 焼成

検出した窯体の被熱状況から，1・3号窯跡では酸化焔焼成が，2号窯跡では還元焔焼成が行われたことがわかる。

一方遺物の焼成状況をみると，足釜と甕は窯道具転用かとみられるもの以外は，例外なく土師質焼成である。また鍋も鉄鍋模倣のＢⅠ類が瓦質焼成である以外は，土師質焼成で占められる。ところが，擂鉢は同一形態・同一手法のものでも，須恵質・瓦質・土師質の3者が認められる。もっとも非常に堅緻な須恵質は少なく，やや軟質気味の須恵質が多いことから，瓦質主体としてもよいかもしれない。

擂鉢にみられる焼成の不安定な状況は，小型窯における焼成技術の不安定な要素を示すともみられるが，単なる失敗品として土師質製品を捉えるとすれば，その量があまりに多く異例の損耗率となる。これは，先述した1回の生産量から考えても，不自然である。実際の消費地資料においても3者が一定量存在するのであり，流通段階でも製品の焼き上がりによる選別が行われなかったことを推測させる。

このことに留意して各窯の製品をみると，3号窯跡窯体内出土の擂鉢ＡⅡ類と，この窯の操業に関わるとみられる土器溜り2・3の擂鉢ＡⅡ類には，土師質焼成品が圧倒的に多いことが看取できる。3号窯跡は窯壁が酸化しており，製品の焼成と概ね一致することか

ら，当初から酸化焔焼成を意図した生産が行われた可能性がある。

これをより明確にするためには，消費地資料の厳密な検討の蓄積が必要であるが，製品の品質に強い規制が働かないか，消費状態を考慮した意図的な焼き分けのいずれかが，生産地の体制として存在したことが想定できるのである。

註(1) 「正箱遺跡・薬王寺遺跡」『県道山崎御厩線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター 1994

(2) 横山浩一「須恵器の叩き目」『史淵』117号 1980

(3) 菅原正明「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集 1989

(4) 「西村遺跡Ⅱ」『国道32号綾南バイパス建設工事にともなう埋蔵文化財発掘調査』香川県教育委員会 1981

(5) 柴田圭子「15・16世紀の土器様相 愛媛県」『15・16世紀の土器様相』（第6回四国中世土器研究会資料）1994

なお，第264図は上記文献からの引用である。

(6) 島田貞彦「山城幡枝の土器」『考古学雑誌』第21巻第3号 1931

佐藤竜馬・濱野圭司「近世讃岐における土器生産」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』Ⅲ 1995

(7) 兵庫県教育委員会『魚住古窯址群』1983

第268図は上記文献から引用・改変したものである。

(8) 森隆「中世土器の焼成窯」『中近世土器の基礎研究』X 1994

なお，第267図は上記文献からの引用である。

(9) Vivien G. Swan “The pottery kiln of Roman Britain” Royal Commission on Historical Monuments 1984

(10) 小長谷正治「資料紹介 伊丹郷町発見の焙烙窯」『関西近世考古学研究』Ⅱ 1992

(11) 『埋蔵文化財調査報告書――白萩遺跡・潤崎遺跡・瀬坂遺跡・西ソノ遺跡・一升水遺跡』（財）北九州市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室 1983

(12) 「沖の店遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』2 建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会 1981

(13) 「相生市・緑ケ丘窯址群」『山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅳ 兵庫県教育委員会 1986

(14) 『魚住古窯跡群発掘調査報告書――中尾土地区画整理事業に伴う――』明石市教育委員会・平安博物館 1985

⑮ 「高平土地改良区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財調査の記録」『兵庫県三田市文化財調査報告』第7冊 1990

⑯ 森田稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開――神出古窯址群を中心に――」『神戸市立博物館研究紀要』第3号 1986

⑰ 「西村遺跡」『国道32号綾南バイパス建設工事にともなう埋蔵文化財発掘調査』香川県教育委員会 1980

⑱ 『屏賀坂遺跡』北九州市教育委員会 1977

⑲ 早渕隆人「徳島県板野郡上板町神宮寺遺跡」『日本考古学年報』44（1991年度版）1993
第269図は，上記文献から引用した。

⑳ 『香川県陶邑古窯跡群調査報告』香川県教育委員会 1968
第270図は，上記文献から引用した。

㉑ 「岩田古墳群 他 野山第2・5号墳・三蔵畑遺跡」『岡山県山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』第6集 岡山県山陽町教育委員会 1976
第271図は，上記文献から引用した。

㉒ 渋谷高秀・小谷正樹「和泉における瓦器焼成窯」『中近世土器の基礎研究』V 1989
『宇佐地区遺跡群発掘調査概報』宇佐市教育委員会 1988

㉓ 六車功「大川郡における炭窯と習俗について」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第1号 1984

㉔ 荻野繁春「中世の須恵器を議論するにあたって――分類を中心に――」『福井考古学会会誌』創刊号 1983

第2節　楠井産土器の編年

1. 出土遺物の一括性

第3章第3節や第4節2において詳述したように，各窯跡では窯体内あるいは灰原に生産時の遺物が遺存していたものの，その量は概して少なく，全体の形状を窺わせる資料はさらに少なかった。これに対して3箇所の土器溜りでは，極めて多量の遺物を得ることができたが，その反面，窯の整地作業に伴う攪拌や，工人の使用・廃棄による集積などによって，限られた一時期の遺物としての提示が困難な状況にあった。楠井産土器の編年作業を行うためには，まずこれらの遺構や層位の埋没・堆積状況を整理し，その上でどの資料がより信頼度の高い一括性を有しているのか，検討する必要がある。

まず各窯跡であるが，1号窯跡では窯体内の下位に遺物が集中し，埋土上位にはわずかな細片しか認められなかった。窯体内埋土は，周囲の基盤層とよく似た花崗岩の風化土であることを考えると，廃窯後さほど時間を経ずに一気に埋没したことが考えられる。また2号窯跡では，窯体内に堆積していたのは大半が窯壁片であり，遺物はその間に混在していた。窯体が地上式の窯であると推定されることから，廃窯後の崩落は早い段階で起こっていたとみるのが妥当であろう。このように1・2号窯跡では，廃窯後に土器型式を超えるほどの長い期間，窯体がオープンな状態にあったとは考えられない。先行する型式の土器が混入する可能性はある（特に2号窯跡では）が，1・2号窯跡では窯体内遺存の遺物を操業期のものと判断してよい。

これに対して，3号窯跡ではやや事情が異なる。何故なら，3号窯跡は廃窯後に2号窯跡構築に伴う整地を被っているからである。窯体が基底部のみ遺存していたことは，整地による削平がかなり顕著であったことを窺わせる。したがって，窯体内や灰原出土の遺物にもこの時の遺物が混入する可能性は十分にあり，このことを念頭に置いて資料をみなければならないであろう。

次いで土器溜りについて，検討する。操業に伴う失敗品や工人の使用した土器が集積したとみられる土器溜りは，自然地形の斜面上に無造作に投棄されているために，全体が埋没するまで常にオープンな状態にあったといえ，この点が窯体内とは大きく異なる。ことに土器溜り3は，2号窯跡窯体構築面に堆積しており，3号窯跡操業時と整地時，さらに2号窯跡操業時や廃窯後の遺物が混在している可能性を考えなければならない。また土器

溜り２は，比較的限定された範囲に大型の破片が集積しており，土器溜り３に比較すれば短期間の堆積としてよいであろう。しかし多くは操業に伴う廃棄遺物ではなく，下方の平坦部で工人が使用したものが投棄されたとみられるため，２号窯跡操業期にまで至る時期の遺物が混入する可能性が全くないとはいえない。

土器溜り１は，斜面から谷底に流れ込んだとみられる転石を含む土層（第Ⅱ層）を間層として，第Ⅰａ層と第Ⅲ層が比較的容易に分離できる。このことは大局的な遺物の先後関係の把握に，重要な知見をもたらすといえる。また第Ⅰａ層では東南側から一括して投棄された状況にある土器群があり，二次的な移動とは考えられない堆積状況を示す。ただしここでも，第Ⅱ層が上下層を完全に分離しているわけではない。また転石が小規模な土石流のような急激な堆積を示すのであれば，第Ⅲ層の上面が攪乱され，その時に新しい遺物が混入する可能性がある。また，第Ⅰａ層の遺物がコンテナ70箱という膨大な量であることにも留意しなければならない。土師質足釜や鍋・甕でこのような多量の投棄がみられるのは，それらの中に使用されたものがあるとしても，失敗の少ない低温酸化焔焼成品としては異例の損耗率である。このことは，投棄が長期間にわたって行われたことを示唆するのではないだろうか。

このように，土器溜り３はまとまった時期の所産とみなすことは困難であり，土器溜り２も大半は短期間に堆積したとみられるが，新しい遺物の混入を念頭に置く必要がある。また，土器溜り１では間層を介して第Ⅲ層と第Ⅰａ層が分離できるが，間層堆積時に表面の攪乱で新しい遺物が第Ⅲ層に混入することも考えられる。また第Ⅰａ層の堆積期間の問題もある。

まとめると，一括性のかなり高い資料には，１・２号窯跡窯体内出土遺物がある。またこれにかなり近いものに，土器溜り１第Ⅲ層，土器溜り２出土資料を挙げることができよう。一方，３号窯跡窯体内・灰原出土遺物や土器溜り第Ⅰａ層出土遺物，土器溜り３出土遺物は，他の遺構・層位の所見を踏まえて資料操作する必要があるといえる。

2. 遺構・層位と型式の対応関係

次に各遺構・層位における，主要４器種（擂鉢・足釜・鍋・甕）の各型式の量的な出現頻度について，検討したい。本来ならば破片数や口縁部計測，あるいは個体識別によってより厳密なデータの提示が必要であり，筆者もそれを企図していたが，時間が超過し，果せなかった。そこで甚だ感覚的な表示ではあるが，ここでは遺物量について５段階の表示

を試みた。すなわち，多数（◎）・相当数（○）・少数（△）・僅少（＋），そして無（表示なし）である。この方法で第134表を作成した結果，型式の組合せや量からⅠ～Ⅵ群の識別ができた。

Ⅰ群は土器溜り１の第Ⅲ層出土遺物である。足釜ＡⅠ類・ＢⅠ類，鍋ＡⅠ類の３器種を主体として，これにごく少量の擂鉢ＡⅣ類や足釜ＢⅢ・Ⅳ類が認められる。主体的な３器種はハケ目の多用という点で共通している。また擂鉢ＡⅣ類は，暫定的にこの型式に分類したが，やや異質な口縁部形態をもつことは，既に述べた。少量の足釜ＢⅢ・Ⅳ類は，煮沸器種にみられる技法の共通性が指摘できず，第Ⅰａ層と同一の様相をもっていた。このことから，足釜ＢⅢ・Ⅳ類は間層堆積時もしくは調査時に第Ⅰａ層から混入した可能性が高い。

Ⅱ群は土器溜り１の第Ⅱ層出土遺物である。既に述べたように第Ⅱ層は転石を含み，一気に堆積したとみられる層位であって，遺物の包含量は多くない。遺物は擂鉢ＡⅠ～Ⅳ類と足釜ＡⅡ・ＢⅡ～Ⅳ類，鍋ＢⅢ類，甕ＡⅠ・Ⅱ類などからなる。全体的に資料数が少ないが，特徴的なのは擂鉢ＡⅠ類や足釜ＡⅡ類，甕ＡⅠ類などを含んでいることであり，特に足釜ＡⅡ類の存在は他の遺構・包含層ではＥ－５区包含層でわずかに指摘できるのみで

群	出土遺構・層位	擂鉢						足釜							鍋							甕			
		AⅠ	AⅡ	AⅢ	AⅣ	BⅠ	BⅡ	AⅠ	AⅡ	BⅠ	BⅡ	BⅢ	BⅣ	C	AⅠ	AⅡ	AⅢ	BⅠ	BⅡ	BⅢ	BⅣ	AⅠ	AⅡ	B	C
Ⅰ	土器溜り１第Ⅲ層				△			◎		◎		＋	＋		◎										
Ⅱ	土器溜り１第Ⅱ層	△	△	△	＋				＋		○	○	＋							＋		△	＋		
Ⅲ	３号窯跡関連遺構		△									△	＋	＋					△					＋	
	土器溜り２		◎			＋				＋	＋	◎	◎		＋	◎		＋	◎	◎				＋	◎
Ⅳ	１号窯跡　窯体内		＋	△								△	○							○		＋	○		
Ⅴ	土器溜り３	○	◎	△	＋	＋	＋				△	◎	◎	＋		◎	＋	＋	◎	○	△	＋	○	○	△
	土器溜り１第Ⅰａ層	○	◎	◎	○	＋		＋			△	◎	◎	＋		＋		＋	○	△	＋	○	○		＋
	Ｅ－５区包含層	△	○	◎	＋				＋			◎	◎	＋	＋	＋	＋	＋	△	△	＋	○	△	＋	
Ⅵ	２号窯　窯体内		＋			＋	＋						＋	△			＋	＋	＋						

◎多数　○相当数　△少数　＋僅少

第134表　楠井産土器主要器種の遺構・層位別型式対応表

ある。

Ⅲ群は，3号窯跡窯体内・灰原・ＳＤ０１や，土器溜り2の出土遺物である。両者に共通するのは，擂鉢におけるＡⅡ類の卓越や足釜ＢⅢ・Ⅳ類の多いこと，また鍋ＢⅡや甕Ｂ類がみられることである。甕Ｂ類は，ＡⅠ類とＢ類との中間的な口縁部形態であり，頸部の短い土器溜り3出土資料とは若干異なる。土器溜り2における足釜ＢⅠ・Ⅱ類や鍋ＡⅠ類は細片が多く，大きな破片が多いＢⅢ・Ⅳ類，鍋ＡⅡ類とは異なっていることから，本来伴わない先行的な型式と理解される。また3号窯跡灰原における足釜Ｃ類は，極めて細かい破片であり，窯の操業に伴わないものである可能性が高い。

Ⅳ群は1号窯跡窯体内出土遺物である。擂鉢ＡⅢ類や足釜ＢⅣ類，甕ＡⅡ類の多いことは，Ⅲ群にみられない特徴である。甕ＡⅡ類では，頸部が短く外面を強く横ナデすることで相対的な口縁部の肥厚を作出しているものが多い。

Ⅴ群には，土器溜り1第Ⅰａ層や土器溜り3，さらにＥ－5区包含層の出土遺物がある。いずれも型式のバリエーションが最も多いが，同時に信頼に足る一括性に乏しい資料ばかりであることにも留意しなければならないであろう。つまり上記Ⅰ～Ⅳ群とは異なり，一定度の時期幅を想定しておく必要があるのである。Ⅲ群とⅣ群では明瞭に区別できた擂鉢ＡⅡ類とＡⅢ類が混在することも，この点を強く示すものである。またその他の器種の比較から，Ⅴ群はⅢ群とⅣ群の混在形態であることが窺える。次に述べるⅥ群の要素さえ認められる点は，さらにⅥ群の時期にまで及ぶことをよく示している。

Ⅵ群は2号窯跡窯体内出土遺物を挙げ得る。資料数は少ないが，擂鉢Ｂ類と足釜Ｃ類を主体とする点に特徴がよく表れている。

さて，これらの群の先後関係はどのように捉えられるであろうか。この点については，まず土器溜り1が重要な検討材料を提供する。上記したように，各層に若干の混入が想定できるが，第Ⅲ層→第Ⅱ層→第Ⅰａ層という序列は動かせないのであり，Ⅰ群→Ⅱ群→Ⅲ・Ⅳ群という先後関係が指摘できる。また，2・3号窯跡の重複関係も組上に乗せることができる。すなわち，整地層の存在によって3号窯跡→2号窯跡という序列は明らかであり，Ⅲ群→Ⅵ群という変化が追えるのである。したがって，混在形態であるⅤ群を除外するならば，Ⅰ群から順を追ってⅥ群に至る変遷過程が想定できるのである。

3. 楠井第Ⅰ～Ⅲ期の設定

(1) 時期設定

上述してきたⅠ～Ⅵ群の中から，本来それぞれの群別に属さないとみられる器種・型式を除外した結果，Ⅴ群をⅢ群とⅣ群とに細別することで，5つの段階に整理できることが考えられるに至った。

ところでこの5段階は，全てが同様な質的変化を伴っているのではなく，いくつかの大きな変化と小さな変化とに分けられよう。すなわちⅠ群とⅡ群の間，Ⅳ群とⅥ群との間に器種構成上の大きな変化が認められ，Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ群の間の変化は器種構成上の変動を伴わない。そこで器種構成上の変化を画期と捉えた上で，イレギュラーな存在の遺物（混入・取り上げ時の混乱）を除外した各群別を3つの時期（大区分）と3つの段階（小区分）に編成し直した（第135表・第272図）。

これにより，第Ⅰ期はほとんど足釜・鍋のみに限定された器種構成をとり，第Ⅱ期にはこれに擂鉢と甕が加わる時期ということができる。また第Ⅲ期は甕が再び欠落する時期といえるのである。

(2) 第Ⅰ期

若干の混入品を除いて，ほぼまとまった資料とみなすことができるⅠ群（土器溜り1第Ⅲ層）から設定した。

［器種構成］

足釜ＡⅠ類・ＢⅠ類と鍋ＡⅠ類を主体とし，少量の捏鉢・羽釜・壺なども存在する。こ

時期		擂鉢						足釜							鍋							甕			
		AⅠ	AⅡ	AⅢ	AⅣ	BⅠ	BⅡ	AⅠ	AⅡ	BⅠ	BⅡ	BⅢ	BⅣ	C	AⅠ	AⅡ	AⅢ	BⅠ	BⅡ	BⅢ	BⅣ	AⅠ	AⅡ	B	C
第Ⅰ期					△?			◎		◎					◎										
第Ⅱ期	第1段階	○			△?				+		◎					○									○
	第2段階		◎									◎	○			◎		+	◎		+	○		△	○
	第3段階		○	◎	○								◎					+	○	◎			○	△	
第Ⅲ期			△			△	△							△			+								

◎多数　○相当数　△少数　＋僅少

第135表　楠井第Ⅰ～Ⅲ段階の設定と器種の消長

の他に擂鉢ＡⅣ類も当該期の可能性があるが，既に述べたように擂鉢ＡⅣ類とＡⅢ類との中間的なやや特異な形態をもつものであり，その位置付けについては，今後の類例の増加を待ちたい。

［各器種の特徴］

足釜　相対的に鍔部が口縁部よりも長いＡＩ類と，口縁部が長く立ち上がるＢＩ類の２形態が存在する。接合痕の観察などにより，前者は口縁２技法（鍔部屈折法）が多く，後者は口縁１技法（鍔部接合法）が多いようである。形態差を超えて両者に共通するのは，ハケ目調整の顕著な多用であり，体部内外面のみならず鍔部端面も横ハケによって調整される。底部には格子叩き目が施されており，ＢＩ類では底部から体部下半にまで及んでいる。ＡＩ類の叩きの範囲はやや狭く，底部に限定される傾向にある。

鍋　口縁部が水平方向に強く外反し，直立する口縁部端面をもつＡＩ類で占められる。端面には横ハケ調整が行われ，また体部外面や口縁部内面にもハケ目が丁寧に施されており，足釜同様ハケ目の多用が指摘できる。底部外面には格子叩き目がみられる。

その他　土師質捏鉢は口縁部が遺存していないが，器壁が薄く底径も小さい。土師質羽釜は足釜ＡＩと同様な口縁・鍔部形態をもつが，体部が直線的に外傾しており，羽釜本来の機能を十分に果せるものである。また土師質壺では，短く外反する口頸部内面に鍔状の突帯が巡る。蓋受けか。

(3)　第Ⅱ期第１段階

出土遺物の中で最も一括性に乏しいⅡ群（土器溜り１第Ⅱ層）と，Ⅴ群で卸し目原体を共有しない擂鉢や口縁部の長い足釜の存在から，わずかにその存在が想定できる段階である。各型式の共伴については，将来的に消費地資料の充実などによって，訂正・補完される可能性がある。

［器種構成］

擂鉢ＡＩ類，足釜ＡⅡ類・ＢⅡ類，鍋ＡⅡ類，甕Ｃ類などで構成される。Ⅱ群では擂鉢ＡＩ類の存在はあまり多くないが，土器溜り１第Ｉａ層の擂鉢ＡＩ類において，他型式との原体の共有がほとんど認められず，また技法的にもＡⅡ・Ⅲ類の近縁さとは対照的な様相をもっていた。この点を重視して，擂鉢ＡＩ類を擂鉢ＡⅡ・Ⅲ類に先行する段階の所産と判断した。またやや不分明ながら甕が出現していた可能性があることも注意される。

［各器種の特徴］

擂鉢　擂鉢ＡⅠ類には，口縁部端面に横ハケを施したもの（ＡⅠ－１類）と，口縁部を回転ナデ調整し，体部に先行した縦ハケがみられるもの（ＡⅠ－２類）があるが，いずれもハケ目を多用している点に特徴がある。横ハケは回転を利用しない。卸し目原体の幅は広く，1.5～2.1cmを計るものが大半であり，条数も５～８条である。なお，焼成は典型的な瓦質に乏しく，須恵質次いで土師質が目立つ。

足釜　足釜ＡⅡ類は量的に極めて少なく，器種構成の主体をなさない。ＡⅠ類に比して鍔部の突出が短く，また下方に伸びるようになる。依然口縁部や体部にハケ目を多用する傾向にあるが，第Ⅰ期のＡⅠ類でみられた鍔部端面の横ハケ調整は行われない。

足釜ＢⅡ類はＢⅠ類に比して，口縁部長はほぼ同様であるが，鍔部は基部が太く短い突出状況となる。また鍔部端面の横ハケ調整も行われなくなることから，端面には平坦面が形成されない。体部外面の縦ハケ調整もほとんど行われない。さらに底部叩きは体部にまでは及ばなくなるため，直立気味の体部と底部との間に明瞭な屈曲（稜）が看取できることが多い。なお口縁・鍔部成形は，口縁１技法（鍔部接合法）が多いとみられる。

鍋　Ⅱ群では鍋の状況が明らかではないが，後出するⅢ群（土器溜り２）の様相を考慮するならば，鍋ＡⅡ類の中で端面が器壁に直交する一群（ＡⅡ－１類）が，当該期にあたる可能性がある。口縁部端面は横ナデ調整であり，ＡⅠ類でみられた端部ハケ目調整は認められない。また体部外面は無調整になり，内面調整も木目の浮き出ない板状工具を用いた板ナデとなる。

甕　長く外反した頸部と若干丸味のある端部をもつ甕Ｃが，この時期に該当するものと考えられる。口縁端部はわずかに外方に肥厚する傾向が読み取れる。

(4)　第Ⅱ期第２段階

Ⅲ群（３号窯跡窯体内・灰原・ＳＤ０１，土器溜り２）から設定される段階である。

［器種構成］

擂鉢ＡⅡ類，足釜ＢⅢ類・ＢⅣ類，鍋ＡⅡ類・ＢⅠ類・ＢⅡ類・ＢⅢ類，甕ＡⅠ類・Ｂ類・Ｃ類，焙烙などで構成される。擂鉢は依然一つの型式のみが主体であるが，足釜・鍋・甕などにおいて複数型式が量的に多数もしくは相当数併存しており，全体としてはバリエーションが豊富になる。

［各器種の特徴］

擂鉢　Ⅲ群遺構出土の擂鉢ＡⅡ類は全て，口縁部に強い回転ナデ調整を施して端面を窪

ませ，相対的に端部をツマミ上げ気味にするもの（ＡⅡ－２類）である。内面調整に顕著なハケ目原体を用いることはなくなり，木目の浮き出ない板ナデになる。また，体部外面は無調整である。卸し目原体の条数は５本が主体でＡⅠ類よりも減少傾向にあるが，幅は1.2～1.8cmとあまり縮小していない。焼成は瓦質や須恵質が少量にとどまり，多くはやや硬質な土師質焼成である。

足釜　足釜ＢⅢ類を主体として，一定量のＢⅣ類も併存するようである。ＢⅢ類はＢⅡ類よりも口縁部が短くなったものである。口縁・鍔部を口縁２技法で成形するものが多く，その際生じた垂直方向の鍔部の歪みは弱い横ナデで調整されるのにとどまるため，鍔部の作巧は極めて粗雑である。また底部叩きの範囲はさらに狭くなり，叩きに先行して既にある程度の丸底化が行われていたような状況も指摘でき，叩き作業の相対的な効果の低下が看取される。

なおⅢ群の土器溜り２と，これと併行するとみられるⅤ群の土器溜り１第Ⅰａ層の足釜ＢⅢ類を比較すると，鍔部直下の爪形状圧痕の出現頻度が明瞭に異なる点が注意される。これは，工人差として捉えることができる，良好な事例であろう。

鍋　鍋ＡⅡ類は，器壁に対して口縁部端面が斜交し，垂直気味になるものが多い。端面の横ナデ調整は前段階よりも顕著であり，明瞭な凹面を形成する。また口縁部の外反がやや弱くなり，立ち上がり気味になる。鉄鍋模倣のＢⅠ類もごく少量みられるが，鍋Ｂ類の主体をなすのはＢⅡ類である。

甕　甕Ｃ類では，横方向にわずかにツマミ出された前段階の口縁端部の特徴がさらに強調されるようになる。また内傾する頸部と，明瞭に外反する口縁部をもつ，器壁の薄い一群が存在する。一方甕Ａ類では，口縁端部を上下に肥厚させるＡⅠ類がこの段階に相当するとみられる。さらに，断面矩形に短く肥厚する口縁部をもつＢ類もこの時期の所産であろう。いずれも頸部が明瞭に存在している点で共通するが，ＡⅠ・Ｂ類が体部外面に格子叩き目を残すことが多いのに対して，Ｃ類は縦方向の板ナデ調整によって叩き目を消すことが多い。

その他　底部に格子叩き目を施し，内面を横ハケ調整する焙烙が少量認められる。また擂鉢・捏鉢に印花文を押捺するものや，足釜にヘラ記号状の刻線を施すものが現れる。

(5)　第Ⅱ期第３段階

Ⅳ群（１号窯跡窯体内）とⅤ群の一部から設定できる段階である。

［器種構成］

擂鉢ＡⅡ類・ＡⅢ類・ＡⅣ類，足釜ＢⅣ類，鍋ＢⅠ類・ＢⅡ類・ＢⅢ類，甕ＡⅡ類・Ｂ類，焙烙，蓋などがある。

［各器種の特徴］

擂鉢　Ⅳ群の擂鉢は全てＡⅢ類であるが，Ⅴ群である土器溜り１出土擂鉢で，ＡⅢ類と卸し目原体を共有するＡⅡ類の大半もこの段階にあたるものと思われる。この段階のＡⅡ類は，ロクロ回転を利用した口縁端部のツマミ上げがより顕著になるもの（ＡⅡ－３類）が多いようである。ＡⅢ類は垂直方向に肥厚する口縁部をもつものである。口縁部形態にかなりのバリエーションがあり，細分化になお検討の余地を残す。ＡⅡ・Ⅲ類ともに，卸し目原体は条数が４ないし５本であり，原体幅が0.65～1.4cmに集中することから，原体条数と幅の減少（縮小）化傾向が明瞭に読み取れる。焼成は須恵質と土師質が多く，瓦質はあまり顕著ではない。

足釜　足釜ＢⅣ類は，口縁部と鍔部が短く突出するものになり，また口縁部が内傾したようになるものも多い。口縁部下端の器壁が厚いために形骸化が一層進行し，口縁・鍔部の一体化が顕著である。鍔部は口縁２技法によるものと，１本の粘土紐から口縁部と鍔部を成形する口縁３技法（一体接合法）がみられる。

鍋　Ａ類に代わってＢ類が主流になる。口縁端部をツマミ上げ，器壁に斜交する端面をもつＢⅢ類が多い。

甕　甕ＡⅡ類はＡⅠ類に比して頸部が短い。口縁部の肥厚は，粘土の貼り付けによるだけでなく，強い回転ナデ調整によって口縁部外面で強調される。また甕Ｂは体部に対して直角方向に短く外反し，頸部の立ち上がりはみられなくなる。

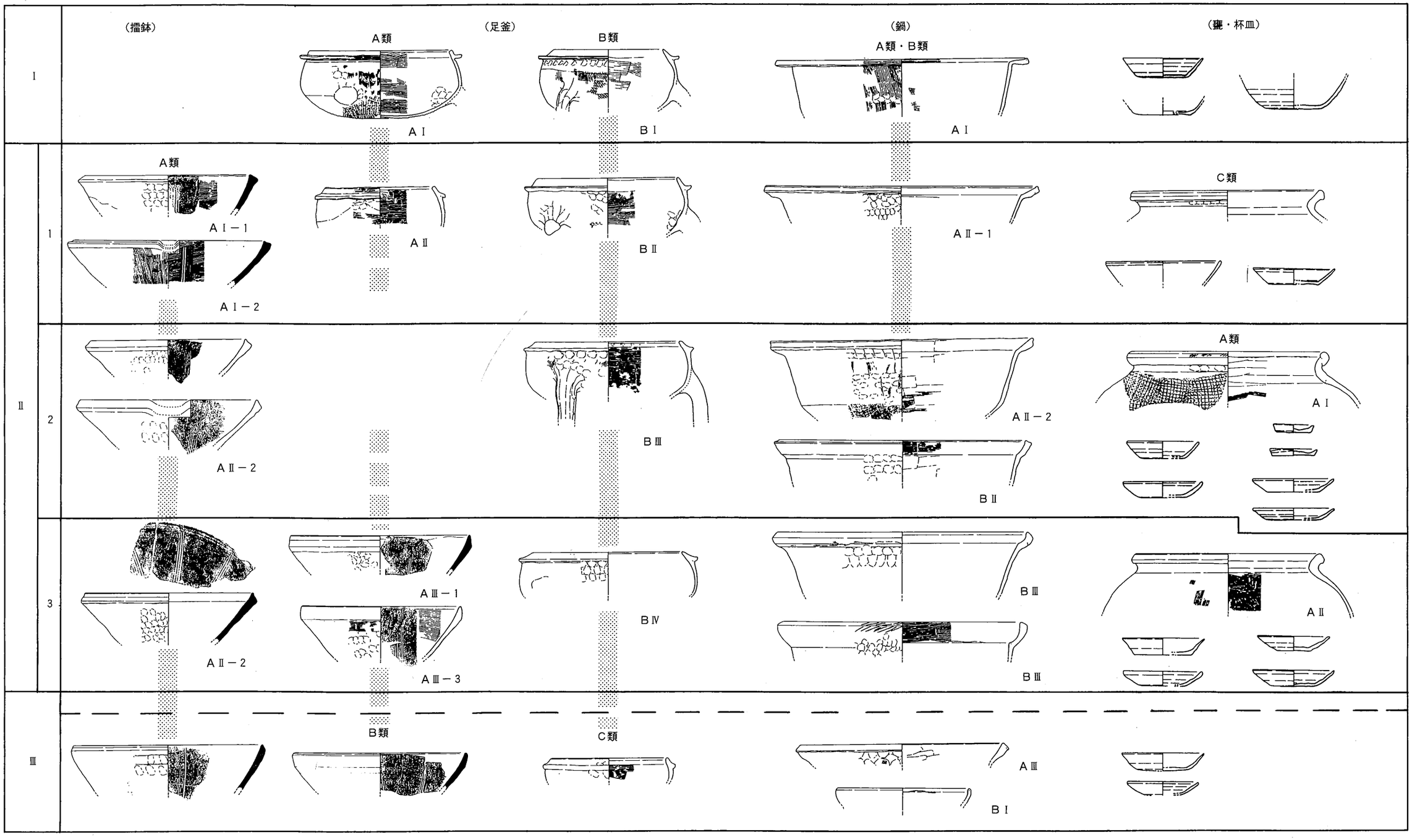
その他　焙烙は，前段階に比べて口径が縮小し，口縁部も肥厚せずに断面矩形を呈するようになる。また印花文や刻線を施した蓋・鍋などがみられる。

(6)　第Ⅲ期

Ⅵ群（２号窯跡窯体内出土遺物）から設定できる段階である。第Ⅱ期第３段階に比べて器種構成や各器種の形態上の懸隔が大きいため，本期と前段階との時間的な間隙を想定する必要があろう。

［器種構成］

擂鉢ＡⅡ類・Ｂ類，足釜Ｃ類，鍋ＡⅢ類・ＢⅠ類などで構成される。遺物量が少ないた



第272図　国分寺楠井遺跡土器編年試案　S＝1／8　杯・皿はS＝3／16

めに全ての器種を網羅しているとは限らず，また窯体構造からみて大型品が生産品目にあたらないという限界があるが，この点を考慮しても甕類の欠落が注目できる。

［各器種の特徴］

擂鉢　擂鉢ＡⅡ類は，丸味を帯びた狭い口縁部端面をもつものであり，Ｂ類により近い形態をなす。内面の卸し目は３本／1.3cmであり，条数の減少傾向が著しい。Ｂ類は回転ナデによる端面状の屈曲をもつもの（ＢⅠ類）と，屈曲をもたないもの（ＢⅡ類）に細分できるが，いずれも調査区内での出土は僅かである。ＢⅠ類の卸し目も，４本／1.4cmと条数は減少傾向にあるといえよう。

足釜　足釜Ｃ類は，短く太い口縁部と瘤状の鍔部をもつ。

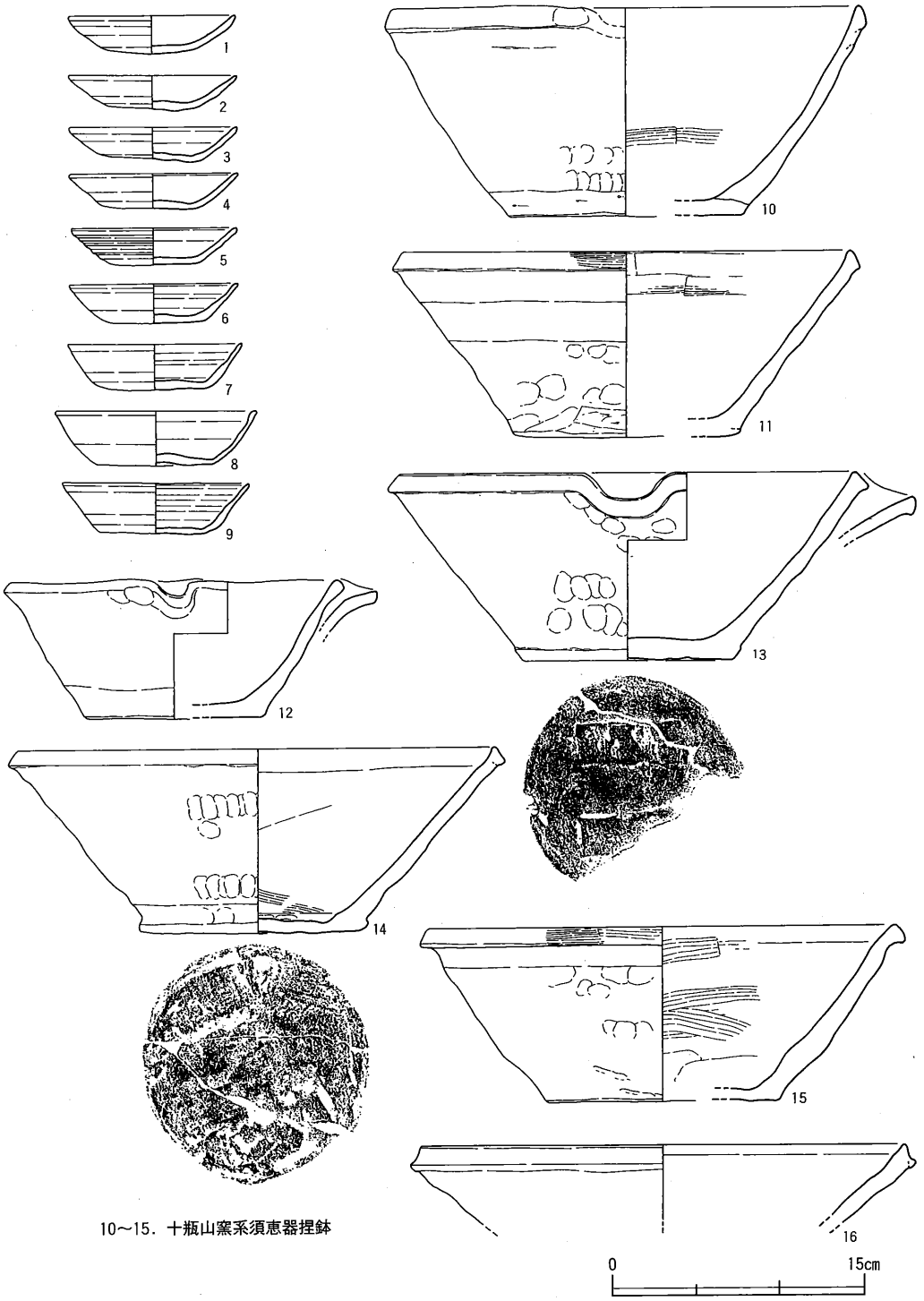
鍋　鍋ＡⅢ類は拡張した口縁端部をもつ。またＢⅠ類はシャープさに欠けた，丸い口縁端部をもつ。

(7)　各時期・段階の想定年代

ここでは上記各段階の実年代について，楠井の各遺構・層位や消費遺跡での搬入品の共伴事例から考えてみたい。ただし，実年代付与の有力な指標となる和泉型瓦器椀の年代観が流動的であること，また良好な一括資料に乏しいことを前提にしなければならず，いきおい実年代を一定の幅の中で捉えなければならない，という制約がある。したがって，今後の資料の増加で再検討されることが望ましい。

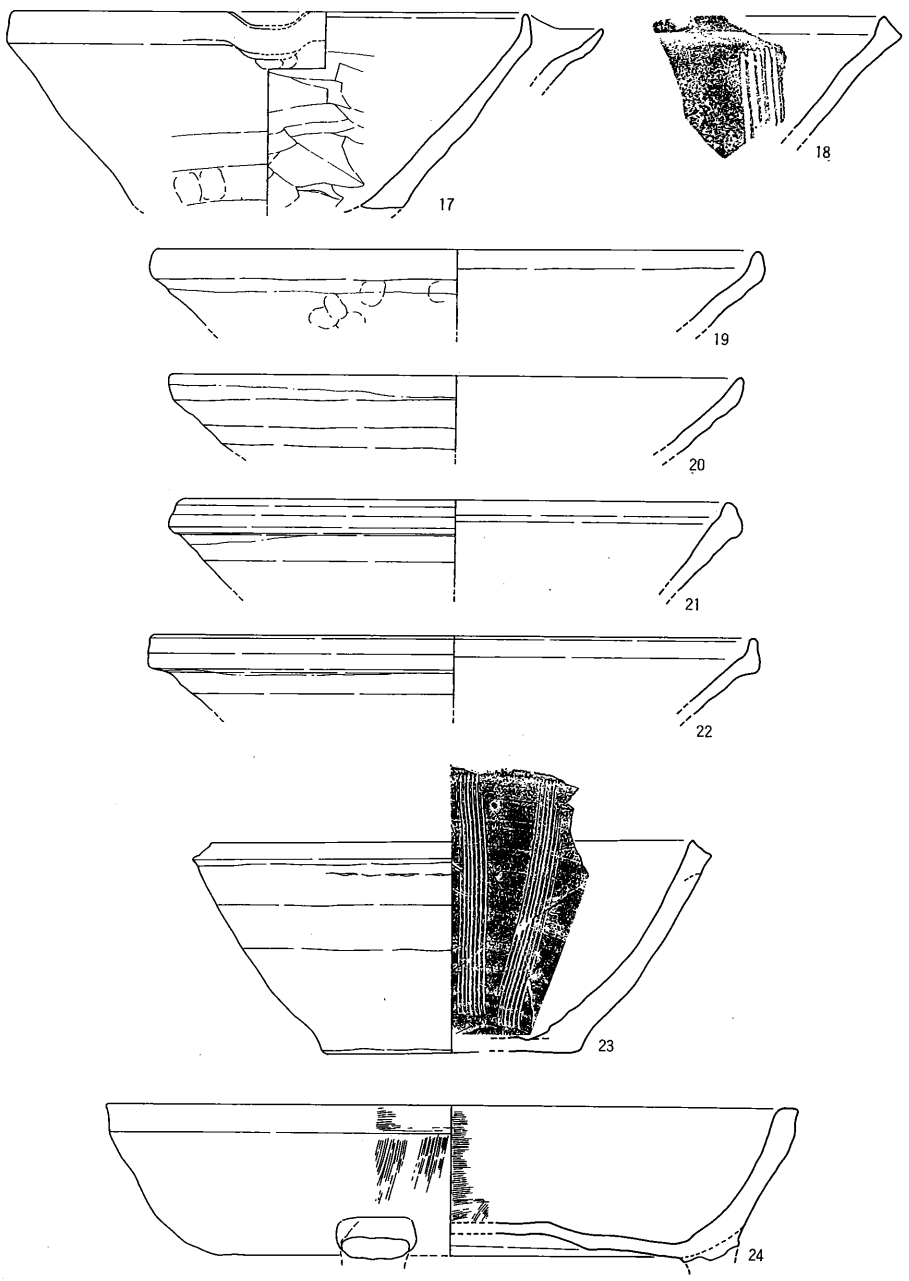
第Ⅰ期　土器溜り１の第Ⅲ層から東播系須恵器捏鉢・備前焼甕・亀山焼甕が出土している。備前焼甕は体部の細片であり，詳細な時期を特定するには至らない。東播系須恵器捏鉢は口縁部内面が弱く窪み，端面下端が垂下気味になるもので，山仲編年のD_1類，荻野編年のⅥ期にあたる。また亀山焼甕は，直立気味に外反する口頸部をもち，体部には格子叩き目がみられることから，岡田編年の第２段階（亀山２号窯跡）にあたるといえよう。

消費遺跡の資料では，下川津遺跡ＳＤⅢ１４３・１４４出土資料(1)と西村遺跡西村北地区Ｓ５－ＳＫ０１出土資料(2)が比較的まとまった事例である。下川津遺跡ＳＤⅢ１４３・１４４は，周辺の条里型地割と方向を同じくする溝であり，検出した東半部では別の流路であるが，西半部では複雑に重複する。重複関係からＳＤⅢ１４３が先行することが判明しており，遺物も土師器杯と須恵器椀との間にわずかな扁平化の方向が読み取れるが，同一階梯を逸脱するほどの大きな時間的隔たりはないといえる。出土した足釜・鍋は底部叩きが広範囲にわたり，端部調整にハケ目を多用するなど，典型的な第Ⅰ期の特徴を



10～15．十瓶山窯系須恵器捏鉢

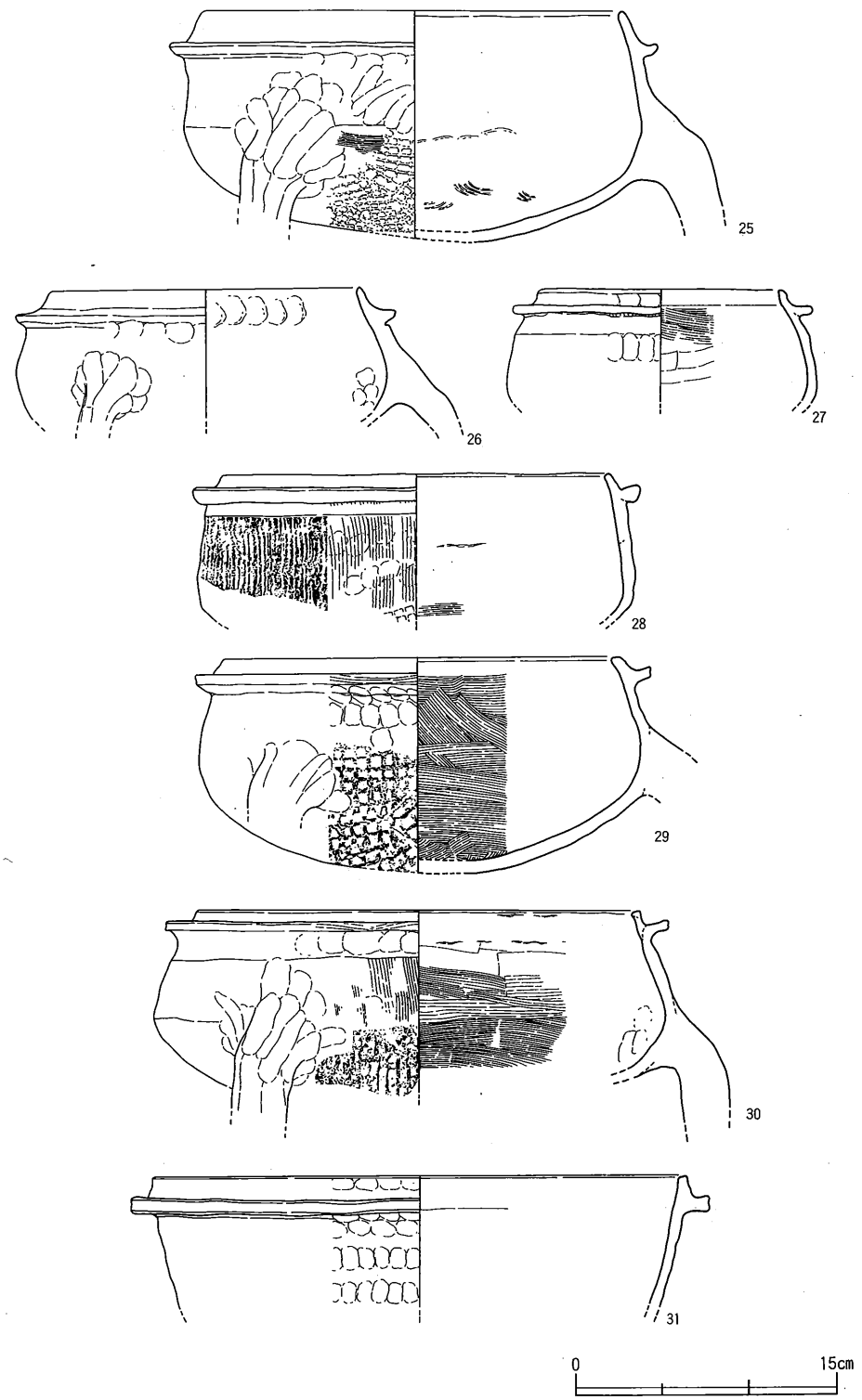
第273図　西村遺跡西村北地区Ｓ５－ＳＫ01出土遺物(1)



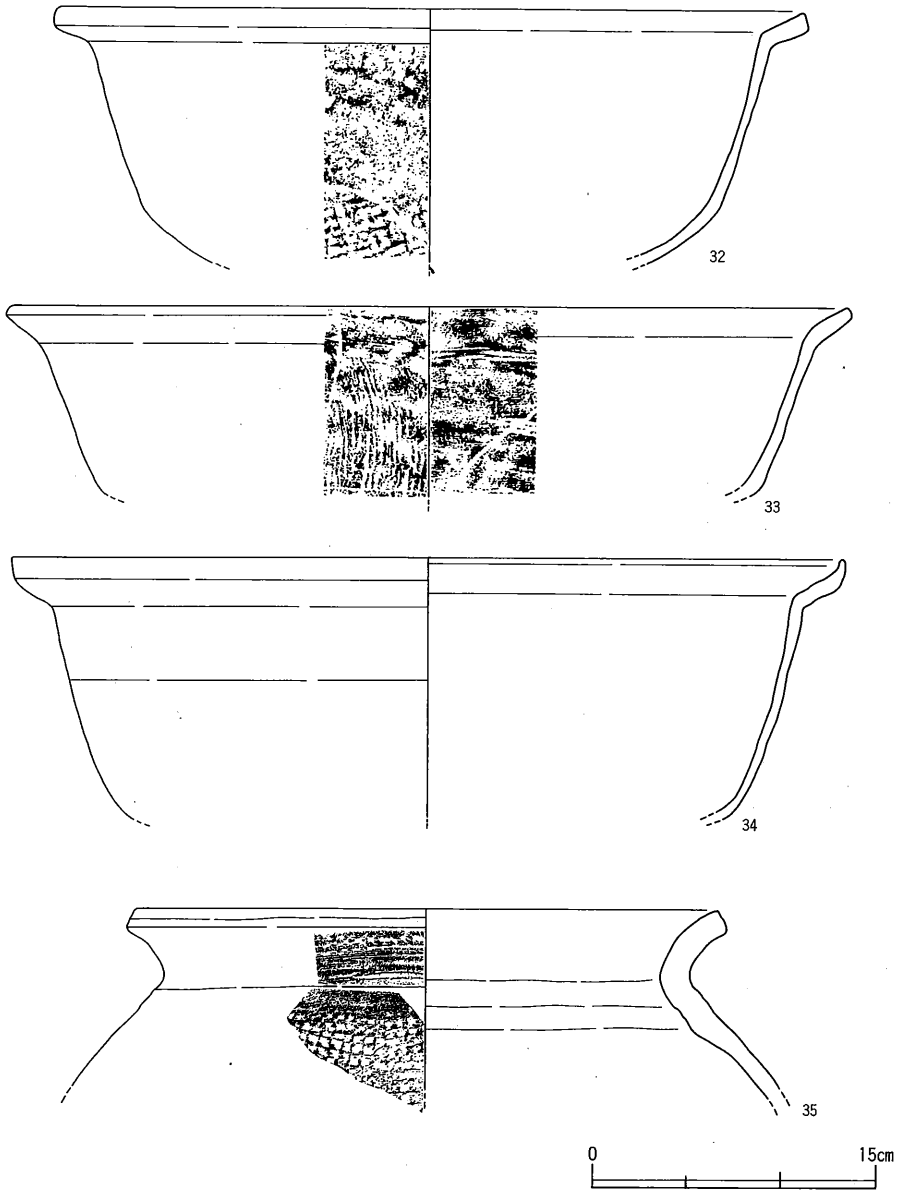
19～22．東播系須恵器捏鉢
23．備前焼擂鉢

0　15cm

第274図　西村遺跡西村北地区Ｓ５－ＳＫ01出土遺物(2)



第275図　西村遺跡西村北地区Ｓ５－ＳＫ01出土遺物(3)



35．十瓶山窯系須恵器甕

第276図　西村遺跡西村北地区Ｓ５－ＳＫ01出土遺物(4)

備えている。搬入品としては東播系須恵器捏鉢・常滑焼甕・亀山焼甕などがある。東播系須恵器捏鉢は山仲編年のC$_2$類に，常滑焼甕は赤羽編年[3]第Ⅱ期後半にあたる。また亀山焼甕は岡田編年の第3段階に該当しよう。

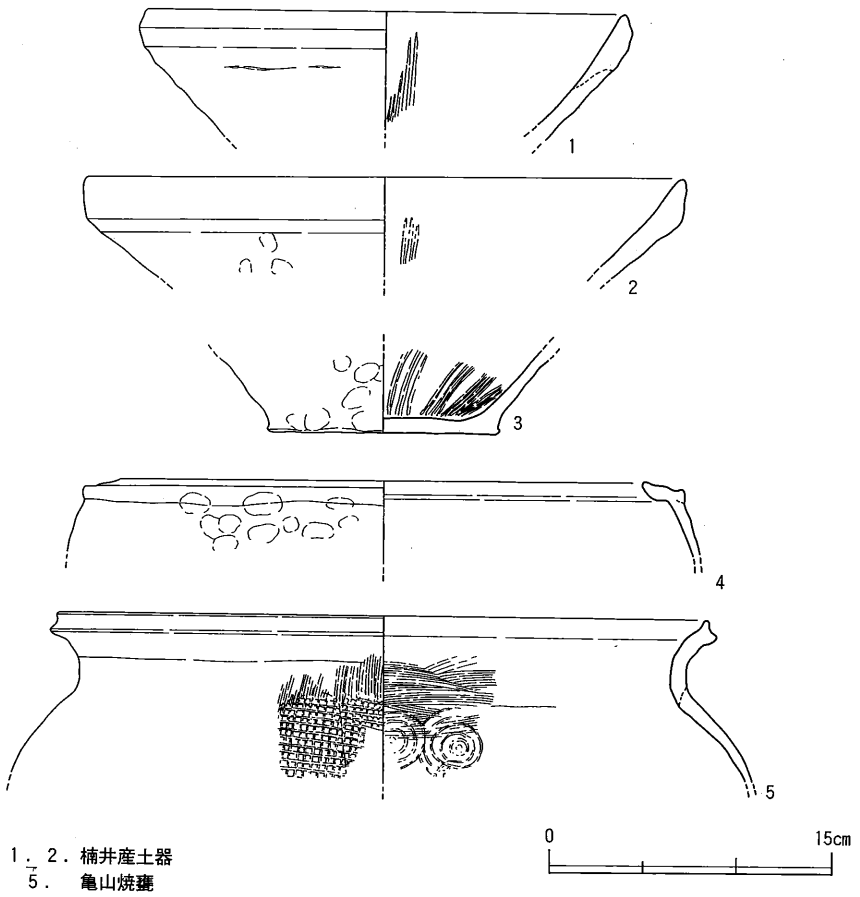
西村遺跡S5－SK01は直径約2.7m，深さ約0.6mを測る，大型の土坑である。遺物は各層から出土しているが，最上層で土師器杯の完形品が5枚重なって置かれており，比較的短期間のうちにまとめて投棄された土器群であると考えられる。足釜にはAⅠ・Ⅱ類とBⅡ類，また鍋にはAⅠ類があることから，第Ⅰ期と第Ⅱ期の過渡期的な様相をもっている。搬入品としては東播系須恵器捏鉢・備前焼擂鉢がある。東播系須恵器捏鉢には山仲編年のC$_2$・C$_3$類とD$_1$類，荻野編年の近畿Ⅴ・Ⅵ期があり，やや時期幅がある。また備前焼擂鉢は小豆郡水ノ子岩の擂鉢a群[4]に近い特徴をもつ。

これらから，第Ⅰ期は13世紀後半頃を中心とした年代が与えられよう。ただし上限については確定的ではない。また第Ⅰ期と関連して，第Ⅱ期の初現を14世紀前半の中で捉えることができると考える。

第Ⅱ期　土器溜り1の第Ⅰa層から，東播系須恵器捏鉢・亀山焼甕・備前焼甕・堺近郊産瓦質甕が出土している。東播系須恵器捏鉢は山仲編年のD$_1$類，荻野編年のⅥ期にあたる。亀山焼甕には，岡田編年の第2～4段階のいずれかに該当するものと，それに後出し伊藤晃氏が「亀山系土器群」とした，15世紀後半以降のものの2者がある。堺近郊産瓦質甕は，既に遺物の項で説明したように，14世紀末葉～15世紀初頭のものとみられる。東播系須恵器は第Ⅰ期の共伴事例と重複するが，堺近郊産瓦質甕はそれよりも明らかに新しいものであり，しかも大型の破片が複数出土していることから，第Ⅰa層で主体をなす第2・3段階のいずれかに伴う可能性がある。

第Ⅲ期　2号窯跡窯体掘り方内から備前焼四耳壺と瀬戸天目茶碗が出土している。備前焼四耳壺はあまり強く張らない体部と外傾気味の口頸部をもつことから，間壁編年の第Ⅳ期Bに該当する。また瀬戸天目茶碗は，平高台状の底部と鬼板の化粧土から，藤沢編年の大窯第3小期の所産とみられる。これらから，16世紀前半頃の年代が想定される。

一方，消費地資料では讃岐国府跡SD7805出土資料が該期にあたる。擂鉢AⅡ類とAⅢ類があり，AⅡ類は口縁部の回転ナデの範囲が2号窯跡窯体内出土資料よりも広く，卸し目も5本と多いことから，やや先行的な要素をもつ。またAⅢ類は，第Ⅱ期第3段階のものよりも端部が丸く，BⅠ類への形態的な近似傾向がより強い。このことから，これらの資料は第Ⅲ期の範疇で捉えられるが，2号窯跡出土遺物よりも若干古い年代を示すと



第277図　讃岐国府跡ＳＤ7805出土遺物

みられる。搬入品には亀山焼甕がある。立ち上がり気味の頸部に縦ハケ調整が施されており，頸部内面にも横ハケ調整が残ることから，草戸千軒町遺跡の第Ⅳ期前半（15世紀中葉～後半）(5)に近い特徴をもっている。

これらから，第Ⅲ期は15世紀中葉から16世紀前半にかけての年代が想定でき，さらに讃岐国府跡の資料から，将来的には２段階設定できる可能性が高いといえよう。

以上まとめると，第Ⅰ期は13世紀中葉～14世紀初頭頃，第Ⅱ期は14世紀前葉～15世紀前葉頃，第Ⅲ期は15世紀中葉～16世紀前半頃に措定することができる。また第Ⅱ期の各段階については年代付与が難しいが，遺物量や形態のバリエーションから勘案すれば，第３段階の継続期間が長く，第１段階は短い可能性がある。このことを踏まえて仮に第１段階を14世紀前葉，第２段階を14世紀中葉～後葉，第３段階を14世紀末葉～15世紀前葉としてお

きたい。

註(1)　「下川津遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』Ⅶ　(財) 香川県埋蔵文化財調査センター　1990

(2)　「西村遺跡」Ⅱ『国道32号綾南バイパス建設工事にともなう埋蔵文化財発掘調査』香川県教育委員会　1981

(3)　赤羽一郎『考古学ライブラリー23　常滑焼』ニュー・サイエンス社　1984

(4)　葛原克人・栗野克己・狐塚省蔵「学術調査報告」『海底の古備前』山陽新聞社　1978

(5)　篠原芳秀「草戸千軒町遺跡出土の亀山焼」『中近世土器の基礎研究』Ⅲ　日本中世土器研究会　1987

第3節　楠井産土器の分布

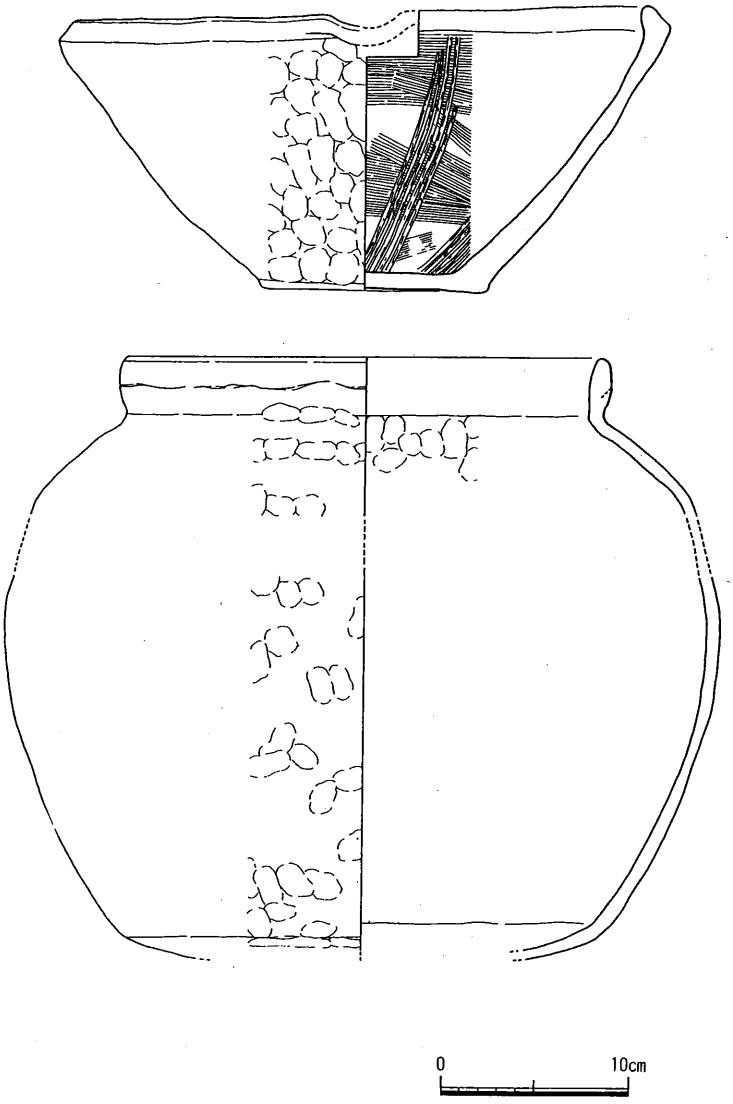
ここでは楠井産土器の分布について，まとめておきたい。なお，前提として問題になるのは，普遍的な4器種（擂鉢・足釜・鍋・甕）が国分寺楠井遺跡のみで生産されていたのか，それとも県内の他地域に同様な生産地が存在したのか，という点である。これは，本節で後述する他の在地産土器との競合関係や，楠井の成立過程を考えるならば，少なくとも形態に著しい特徴をもち第Ⅱ期に出現する擂鉢・甕に関しては，ほとんどが楠井のみで生産されていた可能性が高いと判断する。胎土分析の結果も，擂鉢に関しては楠井領域に重複することを示している。したがって，ここでは擂鉢・甕の分布状況を考える。

第280～287図と第134表で示したように，現段階では擂鉢A類が11遺跡，甕A類が10遺跡で出土している。ともに分布の中心は，善通寺市西部から高松市東部に至る地域であることがわかる。三豊平野では大規模開発に伴う中世遺跡の調査が行われているものの，現在までのところ楠井産土器とみられるものは存在しない。一方，高松市より東方の木田郡や大川郡では，中世集落の調査事例に乏しい。このため楠井産土器の存否については，現段階では明らかにすることができず，今後の検討課題である。

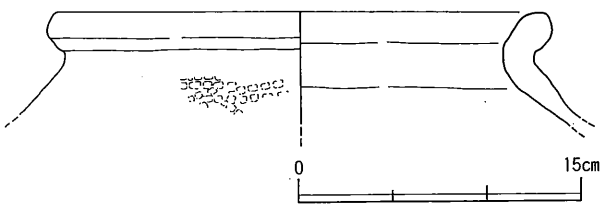
中心的な分布域である丸亀・高松平野での在り方をもう少し検討しておこう。この地域における中世遺跡には，城館や集落・墳墓・寺院・経塚などがあるが，楠井産擂鉢や甕は集落以外の遺跡では出土していない。これには調査の頻度も影響しているかもしれないが，城館での出土事例がないのは，大半の調査事例が戦国期を主体としており，楠井産土器の生産時期よりもやや後出するためだとみられる。また墳墓・経塚での使用例（骨蔵器，経筒・外容器）が指摘できない点は，瓦製経筒などとの競合状況を反映する可能性を

示す重要な現象であるが，類例が少ないために確実なことはいえない。

集落では，建物が散在する中小規模の事例や，大型の区画溝を伴う有力階層の宅地などが発掘調査で検出されているが，楠井産擂鉢・甕はいずれの事例でも出土している。包含層出土の事例も含めるならば，この地域における中世後期前半の集落では，ほぼ例外なく出土しているとみてよかろう。なお，坂出市下川津遺跡ＳＤⅣ０１やＳＸⅣ０１の在地産土器の構成をみると，擂鉢Ａ類や甕Ａ類とともに，異なった形態の擂鉢や甕の存在が指摘できる。擂鉢は大きく折り込まれたように内弯する口縁部をもち，卸し目幅も楠井産擂鉢よりも概して広く粗い。焼成は土師質であり，黄白色を呈することから，一見して楠井産土器とは識別できる。また甕は楠井産の甕Ｃにやや近いが，口頸部がより直立気味に立ち上がり，口径も大きい。また体部には叩き目がみられないものである。正確な数量比はできないが，報告資料による限りは楠井産と非楠井産はほぼ同量に近い状態で拮抗するとみられる。高松市東山崎・水田遺跡でも，楠井産と非楠井産の擂鉢が併存するような状況が読み取れる。この併存が厳密な同時使用を示すものかどうか，なお慎重な検討が必要であるが，楠井産土器と同時期



第278図　下川津遺跡出土の非楠井産擂鉢・甕

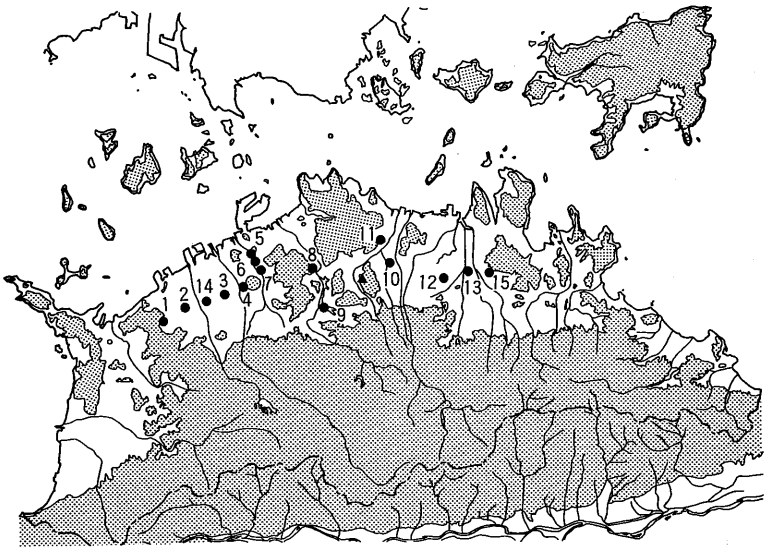


第279図　黒谷川宮ノ前遺跡出土の甕ＡⅡ類

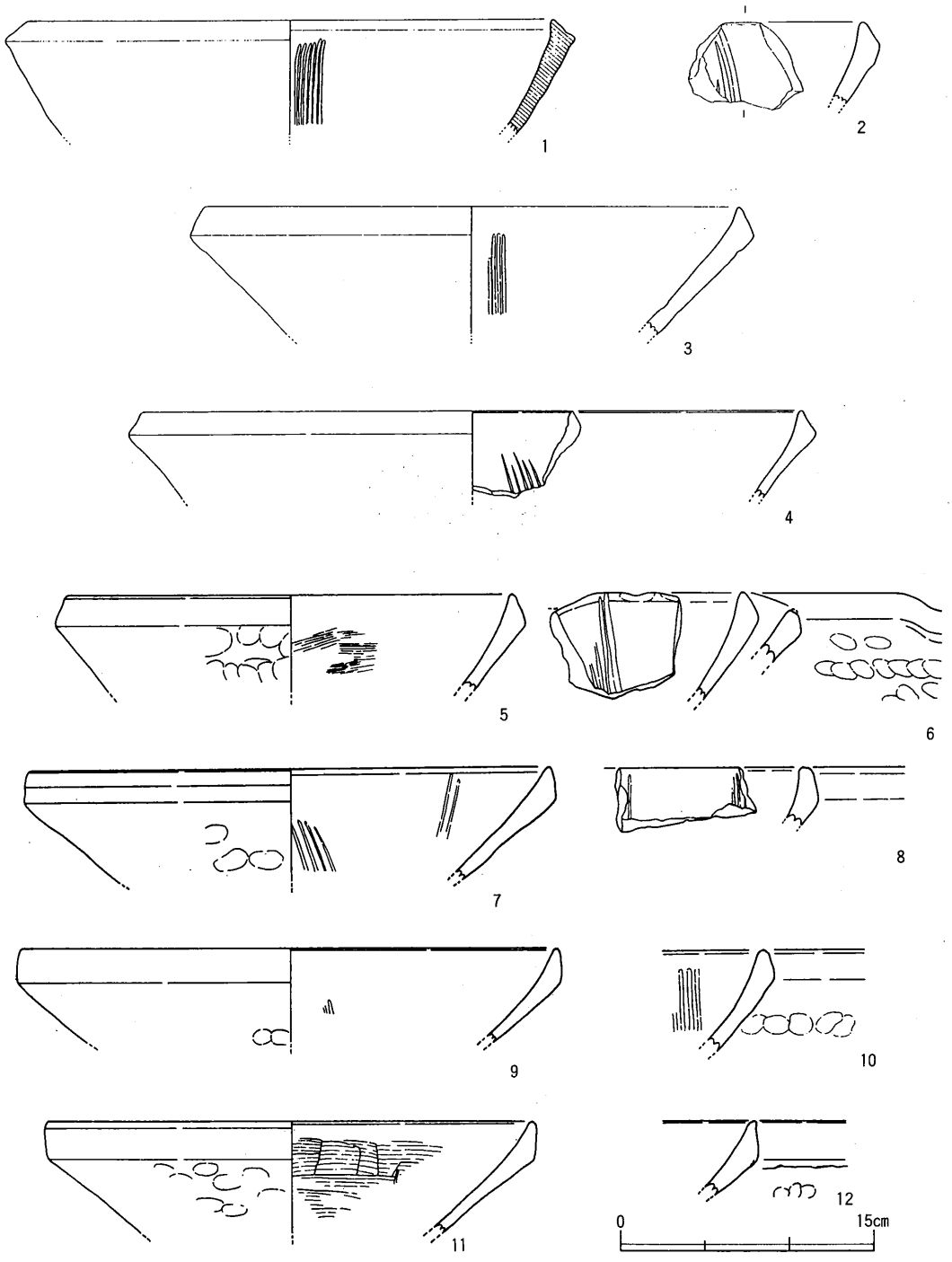
に別系統の在地産土器が存在する可能性は高い。このことが首肯できるならば，楠井産土器の分布域内では形態の異なる複数の生産地製品が競合しながら流通していたことになる。

この他，県外の事例として徳島県宮ノ前遺跡（板野郡板野町）ＳＸ０１において，甕ＡⅡ類が出土しており，楠井産の可能性が指摘されている(1)。この遺跡のある吉野川下流域には，畿内産の瓦質足釜や播磨系の鍋・釜，備前焼椀など，通常あまり遠隔地流通をしない土器が大量にもたらされており，かなり求心力の強い物資集散地域であったことが窺える。楠井産甕もこのような背景でもたらされたと推測されるが，在地の土器組成でどの程度普遍的な存在であるのかが問題となろう。

註(1)　辻佳伸「阿波における15・16世紀の土器様相」『15・16世紀の土器様相』（第６回四国中世土器研究会資料）　1994

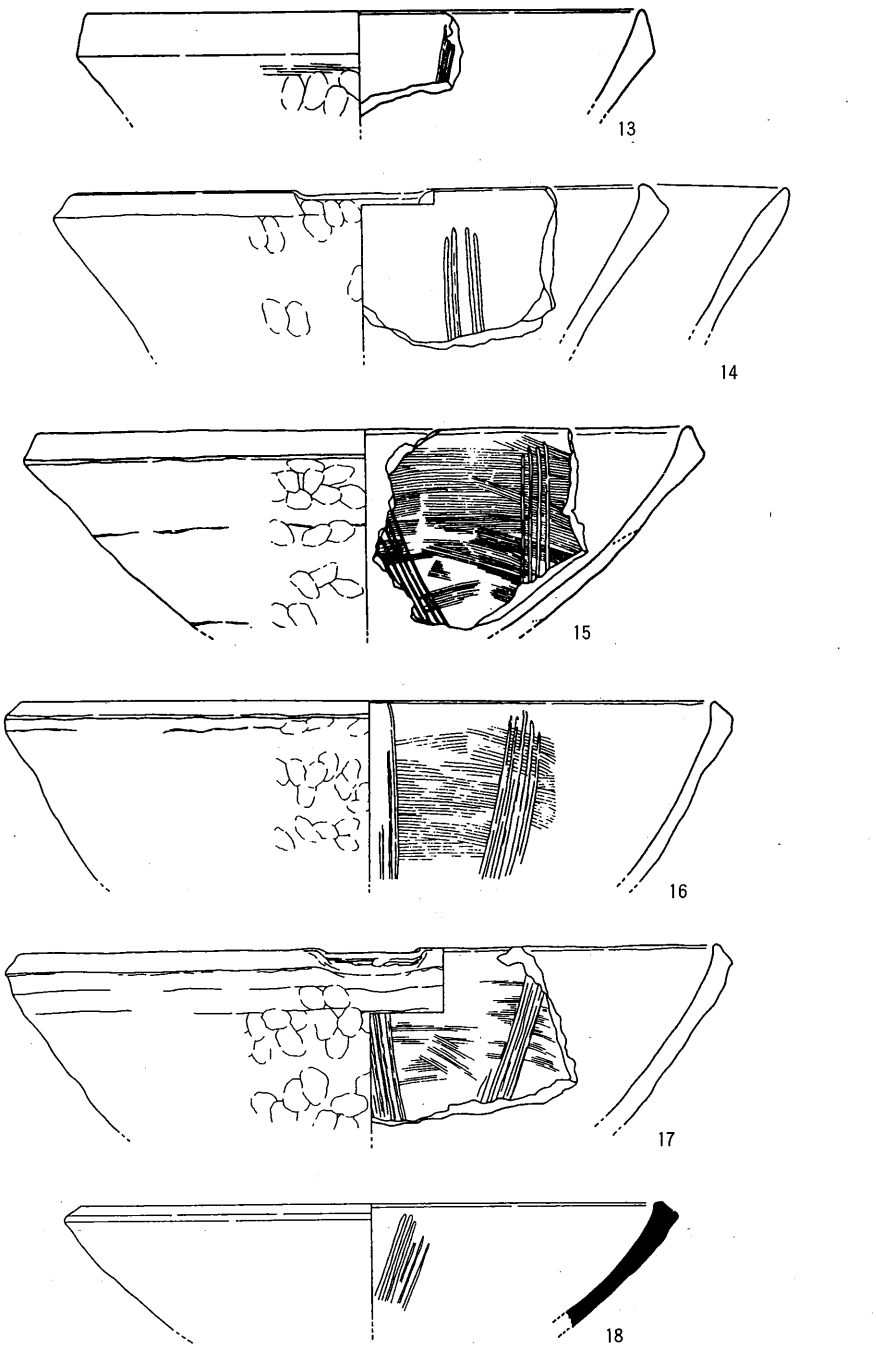


第280図　擂鉢Ａ類・甕Ａ類出土遺跡分布図



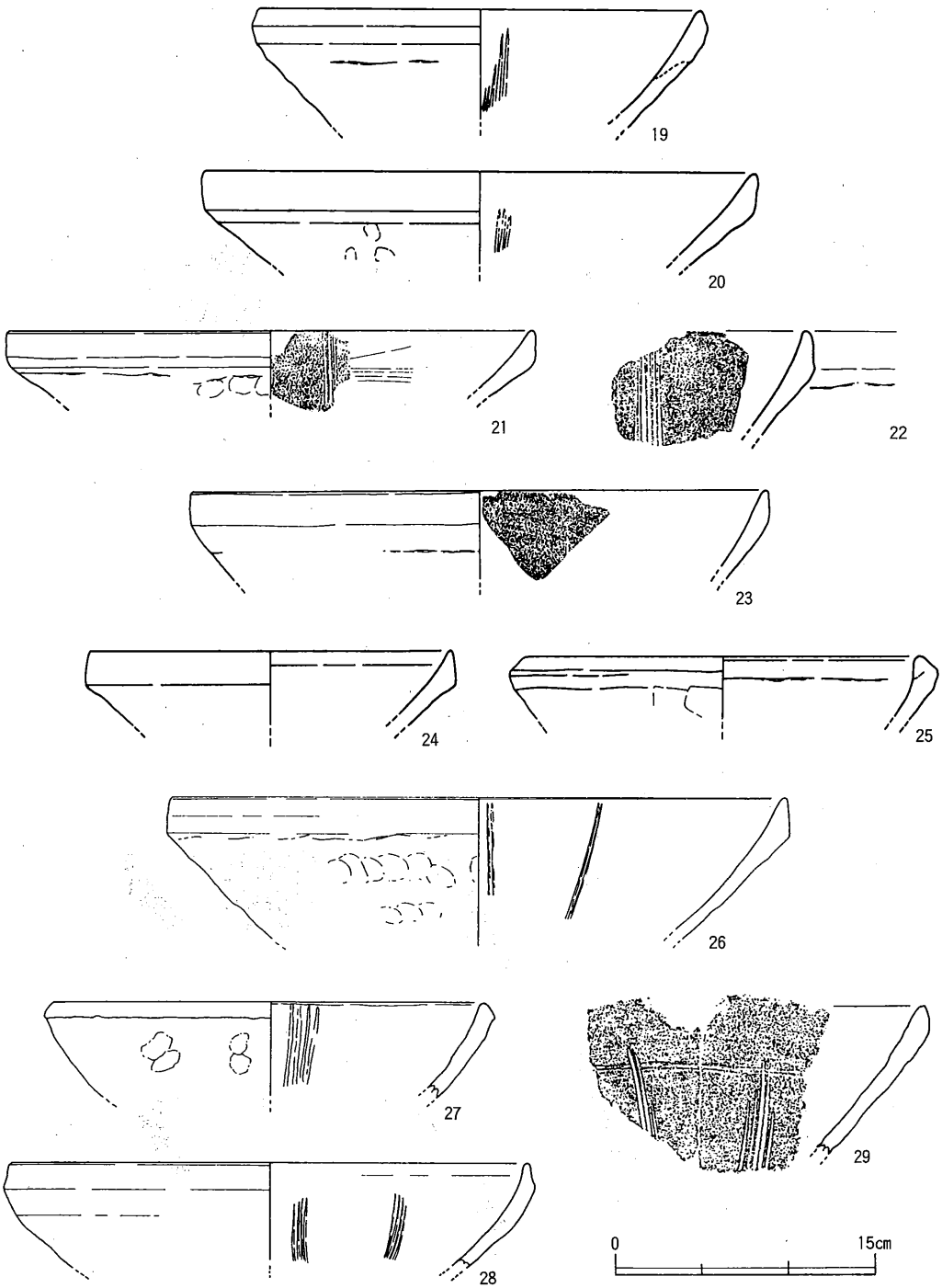
1．矢ノ塚遺跡　　2．3．永井遺跡
4．郡家一里屋遺跡　5～12．飯野東二・瓦礫遺跡

第281図　県内出土の擂鉢Ａ類(1)



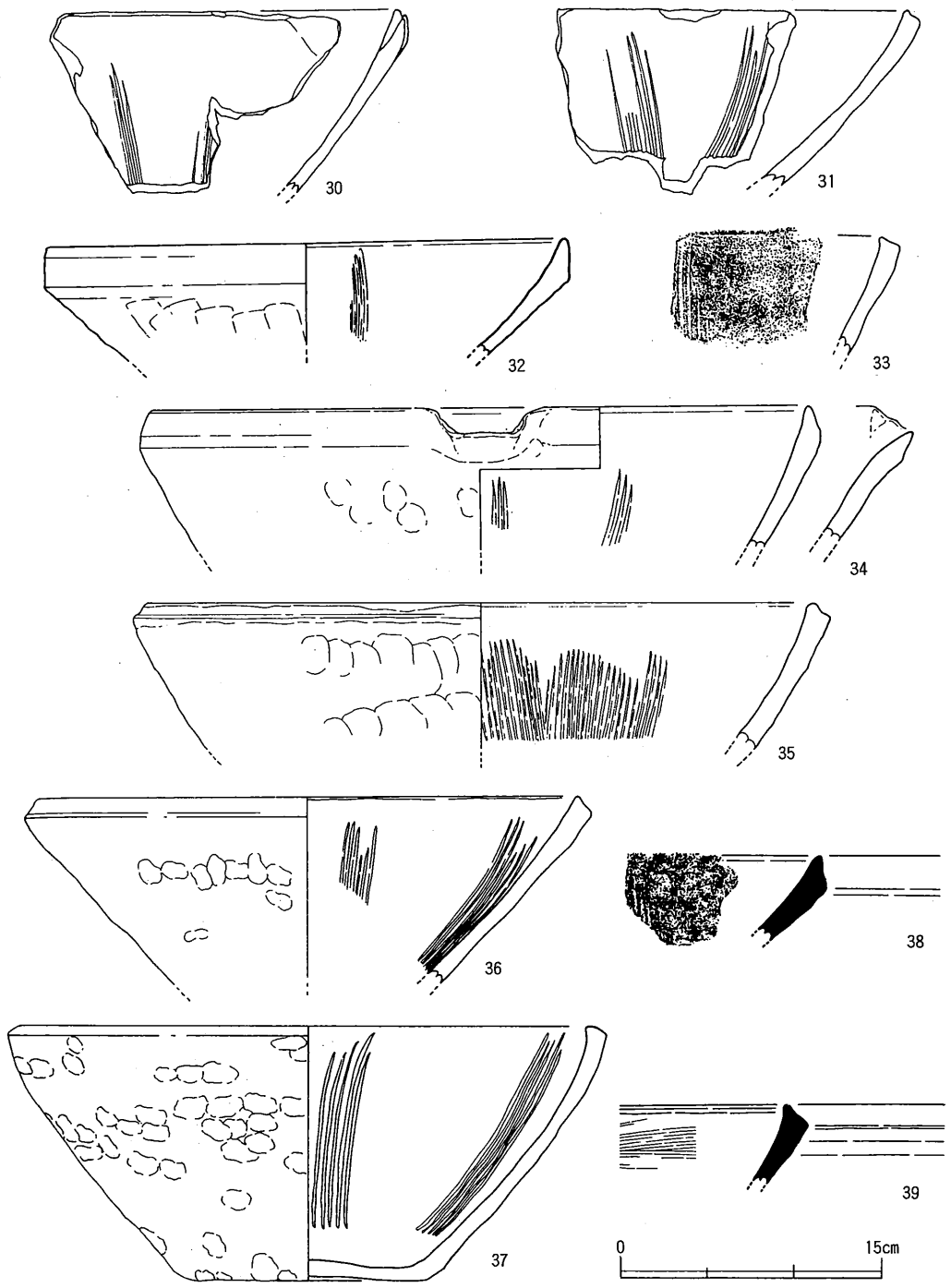
13～17．下川津遺跡
18．川津 二代取遺跡

第282図　県内出土の擂鉢Ａ類(2)



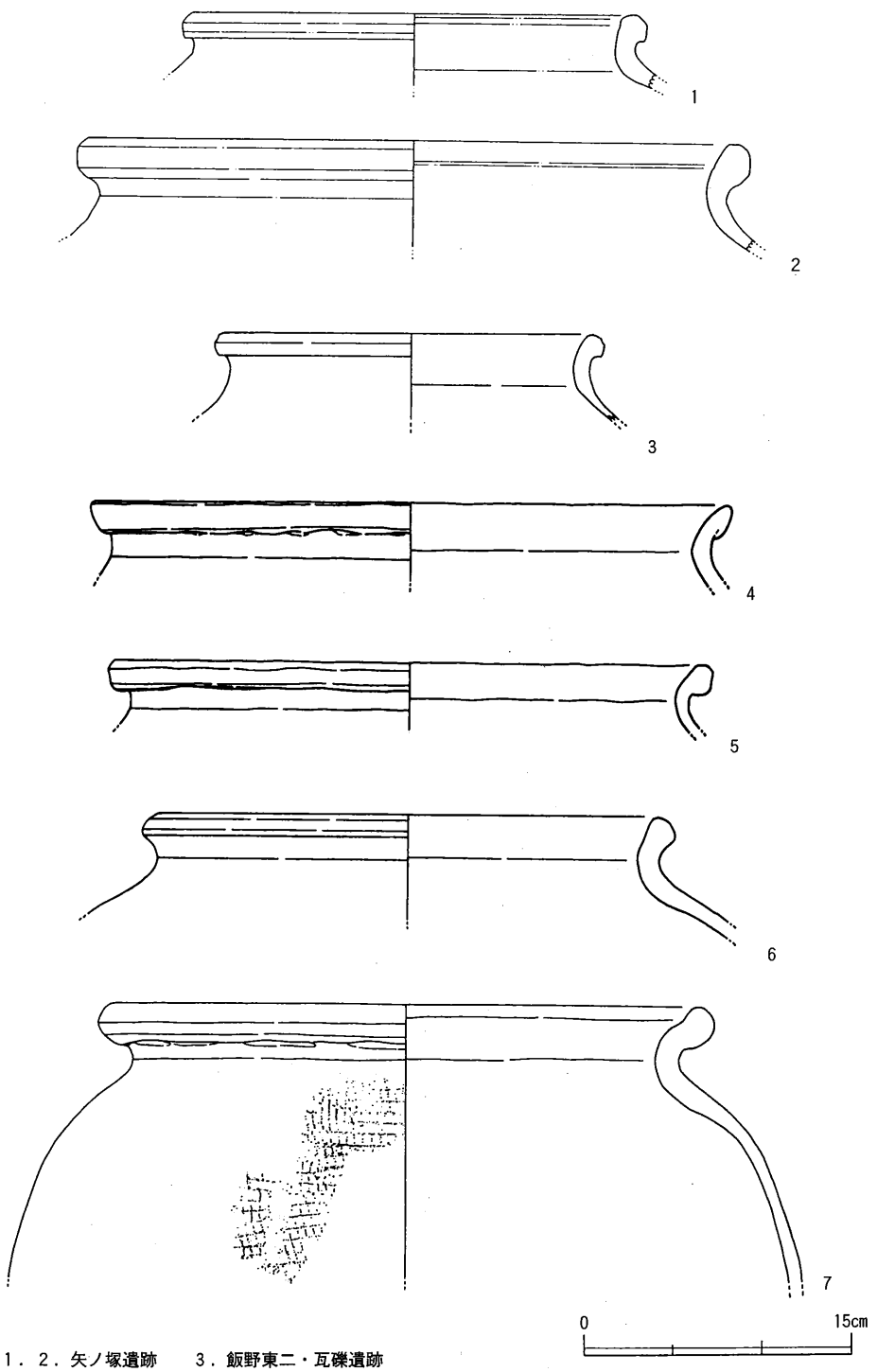
19．20．讃岐国府跡　　21～23．北条池北西遺跡
24．25．神高池北西古墳　　26．空港跡地遺跡　　27～29．東山崎・水田遺跡

第283図　県内出土の擂鉢Ａ類(3)



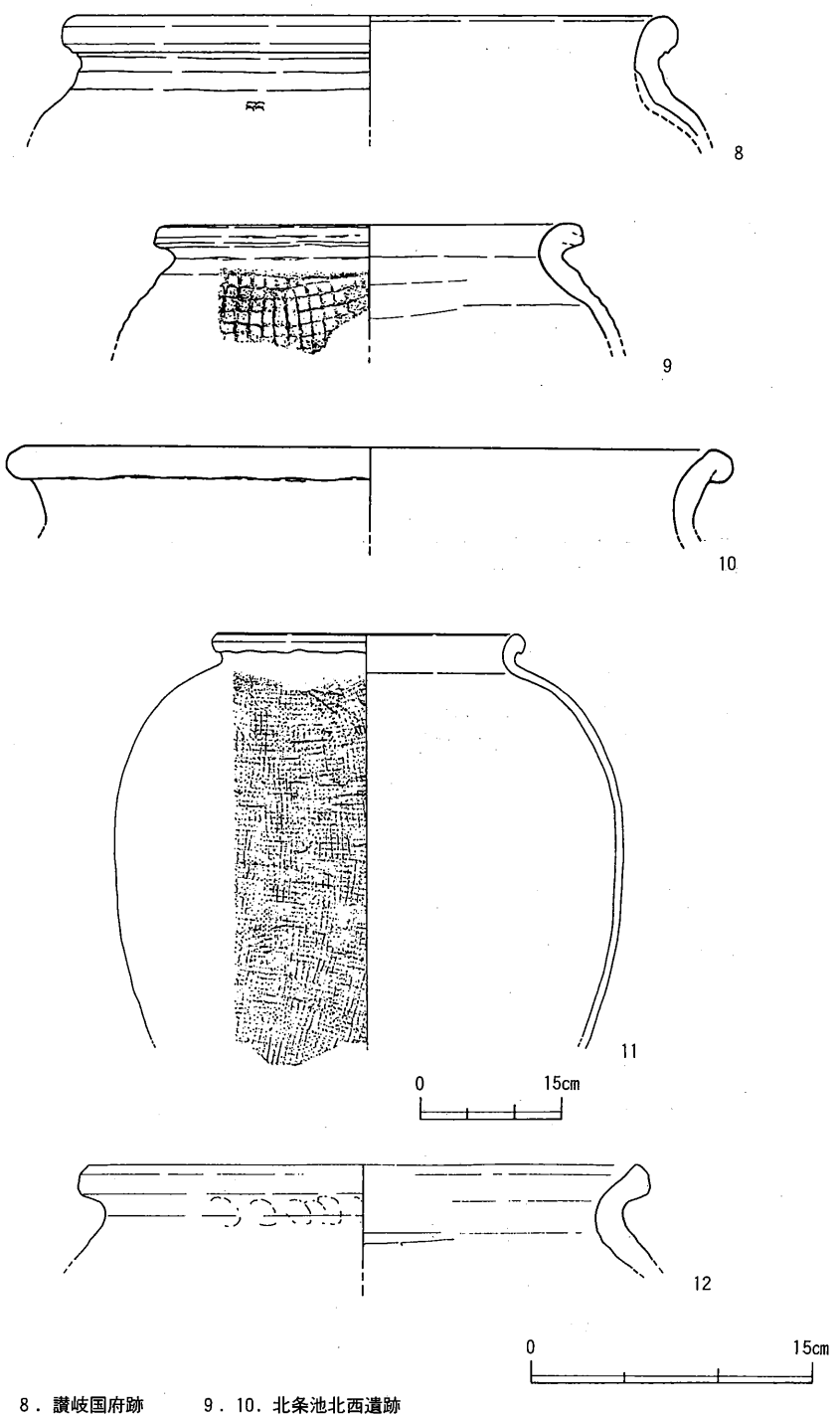
30～37．東山崎・水田遺跡
38．39．龍川四条遺跡Ａ地区　　31・35・37は非楠井産か

第284図　県内出土の擂鉢Ａ類(4)



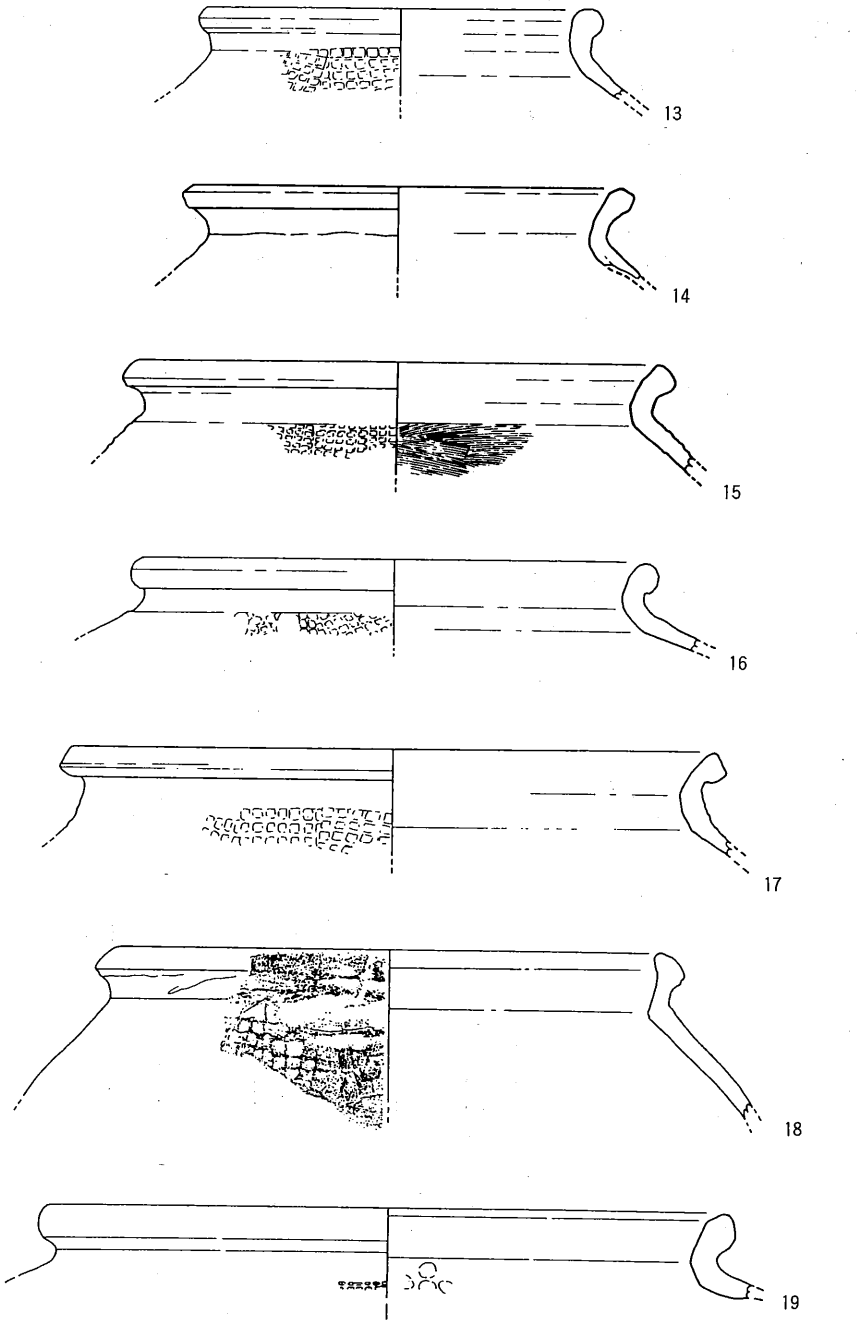
1．2．矢ノ塚遺跡　　3．飯野東二・瓦礫遺跡
4～7．下川津遺跡

第285図　県内出土の甕Ａ類(1)



8．讃岐国府跡　　9．10．北条池北西遺跡
11．薬王寺遺跡　　12．空港跡地遺跡

第286図　県内出土の甕Ａ類(2)



13～18．東山崎・水田遺跡
19．前田東・中村遺跡

第287図　県内出土の甕Ａ類(3)

	遺跡名	所在地	遺構・層位	擂鉢A類	甕A類	文献
1	矢ノ塚	善通寺市吉原町	G-5　包含層 G-6　包含層	○	○ ○	1
2	永井	善通寺市中村町	SB019 包含層	○ ○		2
3	郡家一里屋	丸亀市郡家町	中世包含層	○		3
4	飯野東二・瓦礫	丸亀市飯野町	SD14,SP200 SR01,包含層	○ ○	 ○	4
5	下川津	坂出市川津町	SDⅣ01 SDⅣ03 SXⅣ01	○ ○	○ ○	5
6	川津・二代取	坂出市川津町	SK06	○		6
7	川津川西	坂出市川津町			○	平成2年度ｾﾝﾀｰ調査
8	讃岐国府跡	坂出市府中町	SD7805 SX01	○	 ○	
9	北条池北西	綾歌郡綾南町	表採	○	○	
10	薬王寺	高松市壇紙町	SE03		○	7
11	神高池北西古墳	高松市鬼無町	表採	○		
12	空港跡地	高松市林町	 ○		○ ○	平成3年度ｾﾝﾀｰ調査 平成6年度ｾﾝﾀｰ調査(8)
13	東山崎・水田	高松市東山崎町	C-1面SD05 C-1面SD20 C-1面SD21 D-1面SD01上層 D-1面SD11 E-1面SE01上層 E-1面SE02上層 E-1面SD04 E-1面SD05 E-1面SD09	○ ○ ○ ○ ○ ○	 ○ ○ ○ ○ ○ ○	9
14	龍川四条A地区	善通寺市原田町 木徳町	西部地区包含層 東部地区包含層	○ ○		10
15	前田東・中村	高松市前田東町	D区　SD18		○	11

第136表　擂鉢Ａ類・甕Ａ類出土地名表

報告文献（実測図掲載分のみ）

(1) 「矢ノ塚遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第3冊　香川県教育委員会　1987

(2) 「永井遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第9冊　（財）香川県埋蔵文化財調査センター・香川県教育委員会　1990

(3) 「郡家一里屋遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第12冊　（財）香川県埋蔵文化財調査センター・香川県教育委員会　1993

(4) 「飯野東二・瓦礫遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第20冊　㈶香川県埋蔵文化財調査センター・香川県教育委員会　1996刊行予定

(5) 「下川津遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』Ⅶ　（財）香川県埋蔵文化財調査センター・香川県教育委員会　1990

(6) 「川津二代取遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第16冊　（財）香川県埋蔵文化財調査センター・香川県教育委員会　1995

(7) 「正箱遺跡・薬王寺遺跡」『県道山崎御厩線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（財）香川県埋蔵文化財調査センター・香川県教育委員会　1994

(8) 『空港跡地遺跡発掘調査概報』平成6年度　（財）香川県埋蔵文化財調査センター・香川県教育委員会　1995

(9) 「東山崎・水田遺跡」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第1冊　（財）香川県埋蔵文化財調査センター・香川県教育委員会　1992

(10) 「龍川四条遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第15冊　（財）香川県埋蔵文化財調査センター・香川県教育委員会　1995

(11) 「前田東・中村遺跡」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第3冊　（財）香川県埋蔵文化財調査センター・香川県教育委員会　1995

第4節　国分寺楠井遺跡における土器生産

1. 操業形態と生産組織

(1) 中世遺構の変遷（第288図）

第2節で提示した編年案に沿って，窯跡・土器溜り・掘立柱建物などの変遷をまとめておきたい。遺構の所属時期は，埋土中から出土した遺物の時期によって想定されるが，埋没の時期がただちに遺構の時期を示すとは限らない。しかし楠井では，遺構の大半は斜面上に位置しており，花崗岩の風化土が短期間で堆積することが埋没状況からも窺える。このため，遺物の時期幅を大きく超える遺構の継続時期は考えられないということを前提にして，議論を進めたい。

［第Ⅰ期］

この時期にあたるのは，土器溜り1（第Ⅲ層）のみである。この遺構では，上方路線外に広がる平坦地状の緩斜面で生産された土器の失敗品や，生活に使用された土器が混在したかたちで廃棄されている。第Ⅲ層出土鍋釜類の使用痕（煤付着）の出現頻度は極めて高く，多くは工人の使用したものであると判断できる。したがって，調査区内における生産活動はまだなく，上方緩斜面での操業が想定される。

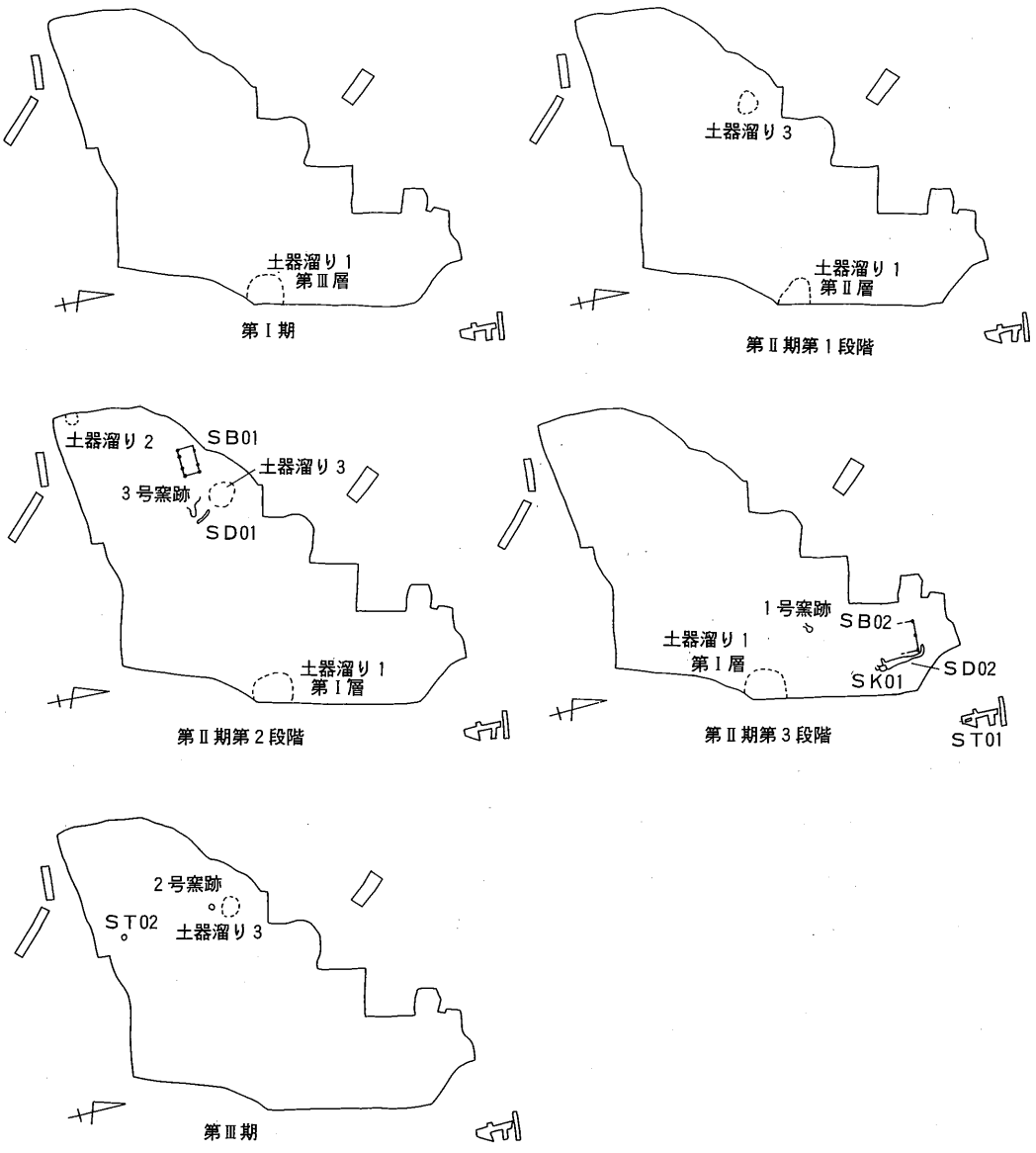
［第Ⅱ期第1段階］

この時期も土器溜り1（第Ⅱ層）で，土器の廃棄が認められる。依然直接的な生産遺構などは確認できず，窯場の主体が上方緩斜面にあることが想定できるが，土器溜り3においても少量の遺物が認められ，しかも擂鉢ＡⅠ類の手法に土器溜り1との差異が指摘できることから，付近で生産が開始された可能性もある。土器溜り3の東約15mには，焼土・灰溜りがあり，簡易な構造をもつ窯体構造を考慮すると，削平された窯跡の存在を想定することも不当ではあるまい。

［第Ⅱ期第2段階］

3号窯跡がこの時期の操業であり，土器溜り1～3に土器の廃棄が認められる。またＢ－3・Ｃ－3区付近の掘立柱建物・ピット群も，この頃から形成されるものとみられる。土器溜り1の廃棄遺物量はこの段階から急増し，第Ⅰａ層の形成が始まる。このことから調査区外の上方緩斜面においても，操業規模が拡大傾向にあることが推測される。また土器溜り2・3では，擂鉢ＡⅢ類の細部形態が共通し，また卸し目原体を3号窯跡窯体内遺

物と共有することから，ともに３号窯跡操業時の遺物を主体としていることがわかる。恐らく土器溜り２は，操業時に工人が生活具として使用した後に投棄されたものが堆積したのであろう。また土器溜り３の遺物は使用痕の出現頻度が低く，３号窯跡の操業に伴う失敗品や転用された窯道具（詰め具や閉塞時の覆い）で構成され，２号窯跡構築（第Ⅲ期）に伴う整地によって攪拌・再堆積したものとみられる。



第288図　国分寺楠井遺跡遺構変遷図

［第Ⅱ期第3段階］

1号窯跡がこの時期の操業であり，土器溜り1に大量の土器の廃棄が認められる。1号窯跡は，谷底に接した湧水のある箇所に構築されているが，焼成部前面の壁面が補修されており，この段階の全継続時間には至らないものの，一定期間操業が維持されたようである。この窯跡の背後にあたる北側尾根上では，古墳を破壊して掘立柱建物（ＳＢ０２）が建てられる。ＳＢ０２に伴う雨落ち溝（ＳＤ０２）からは，この段階の擂鉢ＡⅢ類が出土している。また，この溝の埋没後に掘られた土坑（ＳＫ０１）も同時期であり，ピットの分布状況からみて何度か建て替えが行われたとみられる。恐らく1号窯跡に伴う工房的な性格をもつ遺構群であろう。

土器溜り1第Ｉａ層では，この時期の遺物が最も多く，上方緩斜面から一括投棄されたような状態の土器層も一部で形成される。上方緩斜面における操業が最も活発化したと推測できる。

この他に，遺物が細片のために時期を特定できないが，ＳＢ０２背後（北東）で検出された土壙墓も，埋土から足釜片が出土していることから，この段階にあたる可能性が考えられる。

［第Ⅲ期］

既に廃窯していた3号窯跡を破壊・整地して，2号窯跡が構築される。土器溜り1の遺物量は極端に減少しており，上方緩斜面での生産が急速に縮小したか，停止したとみられる。この他，2号窯跡に隣接して南側尾根に火葬施設（ＳＴ０２）が作られる。

(2) 生産組織と規模

上記した遺構の変遷より，第Ⅱ期第2段階から調査区内と調査区外の上方緩斜面の2箇所において，土器生産が継続的に行われたことが想定できる。こうした状況は，第Ⅱ期第1段階にまで遡る可能性が高く，楠井の主要4器種が出揃い大量生産に入った時点で，生産の在り方に変化が生じたことが推測されるのである。調査区西側（下方）の北側尾根や南側尾根の延長部でも，耕作に伴って多量の土器が出土しているといい，採集された若干の擂鉢や足釜の形態から第Ⅱ期第1段階以降の所産とみられる。発掘調査を経ていないために詳細は不明であるが，このことは遺跡全体の動向の中でも第Ⅱ期が生産拡大期にあたることを漠然と示唆する。

土器溜り1に反映される上方緩斜面における単位と，3号窯跡付近で生産を行う単位が

異なる製作者で構成されていることは，各地点（ことに土器溜り１）における土器型式の連続性からも窺えるが，製作された土器に表れる細部の違いが，このことをより具体的に示している。それは，①第Ⅱ期第１段階における擂鉢ＡⅠ類の口縁部形態と使用工具（ハケ目原体）の違い，②第Ⅱ期第２段階における足釜ＢⅢ類の鍔部押圧に伴う爪形状圧痕の出現頻度の違い，③同段階における擂鉢の卸し目原体の違い，などに表出されている。

では，それぞれの単位の規模はどの程度であっただろうか。窯の規模から想定される１回の生産量は第１節２(2)で述べたように，足釜で20～32個体と推定されるが，これは１人で製作したとしてもせいぜい２，３日分にしかならないだろう。また，窯１基に不随する掘立柱建物が１棟程度とみられることも併せ考えると，１単位は数人程度で構成されていたとしてよかろう。調査区内と上方緩斜面での状況を考慮すると，第Ⅱ期の生産拡大は窯の大型化などの集約化や生産工程の協業などの変化を伴わない，単位数の増加によって達成されたとみられる。これは，近世御厩の土器生産でも指摘できる現象である。

ところで楠井における窯場の立地は，緩斜面が存在するとはいえ通常の集落とは大きく異なった山間部であり，森隆氏も指摘するように，一般集落内に工房が存在する状況ではない(1)。これは，平井遺跡でみられたような瓦器椀の生産形態と著しく異なる点である。したがって，製作集団が窯に近接した掘立柱建物で居住（作業）するのは，基本的には土器生産を行う時に限定されると考えられる。問題は生産活動が年間を通じて行われたのか，それとも季節的な農閑期に行われたのか，ということにある。土器溜り出土土器の組成をみると，土師質の杯皿類が極めて少ないことが指摘できるが，これは供膳器種の大量消費が一般的である中世集落の一般的な在り方とは明確に異なった現象である。つまりここでは煮炊きは行われても，それを土器皿や杯に盛り付けて供されるという行為がほとんどないということであり，継続的で安定した生活が行われなかったことを示している。間接的な状況証拠ではあるが，このことから年間を通じた操業は想定し難い。技術的な専門性は有しているものの，土器生産のみに立脚したような専業性を強調することは差し控えたい。

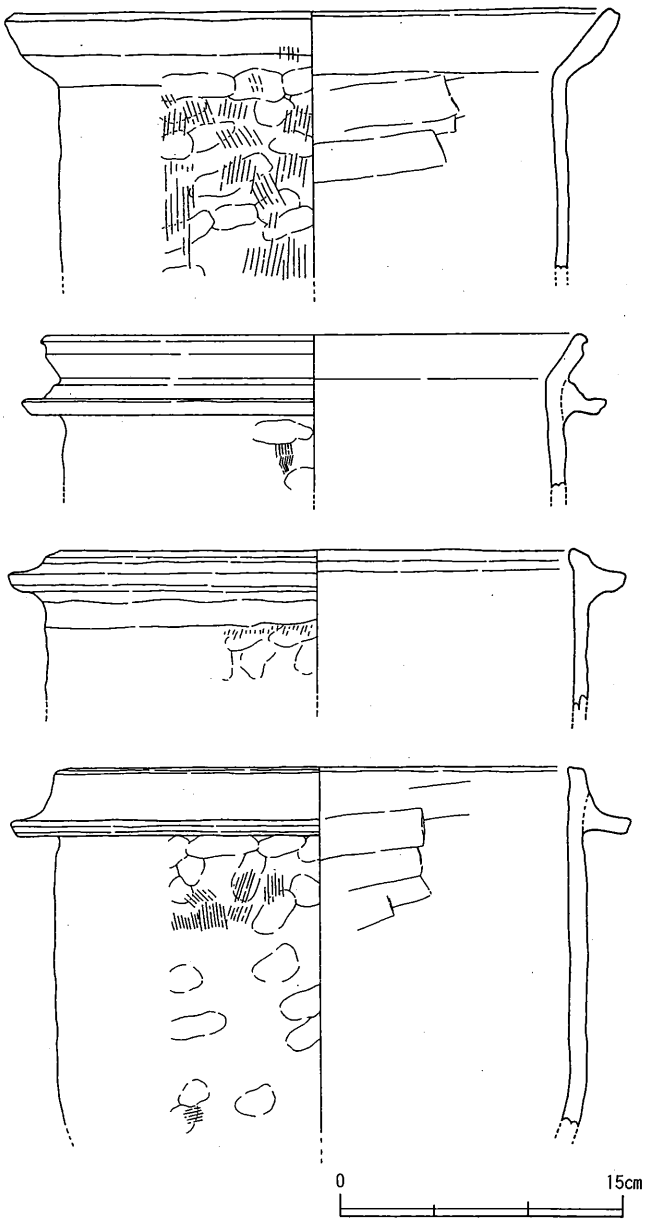
2. 系譜

上記してきたことから明らかなように，楠井の土器生産は当初（13世紀代）土師質鍋釜類の専焼というかたちで開始され，その後14世紀代には擂鉢や甕・壺という，それまで須恵器系の窯場で生産されていた器種を加えることとなり，土師器系と須恵器系の器種・焼成が混在したかたちで成立した。また鍋釜や甕に叩き成形を行い，擂鉢や甕をロクロ上で

成形するが，一方で擂鉢内面に板ナデやハケ目調整を行い，ロクロの回転運動を駆使しているとはいい難いなど，技法的にも土師器系と須恵器系の要素が混在する。さらに窯体構造についても，先行する煙管状窯からの単系的な発展ではなく，在地の瓦（およびそれに不随する土器）生産との関わりを前提としているとみられたり，築窯技術において炭窯との関わりが指摘できるなど，複雑な様相を呈している。

このような須恵器系と土師器系双方の形態・技術の混在は，楠井のみに指摘できる現象ではなく，具体的な組合せや程度に違いはあっても，畿内以外の西日本各地における在地窯で広く認められるようである。このことは，既に荻野繁春氏や吉岡康暢氏が指摘しており(2)，生産技術系列の類型化の中でどのように位置付けられるかが問題となる。

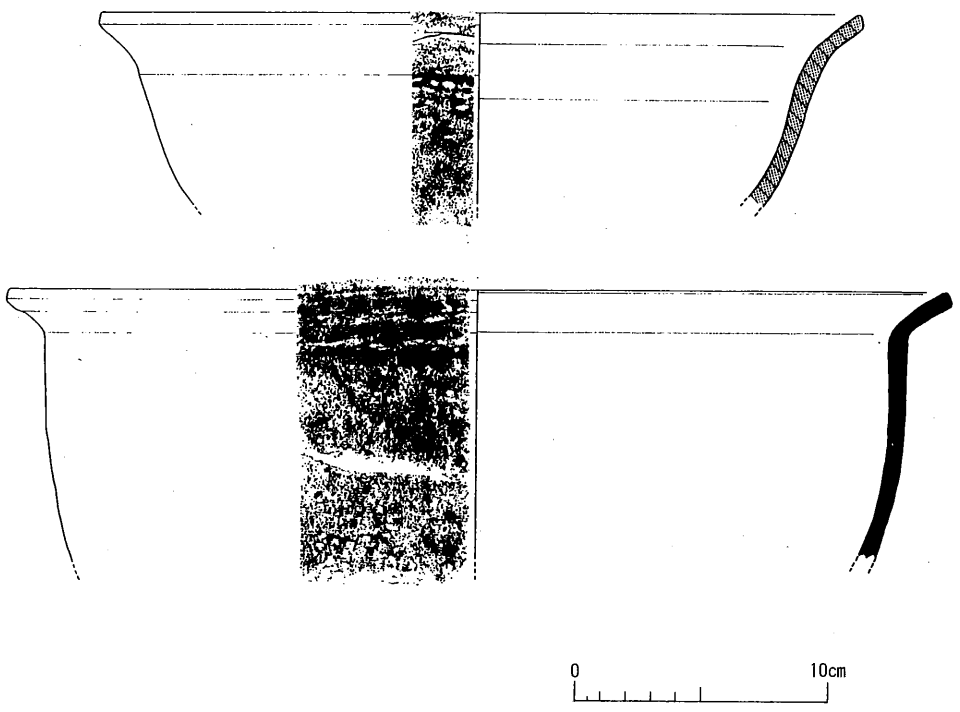
まず，第Ⅰ期すなわち13世紀代の煮沸器種生産の成立を，どのような流れで捉えることができるだろうか。これに先行する土師質の煮沸器種は，第289図で示したように3形態存在する(3)。すなわち，深い体部と外反する口縁部をもつ甕(鍋)



第289図　11世紀後半～12世紀前半頃の煮沸器種

と，この甕の頸部に鍔を貼付した羽釜，また直立する口縁部と長い鍔をもつ厚手の羽釜の3者である。このうち甕と前者の羽釜は，古墳時代後期末に成立する形態の系譜を引くものとみられ，後者の羽釜は摂津C型と呼称される畿内系の羽釜が在地化したものである。いずれも体部や底部の外面にハケ目調整を行う，伝統的な土師器としての特徴をもつ。12世紀代までは，こうした伝統的な煮沸器種によって占められる。ところが十瓶山窯跡群の窯場である西村遺跡では，12世紀後葉頃に叩き成形を行う鍋の存在が認められる(4)（第290図）。注目されるのは，叩き目が底部や体部のみならず，口縁部にも認められる点である。口縁部の叩きは，外反した口縁部を作り出す際に行われたものとみられ，同時期の須恵器甕の口頸部成形方法と一致する。焼成が須恵質を呈するものも多いことと併せ，西村遺跡の鍋は十瓶山窯の須恵器工人によって製作・焼成されたと評価できよう。

須恵器生産地において，須恵器の技術で土師器系の煮沸器種を製作する動きは，讃岐のみに認められるわけではなく，むしろ12～13世紀の西日本ではかなり普遍的な在り方とさえいえる。事例を挙げるならば，東播系須恵器生産地での羽釜や鍋の生産(5)，亀山窯における鍋の生産(6)，樺万丈窯（熊本県荒尾市）における鍋釜の生産(7)などがそれである。



第290図　西村遺跡における12世紀頃の鍋

これらの地域では，須恵器生産地自体が大きく変質する一環で生産が継続する場合（亀山窯・樺万丈窯）と，当初は須恵器の窯場で生産されるが，その後は鍋釜のみ別の生産体制をとるとみられる場合（播磨地域。防長地域もこれに該当するか）がある。西村遺跡で須恵質鍋の生産が量産化へと傾斜しなかったのは，後者のパターンをとったからではなかったか。つまり，須恵器系の製作技術が定着する過程で鍋釜専焼の生産地が成立して，十瓶山窯跡群から分離したのではなかろうか。13世紀代の国分寺楠井遺跡の成立は，こうした動きを前提に理解できるのである。

なお，楠井産足釜ＡⅠ・ＢⅠ類と鍋ＡⅠ類の直接的な祖型については，鍋ＡⅠ類が先行する土師器甕であるとみられ，足釜が鉄製足釜（湯釜）か畿内の瓦質足釜であると考えられる。

次いで第Ⅱ期，すなわち14世紀代における擂鉢・甕の加わった量産体制段階の系譜について，考えてみたい。この時期に注目されるのは，十瓶山窯跡群の廃絶である。十瓶山窯では13世紀代をもって窖窯での甕生産は終焉し，また在地流通品として量産された椀も消滅している。そして14世紀前葉頃には，わずかに杯・皿や捏鉢を主体とした生産が認められるに過ぎず，遅くとも14世紀中葉にはその生産も停止する(8)。楠井の第Ⅱ期には，こうした在地の土器生産体制の変動に即応するかたちで，擂鉢・甕の量産が始まるのである。しかし，これらの器種が単に十瓶山窯製品の代替品にとどまるものでないことも明らかである。すなわち，楠井産擂鉢は十瓶山窯産捏鉢にはみられなかった卸し目を施し，また形態もシャープに外傾する端面をもつなど，むしろ全体として同時期の備前焼擂鉢に近似した印象を受ける。甕においても体部の成形方法は十瓶山窯製品に近いものの，玉縁状に肥厚したようにみえる口縁部は，やはり備前焼甕を意識したような形態である。東播系須恵器や常滑焼の大量流通に押されながらも，十瓶山窯産捏鉢や甕は独自の形態・品質をもちながらこれらと競合していたが，楠井産土器の場合にはより品質が優れた国産陶器の形態を模倣することで，品質（価格）の重層性の一端を担うことになったといえよう。

楠井産土器の系譜を明確なかたちで提示するには，なお未解決な問題が多く残されており，ここで果すことはできない。しかし十瓶山窯跡群で典型的に表れるような，西日本を包括する須恵器と土師器の活発な技術交流が背景にあることは確かであり，そのような文脈の中で上記してきた個々の要素を整合的に示す作業が望まれる。

註(1) 森隆「中世土器の焼成窯」『中近世土器の基礎研究』X　日本中世土器研究会　1994

(2) 荻野繁春「中世の須恵器を議論するにあたって――分類を中心に――」『福井考古学会会誌』創刊号　1983

吉岡康暢「中世須恵器の地域的展開」『中世須恵器の研究』吉川弘文館　1994

(3) 「川津元結木遺跡」『中小河川大束川改修工事（津ノ郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（財）香川県埋蔵文化財調査センター・香川県教育委員会　1992　なお第289図は，上記文献から引用・改変した。

(4) 「西村遺跡Ⅲ」『国道32号綾南バイパス建設工事にともなう発掘調査』香川県教育委員会　1982

第290図は，上記文献から引用・改変した。

(5) 山仲進「東播系中世須恵器の分類と編年」『神出1986』妙見山麓遺跡調査会　1989

(6) 「亀山遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』3　岡山県教育委員会　1988

(7) 荻野繁春「西日本における中世須恵器系陶器の生産資料と編年」『福井考古学会会誌』第3号　1985

(8) 佐藤竜馬「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論叢』1993

報告書抄録

ふりがな	こくぶんじくすいいせき
書名	国分寺楠井遺跡
副書名	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	18
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	佐藤竜馬
編集機関	財団法人　香川県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒761　香川県坂出市府中町南谷5004－1　TEL 0877－48－2191
発行機関名	香川県教育委員会・財団法人　香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
発行年月日	1995年　月　日

総頁数	目次等	本文	観察表	図版	写真枚数	挿図枚数	付図枚数
509頁	19頁	393頁	136枚	97頁	258枚	290枚	2枚

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町	コード 遺跡	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
国分寺楠井 (こくぶんじくすい)	香川県綾歌郡 (かがわけんあやうたぐん) 国分寺町福家 (こくぶんじちょうふけ) 字楠井 (あざくすい)			34度 17分 5秒	133度 58分 30秒	19900411～ 19901002	4,400	道路（四国横断道）建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
国分寺楠井	古墳	古墳時代後期	横穴式石室　1 周溝　1	鉄鏃・鉄刀・銀環 須恵器・土師器	
	生産遺跡	鎌倉時代後半～室町時代	窯跡　3 土器溜り　3 掘立柱建物　2 溝　2 土坑　2 土壙墓　1 焼土坑　1	瓦質擂鉢 土師質足釜 鍋 甕捏鉢 堺近郊産瓦質甕 備前焼 亀山焼 東播系須恵器	

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
第十八冊

国分寺楠井遺跡

本　文　編

平成７年10月31日発行
編　集　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
香川県坂出市府中町字南谷5001-4
電話　0877-48-2191(代表)
発　行　香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団
印　刷　株式会社　美巧社

四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第十八冊

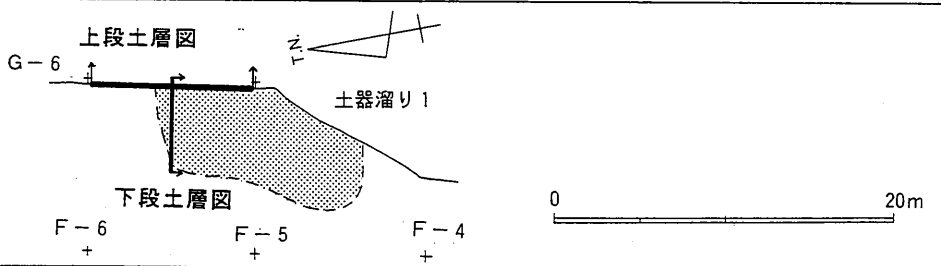
国分寺楠井遺跡

写真図版編

1995.10

香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団

四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第十八冊　国分寺楠井遺跡　本文編　正誤表

頁	行	誤	正
18 第6表	123の時代欄	近世 123 | 国分寺楠井遺跡 | 国分寺町福家楠井 | 近世	中世 123 | 国分寺楠井遺跡 | 国分寺町福家楠井 | 中世
49 ～50 第28図		（第28図に追加） 	
78	下から3行目	3号窯跡灰原	土器溜り1第Ⅰa層
185	15	675は底部が完存している。	677は底部が完存している。
277	9	上層・下層の各出土遺物に分けて図示した。	上層（第21図第4層）・下層（第21図第6層）の各出土遺物に分けて図示した。
282	3	また，既に第4節1で述べたように，	また，既に第3節1で述べたように，
331 第258図	挿図凡例	130・131　神高池北西古墳遺跡	（削除）
350 第133表	8	溝谷3号 溝谷3号 | 〃　〃　若狭野町	構谷3号窯跡 構谷3号窯跡 | 〃　〃　若狭野町
376	13（註(1)）		（追加）第279図は，上記文献から引用・改変した。
巻末	報告書抄録	発行年月日 | 1995年　月　日	発行年月日 | 1995年10月31日

四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第十八冊

国分寺楠井遺跡

写真図版編

1995.10

香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団

図版目次

図版１　１　調査区南西部と周辺地形（南東から）
　　２　調査区中央部・北部（南から）
図版２　１　１号窯跡 上面検出状況（南西から）
　　２　１号窯跡 窯体内下位遺物出土状況（南西から）
図版３　１　１号窯跡 前庭部灰層検出状況（南西から）
　　２　１号窯跡 窯体（南西から）
図版４　１　１号窯跡 窯体（真上から）
　　２　１号窯跡 壁面補修状況（西から）
図版５　１　１号窯跡 前庭部礫検出状況(南西から)
　　２　１号窯跡 前庭部礫検出状況（西から）
図版６　１　１号窯跡 窯体たち割り状況（西から）
　　２　２号窯跡 上面検出状況（西から）
図版７　１　２号窯跡 窯壁崩落状況（西から）
　　２　２号窯跡 窯体内遺物出土状況（南東から）
図版８　１　２号窯跡 窯体（南東から）
　　２　２号窯跡 窯体（南西から）
図版９　１　２号窯跡床面 擂鉢（i21）出土状況（南東から）
　　２　２号窯跡 掘り方内石組み検出状況（南西から）
図版10　１　２号窯跡 掘り方内石組み検出状況（東から）
　　２　２号窯跡 掘り方完掘状況（南西から）
図版11　１　３号窯跡 窯体内遺物出土状況(西から)
　　２　３号窯跡 窯体完掘状況（西から）
図版12　１　３号窯跡掘り方・前庭部，ＳＤ０１検出状況（西から）
　　２　２号窯跡掘り方（左）と３号窯跡（右）（西から）
図版13　１　土器溜り１ 第Ⅰａ層上面遺物出土状況（北から）
　　２　土器溜り１ 第Ⅰａ層遺物出土状況（北から）
図版14　１　土器溜り１ 第Ⅰａ層遺物出土状況（北西から）
　　２　土器溜り１ 第Ⅱ層上面礫・焼土溜り検出状況（北西から）
図版15　１　土器溜り１ 第Ⅰａ層土器集中部（北から）
　　２　土器溜り１ 南北方向土層（北西から）
図版16　１　土器溜り１ 東西方向土層（北東から）
　　２　土器溜り２ 遺物出土状況（北東から）
図版17　１　土器溜り２ 遺物出土状況（北東から）
　　２　土器溜り２ 下面遺物出土状況（北東から）
図版18　１　土器溜り３ 全景（北から）
　　２　ＳＢ０１とピット群（南から）
図版19　１　ＳＢ０１とピット群（北から）
　　２　ＳＢ０２とＳＤ０２（西から）
図版20　１　ＳＫ０１・０２（西から）
　　２　ＳＴ０２土層堆積状況（北から）
図版21　１　ＳＴ０２完掘状況（北から）
　　２　ＳＴ０２完掘状況（真上から）
図版22　１　北側尾根トレンチとＳＴ０１（南から）
　　２　ＳＴ０１（南から）
図版23　１　ＳＴ０１ 骨片出土状況（西から）
　　２　楠井１号墳全景（南西から）
図版24　１　楠井１号墳 石室内遺物出土状況（南西から）
　　２　楠井１号墳 銀環出土状況（西から）
図版25　１　楠井１号墳 石室内完掘状況(南西から)
　　２　楠井１号墳 石室掘り方完掘状況（南西から）
図版26　１　国分寺楠井遺跡調査区空中写真
　　２　楠井１号墳空中写真
図版27　１　楠井１号墳 玄室内出土遺物
　　２　楠井１号墳 周溝土器群Ⅱ出土遺物(1)
図版28　　楠井１号墳 周溝土器群Ⅱ出土遺物(2)
図版29　　楠井１号墳 周溝土器群Ⅱ出土遺物(3)
図版30　１　楠井１号墳 周溝土器群Ⅱ出土遺物(4)
　　包含層出土古墳時代須恵器(1)
　　２　包含層出土古墳時代須恵器(2)
図版31　　１号窯跡窯体内埋土出土遺物(1)
図版32　１　１号窯跡窯体内埋土出土遺物(2)
　　２　１号窯跡窯体床面直上出土遺物
図版33　　２号窯跡出土遺物(1)
図版34　　２号窯跡出土遺物(2)

図版35　　3号窯跡窯体内出土遺物
図版36　1　3号窯跡灰原灰層出土遺物
　　2　ＳＤ０１埋土出土遺物
図版37　1　土器溜り1　表土層出土遺物
　　2　土器溜り1　第Ⅰａ層出土遺物(1)
図版38　　土器溜り1　第Ⅰａ層出土遺物(2)
図版39　　土器溜り1　第Ⅰａ層出土遺物(3)
図版40　　土器溜り1　第Ⅰａ層出土遺物(4)
図版41　　土器溜り1　第Ⅰａ層出土遺物(5)
図版42　　土器溜り1　第Ⅰａ層出土遺物(6)
図版43　　土器溜り1　第Ⅰａ層出土遺物(7)
図版44　　土器溜り1　第Ⅰａ層出土遺物(8)
図版45　　土器溜り1　第Ⅰａ層出土遺物(9)
図版46　　土器溜り1　第Ⅰａ層出土遺物(10)
図版47　　土器溜り1　第Ⅰａ層出土遺物(11)
図版48　　土器溜り1　第Ⅰａ層出土遺物(12)
図版49　　土器溜り1　第Ⅰａ層出土遺物(13)
図版50　　土器溜り1　第Ⅰａ層出土遺物(14)
図版51　　土器溜り1　第Ⅰａ層出土遺物(15)
図版52　　土器溜り1　第Ⅰａ層出土遺物(16)
図版53　　土器溜り1　第Ⅰａ層出土遺物(17)
図版54　　土器溜り1　第Ⅰａ層出土遺物(18)
図版55　　土器溜り1　第Ⅰａ層出土遺物(19)
図版56　　土器溜り1　第Ⅰａ層出土遺物(20)
図版57　　土器溜り1　第Ⅰａ層出土遺物(22)
図版58　　土器溜り1　第Ⅰａ層出土遺物(23)
図版59　　土器溜り1　第Ⅰｂ層出土遺物
図版60　　土器溜り1　第Ⅱ層出土遺物
図版61　　土器溜り1　第Ⅲ層出土遺物(1)
図版62　　土器溜り1　第Ⅲ層出土遺物(2)
図版63　　土器溜り1　第Ⅲ層出土遺物(3)
図版64　　土器溜り1　第Ⅲ層出土遺物(4)
図版65　1　土器溜り1　第Ⅲ層出土遺物(5)
　　2　土器溜り1　第Ⅰ～Ⅲ層出土遺物
図版66　　土器溜り2出土遺物(1)
図版67　　土器溜り2出土遺物(2)
図版68　　土器溜り2出土遺物(3)
図版69　　土器溜り2出土遺物(4)
図版70　　土器溜り2出土遺物(5)
図版71　　土器溜り2出土遺物(6)
図版72　　土器溜り2出土遺物(7)
図版73　　土器溜り2出土遺物(8)
図版74　　土器溜り2出土遺物(9)
図版75　　土器溜り2出土遺物(10)
図版76　　土器溜り2出土遺物(11)
図版77　　土器溜り2出土遺物(12)
図版78　　土器溜り3出土遺物(1)
図版79　　土器溜り3出土遺物(2)
図版80　　土器溜り3出土遺物(3)
図版81　　土器溜り3出土遺物(4)
図版82　　土器溜り3出土遺物(5)
図版83　　土器溜り3出土遺物(6)
図版84　　土器溜り3出土遺物(7)
図版85　　土器溜り3出土遺物(8)
図版86　　土器溜り3出土遺物(9)
図版87　　土器溜り3出土遺物(10)
図版88　　2号窯跡整地層出土遺物(1)
図版89　1　2号窯跡整地層出土遺物(2)
　　2　包含層出土遺物(1)
図版90　　包含層出土遺物(2)
図版91　　包含層出土遺物(3)
図版92　　包含層出土遺物(4)・トレンチ出土遺物
図版93　　加飾文(1)
図版94　　加飾文(2)
図版95　　加飾文(3)

調査区南西部と周辺地形（南東から）

調査区中央部・北部（南から）

図版 2

1 号窯跡　上面検出状況（南西から）

1 号窯跡　窯体内下位遺物出土状況（南西から）

1 号窯跡　前庭部灰層検出状況（南西から）

1 号窯跡　窯体（南西から）

図版 4

1 号窯跡　窯体（真上から）

1 号窯跡　壁面補修状況（西から）

1 号窯跡　前庭部礫検出状況（南西から）

1 号窯跡　前庭部礫検出状況（西から）

図版 6

1 号窯跡　窯体たち割り状況（西から）

2 号窯跡　上面検出状況（西から）

2 号窯跡　窯壁崩落状況（西から）

2 号窯跡　窯体内遺物出土状況（南東から）

図版 8

2 号窯跡　窯体（南東から）

2 号窯跡　窯体（南西から）